宮城県文化財調査報告書第245集

入の沢遺跡

― 一般国道４号築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅳ ―

平 成 28 年 12 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

国土交通省東北地方整備局

入の沢遺跡

— 一般国道4号築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅳ —

(S=1/1)

入の沢遺跡出土銅鏡

序　　文

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災からはや 6 年が経過しようとしています。復興への取組は着実に進められておりますが、沿岸地域における生活基盤の整備をさらに促進させる必要があると認識しております。

震災以降、復興道路や常磐線復旧、高台移転事業等の復興事業に伴う発掘調査を実施してまいりました。当教育委員会では、平成 24 年度以降、全国から自治法派遣による埋蔵文化財専門職員の応援を得て調査体制を強化するなどして、復興調査に迅速に対応してまいりましたが、ようやく収束が見える段階を迎えつつあります。引き続き、関係機関と連携を図り、復興調査の早期終了と復興事業の円滑な推進に向けて努力していきたいと考えております。

本書は、平成 26 年度に一般国道 4 号バイパス工事に先立って実施しました栗原市入の沢遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、周囲を塀跡と大溝跡で囲んだ古墳時代前期の防御性の高い大規模な集落跡で、区画内の竪穴建物跡からは銅鏡や鉄製品、装身具といった貴重な遺物が出土し、極めて重要な遺跡であることが明らかとなりました。このため、当教育委員会としては、本遺跡の保存を要望し、それに向けて関係機関と協議を進めているところであります。

今回の発掘調査により得られた貴重な成果が、広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、地元住民の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

平成 28 年 12 月

宮城県教育委員会

教育長　髙橋　仁

例　言

1．本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との協議に基づき平成 26 年度に実施した一般国道 4 号築館バイパス建設に伴う入の沢遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．発掘調査および資料整理・報告書の作成に関しては、以下の方々および機関からご指導・ご協力を賜った（敬称略、所属は当時）。

《個人》

相沢清利（多賀城市埋蔵文化財センター）、青山博樹（福島県文化振興財団）、阿部明彦（山形県埋蔵文化財センター）、及川　規・芳賀文絵・古川一明（東北歴史博物館）、大賀克彦（奈良女子大学）、岡村道雄、奥山誠義・井上主税・東影　悠（奈良県立橿原考古学研究所）、加藤一郎（宮内庁書陵部）、菊地芳朗（福島大学）、小池雄利亜、高妻洋成・山崎　健（奈良文化財研究所）、近藤英夫（東海大学）、澤田　敦・山崎忠良（（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団）、澤田純明（新潟医療福祉大学）、関根達人・上條信彦（弘前大学）、高橋　敏（山形県立霞城学園高校）、高橋誠明・大谷　基（大崎市教育委員会）、田中則和（宮城県考古学会）、千葉長彦・安達訓仁・大場亜弥・堀　哲郎（栗原市教育委員会）、辻　秀人（東北学院大学）、手代木美穂（山形大学）、中居和志（京都府教育委員会）、西川修一（神奈川県立旭高校）、禰冝田佳男・水ノ江和同・林　正憲（文化庁）、橋本博文（新潟大学）、福永伸哉（大阪大学）、福山宗志（涌谷町教育委員会）、藤沢　敦（東北大学）、松木武彦（国立歴史民俗博物館）、松崎元樹（東京都スポーツ文化事業団）、水澤幸一（胎内市教育委員会）、南　武志（近畿大学）、森下章司・林　弘幸（大手前大学）、八木光則、山田晃弘・三好秀樹・廣谷和也（宮城県多賀城跡調査研究所）、米田克彦（岡山県古代吉備文化財センター）、和田晴吾（兵庫県立歴史博物館）

《機関》

栗原市教育委員会、加美町教育委員会、涌谷町教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史博物館、文化庁、東北学院大学、東北芸術工科大学、日本考古学協会、宮城県考古学会

4．調査が実施された平成 26 年度は東日本大震災による復興調査が多く、宮城県内陸部の調査に関しては震災の影響が少なかった同じく内陸部に位置する加美町、涌谷町教育委員会から調査に関わる職員の支援をいただき、県職員が沿岸部の復興調査に専念できるようご協力いただいた。宮城県多賀城跡調査研究所からも職員の支援をいただき、調査と整理にわたって長期のご協力をいただいた。

5．本書の第 3 図は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「金成」「築館」を複製して作成したものである。

6．遺跡の測量基準点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第 X 系による。なお、座標値は 2008 年の栗原内陸地震以前に計測したものであり、これと 2011 年の東日本大震災により座

標値が変更したため、それらの影響を考慮し再計算したものを使用している。

7．本書で使用した遺構記号は、以下の通りである。

SI：竪穴建物跡、SA：材木塀跡、SB：掘立柱建物跡、SD：大溝跡、SK：土坑、SX：盛土遺構、整地層、その他

竪穴建物跡の床面検出遺構については、P：柱穴・ピット、Y：炉・焼面、D：溝跡、K：土坑、を使用した。

なお、宮城県教育委員会では、これまでSIを「竪穴住居跡」と表現してきたが、入の沢遺跡では一概に住居跡と性格付けを行うことが困難であった。そのため、本書においてはSIを『発掘調査の手引き』（奈良文化財研究所編 2010a）に倣い「竪穴建物跡」として表現する。床面検出遺構である「ベッド状遺構」についても『発掘調査の手引き』（前掲）に倣い「ベッド状施設」の用語を使用した。

8．遺構番号は1から通し番号で登録した。ただし、塚については別個に1から番号をつけて登録している。

9．遺構平面図･断面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。

遺構配置図：1/1000　調査区平面図：1/500　大溝跡・材木塀跡平面図：1/300

断面図：1/60　竪穴建物跡　平面図・断面図：1/60　　塚　平面図・断面図：1/100

10. 遺構の土色・土性については、『新版標準土色帳』（小山・竹原 1994）に基づいて記述を行った。

11. 本文中で使用した「灰白色火山灰」は、10世紀前葉頃に降下したものと考えられている。（白鳥 1980、井上・山田 1990）。

12. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。

土器：1/3、1/6　銅鏡：1/1　金属製品：2/3、1/2　玉類・垂飾品：2/3

土製品：2/ 3、1/3　石器・石製品：1/3

13. 土器の説明では、製作においてロクロを使用しているものを「ロクロ調整」、ロクロを使用していないものを「非ロクロ調整」と表記する。

14. 土器実測図のうち、土師器内面にスクリーントーンを張り付けてあるものは、内面が黒色処理されていることを示す。

15. 銅鏡については森下章司氏（大手前大学）、玉類、垂飾品については大賀克彦氏（奈良女子大学）、繊維については奥山誠義氏（奈良県立橿原考古学研究所）、水銀朱については南　武志氏（近畿大学）、動物遺存体については澤田純明氏（新潟医療福祉大学）に分析を依頼して玉稿をいただき、その成果は附章として本書に収録している。

16. 鉄製品については菊地芳朗氏（福島大学）、福永伸哉氏（大阪大学）、松木武彦氏（国立歴史民俗博物館）、弥生土器については相沢清利氏（多賀城市埋蔵文化財センター）にご教示いただいた。

17. 金属製品のクリーニング、保存処理については及川　規氏・芳賀文絵氏（東北歴史博物館）に実施していただき、その経過と方法を附章7として本書に収録した。

18. 炭化材、炭化米の放射性炭素年代測定については、株式会社　加速器分析研究所に委託して行い、

その成果は附章６として本書に収録した。遺物の写真撮影は、株式会社　仙台ぱどに委託して行った。また、小池雄利亜氏（株式会社　シン技術コンサル）による銅鏡の３次元測量については、附章８として本書に収録している。

19. 遺跡の航空写真は、矢口裕之氏（当時宮城県教育員会、現 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）、宮城県多賀城跡調査研究所の撮影によるものである。

20. 本書の整理については、村上裕次・長内祐輔・熊谷宏規・佐藤則之・西村　力・黒田智章・山口貴久（宮城県教育庁文化財保護課）、高橋　透（宮城県多賀城跡調査研究所）が行い、柴田とみ子・只木一美・千田敦子・與名本京子・鈴木美由紀・真壁智美・湯元文子・亀山昭子・長沼雅子・佐藤せい子が補助した。遺構の整理については、村上・高橋・長内・熊谷・佐藤、遺物の整理については、銅鏡・鉄製品・土器を高橋・村上・黒田、玉類・垂飾品を長内・高橋・山口、石器・石製品を長内、動物遺存体を西村が行った。

21. 本書の執筆については、第Ⅰ章を高橋栄一・村上、第Ⅳ章１（１）１）～４）を高橋（透）・村上、第Ⅳ章２（１）１）を高橋（透）、第Ⅳ章１（１）９）を西村・村上、それ以外を村上が担当した。本書の編集については、調査を担当した各調査員の協議を経て村上・高橋（透）が行った。

22. 発掘調査成果の一部については、現地説明会、平成 26 年度宮城県遺跡調査成果発表会（宮城県教育委員会 2014）、東北学院大学アジア流域文化研究所公開シンポジウム『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』（東北学院大学アジア流域文化研究所 2015）、『季刊考古学』第 133 号（村上 2015b）でその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書の内容がこれらに優先する。

23. 発掘調査に伴う出土遺物、写真、図面等の調査記録資料については、宮城県教育委員会が保管している。

目　次

巻頭写真
序　文
例　言
目　次

第Ⅰ章　経緯と経過 …… 1
1．調査の経緯 …… 1
2．調査の経過 …… 2
3．保存協議の経過 …… 3
4．整理作業・報告書作成の経過 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 5
1．遺跡の位置と地理的環境 …… 5
2．周辺の遺跡 …… 6

第Ⅲ章　調査成果 …… 8
1．方法 …… 8
（1）調査の方法 …… 8
（2）整理の方法 …… 10
（3）報告書の記載について …… 10
2．基本層序 …… 10
3．発見された遺構と遺物 …… 10
（1）古墳時代 …… 13
1）区画施設 …… 13
2）竪穴建物跡 …… 25
3）その他 …… 102
4）その他の出土遺物 …… 104
（2）古代 …… 107
（3）中近世 …… 124
1）塚 …… 124
2）その他の出土遺物 …… 127

第Ⅳ章　総括 ……128
1．古墳時代 ……128
（1）遺物 ……128
1）土器 ……128
2）銅鏡 ……141
3）鉄製品 ……143
4）玉類・垂飾品 ……148
5）土製品 ……149
6）石製品・石器 ……150
7）繊維 ……153
8）赤色顔料 ……153
9）動物遺存体 ……154
10）植物遺存体 ……154
（2）遺構 ……160
1）遺構の時期 ……160
2）各遺構の検討 ……160
3）遺構の配置 ……180
（3）遺跡の位置付け ……180
1）遺跡の性格 ……180
2）周辺の遺跡との関係 ……186
3）入の沢遺跡の位置づけ ……188
2．古代以降 ……189
（1）古代 ……189
1）遺物 ……189
2）遺構 ……191
（2）中近世 ……192
3．今後の課題 ……192
4．まとめ ……193

註 ……195
引用・参考文献 ……196

附　章 ……209
附章１　入の沢遺跡出土鏡の意義 ……大手前大学　森下章司　211
附章２　入の沢遺跡出土の玉類 ……奈良女子大学　大賀克彦　217

附章３　宮城県栗原市入の沢遺跡出土資料に伴う繊維製品の調査
……奈良県立橿原考古学研究所　奥山誠義　227
附章４　入の沢遺跡出土朱の産地推定　……近畿大学　南　武志　237
附章５　入の沢遺跡出土焼骨の肉眼形態学的および骨組織形態学的分析結果
……新潟医療福祉大学　澤田純明　241
附章６　入の沢遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）　……（株）加速器分析研究所　247
附章７　入の沢遺跡出土銅鏡等の保存処理と材質調査
……東北歴史博物館　及川　規・芳賀文絵　253
附章８　入の沢遺跡の銅鏡、繊維の３次元計測　……（株）シン技術コンサル　小池雄利亜　265

写真図版　……271
報告書抄録

挿　図　目　次

第 1 図　一般国道 4 号築館バイパス建設に伴う発掘調査… 1
第 2 図　入の沢遺跡の位置 …… 5
第 3 図　入の沢遺跡の位置と周辺の遺跡…… 7
第 4 図　調査区の位置…… 8
第 5 図　遺構配置図…… 11
第 6 図　A 区　遺構配置図…… 12
第 7 図　B 区　遺構配置図…… 13
第 8 図　SD1 大溝跡、SA71 材木塀跡、SX72 盛土遺構 … 15
第 9 図　SD1 大溝跡、SX72 盛土遺構　断面…… 16
第 10 図　SD1 大溝跡　出土遺物…… 17
第 11 図　SD3 大溝跡、SA4 材木塀跡、SX41 盛土遺構 …. 18
第 12 図　SD3 大溝跡、SX41 盛土遺構　断面…… 19
第 13 図　SD3 大溝跡　断面 …… 20
第 14 図　SD3 大溝跡　出土遺物（1）…… 21
第 15 図　SD3 大溝跡　出土遺物（2）…… 22
第 16 図　SD3 大溝跡　出土遺物（3）…… 23
第 17 図　SD3 大溝跡　出土遺物（4）…… 24
第 18 図　SA71・4 材木塀跡　断面 …… 24
第 19 図　SI56 竪穴建物跡 …… 26
第 20 図　SI56 竪穴建物跡　出土遺物 …… 27
第 21 図　SI63 竪穴建物跡 …… 28
第 22 図　SI63 竪穴建物跡　出土遺物 …… 29
第 23 図　SI8 竪穴建物跡 …… 30
第 24 図　SI8 竪穴建物跡　炭化材の分布と属性…… 31
第 25 図　SI8 竪穴建物跡　出土遺物（1） …… 32
第 26 図　SI8 竪穴建物跡　出土遺物（2） …… 33
第 27 図　SI9 竪穴建物跡 …… 35
第 28 図　SI9 竪穴建物跡　出土遺物…… 36
第 29 図　SI10 竪穴建物跡 …… 38
第 30 図　SI10 竪穴建物跡　地山ブロック主体層、炭化物・焼土を多く含む層の分布…… 39
第 31 図　SI10 竪穴建物跡　炭化材の分布と属性…. 40
第 32 図　SI10 竪穴建物跡　遺物出土状況…….41・42
第 33 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（1）…… 43
第 34 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（2）…… 44
第 35 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（3）…… 45
第 36 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（4）…… 46
第 37 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（5）…… 47
第 38 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（6）…… 48
第 39 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（7）…… 49
第 40 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（8）…… 50
第 41 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（9）…… 51
第 42 図　SI13 竪穴建物跡（1）…… 54
第 43 図　SI13 竪穴建物跡（2）…… 55
第 44 図　SI13 竪穴建物跡（3）…… 56
第 45 図　SI13 竪穴建物跡　地山ブロック主体層、焼土・炭化物を多く含む層の分布…… 56
第 46 図　SI13 竪穴建物跡　炭化材の分布と属性…. 58
第 47 図　SI13 竪穴建物跡　遺物出土状況（1）….59・60
第 48 図　SI13 竪穴建物跡　遺物出土状況（2）…… 61
第 49 図　SI13 竪穴建物跡　グリッド別遺物の出土状況…. 62
第 50 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（1）…… 63
第 51 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（2）…… 64
第 52 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（3）…… 65
第 53 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（4）…… 66
第 54 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（5）…… 67
第 55 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（6）…… 68
第 56 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（7）…… 69
第 57 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（8）…… 70
第 58 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（9）…… 71
第 59 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（10） …… 72
第 60 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（11） …… 73

第 61 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（12）…… 74
第 62 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（13）…… 75
第 63 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（14）…… 76
第 64 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（15）…… 77
第 65 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物（16）…… 78
第 66 図　SI15 竪穴建物跡 …… 81
第 67 図　SI15 竪穴建物跡　出土遺物 …… 82
第 68 図　SI17 竪穴建物跡（1）…… 84
第 69 図　SI17 竪穴建物跡（2）…… 85
第 70 図　SI17 竪穴建物跡　地山ブロック主体層、焼土を多く含む層の分布 …… 85
第 71 図　SI17 竪穴建物跡　炭化材・遺物出土状況 … 86
第 72 図　SI17 竪穴建物跡　出土遺物（1）…… 87
第 73 図　SI17 竪穴建物跡　出土遺物（2）…… 88
第 74 図　SI17 竪穴建物跡　出土遺物（3）…… 89
第 75 図　SI17 竪穴建物跡　出土遺物（4）…… 90
第 76 図　SI18 竪穴建物跡 …… 92
第 77 図　SI18 竪穴建物跡　出土遺物 …… 93
第 78 図　SI19 竪穴建物跡 …… 94
第 79 図　SI19 竪穴建物跡　炭化材の分布と属性 … 95
第 80 図　SI19 竪穴建物跡　遺物・焼土を多く含む層の分布 … 96
第 81 図　SI19 竪穴建物跡　出土遺物（1）…… 97
第 82 図　SI19 竪穴建物跡　出土遺物（2）…… 98
第 83 図　SI19 竪穴建物跡　出土遺物（3）…… 99
第 84 図　SI20 竪穴建物跡 ……101
第 85 図　SI20 竪穴建物跡　出土遺物 ……102
第 86 図　SI21 竪穴建物跡 ……103
第 87 図　SI21 竪穴建物跡　出土遺物 ……104
第 88 図　その他の出土遺物（1）……105
第 89 図　その他の出土遺物（2）……106
第 90 図　SI5 竪穴建物跡 ……108
第 91 図　SI5 竪穴建物跡　出土遺物 ……109
第 92 図　SI7A 竪穴建物跡……110
第 93 図　SI7 竪穴建物跡　断面（1）……111
第 94 図　SI7 竪穴建物跡　断面（2）……112
第 95 図　SI7B 竪穴建物跡……113
第 96 図　SI7 竪穴建物跡　出土遺物（1）……114
第 97 図　SI7 竪穴建物跡　出土遺物（2）……115
第 98 図　SI33 竪穴建物跡……117
第 99 図　SI33 竪穴建物跡　炭化材・遺物の出土状況 …118
第 100 図　SI33 竪穴建物跡　出土遺物 ……119
第 101 図　SI34 竪穴建物跡……121
第 102 図　SI34 竪穴建物跡　出土遺物 ……122
第 103 図　SI36 竪穴建物跡……123
第 104 図　SI36 竪穴建物跡　出土遺物 ……124
第 105 図　1 号塚 ……125
第 106 図　2 号塚 ……126
第 107 図　その他の出土遺物 ……127
第 108 図　SI13 竪穴建物跡出土土器 ……131
第 109 図　SI10 竪穴建物跡出土土器 ……134
第 110 図　SI17・19 竪穴建物跡出土土器 ……136
第 111 図　入の沢遺跡出土銅鏡 ……142
第 112 図　入の沢遺跡出土鉄製品 ……144
第 113 図　入の沢遺跡出土石製品・石器 ……151
第 114 図　東北地方の古墳時代前期の遺跡……155
第 115 図　竪穴建物跡の集成 ……163
第 116 図　SI13・10・17・19 竪穴建物跡の炭化材と遺物の出土位置……164
第 117 図　竪穴建物跡の床面施設の類例 ……169
第 118 図　古墳時代の入の沢遺跡 ……181
第 119 図　宮城県北部の地勢と古墳時代前期遺跡の分布 …184
第 120 図　入の沢遺跡と伊治城跡の遺構配置 ……187

表　目　次

第 1 表　調査と整理の経過 …… 3
第 2 表　遺構番号一覧 …… 9
第 3 表　ガラス小玉観察表 ……79・80
第 4 表　その他の遺構属性表 ……127
第 5 表　遺物の出土状況 ……129
第 6 表　各遺構における器種構成 ……129
第 7 表　植物遺存体集計一覧 ……154
第 8 表　東北地方の古墳時代前期遺跡の内容… 156 ～ 158
第 9 表　東北地方の古墳時代前期における銅鏡、鉄製品、玉類等が出土した遺跡・遺構……159
第 10 表　竪穴建物跡属性表 ……161
第 11 表　竪穴建物跡の床面施設の類例一覧……170
第 12 表　古墳時代前期の区画溝跡 ……178
第 13 表　古代の竪穴建物跡属性表 ……192

図　版　目　次

図版 1　航空写真と遺跡遠景……273
図版 2　入の沢遺跡と周辺の遺跡……274
図版 3　調査区全景 ……275
図版 4　調査前の状況 ……276
図版 5　SD1・3 大溝跡 ……277
図版 6　SA4 材木塀跡、B 区張り出し部……278
図版 7　SX41 盛土遺構、SI56・63 竪穴建物跡……279
図版 8　SI8・9 竪穴建物跡 ……280
図版 9　SI10 竪穴建物跡（1）……281
図版 10　SI10 竪穴建物跡（2）……282
図版 11　SI13 竪穴建物跡（1）……283
図版 12　SI13 竪穴建物跡（2）……284
図版 13　SI13 竪穴建物跡（3）……285
図版 14　SI13 竪穴建物跡（4）……286
図版 15　SI15・18 竪穴建物跡 ……287
図版 16　SI17 竪穴建物跡（1）……288

図版 17　SI17 竪穴建物跡（2）……289
図版 18　SI19 竪穴建物跡 ……290
図版 19　SI19・20 竪穴建物跡 ……291
図版 20　SI21・27・5 竪穴建物跡 ……292
図版 21　SI7 竪穴建物跡 ……293
図版 22　SI33 竪穴建物跡 ……294
図版 23　SI33・34・36 竪穴建物跡……295
図版 24　1 号塚……296
図版 25　2 号塚……297
図版 26　竪穴建物跡出土土器（1）……298
図版 27　竪穴建物跡出土土器（2）……299
図版 28　SD1 大溝跡出土遺物、SD3 大溝跡出土遺物（1）…300
図版 29　SD3 大溝跡出土遺物（2）……301
図版 30　SD3 大溝跡出土遺物（3）……302
図版 31　SD3 大溝跡出土遺物（4）……303
図版 32　SI56・63 竪穴建物跡出土遺物 ……304
図版 33　SI8 竪穴建物跡出土遺物（1）……305
図版 34　SI8 竪穴建物跡出土遺物（2）、SI9 竪穴建物跡出土遺物 …306
図版 35　SI10 竪穴建物跡出土遺物（1）……307
図版 36　SI10 竪穴建物跡出土遺物（2）……308
図版 37　SI10 竪穴建物跡出土遺物（3）……309
図版 38　SI10 竪穴建物跡出土遺物（4）……310
図版 39　SI10 竪穴建物跡出土遺物（5）……311
図版 40　SI10 竪穴建物跡出土遺物（6）……312
図版 41　SI10 竪穴建物跡出土遺物（7）……313
図版 42　SI10 竪穴建物跡出土遺物（8）……314
図版 43　SI13 竪穴建物跡出土遺物（1）……315
図版 44　SI13 竪穴建物跡出土遺物（2）……316
図版 45　SI13 竪穴建物跡出土遺物（3）……317
図版 46　SI13 竪穴建物跡出土遺物（4）……318
図版 47　SI13 竪穴建物跡出土遺物（5）……319
図版 48　SI13 竪穴建物跡出土遺物（6）……320
図版 49　SI13 竪穴建物跡出土遺物（7）……321
図版 50　SI13 竪穴建物跡出土遺物（8）……322
図版 51　SI13 竪穴建物跡出土遺物（9）……323
図版 52　SI13 竪穴建物跡出土遺物（10）……324
図版 53　SI13 竪穴建物跡出土遺物（11）……325
図版 54　SI13 竪穴建物跡出土遺物（12）……326
図版 55　SI13 竪穴建物跡出土遺物（13）……327
図版 56　SI13 竪穴建物跡出土遺物（14）……328
図版 57　SI13 竪穴建物跡出土遺物（15）……329
図版 58　SI15 竪穴建物跡出土遺物……330
図版 59　SI17 竪穴建物跡出土遺物（1）……331
図版 60　SI17 竪穴建物跡出土遺物（2）……332
図版 61　SI17 竪穴建物跡出土遺物（3）……333
図版 62　SI17 竪穴建物跡出土遺物（4）……334
図版 63　SI17 竪穴建物跡出土遺物（5）……335
図版 64　SI18 竪穴建物跡出土遺物、SI19 竪穴建物跡出土遺物（1）…336
図版 65　SI19 竪穴建物跡出土遺物（2）……337
図版 66　SI19 竪穴建物跡出土遺物（3）……338
図版 67　SI19 竪穴建物跡出土遺物（4）……339
図版 68　SI20・21 竪穴建物跡出土遺物 ……340
図版 69　その他の出土遺物（1）……341
図版 70　その他の出土遺物（2）……342
図版 71　SI5 竪穴建物跡出土遺物、SI7 竪穴建物跡出土遺物（1）…343
図版 72　SI7 竪穴建物跡出土遺物（2）……344
図版 73　SI7 竪穴建物跡出土遺物（3）、SI33 竪穴建物跡出土遺物（1）…345
図版 74　SI33 竪穴建物跡出土遺物（2）……346
図版 75　SI34・36 竪穴建物跡出土遺物、その他の出土遺物 ….347

調　査　要　項

遺 跡 名：入の沢遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号 41071）

遺跡記号：YC

所 在 地：宮城県栗原市築館字城生野入の沢・峯岸

調査原因：一般国道 4 号築館バイパス建設工事

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査協力：国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所、栗原市教育委員会、加美町教育委員会、涌谷町教育委員会、東北歴史博物館、宮城県多賀城跡調査研究所、文化庁、奈良県立橿原考古学研究所、近畿大学、東北芸術工科大学

調査面積：6,800㎡

調査期間：平成 26（2014）年 4 月 21 日～ 12 月 18 日

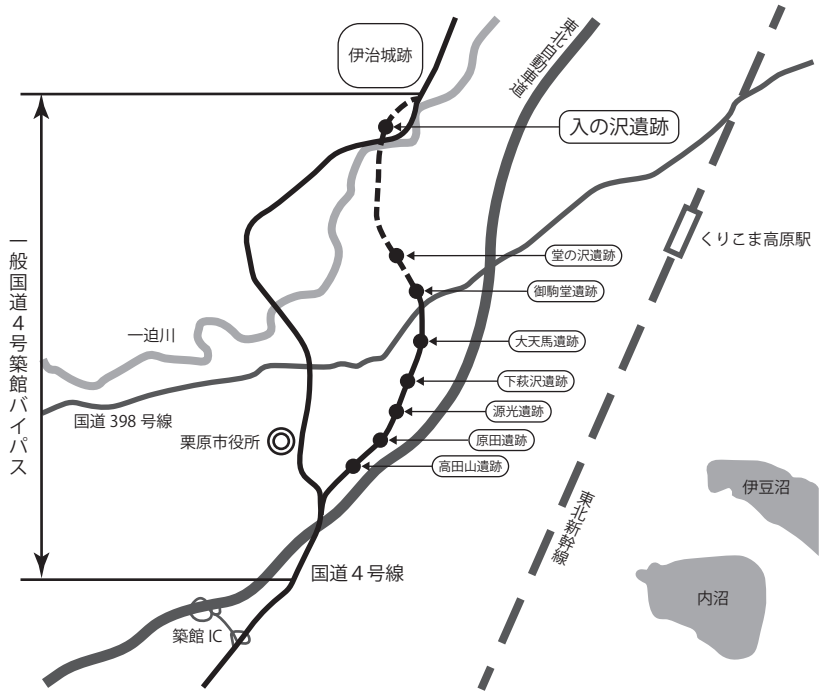
調 査 員：佐藤則之、村上裕次、小山　朗、熊谷宏規、長内祐輔（宮城県教育委員会）
高橋　透（宮城県多賀城跡調査研究所）、吉田　桂（加美町教育委員会）
二瓶雅司（涌谷町教育委員会）

第Ⅰ章　経緯と経過

1．調査の経緯

旧築館町内を縦断する国道 4 号線の交通混雑の緩和と市街地周辺部の活性化等を図るため、旧築館町赤坂から、市街地を東側に迂回し旧築館町城生野に至る総延長約 7km、路線幅 50m、両側 4 車線の一般国道 4 号築館バイパスの建設計画が立案され、昭和 56 年に都市計画決定された。

宮城県教育委員会は、平成 14 年 6 月に国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所に対し、計画地内に周知の 4 遺跡（高田山遺跡・原田遺跡・御駒堂遺跡・伊治城跡）が存在し、さらに未発見の遺跡が存在する可能性があることから、遺跡の取り扱いの協議を申し入れ、同年 9 月、遺跡分布調査並びに試掘調査を実施した。この結果、下萩沢遺跡、源光遺跡、大天馬遺跡、堂の沢遺跡が遺跡台帳に新規登録されることとなった。その後、国土交通省東北地方整備局と保存協議を行い、伊治城跡については計画地を遺跡から外すよう要望し、その他の遺跡については、計画変更により保存可能となった源光遺跡の塚以外は路線の変更が困難であることから、建設工事前に記録保存のための本発掘調査を実施することとした（第 1 図）。



調査年度	遺跡名	調査	調査面積（㎡）	調査期間	報告書
2002（平成 14） 2003（平成 15）	高田山遺跡	確認	220	3.10 ～ 3.18　4.14 ～ 4.22	宮城県教育委員会 2009
	原田遺跡	確認	4,960		
	源光遺跡	確認	640		
	下萩沢遺跡	確認	2,800		
2004（平成 16）	原田遺跡	事前	9,600	4.12 ～ 12.9	
	下萩沢遺跡	事前	8,500		
2007（平成 19）	下萩沢遺跡	事前	4,396	6.4 ～ 7.3	
2009（平成 21）	大天馬遺跡	事前	1,600	5.25 ～ 6.3	宮城県教育委員会 2012
	御駒堂遺跡	確認	300	5.25 ～ 6.3	宮城県教育委員会 2016b
2010（平成 22）	御駒堂遺跡	確認	900	10.20 ～ 10.26	
2011（平成 23）	大天馬遺跡	事前	3,300	7.19 ～ 10.11	宮城県教育委員会 2012
2012（平成 24）	御駒堂遺跡	確認・事前	470	9.4 ～ 9.18	宮城県教育委員会 2016b
2013（平成 25）	御駒堂遺跡	確認・事前	2,350	11.11 ～ 11.28　1.21 ～ 1.30	
	堂の沢遺跡	確認	623	11.5 ～ 11.14	
2014（平成 26）	御駒堂遺跡	事前	3533	7.7 ～ 10.3	
	入の沢遺跡	事前	6,800	4.21 ～ 12.18	本書
2015（平成 27）	御駒堂遺跡	事前	460	4.20 ～ 6.2	宮城県教育委員会 2016b

第 1 図　一般国道 4 号築館バイパス建設に伴う発掘調査

計画地内での確認・本発掘調査は、平成 15・16・19 年度に高田山遺跡、源光遺跡、原田遺跡、下萩沢遺跡、平成 21 ～ 27 年度に大天馬遺跡、御駒堂遺跡、堂の沢遺跡で順次実施した。調査終了後、旧築館町赤坂から下萩沢遺跡に至る 1.8km の区間は平成 19 年度、下萩沢遺跡から大天馬遺跡を越えて御駒堂遺跡手前までの 1.3km の区間は平成 25 年度、堂の沢遺跡までの 0.7㎞の区間は平成 27 年度に暫定的にバイパスの供用が開始されている。

堂の沢遺跡から伊治城跡に至る区間については、終点部が当初の計画では伊治城跡内であったが、伊治城跡の南外側とする計画に変更され、新たな計画地内に未発見の遺跡が存在する可能性があることから、平成 22 年度に分布調査を実施した。その結果、中近世の塚が確認され、「入の沢塚群」として遺跡台帳に新規登録された。その後、国土交通省東北地方整備局と協議を行い、建設工事前に記録保存のための本発掘調査を実施することとした。なお、調査にあたっては加美町教育委員会、涌谷町教育委員会から職員派遣（調査担当）などの協力を得た。

２．調査の経過

調査は平成 26 年 4 月 21 日より開始した（第 1 表）。平成 26 年度に調査対象としたのは、遺跡の南半部分（第 4 図 A・B 区）で、調査面積は約 6,800㎡である。当初は、「入の沢塚群」として、遺跡に存在する塚を対象とした調査を想定していたが、南半部の伐採後に現地を確認したところ、古墳時代前期の土師器が多数表面で採集できたことから、この時期の遺構が存在する可能性が考えられた。そこで、最初に遺構の有無と分布範囲を把握するために、路線計画範囲内において塚以外の丘陵平坦面、緩斜面、斜面、沢部分を対象に計 39 本のトレンチを設定した。その結果、路線範囲内のほぼ全面に、竪穴建物跡、その周囲に大溝跡が検出され、かつ遺構密度が非常に高いことが判明し、これらの発見された遺構を含めた調査に方針を変更した。

遺構が検出された路線範囲内を対象に表土除去を行った。なお、調査対象範囲内に排土を保管できる場所がなかったことから、調査対象地の中央の沢頭部分に仮の排土置き場を設定し、段階的に表土除去を行うこととした。塚については、表土除去と併行して精査を行った。

5 月 30 日から東側の B 区（第 4 図）、6 月 17 日から西側の A 区（第 4 図）の遺構検出を行った。その結果、A・B 区で多数の竪穴建物跡と丘陵縁辺に大溝跡や材木塀跡などが検出された。平面的な遺構検出が一通り終了した 6 月 30 日から、竪穴建物跡の精査を開始した。最初に、遺構の時期を確認するため、A 区と B 区で 2 棟ずつ竪穴建物跡を精査した。その結果、これらの竪穴建物跡が古墳時代前期のものであることが判明し、平面形と堆積土の共通性から他の竪穴建物跡についても、そのほとんどが古墳時代前期のものであることが推定された。また、並行して A 区で大溝跡の一部を掘り下げたところ、幅 4.0 m、深さ 1.4 mほどの規模をもち、堆積土や出土土器から古墳時代前期に属することがわかった。これらのことから、当遺跡は、周辺を大溝で囲んだ大規模集落跡である可能性が高いことが明らかになった。

調査では B 区の北側から遺構精査を行うこととした。竪穴建物跡を優先して精査を進めていた 9 月 18 日には、SI19 より銅鏡が 1 面出土した。9 月 29 日には SI13 より管玉と炭化米が出土した。

第 1 表　調査と整理の経過

	平成 26 年度																				
	平成 26 年									平成 27 年		平成 28 年									
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 ～ 3 月	4 ～ 12 月	1 ～ 3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
調査																					
重機	表土除去						表土除去														
塚	塚の精査																				
B 区		B 区遺構検出																			
				SI 精査											SI13 精査						
A 区			A 区遺構検出																		
				SI 精査																	
区画施設		SD1 断ち割り					SD3 精査														
整理																					

10 月より、A 区と B 区の間と、A・B 区の斜面部分、B 区北西部の大溝跡部分について表土除去を再開した。10 月 1 日より、B 区北西部の大溝跡（SD3）の検出、精査を開始し、この部分に張り出し部が造られていることが判明した。また、大溝跡の外側には盛土が確認された。

焼失竪穴建物跡とみられる SI13 からは、10 月 3 日に赤色顔料、11 月 13 日には珠文鏡 1 面が出土した。これらの他に、管玉、勾玉、ガラス小玉、垂飾品も多数出土した。さらに、11 月 13 日には SI27 の遺構検出時に珠文鏡が 1 面出土した。こうした遺物の出土は一般的な集落跡では類を見ないものであり、遺跡の重要性がさらに高まることとなった。また、精査を行った古墳時代前期の竪穴建物跡 12 棟のうち 5 棟は焼失した建物跡であったことから、竪穴建物跡はかなりの割合で焼失している可能性が高いことが推定された。

これらの調査中には、県内外の研究者等の現地視察があり、当遺跡の価値や重要性について数々の評価をいただいた。調査が進行し、遺跡の内容が明らかになってきた 11 月には遺跡名を「入の沢塚群」から「入の沢遺跡」に変更することとした。12 月 6 日には午前、午後の 2 回にわたって一般向けの現地説明会を実施し、計 227 人の参加を得た。現地説明会後、SI13 の精査を再開し、12 月 10 日には SI13 から櫛歯文鏡が出土し、当遺跡出土の銅鏡は計 4 面となった。

この後冬季に向けて調査を中断するため遺構の養生を行った。器材の洗浄、撤収を行い、12 月 18 日に平成 26 年度調査を一旦終了した。なお、SI13 については平成 28 年度に一部補足調査を行った。

3．保存協議の経過

発掘調査の結果、本遺跡は古墳時代前期の塀跡・大溝跡で区画された大規模集落で、焼失した竪穴建物跡から銅鏡・鉄製品・装身具など貴重な遺物が多数出土し、きわめて重要な遺跡であることが明らかとなった。このため、平成 27 年 1 月に宮城県教育委員会及び栗原市教育委員会は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所に対して当遺跡の現状保存を要望し、協議を進めることとなった。

こうした中、平成 27 年 6 月 18 日に宮城県考古学会から入の沢遺跡の保存に関する要望書が、また、6 月 8 日の現地視察を踏まえて 7 月 1 日には日本考古学協会から入の沢遺跡の保存に関する要望書

が宮城県・栗原市・文化庁に提出され、以下の２点について要望がなされた。

> １．入の沢遺跡で検出された遺構群を現状保存するための措置を早急に講じること。
> ２．本遺跡の国史跡指定を視野に入れて、周辺の遺跡群と一体的な保存と活用を図るための包括的な検討を行うこと

これに対して、宮城県教育委員会では以下のような回答（平成 27 年 7 月 15 日付け 文第 1064 号）を行った。

> １．古墳時代前期の集落跡が発見された入の沢遺跡につきましては、本県の歴史を考える上で極めて重要な遺跡であるとともに、全国的にも貴重な遺跡であることは十分認識しております。遺跡の取扱いにつきましては、遺跡の重要性を鑑み、国土交通省、栗原市、栗原市教育委員会等の関係機関と協議を行ってまいります。
> ２．入の沢遺跡とその周辺の大仏古墳群・伊治城跡を含めた遺跡群は、地域の歴史を理解する上で貴重な文化財であると認識しており、関係機関と協議の上、適切に対応してまいります。

学会等からこのような遺跡保存の要望書が出される一方、9 月 21・22 日には東北学院大学アジア流域文化研究所主催による公開シンポジウム『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』が開催され、のべ 500 人以上の参加者があり、地元でも当遺跡に対する関心が非常に高まっていることがわかった。

そして、関係機関と協議を進めていた 11 月 2 日には、栗原市長が定例記者会見において、入の沢遺跡の保存に関して市の意向を表明されることとなった。また、平成 28 年 5 月 10 日には文化庁主任調査官、文化審議会文化財分科会専門委員に現地視察いただき、学術的に貴重な遺跡であるとの評価を得た。こうした経過を経て、現在、本遺跡の保存に向けて関係機関と協議を進めているところである。

４．整理作業・報告書作成の経過

遺跡の取扱いについては現在も協議中であり、発掘調査もまだ一部にとどまっているが、当遺跡の重要性をふまえ、平成 26 年度調査分の報告書を先行してとりまとめることとした。

整理作業・報告書作成は、平成 26 ～ 28 年度にかけて実施した。調査終了後の平成 26 年 12 月 22 日より開始し、平成 26 ～ 27 年度には、平面図と断面図の照合、平面図作成、断面図のトレースと土層注記入力、個別の遺構の事実記載を作成した。遺物については、洗浄、ネーミング、接合作業、復元作業、実測を行った。平成 28 年度には、遺構の挿図作成、版組、遺物の実測、トレース、版組を行い、あわせて、個別の遺構以外の事実記載、総括を作成し、最後に全体の編集を行った。

なお、銅鏡、玉類、繊維、赤色顔料、骨などについては、それぞれ専門家に分析を依頼し、報告をまとめていただいた。

第Ⅱ章　遺跡の概要

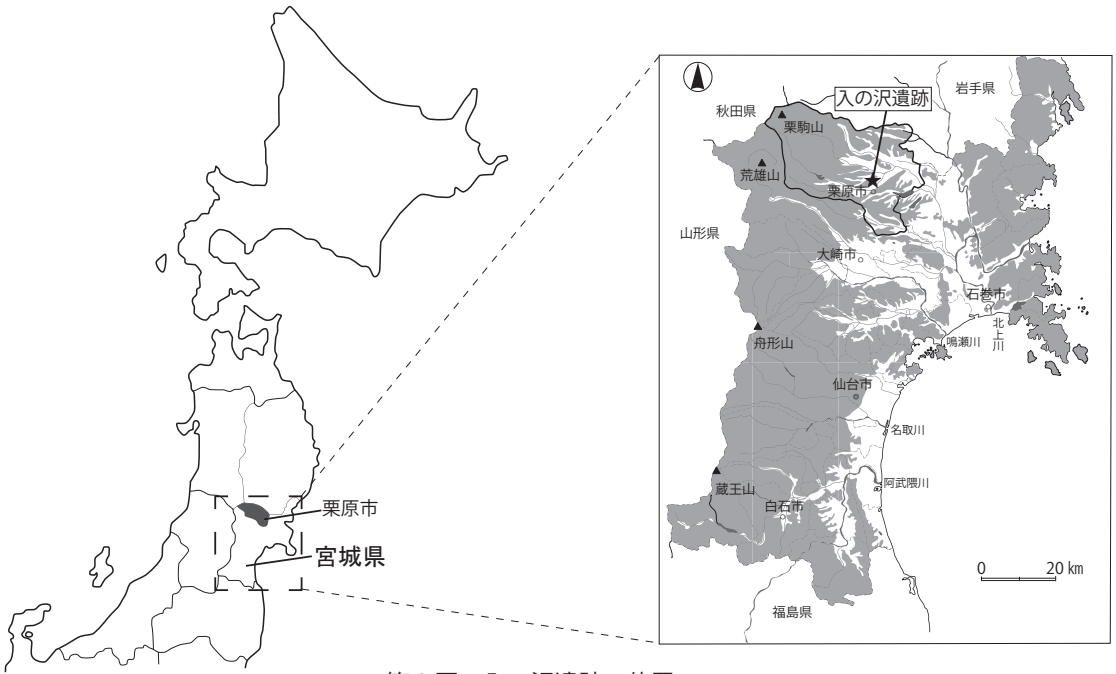
1．遺跡の位置と地理的環境

入の沢遺跡は、宮城県栗原市築館字城生野入の沢・峯岸に所在する（第 2 図）。栗原市は、平成 17 年に旧築館町ほか 9 町村が合併して誕生した新しい市で、宮城県北西部に位置し、岩手県と秋田県に接する。市の中心は、南東部の奥州街道沿いに位置する旧築館町で、遺跡は旧築館町の市街地から北東に 3.4km の地点にある。

遺跡が所在する宮城県北部の地形については、東側の海岸部に北上山地、西側に奥羽山脈が南北に走り、中央部に北上川が南流する（第 2 図）。栗原市の地形は、西部に奥羽山脈、東部に奥羽山脈から派生する陸前丘陵の一部である築館丘陵、迫川水系の河川（一迫川、二迫川、三迫川）とそれらによって形成された沖積地（迫川低地）、伊豆沼、内沼といった湖沼で構成される。江合川と迫川に挟まれた位置にある築館丘陵は、西から東へ緩やかに標高を下げながら迫川低地へと連なり、その先端部は奥羽山脈の東麓に源を発する河川や沢によって複雑に開析され、樹枝状となる。

入の沢遺跡は、築館丘陵上に位置し、一迫川と二迫川によって挟まれた丘陵のうち、最も南側の丘陵先端部に立地する。この丘陵は、南北方向と東西方向に延びる弧状で、細部では北西、北、南、西方向からの沢により南北、東西、北西－南東に複数の尾根方向が認められる複雑な形状となる。遺跡は 4 つの尾根頂部とそれらの間にある丘陵鞍部、丘陵斜面、沢で構成される。尾根頂部の標高は、南側が最も高く 49m、次に北側と南から 2 番目が 48m、そして北から 2 番目が 45m である。

遺跡の範囲は、南北 430m、東西 450m で、標高は 24 ～ 49m である。直下の国道 4 号との高低差は 23 ～ 26m である。遺跡の現況は、杉や雑木からなる山林であった。入の沢遺跡は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中近世の複合遺跡である。



第 2 図　入の沢遺跡の位置

2．周辺の遺跡

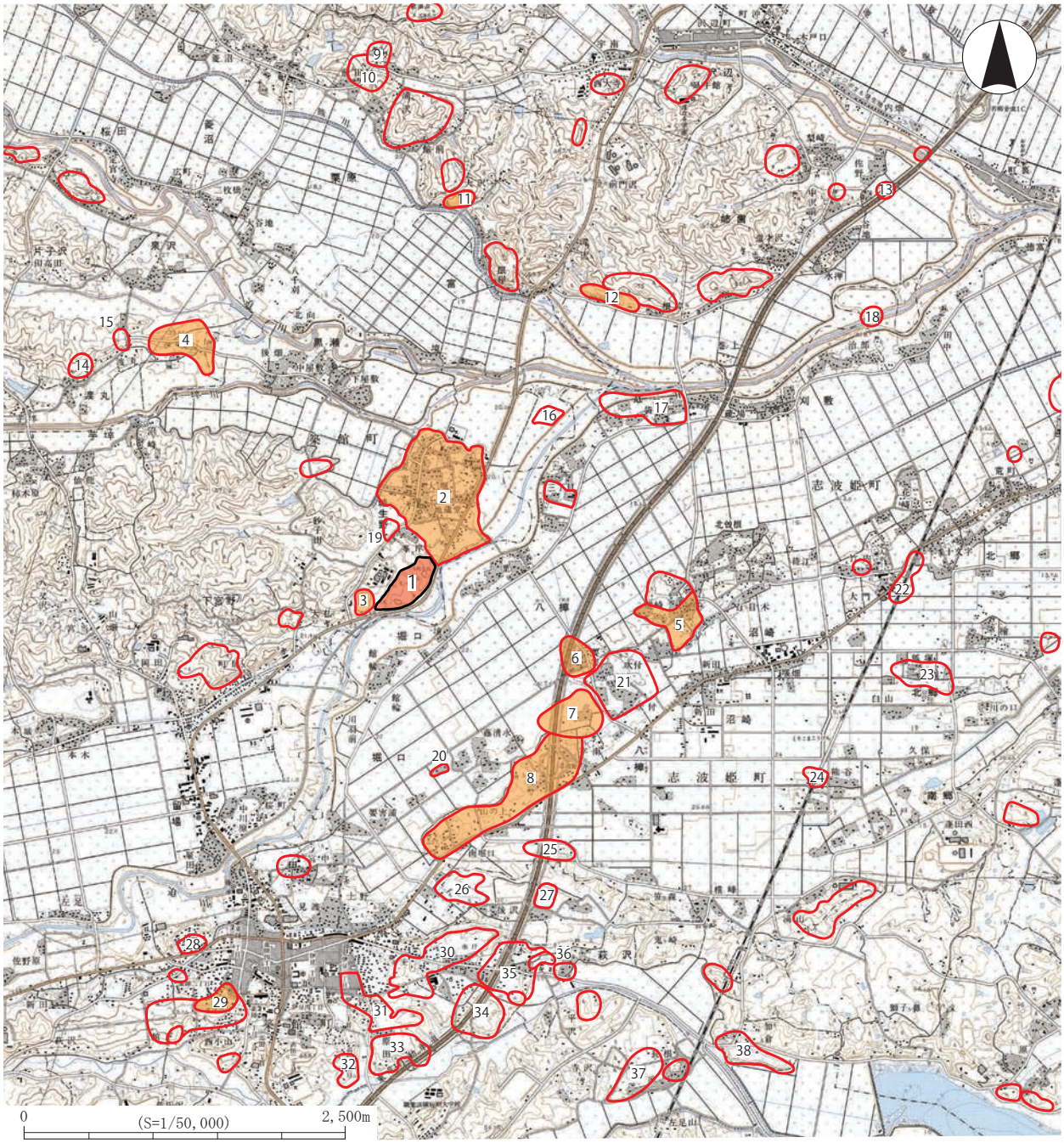
入の沢遺跡の周辺には、旧石器時代から近世の遺跡が多く所在する（第３図）。ここでは、入の沢遺跡に関連する縄文時代、古墳時代、古代、中近世の遺跡について概観する。

縄文時代の遺跡としては、宇南遺跡（第３図 7）（宮城県教育委員会 1979・1980e）、原田遺跡（33）（宮城県教育委員会 1980b・2009）、木戸遺跡（34）（宮城県教育委員会 1980e）、佐内屋敷遺跡（35）（宮城県教育委員会 1983a）、鰻沢遺跡（36）（築館町教育委員会 2005a）、嘉倉貝塚（38）（築館町教育委員会 2002・2003、宮城県教育委員会 2003b）などがある。このうち嘉倉貝塚では、前期後葉から晩期後葉にかけての遺構・遺物が検出され、特に前期後葉から中期初頭では掘立柱建物跡を環状に配置した集落が確認されている。佐内屋敷遺跡、木戸遺跡、原田遺跡では中期中葉の竪穴建物跡、鰻沢遺跡では中期末の複式炉を伴う竪穴建物跡、宇南遺跡では晩期の遺構・遺物が検出されている。

古墳時代の遺跡としては、伊治城跡（2）（築館町教育委員会 1990 ～ 1995・1998・2005b、栗原市教育委員会 2009・2011・2013）、長者原遺跡（4）（築館町史編纂委員会 1976、栗駒町教育委員会 1995）、淀遺跡（5）（宮城県教育委員会 2001）、鶴ノ丸遺跡（6）（宮城県教育委員会 1981b）、宇南遺跡（7）、御駒堂遺跡（8）（宮城県教育委員会 1982・2016b、志波姫町教育委員会 2005）、薬師山北遺跡（29）、大仏古墳群（3）、大沢横穴墓群（11）、姉歯横穴墓群（12）がある。前期の遺構は、伊治城跡で方形区画溝跡や古墳周溝、土坑墓を伴う周溝、竪穴建物跡、鶴ノ丸遺跡で方形周溝や円形周溝、竪穴建物跡、宇南遺跡で方形周溝、竪穴建物跡、御駒堂遺跡で竪穴建物跡が検出されている。伊治城跡では、方形区画溝跡から土師器とともに続縄文土器が出土した。中期の遺構は、長者原遺跡で竪穴建物跡が検出されている。後期は、大沢横穴墓群、姉歯横穴墓群による横穴墓群である。なお、大仏古墳群は円墳を中心とする古墳群であるが、時期や規模などの詳細は不明である。

古代の遺跡は多数所在し、代表的なものに「続日本紀」の神護景雲元（767）年に、古代東北経営を目的として造営された城柵である伊治城跡（2）がある。これまでの調査により、正殿、前殿、北殿、脇殿が規則的に配置された政庁とそれを取り囲む内郭、外郭からなる三重構造を持つことが判明している。また、国内初となる弩の「機」が出土したことでも著名である。集落遺跡には、長者原遺跡（4）、淀遺跡（5）、鶴ノ丸遺跡（6）、宇南遺跡（7）、御駒堂遺跡（8）、佐野遺跡（13）（宮城県教育委員会 1980b）、城下遺跡（16）（栗原市教育委員会 2014）、吹付遺跡（21）（宮城県教育委員会 2005）、大門遺跡（22）（宮城県教育委員会 1980a）、山ノ上遺跡（25）（宮城県教育委員会 1980e）、大天馬遺跡（26）（宮城県教育委員会 2012・2016a）、下萩沢遺跡（30）（宮城県教育委員会 2009）、源光遺跡（31）、原田遺跡（33）、木戸遺跡（34）、佐内屋敷遺跡（35）などがある。

中近世の遺跡としては、鶴ノ丸遺跡（6）、宇南遺跡（7）、御駒堂遺跡（8）、城下遺跡（16）などがある。鶴ノ丸遺跡では中世の掘立柱建物跡、土塁跡、堀跡、宇南遺跡では中世の掘立柱建物跡や井戸跡、土坑、御駒堂遺跡では近世の掘立柱建物跡、城下遺跡では中近世の方形や円形の周溝が巡る塚状遺構が検出されている。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	**入の沢遺跡**	丘陵	集落・横穴墓	縄文・弥生・古墳前後・奈良・平安・中世・近世	20	堂の沢遺跡	段丘	集落	古代
2	伊治城跡	段丘	城柵・集落・墓	旧石器・古墳前後・奈良・平安	21	吹付遺跡	段丘	集落	奈良・平安
3	大仏古墳群	丘陵	墓	古墳後・奈良	22	大門遺跡	段丘	集落	縄文・奈良・平安・中世
4	長者原遺跡	丘陵	集落	古墳中・奈良・平安	23	狐塚遺跡	段丘	窯	奈良
5	淀遺跡	段丘	集落	旧石器・古墳・奈良・平安・中世	24	熊谷遺跡	段丘	集落	縄文・奈良・平安
6	鶴ノ丸館跡	段丘	集落・城館	縄文・弥生・古墳前・古代・中世・近世	25	山ノ上遺跡	段丘	集落	縄文・奈良
7	宇南遺跡	段丘	集落・城館	縄文・弥生・古墳前・古代・中世・近世	26	大天馬遺跡	段丘	集落	奈良・平安
8	御駒堂遺跡	段丘	集落	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世	27	後沢遺跡	段丘	集落	奈良・平安
9	栗原寺跡	丘陵	寺院	平安	28	青野遺跡	段丘	散布地	古代
10	尾松遺跡	丘陵	散布地	古代	29	薬師山北遺跡	丘陵	散布地	古墳前
11	大沢横穴墓群	丘陵	横穴墓	古墳後・奈良	30	下萩沢遺跡	丘陵	集落	縄文・弥生・奈良・平安
12	姉歯横穴墓群	丘陵	横穴墓	古墳後・奈良	31	源光遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安
13	佐野遺跡	丘陵	集落	縄文・弥生・奈良・平安	32	高田山遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
14	中島遺跡	丘陵	散布地	平安	33	原田遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安
15	泉沢A遺跡	丘陵	集落	奈良・平安	34	木戸遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安
16	城下遺跡	自然堤防	集落	奈良・中世・近世	35	佐内屋敷遺跡	丘陵	集落	縄文・弥生・奈良・平安
17	刈敷袋遺跡	自然堤防	散布地	縄文・古代	36	鰻沢遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安・中世
18	刈敷治郎遺跡	自然堤防	散布地	縄文・古代	37	照越台遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・古墳、古代
19	甚内屋敷遺跡	段丘	散布地	縄文・古代	38	嘉倉貝塚	丘陵	集落・貝塚	縄文・弥生・奈良・平安

第３図　入の沢遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅲ章　調査成果

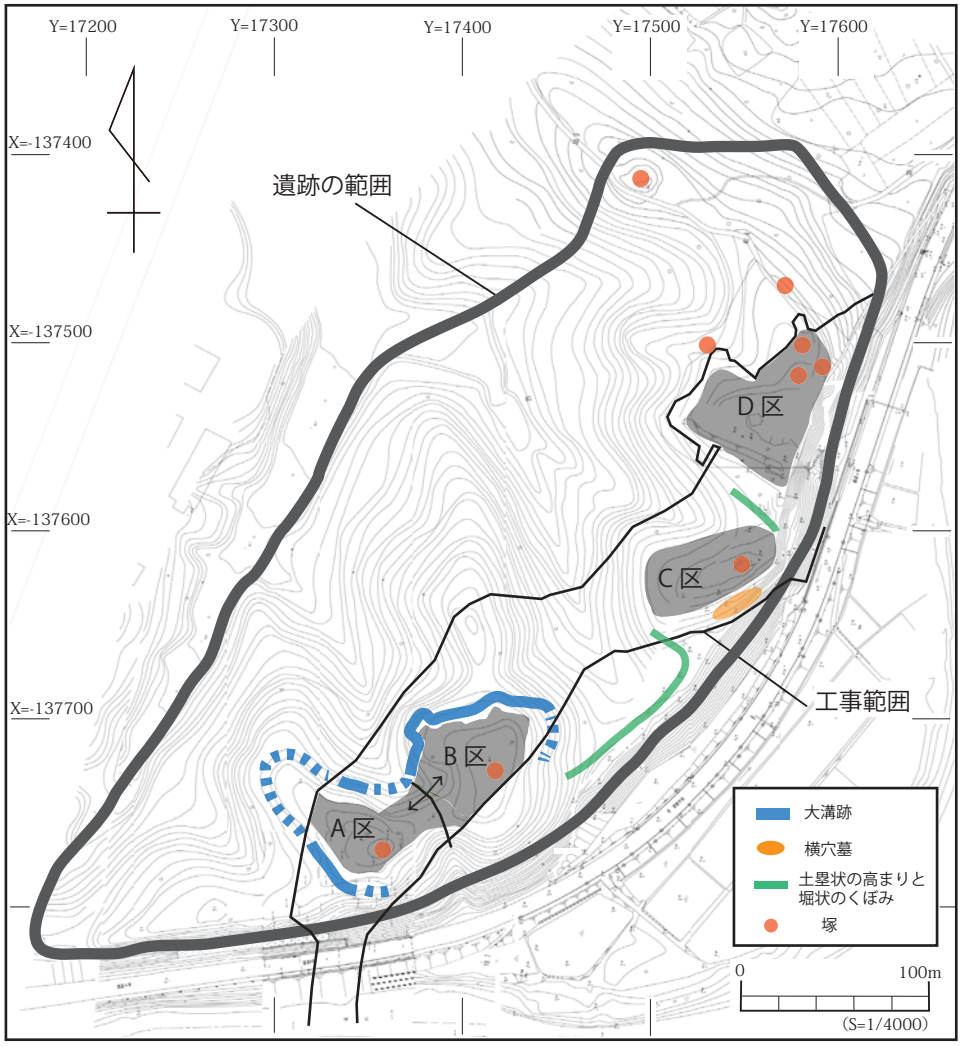
1．方法

（1）調査の方法

〔**調査区の設定**〕工事計画範囲は、遺跡を南西―北東に縦断する位置にあり、中心部分が調査対象範囲である（第 4 図）。平成 26 年度調査では、中央にある北西方向からの沢により遺跡を南北に分け、その南側を調査対象とした。南側は北方向からの沢により丘陵尾根が 2 つに分かれており、この沢を境に西側を A 区、東側を B 区とした（第 4 図）。同様に、未調査の範囲である北側においても、便宜的に丘陵尾根を単位として南から順に C 区、D 区とした。

〔**表土除去**〕バックホーを使用した。生じた排土についてはクローラーダンプにより搬出した。

〔**遺構検出・精査**〕遺構の検出と精査については人力で行った。竪穴建物跡の中には、焼失したものがあり、それらには地山ブロック層や焼土層といった特徴的な堆積土が確認された。これらは竪穴建物跡の構造や焼失の状況を表す可能性があったため、検出された時点で、堆積土の分布範囲を確認し、



第 4 図　調査区の位置

第２表　遺構番号一覧

No.	遺構種別		位置	時期	備考
1	SD	大溝跡	A 区	古墳	調査中
2	SD	大溝跡	A 区	古墳	未調査
3	SD	大溝跡	B 区	古墳	調査中
4	SA	材木塀跡	B 区	古墳	調査中
5	SI	竪穴建物跡	B 区	古代	調査済
6	欠番				
7	SI	竪穴建物跡	B 区	古代	調査済
8	SI	竪穴建物跡	B 区	古墳	調査中
9	SI	竪穴建物跡	B 区	古墳	調査中
10	SI	竪穴建物跡	B 区	古墳	調査中
11	SX	竪穴建物跡か	B 区		検出のみ
12	SX	竪穴建物跡か	B 区		検出のみ
13	SI	竪穴建物跡	B 区	古墳	調査中
14	SX	整地層	B 区	古墳	一部精査
15	SI	竪穴建物跡	B 区	古墳	調査中
16	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
17	SI	竪穴建物跡	B 区	古墳	調査中
18	SI	竪穴建物跡	B 区	古墳	調査中
19	SI	竪穴建物跡	B 区	古墳	調査中
20	SI	竪穴建物跡	B 区	古墳	調査中
21	SI	竪穴建物跡	B 区	古墳	調査中
22	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
23	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
24	SX	竪穴建物跡か	B 区		検出のみ
25	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
26	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
27	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
28	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
29	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
30	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
31	SX	竪穴建物跡か	B 区		検出のみ
32	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
33	SI	竪穴建物跡	B 区	古代	調査済
34	SI	竪穴建物跡	B 区	古代	調査済
35	SK	土坑	B 区		検出のみ
36	SI	竪穴建物跡	B 区	古代	調査済
37	SB	掘立柱建物跡	B 区		検出のみ
38	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
39	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
40	SI	竪穴建物跡	B 区		検出のみ
41	SX	盛土遺構	B 区		一部精査
42	SB	掘立柱建物跡	B 区		検出のみ
51	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
52	SX	竪穴建物跡か	A 区		検出のみ
53	SX	竪穴建物跡か	A 区		検出のみ
54	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
55	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
56	SI	竪穴建物跡	A 区	古墳	調査中
57	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
58	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
59	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
60	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
61	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
62	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
63	SI	竪穴建物跡	A 区	古墳	調査中
64	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
65	SX	竪穴建物跡か	A 区		検出のみ
66	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
67	SX	竪穴建物跡か	A 区		検出のみ
68	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
69	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
70	SI	竪穴建物跡	A 区		検出のみ
71	SA	材木塀跡	A 区		検出中
72	SX	盛土遺構	A 区		検出中

写真撮影、平面図・断面図作成を行った。また、床面や床面直上層からは多くの遺物や炭化材が出土した。これについても、写真撮影、平面図作成を行い、出土位置や出土層、出土状態の記録を作成した。多くの微細な遺物が出土した SI13 については、それらの包含層である焼土や炭化物が多く含まれる床面直上層をすべて採取し、悉皆的な遺物回収に努めた。その際、SI13 床面を 16 分割し、小グリッドを設定して、グリッド・層ごとに回収した。

〔**平面図**〕A・B 区が位置する丘陵縁の傾斜変換点を測量し、大溝跡の下端に対応する A・B 区の上端として表現した。地点によっては中端も作成している。これらの上・中端は、調査時における明瞭な傾斜変換点を記録したもので、本来的な A・B 区の平坦面の範囲を表すものではない。

〔**遺構の登録**〕遺構番号については、塚以外の遺構において種類を問わず 1 から通し番号で登録した。調査の進行上、B 区、A 区の順で遺構番号を登録した。1 ～ 3 までは大溝跡、そして、B 区は 4 から、A 区は便宜的に 51 から番号を使用している。通し番号で登録した遺構の一覧については第 2 表に示した。遺構記号については例言に示したとおりである。塚については、独立して 1 から番号を設定し、1 号塚、2 号塚の 2 基を登録している。

〔**遺物の取り上げ**〕竪穴建物跡からは多くの種類と量の遺物が出土した。これらのうち、特徴的な遺物や良好な状態で出土した土器については、それぞれに 1 から通し番号で遺物取り上げ番号を設定し、写真、平面図作成、レベリングの後に取り上げを行った。これにより、調査時には遺物とその出土状況の写真・平面図・断面図との対応関係、整理時には遺物の接合、抽出作業を容易にするよう努めた。

〔**記録作成**〕精査した遺構については、すべて平面図と断面図作成、写真撮影を行った。平面図については、トータルステーション及び電子平板システム（「遺構くん」バージョン 2016cubic 社）を使用して作成した。ただし、一部の遺構や土器の出土状況については、S=1/10 あるいは S=1/20 で手実測により平面図を作成している。断面図については、S=1/20 の手実測で作成した。

写真撮影には、一眼レフデジタルカメラ（CanonEOS 7D　1,800 万画素）を使用した。

（2）整理の方法

〔**遺物**〕洗浄、注記、接合を行い、特徴的なものについて抽出、調書作成を行った。この際、土器、石器・石製品、一部の金属製品については、遺物取り上げ番号とは別に、遺物登録番号を設定した。土器・土製品、石器・石製品、銅製品の遺物登録番号については、古墳時代の遺構から出土したものは 1 から、古代以降の遺構から出土したものは 1001 から通し番号で、銅鏡は出土した順に A ～ D、玉類、垂飾品、鉄製品については、それぞれ 1 から番号を設定して登録している。なお、玉類と垂飾品では、調査時に出土位置を記録して取り上げたものを 1 から、グリッドで取り上げたものを 101 からの番号を設定して登録している。SI13 で回収した土壌については、5㎜、3㎜、1㎜の篩を用いて水洗により遺物を回収した。銅鏡と鉄製品については、東北歴史博物館でクリーニング作業、保存処理を行った。

作成した実測図については、スキャナーで取り込み、その画像を Adobe 社の IllustratorCS6 でトレースした。拓本図については、スキャナーで取り込み、その画像を Adobe 社の PhotoshopCS6 で色調や濃度を加工した。報告書に掲載する遺物の写真撮影・写真加工作業は業者に委託して行った。

〔**遺構**〕「遺構くん」で測量した平面図を Adobe 社の IllustratorCS6 に変換して作成し、断面図については実測図をスキャナーで取り込み同じく IllustratorCS6 でトレースを行った。

（3）報告書の記載について

入の沢遺跡の調査は平成 26 年度に実施され、平成 28 年度に一部補足調査を行ったが、対象としたのは南半部のみで、かつ対象範囲の表土除去も全て終了していない。遺構検出については、材木塀跡や大溝跡で一部のみである。遺構精査については、竪穴建物跡では床面施設の検出に留めているものが多く、大溝跡の精査も一部である。したがって、報告の内容は、平成 26・28 年度調査で得られた情報に限られている。

報告書の記載方法としては、精査した遺構について時代で項立てし、区画施設、竪穴建物跡、それ以外の遺構という順で行う。また、遺構確認面や遺構に伴うカクラン、または表面採集遺物の中で特徴的なものについては、その他の出土遺物として補足的に掲載する。

2．基本層序

入の沢遺跡 A・B 区で確認できた基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層：表土

Ⅱ層：旧表土。大溝跡に併行する盛土遺構の直下で確認できる。また、斜面部では褐色土、沢部分では粘性の強い黒褐色土が表土の下位、地山の上位に堆積する。

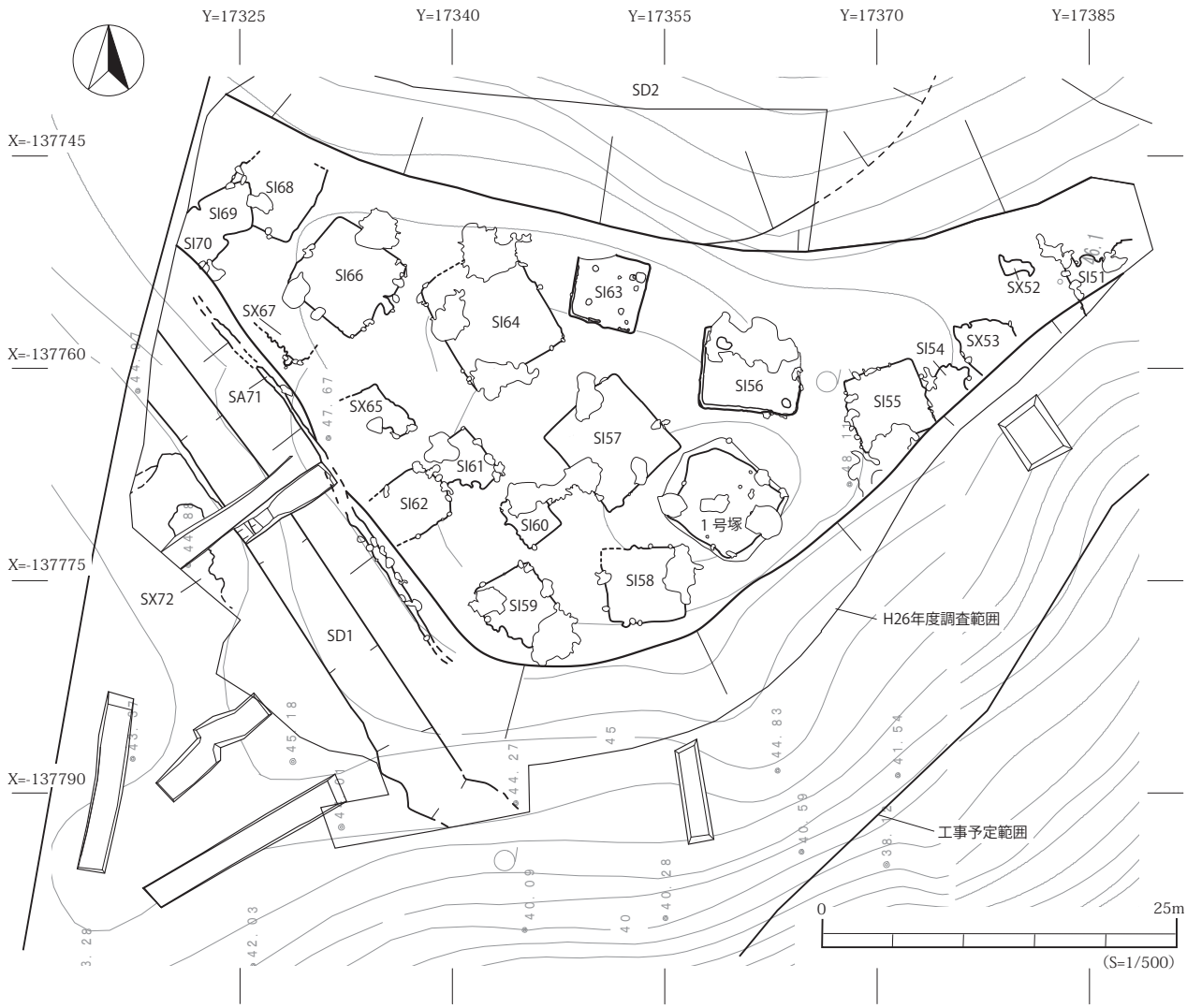
Ⅲ層：地山。多くはシルトであるが、大溝跡の張り出し部付近では岩盤も認められた。

3．発見された遺構と遺物

発見された遺構は、大溝跡、材木塀跡、盛土遺構、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、整地層、塚等である（第 5 図）。

Y=17280
Y=17310
Y=17340
Y=17370
Y=17400
Y=17430
Y=17460
X=-137670
X=-137700
X=-137730
X=-137760
X=-137790
遺跡範囲
B区
A区
工事予定範囲
H26年度調査範囲
SD2
SX41
SD3
SI13
SI19
SX14
SI34
SA4
SI20
SI36
SI7
SI21
SI15
SI18
SI9
SI10
SI8
SI27
SI17
SI33
2号塚
SI63
SI56
1号塚
SX72
SD1
SA71
0
50m
(S=1/1,000)

第５図　遺構配置図



第６図　A区遺構配置図

A 区は、北西方向に延びる丘陵尾根とその北東・南西・南東斜面からなる（第 6 図）。尾根頂部は南東端に位置し、北西方向に緩やかに傾斜する。尾根の標高は 46 ～ 49m である。丘陵尾根頂部で塚、尾根上と B 区との間の丘陵鞍部で竪穴建物跡、尾根の縁辺で材木塀跡、丘陵斜面で大溝跡を検出した。

B 区は、南北方向の丘陵尾根とその中央から西側に派生する丘陵尾根、尾根の東・西・南・北斜面からなる（第 7 図）。尾根頂部は南北方向の尾根の中央南寄りに位置し、北・南・西方向に緩やかに傾斜する。尾根の標高は 42 ～ 48m である。尾根頂部で塚、尾根上と丘陵緩斜面で竪穴建物跡、尾根の縁辺で材木塀跡と整地層、丘陵斜面で大溝跡を検出した。

発掘調査で検出された遺構は、出土遺物から古墳時代と古代、中近世に分けられる。縄文時代については、石鏃、石錐、石篦、剥片が遺構確認面や各遺構の堆積土から出土しているが、遺構は確認されず、弥生時代についても僅かな出土の遺物のみであったことから、以下では遺構が検出された古墳時代、古代、中近世について時代ごとに記述を行う。なお、時期が特定できなかった遺構については、その特徴を第 4 表にまとめ、記述を省略する。

第７図　B区遺構配置図

（1）古墳時代

大溝跡、材木塀跡、盛土遺構、竪穴建物跡、整地層を検出し、大溝跡の一部と竪穴建物跡 12 棟の精査を行った。出土遺物は、銅鏡、鉄製品、玉類、垂飾品、土師器、土製品、石器、石製品、繊維、赤色顔料、動物遺存体、植物遺存体である。

1）区画施設

A 区で大溝跡 2 条（SD1・2）と材木塀跡 1 条（SA71）、盛土遺構（SX72）、B 区で大溝跡 1 条（SD3）と材木塀跡 1 条（SA4）、盛土遺構（SX41）を検出した。

A. 大溝跡

【SD1 大溝跡】（平面図：第 8 図、断面図：第 9 図、出土遺物：第 10 図）

A 区の南西側に位置する北西－南東方向の大溝跡で、南東端は東に屈曲する。北西側の延長については、調査範囲外にあたる A 区の北西側の丘陵斜面を巡るとみられる。一方、南東側の延長については、トレンチを設定して調査を行ったが、急斜面になっており確認することはできなかった。検出長は約 40m である。内容確認のために、幅 1.8m のトレンチを設定し精査を行った。精査した部分においては、検出面での上幅が 4.0m、下幅が 1.3m、検出面からの深さが 1.4m である。底面と A 区との高低差は 4.7m である。断面形は逆台形で、北東側の壁は A 区の丘陵縁から SD1 底面に至る斜面と一連である。西側の壁には底面から 59cm の位置に幅 34cm の小規模な段が認められる。堆積土は 22 層に分かれ、いずれも自然堆積である。4 層には灰白色火山灰ブロックが認められた。また、12・19 層には地山小ブロックが多く認められ、SX72 盛土遺構の崩壊土の可能性がある。20・21 層から土師器鉢（第 10 図 1）、壺（2・3）、表土から棒状浮文のある壺の口縁部（4）が出土した。

【SD2 大溝跡】（第 5 図）

A 区の北側に位置し、東西方向の大溝跡である。調査当初のトレンチ調査で大溝跡であることを確認したが、調査の進行上、すぐに埋め戻したため平面図を作成していない。全体の検出は行っていないが、西側は調査範囲外に延び、東側は SD3 と接続する可能性がある。なお、トレンチ調査では、堆積土上層に灰白色火山灰を確認した。

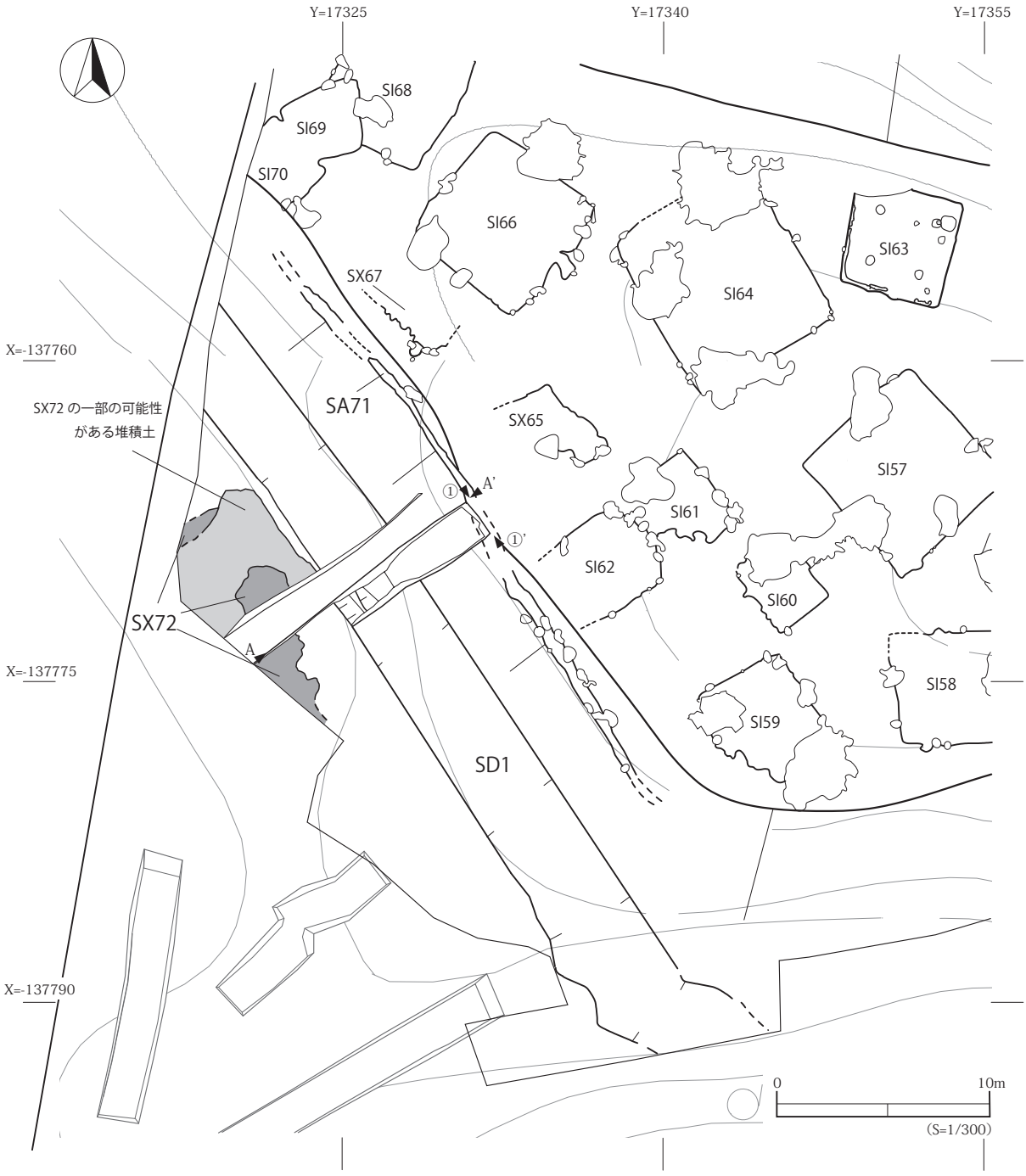
【SD3 大溝跡】（平面図：第 11 図、断面図：第 12・13 図、出土遺物：第 14 ～ 17 図）

B 区の西側から北側にかけての範囲に位置する南北方向と東西方向の大溝跡である。西部と北西部、北東隅部分を検出した。北東隅部分の延長は、調査範囲外にあたる B 区の南東側を巡るとみられる。平面形は不整形で、北西隅は北西方向に凸形に張り出している。検出長は約 112m で、この内北西部の 50m 分の精査を行った。精査を行った範囲での規模は、検出面での上幅が 2.4 ～ 3.9m、下幅が 0.3 ～ 1.9m、検出面からの深さが 0.7 ～ 1.5m である。底面と B 区縁辺との高低差は 4.0m である。断面形は「V」字形で、張り出し部では逆台形である。これらの B 区側の壁は、B 区の丘陵縁から SD3 底面に至る斜面と一連である。底面の標高は、張り出し部の東側から張り出し部に向かって標高が下がり、張り出し部中央南西寄りの地点で低くなり、そこから張り出し部の南側の屈曲部まで標高が上がり、屈曲部から南側へは再度標高を下げながら傾斜する。堆積土は 6 層に大別され、いずれの地点でも全て自然堆積である。大別 2 層は灰白色火山灰層である。出土遺物については、大別 1 ～ 5 層から古代の土師器や須恵器（第 14 図 3 ～ 5、15 ～ 17 図）、大別 6 層から古墳時代の土師器（第 14 図 1・2）が出土した。

B. 材木塀跡

【SA71 材木塀跡】（平面図：第 8 図、断面図：第 18 図）

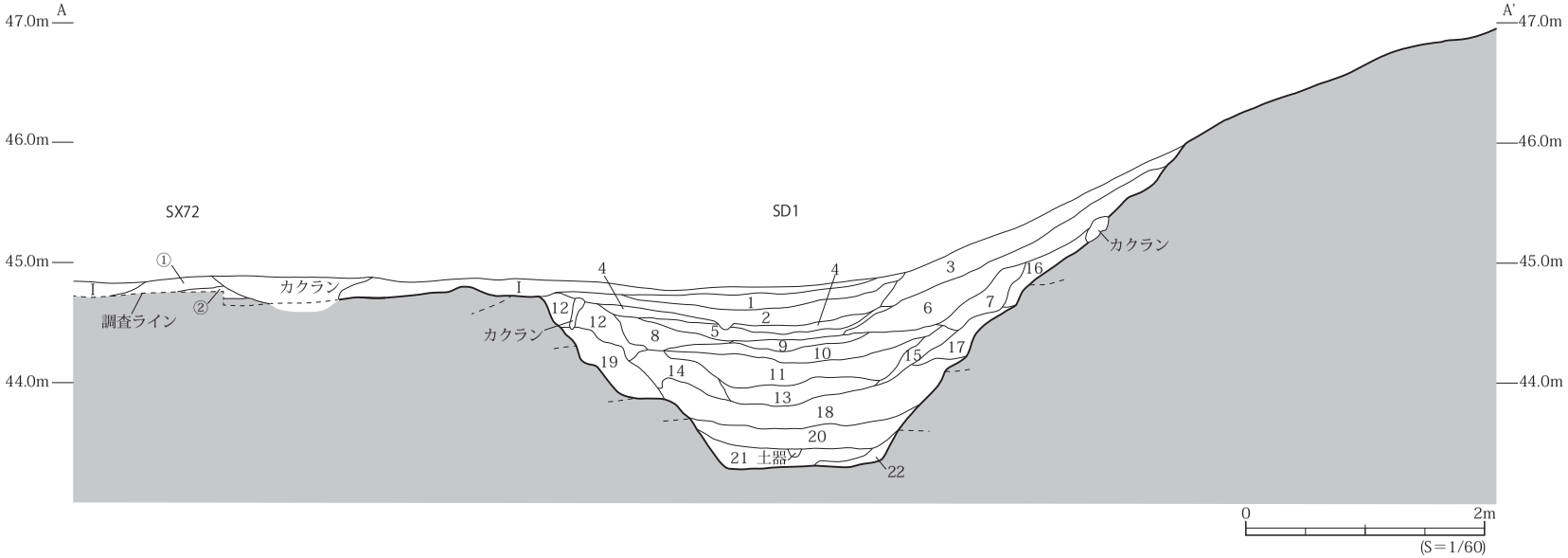
A 区の南西縁の緩斜面上で検出した。SD1 大溝跡に並行している。掘方部分約 24m のみの検出である。幅 20 ～ 70cm で、深さは確認できたところでは 39 ～ 100cm 程度である。また、A 区の北縁でも同様の遺構の存在を確認したが、全体の検出は行っていない。



第８図　SD1大溝跡、SA71材木塀跡、SX72盛土遺構

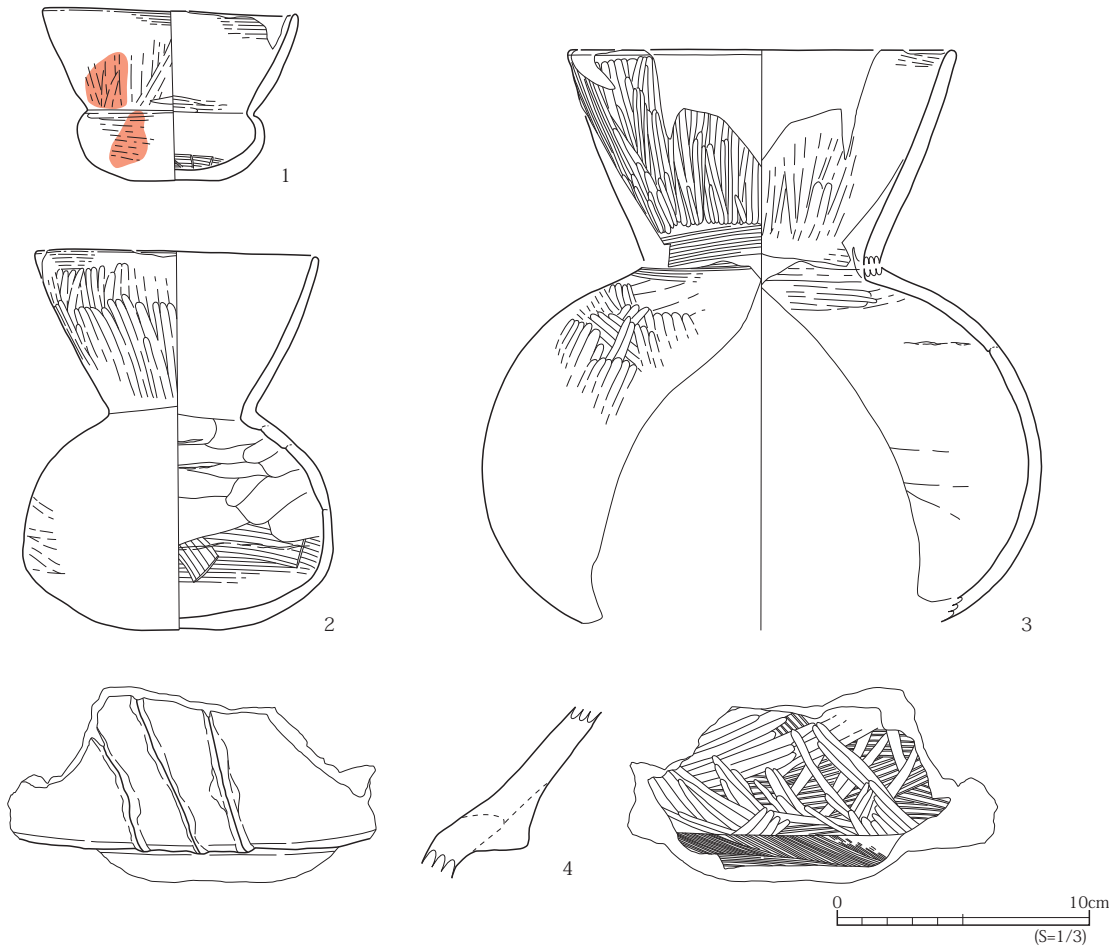
【SA4 材木塀跡】（平面図：第 11 図、断面図：第 18 図）

B 区の西側から北西部にかけての緩斜面上で検出した。SD3 大溝跡に並行し、北西隅の張り出し部分も一部で途切れながらも同様に凸形となる。掘方部分約 60m と材痕跡を検出した。SI5・7 竪穴建物跡と重複し、これらより古い。幅 20 ～ 60cm で、深さは確認できたところで 30 ～ 96cm である。材痕跡は長軸 10 ～ 20cm の円形、楕円形で、間隔は 1 ～ 35cm である。SI13 竪穴建物跡の北側付近では、部分的に SX14 整地層が SA4 を覆い、その直上に焼土や炭化物、土器を多く含む層が覆っていた。



層		土色	土性	含有物など	備考
SD1	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト		自然堆積
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	暗褐色 (10YR3/3) シルト小ブロックを含む	
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト		
	4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	灰白色火山灰ブロックを多量、炭化物片をわずかに含む	
	5	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	粗砂、酸化マンガンを含む	
	6	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物片、小礫をわずかに含む	
	7	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物粒をわずかに含む	
	8	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	小礫をやや多く含む	
	9	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	小礫、粗砂、酸化鉄を多量、炭化物粒をわずかに含む	
	10	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	小礫、粗砂、酸化鉄を多量、炭化物粒をわずかに含む	
	11	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	小礫、粗砂、酸化鉄を多量、炭化物粒をわずかに含む	
	12	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	地山粒、小ブロック、小礫を含む	
	13	褐灰色 (10YR4/1)	粘土質シルト	酸化鉄を多量、小礫を含む	
	14	褐灰色 (10YR4/1)	粘土質シルト	地山粒、小礫、酸化鉄を多量、炭化物片をわずかに含む	
	15	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	小礫、酸化鉄を多量に含む	
	16	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山小ブロックを含む、炭化物粒を少量含む	
	17	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒・小ブロック、酸化鉄を含む	
	18	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	地山粒・小ブロックを多量に含む	
	19	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒・小ブロックを非常に多く含む	
	20	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	地山粒・小ブロック、小礫を非常に多く含む	
	21	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	細砂、小礫を多量に含む	
	22	灰黄褐色 (10YR6/2)	砂質シルト	細砂、小礫を多量に含む	
SX72	①	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	粘性なし、しまりあり、地山粒・小ブロック、小礫を多量に含む	人為堆積
	②	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	粘性あり、しまりあり、地山粒・小ブロック、小礫を多量に含む	

第 9 図　SD1 大溝跡、SX72 盛土遺構　断面



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　鉢	20 層	4/5	9.9		6.8	外：(口) ナデ (頸～体) ヘラミガキ、一部赤彩　内：(口) ナデ (頸) ヘラミガキ？ (体～底) ヘラナデ	図版 28-1	R212
2	土師器　壺	20 層	完形	11.0		15.0	外：(口) ナデ (頸～体) ヘラミガキ　内：(口～頸) 調整不明 (体～底) ナデ	図版 28-2	R211
3	土師器　壺	21 層	1/5	(15.0)			外：(口～頸) ヘラミガキ、ナデ (体) ナデ→ヘラミガキ　内：(口～頸) ヘラミガキ (体) ナデ	図版 28-3	R213
4	土師器　壺	表土	頸部				外：調整不明、3 条 1 単位棒状浮文　内：(口) 目の粗いハケメ→ヘラミガキ (頸) 目の細かいハケメ 二重口縁	図版 28-4	R323

第 10 図　SD1 大溝跡　出土遺物

C. 盛土遺構

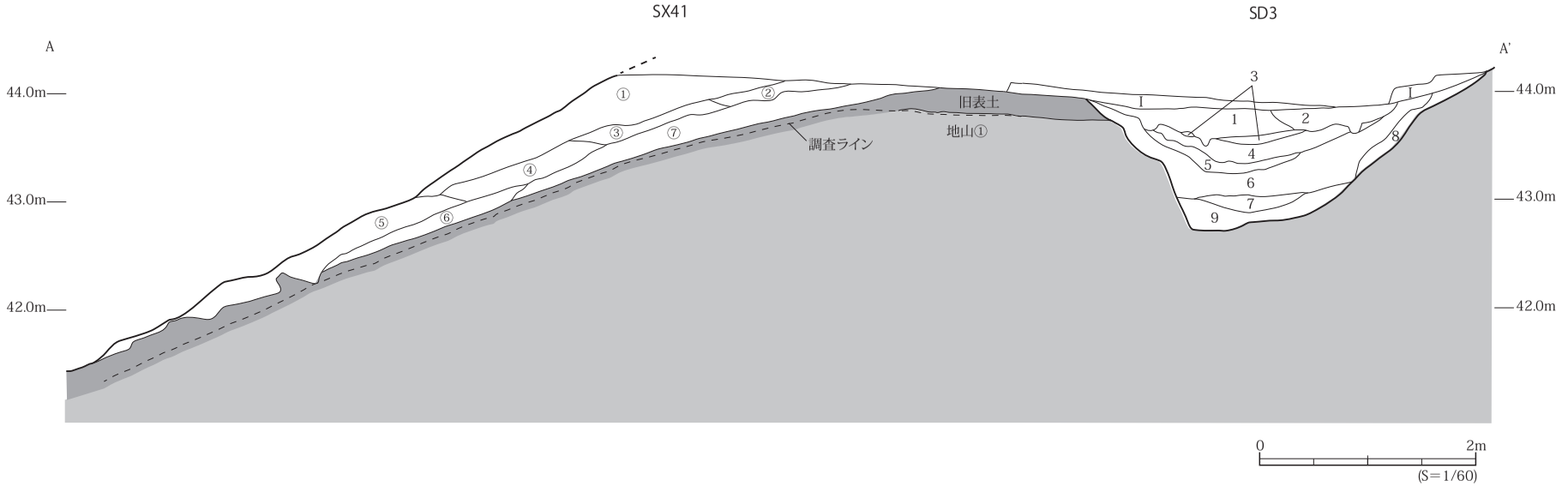
【SX72 盛土遺構】（平面図：第 8 図、断面図：第 9 図）

A 区の SD1 大溝跡の南西側で、標高 44 ～ 45m の丘陵緩斜面上に位置する。検出した範囲は北西―南東 10m、北東―南西 2.5m である。一部のみの検出であり、規模は不明である。旧表土上に直接盛土が行われている（①・②層）。

【SX41 盛土遺構】（平面図：第 11 図、断面図：第 12 図）

B 区の SD3 大溝跡の西・北側で、標高 40 ～ 44.3m の丘陵斜面上に位置する。SD3 大溝跡と丘陵斜面との間の平坦面から斜面にかけての範囲で検出した。調査で検出した範囲は、南北 20m、東西 80m である。東側の丘陵尾根部では 1m 程度の高まりとして残存しているが、それ以外では高まりは確認できなかった。検出幅は 2.0 ～ 9.0m、旧表土上面での傾斜は 20°、盛土上面での傾斜は 30°である。造成方法については、旧表土上に直接盛土が行われ（⑥・⑦層）、次に、斜面下方から上方に向かって階段状に盛土がなされる（①～⑤層）。

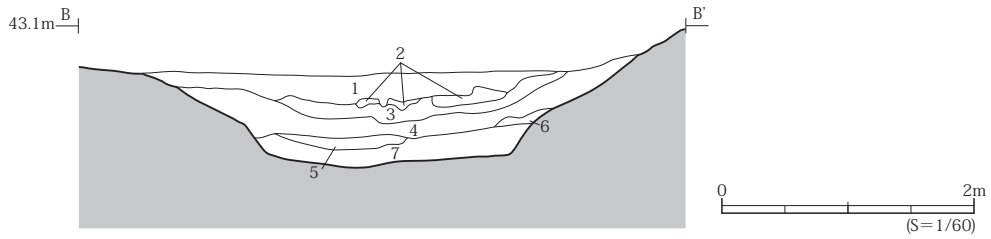
第 11 図　SD3 大溝跡、SA4 材木塀跡、SX41 盛土遺構



層		土色	土性	含有物など	備考	
SD3	1	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト小ブロック・ブロックを含む	大別 1 層	自然堆積
	2	黒色（10YR2/1）	シルト	地山粒をごくわずかに含む、暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト小ブロック・ブロックをわずかに含む		
	3	灰白色火山灰	シルト		大別 2 層	
	4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物を少量含む	大別 3 層	
	5	褐色（10YR4/4）	シルト		大別 4 層	
	6	黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	小礫をわずかに含む		
	7	黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘土質シルト小ブロック・ブロックを多量に含む		
	8	黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	地山小ブロック・ブロック・大ブロックを少量含む	大別 5 層	
	9	にぶい黄橙色（10YR7/4）	砂質シルト	明黄褐色 (10YR6/8) 砂質シルト小ブロック・ブロックを多量に含む	大別 6 層	
SX41	①	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	粘性・しまりややあり、浅黄橙色 (10YR8/4) 粘土質シルト、凝灰岩小礫・礫を多量に含む		人為堆積
	②	褐色（10YR4/6）	砂質シルト	粘性なし、しまりややあり、凝灰岩小礫を含む		
	③	黄褐色（10YR5/6）	砂質シルト	粘性なし、しまりややあり、凝灰岩粒・小礫を含む		
	④	黄褐色（10YR5/6）	砂質シルト	粘性なし、しまりややあり、凝灰岩粒・小礫、明黄褐色 (10YR6/6) 粘土小ブロックを少量含む		
	⑤	明黄褐色（10YR6/6）	砂質シルト	粘性なし、しまりややあり、凝灰岩粒・小礫を含む		
	⑥	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	粘性・しまりややあり、凝灰岩粒・小礫を含む		
	⑦	褐色（10YR4/4）	シルト	粘性・しまりややあり、凝灰岩粒・小礫、地山①小ブロックを多量に含む		

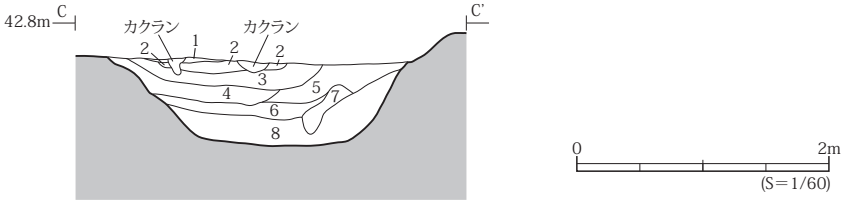
旧表土：褐色 (10YR4/4) シルト　地山①：明黄褐色 (10YR6/6) シルト

第 12 図　SD3 大溝跡、SX41 盛土遺構　断面



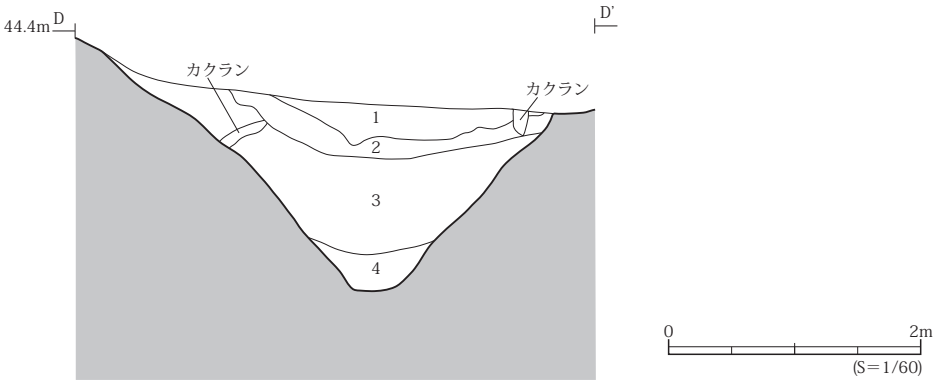
B-B'

層	土色	土性	含有物など	備考	
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト小ブロック・ブロックを含む	大別 1 層	自然堆積
2	灰白色火山灰	シルト		大別 2 層	
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物を少量含む	大別 3 層	
4	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	小礫をわずかに含む	大別 4 層	
5	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘土質シルト小ブロック・ブロックを多量に含む		
6	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	地山小ブロック・ブロック・大ブロックを少量含む	大別 5 層	
7	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	砂質シルト	明黄褐色 (10YR6/8) 砂質シルト小ブロック・ブロックを多量に含む	大別 6 層	



C-C'

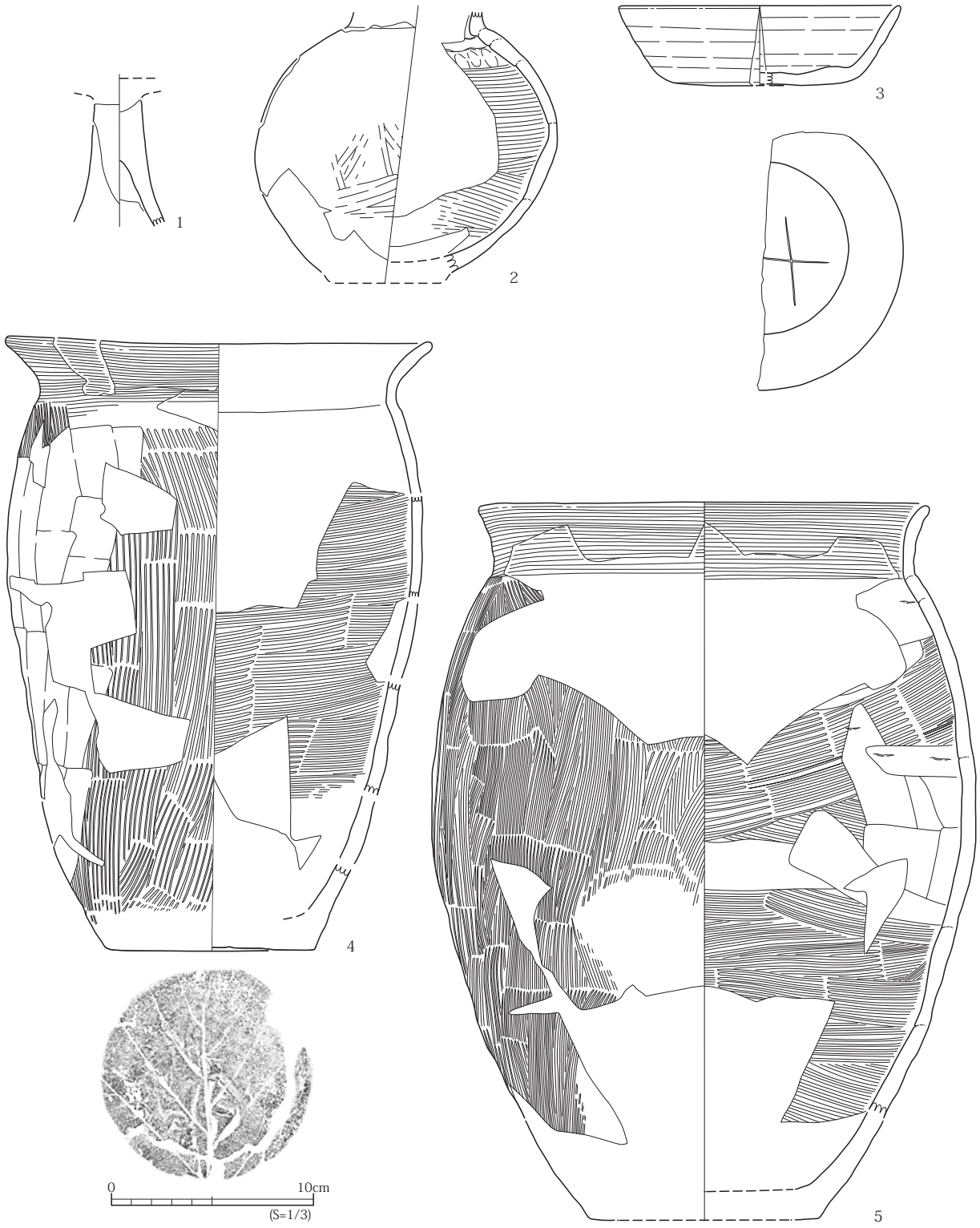
層	土色	土性	含有物など	備考	
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト小ブロック・ブロックを含む	大別 1 層	自然堆積
2	灰白色火山灰	シルト		大別 2 層	
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物を少量含む	大別 3 層	
4	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	小礫をわずかに含む	大別 4 層	
5	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	小礫をごくわずかに含む		
6	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘土質シルト小ブロック・ブロックを多量に含む		
7	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	地山ブロックをわずかに含む		
8	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	砂質シルト	明黄褐色 (10YR6/8) 砂質シルト小ブロック・ブロックを多量に含む	大別 6 層	



D-D'

層	土色	土性	含有物など	備考	
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	灰白色火山灰を少量含む	大別 1 層	自然堆積
2	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭化物を多量に含む	大別 3 層	
3	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	礫を多量に含む	大別 4 層	
4	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	粘土	砂を含む	大別 6 層	

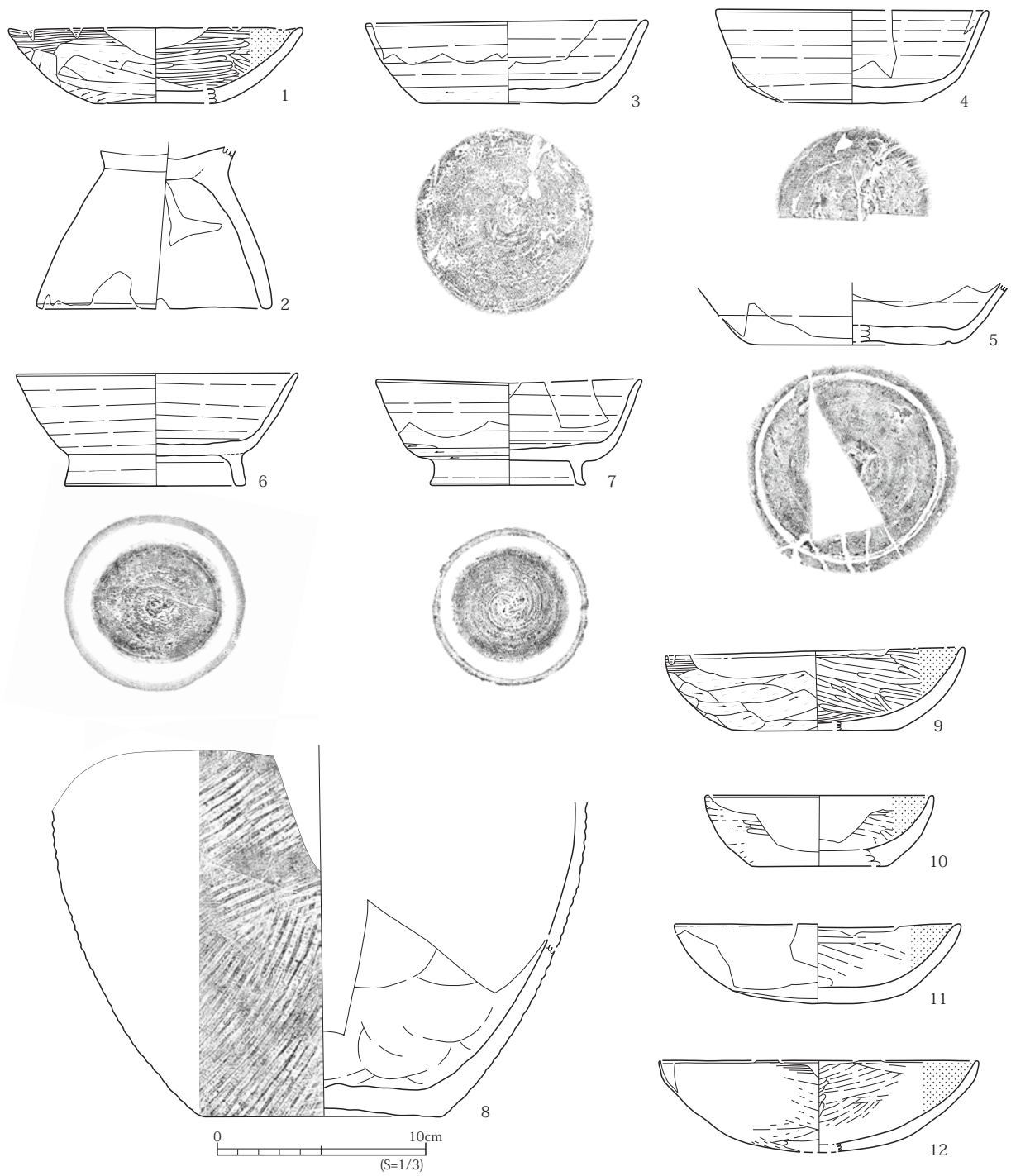
第 13 図　SD3 大溝跡　断面



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　高坏	6層	脚部			(6.2)	外・内：調整不明　脚部上部中実	図版 28-5	R214
2	土師器　壺	6層	(体)2/3			(12.9)	外：(体) ヘラミガキ？　内：(体) ナデ・オサエ→ヘラナデ	図版 28-6	R243
3	須恵器　坏	5層	2/5	(13.8)	(8.6)	4.0	外：(口～体) ロクロナデ (底) ヘラ切り→ナデ→線刻「+」 内：ロクロナデ	図版 28-7	R215
4	土師器　甕	5層	3/5	(20.8)	10.4	30.6	外：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ→ナデ (底) 木葉痕　内：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ	図版 29-2	R220
5	土師器　甕	3・5層	2/5	(22.0)	(11.4)	35.6	外：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ　内：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ→ナデ	図版 29-1	R252

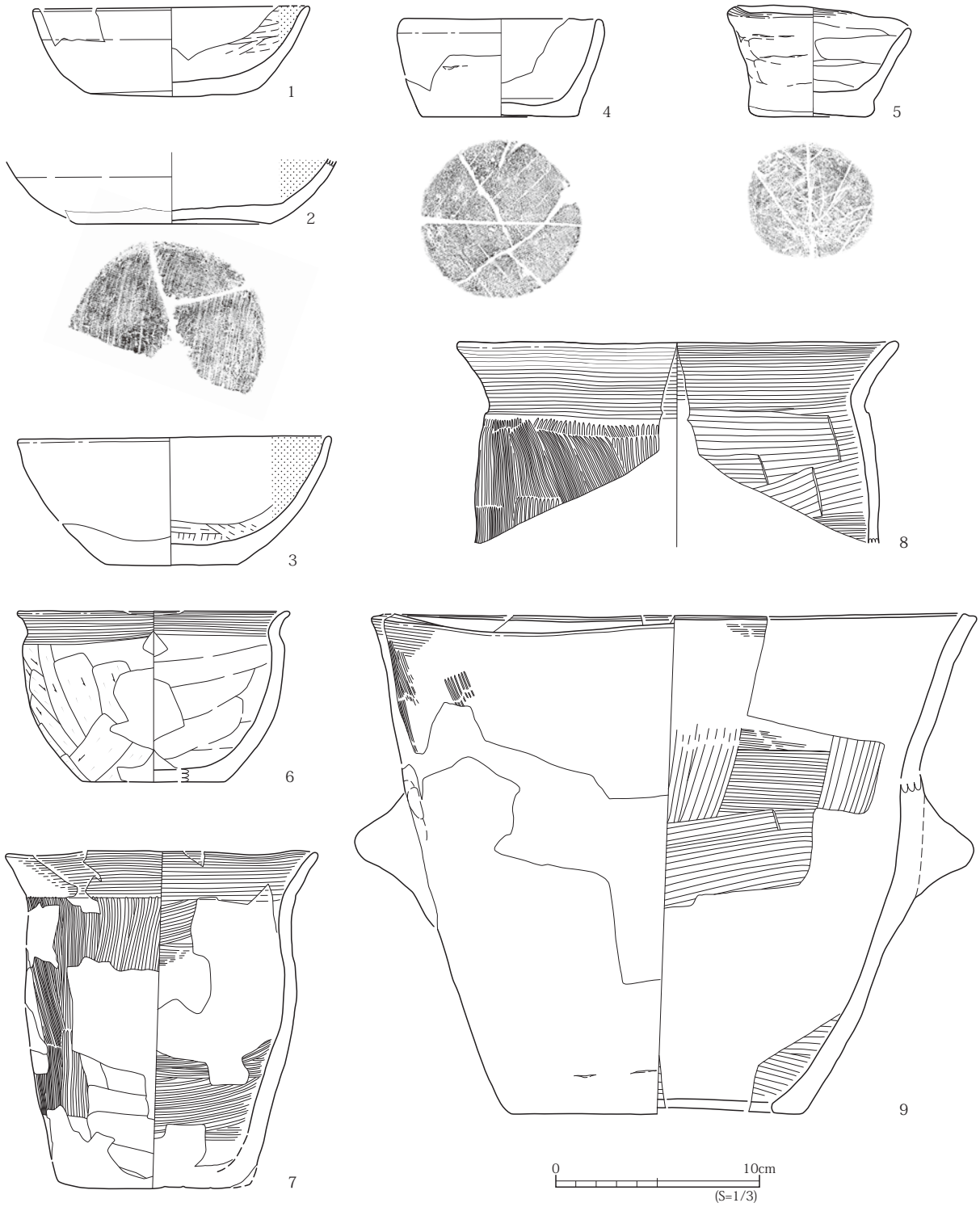
第 14 図　SD3 大溝跡　出土遺物 (1)



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　坏	5層	1/4	(14.0)	6.0	3.6	外：(口) ヨコナデ (体) ヘラケズリ　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 29-3	R218
2	土師器　台付甕	4層	脚部		10.9	(7.7)	外・内：調整不明	図版 29-4	R240
3	須恵器　坏	3層	2/3	13.4	8.6	4.0	外：(口～体) ロクロナデ (体下端・底) 回転糸切り→回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ	図版 29-5	R237
4	須恵器　坏	3層	1/4	(13.0)	7.0	4.5	外：(口～体) ロクロナデ (底) ヘラ切り→手持ちヘラケズリ　内：ロクロナデ	図版 29-6	R251
5	須恵器　坏	3層	底部		10.0	(2.9)	外：(口～体) ロクロナデ (底) ヘラ切り→圏線状圧痕→ナデ　内：ロクロナデ	図版 29-7	R238
6	須恵器　高台坏	3層	完形	13.4	8.6	5.4	外：(口～体) ロクロナデ (底) ヘラ切り→ナデ　内：ロクロナデ	図版 29-8	R222
7	須恵器　高台坏	3層	2/3	(12.6)	7.5	5.1	外：(口～体) ロクロナデ (体下端・底) 切り離し不明→回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ	図版 29-9	R221
8	須恵器　甕	3層	(胴～底)2/5		11.3		外：(胴) 平行タタキ (底) 板目状圧痕→ナデ　内：(胴) 無文当具痕 (底) ナデ	図版 30-1	R223
9	土師器　坏	3層	4/5	14.2	8.1	3.9	外：(口) ヨコナデ (体～底) 手持ちヘラケズリ　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 30-5	R231
10	土師器　坏	3層	1/4	(10.8)	(6.6)	3.4	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 30-6	R233
11	土師器　坏	3層	4/5	13.6	8.3	3.8	外：調整不明　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 30-7	R230
12	土師器　坏	3層	1/5	(15.2)		(4.4)	外：(口) ヨコナデ (体～底) ヘラケズリ　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 30-8	R235

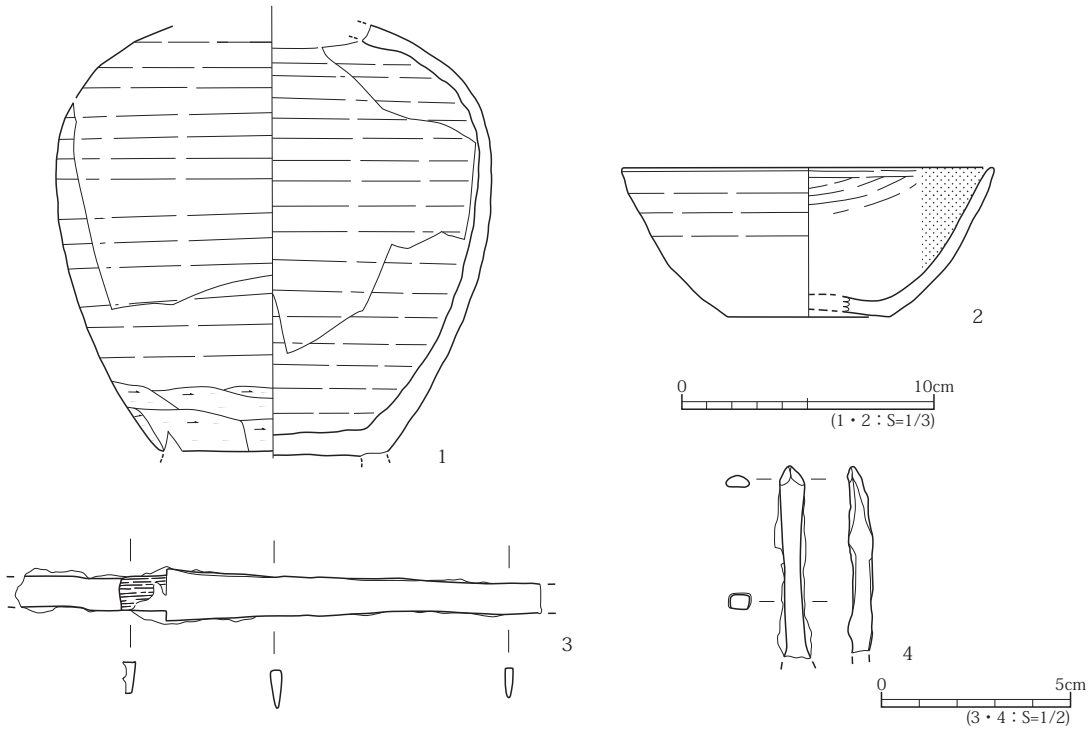
第 15 図　SD3 大溝跡　出土遺物 (2)



（単位：cm）

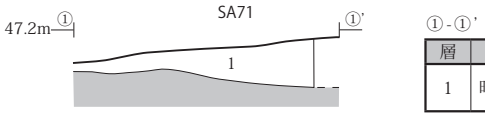
No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　坏	3 層	3/5	13.4	8.3	4.5	外：(口～体) ロクロナデ、(底) 切り離し・調整不明　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 30-9	R226
2	土師器　坏	3 層	底部		9.5	(3.2)	外：(体) ロクロナデ→調整不明 (底) 静止糸切り無調整　内：調整不明→黒色処理	図版 30-10	R239
3	土師器　坏	3 層	1/4	(15.2)	6.5	6.3	外：(口～体) ロクロナデ (底) 切り離し不明→ヘラケズリ　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 30-11	R232
4	土師器　手捏土器	3 層	2/5	(9.4)	7.7	4.8	外：(口～体) 調整不明 (底) 木葉痕　内：調整不明	図版 31-2	R236
5	土師器　手捏土器	3 層	完形	8.6	5.2	5.4	外：(口) ヨコナデ (体) ナデ・オサエ (底) 木葉痕　内：(口) ヨコナデ (体～底) ナデ	図版 31-1	R224
6	土師器　甕	3 層	2/7	(13.2)	(7.0)	8.4	外：(口) ヨコナデ (胴～底) ヘラケズリ　内：(口) ヨコナデ (胴～底) ナデ	図版 30-2	R247
7	土師器　甕	3 層	6/7	15.1	(9.4)	16.6	外：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ→ナデ (底) 木葉痕　内：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ (底) ナデ	図版 30-3	R225
8	土師器　甕	3 層	口縁部	(21.4)		(9.8)	外：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ　内：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ→ヘラナデ	図版 30-4	R242
9	土師器　甑	3 層	3/4	(29.8)	14.2	24.5	外：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ→把手貼付　内：ハケメ→ヘラナデ　孔径 11.6cm	図版 31-4	R248

第 16 図　SD3 大溝跡　出土遺物 (3)



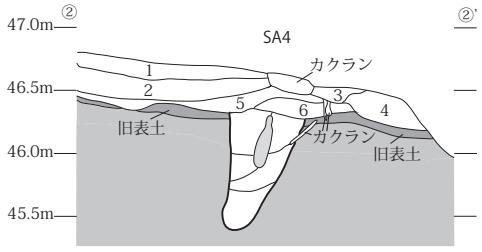
No.	器種	層	残存	特徴	写真図版	登録番号
1	須恵器　長頸甕	1 層	(胴~底)2/3	器高 (17.2cm)　外：(口～胴) ロクロナデ (胴下端) 手持ちヘラケズリ (底) ナデ　内：ロクロナデ	図版 31-5	R244
2	土師器　坏	1 層	1/4	口径 (14.6cm)　底径 (6.4cm)　器高 5.9cm　外：(口～体) ロクロナデ調整不明 (底) 切り離し不明→ヘラケズリ 内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 31-3	R234
3	鉄製品　刀子	堆	3/4	破損　長 (11.5cm)　重量（13.8g）　刃部幅（1.4cm）　刃部厚（0.2 ～ 0.3cm）　茎部幅（0.9cm） 茎部厚（0.3cm）　両関　茎部有機質残存	図版 31-6	鉄器 11
4	鉄製品　工具？	3 層	先端部	破損　長 (5.0cm)　幅（0.7cm）　厚（0.5cm）　重量（3.9g）	図版 31-7	鉄器 12

第 17 図　SD3 大溝跡　出土遺物 (4)



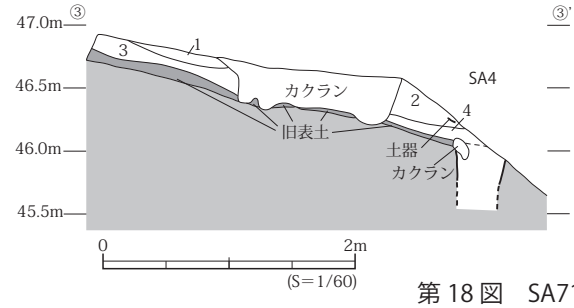
①-①'

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	粘性、しまりややあり、炭化物片をわずかに、地山小ブロック・ブロックを多量に含む	人為堆積



②-②'

層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭化物、焼土を少量含む	自然堆積
2	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む	
3	褐色 (10YR4/6)	シルト		
4	褐色 (10YR4/4)	シルト		
5	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	地山小ブロックを多量に含む	整地層 (SX14 整地層か)
6	褐色 (10YR4/6)	シルト	5 層より地山ブロックを多量に含む	



③-③'

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト		自然堆積
2	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む	
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	旧表土・地山ブロックを多量に含む	整地層 (SX14 整地層か)
4	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山ブロックを多量に含む	

第 18 図　SA71・4 材木塀跡　断面

2）竪穴建物跡

A 区で 2 棟（SI56・63）、B 区で 10 棟（SI8 ～ 10・13・15・17 ～ 21）の調査を行った（第 5 図）。

【SI56 竪穴建物跡】（平・断面図：第 19 図、出土遺物：第 20 図）

〔**位置・検出**〕A 区北辺の東側に位置し、標高 48 ～ 49m の北東側に傾斜する緩斜面上に立地する。北辺の大部分がカクランにより壊されている。東辺北側は掘方埋土のみの検出である。床面施設の検出と一部の精査を行った。

〔**平面形・規模**〕長方形で、規模は南北 5.7m、東西 7.0m である。

〔**方向**〕西辺でみると北で東に 5°偏る。

〔**壁**〕地山を壁とし、西辺では床面からほぼ垂直に、南辺では床面からやや外側に傾斜して立ち上がる。高さは、最も残りの良い西辺で床面から 45cm である。

〔**床面**〕掘方埋土を床面としている。西辺側が高く、東辺側に向かって標高を下げながら緩やかに傾斜する。

〔**炉**〕中央で焼面 5 ヶ所 (Y1 ～ 5) を検出した。規模は、Y1 が長軸 117cm、短軸 81cm、Y2 が長軸 61cm、短軸 31cm、Y3 が長軸 114cm、短軸 65cm、Y4 が長軸 33cm、短軸 24cm、Y5 が長軸 14cm、短軸 5cm である。

〔**周溝**〕西辺と、南辺の西側 3/4、北辺の一部で検出した。上幅 10 ～ 32cm、精査を行った部分では下幅 3cm、深さ 11cm、断面は「U」字形である。堆積土は自然堆積である。

〔**その他**〕主柱穴は未確認であるが、ピット 3 個 (P1 ～ 3) を検出した。P1 は北西部、P2 は南西部、P3 は南東部に位置し、P1 は長軸 105cm、短軸 75cm の不整形、P2 は径 29cm の円形、P3 は長軸 69cm、短軸 56cm の楕円形である。

〔**堆積土**〕5 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**出土遺物**〕4 層から土師器高坏（第 20 図 1）、壺（2）、4・5 層から甕（3）が出土した。

【SI63 竪穴建物跡】（平・断面図：第 21 図、出土遺物：第 22 図）

〔**位置・検出**〕A 区北辺の中央に位置し、標高 48 ～ 49m の北東側に傾斜する緩斜面上に立地する。北西隅がカクランによって壊されている。周溝については精査を、それ以外の床面施設については検出まで行った。

〔**平面形・規模**〕方形で、規模は南北 5.0m、東西 4.8m である。

〔**方向**〕東辺でみると北で東に約 14°偏る。

〔**壁**〕地山を壁とし、床面から垂直に立ち上がる。高さは、最も残りの良い南辺で床面から 49cm である。

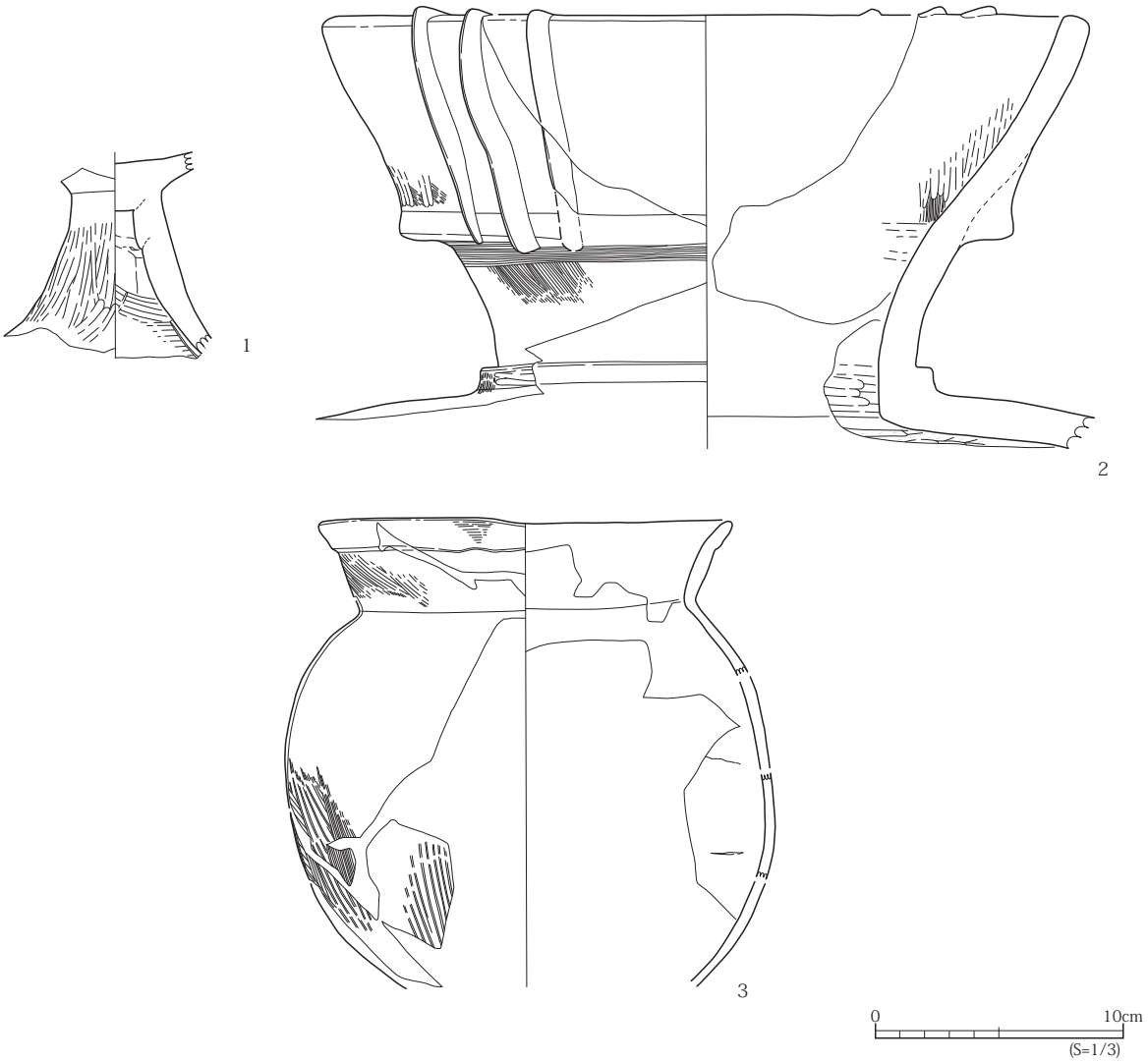
〔**床面**〕掘方埋土を床面としている。南西から北東へ向かって標高を下げながらわずかに傾斜しており、両者の高低差は最大 14cm である。

〔**主柱穴**〕4 個（P1 ～ 4）検出した。楕円形、円形で、掘方の規模は長軸 41 ～ 48cm、短軸 38 ～ 41cm である。P1 では柱痕跡が確認され、径 20cm の円形である。

〔**炉**〕中央西寄りで焼面 2 ヶ所（Y1・2）を検出した。規模は Y1 が長軸 88cm、短軸 55cm、Y2 が

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物をごくわずかに含む	自然堆積
2	褐色 (10YR4/4)	シルト質粘土	焼土粒・ブロック、地山粒・小ブロックをわずかに含む	
3	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭化物をわずか、地山粒・小ブロック・ブロックごくわずかに含む	
4	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	暗褐色 (10YR3/3) シルト小ブロック・ブロック、炭化物をわずかに、地山小～大ブロックを多量に含む	
5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	炭化物、地山粒・小ブロック・ブロックを少量含む	
6	褐色 (10YR4/4)	シルト質粘土	地山小ブロック・ブロックを含む	周溝堆積土

第 19 図　SI56 竪穴建物跡



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　高坏	4 層	(脚)2/3			(8.4)	外：(体) 調整不明 (脚) ヘラミガキ　内：(体) 調整不明 (脚) ナデ　脚部中空	図版 32-1	R189
2	土師器　壺	4 層	(口)1/4	(29.8)		(17.8)	外：(口) ハケメ→ヘラミガキ→ 3 条 1 単位棒状浮文貼付 (頸) ハケメ→ナデ、ヘラミガキ、基部に 1 条突帯 (体) 調整不明　内：(口～頸) ハケメ→ヘラミガキ (体) ヘラケズリ→ナデ　二重口縁	図版 32-2	R188
3	土師器　甕	4・5 層	2/5	16.7		(19.1)	外：(口) ナデ (頸) 細かいハケメ (体) 粗いハケメ　内：調整不明　複合口縁	図版 32-3	R190

第 20 図　SI56 竪穴建物跡　出土遺物

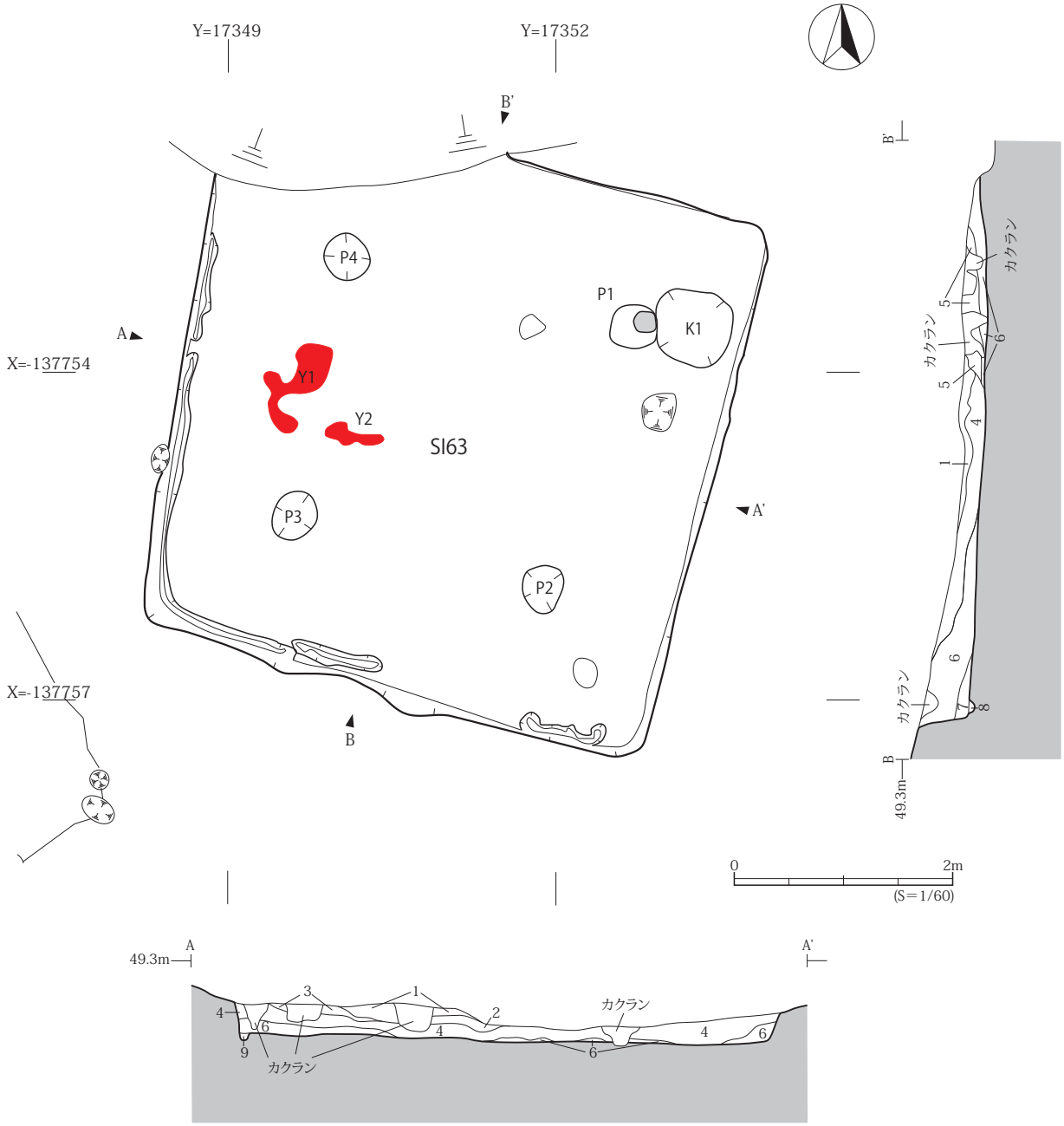
長軸 55cm、短軸 21cm である。

〔**周溝**〕西辺の南側 3/4 と南辺の中央から西側、東側の一部で検出した。上幅 14 ～ 20cm、下幅 2 ～ 5cm、深さ 4 ～ 15cm、断面は「U」字形である。堆積土は自然堆積である。

〔**土坑**〕1 基（K1）検出した。北東隅に位置し、東西方向に長軸を持つ隅丸方形である。規模は長軸、短軸ともに 70cm である。

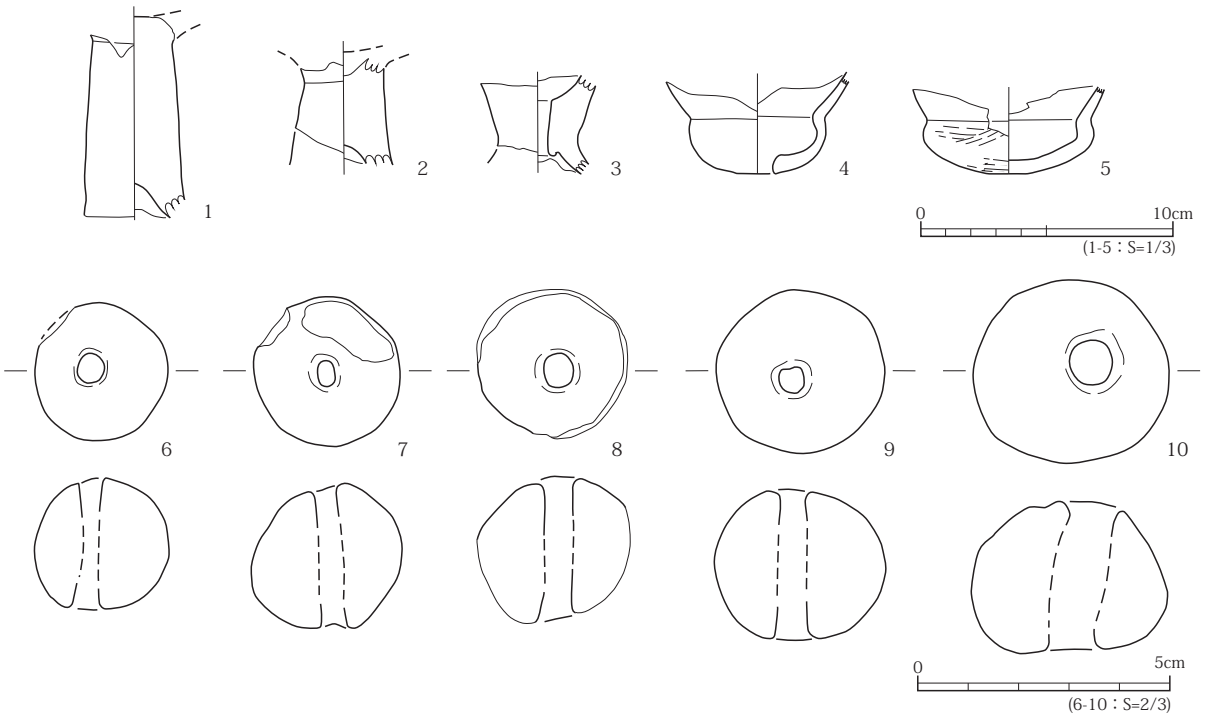
〔**堆積土**〕7 層に分かれ、いずれも自然堆積である。2 層には灰白色火山灰ブロック、7 層には焼土が含まれる。

〔**出土遺物**〕床面から土師器壺、堆積土から高坏（第 22 図 1・2）、器台（3）、鉢（4・5）、土製品（6 ～ 10）が出土した。



層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	灰白色火山灰ブロックをわずかに含む	自然堆積
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	灰白色火山灰ブロックを多量に含む	
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	黒褐色土をわずかに含む	
4	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロックをわずかに含む	
5	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	炭化物をわずかに含む	
6	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	地山ブロックを少量含む	
7	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む	
8	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロックをやや多く含む	周溝堆積土
9	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロックをわずかに含む	

第 21 図　SI63 竪穴建物跡



No.	器種	層	残存	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　高坏	3 ～ 5 層	(脚)2/3	器高 (8.1cm)　外・内：調整不明　脚部上部中実	図版 32-4	R207
2	土師器　高坏	3 ～ 5 層	(脚)1/3	器高 (4.7cm)　外・内：調整不明　脚部上部中実	図版 32-5	R210
3	土師器　器台	3 層	(脚)1/5	器高 (3.9cm)　外・内：調整不明	図版 32-6	R208
4	土師器　鉢	3 ～ 5 層	1/4	器高 (4.0cm)　外：(口～体) 調整不明 (底) 穿孔　内：調整不明　孔径 1.4cm	図版 32-7	R199
5	土師器　鉢	1・3 ～ 6 層	2/5	器高 (3.5cm)　外：(頸) 調整不明 (体) ヘラケズリ→ヘラミガキ　内：調整不明	図版 32-8	R204
6	土製品　土玉	3 ～ 5 層	ほぼ完形	最大径 2.7cm　器高 2.6cm　孔径 0.5 ～ 0.7cm	図版 32-9	R197
7	土製品　土玉	6 層	ほぼ完形	最大径 3.2cm　器高 2.9cm　孔径 0.8cm	図版 32-12	R196
8	土製品　土玉	P2 確認面	ほぼ完形	最大径 (3.0cm)　器高 (2.9cm)　孔径 0.9cm	図版 32-13	R322
9	土製品　土玉	3 ～ 5 層	ほぼ完形	最大径 3.0cm　器高 2.9cm　孔径 0.8cm	図版 32-10	R198
10	土製品　土玉	3 ～ 5 層	ほぼ完形	最大径 3.8cm　器高 3.1cm　孔径 1.2 ～ 1.3cm	図版 32-11	R206

第 22 図　SI63 竪穴建物跡　出土遺物

【SI8 竪穴建物跡】（平・断面図：第 23 図、炭化材の分布：第 24 図、出土遺物：第 25・26 図）

〔**位置・検出**〕B 区西端に位置し、標高 46 ～ 47m の丘陵尾根の先端から南側に傾斜する緩斜面上に立地する。南西部が SI5 竪穴建物跡により壊されている。床面施設の検出と、一部で精査を行った。床面と床面直上層から炭化材が検出され、床面直上層には焼土や炭化物が多く含まれていることから焼失竪穴建物跡と考えられる。

〔**重複**〕SI5 竪穴建物跡、SB42 掘立柱建物跡と重複し、これらより古い。

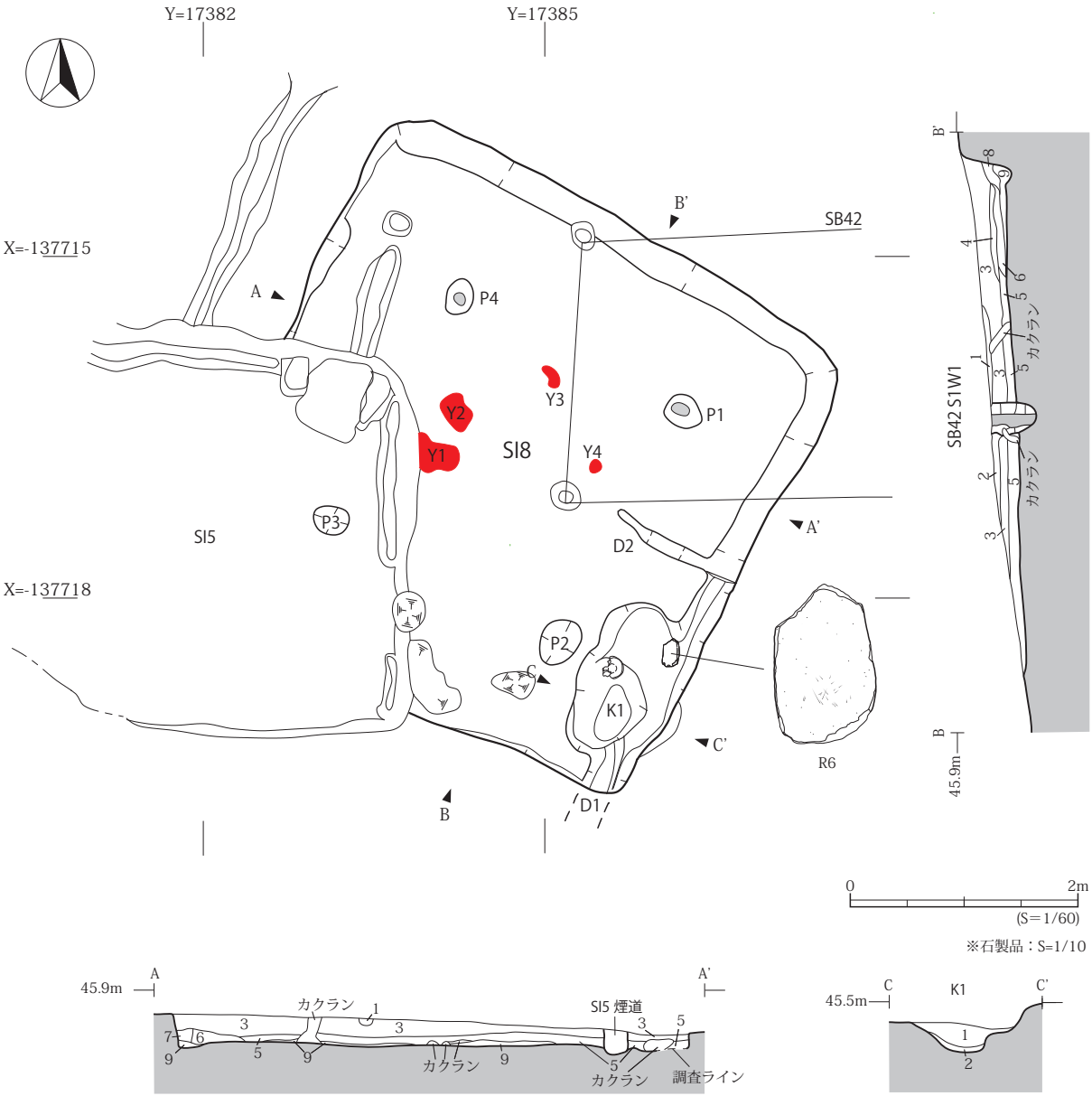
〔**平面形・規模**〕方形で、南北 4.4m、東西 4.5m である。

〔**方向**〕東辺でみると北で東に約 27°偏る。

〔**壁**〕地山を壁とし、床面から急角度で立ち上がる。高さは、最も残りの良い北辺中央で床面から 40㎝である。

〔**床面**〕掘方埋土を床面としている。東西方向はほぼ平坦で、南北方向は北側から南側へ標高を下げながら緩やかに傾斜し、両者の高低差は 26㎝である。

〔**主柱穴**〕4 個（P1 ～ P4）検出した。いずれも楕円形で、掘方の規模は長軸 30 ～ 45cm、短軸 22 ～ 32cm である。P1・4 では柱痕跡が確認され、長軸 10 ～ 15cm の楕円形である。



A-A'、B-B'

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒をわずかに含む	自然堆積
2	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山粒・小ブロックを多量に含む	
3	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭化物、焼土をわずかに、地山粒を多量含む	
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物を少量、地山小ブロックをわずかに含む	
5	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	炭化物、焼土、地山粒を含む	
6	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山小ブロック・ブロックを多量に含む	
7	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロック少量、炭化物を含む	
8	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロック・ブロックを少量含む	
9	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	炭化物、焼土、地山小ブロックを多量に含む	火災による堆積土

K1（C-C'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土をわずかに、炭化物、地山粒を少量含む	自然堆積
2	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭化物をわずかに、地山粒を少量含む	

第 23 図　SI8 竪穴建物跡

SI8 炭化材属性表

No.	出土層	方向		残存	規模（cm）		備考	No.	出土層	方向		残存	規模（cm）		備考
					長	幅							長	幅	
1	9層上面	東西	水平	不良	26	7	垂木か	16	9層上面	南北	水平	不良	22	12	垂木か
2	床	北西 - 南東	水平	やや良	19	4	垂木か	17	9層上面	南北	水平	不良	10	7	垂木か
3	9層上面	北東 - 南西	水平	不良	14	5	横木か	18	床	東西	水平	不良	16	8	横木か
4	9層上面	南北	水平	不良	120	9	垂木か	19	床	北東 - 南西	水平	不良	8	3	垂木か
5	床	東西	水平	不良	24	5	横木か	20	床	北東 - 南西	水平	不良	23	3	垂木か
6	床	南北	水平	不良	15	6	垂木か	21	床	北東 - 南西	水平	不良	14	4	垂木か
7	床	東西	水平	不良	16	6	横木か	22	床	北東 - 南西	水平	不良	19	3	垂木か
8	9層上面	東西	水平	不良	22	7	横木か	23	9層上面	東西	水平	不良	11	6	
9	床	東西	水平	不良	17	5	横木か	24	9層上面	南北	水平	不良	14	5	
10	9層上面	南北	水平	不良	22	7	横木か	25	9層上面	北東 - 南西	水平	不良	13	8	垂木か
11	9層上面	南北	水平	不良	22	5	垂木か	26	9層上面	南北	水平	不良	12	3	垂木か
12	9層上面	南北	水平	不良	24	10	垂木か	27	9層上面	東西	水平	やや良	22	5	垂木か
13	9層上面	南北	水平	やや良	20	12	垂木か	28	9層上面	北東 - 南西	水平	やや良	20	9	垂木か
14	9層上面	南北	水平	やや良	56	6	垂木か	29	9層上面	南北	水平	不良	17	6	垂木か
15	9層上面	南北	水平	不良	20	8	垂木か								

第 24 図　SI8 竪穴建物跡　炭化材の分布と属性

〔**炉・焼面**〕中央付近で焼面 4 ヶ所（Y1 ～ Y4）を検出した。規模は、Y1 が長軸 35cm、短軸 20cm、Y2 が長軸 30cm、短軸 20cm、Y3 が長軸 20cm、短軸 10cm、Y4 が径 10cm である。Y1 と Y2 は規模が大きく炉跡とみられる。

〔**周溝**〕北辺と東辺、西辺の一部で検出した。東辺の南端で K1 と接続する。上幅 20 ～ 25cm、精査を行った部分では、下幅 5 ～ 11cm、深さ 5 ～ 10cm である、断面は「U」字形である。周溝底面は K1 底面より浅く、高低差は 10cm である。堆積土は自然堆積である。

No.	器種	層	残存	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　手捏土器	3 層	(脚)4/5	器高 (3.5cm)　外・内：ナデ	図版 33-1	R3
2	土師器　高坏	3 ～ 6 層	(脚)1/3	器高 (6.5cm)　外：調整不明　内：(脚) ヘラナデ	図版 33-2	R4
3	土師器　壺	K1-1 層	(体)2/3	底径 3.7cm　器高 (11.3cm)　外：(体) 調整不明 (底) くぼみ底　内：(体) 調整不明 (底) ヘラナデ	図版 33-3	R5
4	石製品　砥石	3 層	破損	長 (16.7cm)　幅 (9.8cm)　厚 (8.0cm)　重量 (1,840g)　頁岩製　砥面 6 面	図版 33-5	R7
5	石製品　砥石	床	破損	長 (12.2cm)　幅 (8.8cm)　厚 (3.1cm)　重量 (520g)　砂岩製　砥面 3 面	図版 34-1	R8
6	石器　磨＋敲石	床	完形	長 7.8cm　幅 6.1cm　厚 3.9cm　重量 277.0g　頁岩製　全面磨面　表裏・側面に敲打痕	図版 34-2	R9

第 25 図　SI8 竪穴建物跡　出土遺物 (1)

※トーンは磨面

（単位：cm）

No.	器種	層	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	特徴	写真図版	登録番号
1	石製品　砥石	1 層	(23.3)	(14.8)	(7.4)	(4,330)	破損　砂岩製　砥面 4 面	図版 33-4	R6

第 26 図　SI8 竪穴建物跡　出土遺物 (2)

〔**土坑**〕1 基（K1）検出した。南東部に位置し、北端が東辺の周溝、南端が D1 と接続している。南北方向に長軸を持つ楕円形で、南側が一段深くなる。全体の規模は、長軸 145cm、短軸 70cm である。南側は長軸 80cm、短軸 50cm の楕円形状にくぼみ、深さは床面から 26cm で、その北側から東側にかけて底面から 16cm の位置に、幅 65cm、奥行き 55cm、床面からの深さ 10cm の緩斜面が認められる。K1 底面は D1 底面より深く、高低差は 2.6 ～ 3.6cm である。

〔**溝**〕2 条（D1・2）検出した。D1 は南東隅に位置する南北方向の溝跡で、建物跡南東隅から外側に延びている。精査を行った部分では検出長 40cm、上幅 25cm、下幅 7 ～ 15cm、深さ 6 ～ 12cm である。延長部分については未検出である。

D2 は東辺中央に位置する東西方向の溝跡で、東端は周溝に接続する。検出長 90cm、上幅 5 ～ 13cm である。

〔**炭化材**〕9 層上面と床面で検出され、29 点を記録した（第 24 図）。北側を中心に分布し、各辺に直交・斜交するもの（炭 1・2・4 ～ 6・11 ～ 17・19 ～ 22・25 ～ 29）、並行するもの（炭 3・5・7 ～ 10・18）がある。

〔**堆積土**〕9 層に分かれ、いずれも自然堆積である。6 ～ 8 層は地山ブロックを多く含み、北・東壁際と中央部に分布する。9 層には焼土や炭化物が多く含まれている。

〔**出土遺物**〕床面から砥石（第 25 図 5）と磨＋敲石（6）、K1 の 1 層から土師器壺（第 25 図 3）、堆積土から土師器高坏（2）、手捏土器（1）、砥石（第 25 図 4、第 26 図 1）が出土した。

【SI9 竪穴建物跡】（平・断面図：第 27 図、出土遺物：第 28 図）

〔**位置・検出**〕B 区北辺の西側に位置し、標高 46 ～ 48m の丘陵尾根上に立地する。北東部が SI34 竪穴建物跡、北西部と南西部、南辺がカクランにより壊されている。南西隅は掘方埋土のみの検出である。床面施設の検出と一部の精査を行った。

〔**重複**〕SB37 掘立柱建物跡、SI34 竪穴建物跡、SK35 土坑と重複し、これらより古い。

〔**平面形・規模**〕方形である。規模は、南北 5.9m、東西 6.4m である。

〔**方向**〕東辺でみると、北で西に 30°偏る。

〔**壁**〕地山を壁とし、床面からほぼ垂直に立ち上がる。高さは、最も残りの良い東辺で床面から 35cm である。

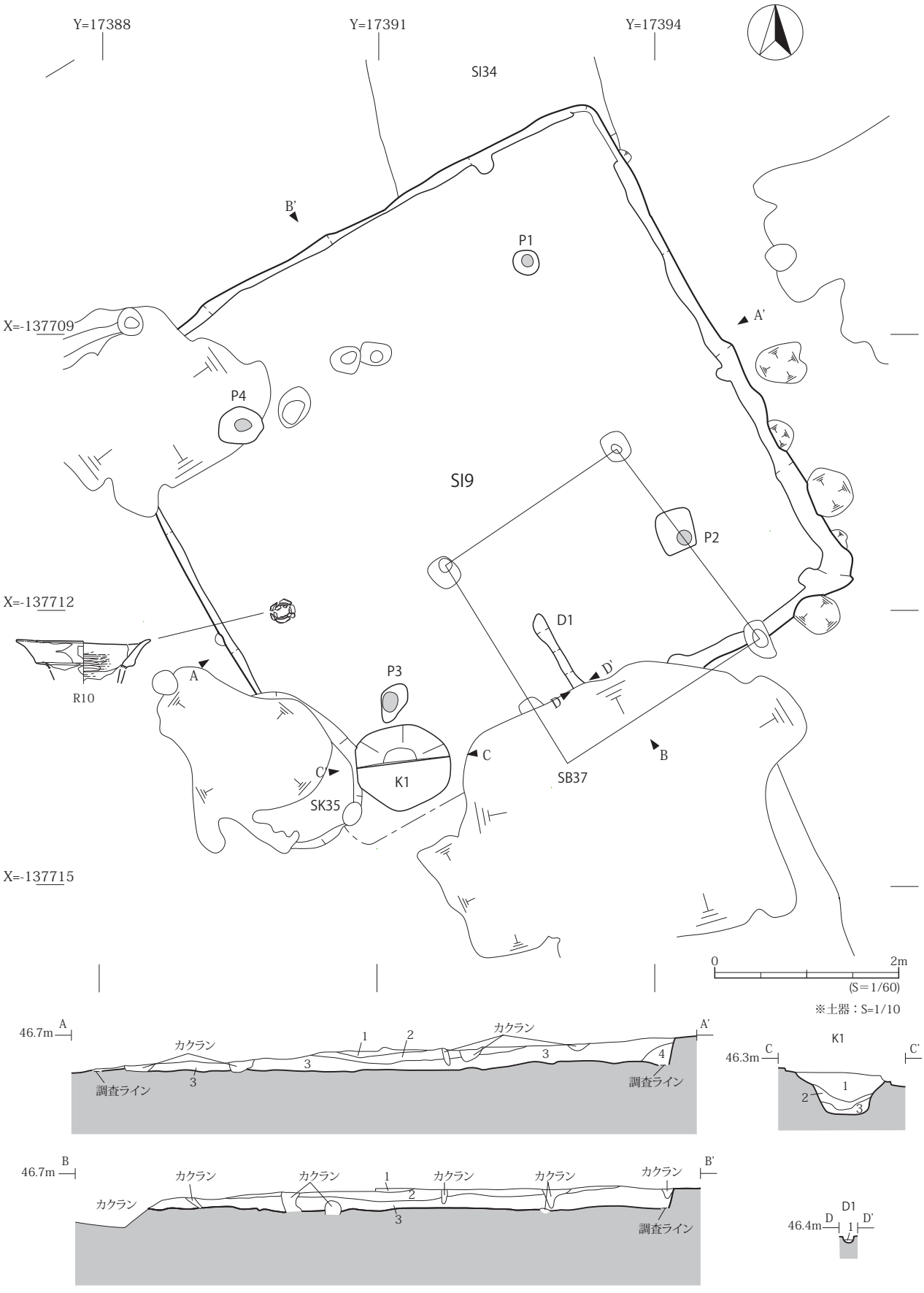
〔**床面**〕掘方埋土を床面としている。東辺中央の標高が高いが、それ以外はほぼ平坦である。

〔**主柱穴**〕4 個 (P1 ～ 4) 検出した。楕円形、隅丸方形で、掘方の規模は長軸 30 ～ 48cm、短軸 26 ～ 40cm である。すべての柱穴で柱痕跡を確認し、長軸 13 ～ 21cm の楕円形、円形である。

〔**周溝**〕北東隅と南西隅、SK35 とカクランによって壊されている西辺南側、北西隅と南辺中央から西側以外の範囲で検出した。上幅 4 ～ 29cm で、東辺と南辺の規模が大きい。

〔**土坑**〕1 基（K1）検出した。南西隅に位置し、東西方向に長軸を持つ楕円形で、規模は長軸 102cm、短軸 93cm、深さ 45cm である。断面は逆台形である。堆積土は 3 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**溝**〕1 条（D1）検出した。南辺中央に位置する南北方向の溝跡で、南端がカクランによって壊さ



第 27 図　SI9 竪穴建物跡

A-A'、B-B'

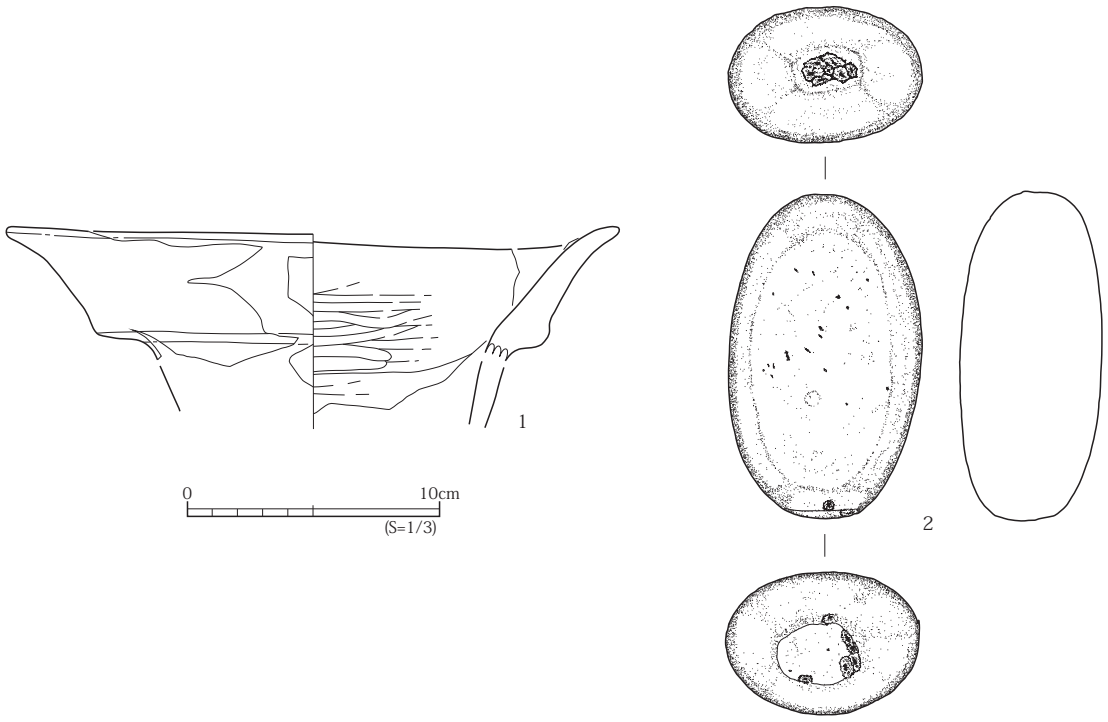
層	土色	土性	含有物など	備考
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒・小ブロックを少量含む	自然堆積
2	褐色 (10YR4/3)	シルト	地山粒・小ブロックを少量含む	
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物片・焼土粒、地山粒・小ブロックを少量含む	
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを多量に含む	

K1（C-C'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロックをごくわずかに含む	自然堆積
2	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	地山中ブロックをわずかに含む	
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	地山小ブロック・ブロックを多量に含む	

D1（D-D'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山小ブロックを少量含む	自然堆積



No.	器種	層	残存	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	3 層	口頸部	口径 24.0cm　器高 (7.9cm)　外：調整不明　内：ヘラミガキ　二重口縁	図版 34-3	R10
2	石器　磨＋敲石	床	完形	長 13.2cm　幅 7.8cm　厚 5.5cm　重量 780g　砂岩製　全面磨面　端部に敲打痕	図版 34-4	R14

第 28 図　SI9 竪穴建物跡　出土遺物

れている。検出長 90cm、上幅 5 ～ 8cm、確認できたところでは、下幅 5cm、深さ 3cm である。断面は「U」字形、堆積土は 1 層で、自然堆積である。

〔**堆積土**〕4 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**出土遺物**〕床面から磨＋敲石（第 28 図 2）、3 層の床面直上から土師器壺（1）、堆積土から土師器甕が出土した。壺は口縁部が逆位の状態で出土した。

【SI10 竪穴建物跡】（平・断面図：第 29 図、各平面図：第 30 ～ 32 図、出土遺物：第 33 ～ 41 図）

〔**位置・検出**〕B 区の北辺中央に位置し、標高 47 ～ 48m の丘陵頂部から北側と南西側に傾斜する緩斜面上に立地する。東辺中央がカクランによって壊されている。床面施設の精査まで行った。床面と床面直上層から炭化材が検出され、床面直上層には焼土や炭化物が多く含まれていることから焼失竪穴建物跡と考えられる。

〔**重複**〕北辺で SX11 と重複し、これより新しい。

〔**平面形・規模**〕長方形で、規模は南北 5.9m、東西 5.3m である。

〔**方向**〕西辺でみると北で西に約 24°偏る。

〔**壁**〕地山を壁とし、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。高さは、最も残りの良い東辺南側で床面から 48cm である。

〔**床面**〕掘方埋土を床面としている。床面には細かな凹凸がある。東側の約 1/3 の範囲の標高が高く、そこから最も標高の低い南西隅に向けて緩やかに傾斜する。

〔**主柱穴**〕4 個（P1 ～ 4）検出した。楕円形、円形で、掘方の規模は、長軸 34 ～ 50cm、短軸 32 ～ 40cm である。3 個（P1 ～ 3）で柱痕跡を確認し、長軸 18 ～ 20cm、短軸 14 ～ 16cm の楕円形である。

〔**炉・焼面**〕中央北寄りを中心に焼面 12 ヶ所（Y1 ～ 12）を検出した。Y1 ～ 4 は強く被熱して硬化し、Y5 は中央部分が 5cm くぼむ。規模は、Y1 が長軸 34cm、短軸 28cm、Y2 が長軸 42cm、短軸 32cm、Y3 が長軸・短軸 28cm、Y4 が長軸 36cm、短軸 20cm、Y5 が長軸 212cm、短軸 164cm、Y6 が長軸 34cm、短軸 14cm、Y7 が長軸 66cm、短軸 38cm、Y8 が長軸 30cm、短軸 26cm、Y9 が長軸 36cm、短軸 12cm、Y10 が長軸 32cm、短軸 20cm、Y11 が長軸 34cm、短軸 16cm、Y12 が長軸 18cm、短軸 14cm である。Y1 ～ Y4・7 と Y5 の一部は炉跡とみられる。

〔**周溝**〕西辺で一部途切れるが、それ以外では各辺で検出した。東辺が 1 度改修されている（A → B）。

A 期については、上幅 10 ～ 44cm、下幅 3 ～ 28cm、深さ 2 ～ 13cm である。断面は東辺が皿状、それ以外が「U」字形である。堆積土は自然堆積である。

B 期については、確認できたところで上幅 14cm、下幅 4cm、深さ 10cm、断面は「U」字形である。

東辺と南辺で規模が大きく、南辺では、中央付近で幅が変化し、東側が広く西側が狭い。西辺では、北端で幅が広いがそれより南側は急に幅が狭くなる。底面には凹凸があり、東辺の標高が最も高く南辺の西端、西辺の南端の標高が最も低い。堆積土はいずれも自然堆積である。

〔**土坑**〕1 基（K1）検出した。南西隅に位置する隅丸方形の土坑で、1 度改修されている（A → B）。

A 期は建物跡の南西隅の南・西壁に接している。規模は長軸 105cm、短軸 100cm で、深さは B 期の壁で確認でき、B 期と同程度である。人為的埋土で埋め戻されている。

B 期は位置を北東に移動して新たに造られている。北東隅で D1 と接続する。規模は長軸 96cm、短軸 94cm、深さ 55cm である。断面は漏斗形である。K1 底面は D1 底面より深く、高低差は 45cm である。堆積土はいずれも自然堆積で、1 層が火災後の堆積土、2 ～ 6 層が炭化物や焼土小ブロックを多く含む火災による堆積土、7 層が機能時の堆積土である。

〔**溝**〕2 条（D1・2）検出した。D1 は中央に位置する南北方向の溝跡で、平面形は西側に緩やかに湾曲する弧状となる。南端は土坑（K1・B 期）、北端はカクランによって壊されているが東辺周溝に接続するとみられる。南西の主柱穴である P3 の東端が掘りこまれて造られている。規模は、上幅 8 ～ 24cm、下幅 2 ～ 14cm、深さ 10 ～ 12cm である。断面は「U」字形である。底面には細かな凹凸があるが、概ね北から南にむかって標高を下げながら傾斜する。堆積土は自然堆積で、北側では 1 層が地山ブロック主体層、2 層が炭化物層、3 層が炭化物、焼土を多く含む層、南側では 1・2 層ともに炭化物、焼土を多く含む層である。

第 29 図　SI10 竪穴建物跡

A-A'、B-B'

層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト		自然堆積
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロックを少量、炭化物粒・片を含む	
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物片、焼土粒を含む	
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物粒、焼土粒、地山粒を少量含む	
5	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	しまりあり、地山小ブロックを多量に含む	屋根材崩壊土
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりあり、地山粒・小ブロックを多量、炭化物片を多量、焼土粒・小ブロックを多量に含む	
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土粒を含む	焼土塊層（被熱した屋根材）
8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土粒・小ブロック・ブロックを非常に多く含む	
9	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物粒、焼土粒、地山小ブロックを多量に含む	火災による堆積土
10	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックをやや多く含む	
11	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒・片、地山粒を含む	
12	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	焼土小ブロックを多量に含む	B 期周溝堆積土
13	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物粒、地山粒を含む	
14	褐色 (10YR4/4)	シルト	焼土小ブロック、地山小ブロックを少量含む	
15	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土質シルト	地山粒・小ブロックをやや多く含む	
16	褐色 (7.5YR4/6)	シルト	炭化物粒、焼土粒、地山粒を含む	A 期周溝堆積土
17	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土質シルト	地山粒・小ブロックをやや多く含む	
18	赤褐色 (2.5YR4/6)	シルト	焼土粒・魂を含む	炉機能時の堆積土

K1（C-C'、D-D'）

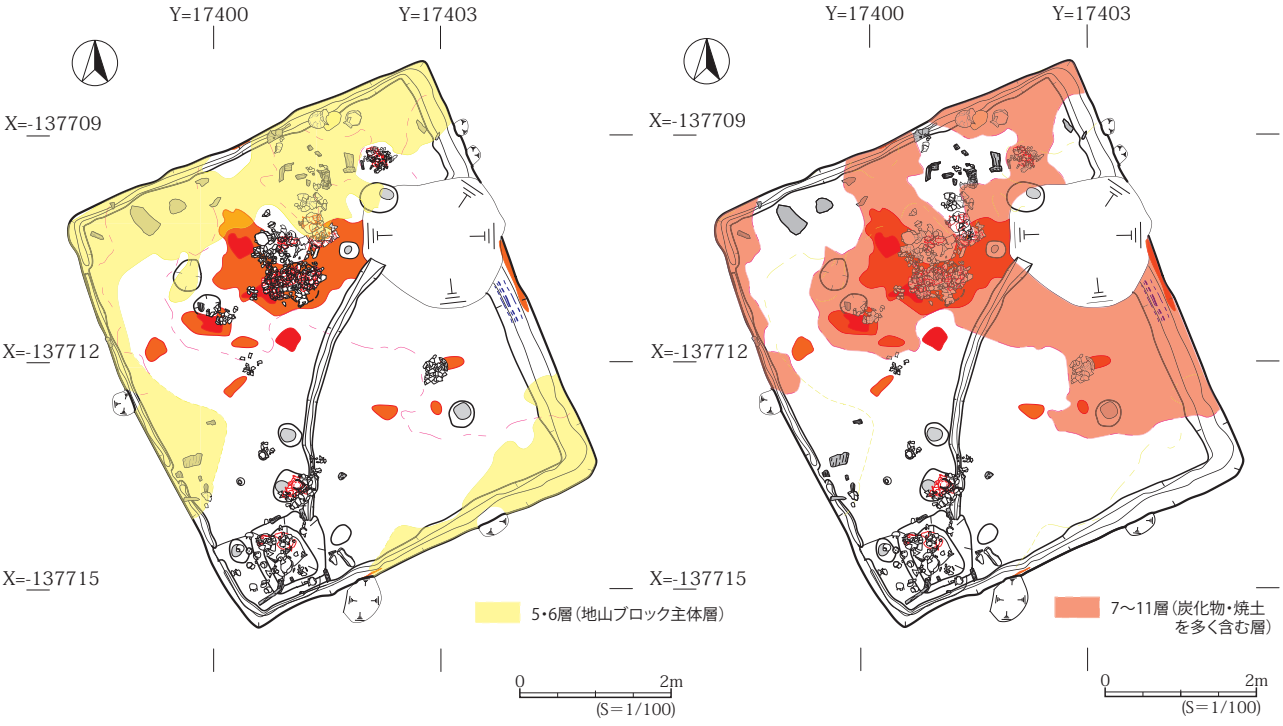
層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物粒・片、焼土粒、地山粒を含む	自然堆積
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物片、焼土粒・小ブロック、地山粒・小ブロックを多量に含む	火災による堆積土
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物粒、焼土粒を含む	
4	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物片を多量、焼土粒・小ブロック、地山粒を含む	
5	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒をわずかに、地山小ブロックを多量に含む	
6	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭化物片を多量に含む	
7	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	機能時の堆積土
①	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山粒を含む	竪穴建物堆積土

D1（E-E'）

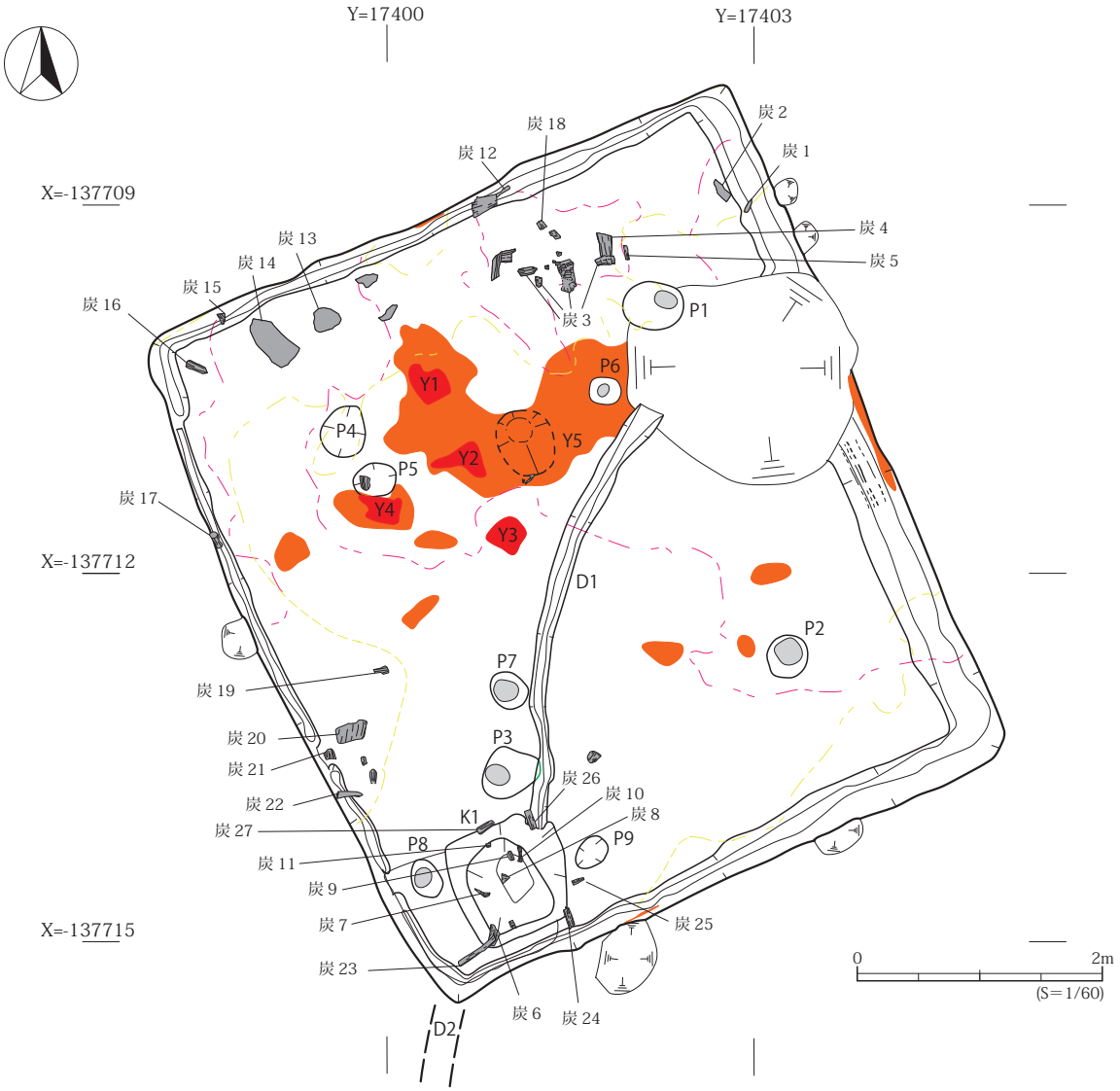
層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	焼土小ブロックを少量、地山小ブロックを多量に含む	屋根材崩壊土か
2	炭化物層			蓋材か
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物粒・片を多量、焼土粒、地山粒をわずかに含む	火災による堆積土

D1（F-F'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒、焼土粒を多量に含む	火災による堆積土
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物粒・片を多量、焼土粒、地山粒をわずかに含む	



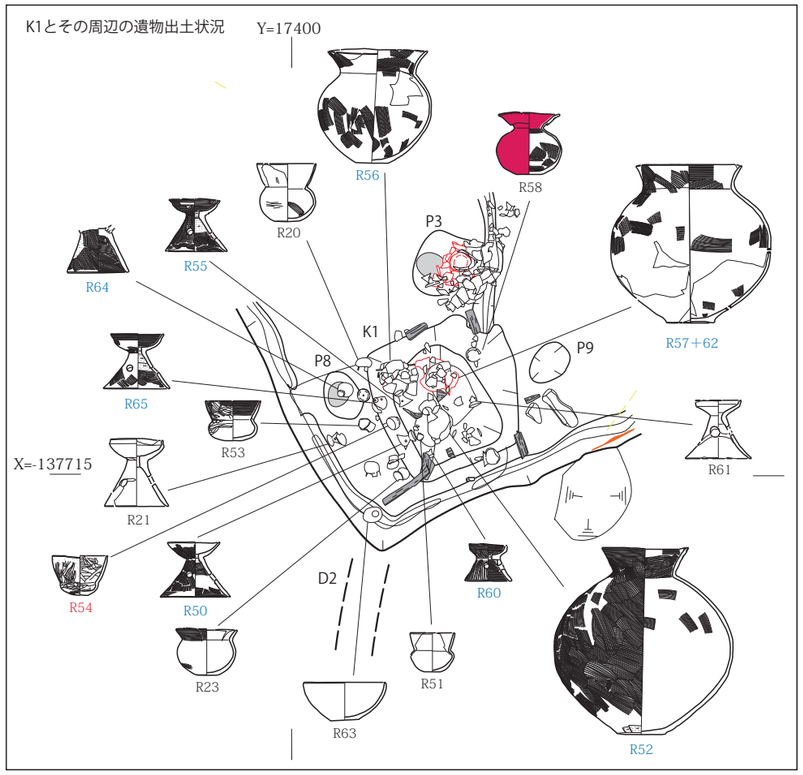
第 30 図　SI10 竪穴建物跡　地山ブロック主体層、炭化物・焼土を多く含む層の分布

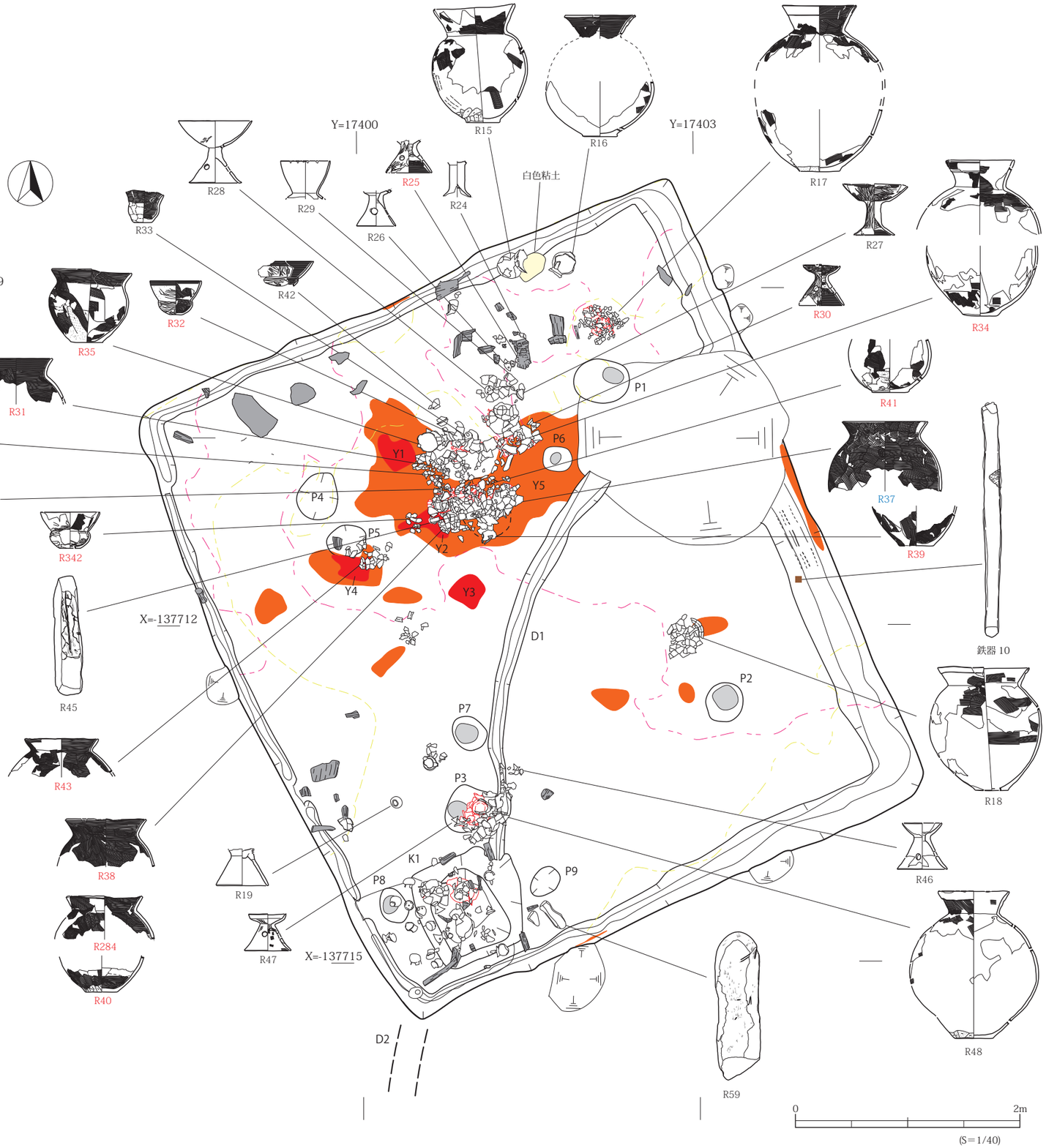


SI10 炭化材属性表

No.	出土層	方向		残存	規模（cm）		備考	No.	出土層	方向		残存	規模（cm）		備考
					長	幅							長	幅	
1	周溝上面	北東－南西	水平	良	11	5	垂木か	15	－	北西－南東	－	不良	10	5	垂木か
2	床	北西－南東	水平	不良	24	10	横木か	16	床	北西－南東	水平	良	16	6	垂木か
3	床	東西	水平	良	88	23	梁・桁材か	17	堆積土	北西－南東	斜位	良	14	6	横木か
4	床	南北	水平	良	44	－	垂木か	18	床	－	水平	不良	15	5	
5	床	南北	水平	やや良	13	3		19	床直上	北東－南西	水平	不良	23	5	垂木か
6	K1　2層中	南北	斜位	やや良	32	6	垂木か	20	床	－	水平	不良	15	17	
7	K1　2層中	北西－南東	斜位	－	27	－		21	床直上	南北	水平	不良	18	5	横木か
8	K1　2層中	－	斜位	やや良	10	11		22	床直上	東西	斜位	良	43	7	垂木か
9	K1　2層中	南北	水平	良	16	5		23	床直上	北東－南西	水平	不良	73	5	垂木か
10	K1　2層中	南北	斜位	やや良	25	7	垂木か	24	床直上	北西－南東	水平	やや良	34	5	垂木か
11	K1　2層中	東西	斜位	やや良	7	6	垂木か	25	周溝上面	北東－南西	水平	良	20	8	横木か
12	周溝上面	北東－南西	水平	不良	29	4	横木か	26	D1　1層上面	北西－南東	斜位	やや良	32	7	垂木か
13	床	－	－	不良	－	－	炭化物の集積	27	床	北東－南西	水平	良	31	6	垂木か
14	床	北西－南東	－	不良	－	－	炭化物の集積								

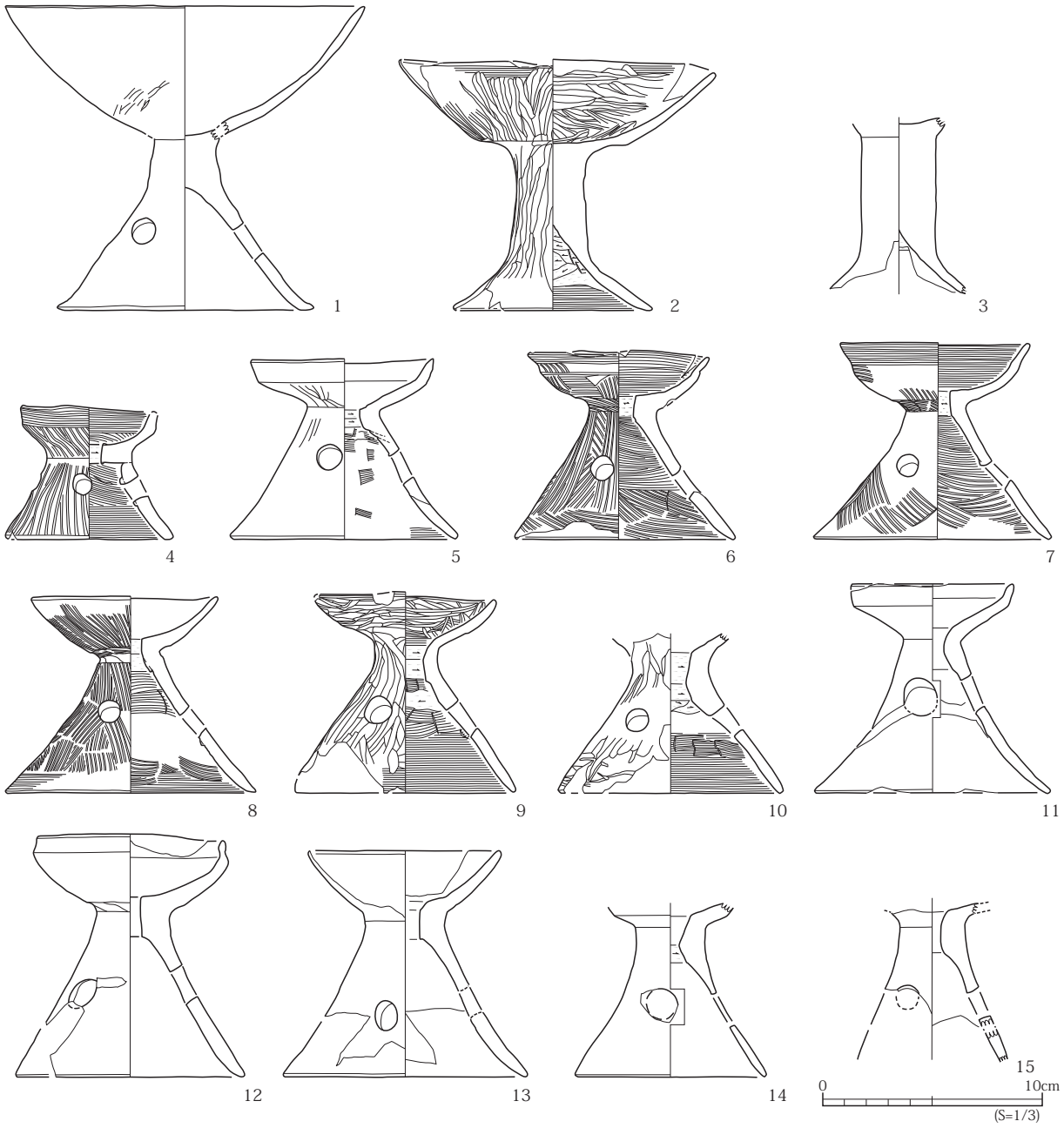
第 31 図　SI10 竪穴建物跡　炭化材の分布と属性





第 32 図　SI10 竪穴建物跡　遺物出土状況

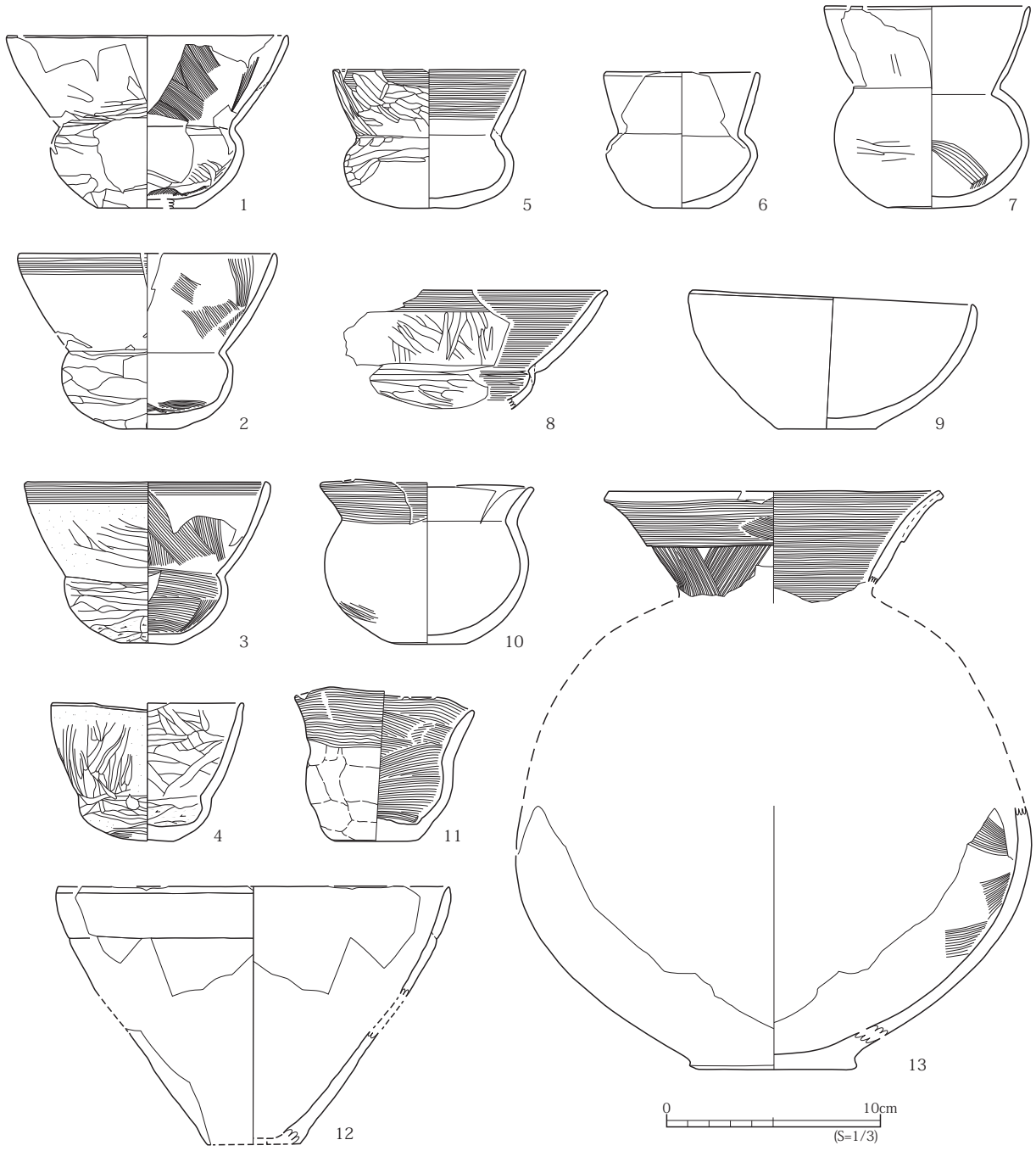
※土器・石製品：S=1/10、鉄製品：S=1/4　　※赤字：色調が灰白色の土器
青字：外面調整がハケメ主体の土器



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　高坏	床	(坏)1/3(脚)1/1	(16.4)	(13.8)	11.7	外：(坏) ヘラミガキ (脚) 調整不明　内：調整不明　全体に被熱　脚部上部中実	図版 35-1	R28
2	土師器　高坏	床	(坏)3/4(脚)1/1	14.4	11.4	9.0	外：(坏) 口縁ナデ→ヘラミガキ (脚) ヘラミガキ　内：(坏) 口縁ナデ→ヘラミガキ (脚) ナデ→ヘラケズリ　脚部上部中実	図版 35-2	R27
3	土師器　高坏	5 層	脚部			(7.4)	外：調整不明　内：ヘラケズリ　脚部上部中実	図版 35-3	R24
4	土師器　器台	K1-2 層	ほぼ完形	6.2	7.6	6.1	外:(受) ハケメ→ナデ (脚) ハケメ　内:(受) ナデ (脚) ナデ→貫通孔 (上→下)、円窓穿孔 (外→内)　円窓 4	図版 35-4	R60
5	土師器　器台	P3- 堆	完形	8.3	10.3	8.2	外：(受) ヘラミガキ　(脚) ヘラミガキ　内：(受) 調整不明 (脚) ナデ、ヘラナデ→貫通孔 (上→下) 穿孔→ナデ、円窓穿孔 (外→内)　円窓 3	図版 35-5	R47
6	土師器　器台	K1-2 層	ほぼ完形	8.2	10.4	8.6	外：(受) ハケメ→ナデ→ハケメ (脚) ハケメ　内：(受) ナデ (脚) ハケメ→ナデ→貫通孔 (上→下)、円窓穿孔 (外→内)　円窓 3	図版 35-6	R55
7	土師器　器台	K1-2 層	完形	8.6	10.8	8.9	外：(受) ハケメ→ナデ (脚) ハケメ　内：(受) ナデ (脚) ハケメ→ナデ→貫通孔 (上→下)、円窓穿孔 (外→内)　円窓 3　被熱	図版 35-7	R65
8	土師器　器台	K1-2 層	ほぼ完形	8.5	11.4	8.9	外：(受) ハケメ (脚) ハケメ、端部ナデ (受～脚) ハケメ→ヘラミガキ　内：(受) ナデ？ (脚) ヘラナデ、端部ハケメ→ナデ→ハケメ、ヘラケズリ→貫通孔 (上→下)、円窓穿孔 (外→内)　被熱　円窓 3	図版 35-8	R50
9	土師器　器台	床	ほぼ完形	8.3	10.0	9.1	外：ヘラミガキ　内：(受) 口縁ナデ→ヘラミガキ (脚) ナデ→一部ヘラケズリ→ヘラナデ→貫通孔 (上→下)、円窓穿孔 (外→内)　円窓 3　色調：灰白色	図版 35-9	R30
10	土師器　器台	床	脚部			(7.2)	外：(脚上部) ヘラミガキ　内：(脚) ナデ→ヘラナデ、ヘラケズリ→貫通孔 (上→下) →ヘラケズリ　円窓 3　色調：灰白色	図版 35-10	R25
11	土師器　器台	K1-2 層	(受)1/1(脚)1/4	5.4	(10.7)	(9.5)	外・内：調整不明　円窓 3	図版 35-11	R61
12	土師器　器台	K1-2 層	(受)1/1(脚)3/4	8.5	(10.4)	11.0	外：一部ヘラミガキ、それ以外調整不明　内：調整不明　円窓 3	図版 35-12	R21
13	土師器　器台	K1の1層の対応層	(受)1/5(脚)1/5	(8.8)	(10.1)	(10.3)	外・内：調整不明　被熱　円窓 3	図版 35-13	R46
14	土師器　器台	床	脚部		8.7	(7.9)	外：調整不明　内：ヘラケズリ→貫通孔穿孔 (上→下)　円窓 3	図版 35-14	R26
15	土師器　器台	10 層	脚部			(6.6)	外・内：調整不明　円窓 3　受部内面と脚部外面に一部赤彩	図版 35-15	R68

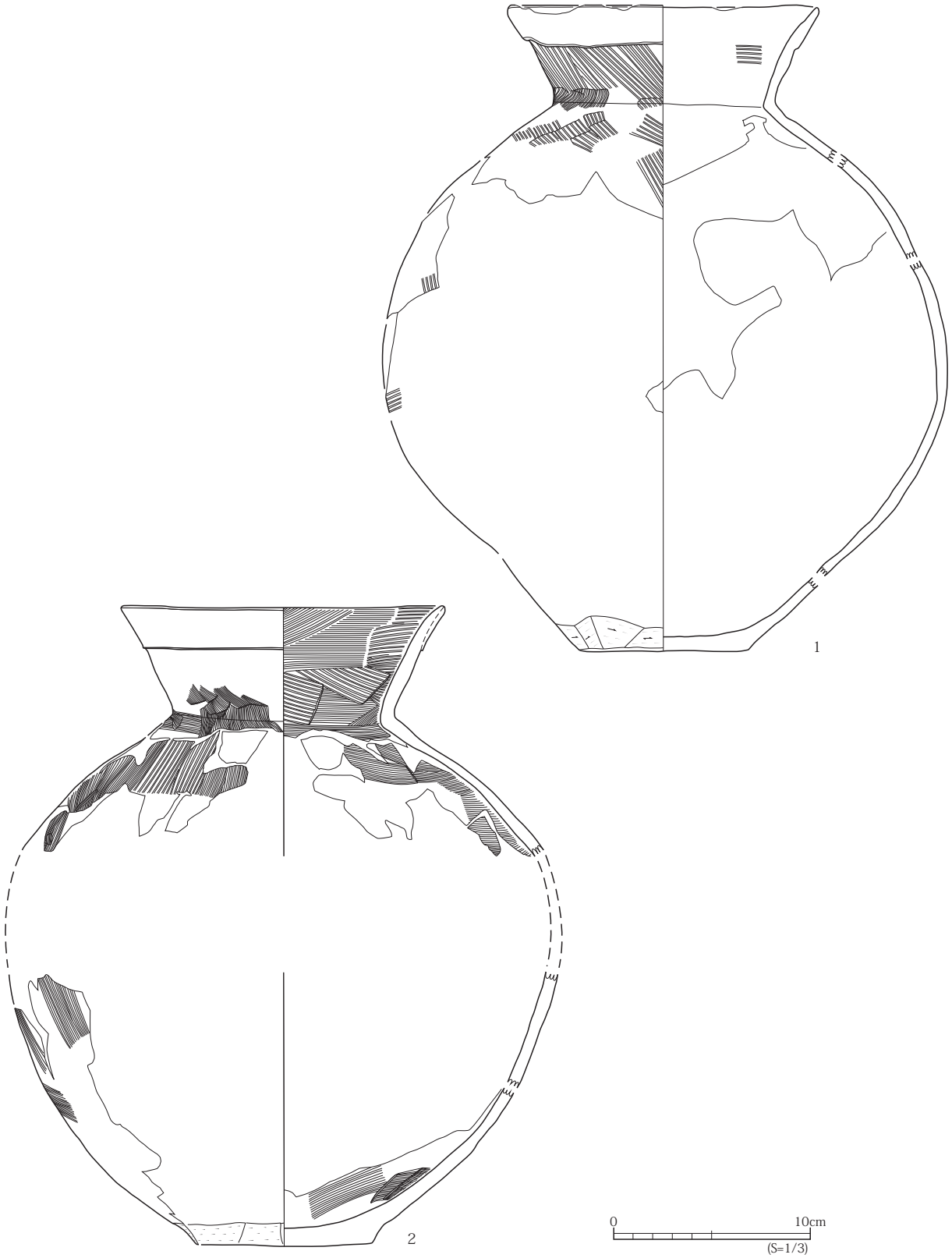
第 33 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物 (1)



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　鉢	床	(口)一部(体~底)1/4	(13.2)	(4.6)	(8.0)	外：(口~体)ヘラミガキ、粗いヘラミガキ 内：(口)ヘラナデ(体)ヘラミガキ→ヘラナデ　色調：灰白色	図版 36-1	R342
2	土師器　鉢	11 層	(口)1/4(体~底)1/1	(12.1)	2.6	8.2	外：(口)ヘラミガキ？(体)ヘラミガキ 内：(口)ヘラナデ(体~底)ヘラナデ　平底　色調：灰白色	図版 36-2	R36
3	土師器　鉢	8or11 層	(口)3/4(体~底)1/1	11.6	2.7	7.6	外：(口)ヘラミガキ→ナデ(体)ヘラミガキ→体下部にヘラケズリ 内：(口)ヘラナデ→ナデ(体)ナデ　平底　色調：灰白色	図版 36-3	R32
4	土師器　鉢	K1-2 層	ほぼ完形	9.0	2.3	6.4	外：ヘラミガキ　内：(体)ヘラケズリ→(口頸)ヘラミガキ　色調：灰白色	図版 36-4	R54
5	土師器　鉢	K1-2 層	(口)1/4(体)1/2(底)1/1	(9.0)	2.7	6.5	外：(口)ナデ→ヘラミガキ(体)ヘラミガキ 内：(口)ナデ(体~底)調整不明　平底	図版 36-5	R53
6	土師器　鉢	K1-2 層	(口)一部(体)3/4(底)1/1	(7.3)	2.6	6.3	外・内：調整不明　平底	図版 36-6	R51
7	土師器　鉢	K1-1 層	(口)一部(体~底)1/1	(9.6)	4.0	9.4	外：(口~体)ヘラミガキ　内：(口)不明(体)ヘラナデ　丸底	図版 36-7	R20
8	土師器　鉢	床	口縁部				外：ヘラミガキ→(口)ナデ　内：(口頸)ナデ(体)ヘラミガキ　両面黒色　胎土緻密	図版 36-11	R42
9	土師器　鉢	周溝上面	ほぼ完形	13.4	4.5	6.2	外・内：調整不明　平底	図版 36-9	R63
10	土師器　鉢	K1-1 層	(口)3/4(体)1/1	10.0	3.5	7.7	外：(口)ナデ(体)ヘラミガキ　内：調整不明　平底	図版 36-8	R23
11	土師器　鉢	11 層	完形	8.4	4.0	7.2	外：(口)ナデ(体)ヘラナデ？　内：(口~体)ナデ→ヘラナデ　平底	図版 36-10	R33
12	土師器　有孔鉢	K1-1 層	(口・体~底)一部	(18.4)			外：内：調整不明　複合口縁	図版 36-12	R344
13	土師器　壺	床	(口)1/1(体)1/6(底)1/1	17.8	7.8	(17.0)	外：(口)ハケメ→口縁粘土帯貼付→ナデ(体)調整不明 内：(口)ナデ(体)ヘラナデ　複合口縁	図版 36-13	R16

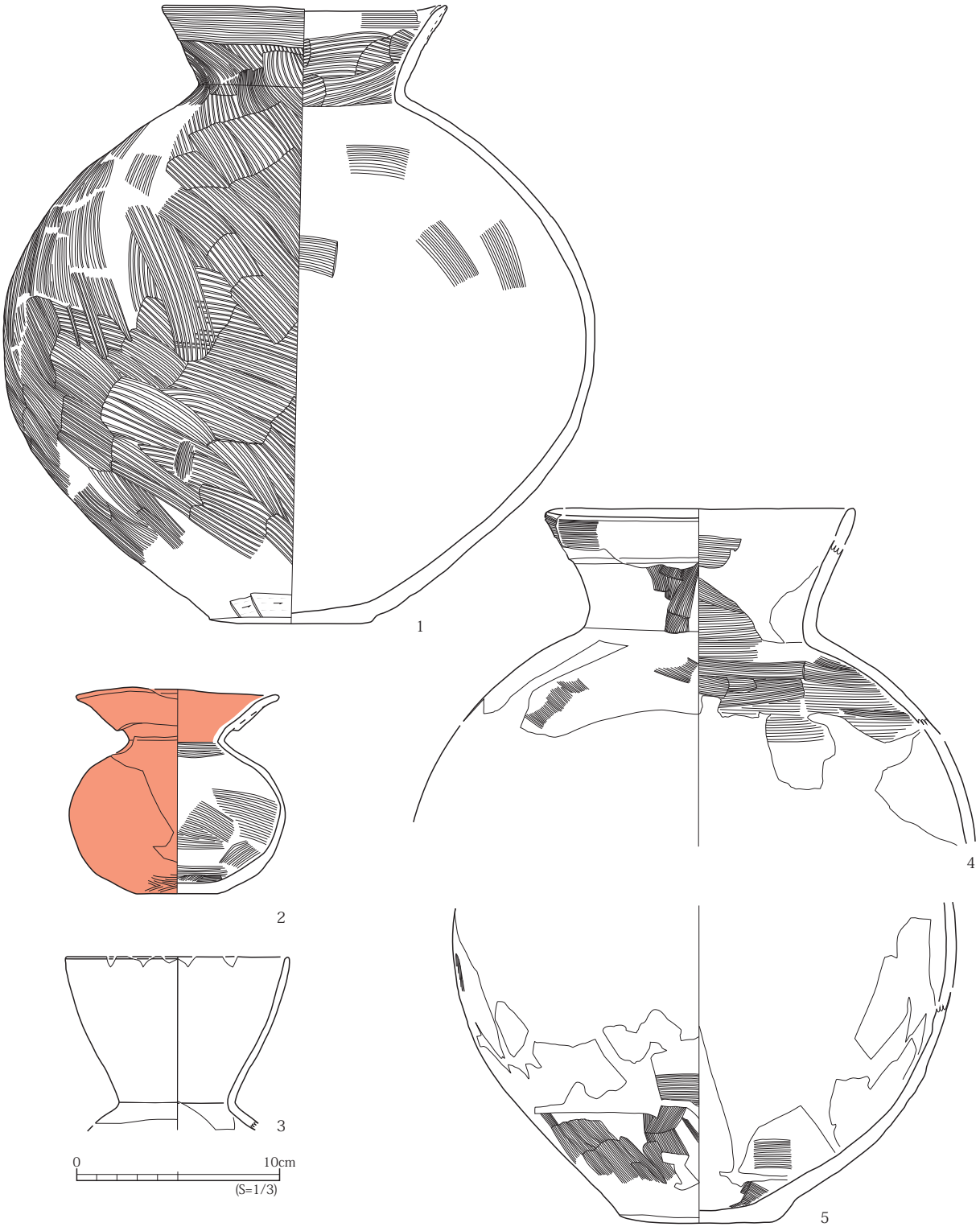
第 34 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（2）



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	P3・D1 堆・床直上・堆	(口)1/1(体)一部(底)1/1	15.8	8.6	(32.9)	外：(体上)ハケメ(体下)ヘラケズリ　内：(口)ハケメ(体)調整不明 複合口縁	図版 37-1	R48
2	土師器　壺	11 層	(口)3/4(体上)一部(体下)一部(底)3/4	16.4	8.9	(26.6)	外：(口)ナデ、ヘラナデ(体上)ハケメ、ヘラナデ(体下)ヘラナデ 内：(口)ヘラナデ→ハケメ→ナデ（体）ヘラナデ　複合口縁	図版 38-2	R17

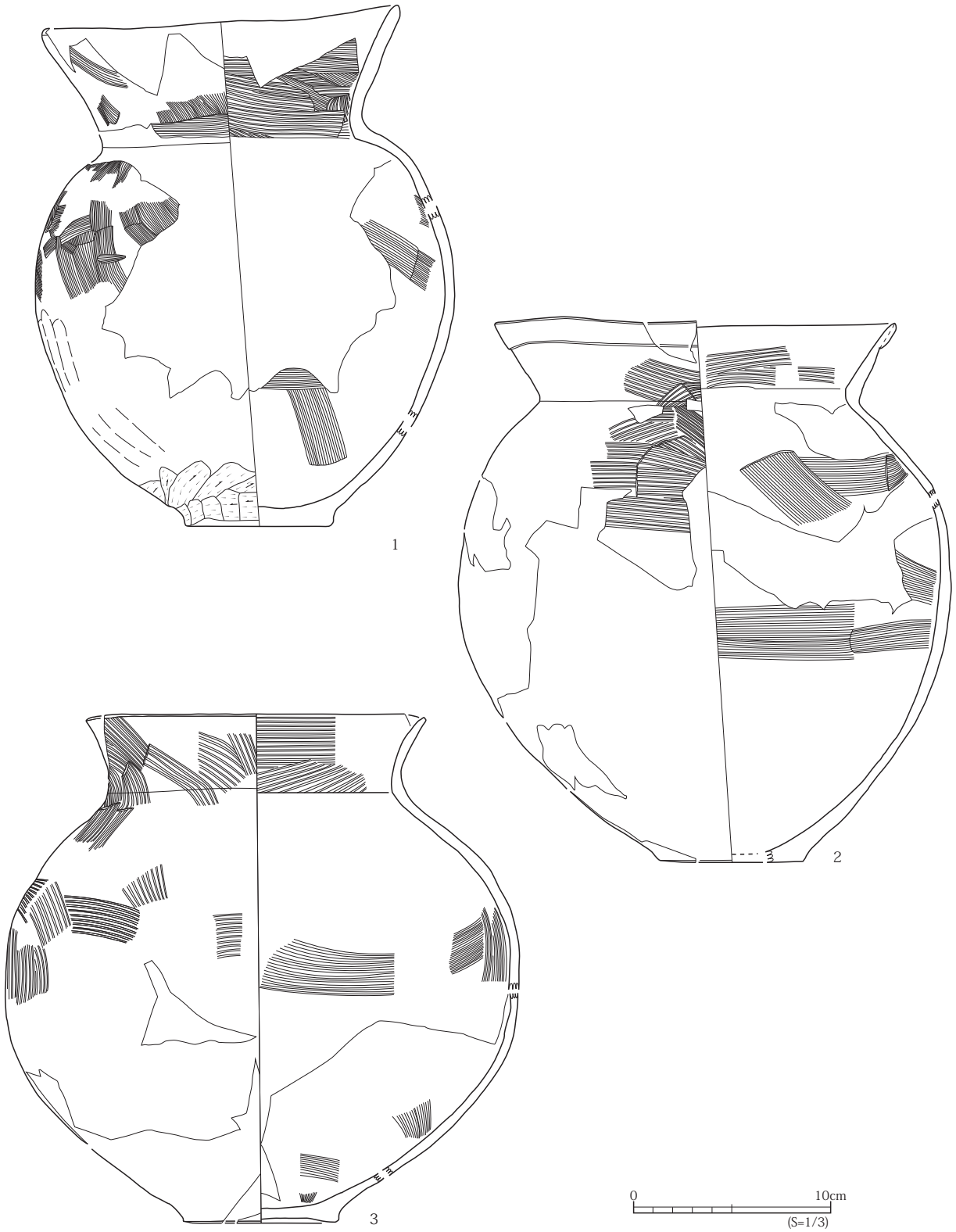
第 35 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（3）



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	K1-5 層	完形	14.0	8.0	30.4	外：(口～体) ハケメ→ (口) 粘土帯貼付→ナデ (体下部) ヘラケズリ 内：(口) ハケメ→ナデ (体) ヘラナデ　複合口縁	図版 38-1	R52
2	土師器　壺	K1-2 層	(口)1/2(体)1/2 (底)1/1	(10.0)	4.0	(10.1)	外：ヘラミガキ→赤彩　内：(口) ヘラミガキ？→赤彩　(体) ナデ→ヘラナデ　複合口縁	図版 37-2	R58
3	土師器　壺	床	(口)1/4(体)一部	(11.0)		(8.5)	外・内：調整不明	図版 37-3	R29
4	土師器　壺	床	(口)1/6(体上)1/2	(15.2)		(16.6)	外：(口) ヘラナデ、ナデ (体上) ヘラナデ　内：(口) ナデ (体上) ナデ→ヘラナデ　色調：灰白色　5 と接合しないが同一個体	図版 39-1a	R34
5	土師器　壺	床	(体下)2/3(底)1/1		7.8	(15.6)	外・内：ヘラナデ　色調：灰白色　4 と接合しないが同一個体	図版 39-1b	R34

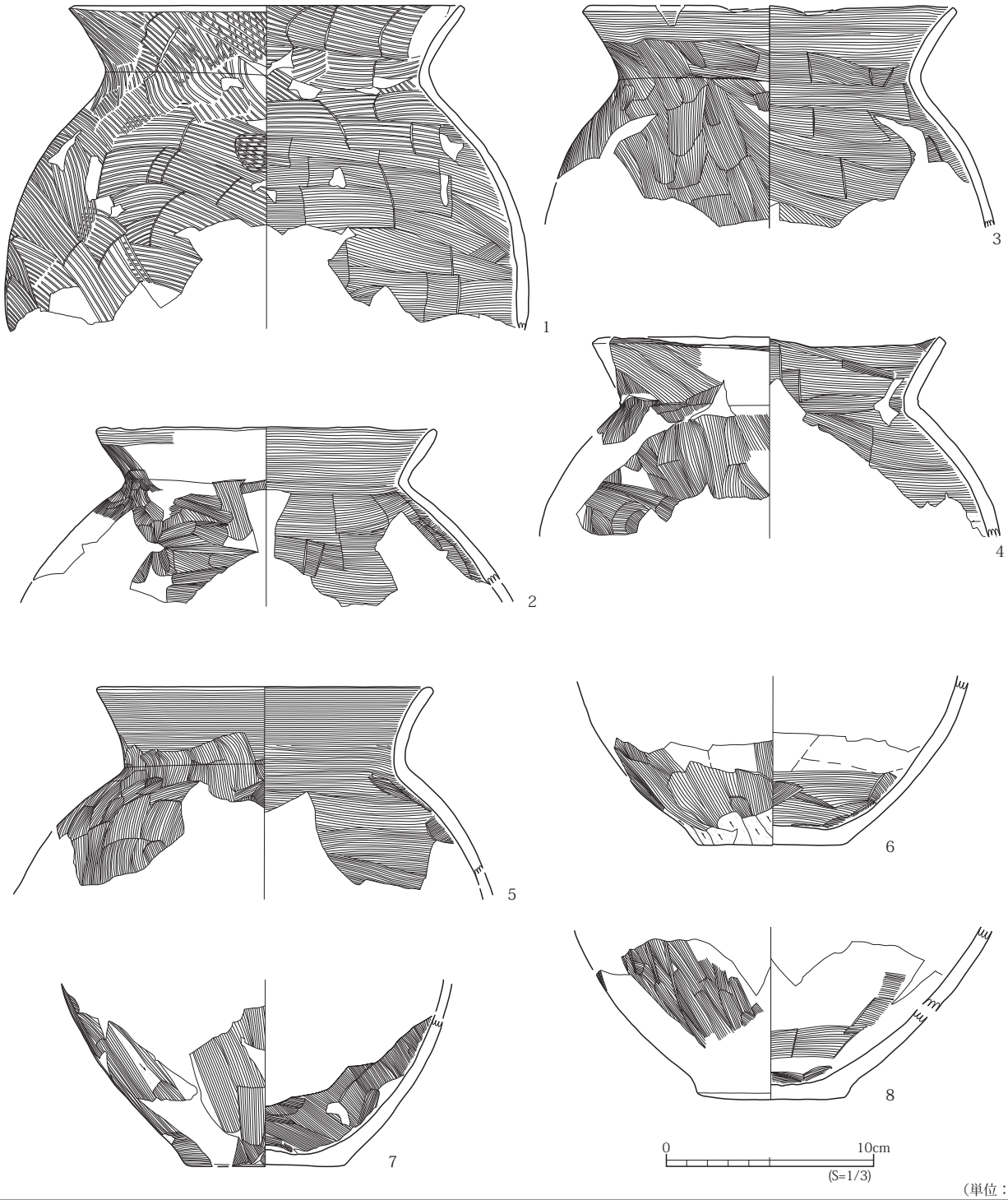
第 36 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（4）



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	床	(口)1/2(体)1/2 (底)4/5	18.1	7.5	26.4	外：(口) ナデ、ヘラナデ (体上) ヘラナデ (体下) ヘラナデ、ヘラケズリ 内：(口) ヘラナデ→ハケメ→ヘラナデ (体) ヘラナデ	図版 37-4	R15
2	土師器　甕	床・8層	(口)1/1(体)1/2 (底)1/2	20.3	(7.2)	27.6	外：(口～体) ハケメ　内：(口) ハケメ (体) ヘラナデ　複合口縁　底部被熱　体部に付着物あり	図版 40-1	R18
3	土師器　甕	K1-2・4層	(口)3/4(体)1/2 (底)1/1	17.2	7.9	(25.8)	外：(口) ハケメ→ (体) ハケメ　内：(口) ハケメ (体) ヘラナデ、ナデ 外面に付着物あり	図版 40-2	R57+62

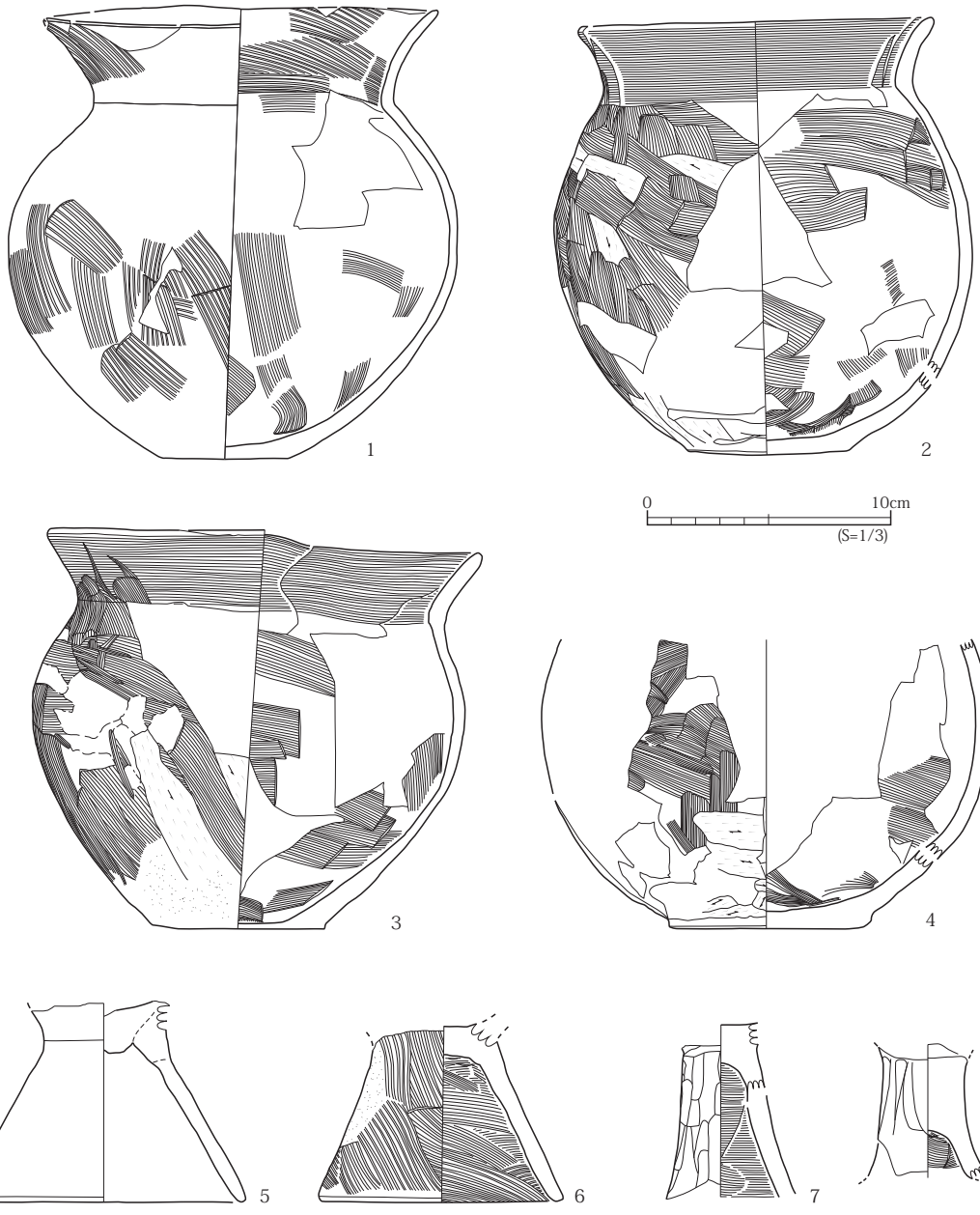
第 37 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（5）



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　甕	床・8層	(口)1/4(体)一部	(19.0)		(15.6)	外：(口～体)ハケメ→(口)端部面取り　内：(口～体上)ハケメ→(体)ヘラナデ	図版 41-1	R37
2	土師器　甕	床	(口)1/4 (体上)一部	(16.4)		(8.6)	外：(口～体上)ヘラナデ→(口)ナデ　内：(口)ナデ　(体上)ヘラナデ　色調：灰白色	図版 41-2	R43
3	土師器　甕	床	(口)1/2 (体上)一部	(18.0)		(10.7)	外：(口～体上)ヘラナデ→(口)ナデ　内：(口～体上)ヘラナデ→(口)ナデ？　色調：灰白色	図版 41-5	R38
4	土師器　甕	床・8層	(口)1/1(体上)1/4	17.0		(9.6)	外：(口)ヘラナデ→(体上)ヘラナデ、口縁端部ヘラナデにより面取り 内：(体)ヘラナデ→(口)ナデ　色調：灰白色	図版 41-4	R284
5	土師器　甕	8・11層	(口)1/1(体上)1/2	16.2		(10.0)	外：(口)ナデ→(体上)ヘラナデ　内：(口)ナデ(体上)ヘラナデ 色調：灰白色	図版 41-3	R31
6	土師器　甕	8・11層	(体下)一部(底)1/1		7.2	(8.1)	外：ヘラナデ→ヘラケズリ　内：ヘラナデ、ナデ　円盤状の底部外縁に粘土紐を積み上げて体部を成形　色調：灰白色	図版 41-6	R40
7	土師器　甕	床	(体下)一部(底)1/1		7.6	(9.0)	外：ヘラナデ、ヘラケズリ　内：ヘラナデ　色調：灰白色	図版 41-8	R39
8	土師器　甕or壺	11層	(体下)1/2(底)1/1		7.0	(8.3)	外：ヘラナデ　内：ヘラナデ　色調：灰白色	図版 41-7	R44

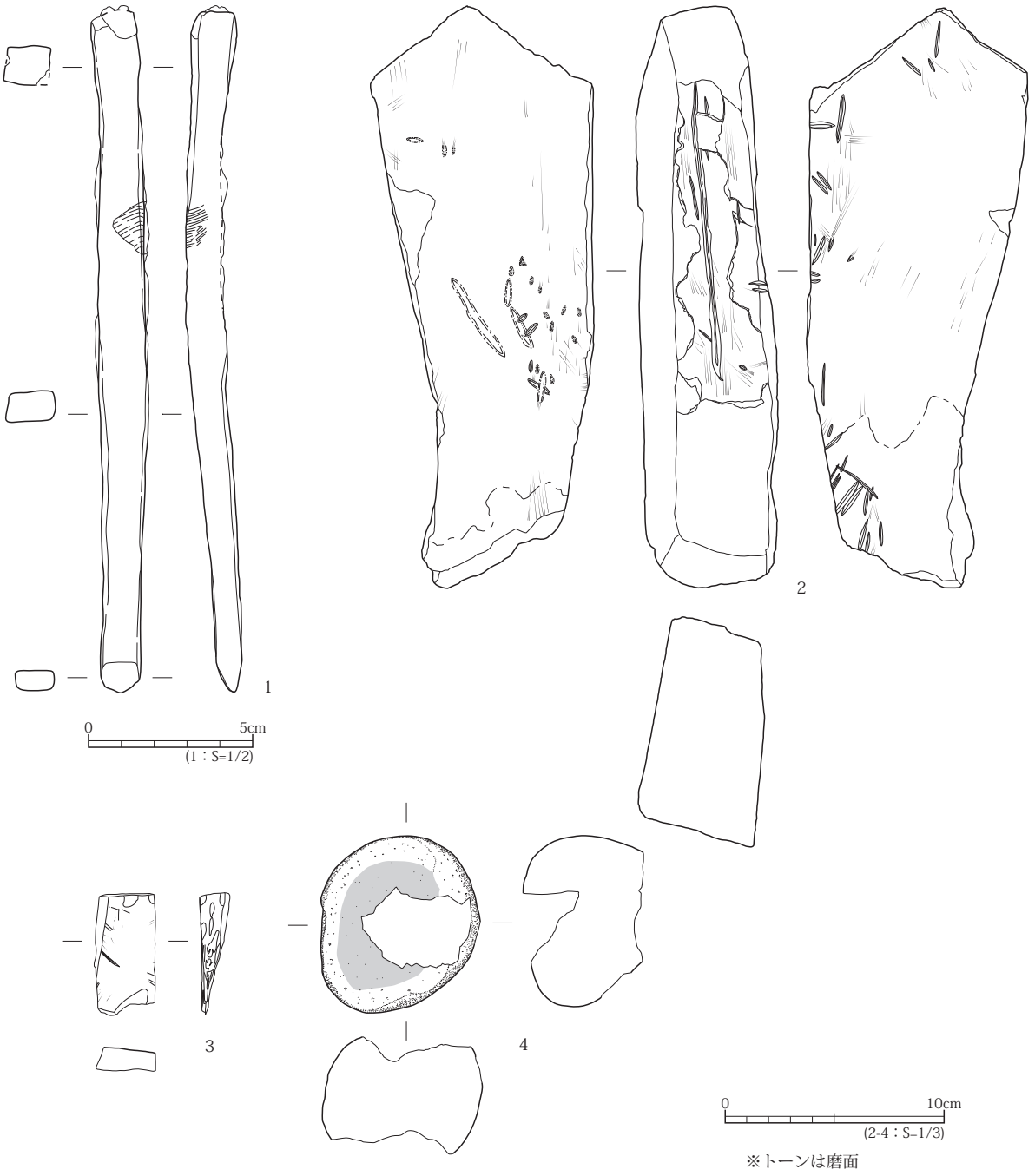
第 38 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（6）



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　甕	K1-2 層	ほぼ完形	16.2	5.1	18.6	外：(口～体) ハケメ　内：(口) ハケメ (体) ナデ、ヘラナデ、ハケメ 外面に付着物あり	図版 40-4	R56
2	土師器　甕	8 層	(口) 一部 (体)1/4(底)1/1	(14.6)	6.5	(17.7)	外：(体上) ヘラナデ、ヘラケズリ→ (体下) ヘラナデ、ヘラケズリ → (口) ナデ→ヘラナデ　内：(口) ナデ (体) ヘラナデ　色調：灰白色	図版 40-3	R72
3	土師器　甕	11 層	(口)3/4 (体～底)3/4	17.8	7.0	16.4	外：(口) ナデ (体) ヘラナデ→ナデ→ヘラナデ、ヘラケズリ→ヘラナデ、 ヘラミガキ　内：(口) ナデ (体) ヘラナデ　色調：灰白色	図版 40-5	R35
4	土師器　甕 or 壺	8 層下部	(体下) 一部 (底)1/1		8.0	(11.8)	外：(体上～中) ヘラナデ→ (体下) ヘラケズリ (底) ヘラナデ 内：ヘラナデ　色調：灰白色	図版 39-2	R41
5	土師器　台付甕	5 層	台部		11.6	(8.1)	外・内：調整不明	図版 39-5	R19
6	土師器　台付甕	P8 埋	台部		10.1	(7.3)	外：ハケメ　内：ハケメ→台部貼付け→ナデ　被熱	図版 39-6	R64
7	土師器　高坏	1 層	脚部			(6.3)	外：ヘラミガキ　内：(脚) ヘラナデ→ナデ　脚部中空	図版 39-3	R67
8	土師器　高坏	2 層	脚部			(5.0)	外：ヘラミガキ　内：ヘラナデ　脚部上部中実	図版 39-4	R66

第 39 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物（7）



※トーンは磨面

（単位：cm）

No.	器種	層	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	特徴	写真図版	登録番号
1	鉄製品　鑿	周溝上面	20.8	1.5	0.8 ～ 1.2	56.6	ほぼ完形　刃部幅 1.2cm　基部に紐状の有機質残存	図版 42-1	鉄器 10
2	石製品　砥石	18 層	26.6	6.5	11.0	1,960	ほぼ完形　砂岩製　砥面 3 面	図版 42-4	R45
3	石製品　砥石	周溝 13 ～ 15 層	(5.7)	(2.7)	(1.3)	(23.6)	破損　頁岩製　砥面 2 面	図版 42-2	R69
4	石器　磨石	床直上	8.4	7.6	(6.1)	(480)	破損　安山岩製　被熱　磨面 1 面	図版 42-3	R71

第 40 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物 (8)

（単位：cm）

No.	器種	層	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	特徴	写真図版	登録番号
1	石製品　砥石	床直上	33.0	10.0	11.7	6,340	完形　砂岩製　砥面 4 面	図版 42-5	R59

第 41 図　SI10 竪穴建物跡　出土遺物 (9)

D2 は建物跡南西隅から外側に延びる溝跡で、南西隅は天井部が残存しトンネル状になっている。延長部分については未検出である。

〔**その他**〕ピット 5 個（P5 ～ 9）を検出した。P5・6 は中央北寄り、P7 ～ 9 は南西部に位置し、いずれも楕円形である。掘方の規模は、P5 が長軸 36cm、短軸 28cm、P6 が長軸 26cm、短軸 22cm、P7 が長軸 32cm、短軸 28cm、P8 が長軸 34cm、短軸 24cm、P9 が長軸 30cm、短軸 22cm である。P6 ～ 8 では柱痕跡が確認され、P6 は長軸 10cm、短軸 8cm 、P7 は長軸 20cm、短軸 16cm、P8 は長軸 16cm、短軸 14cm でいずれも楕円形である。

〔**堆積土**〕12 層に分かれ、いずれも自然堆積である。1 ～ 4 層は火災後の堆積土、 5 ・ 6 層は地山ブロックを多く含む層、 7 ・ 8 層は焼土層、9 ～ 11 層は焼土と炭化物を多く含む層、18 層は炉堆積土である。5・6 層は北西隅から北東隅にかけての北辺付近と西辺、南東隅付近に分布し、 7 ～ 11 層は中央北寄りから北東隅､東辺の南側にかけてと､北西隅から西辺北側にかけて分布する（第 30 図）。

〔**炭化材**〕床面を中心に多数確認され、27 点を記録した（第 31 図）。北辺と南西部に分布し、大型で主柱穴付近に位置するもの（炭 3）、各辺に直交・斜交するもの（炭 1・4・6・10・11・15・16・19・22 ～ 24・26・27）、並行するもの（炭 2・12・17・21・25）がある。このうち、炭 3・9 について C14 年代測定分析を実施した（附章 6）。

〔**出土遺物**〕土器は、竪穴建物中心部やや北側と建物北東部、南西部に分布が集中する（第 32 図）。床面から土師器高坏（第 33 図 1・2）、器台（9・10・14）、鉢（第 34 図 1・8）、壺（第 34 図 13、第 36 図 3 ～ 5、第 37 図 1）、甕（第 37 図 2、第 38 図 1 ～ 4・7）、K1 堆積土から器台（第 33 図 4・6 ～ 8・11・12）、鉢（第 34 図 4 ～ 7・10）、壺（第 36 図 1・2）、甕（第 37 図 3、第 39 図 1）、有孔鉢（第 34 図 12）、P3 上面から器台（第 33 図 5）、壺（第 35 図 1）、P8 上面から台付甕（第 39 図 6）、18 層の炉堆積土から砥石（第 40 図 2）、7 ～ 11 層の焼土や炭化物を多く含む層から土師器器台（第 33 図 15）、鉢（第 34 図 2･3･11）、壺（第 35 図 2）、甕（第 38 図 5･6、第 39 図 2･3）、砥石（第 41 図 1）、磨石（第 40 図 4）、周溝上面から鉄製品（第 40 図 1）、周溝堆積土から砥石（第 40 図 3）等が出土した。この他に、床面から白色粘土塊、7 ～ 11 層から屋根材の可能性のある被熱した焼土塊（図版 42-6）が出土している。

【SI13 竪穴建物跡】（平･断面図：第 42 ～ 44 図、各平面図：第 45 ～ 49 図、出土遺物：第 50 ～ 65 図）

〔**位置・検出**〕B 区の北辺中央に位置し、標高 46 ～ 48m の丘陵頂部から北側に傾斜する緩斜面上に立地する。東辺と西辺の中央部分、北東隅がカクランによって壊されている。一部の床面施設の精査まで行った。床面と床面直上層から炭化材が検出され、床面直上層には焼土や炭化物が多く含まれていることから焼失竪穴建物跡と考えられる。

〔**平面形・規模**〕長方形で、規模は、南北 6.2m、東西 7.0m である。

〔**方向**〕西辺でみると北で西に約 6°、東辺でみると北で東に 2°偏る。

〔**壁**〕北東隅が SX14 整地層を壁としている以外は、地山を壁とし、床面から急角度で立ち上がる。高さは、最も残りの良い南辺で床面から 84cm である。

〔**床面**〕掘方埋土を床面としている。床面は南側から北側へ標高を下げながら緩やかに傾斜し、両者

の高低差は 8cm である。

〔**主柱穴**〕4 個（P1 ～ 4）検出した。いずれも柱痕跡のみの検出である。掘方については、D1 の東壁と底面で P3 の掘方が竪穴建物の掘方埋土に覆われていることを確認した。したがって、P1・2・4 の掘方についても同様に掘方埋土に覆われていると考えられる。柱痕跡は、長軸 15 ～ 20cm、短軸 12 ～ 15cm の楕円形、不整な隅丸長方形である。

〔**炉・焼面**〕中央北寄りと南寄りで焼面 3 ヶ所（Y1 ～ 3）を検出した。Y1 は長軸 76cm、短軸 45cm、深さ 8cm の浅いくぼみの底面に、長軸 5 ～ 40cm、短軸 5 ～ 25cm の焼面が 3 ヶ所確認された。Y2・3 は長軸 8 ～ 15cm、短軸 5 ～ 10cm である。Y1 が炉跡とみられる。

〔**周溝**〕1 度改修されている（A → B）。

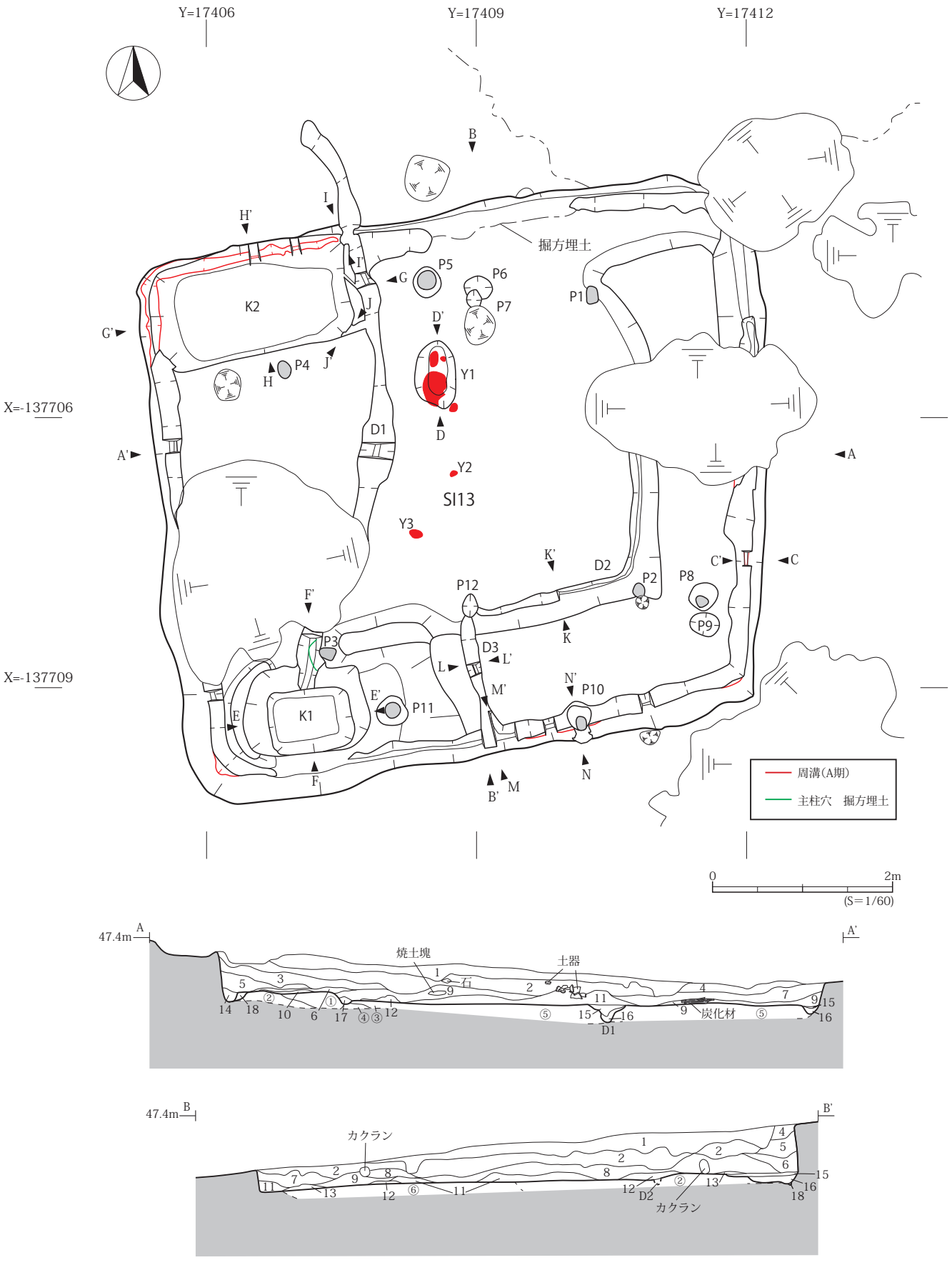
A 期の周溝については、北辺西側、西辺北側と南西隅、南辺中央から東側、東辺中央より南側で部分的に検出した。西辺北端と北辺西側は土坑（K2）と重複しており、これより古い。北辺周溝西側と D1 は接続し、D1 の底面は周溝底面よりも標高が高く、両者の高低差は 8cm である。規模は、上幅 10 ～ 19cm、精査を行った部分では下幅 2 ～ 4cm、深さ 10 ～ 20cm、断面は東辺の一部が逆台形、それ以外が「U」字形である。堆積土は自然堆積である。

B 期の周溝については、北辺の中央から東側と西辺の北端部、南辺の西側の一部で途切れるが、それ以外では各辺で検出した。西辺の北端では土坑（K2）と接続し、周溝底面は K2 底面よりも標高が高く、両者の高低差は 6cm である。また、D1 と北辺周溝とも高低差をもって接続しており、堆積土から D1 底面の方が北辺周溝底面よりも標高が低いとみられる。規模は上幅 15 ～ 32cm、精査を行った部分では下幅 2 ～ 6cm、深さが 10 ～ 12cm である。断面は逆台形、「U」字形である。堆積土はいずれも自然堆積である。

〔**土坑**〕2 基（K 1 ・2）検出した。K1 は南西隅に位置し、北辺中央で D1 と接続する。平面は東西方向に長軸を持つ隅丸長方形で、中央部分が深くなる。全体の規模は長軸 142cm、短軸 100cm、深さ 57cm、中央部は長軸 90cm、短軸 68cm の隅丸長方形で、深さは 53cm である。断面は、床面から 5 ～ 10cm までが皿状、中央部が箱形となる。K1 底面は D1 底面よりも深く、高低差は 43cm である。堆積土は 7 層に分かれ、いずれも自然堆積である。3 層に大別でき、1 ～ 4 層は火災直後、5 層は火災時、5 ～ 7 層は機能時の堆積土である。

K2 は北西隅に位置し、南西隅で西辺 B 期周溝、東辺で D1 と接続する。北・西辺の A 期周溝と重複し、これらより新しい。平面は東西方向に長軸を持つ隅丸長方形で、規模は長軸 215cm、短軸 120cm、深さ 26cm である。断面は逆台形である。堆積土は 5 層に分かれ、いずれも自然堆積である。1 層は屋根材の崩壊土、2・3 層は火災時、4 ～ 5 層は機能時の堆積土である。

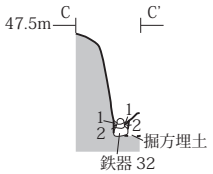
〔**溝**〕3 条（D1 ～ 3）検出した。D1 は中央西寄りに位置する南北方向の溝跡で、北端は建物外に延びる。建物内の北側で K2 と北辺周溝、南端で K1 と接続する。南側の一部がカクランによって壊されているが、検出長 6.6m、上幅 8 ～ 38cm、精査を行った部分では下幅 5 ～ 7cm、深さ 11 ～ 20cm である。断面は南側が逆台形、中央が「V」字形、北側が「U」字形である。K2 との接続部では、D1 と K2 北東隅との間に上幅 10cm、深さ 5cm、K2 南東隅との間に上幅 10cm、深さ 4cm の東西方向の



第 42 図　SI13 竪穴建物跡（1）

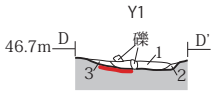
A-A'、B-B'

層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒を少量含む	自然堆積
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物、地山粒・ブロックを少量含む	
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物粒・片を少量、地山小ブロックをやや多く、褐色（7.5YR4/4）シルトブロックを含む	
4	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロックを含む	
5	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物粒・片、地山小ブロックをやや多く含む	
6	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物粒・片、焼土粒、地山ブロックを少量含む	
7	明黄褐色 (10YR6/6)	粘土質シルト	焼土粒・小ブロックをわずかに、炭化物粒・片、褐色（10YR4/4）シルト小ブロックを含む（地山主体層）	屋根材崩壊土
8	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物粒・片、焼土粒・小ブロックを多量、地山小ブロック、褐色（7.5YR4/4）シルト小ブロックを含む	火災による堆積土
9	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物粒・片、焼土粒・塊、地山粒・小ブロックを非常に多く含む	
10	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	炭化物、地山粒・小ブロックを多量に含む（炭化物主体層）	
11	赤褐色 (5YR4/6)	シルト	炭化物を少量、焼土粒・塊を多量に含む（焼土主体層）	
12	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物を多量、焼土、地山小ブロックをわずかに含む（炭化物主体層）	
13	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物をわずかに、地山小ブロックを少量含む	
14	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	炭化物片、地山粒・小ブロックを多量に含む	B 期周溝堆積土
15	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物粒・片、焼土粒を多く、地山粒を含む	B 期周溝・D1 堆積土
16	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	地山小ブロックを多く含む	
17	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	炭化物片、地山粒・小ブロックを含む	D2 堆積土
18	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	地山粒・小ブロックを多く含む	A 期周溝堆積土
①	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山小ブロックを多く含む	掘方埋土
②	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	シルト	地山小ブロック、にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト、褐色 (10YR4/4) シルト小ブロックを多く含む	
③	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山粒・小ブロックを多く含む	
④	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山粒・小ブロックを多く含む	
⑤	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山小ブロック、灰黄褐色 (10YR4/2) シルト小ブロックを多く含む	
⑥	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山小ブロック、灰黄褐色 (10YR4/2) シルト小ブロックを多く含む	



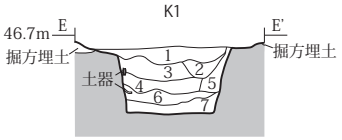
東辺周溝（C-C'）

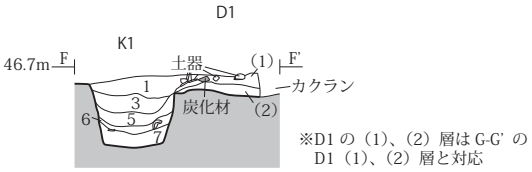
層	土色	土性	含有物など	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物粒・片を少量、地山小ブロックやや多く含む	B 期の機能時の堆積土
2	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	炭化物粒・片を少量、地山小ブロック含む	A 期の機能時の堆積土



Y1（D-D'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土小ブロックを多く、礫を含む	自然堆積
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒、焼土粒、地山粒をやや多く含む	
3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物片、焼土小ブロック、地山粒を多く含む	

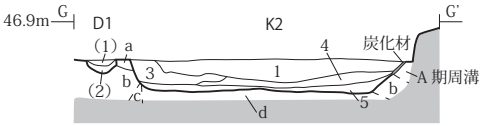


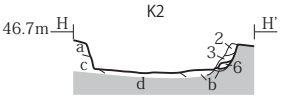


※D1 の（1）、（2）層は G-G' の D1（1）、（2）層と対応

K1（E-E'、F-F'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物粒、焼土粒、地山粒・小ブロックをやや多く含む	上層 (火災による堆積土)
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山小ブロック・ブロックを多量に含む	
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	炭化物粒、地山粒・小ブロックをやや多く含む、4 層との境に炭化物が層状に含まれる	
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	炭化物粒・片、地山粒・小ブロックをやや多く、焼土粒を含む	
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物粒・片を多量、焼土粒、地山粒をやや多く含む	中層 (火災による堆積土)、D1 の 1 層と対応
6	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	炭化物片を多量、岩盤小礫を含む	下層 (機能時の堆積土)
7	灰黄褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト	岩盤小礫を多量、酸化マンガンを斑に含む	

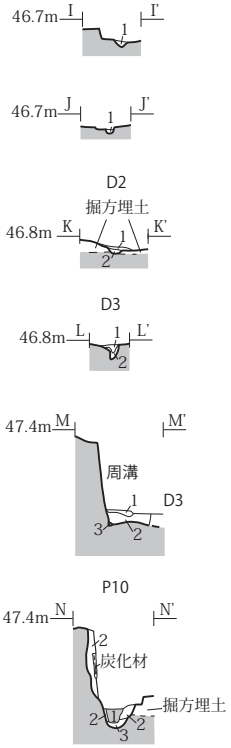




K2（G-G'、H-H'）

層		土色	土性	含有物など	備考
K2	1	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト	しまりあり、地山小ブロックを多量、炭化物粒をわずかに含む	屋根材崩壊土
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山粒・小ブロックをやや多く、炭化物粒・片を含む	火災による堆積土
	3	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物粒・片を多量、焼土粒・小ブロック、地山小ブロックを含む	
	4	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭化物粒をわずかに、地山小ブロックをやや多く含む	機能時の堆積土 (西辺 B 期周溝堆積土と対応)
	5	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	炭化物粒、地山粒、褐色（10YR4/4）粘土質シルトを含む	機能時の堆積土
周溝	6	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロックをやや多く含む	北辺 A 期周溝堆積土
D1	(1)	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物粒・片を多量、焼土粒、地山粒をやや多く含む	火災による堆積土
	(2)	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	機能時の堆積土 (西辺 B 期周溝堆積土と対応)
掘方埋土	a	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト小ブロックを多量に含む	造成時の掘方埋土
	b	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト小ブロックを多量に含む	
	c	明褐色 (7.5YR5/6)	シルト	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト小ブロックを多量に含む	
	d	明褐色 (7.5YR5/8)	シルト	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト小ブロック、にぶい黄橙色 (10YR6/4) シルト小ブロックを多量に含む	

第 43 図　SI13 竪穴建物跡（2）



K2 と D1 を接続する溝（I-I'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒、地山粒を多量、地山ブロックを少量含む	自然堆積（D1 の 2 層対応）

K2 と D1 を接続する溝（J-J'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒、地山粒・小ブロック、黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルトブロックを多量に含む	自然堆積（D1 の 2 層対応）

D2（K-K'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物粒・片、焼土粒を多く、地山粒を含む	火災による堆積土
2	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	地山小ブロックをやや多く含む	機能時の堆積土

D3（L-L'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物粒・片、焼土粒を多く、地山粒を含む	火災による堆積土
2	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	地山粒を含む	機能時の堆積土

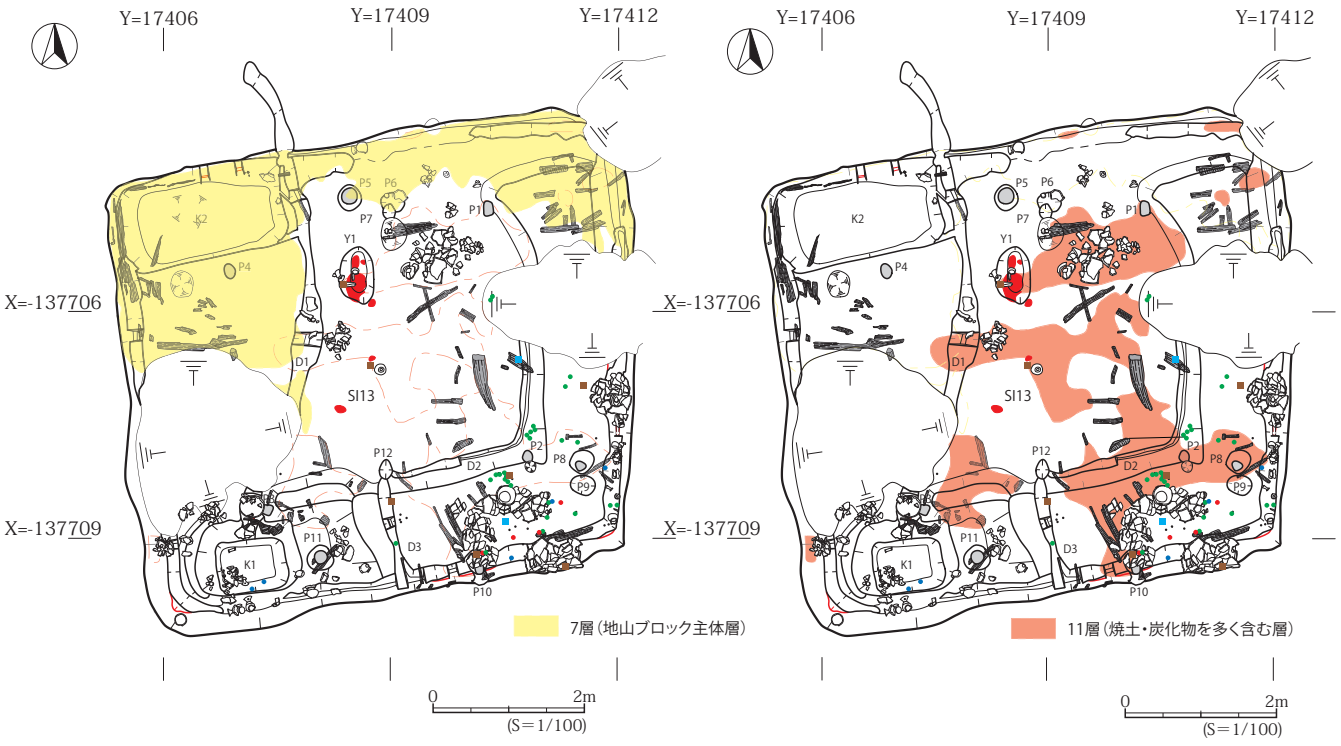
南辺周溝と D3 との接続部（M-M'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物粒・片を多量、焼土粒、地山粒をやや多く含む	火災による堆積土
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物粒・片を少量、地山小ブロックをやや多く含む	機能時の堆積土
3	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	炭化物粒・片、地山小ブロックを少量含む	A 期周溝堆積土

P10（N-N'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物片を多量、地山ブロックを少量含む	柱痕跡
2	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	炭化物粒を少量、地山ブロックを多量に含む	掘方埋土
3	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	

第 44 図　SI13 竪穴建物跡（3）



第 45 図　SI13 竪穴建物跡　地山ブロック主体層、焼土・炭化物を多く含む層の分布

小規模な溝跡が検出された。この2条の溝跡の底面はK2底面よりも標高が高く、K2北東隅と接続する溝跡とK2底面とは15cm、K2南東隅と接続する溝跡とK2底面とは22cmの高低差がある。また、堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積で、上層は火災時、下層は機能時の堆積土である。

D2は南東部に位置し、ベッド状施設の北辺と西辺に並行する「」」字形の溝跡である。西端はピット（P12）と重複し、これより古い。北端はカクランによって壊されているが、本来的にはこの部分で東辺周溝と接続していたとみられる。確認できた範囲では検出長3.0m、上幅12～25cm、下幅2～4cm、深さ5cmである。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積で、上層は火災時、下層は機能時の堆積土である。

D3は南辺中央のベッド状施設上に位置する南北方向の溝跡である。北端はピット(P12)と重複し、これより古く、南端は南辺周溝と接続する。規模は、検出長1.2m、上幅7～25cm、精査を行った部分では下幅3cm、深さ12cmである。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積で、上層は火災時、下層は機能時の堆積土である。

〔**ベッド状施設**〕建物の南東隅から東辺と南辺に沿って床面より10cm高い「」」字形の平坦面を検出した。規模は、南北方向3.9m、東西方向3.3mで、幅は前者が75～125cm、後者が100～115cmである。掘方埋土によって造られている。

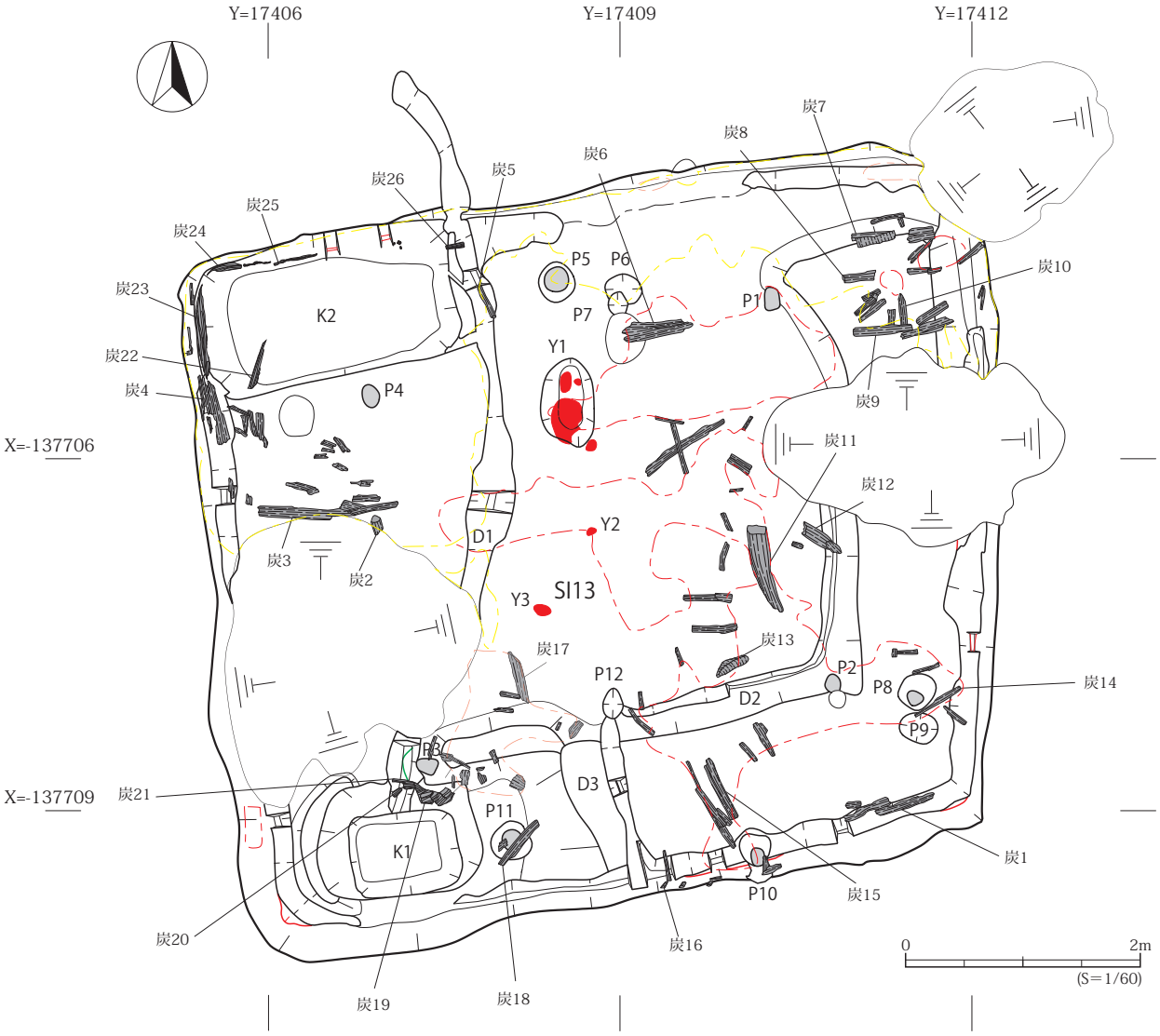
〔**その他**〕ピット8個（P5～12）とK1の西・北東側で土手状の高まりを検出した。P5～7は中央北側、P8・9は南東側、P10は南辺中央より東側のB期周溝上面、P11は南西側、P12は中央より南側に位置する。楕円形、円形で、掘方の規模は、P5が長軸35cm、短軸31cm、P6が長軸31cm、短軸23cm、P7が長軸18cm以上、短軸16cm、P8が長軸31cm、短軸28cm、P9が長軸33cm、短軸25cm、P10が長軸42cm、短軸27cm、P11が長軸35cm、短軸33cmである。P5・8・10・11では柱痕跡が確認され、P5は径21cmの円形、P8は長軸14cm、短軸12cm、P10は長軸15cm、短軸10cmの楕円形、P11は径17cmの円形である。

土手状の高まりは、K1の西側では西辺周溝との間にK1西辺に沿って、北東側ではベッド状施設の西端から西側に延びており、高さは床面から2～4cmである。

〔**堆積土**〕13層に分かれ、いずれも自然堆積である。1～6層が火災後の堆積土、7層が地山ブロックを多く含む層、8～13層が焼土や炭化物を多く含む層で、特に8・9層は炭化材・炭化物と焼土を多く含む層、11層は焼土を主体とする層、10・12層は炭化物を主体とする層である。7層は北西隅から北東隅の北辺付近に分布し、11層は中央から南・南東側、北東側にかけて分布する(第45図)。

〔**炭化材**〕8・9層、10～13層を中心に多数確認され、26点を記録した（第46図)。ほぼ全面に分布しており、大型で主柱穴間に位置するもの（炭6・11)、板状のもの（炭19・23～25)、各辺に直交・斜交するもの（炭3・5・8・9・14・15・17・18・20）や並行するもの（炭2・4・10・13・22・26）がある。このうち、炭11についてC14年代測定分析を実施した（附章6)。

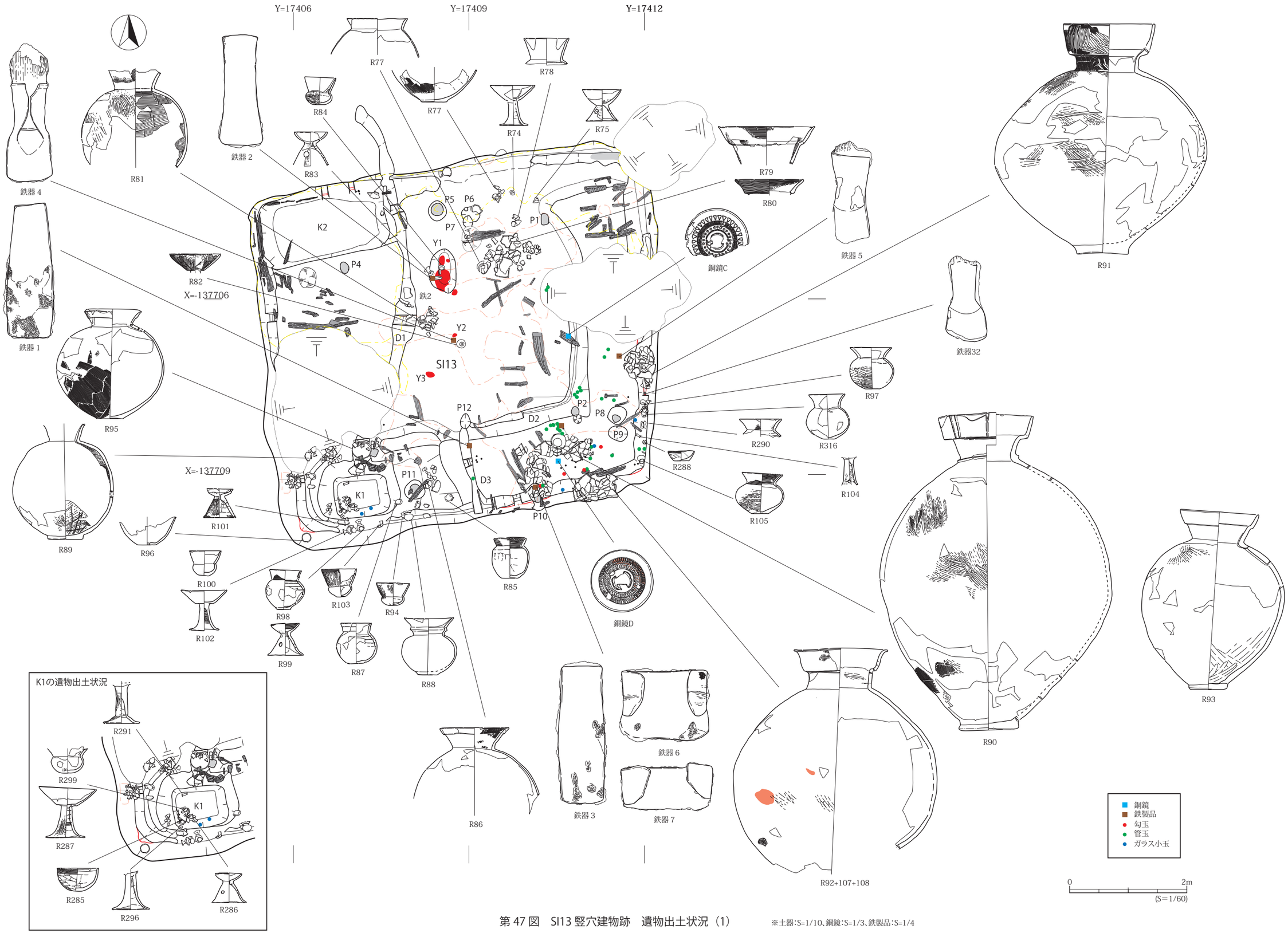
〔**出土遺物**〕銅鏡、玉類、垂飾品、赤色顔料、動物遺存体は竪穴建物南東部、鉄製品は南東部と中央付近、土器は南東部と南西部、中央と中央やや北側に集中して、植物遺存体は南西部と南東部、中央付近に分布する（第47～49図)。床面から土師器高坏（第50図2・5)、器台（第50図11・13・



SI13 炭化材属性表

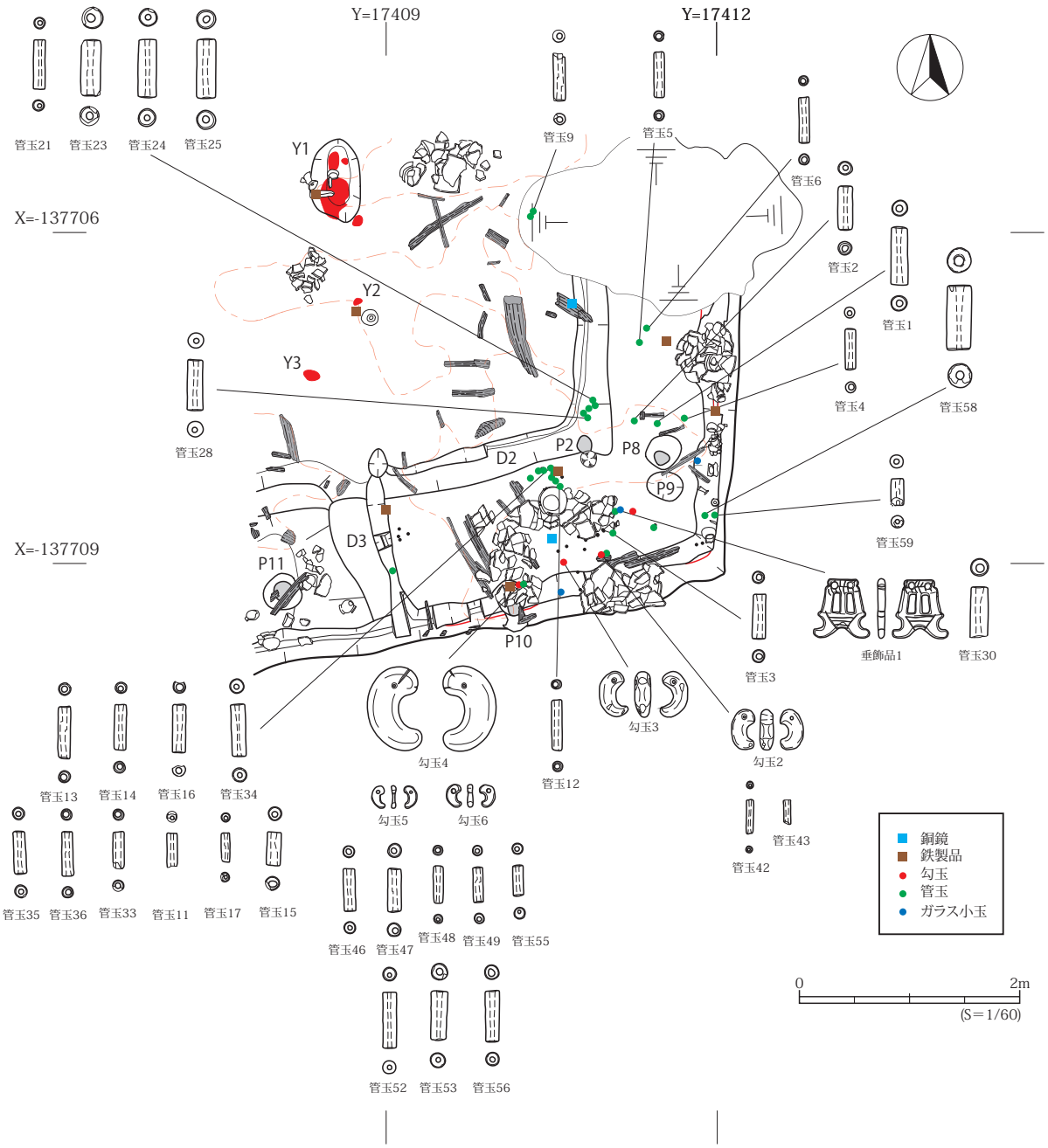
No.	出土層	方向		残存	規模（cm）		備考	No.	出土層	方向		残存	規模（cm）		備考
					長	幅							長	幅	
1	2 ～ 5 層	東西	斜位	不良	52	5 ～ 8		14	5 ～ 9 層	北東－南西	水平	良	46	5 ～ 6	垂木か
2	10 ～ 13 層	南北	水平	良	16	8	横木か	15	－	北西－南東	水平	－	56	8	垂木か
3	5 ～ 9 層	東西	水平	良	119	8 ～ 10	垂木か	16	5 ～ 9 層	南北	垂直	やや良	23	5 ～ 6	壁材か
4	5 ～ 9 層	南北	斜位	良	54	12	横木か	17	10 ～ 13 層	南北	水平	やや良	46	10 ～ 11	垂木か
5	5 ～ 9 層	南北	水平	やや良	29	5 ～ 7	垂木か	18	5 ～ 9 層	北東－南西	水平	不良	48	7 ～ 8	垂木か
6	10 ～ 13 層	東西	水平	やや良	60	15	梁・桁材か	19	K1-5 層	東西	斜位	やや良	26	17	板材
7	5 ～ 9 層	東西	水平	良	33	32	板材	20	K1-5 層	北東－南西	斜位	やや良	10	4	垂木か
8	5 ～ 9 層	東西	水平	やや良	30	7	垂木か	21	K1-5 層	東西	水平	やや良	17	6	
9	5 ～ 9 層	東西	水平	良	50	7 ～ 9	垂木か	22	K2-1 層	北東－南西	斜位	やや良	44	6	横木か
10	5 ～ 9 層	南北	水平	不良	32	8	横木か	23	A 期周溝上面	南北	斜位	良	83	10	板材
11	10 ～ 13 層	南北	水平	良	75	15 ～ 17	梁・桁材か	24	A 期周溝上面	東西	斜位	良	30	7	板材
12	10 ～ 13 層	北西 - 南東	水平	良	30	12		25	K2-3 層上面	東西	斜位	不良	63	4	板材か
13	床	東西	水平	良	24	6 ～ 8	横木か	26	K2-3 層上面	東西	水平	良	17	5	横木か

第 46 図　SI13 竪穴建物跡　炭化材の分布と属性



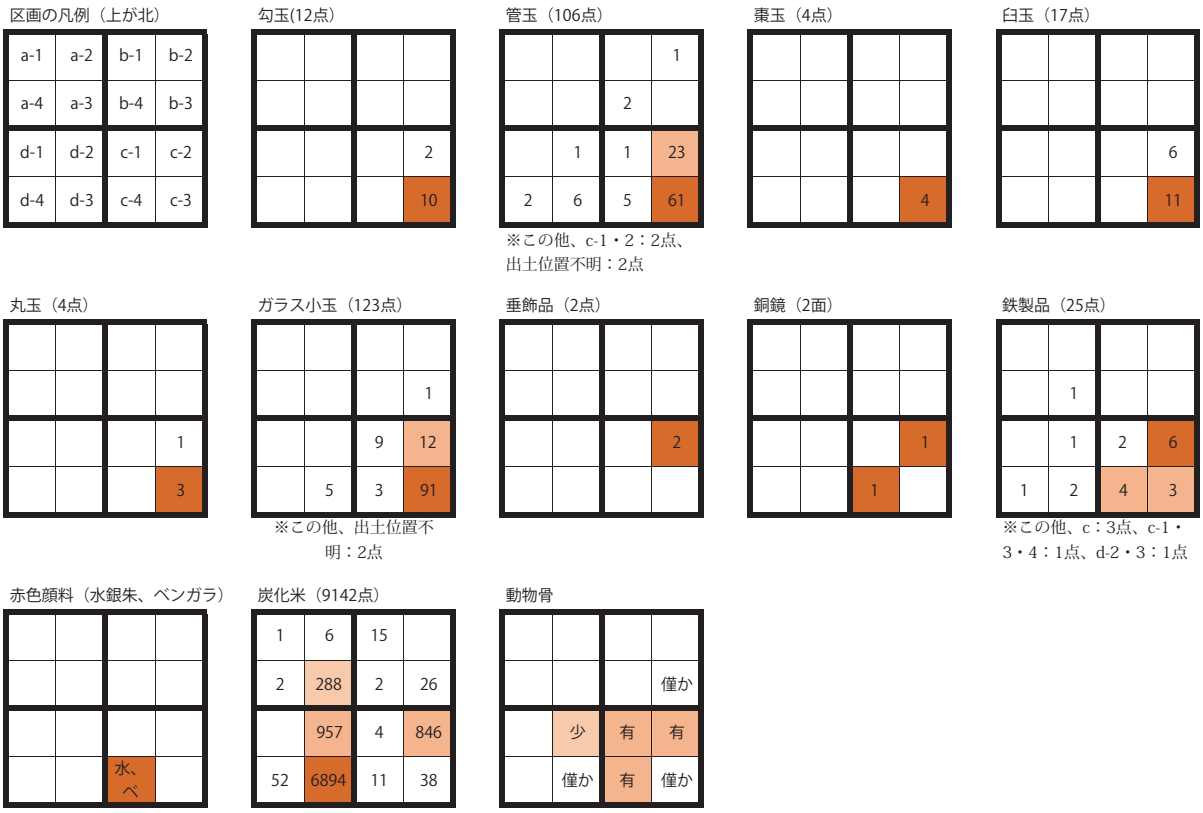
第 47 図　SI13 竪穴建物跡　遺物出土状況（1）

※土器:S=1/10、銅鏡:S=1/3、鉄製品:S=1/4



第 48 図　SI13 竪穴建物跡　遺物出土状況（2）　※玉類・垂飾品：S=1/3

14）、鉢（第 51 図 5）、壺（第 51 図 8、第 53 図 2）、有孔鉢（第 57 図 4）、玉類（第 61 ～ 64 図、第 3 表、図版 55 ～ 56）、K1 堆積土から土師器高坏（第 50 図 1・4・6・7）、器台（12・15）、鉢（第 50 図 17、第 51 図 1・6）、鉄製品（第 60 図 10）、D1 堆積土から土師器壺（第 52 図 1）、周溝上面から土師器高坏（第 50 図 8）、壺（第 51 図 9・10）、周溝堆積土から土師器鉢（第 50 図 16）、壺（第 51 図 11・12）、鉄製品（第 59 図 6、第 60 図 7）、炭化物や焼土を主体とする 8 ～ 13 層から土師器高坏（第 50 図 3・9・10）、鉢（第 51 図 2 ～ 4）、壺（第 51 図 7・13・14、第 52 図 2、第 53 図 1、第 54 ～ 56 図、第 57 図 1・2）、甕（第 57 図 3）、銅鏡（第 58 図 1・2）、鉄製品（第 58 ～ 60 図）、玉類・垂飾品（第 61 ～ 64 図）、砥石（第 65 図 1）、磨＋敲石（第 65 図 2・3）、台石（第 65 図 4）、赤色顔料、動物遺存体、炭化米等が出土した。この他に K1 堆積土から弥生土器（第 57 図 6）、10 ～ 13 層から屋根材の可能性がある焼土塊（図版 57-9）が出土している。また、炭化米に



第 49 図　SI13 竪穴建物跡　グリッド別遺物の出土状況

ついて C14 年代測定分析を実施した（附章 6）。

【SI15 竪穴建物跡】（平・断面図：第 66 図、出土遺物：第 67 図）

〔**位置・検出**〕B 区中央に位置し、標高 48m の丘陵尾根頂部から西側に傾斜する緩斜面上に立地する。東辺北側がカクラン、西辺と北辺西側は後世の削平により壊されており、東辺と南辺、北辺の東半のみの検出である。床面施設の検出と、一部で精査を行った。

〔**平面形・規模**〕全体を検出できていないが、方形とみられる。残存している範囲の規模は、南北 4.3m、東西 4.5m である。

〔**方向**〕東辺でみると北で西に 9°偏る。

〔**壁**〕地山を壁とし、床面から急角度で立ち上がる。高さは、最も残りの良い南辺東側で床面から 25㎝である。

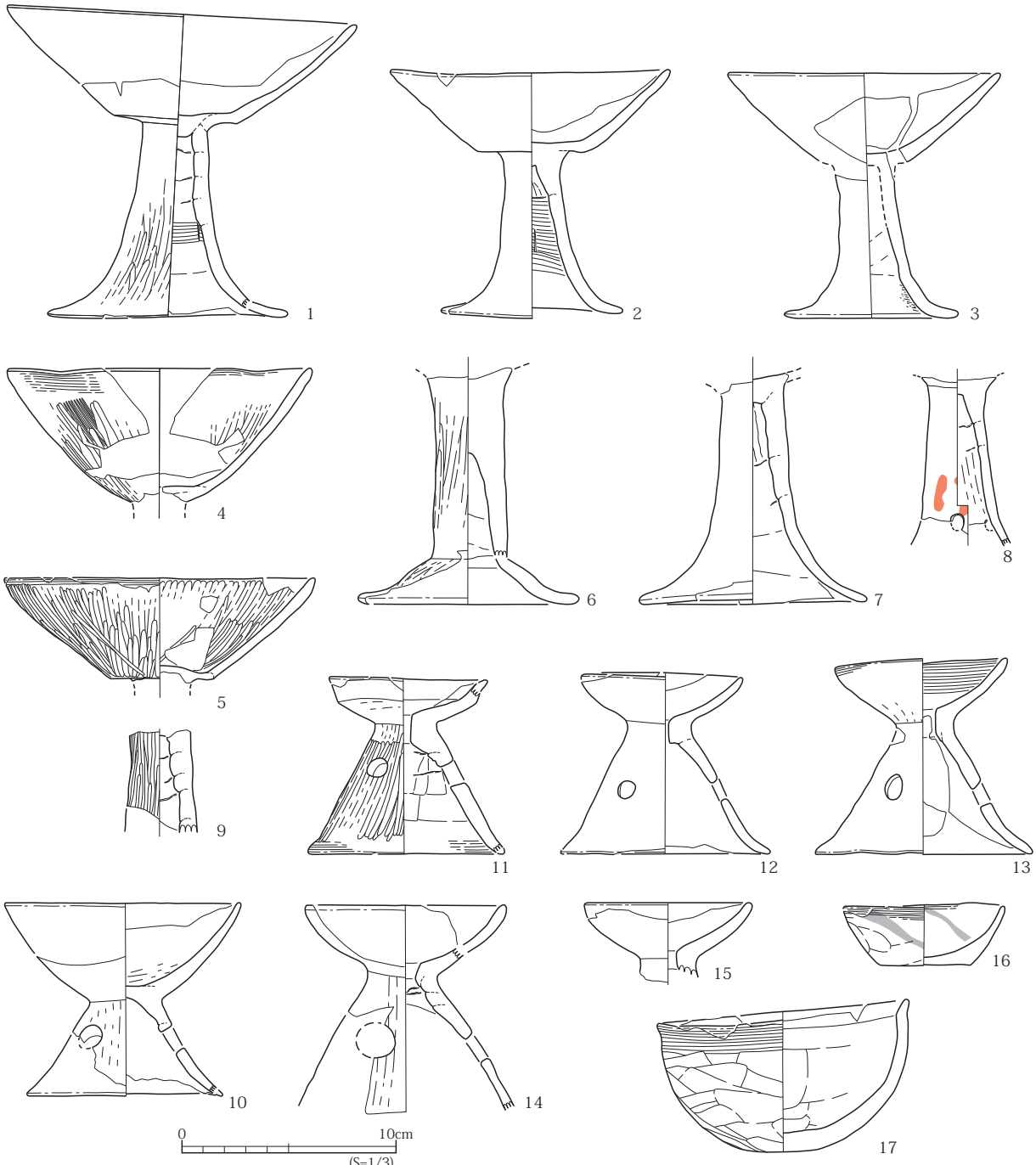
〔**床面**〕掘方埋土を床面としている。中央部の標高が低いが、それ以外はほぼ平坦である。

〔**周溝**〕東辺・南辺と北辺の東側で検出した。東辺と南辺で 1 度改修されている（A → B）。

A 期の周溝については、上幅 15 ～ 25cm、精査を行った部分では下幅 10 ～ 12cm、深さ 6 ～ 7cm、断面は「U」字形である。堆積土は自然堆積である。

B 期の周溝については、上幅 15 ～ 28cm、精査した部分では下幅 5 ～ 16cm、深さ 2 ～ 4cm、断面は皿状である。堆積土はいずれも自然堆積である。

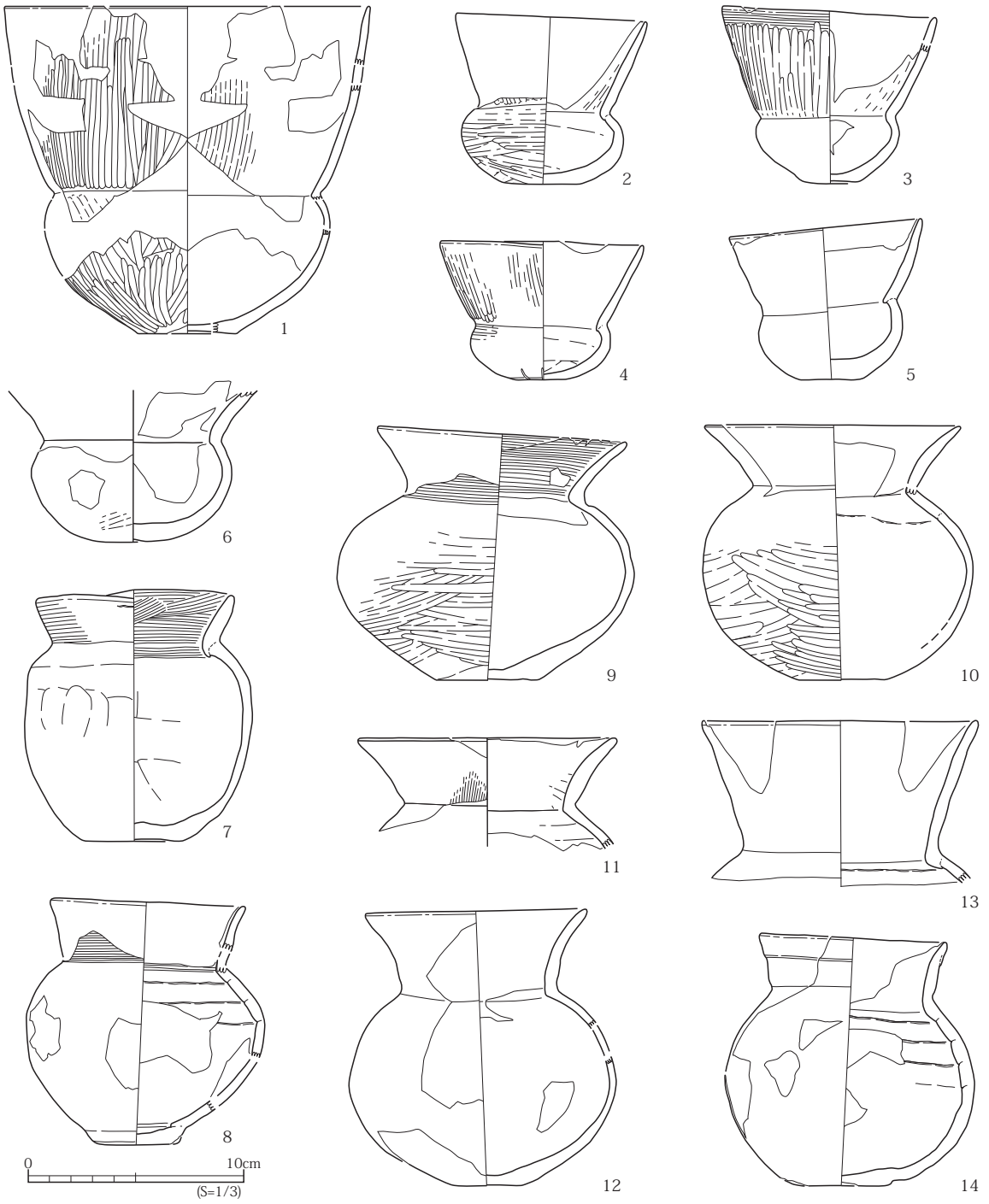
〔**土坑**〕1 基（K1）検出した。南西部に位置し、東側で南辺の周溝、西端で D3 と接続している。



（単位：cm）

No.	器種	位置	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　高坏	d4	K1-1～5層	3/5	(16.2)	11.2	(13.7)	外：(坏) 調整不明 (脚) ヘラミガキ　内：(坏) 調整不明 (脚上半) 無調整 (脚下半) ナデ　脚部中空	図版 43-1	R287
2	土師器　高坏	d4	床	4/5	12.9	(8.6)	11.6	外：調整不明　内：(坏) 調整不明 (脚) ヘラナデ　脚部中空	図版 43-2	R102
3	土師器　高坏	b1	8・9層	2/5	12.6	8.2	11.4	外：調整不明　内：(坏) 調整不明 (脚) ハケメ、ナデ　脚部中空	図版 43-3	R74
4	土師器　高坏	d4	K1-1～5層	(坏)1/5	(14.0)		(6.2)	外：(坏) 口縁ナデ　体ハケメ→ヘラミガキ　内：(坏) 口縁ナデ　体ヘラミガキ	図版 43-5	R295
5	土師器　高坏	d2	床	(坏)4/5	(14.4)		(4.8)	外：(坏) 口縁ナデ　体ヘラミガキ (底) ヘラミガキ　内：(坏) ヘラミガキ	図版 43-4	R82
6	土師器　高坏	d4	K1-6・7層	(脚)4/5		(10.3)	(11.0)	外：ヘラミガキ　内：ナデ　上部中実　屈折脚	図版 43-7	R291
7	土師器　高坏	d4	K1-1層	(脚)4/5		10.4	(10.8)	外：調整不明　内：(脚上半) 無調整 (脚下半) ナデ？　脚部中空	図版 43-8	R296
8	土師器　高坏	c3	周溝上面	(脚)1/2			(7.8)	外：調整不明、一部赤彩　内：調整不明　円窓３　脚部中空	図版 43-6	R104
9	土師器　高坏	a	10～13層	(脚)1/3			(2.8)	外：ヘラミガキ　内：無調整　脚部中空	図版 43-15	R109
10	土師器　高坏	b1	8・9層	3/5	(11.0)	(9.0)	9.0	外：(坏) 調整不明 (脚) ヘラミガキ？　内：(坏) ヘラミガキ？ (脚) 調整不明　円窓３	図版 43-9	R75
11	土師器　器台	d4	床	4/5	(7.4)	(9.2)	8.3	外：(受) 口縁ナデ　体ヘラミガキ？ (脚) ナデ→ヘラミガキ 内：(受) 調整不明 (脚) ヘラナデ、ナデ　円窓３	図版 43-10	R101
12	土師器　器台	d4	K1-6層	4/5	(7.4)	(9.8)	8.4	外・内：調整不明　円窓３	図版 43-11	R286
13	土師器　器台	d4	床	4/5	8.1	10.0	9.1	外：(受) 口縁ナデ　体ヘラミガキ？ (脚) 調整不明　内：(受) 口縁ナデ　体～底ナデ (脚) ヘラナデ？、円窓３	図版 43-12	R99
14	土師器　器台	a3	床	2/5	(9.2)		(9.7)	外：(受) 調整不明 (脚) ヘラミガキ　内：(受) 調整不明 (脚) ヘラナデ　円窓３	図版 43-13	R83
15	土師器　器台	d4	K1-4層	(受)4/5	(7.6)		(3.7)	外・内：調整不明	図版 43-14	R297
16	土師器　鉢	c3	周溝１層	ほぼ完形	(7.4)	4.1	2.9	外・内：(口) ナデ (体～底) ナデ、オサエ　スス付着	図版 43-16	R288
17	土師器　鉢	d4	K1-1～4層	ほぼ完形	11.6	3.1	6.6	外：(口) ナデ (体) ナデ (底) ヘラケズリ→ナデ　内：(口) ナデ (体～底) ナデ、オサエ	図版 43-17	R285

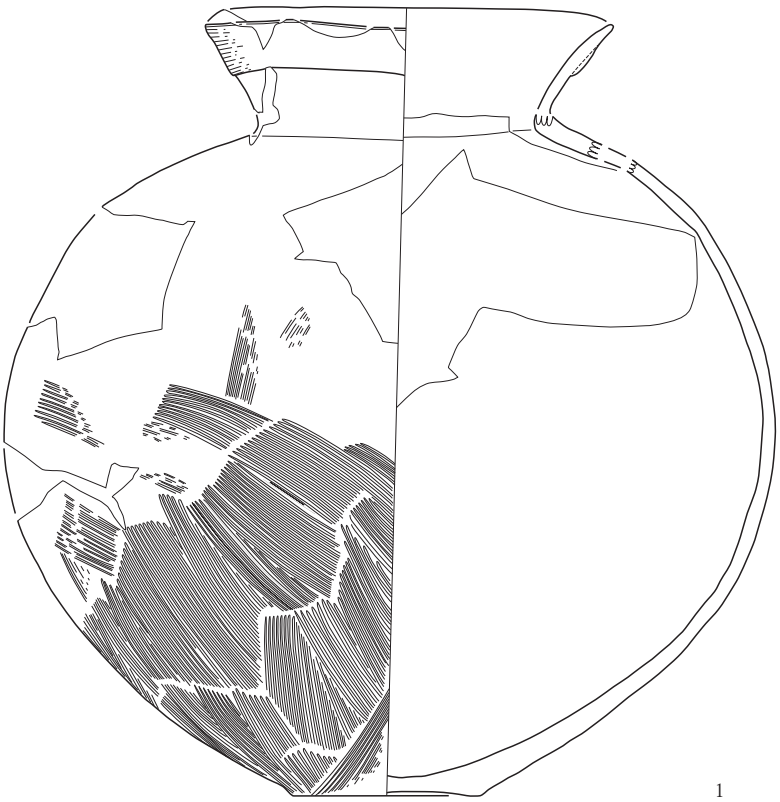
第 50 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (1)



（単位：cm）

No.	器種	位置	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　鉢	d4	K1-1～5層・D1-1層	1/3	(16.8)	(4.6)		外：(口) ヘラミガキ (体下半) ヘラミガキ (底) ヘラケズリ→ヘラミガキ　内：(口) ヘラミガキ (体下半) 調整不明	図版 44-12	R292
2	土師器　鉢	a3	10～13層	3/5	(8.8)	3.4	(7.5)	外：(口～頸) ヘラミガキ (体) ヘラミガキ (底) ヘラケズリ 内：(口～頸) ヘラミガキ (体～底) ナデ	図版 44-1	R84
3	土師器　鉢	d4	10～13層	3/5	(9.8)	2.4	8.0	外：(口) ナデ (頸) ヘラミガキ (体) 調整不明 (底) くぼみ底 内：(頸) ヘラミガキ (体～底) 調整不明	図版 44-3	R103
4	土師器　鉢	d3	8・9層	完形	9.4		6.4	外：(口~体) ヘラミガキ (底) ヘラ書き「=」 内：(口~頸) ヘラミガキ？(体~底) ナデ	図版 44-2	R94
5	土師器　鉢	d4	床	ほぼ完形	(8.8)	2.9	7.1	外・内：調整不明	図版 44-4	R100
6	土師器　鉢	d4	K1-5層	2/3		3.1	(7.0)	外：(口) 調整不明 (体) ヘラミガキ？(底) くぼみ底　内：調整不明	図版 44-5	R299
7	土師器　壺	d3	8・9層	完形	9.0	4.4	11.7	外：(口) ナデ (体) ナデ、オサエ (底) くぼみ底　内：(口) ナデ (体～底) ヘラナデ	図版 44-6	R85
8	土師器　壺	d4	床	2/3	(8.9)	4.0	(11.1)	外：(口) ナデ (体～底) 調整不明　内：(口) ナデ (体～底) ナデ？	図版 44-10	R98
9	土師器　壺	c3	周溝上面	4/5	(11.5)	4.8	(11.2)	外：(口) ナデ (体) ナデ→ヘラミガキ (底) ナデ　内：(口) ナデ (体～底) 調整不明	図版 44-9	R105
10	土師器　壺	c3	周溝上面	4/5	(11.8)	4.0	11.8	外：(口) 調整不明 (体) ヘラミガキ　内：調整不明	図版 44-8	R97
11	土師器　壺	c3	周溝1層	(口～体)1/2	(11.8)		(5.1)	外：(口) ナデ？(体) ナデ→ヘラミガキ　内：(口) ヘラミガキ？(体) ナデ　スス付着	図版 44-13	R290
12	土師器　壺	c3	周溝1層	3/5	(10.0)	3.2	12.8	外：(口～体上半、底) 調整不明 (体下半) ナデ→ヘラミガキ 内：調整不明	図版 44-7	R316
13	土師器　壺	b1	10～13層	(口頸)1/2	(12.6)		(7.7)	外・内：調整不明	図版 44-14	R78
14	土師器　壺	d3	8・9層	3/5	(8.6)	4.4	11.6	外・内：調整不明　複合口縁	図版 44-11	R87

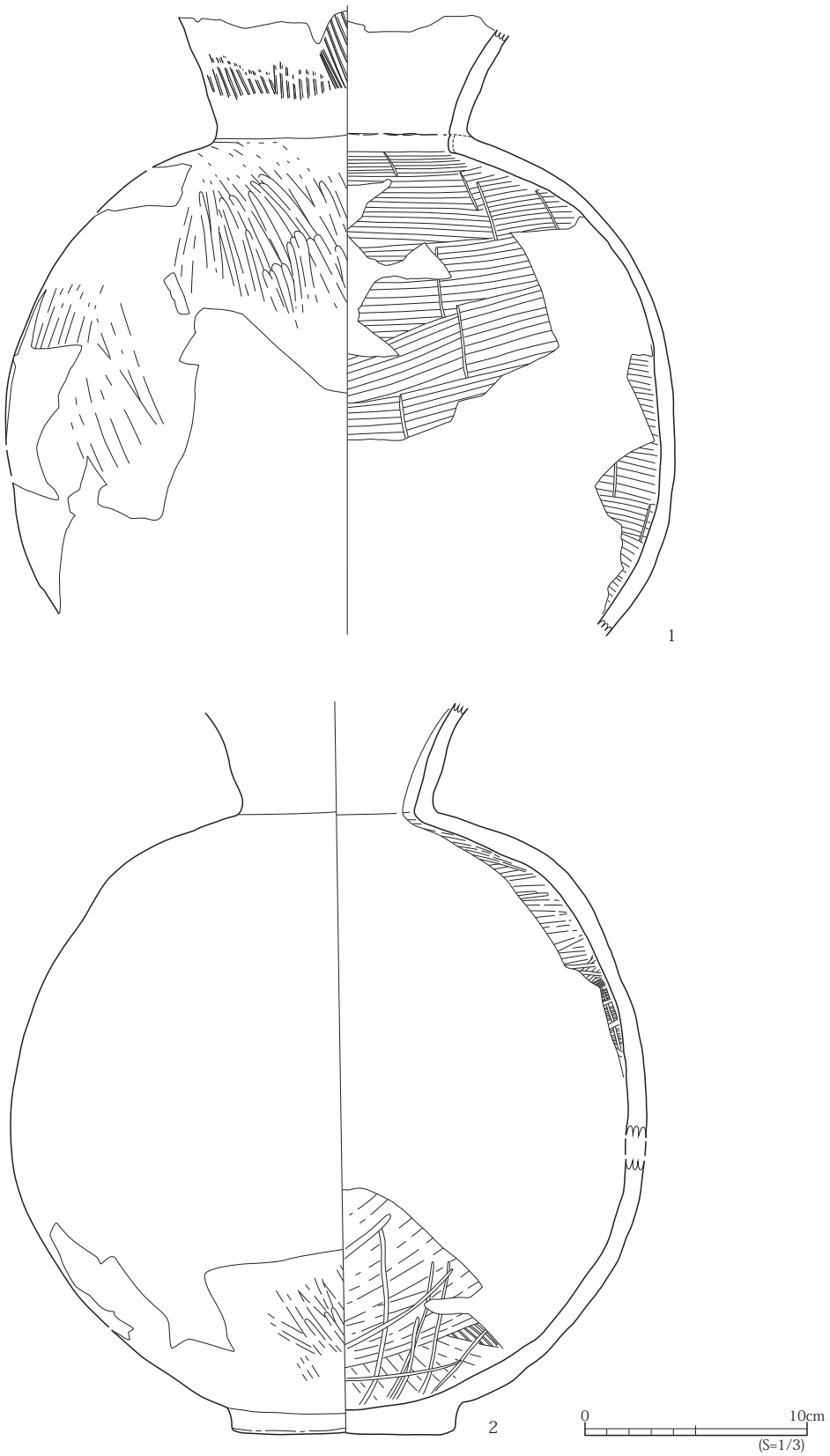
第 51 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (2)



（単位：cm）

No.	器種	位置	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	d4	D1 堆	2/3	(16.2)	13.4	31.2	外：(口) ナデ (体) ハケメ　内：(口・体) 調整不明　複合口縁 体下部に穿孔 1 ヶ所あり	図版 45-1	R95
2	土師器　壺	d3	8・9 層	1/3	19.4			外：調整不明　内：(口～頸) ハケメ (体) 調整不明　複合口縁	図版 46-1	R86

第 52 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (3)



（単位：cm）

No.	器種	位置	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	a3・b3	2 ～ 13 層	2/5			(28.1)	外：(頸) ハケメ (体) ヘラミガキ　内：(頸) 調整不明 (体) ヘラナデ	図版 45-2	R81
2	土師器　壺	d4	床	2/5		10.0	(32.9)	外：(頸) ナデ？→ヘラミガキ (体) ハケメ→ヘラミガキ 内：(頸) 調整不明 (体) ハケメ→ヘラミガキ	図版 46-2	R89

第 53 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (4)

（単位：cm）

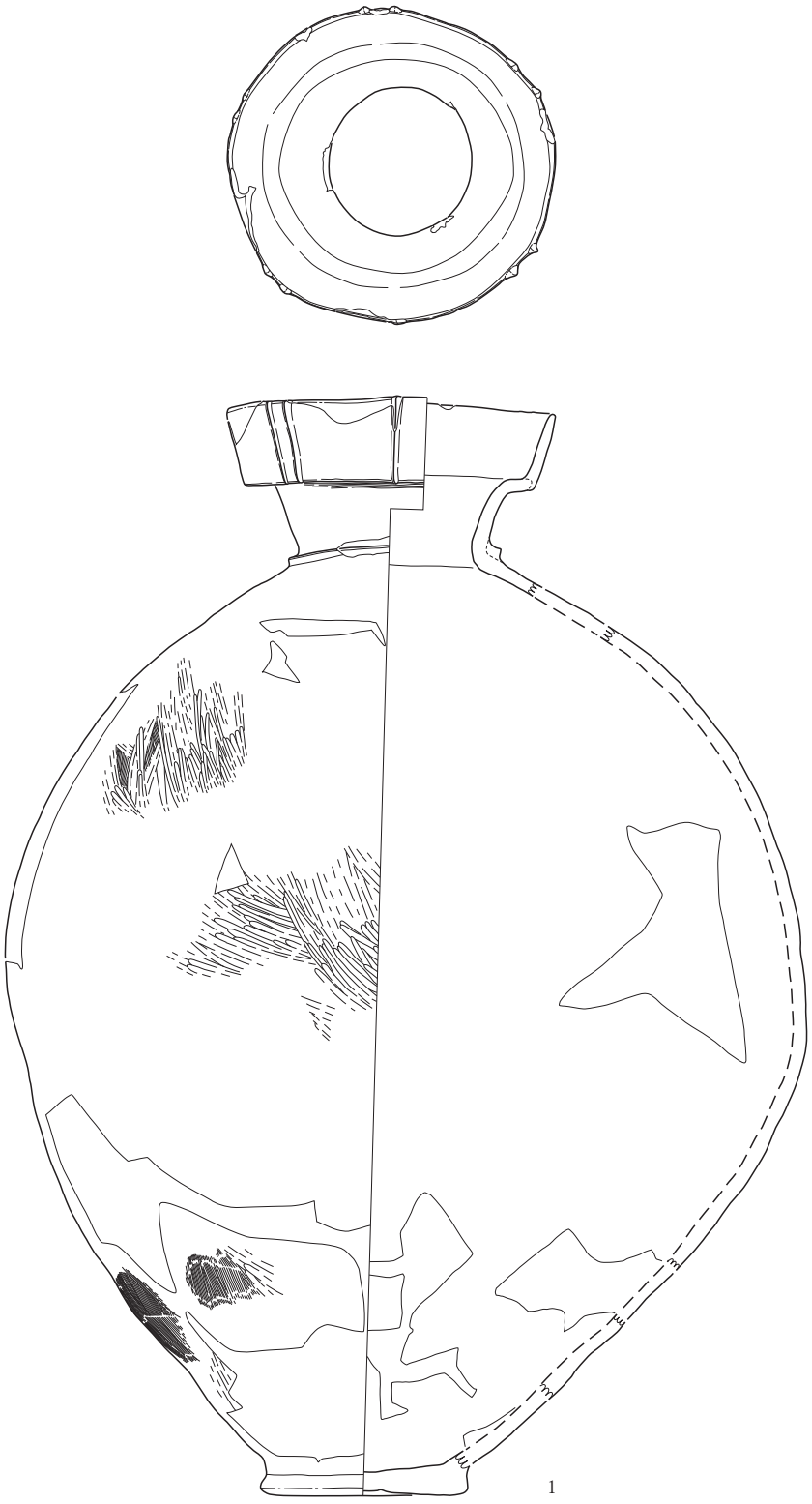
No.	器種	位置	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	b1	10 ～ 13 層	(口頸)2/5	(27.4)		(10.8)	外：(口) ナデ (頸) ヘラミガキ？　内：(口) ナデ (頸) ナデ　二重口縁	図版 47-1	R79
2	土師器　壺	c2・3	8 ～ 13 層	2/3	(22.0)	10.8	(49.7)	外：(口～頸) 調整不明 (体) ヘラミガキ (底) 調整不明 内：(口～頸) 調整不明 (体) ナデ　二重口縁	図版 47-2	R93

第 54 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (5)

（単位：cm）

No.	器種	位置	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	b・c2	2 ～ 13 層	2/3	(25.8)	14.6	65.4	外：(口～頸) ハケメ→ナデ、ヘラミガキ (体) ハケメ→ヘラミガキ (底) 木葉痕　内：(口～頸) ハケメ→ナデ (体) ハケメ→ナデ　二重口縁	図版 48-1	R91
2	土師器　壺	a・c3	2 ～ 13 層	3/5	(26.7)		(64.2)	外：(口～頸) ナデ？ (体) ハケメ→ヘラミガキ→一部赤彩 内：(口～頸) ヘラミガキ (体) ハケメ→ナデ　二重口縁	図版 48-2	R92+ 107+108

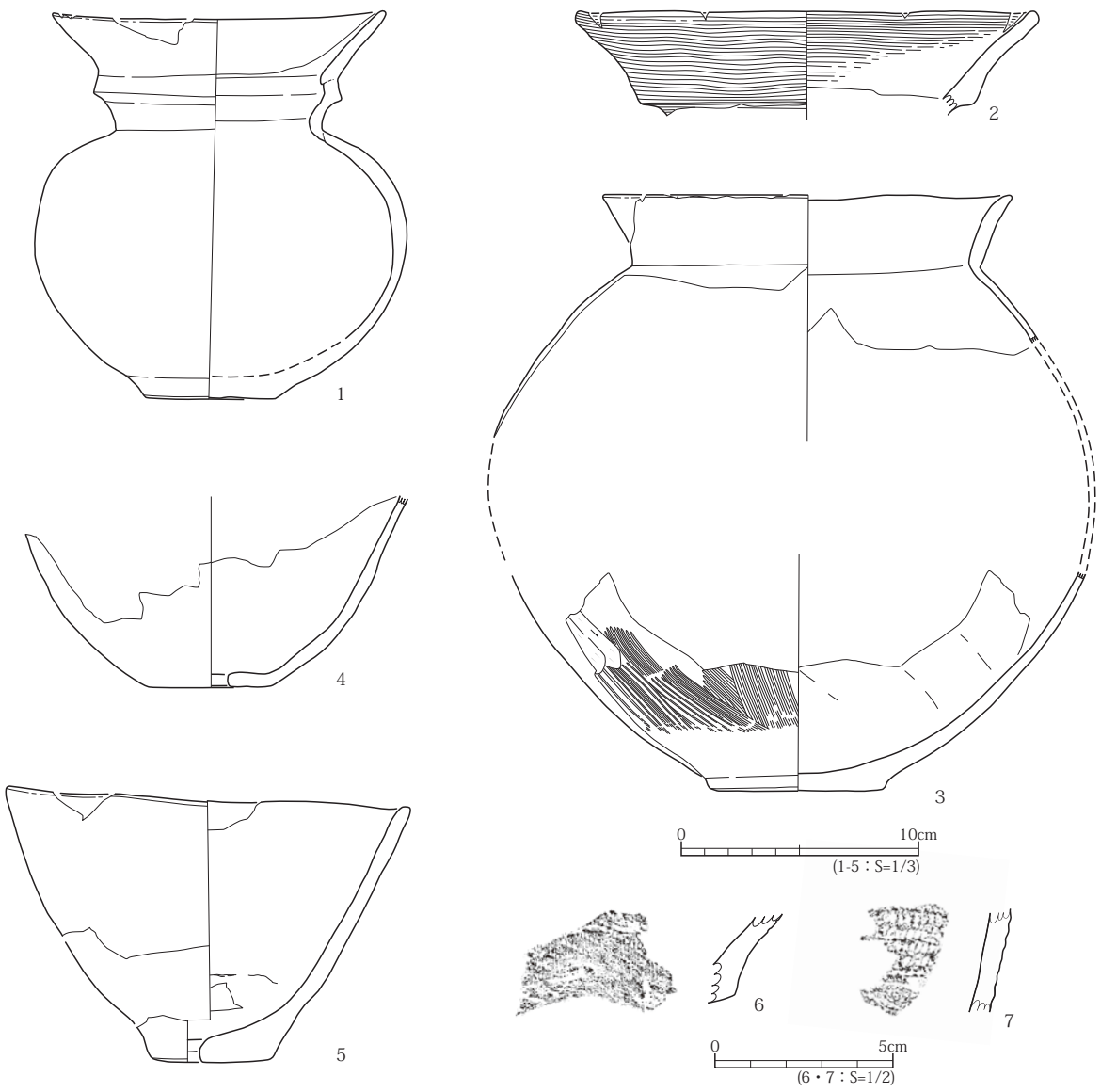
第 55 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (6)



（単位：cm）

No.	器種	位置	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	c3・4	8 ～ 13 層	4/5	26.6	17.0	80.2	外：(口) 棒状浮文 6 ヶ所 (2 条 1 単位を 5 ヶ所、1 条 1 単位を 1 ヶ所)(頸) 調整不明　基部に 1 条突帯 (体) ハケメ→ヘラミガキ (底) 木葉痕　内：(口) 調整不明　最大径付近を境に (体上) ナデ (体下) ハケメ→ナデ　二重口縁	図版 49-1	R90

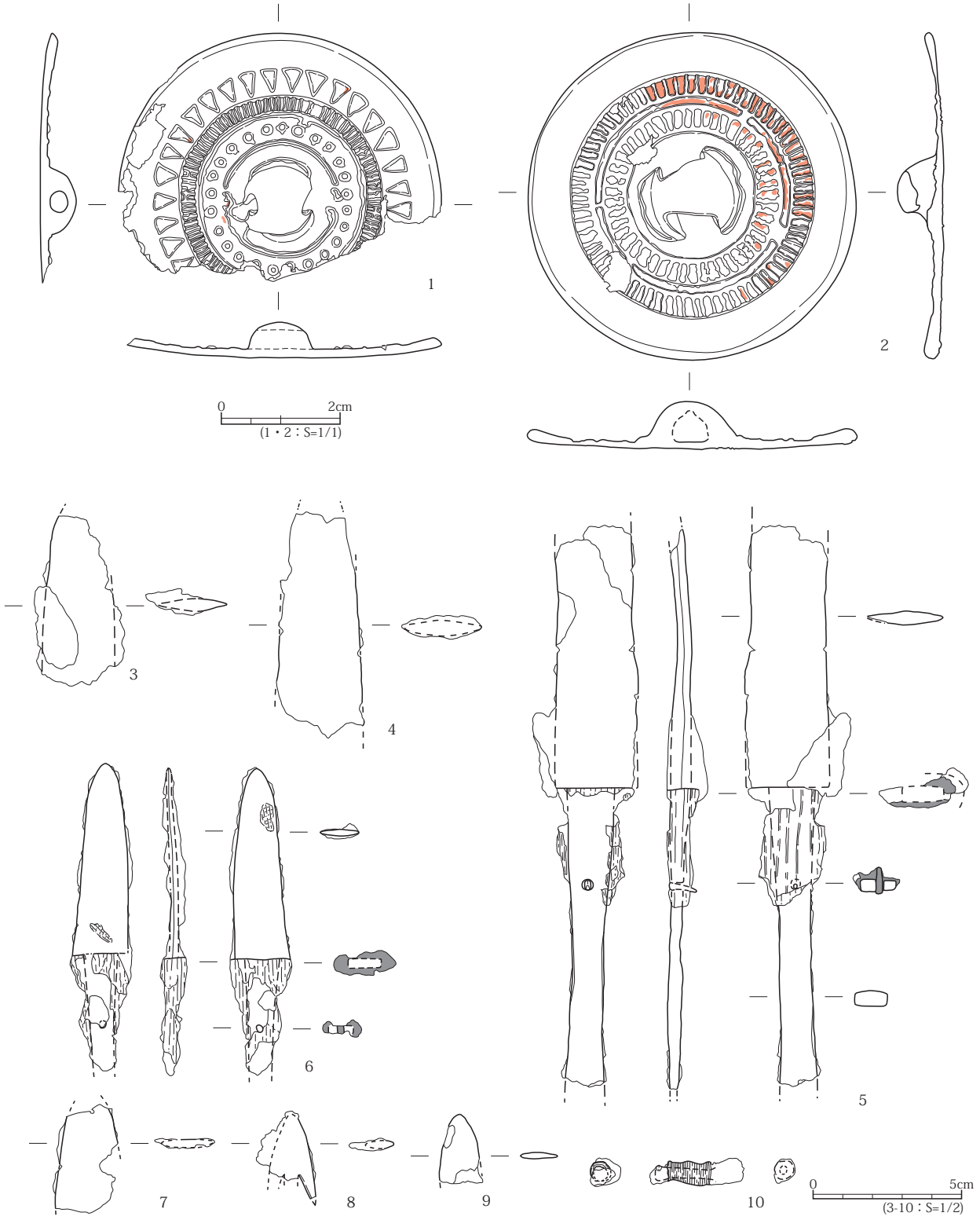
第 56 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (7)



（単位：cm）

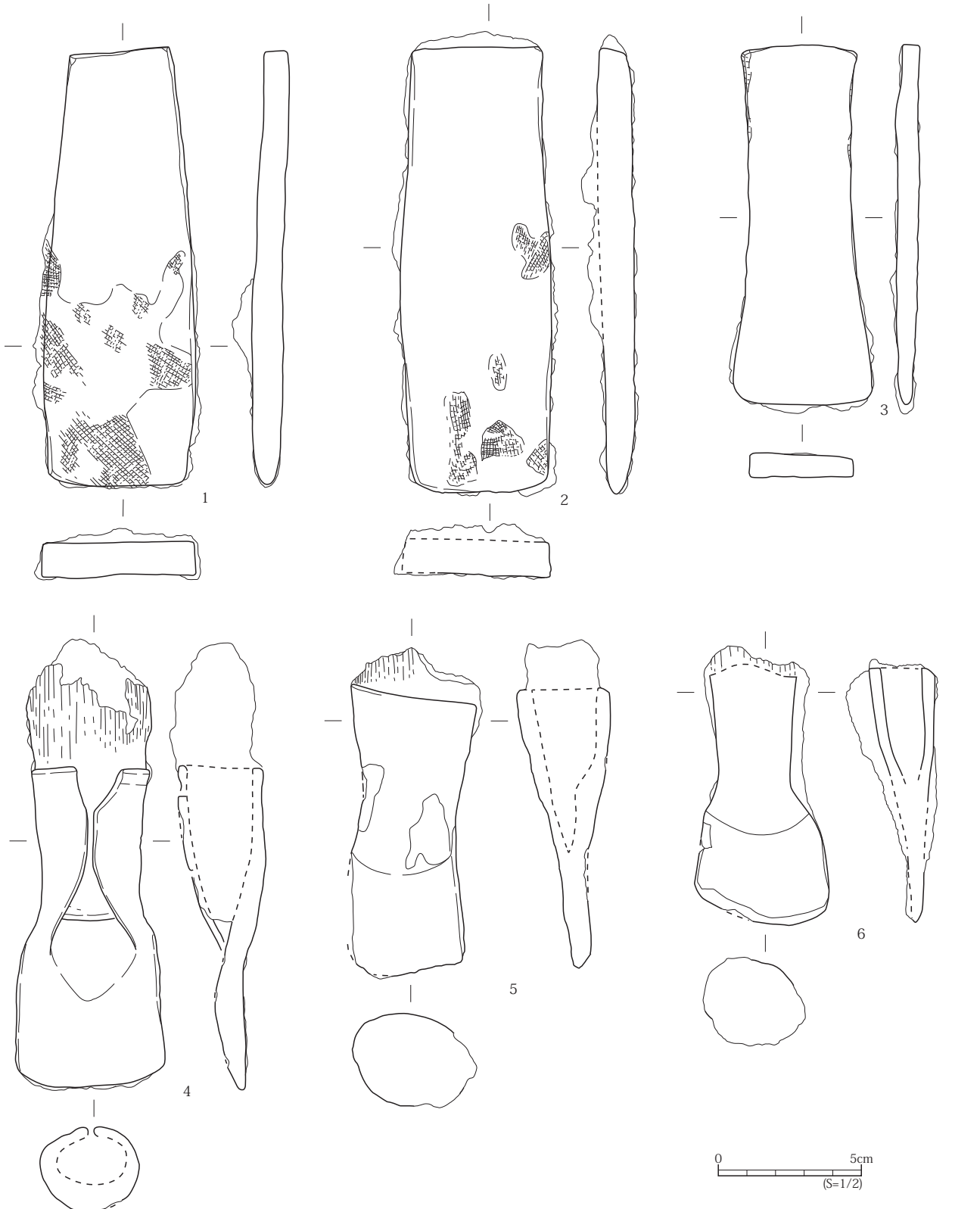
No.	器種	位置	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	d3	8・9 層	ほぼ完形	14.0	5.6	16.3	外：調整不明　内：(口) 調整不明 (体～底) ヘラナデ　二重口縁	図版 50-1	R88
2	土師器　壺	b1	10 ～ 13 層	口縁部	(19.2)		(4.4)	外・内：ナデ　二重口縁	図版 50-2	R80
3	土師器　甕	b1	10 ～ 13 層	1/5	17.0	7.4	(10.3)	外：(口・底) 調整不明 (体) ハケメ→ヘラケズリ？ 内：(口) 調整不明 (体～底) ナデ	図版 50-3	R77
4	土師器　有孔鉢	d4	床	(底)3/5		5.2	(8.1)	外・内：調整不明	図版 50-4	R96
5	土師器　有孔鉢	d	2 ～ 7 層	4/5	16.9	5.2	11.2	外・内：調整不明	図版 50-7	R106
6	弥生土器　甕	d4	K1-1 層	底部				外：撚糸文 R　内：ナデ　中期後葉あるいは後期終末	図版 50-5	R294
7	縄文 or 弥生土器		2 ～ 7 層	体部				外：縄文 LR　内：ナデ	図版 50-6	R320

第 57 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (8)



No.	器種	位置	層	特徴	写真図版	登録番号
1	銅鏡　珠文鏡	c2	10 ～ 13 層	破損　直径 55.0 mm　厚（1.2 ～ 1.7 mm）　重量（11.56g）　鏡背文様：(外から) 素文縁、鋸歯文、櫛歯文、珠文、一重圏線　鏡背面にわずかに赤色顔料付着　鏡面に繊維付着	図版 51-1	銅鏡 C
2	銅鏡　櫛歯文鏡	c3	10 ～ 13 層	完形　直径 55.0 mm　厚 0.8 ～ 2.2 mm　重量 16.41g　鏡背文様：(外から) 素文縁、二重櫛歯文、一重圏線　鏡背面に赤色顔料付着　鏡面に繊維付着	図版 51-2	銅鏡 D
3	鉄製品　剣	c1	10 ～ 13 層	身部　長 (5.6cm)　幅 (2.5cm)　厚（0.5cm）　重量（8.8g）	図版 52-3	鉄器 19+23
4	鉄製品　剣	d3	10 ～ 13 層	身部　長 (7.6cm)　幅 (2.9cm)　厚 0.6cm　重量（17.8g）	図版 52-2	鉄器 18
5	鉄製品　剣	c4	8 ～ 13 層	破損　長 (18.8cm)　幅 (2.7cm)　厚 (0.4 ～ 0.7cm)　重量 (43.9g)　身部長 (8.8cm)　身部幅 (2.7cm)　身部厚 (0.5 ～ 0.7cm)　茎部長 (10.0cm)　茎部幅 (1.5cm)　茎部厚 (0.4 ～ 0.5cm)　直角関　茎部に目釘・木質残存	図版 52-1	鉄器 14+22
6	鉄製品　剣	c1・3・4	8 ～ 13 層	破損　長 (10.3cm)　幅 1.9cm　厚 0.3cm　重量（10.5g）　身部長 6.4cm　身部幅 1.9cm　身部厚 0.3cm　茎部長 (3.9cm)　茎部幅 (0.8cm)　茎部厚 (0.3cm)　直角関　身部に繊維付着　茎部に木質残存	図版 52-4	鉄器 21+29
7	鉄製品　剣	c2	10 ～ 13 層	身部　長 (2.4cm)　幅 (3.1cm)　厚 0.5cm　重量（3.7g）	図版 52-5	鉄器 26
8	鉄製品　鏃	c3	8・9 層	破損　長 (2.8cm)　幅 (1.5cm)　厚（0.3cm）　重量（1.9g）　短茎　腸抉長三角形	図版 52-6	鉄器 25
9	鉄製品　鏃 or 剣	c2	8・9 層	破損　長 (2.3cm)　幅 (1.3cm)　厚 (0.2cm)　重量（0.8g）	図版 52-7	鉄器 20
10	鉄製品　両頭金具	c3	8・9 層	完形　長 (2.4cm)　幅 0.8cm　厚 0.8cm　重量 2.6g　頭部径 0.5cm　円筒部径 0.8cm　円筒部長 1.4cm　円筒部外面に木質残存	図版 52-8	鉄器 28

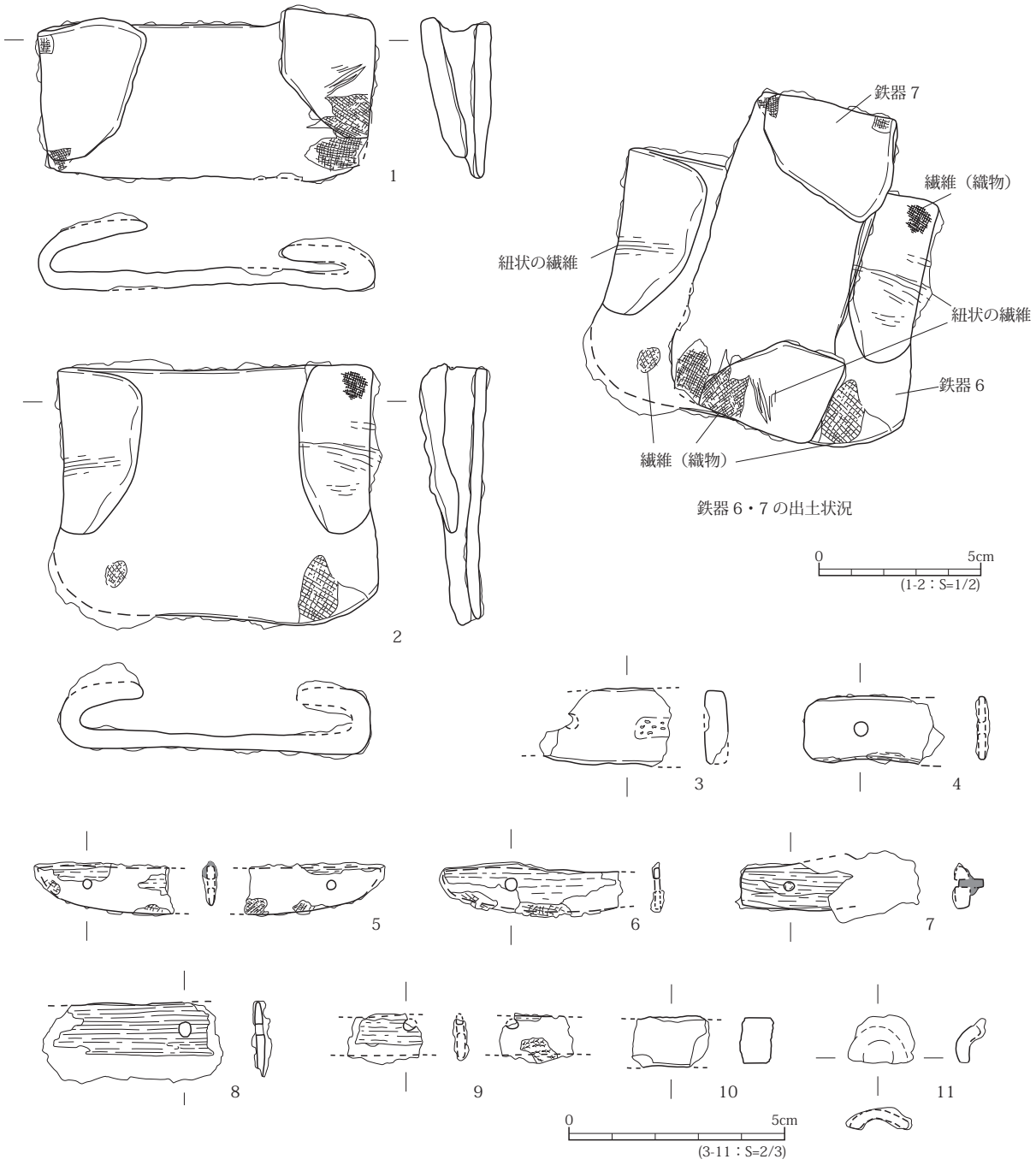
第 58 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (9)



（単位：cm）

No.	器種	位置	層	残存	長さ	幅	厚さ	重量(g)	特徴	写真図版	登録番号
1	鉄製品　斧	d2・3	8・9 層	完形	15.2	5.3	0.9 ～ 1.1	384.4	短冊形　基部幅 3.4cm　刃部幅 4.7cm　中央部から刃部にかけて繊維付着	図版 52-9	鉄器 1
2	鉄製品　斧	c4	8 ～ 13 層	完形	15.6	5.2	1.2	453.8	短冊形　基部幅 4.5cm　刃部幅 4.6cm　中央部から刃部にかけて繊維付着	図版 52-10	鉄器 3
3	鉄製品　斧	a3	10 ～ 13 層	完形	12.5	4.8	0.5 ～ 0.8	187.5	短冊形（撥状）　基部幅 4.1cm　刃部幅 4.8cm　基部近くの側面に繊維状の痕跡あり	図版 52-11	鉄器 2
4	鉄製品　斧	d2	8・9 層	完形	11.1	5.2		248	有袋有肩　袋部幅 3.4 ～ 3.8cm　袋部厚 3.0cm　刃部幅 5.2cm　刃部厚 0.7 ～ 1.0cm　袋部内に木質残存	図版 53-1	鉄器 4
5	鉄製品　斧	c2	8・9 層	ほぼ完形	11.6	4.2		164.9	有袋無肩　袋部幅 4.2cm　刃部幅 (3.8cm)　刃部厚 0.7 ～ 0.9cm　袋部内に木質残存	図版 53-2	鉄器 5
6	鉄製品　斧	c2	周溝堆積土	ほぼ完形	9.1	4.7		92.9	有袋有肩　袋部幅 2.6 ～ 3.1cm　袋部厚 2.3cm、刃部幅 4.7cm　刃部厚 0.4 ～ 0.5cm　袋部内に木質残存	図版 53-3	鉄器 32

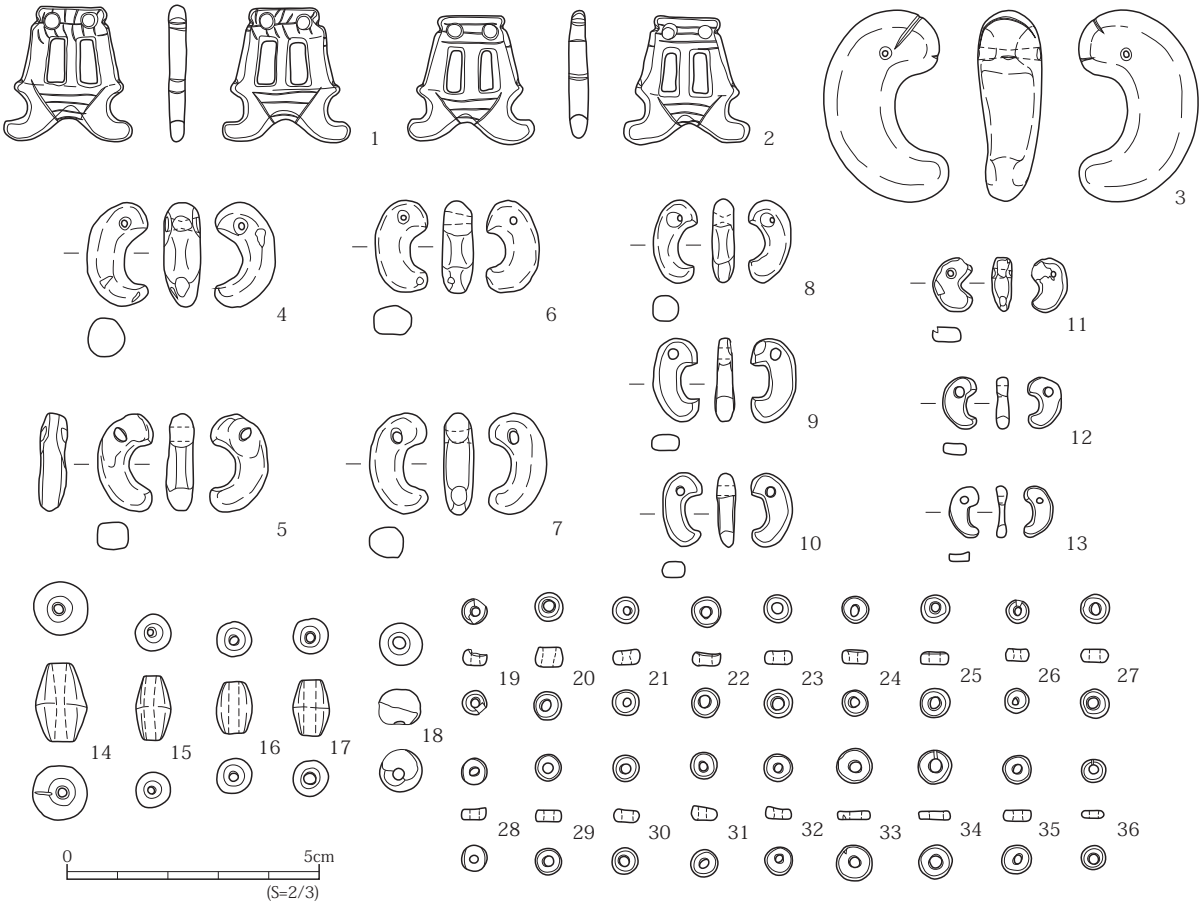
第 59 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (10)



（単位：cm）

No.	器種	位置	層	残存	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	特徴	写真図版	登録番号
1	鉄製品　方形板刃先	c4	8 ～ 13 層	完形	5.3	10.4	0.3 ～ 0.7	96.1	基部幅 1 0.4cm　刃部幅 9.5cm　折り返し部上半・刃部付近に繊維付着　折り返し部中位に紐状の有機質残存	図版 53-4	鉄器 7
2	鉄製品　方形板刃先	c4	8 ～ 13 層	完形	8	10.2	0.4 ～ 0.7	169.5	基部幅 9.7cm　刃部幅 10.2cm　折り返し部上半・刃部付近に繊維付着　折り返し部中位に紐状の有機質残存	図版 53-5	鉄器 6
3	鉄製品　刀子 or 剣	d3	8・9 層	茎部	(3.0)	(1.8)	(0.5)	4.9	有機質残存	図版 53-6	鉄器 30
4	鉄製品　工具	c3	8・9 層	茎部	(3.3)	(1.5)	(0.2)	2.7	目釘孔あり　木質残存	図版 53-7	鉄器 15
5	鉄製品　工具	c	10 ～ 13 層	茎部	(3.2)	(1.1)	(0.2)	1.8	目釘孔あり　繊維付着　木質残存	図版 53-8	鉄器 17
6	鉄製品　工具	c	10 ～ 13 層	茎部	(4.3)	(1.1)	(0.2)	2.1	目釘孔あり　繊維付着　木質残存	図版 53-9	鉄器 16
7	鉄製品　工具	c2	周溝堆積土	茎部	(2.8)	(1.4)	(0.5)	4.9	目釘穴あり　目釘・木質残存	図版 53-10	鉄器 31
8	鉄製品　工具	c	2 層	茎部	(4.2)	(1.8)	(0.3)	5.3	目釘孔あり　木質残存	図版 53-11	鉄器 8
9	鉄製品　工具	c1	10 ～ 13 層	茎部	(1.7)	(0.9)	(0.2)	0.8	目釘孔あり　繊維付着　木質残存	図版 53-12	鉄器 24
10	鉄製品　工具	d4	K1-2 層	一部	(1.6)	(1.1)	(0.8)	2.2		図版 53-13	鉄器 33
11	鉄製品　不明	c2	8 ～ 13 層	一部	(0.8)	(1.3)	(0.2)	0.7	繊維付着	図版 53-14	鉄器 27

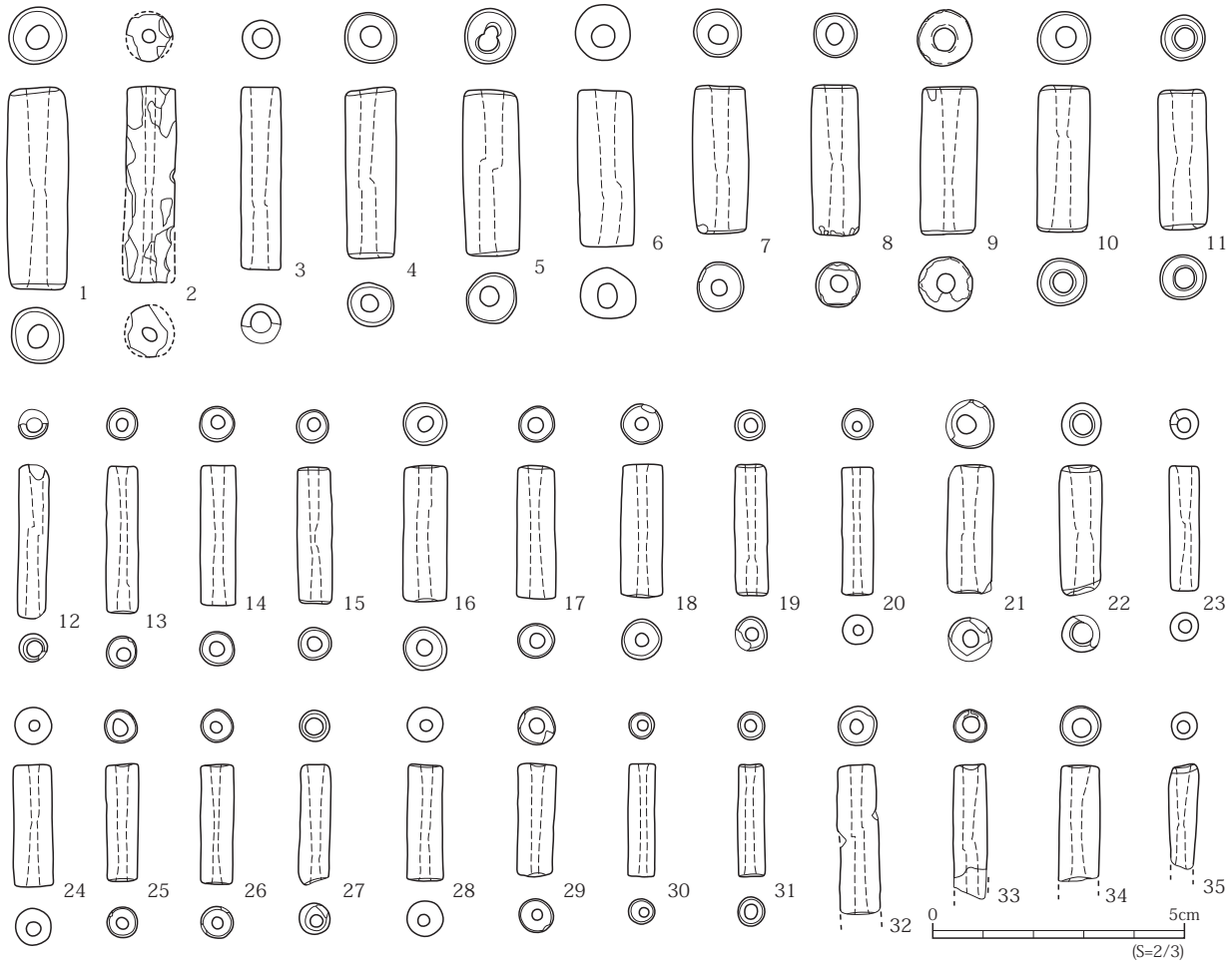
第 60 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (11)



（単位：mm）

No.	種類	位置	層	長さ	直径・幅	厚さ	孔径	重量(g)	石材	色調	特徴	写真図版	登録番号
1	石製品　垂飾品	c2	床	26.40	25.30	3.30	—	2.9	滑石	黒色		図版 54-1	垂飾品 1
2	石製品　垂飾品	c2	8・9 層	25.20	25.30	3.70	—	3.0	滑石	黒褐色		図版 54-2	垂飾品 101
3	玉類　勾玉	c3	床	39.80	24.70	13.25	—	6.8	琥珀	黒褐色半透明	両面穿孔　丁字頭	図版 54-3	勾玉 4
4	玉類　勾玉	c	8・9 層	20.75	12.30	7.90	3.05~3.75	2.0	滑石？	明緑灰色	両面穿孔	図版 54-5	勾玉 3
5	玉類　勾玉	c2	8・9 層	19.55	11.00	5.60	3.10~3.20	1.3	滑石	灰色	両面穿孔	図版 54-4	勾玉 104
6	玉類　勾玉	c3	8・9 層	18.60	10.95	5.95	2.30~3.90	1.6	水晶	無色透明	片面穿孔	図版 54-8	勾玉 2
7	玉類　勾玉	c3	10～13 層	19.95	11.95	6.25	3.05	1.8	滑石	オリーブ褐色	両面穿孔	図版 54-6	勾玉 107
8	玉類　勾玉	c3	8・9 層	16.35	8.60	5.25	3.55~4.00	1.0	水晶	無色透明	両面穿孔	図版 54-9	勾玉 105
9	玉類　勾玉	c2	8・9 層	16.60	9.25	3.80	3.35~3.50	0.7	滑石	オリーブ黒色	両面穿孔	図版 54-7	勾玉 103
10	玉類　勾玉	c3	10～13 層	14.35	8.00	3.35	2.60	0.5	滑石	にぶい黄色	両面穿孔	図版 54-10	勾玉 106
11	玉類　勾玉	c3	床	11.45	7.70	3.80	2.15~2.70	0.4	翡翠	明緑色	片面穿孔　半玦形	図版 54-11	勾玉 101
12	玉類　勾玉	c3	床	10.35	6.70	2.70	2.35	0.2	滑石	灰白色	両面穿孔	図版 54-12	勾玉 6
13	玉類　勾玉	c3	床	10.55	6.35	2.40	2.20~2.45	0.2	滑石	明緑灰色	両面穿孔	図版 54-13	勾玉 5
14	玉類　棗玉	c3	8・9 層	15.70	10.55	—	3.30~3.55	1.9	煙水晶	黒褐色半透明	両面穿孔	図版 54-14	棗玉 101
15	玉類　棗玉	c3	10～13 層	12.80	7.10	—	2.70	0.8	煙水晶	黒褐色半透明	両面穿孔	図版 54-15	棗玉 102
16	玉類　棗玉	c3	床	10.30	7.00	—	1.70	0.8	滑石	暗緑色	両面穿孔	図版 54-16	棗玉 1
17	玉類　棗玉	c3	床	11.40	7.35	—	1.40~2.10	0.7	滑石	明オリーブ灰色	両面穿孔	図版 54-17	棗玉 2
18	玉類　丸玉	c3	8・9 層	—	8.50	(6.50)	2.10	0.3	琥珀	黒褐色		図版 54-18	丸玉 101
19	玉類　丸玉	c3	8・9 層	—	(5.00)	(3.10)	1.80	0.1	琥珀	明赤褐色		-	丸玉 102
20	玉類　臼玉	c2	10～13 層	—	5.60	3.90	2.20	0.2	滑石	緑黒色		図版 54-19	臼玉 118
21	玉類　臼玉	c3	8・9 層	—	5.10	2.90	1.50	0.1	滑石	明緑灰色		図版 54-20	臼玉 105
22	玉類　臼玉	c3	8・9 層	—	5.70	2.50	2.10	0.1	滑石	明緑灰色		図版 54-21	臼玉 103
23	玉類　臼玉	c2	10～13 層	—	5.40	2.80	2.10	0.1	滑石	緑黒色		図版 54-22	臼玉 117
24	玉類　臼玉	c3	8・9 層	—	5.10	2.50	1.60	0.1	滑石	明緑灰色		図版 54-23	臼玉 112
25	玉類　臼玉	c2	10～13 層	—	5.60	2.70	2.00	0.1	滑石	緑黒色		図版 54-24	臼玉 110
26	玉類　臼玉	c3	8・9 層	—	4.50	2.10	1.70	0.1	滑石	明緑灰色		図版 54-25	臼玉 106
27	玉類　臼玉	c2	10～13 層	—	5.60	2.50	2.20	0.1	滑石	緑黒色		図版 54-26	臼玉 109
28	玉類　臼玉	c3	8・9 層	—	5.00	2.10	1.60	0.07	滑石	明緑灰色		図版 54-27	臼玉 102
29	玉類　臼玉	c3	8・9 層	—	5.10	2.40	1.80	0.1	滑石	緑灰色		図版 54-28	臼玉 113
30	玉類　臼玉	c3	8・9 層	—	5.10	2.70	1.90	0.1	滑石	緑灰色		図版 54-29	臼玉 114
31	玉類　臼玉	c3	8・9 層	—	5.20	2.80	1.90	0.1	滑石	明緑灰色		図版 54-30	臼玉 116
32	玉類　臼玉	c3	床	—	5.20	2.40	1.20	0.1	滑石	明緑灰色		図版 54-31	臼玉 107
33	玉類　臼玉	c2	10～13 層	—	6.60	1.40	2.10	0.1	滑石	オリーブ灰色		図版 54-32	臼玉 108
34	玉類　臼玉	c2	10～13 層	—	6.40	1.70	2.20	0.1	滑石	暗オリーブ灰色		図版 54-33	臼玉 111
35	玉類　臼玉	c3	8・9 層	—	5.40	2.20	1.70	0.1	滑石	明緑灰色		図版 54-34	臼玉 104
36	玉類　臼玉	c3	8・9 層	—	4.50	1.50	1.20	0.07	滑石	緑灰色		図版 54-35	臼玉 115

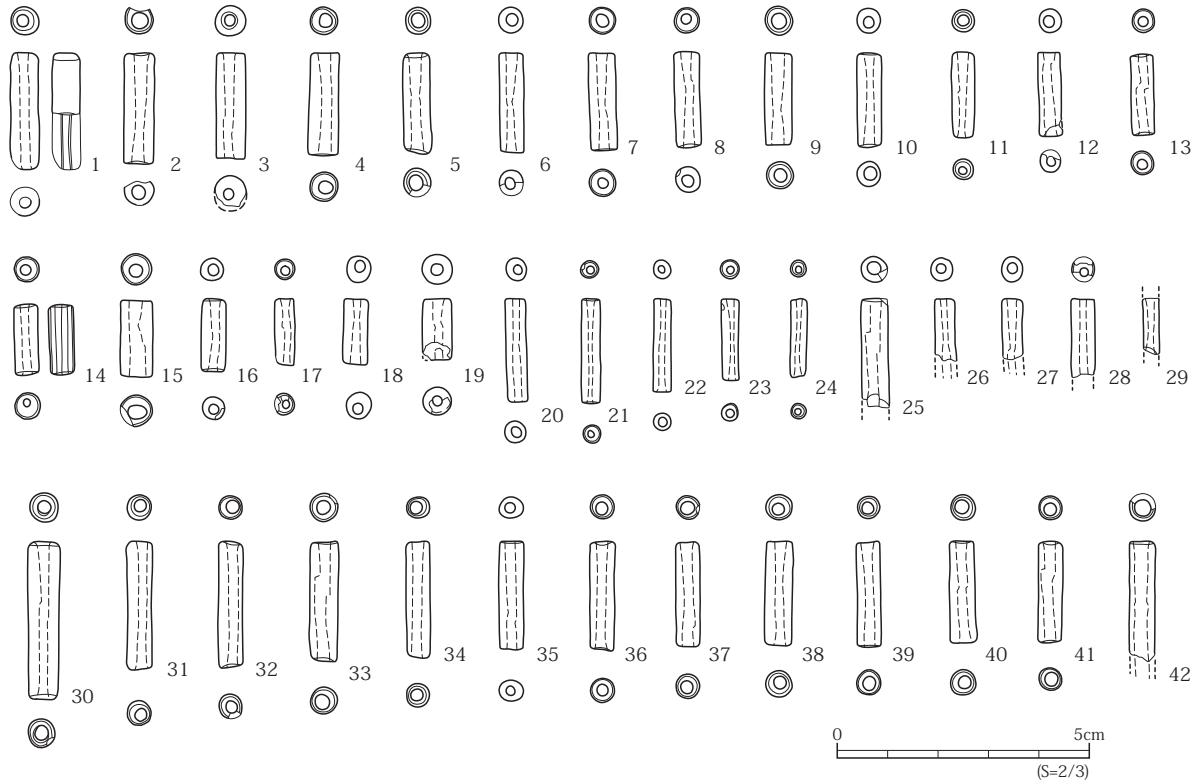
第 61 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (12)



（単位：㎜）

No.	種類	位置	層	長さ	直径	孔径	重量(g)	石材	色調	特徴	写真図版	登録番号
1	玉類　管玉	c2	床直上	39.45	12.10	4.5~5.0	11.0	緑色凝灰岩	暗青灰色	両面穿孔　スス付着	図版 54-36	管玉 29
2	玉類　管玉	c3	8・9 層	38.25	9.90	2.0~2.8	4.9	緑色凝灰岩	オリーブ黒色	両面穿孔	図版 54-37	管玉 137
3	玉類　管玉	d3	8・9 層	35.90	8.10	3.8~4.3	2.8	緑色凝灰岩	にぶい黄色	両面穿孔	図版 54-38	管玉 151
4	玉類　管玉	c2	床	33.45	10.00	3.0~3.8	5.4	緑色凝灰岩	灰オリーブ色	両面穿孔　スス付着	図版 54-39	管玉 22
5	玉類　管玉	c2	床	32.20	11.15	3.4~4.2	7.3	緑色凝灰岩	緑灰色	両面穿孔　スス付着	図版 54-40	管玉 26
6	玉類　管玉	d3	8・9 層	30.45	11.15	4.5~5.0	5.5	緑色凝灰岩	灰オリーブ色	両面穿孔	図版 54-41	管玉 19
7	玉類　管玉	c3	8・9 層	28.95	10.45	3.2~4.0	4.8	緑色凝灰岩	浅黄色	両面穿孔	図版 54-42	管玉 104
8	玉類　管玉	c3	床	29.30	9.45	3.0~3.3	4.2	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 54-43	管玉 51
9	玉類　管玉	c3	周溝 1 層	29.20	11.40	3.6~4.1	5.2	緑色凝灰岩	浅黄色	両面穿孔	図版 54-44	管玉 58
10	玉類　管玉	c3	8・9 層	28.60	10.25	3.0~4.0	5.5	緑色凝灰岩	緑灰色	両面穿孔　スス付着	図版 54-45	管玉 7
11	玉類　管玉	c3	床	27.50	9.45	4.5~4.8	4.2	緑色凝灰岩	青灰色	両面穿孔	図版 54-46	管玉 54
12	玉類　管玉	c2	床	30.00	5.90	3.2~3.4	0.9	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 54-47	管玉 20
13	玉類　管玉	c3	10～13 層	28.70	6.20	2.2~2.7	1.6	緑色凝灰岩	灰オリーブ色	両面穿孔　スス付着	図版 54-48	管玉 112
14	玉類　管玉	c4	10～13 層	27.40	7.05	2.6~2.7	2.3	緑色凝灰岩	暗緑灰色	両面穿孔	図版 54-49	管玉 37
15	玉類　管玉	c3	8・9 層	26.95	6.75	2.1	1.9	緑色凝灰岩	灰白色	両面穿孔	図版 54-50	管玉 102
16	玉類　管玉	c2	床	26.00	8.60	2.7~2.8	3.4	緑色凝灰岩	緑黒色	両面穿孔	図版 54-51	管玉 25
17	玉類　管玉	c2	8・9 層	25.95	7.55	2.6~3.4	2.7	緑色凝灰岩	オリーブ灰色	両面穿孔	図版 54-52	管玉 1
18	玉類　管玉	c2	床	25.95	8.30	2.3~2.5	3.1	緑色凝灰岩	暗緑灰色	両面穿孔	図版 54-53	管玉 24
19	玉類　管玉	c3	8・9 層	26.00	6.45	2.1	0.8	緑色凝灰岩	明オリーブ灰色	両面穿孔	図版 54-54	管玉 114
20	玉類　管玉	c3	床	25.00	6.15	1.7~2.1	1.3	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 54-55	管玉 52
21	玉類　管玉	c2	床	24.65	8.80	3.4~3.7	2.3	緑色凝灰岩	灰白色	両面穿孔	図版 54-56	管玉 23
22	玉類　管玉	c3	8・9 層	25.05	8.35	4.3~5.0	1.3	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 54-57	管玉 101
23	玉類　管玉	d3	8・9 層	24.85	5.95	2.8	1.2	緑色凝灰岩	にぶい黄褐色	両面穿孔	図版 54-58	管玉 150
24	玉類　管玉	c3	8・9 層	23.70	7.70	2.1~2.5	2.4	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 54-59	管玉 120
25	玉類　管玉	c3	床	22.95	6.45	2.4~2.6	1.4	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 54-60	管玉 56
26	玉類　管玉	c3	8・9 層	23.30	6.45	2.1~2.3	1.3	緑色凝灰岩	暗暗灰色	両面穿孔　スス付着	図版 54-61	管玉 34
27	玉類　管玉	c4	10～13 層	23.60	6.20	2.5~3.4	0.7	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 54-62	管玉 39
28	玉類　管玉	c2	床直上	22.50	7.25	2.1~2.4	2.0	緑色凝灰岩	暗緑灰色	両面穿孔	図版 54-63	管玉 28
29	玉類　管玉	c3	床	21.85	7.50	1.7~3.0	1.7	緑色凝灰岩	明緑灰色	片面穿孔？	図版 54-64	管玉 53
30	玉類　管玉	c2	床	22.10	5.30	1.8~1.9	0.9	緑色凝灰岩	オリーブ灰色	両面穿孔	図版 54-65	管玉 21
31	玉類　管玉	c2	8・9 層	21.95	5.30	2.1~2.5	0.9	緑色凝灰岩	オリーブ灰色	両面穿孔	図版 54-66	管玉 130
32	玉類　管玉	c4	10～13 層	(29.80)	8.00	2.6~2.7	1.1	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 54-70	管玉 40
33	玉類　管玉	c4	10～13 層	(20.90)	6.70	2.8~3.2	0.9	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 54-71	管玉 38
34	玉類　管玉	c2	床直上	(22.60)	8.30	3.3~3.7	1.8	緑色凝灰岩	淡黄色	両面穿孔　スス付着	図版 54-72	管玉 30
35	玉類　管玉	d3	8・9 層	(20.90)	4.5～5.8	2.2~3.4	0.6	緑色凝灰岩	灰白色	両面穿孔	図版 54-73	管玉 154

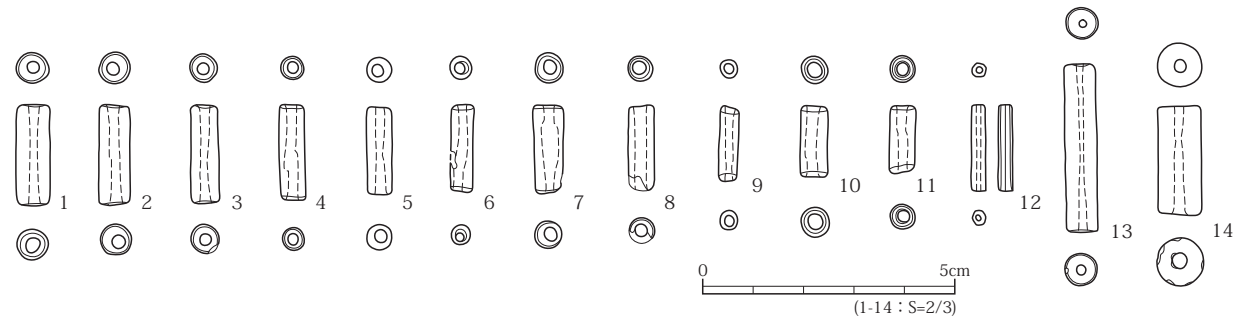
第 62 図　SI13 竪穴建物跡出土遺物 (13)

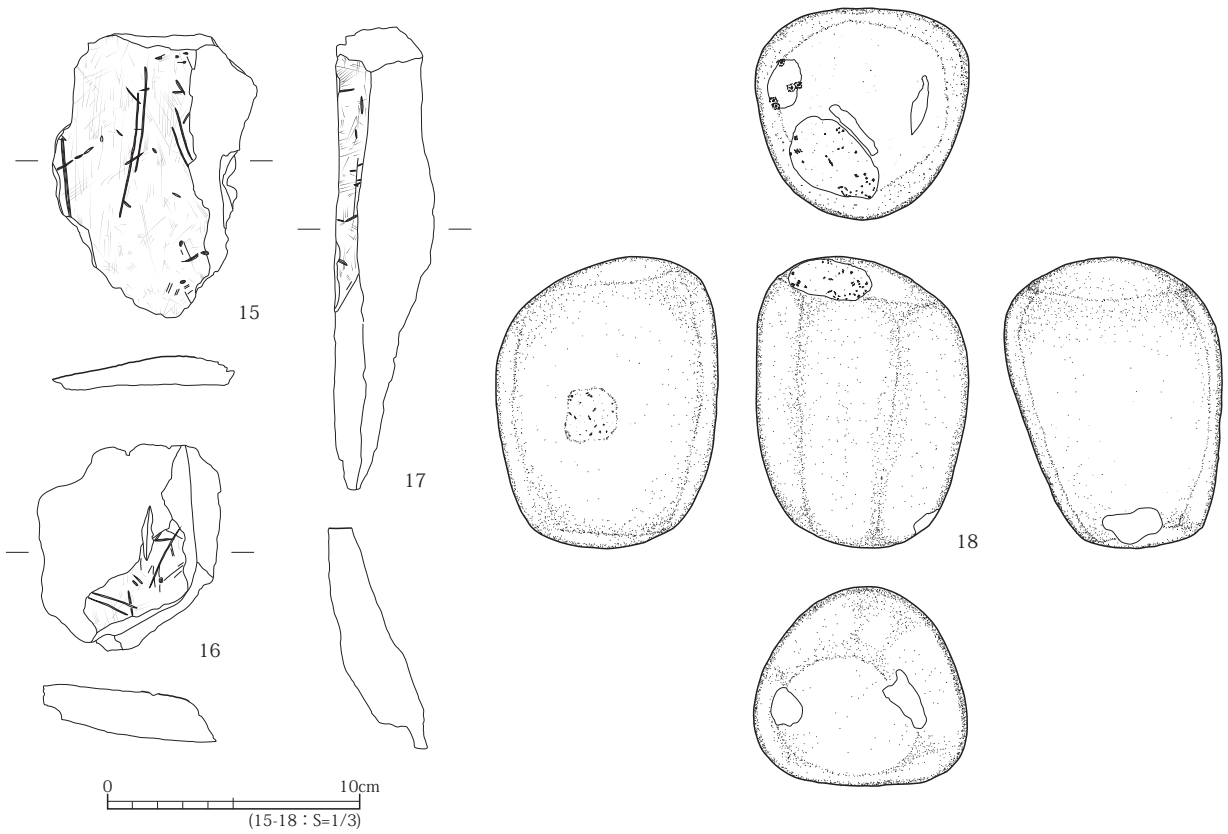


（単位：mm）

No.	種類	位置	層	長さ	直径	孔径	重量(g)	石材	色調	特徴	写真図版	登録番号
1	玉類　管玉	c2	8・9層	23.00	5.95	2.2~2.3	0.5	緑色凝灰岩	灰オリーブ色	両面穿孔　スス付着	図版 54-74	管玉 133
2	玉類　管玉	c3	8・9層	21.60	6.00	2.7~3.0	0.7	緑色凝灰岩	灰色	両面穿孔　スス付着	図版 54-75	管玉 16
3	玉類　管玉	c3	8・9層	21.05	6.00	1.8~2.8	0.9	緑色凝灰岩	灰色	両面穿孔	図版 54-76	管玉 138
4	玉類　管玉	c1・2	2層	20.00	6.00	2.3~2.7	0.4	緑色凝灰岩	灰白色	両面穿孔	図版 54-77	管玉 3
5	玉類　管玉	c3	8・9層	19.90	5.45	2.8~3.1	0.4	緑色凝灰岩	灰白色	両面穿孔	図版 54-78	管玉 118
6	玉類　管玉	c3	8・9層	19.90	4.90	2.0~2.2	0.6	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 54-79	管玉 116
7	玉類　管玉	c3	床	19.25	5.45	2.2~2.5	0.8	緑色凝灰岩	灰白色	両面穿孔	図版 54-67	管玉 46
8	玉類　管玉	c4	10～13層	18.50	5.10	2.2~2.4	0.7	緑色凝灰岩	灰オリーブ色	両面穿孔	図版 54-68	管玉 107
9	玉類　管玉	d4	8・9層	18.90	5.45	2.3~2.7	0.9	緑色凝灰岩	暗灰オリーブ色	両面穿孔	図版 54-69	管玉 146
10	玉類　管玉	c3	8・9層	18.00	4.95	2.0~2.7	0.7	緑色凝灰岩	灰オリーブ色	両面穿孔	図版 54-80	管玉 4
11	玉類　管玉	c3	床	17.00	4.65	1.6~2.3	0.2	緑色凝灰岩	灰白色	両面穿孔	図版 54-81	管玉 48
12	玉類　管玉	c3	床	(16.30)	4.50	2.0~2.4	0.4	緑色凝灰岩	灰オリーブ色	両面穿孔	図版 54-82	管玉 123
13	玉類　管玉	c3	床	15.75	4.65	1.9~2.1	0.2	緑色凝灰岩	灰白色	両面穿孔	図版 54-83	管玉 49
14	玉類　管玉	c3	床	13.55	4.95	1.7~1.9	0.5	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔　側面稜残る	図版 54-84	管玉 55
15	玉類　管玉	c3	8・9層	15.05	6.45	2.6~3.4	0.6	緑色凝灰岩	浅黄色	両面穿孔　被熱痕あり	図版 54-85	管玉 15
16	玉類　管玉	d4	10～13層	14.40	4.90	1.8	0.2	緑色凝灰岩	灰白色	両面穿孔	図版 54-86	管玉 145
17	玉類　管玉	c3	8・9層	(13.30)	4.25	1.6~1.9	0.2	緑色凝灰岩	淡黄色	両面穿孔	図版 55-1	管玉 17
18	玉類　管玉	c3	8・9層	12.70	4.95	1.8	0.4	緑色凝灰岩	明オリーブ色	両面穿孔	図版 55-2	管玉 121
19	玉類　管玉	c3	周溝1層	12.10	6.00	1.7~2.1	0.6	緑色凝灰岩	灰	両面穿孔	図版 55-3	管玉 59
20	玉類　管玉	c3	8・9層	20.30	4.10	1.4	0.4	緑色凝灰岩	灰オリーブ色	両面穿孔	図版 55-4	管玉 119
21	玉類　管玉	c3	8・9層	20.45	3.75	1.1~1.5	0.4	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔　スス付着	図版 55-5	管玉 103
22	玉類　管玉	不明	清掃中	18.10	3.65	1.2~1.6	0.3	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 55-6	管玉 148
23	玉類　管玉	c3	10～13層	16.00	3.55	1.4~1.6	0.2	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 55-7	管玉 110
24	玉類　管玉	c3	8・9層	(15.50)	(3.50)	1.2~1.5	0.1	緑色凝灰岩	灰白色	両面穿孔	図版 55-8	管玉 42
25	玉類　管玉	b4	8・9層	21.60	5.40	2.0~2.1	0.7	緑色凝灰岩	暗オリーブ灰色	両面穿孔	図版 55-9	管玉 9
26	玉類　管玉	c3	床	(12.60)	4.20	1.5	0.2	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 55-10	管玉 125
27	玉類　管玉	c3	床	(12.45)	4.00	1.8	0.2	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 55-11	管玉 124+126
28	玉類　管玉	c2	8・9層	(15.45)	4.90	1.0~1.3	0.4	緑色凝灰岩	明オリーブ灰色	両面穿孔	図版 55-12	管玉 11
29	玉類　管玉	c3	8・9層	(11.05)	3.30	1.7~1.9	0.07	緑色凝灰岩	明緑灰色	両面穿孔	図版 55-13	管玉 43
30	玉類　管玉	c3	8・9層	30.90	6.15	2.6~3.0	2.0	滑石	オリーブ黒色	両面穿孔　被熱痕あり	図版 55-14	管玉 134
31	玉類　管玉	c3	10～13層	25.10	4.95	2.1~2.5	0.9	滑石	明オリーブ灰色	両面穿孔	図版 55-15	管玉 109
32	玉類　管玉	c2	床直上	24.70	4.85	2.5~2.6	0.9	滑石	明オリーブ灰色	両面穿孔　スス付着	図版 55-16	管玉 27
33	玉類　管玉	c3	8・9層	19.15	5.60	2.6~2.9	1.1	滑石	オリーブ黒色	両面穿孔　スス付着	図版 55-17	管玉 13
34	玉類　管玉	c3	8・9層	23.00	4.45	2.2~2.4	0.6	滑石	オリーブ灰色	両面穿孔	図版 55-18	管玉 12
35	玉類　管玉	c3	8・9層	21.10	4.80	1.8~2.0	0.8	滑石	暗緑灰色	両面穿孔　被熱痕あり	図版 55-19	管玉 136
36	玉類　管玉	c2	床直上	21.35	4.90	2.1~2.2	0.8	滑石	明オリーブ灰色	両面穿孔　スス付着	図版 55-20	管玉 31
37	玉類　管玉	c2	8・9層	20.45	4.70	2.5~2.8	0.7	滑石	明オリーブ灰色	両面穿孔	図版 55-21	管玉 5
38	玉類　管玉	c3	8・9層	20.15	5.05	2.3~2.4	1.0	滑石	オリーブ黒色	両面穿孔	図版 55-22	管玉 14
39	玉類　管玉	c2	8・9層	20.60	4.70	2.3~2.5	0.7	滑石	灰白色	両面穿孔	図版 55-23	管玉 6
40	玉類　管玉	c3	8・9層	20.60	5.35	2.2~2.3	0.9	滑石	緑黒色	両面穿孔	図版 55-24	管玉 36
41	玉類　管玉	c3	8・9層	19.70	4.70	2.4~2.5	0.6	滑石	オリーブ黒色	両面穿孔	図版 55-25	管玉 105
42	玉類　管玉	d2	10～13層	23.75	5.15	3.8	0.8	滑石	オリーブ黄色	両面穿孔	図版 55-26	管玉 152

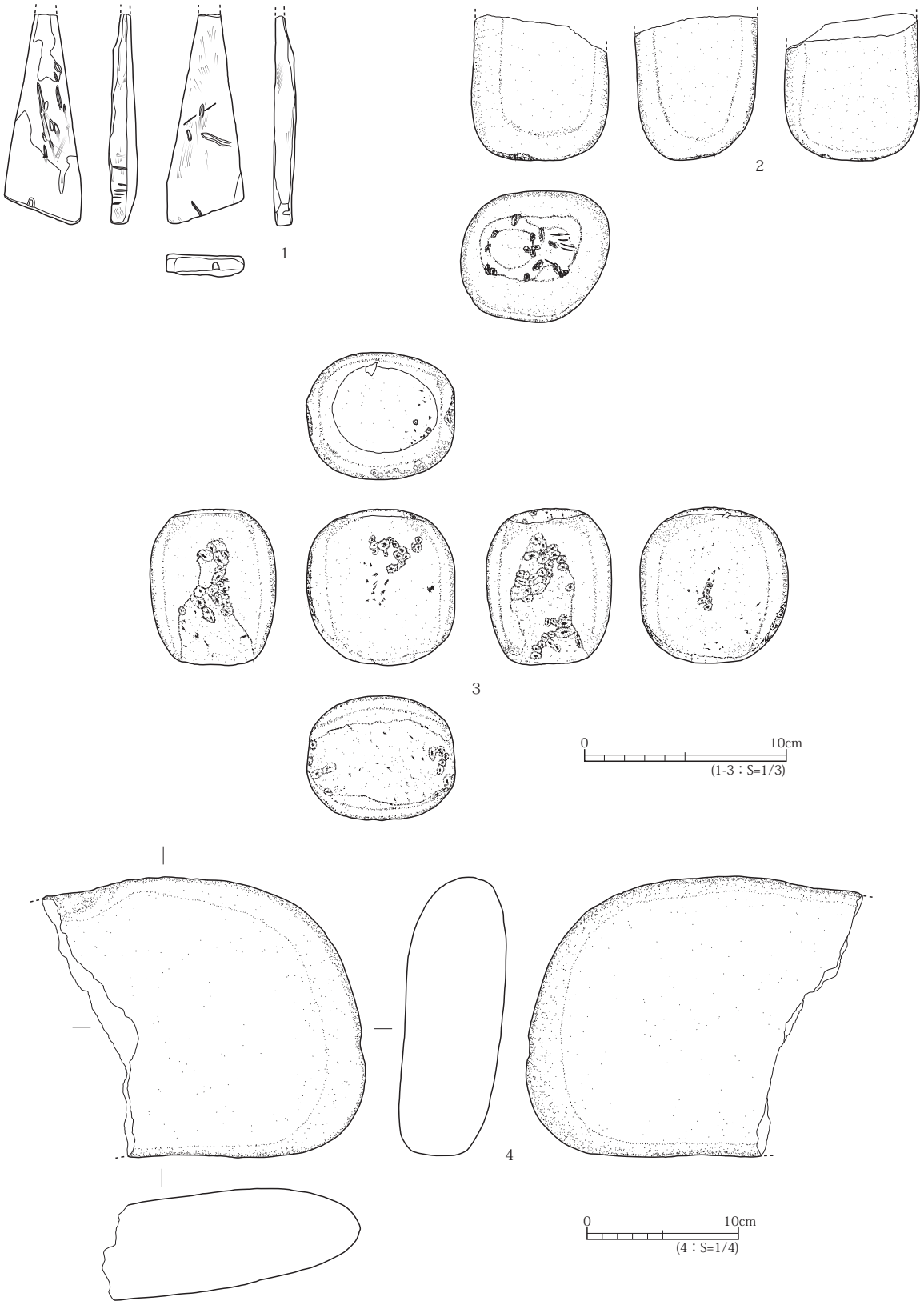
第 63 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (14)





No.	種類	位置	層	長さ (㎜)	直径 (㎜)	孔径 (㎜)	重量 (g)	石材	色調	特徴	写真図版	登録番号
1	玉類　管玉	c1・2	8・9 層	19.45	6.80	2.3~2.6	1.5	滑石	暗緑灰色	両面穿孔	図版 55-27	管玉 2
2	玉類　管玉	c3	床	19.45	6.35	2.5~2.7	1.3	滑石	オリーブ灰色	両面穿孔	図版 55-28	管玉 47
3	玉類　管玉	c3	8・9 層	23.55	5.55	2.3~2.4	1.0	滑石	緑黒色	両面穿孔　スス付着	図版 55-29	管玉 35
4	玉類　管玉	c2	10 ～ 13 層	18.85	4.95	2.1~2.3	0.7	滑石	オリーブ灰色	両面穿孔　スス付着	図版 55-30	管玉 131
5	玉類　管玉	b2	8・9 層	17.35	4.90	1.8~2.1	0.7	滑石	浅黄色	両面穿孔	図版 55-31	管玉 153
6	玉類　管玉	c3	10 ～ 13 層	17.25	4.60	1.8	0.5	滑石	暗灰黄色	両面穿孔　スス付着	図版 55-32	管玉 140
7	玉類　管玉	c4	8・9 層	17.25	6.15	1.6~2.3	0.9	滑石	オリーブ黒色	両面穿孔	図版 55-33	管玉 143
8	玉類　管玉	c3	8・9 層	16.90	5.30	2.4~2.5	0.7	滑石	黒色	両面穿孔　スス付着	図版 55-34	管玉 33
9	玉類　管玉	d3	10 ～ 13 層	14.95	3.65	1.7~2.0	0.3	滑石	暗オリーブ灰色	両面穿孔　被熱痕あり	図版 55-35	管玉 144
10	玉類　管玉	c3	8・9 層	14.10	5.65	2.1~2.8	0.6	滑石	オリーブ黒色	両面穿孔	図版 55-36	管玉 139
11	玉類　管玉	c2	10 ～ 13 層	13.50	5.10	2.0~2.4	0.6	滑石	オリーブ黒色	両面穿孔　スス付着	図版 55-37	管玉 129
12	玉類　管玉	c3	8・9 層	16.85	2.85	0.8	0.2	鉄石英	赤褐色	片面穿孔　石針　側面稜残す	図版 55-38	管玉 141
13	玉類　管玉	c3	10 ～ 13 層	32.90	6.45	1.6~2.0	2.2	碧玉	暗濃緑色	猿八産　両面穿孔	図版 55-39	管玉 108
14	玉類　管玉	c3	10 ～ 13 層	(21.20)	8.70	1.8~2.5	2.9	碧玉	灰オリーブ色	女代南 B 群　両面穿孔　石針	図版 55-40	管玉 111
15	石製品　砥石		2 ～ 7 層	長 (11.2cm)　幅 (7.2cm)　厚 (1.2cm)　重 (92.5g)　破損　頁岩製　砥面 1 面							図版 57-4	R118
16	石製品　砥石		2 ～ 7 層	長 (8.7cm) 幅 (7.4cm) 厚 (2.0cm) 重 (102.6g)　破損　頁岩製　砥面 1 面							図版 57-5	R117
17	石製品　砥石		2 ～ 7 層	長 (18.3cm) 幅 (2.5cm) 厚 (9.6cm) 重 (406.1g)　破損　頁岩製　砥面 1 面　15 ～ 17 は同一個体							図版 57-3	R116
18	石器　磨石		2 層	長 11.9cm 幅 8.6cm 厚 8.7cm 重 1360g 完形　砂岩製　一面に敲打痕　それ以外磨面							図版 57-6	R114

第 64 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (15)



（単位：cm）

No.	器種	層	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	特徴	写真図版	登録番号
1	石製品　砥石	10 ～ 13 層	(10.5)	3.9	1.1	(49.5)	破損　凝灰岩製　砥面 4 面	図版 56-68	R115
2	石器　磨＋敲石	8・9 層	(7.4)	(7.2)	(6.2)	(540)	破損　砂岩製　全面磨面　端部に敲打痕	図版 56-69	R112
3	石器　磨＋敲石	10 ～ 13 層	7.9	7.5	6.3	550	完形　砂岩製　表裏・側面に敲打痕　それ以外磨面	図版 57-1	R113
4	石器　台石	8・10 層	(18.5)	(18.4)	(6.5)	(3,930)	破損　安山岩製	図版 57-2	R111

第 65 図　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (16)

第３－１表　ガラス小玉観察表（１）

（単位：㎜）

図版 No.	位置	層	材質	色調	製作技法	端面	長軸	短軸	厚さ	孔径	重量 (g)	備考	登録番号
図版 55-41	c3	8・9 層	カリガラス	紺色	引き伸ばし	＋	4.5	4.5	3.1 ～ 3.7	1.5 ～ 1.7	0.11		ガラス玉 125
図版 55-42	c3	床	カリガラス	紺色	引き伸ばし	＋	8.2	7.9	5.6 ～ 6.2	2.7 ～ 3.2	0.54		ガラス玉 163
図版 55-43	c3	床	カリガラス	紺色	引き伸ばし	＋	8.6	7.5	6.0 ～ 6.3	3.3 ～ 3.8	0.52		ガラス玉 164
図版 55-44	c1	10 ～ 13 層	カリガラス	濃青色	引き伸ばし	＋	6.6	5.6	5.8	1.6 ～ 1.8	0.34		ガラス玉 180
図版 55-45	c2	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.9	4.0	2.7	1.6 ～ 1.8	0.08		ガラス玉 2
図版 55-46	c2	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.3	4.2	2.9	1.1	0.08		ガラス玉 5
図版 55-47	b3	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.2	3.7	2.6	1.0	0.06		ガラス玉 6
図版 55-48	c4	周溝 1 層	ソーダガラス	淡青色		＋	5.8	5.2	4.8	1.4	0.22		ガラス玉 8
図版 55-49	d3	K1　上層	カリガラス	淡青色		＋	3.1	2.9	3.8	1.2 ～ 1.4	0.06		ガラス玉 9
図版 55-50	d3	K1　上層	カリガラス	淡青色		＋	4.2	4.0	3.1	1.4 ～ 1.6	0.07		ガラス玉 10
図版 55-51	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.3	4.7	2.7 ～ 3.3	2.2	0.10		ガラス玉 101
図版 55-52	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.3	4.2	2.6	1.4	0.07		ガラス玉 102
図版 55-53	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.4	4.3	3.2 ～ 3.6	1.6 ～ 1.8	0.09		ガラス玉 103
図版 55-54	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.2	4.0	2.6 ～ 3.1	1.4	0.07		ガラス玉 104
図版 55-55	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.9	3.9	3.1	1.1	0.07		ガラス玉 105
図版 55-56	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.2	4.0	2.8	1.3 ～ 1.5	0.07		ガラス玉 106
図版 55-57	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.0	4.0	2.4	1.2	0.06		ガラス玉 108
図版 55-58	c3	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.0	3.9	2.3	1.6	0.05		ガラス玉 109
図版 55-59	c3	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.4	3.2	2.9 ～ 3.1	1.3	0.04		ガラス玉 110
図版 55-60	c3	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.9	3.8	3.1	1.3	0.06		ガラス玉 111
図版 55-61	c3	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.0	4.0	2.3 ～ 2.7	1.2	0.06		ガラス玉 112
図版 55-62	c3	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.6	3.6	2.6 ～ 3.0	1.0	0.06		ガラス玉 113
図版 55-63	c3	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.5	3.5	3.8	1.1	0.06		ガラス玉 114
図版 55-64	c3	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.9	3.9	3.0	1.2 ～ 0.8	0.07		ガラス玉 116
図版 55-65	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.2	4.1	3.4 ～ 3.7	1.1 ～ 1.4	0.09		ガラス玉 119
図版 55-66	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	6.1	5.9	2.7 ～ 3.6	1.9	0.17		ガラス玉 120
図版 55-67	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.6	4.3	3.0 ～ 3.7	1.5 ～ 1.8	0.10		ガラス玉 121
図版 55-68	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.1	3.9	2.6 ～ 2.9	1.3 ～ 1.6	0.07		ガラス玉 122
図版 55-69	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.2	3.7	3.4	1.1	0.09		ガラス玉 123
図版 55-70	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.1	4.1	1.9 ～ 2.5	1.4 ～ 1.6	0.06		ガラス玉 124
図版 55-71	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.4	3.9	2.9 ～ 3.1	1.3	0.08		ガラス玉 126
図版 55-72	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.5	3.3	2.8	1.2	0.05		ガラス玉 127
図版 55-73	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.3	3.9	3.1 ～ 3.4	1.2 ～ 1.5	0.09		ガラス玉 128
図版 55-74	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.0	3.9	2.9	1.2	0.07		ガラス玉 130
図版 55-75	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.3	4.1	3.2	1.2 ～ 1.5	0.09		ガラス玉 131
図版 55-76	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.0	4.0	2.6 ～ 3.2	1.2 ～ 1.4	0.07		ガラス玉 132
図版 55-77	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.2	4.0	2.1 ～ 2.3	1.4	0.07		ガラス玉 133
図版 55-78	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.9	3.5	2.7	1.1	0.06		ガラス玉 134
図版 55-79	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.4	3.4	2.3 ～ 3.6	1.5	0.05		ガラス玉 135
図版 55-80	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.3	4.2	2.9	1.4 ～ 1.8	0.08		ガラス玉 136
図版 55-81	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.9	3.9	2.9 ～ 3.6	1.5	0.08		ガラス玉 138
図版 55-82	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.8	4.8	4.3	1.5	0.14		ガラス玉 139
図版 55-83	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.3	4.8	2.9 ～ 3.6	1.4 ～ 1.6	0.13		ガラス玉 140
図版 55-84	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.5	5.2	2.8 ～ 2.3	1.6 ～ 1.8	0.12		ガラス玉 141
図版 55-85	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.3	4.9	2.4 ～ 2.6	2.0	0.10		ガラス玉 143
図版 55-86	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	6.9	6.4	(4.2)	1.6 ～ 2.0	0.24		ガラス玉 146
図版 55-87	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.2	3.9	3.0	1.2	0.08		ガラス玉 147
図版 55-88	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.3	4.8	2.1	1.6 ～ 2.2	0.08		ガラス玉 148
図版 55-89	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.2	4.8	2.1 ～ 2.6	1.4	0.10		ガラス玉 152
図版 55-90	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.6	(4.9)	3.7 ～ 4.7	1.6	0.18		ガラス玉 154
図版 55-91	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.2	5.1	3.2 ～ 3.7	1.3 ～ 1.5	0.15		ガラス玉 156
図版 55-92	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.9	4.9	3.4	1.5 ～ 1.6	0.13		ガラス玉 158
図版 55-93	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.2	5.0	2.8 ～ 3.3	2.1	0.12		ガラス玉 159
図版 55-94	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.1	5.1	3.6 ～ 3.9	2.1 ～ 2.5	0.14		ガラス玉 161
図版 55-95	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.7	5.1	3.7 ～ 4.3	1.6 ～ 2.0	0.20		ガラス玉 162
図版 56-01	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	6.5	6.4	4.9	1.5 ～ 1.7	0.31		ガラス玉 166
図版 56-02	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.0	4.7	4.4	1.3 ～ 1.5	0.15		ガラス玉 167
図版 56-03	d3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.7	4.4	5.1 ～ 5.7	1.7 ～ 1.9	0.18		ガラス玉 171
図版 56-04	c1	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.3	4.1	1.9 ～ 3.0	0.8 ～ 1.2	0.07		ガラス玉 172
図版 56-05	c1	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.2	4.1	3.2	1.4	0.08		ガラス玉 173
図版 56-06	c1	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.5	3.3	3.2	1.3 ～ 1.8	0.06		ガラス玉 174
図版 56-07	c1	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.9	3.9	2.5	1.1	0.06		ガラス玉 175
図版 56-08	c1	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.3	4.0	3.6	1.3	0.10		ガラス玉 176
図版 56-09	c1	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.4	4.4	3.1	1.4 ～ 1.6	0.09		ガラス玉 178
図版 56-10	c1	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.9	4.8	2.3	2.1	0.08		ガラス玉 179
図版 56-11	c2	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.0	3.9	3.3	1.5	0.07		ガラス玉 181
図版 56-12	c2	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.6	4.5	2.3 ～ 2.5	1.4	0.08		ガラス玉 185
図版 56-13	c2	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.3	3.8	2.7	1.4 ～ 1.6	0.06		ガラス玉 187
図版 56-14	c2	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.8	3.5	3.1 ～ 3.3	1.3 ～ 1.5	0.06		ガラス玉 188
図版 56-15	c2・3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.5	4.3	2.2	1.3	0.07		ガラス玉 189
図版 56-16	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.3	3.8	2.8	1.2 ～ 1.6	0.07		ガラス玉 190
図版 56-17	c3	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.3	5.2	1.9 ～ 2.1	1.4 ～ 1.8	0.10		ガラス玉 192
図版 56-18	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.8	3.6	3.1	1.4 ～ 1.7	0.06		ガラス玉 193
図版 56-19	c3	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.1	5.6	5.0	1.7	0.21		ガラス玉 194
図版 56-20	c3	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	5.2	5.0	2.8 ～ 3.1	1.6	0.12		ガラス玉 199
図版 56-21	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.3	4.1	2.5	1.1	0.07		ガラス玉 200
図版 56-22	c3	10 ～ 13 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.2	4.0	2.3	1.8 ～ 2.1	0.06		ガラス玉 202
図版 56-23	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.2	3.9	2.2 ～ 2.5	1.4	0.07		ガラス玉 203
図版 56-24	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.0	3.8	2.4 ～ 2.8	1.3 ～ 1.5	0.07		ガラス玉 204
図版 56-25	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.3	3.3	2.0	1.1	0.03		ガラス玉 205

第３－２表　ガラス小玉観察表（２）

（単位：㎜）

図版 No.	位置	層	材質	色調	製作技法	端面	長軸	短軸	厚さ	孔径	重量 (g)	備考	登録番号
図版 56-26	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.0	(1.7)	2.8	1.4	0.02		ガラス玉 206
図版 56-27	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.8	3.8	1.9	1.6	0.04		ガラス玉 208
図版 56-28	c3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	3.1	3.1	2.0	1.1	0.03		ガラス玉 210
図版 56-29	不明	清掃中	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.2	3.9	2.9	1.2 ～ 1.4	0.08		ガラス玉 213
図版 56-30	d3	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.0	3.7	3.8	1.0 ～ 1.2	0.07		ガラス玉 214
図版 56-31	c4	8・9 層	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	4.6	4.4	4.5	2.0	0.14	被熱で表面赤変	ガラス玉 215
図版 56-32	c3	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	－	4.2	4.2	2.8	1.9	0.06		ガラス玉 1
図版 56-33	d3	10 ～ 13 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	－	5.1	4.5	3.2 ～ 3.6	1.6	0.11		ガラス玉 3
図版 56-34	c2	床	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	－	4.4	4.3	2.5	0.9	0.06		ガラス玉 4
図版 56-35	c2	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	－	4.6	4.2	3.6 ～ 4.0	1.8 ～ 2.1	0.11		ガラス玉 7
図版 56-36	c3	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	4.3	4.1	2.8 ～ 3.2	1.6	0.08		ガラス玉 107
図版 56-37	c3	10 ～ 13 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	－	5.1	5.0	3.0	1.4	0.11		ガラス玉 115
図版 56-38	c3	10 ～ 13 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	－	4.3	3.8	3.8	1.3	0.09		ガラス玉 117
図版 56-39	c3	10 ～ 13 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	4.3	4.3	2.4	1.2 ～ 1.4	0.08		ガラス玉 118
図版 56-40	c3	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	－	4.4	4.0	3.4	1.2	0.09		ガラス玉 137
図版 56-41	c3	床	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	5.7	5.4	2.6 ～ 3.0	1.8 ～ 2.0	0.14		ガラス玉 144
図版 56-42	c3	床	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	6.2	4.9	3.0 ～ 3.5	1.3 ～ 1.8	0.15		ガラス玉 145
図版 56-43	c3	床	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	5.7	5.5	3.2 ～ 3.5	2.1 ～ 2.4	0.16		ガラス玉 149
図版 56-44	c3	床	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	5.9	5.4	3.4	1.5	0.17		ガラス玉 150
図版 56-45	c3	床	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	5.2	4.8	4.7	1.5 ～ 1.8	0.19		ガラス玉 151
図版 56-46	c3	床	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	5.0	4.6	5.0	1.5 ～ 1.8	0.18		ガラス玉 153
図版 56-47	c3	床	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	5.9	5.6	2.3	1.7	0.11		ガラス玉 155
図版 56-48	c3	床	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	5.6	5.2	4.1	1.8	0.18		ガラス玉 157
図版 56-49	c3	床	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	5.9	5.5	3.3	1.9	0.16		ガラス玉 160
図版 56-50	c3	床	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	3.7	3.7	4.1 ～ 4.7	1.4	0.09		ガラス玉 165
図版 56-51	c3	床	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	5.0	4.6	4.7	1.5	0.17		ガラス玉 168
図版 56-52	c1	10 ～ 13 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	－	4.6	4.3	2.4 ～ 2.6	1.4 ～ 2.0	0.08		ガラス玉 177
図版 56-53	c2	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	4.8	4.4	1.9 ～ 3.1	1.5	0.08		ガラス玉 182
図版 56-54	c2	10 ～ 13 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	－	4.9	4.6	2.9 ～ 3.8	2.2 ～ 2.6	0.10		ガラス玉 183
図版 56-55	c2	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	4.6	3.7	3.6	1.2	0.10		ガラス玉 186
図版 56-56	c3	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	－	4.2	3.9	2.9	1.8	0.07		ガラス玉 195
図版 56-57	c3	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	6.3	5.8	2.8	2.2 ～ 3.1	0.14		ガラス玉 196
図版 56-58	c3	10 ～ 13 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	－	4.9	4.4	2.6 ～ 3.2	2.3	0.09		ガラス玉 198
図版 56-59	c4	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	引き伸ばし	±	4.8	4.1	2.8	1.2	0.09		ガラス玉 212
図版 56-60	c3	床	ソーダガラス	紺色	引き伸ばし	＋	4.7	4.6	2.6	1.4	0.09	臼玉状に研磨	ガラス玉 170
図版 56-61	c3	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	連珠	－	2.6	2.5	2.0	1.1	0.02		ガラス玉 129
図版 56-62	c2	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	連珠	－	3.0	(2.8)	1.8	1.3	0.02		ガラス玉 184
図版 56-63	c3	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	連珠	－	2.3	2.3	2.8	1.0	0.02		ガラス玉 191
図版 56-64	c3	10 ～ 13 層	ソーダガラス	淡青色	連珠	－	3.2	(2.6)	2.6	1.2	0.03		ガラス玉 197
図版 56-65	c3	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	連珠	－	2.6	2.5	1.8	1.2	0.01		ガラス玉 207
図版 56-66	c3	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	連珠	－	2.4	2.3	2.6	1.0	0.01		ガラス玉 209
図版 56-67	c3	8・9 層	ソーダガラス	淡青色	連珠	－	2.6	(1.9)	2.1	0.9	0.01		ガラス玉 211
—	c3	床	カリガラス	淡青色	引き伸ばし	＋	－	－	－	－	0.12	砕片	ガラス玉 169

※端面の＋：研磨あり　－：研磨なし

東西方向に長軸を持つ楕円形で、西側が一段深くなる。全体の規模は、長軸 135cm、短軸 60cm、西側は長軸 50cm、短軸 45cm の隅丸方形で、深さは床面から 56cm である。この東側には底面から 42cm の位置に、幅 33cm、奥行き 55cm、床面からの深さが 14cm の平坦面が認められる。堆積土は 3 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**溝**〕3 条（D1 ～ 3）検出した。D1 は中央部に位置する東西方向の溝跡で、検出長 1.1m、上幅 8 ～ 15cm である。

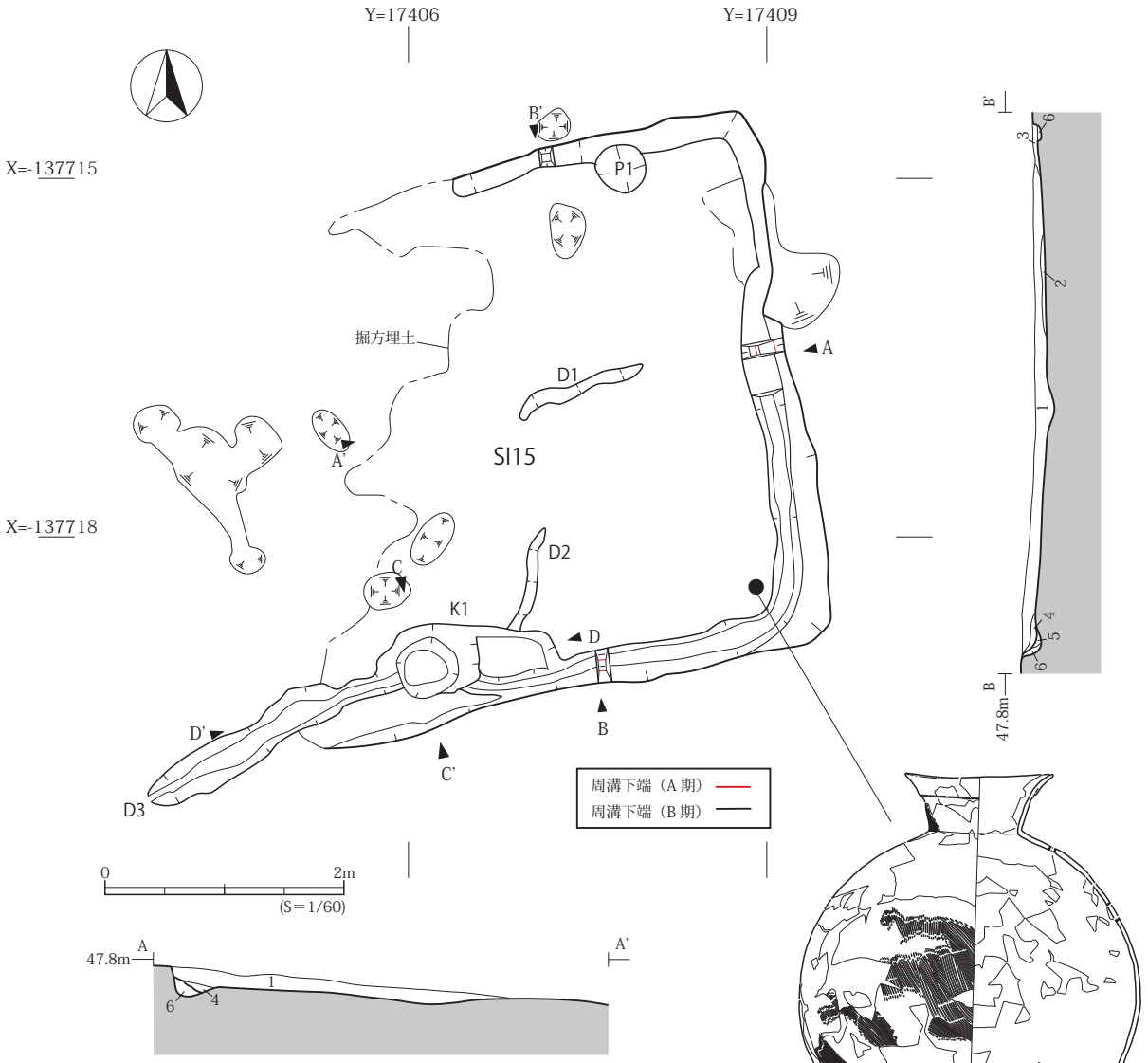
D2 は中央南側に位置する南北方向の溝跡で、南端は K1 の東側に接続する。検出長 0.9m、上幅 10cm である。

D3 は南西部に位置する東西方向の溝跡で、東端は K1 に接続し、西端は建物跡南西隅から外側に延びている。検出長 2.35m、上幅 20 ～ 40cm、下幅 6 ～ 19cm、深さ 9cm である。

〔**その他**〕主柱穴は未確認であるが、ピット 1 個（P1）を検出した。P1 は北東部に位置し、北辺周溝を掘りこんでいる。径 40cm の円形である。

〔**堆積土**〕3 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**出土遺物**〕南東隅の床面から土師器壺（第 67 図 2）、K1 から土師器器台（1）、壺あるいは甕が出



R122

※土器：S=1/10

A-A'、B-B'

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を少量、地山小ブロックをわずかに含む	自然堆積
2	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山ブロックを含む	
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む	B 期周溝堆積土
5	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを多量に含む	A 期周溝堆積土
6	明黄褐色 (10YR6/8)	シルト	地山小ブロックを多量に含む	

C-C'

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む	自然堆積
2	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	炭化物を少量含む	
3	黄褐色 (10YR5/8)	粘土		

D-D'

層	土色	土性	含有物など	備考
1	黄褐色 (10YR5/6)	シルト		自然堆積
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む	
3	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト		

第 66 図　SI15 竪穴建物跡

（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　器台	K1	脚部	(10.6)		(3.9)	外・内：調整不明	図版 58-1	R124
2	土師器　壺	床	4/5	(20.6)	10.8	60.8	外:(口～体) ハケメ (底) 調整不明　内:(口～頸) ナデ？ (体) ハケメ→ナデ？ 複合口縁	図版 58-2	R122

第 67 図　SI15 竪穴建物跡　出土遺物

土した。

【SI17 竪穴建物跡】（平・断面図：第 68・69 図、各平面図：第 70・71 図、出土遺物：第 72 ～ 75 図）

〔**位置・検出**〕B 区中央に位置し、標高 48m の丘陵頂部から西側へ傾斜する緩斜面上に立地する。北西隅と西辺中央がカクランによって壊されている。床面施設の検出まで行った。床面と床面直上層から炭化材が検出され、床面直上層には焼土や炭化物が多く含まれていることから焼失竪穴建物跡と考えられる。

〔**重複**〕SI33 竪穴建物跡と重複し、これより古い。

〔**平面形・規模**〕方形で、規模は南北 5.8m、東西 5.5m である。

〔**方向**〕東辺でみると北で西に約 5°偏る。

〔**壁**〕地山を壁とし、床面からほぼ垂直に立ち上がる。高さは、最も残りの良い北辺で床面から 40cm である。

〔**床面**〕掘方埋土を床面としている。北東から南西に向けて標高を下げながら緩やかに傾斜しており、両者の高低差は 10cm である。

〔**主柱穴**〕4 個（P1 ～ 4）検出した。楕円形、円形で、掘方の規模は長軸 40 ～ 55cm、短軸 30 ～ 40cm である。すべての柱穴で柱痕跡が確認され、長軸 17 ～ 25cm、短軸 15 ～ 20cm の楕円形である。柱痕跡の上部には炭化物や焼土が多く含まれており、床面と床面上に出ている柱の接する部分が火災の影響を受けていたとみられる（第 69 図 P1 の 2 層、P3・P4 の 1 層）。

〔**炉・焼面**〕中央北側で焼面 1 ヶ所（Y1）を検出した。SI33 に壊されており一部のみの検出である。規模は、長軸 48cm、短軸 30cm である。

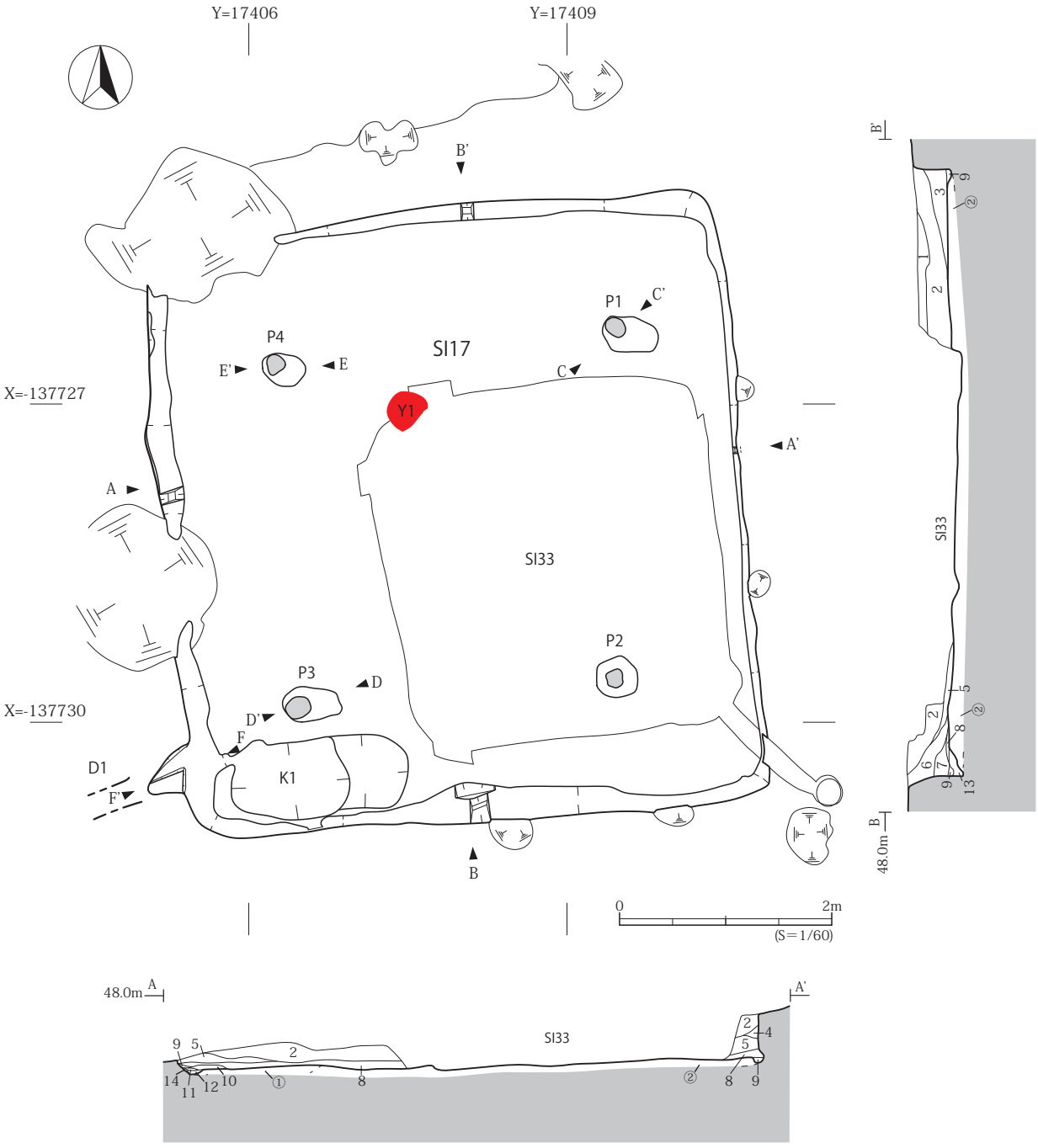
〔**周溝**〕南辺西側で一部途切れているが、それ以外では各辺で検出した。上幅 10 ～ 26cm、精査した部分では下幅 2 ～ 4cm、深さ 4 ～ 13cm、断面は「U」字形である。南・西辺の規模が大きく、東辺は東壁に抉れるオーバーハング状となる。堆積土は自然堆積である。

〔**土坑**〕1 基（K1）検出した。南西隅に位置し、東西方向に長軸を持つ楕円形である。北西部で西辺の周溝と接続する。東西で底面の深さが異なり、東側が浅く、西側が深い。規模は、長軸 170cm、短軸 73cm である。

〔**溝**〕1 条（D1）検出した。南西隅に位置する東西方向の溝跡で、東端が西辺の周溝と接続し、西端は建物の外側に延びている。延長部分は未検出である。確認できた範囲では、検出長 50cm、上幅 44cm である。

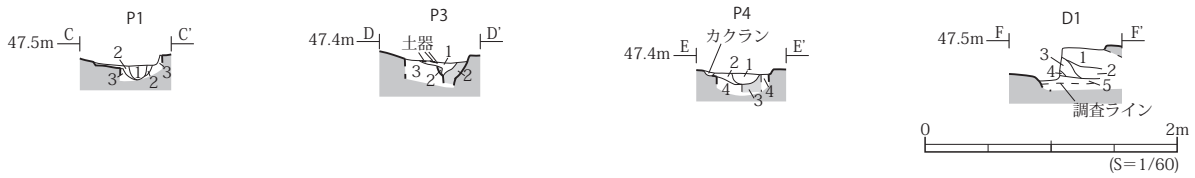
〔**堆積土**〕8 層に分かれ、いずれも自然堆積である。1・2 層は火災後の堆積土、3・4・6 ～ 8 層は焼土や炭化物を多く含む層、5 層は地山ブロックを多く含む層である。5 層は各辺の壁際に分布し、特に北西隅から南西隅にかけて広く認められる（第 70 図）。7 層は南辺、南西隅から南東隅にかけて南壁際に分布する。

〔**炭化材**〕北辺と東片中央、南西隅に分布する（第 71 図）。東辺中央から北側では、壁に沿って直立する細い炭化材を検出した。特に北側には、直立する炭化材を繋ぐように横方向へ延びる細い炭化材も認められた。東辺中央の炭化材については C14 年代測定分析を実施している（附章 6）。



層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物をわずかに含む	自然堆積
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物、焼土、地山粒をわずかに含む	
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物、焼土、地山粒を少量含む	
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物、地山粒をわずかに、焼土を多量に含む	
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多量、炭化物、焼土をわずかに含む	屋根材崩壊土
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物を少量、地山粒をわずかに、焼土を含む	火災による堆積土
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物、地山ブロックをわずかに、焼土ブロックを多量に含む	
8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物、地山粒を多量、焼土を含む	
9	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを多量、炭化物、焼土を含む	周溝堆積土
10	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山粒・小ブロック、黒褐色 (10YR3/1) シルト小ブロックを多量に含む	
11	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物片をわずかに、地山粒・小ブロックをやや多く含む	
12	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小ブロックを含む	
13	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山小ブロックを多量、炭化物片を含む	
14	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を含む	
①	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小ブロックを多量に含む	掘方埋土
②	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを多量、炭化物片を含む	

第 68 図　SI17 竪穴建物跡（1）



P1（C-C'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	炭化物粒・片、焼土ブロックをわずかに含む	柱痕跡
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物粒・片、焼土ブロックを非常に多く、地山ブロックをわずかに含む	
3	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを非常に多く、黒褐色（10YR2/3) 粘土質シルトブロックを少量含む	掘方埋土

P3（D-D'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	炭化物粒・片を多量、焼土粒・小ブロックを含む	柱痕跡
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	炭化物片、焼土粒を含む	
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小ブロック・ブロックを多量に含む	掘方埋土

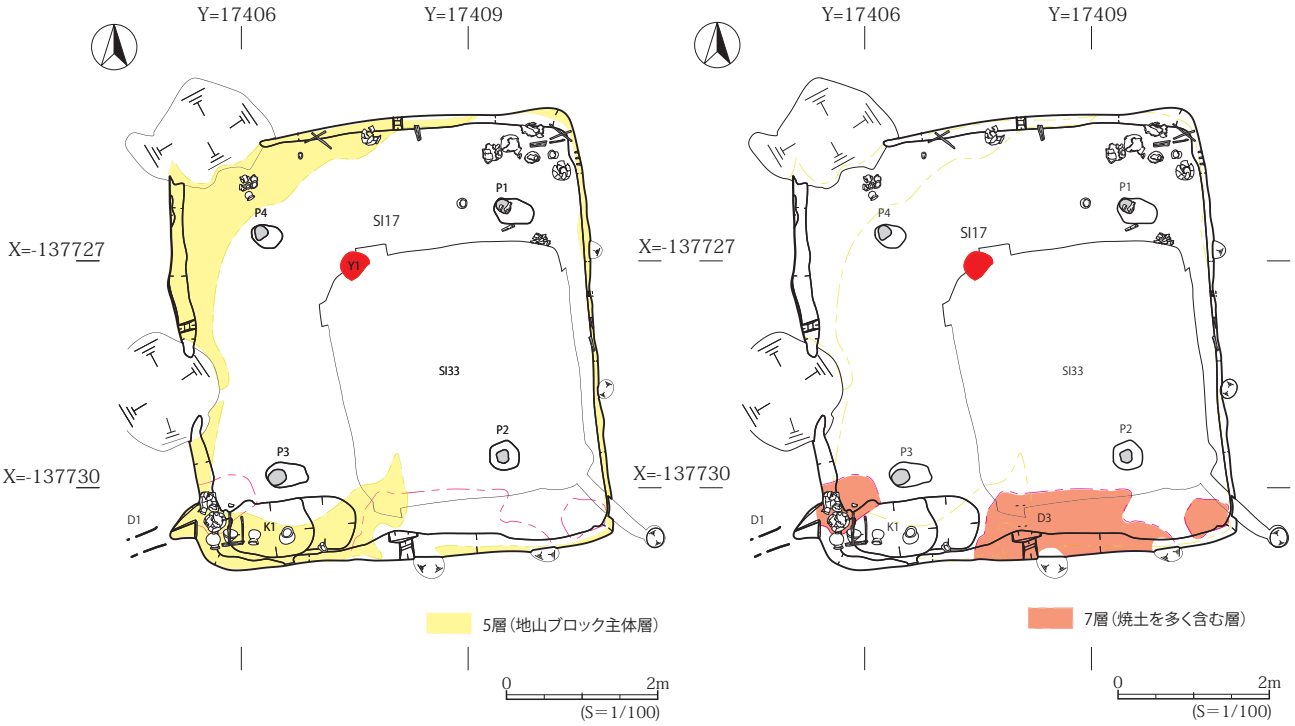
P4（E-E'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物粒・片、焼土ブロックを非常に多く、地山粒を少量含む	柱痕跡
2	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭化物粒・片、焼土ブロック、地山ブロックを少量含む	
3	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物粒・片、地山ブロックをわずかに含む	
4	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多量、炭化物粒をわずかに含む	掘方埋土

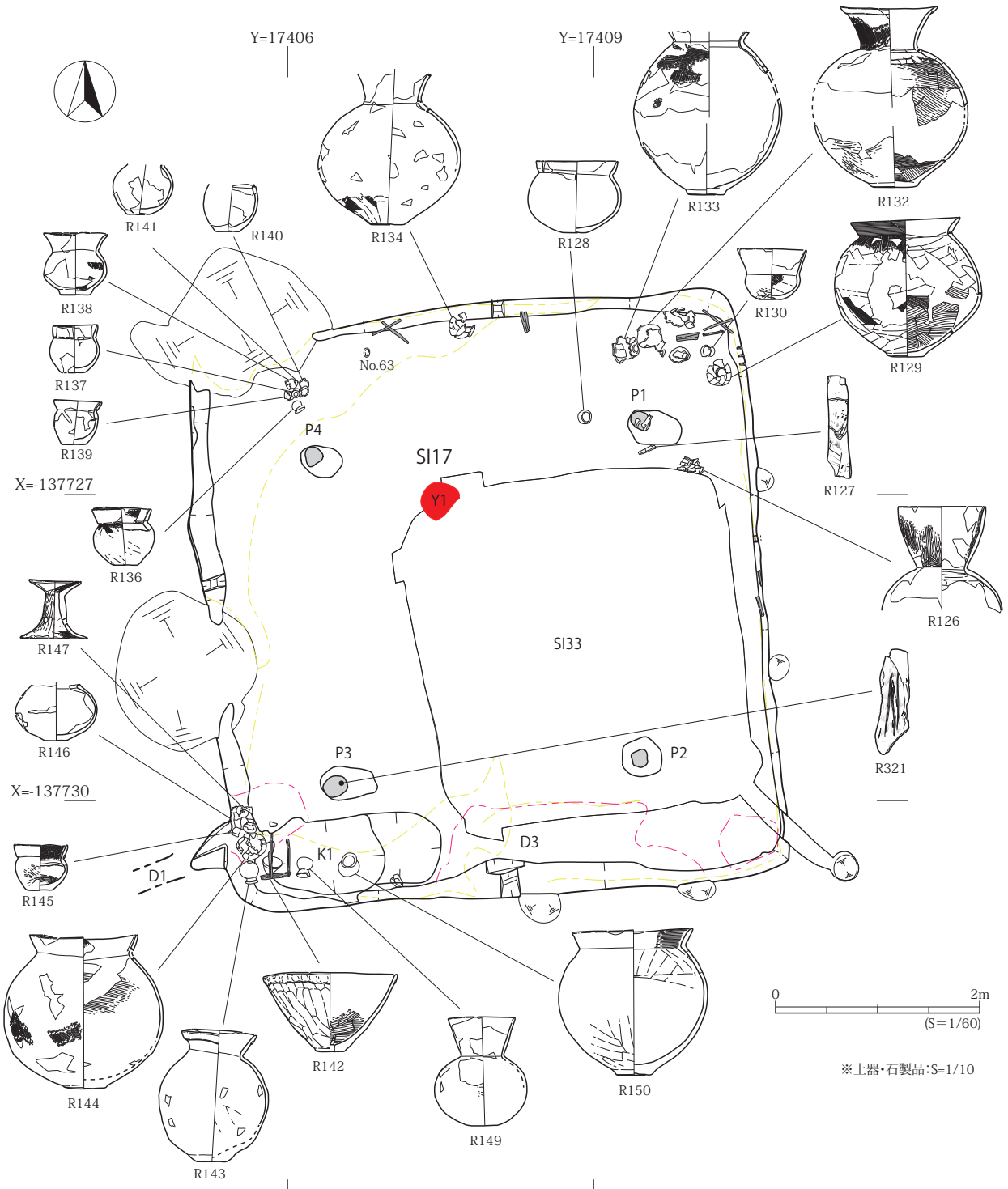
D1（F-F'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物をわずかに含む	自然堆積
2	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒を少量含む	
3	オリーブ褐色 (2.5Y4/6)	シルト	焼土粒、炭化物粒をわずかに、地山粒を多量に含む	
4	褐色 (7.5YR4/6)	焼土層		火災による堆積土
5	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒を少量含む	自然堆積

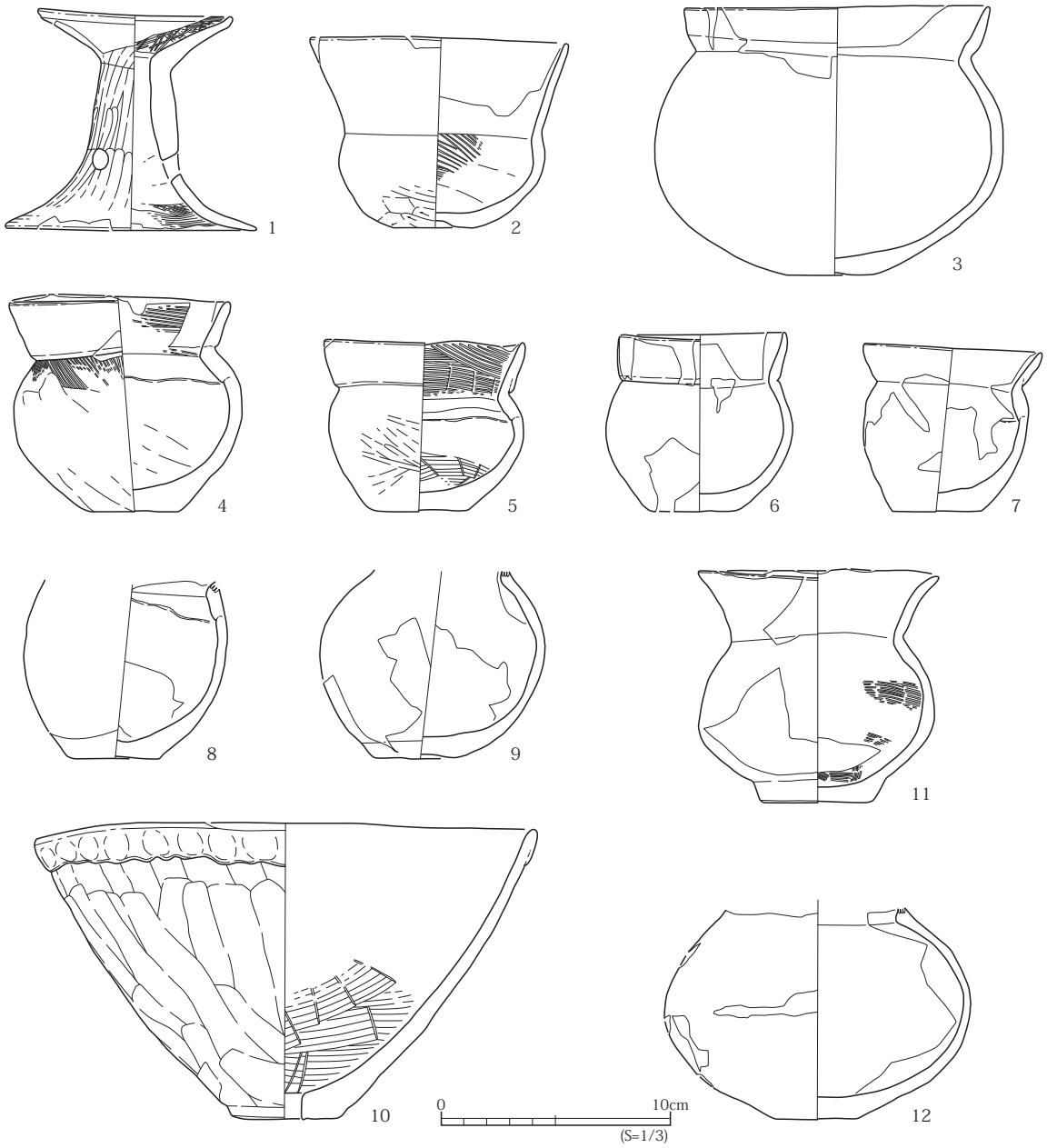
第 69 図　SI17 竪穴建物跡（2）



第 70 図　SI17 竪穴建物跡　地山ブロック主体層、焼土を多く含む層の分布



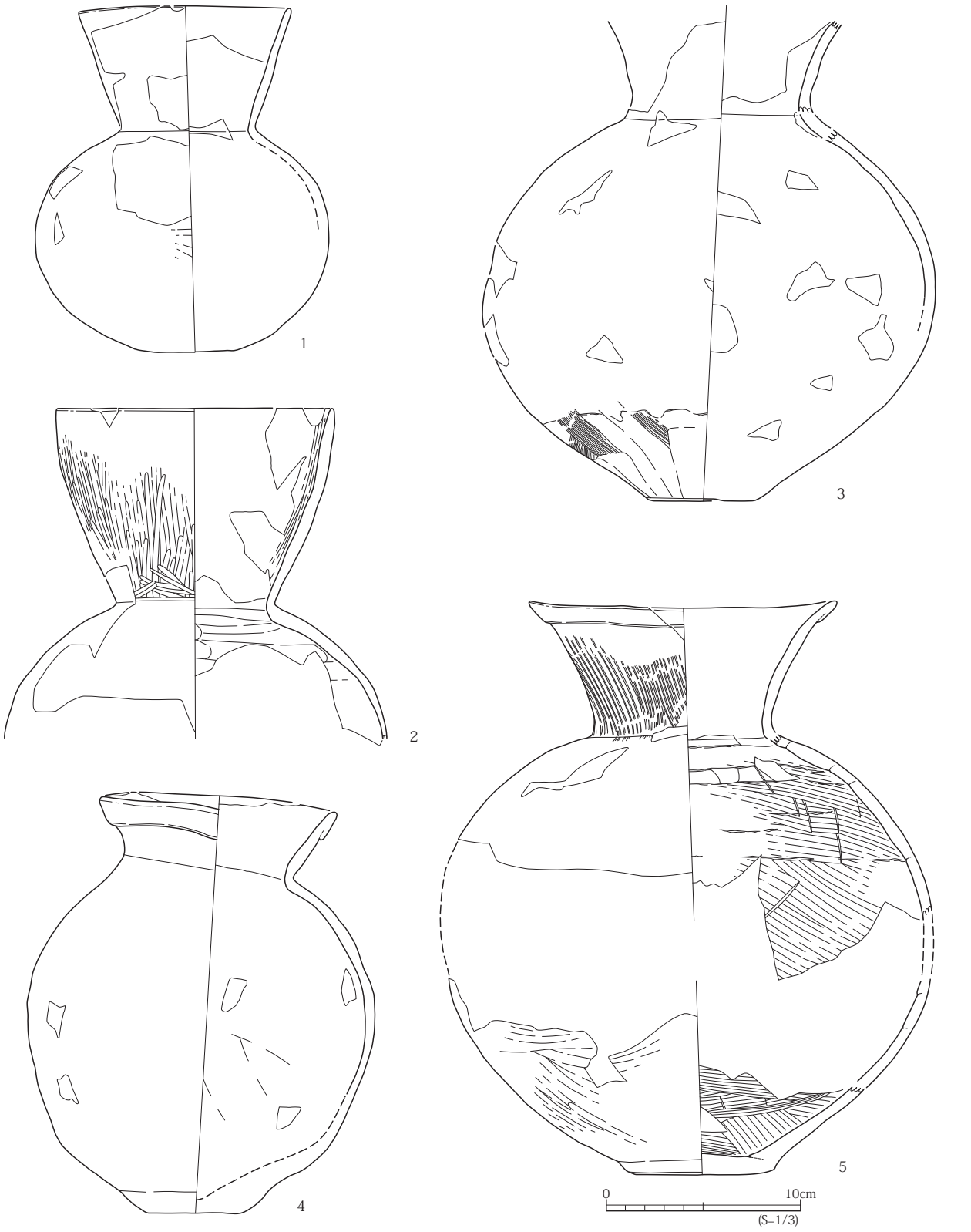
第 71 図　SI17竪穴建物跡　炭化材・遺物出土状況



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　器台	周溝上面	4/5	(8.4)	11.0	(9.3)	外：(受) 口縁ナデ　体ヘラミガキ (脚) 上部ハケメ→ヘラミガキ、下部ナデ→ヘラミガキ　内：(受) ヘラミガキ (脚) ハケメ→ナデ　円窓 3	図版 59-1	R147
2	土師器　鉢	床	4/5	11.2	3.4	8.3	外：(口～頸) 調整不明 (体下部) ヘラケズリ→ヘラミガキ (底) くぼみ底 内：(口～頸) 調整不明 (体～底) ハケメ→ナデ	図版 59-2	R130
3	土師器　鉢	床	4/5	13.3	3.8	10.7	外：(口～体) 調整不明 (底) くぼみ底　内：調整不明	図版 59-11	R128
4	土師器　鉢	床	4/5	9.5	3.8	9.5	外：(口) 調整不明 (体) ハケメ→ナデ？　内：(口) ハケメ (体～底) ナデ	図版 59-3	R136
5	土師器　鉢	周溝上面	完形	8.7	4.1	7.5	外：(口) 調整不明 (体) ヘラミガキ？　内：(口) ハケメ (体～底) ヘラナデ	図版 59-4	R145
6	土師器　鉢	床	4/5	(7.2)	3.7	7.9	外・内：調整不明	図版 59-5	R137
7	土師器　鉢	床	3/5	(7.8)	3.9	(7.3)	外・内：調整不明	図版 59-6	R139
8	土師器　鉢 or 壺	床	1/4		3.9	(7.7)	外・内：調整不明	図版 59-7	R140
9	土師器　鉢 or 壺	床	2/5		3.9	(8.1)	外：(口～体) 調整不明 (底) くぼみ底　内：調整不明	図版 59-8	R141
10	土師器　有孔鉢	床	完形	21.7	8.7	13.0	外：(口) 粘土帯貼付→ナデ、オサエ (体～底) ナデ　内：(口～体上部) 調整不明 (体下部) ヘラナデ　底部穿孔	図版 60-1	R142
11	土師器　壺	床	4/5	10.4	4.9	10.1	外：(口～体) 調整不明 (底) 平底　内：(口～頸) 調整不明 (体～底) ハケメ	図版 59-9	R138
12	土師器　壺	周溝上面	2/5		3.5	(9.2)	外・内：調整不明	図版 59-10	R146

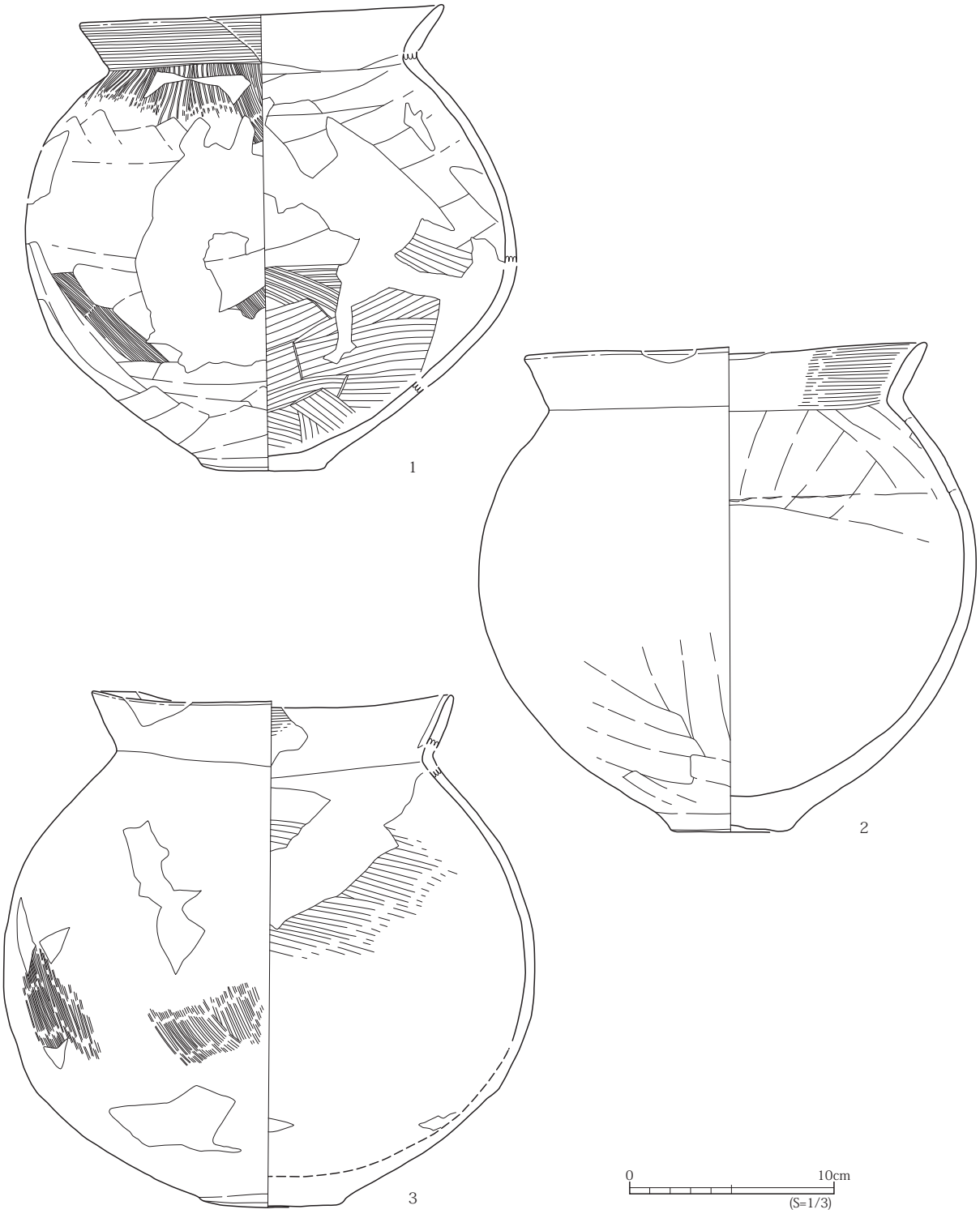
第 72 図　SI17 竪穴建物跡　出土遺物 (1)



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	K1 堆	2/3	(10.8)	4.0	11.8	外・内：調整不明	図版 60-3	R149
2	土師器　壺	床	2/5	16.1		(17.3)	外：(口～頸) ヘラミガキ (体) 調整不明　内：(口～頸) ヘラミガキ (体) ナデ	図版 60-2	R126
3	土師器　壺	床	3/5		5.6	(24.7)	外：(頸～体・底) 調整不明 (体下部) ハケメ→ナデ　内：(頸) 調整不明 (体) ヘラナデ	図版 60-4	R134
4	土師器　壺	周溝上面	8/9	12.0	9.8	21.7	外・内：調整不明　複合口縁	図版 61-1	R143
5	土師器　壺	床	3/5	(15.6)	7.4		外：(口・体上部・底) 調整不明 (頸) ハケメ (体下部) ヘラミガキ　内：(口～頸) 調整不明 (体) ヘラナデ　複合口縁	図版 61-3	R132

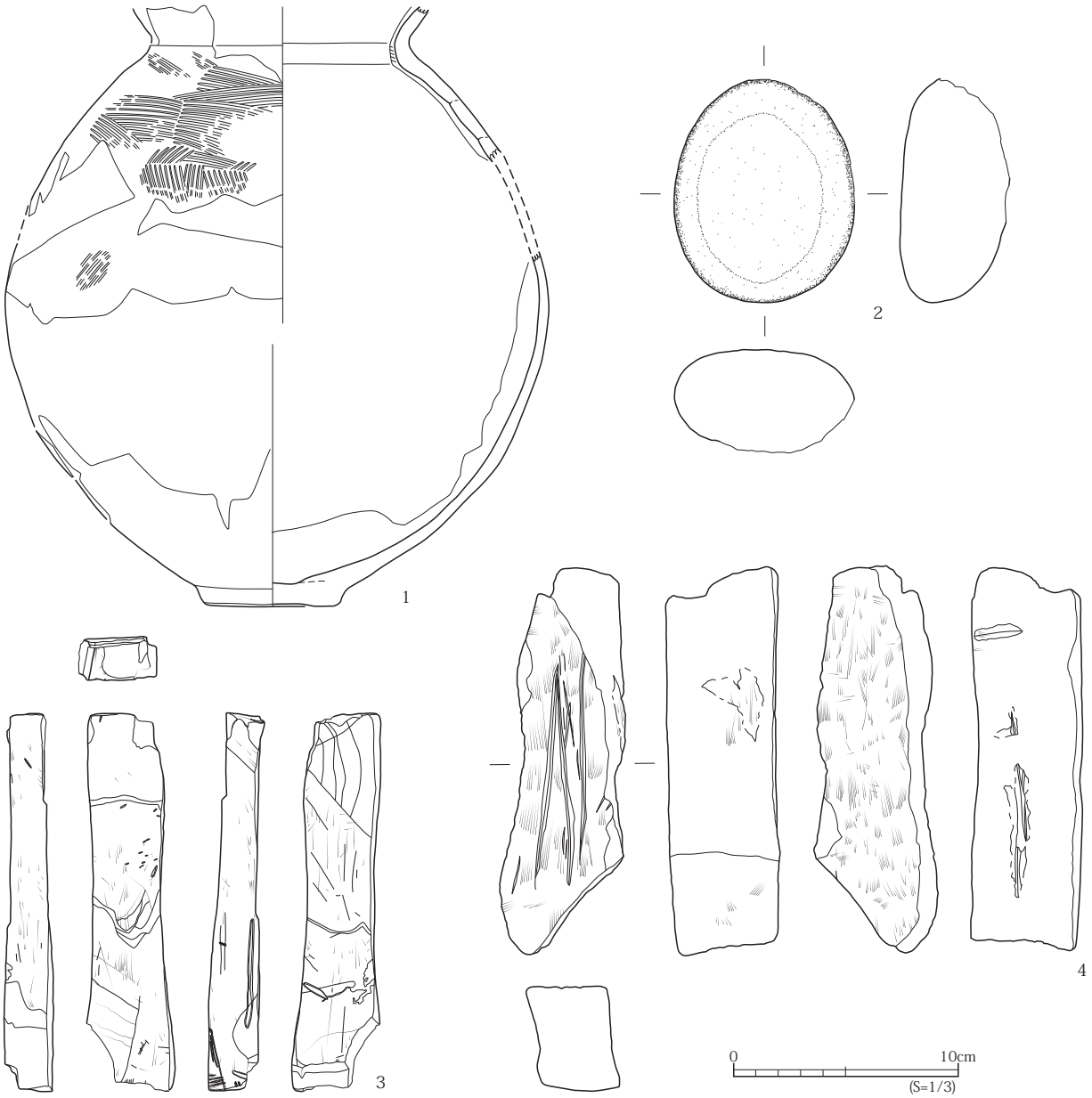
第 73 図　SI17 竪穴建物跡　出土遺物 (2)



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　甕	床	2/3	17.7	6.1	(22.3)	外：(口) ナデ (体) ハケメ→ナデ　内：(口) ハケメ？ (体～底) ハケメ→ナデ	図版 61-2	R129
2	土師器　甕	K1 堆	完形	19.5	6.1	23.9	外：(口) ナデ (体) ナデ？ (底) くぼみ底　内：(口) ナデ (体～底) ヘラナデ 体部上位にスス付着	図版 62-1	R150
3	土師器　甕	周溝上面	4/5	17.6	6.9	25.1	外：(口) 調整不明 (体) ハケメ　内：(口) ナデ (体～底) ヘラナデ	図版 62-2	R144

第 74 図　SI17 竪穴建物跡　出土遺物 (3)



No.	器種	層	残存	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　甕	床	(体上)2/3(体下)1/5 (底)1/1	底径 6.0cm　外：(体) ハケメ (底) 輪台状　内：(頸) ハケメ (体) ナデ、オサエ	図版 63-1	R133
2	石器　磨石	床	ほぼ完形	長 9.9cm　幅 8.1cm　厚 4.7cm　重量 540g　安山岩製　全面磨面	図版 63-3	R135
3	石製品　砥石	床	破損	長 (16.8cm)　幅 (3.7cm)　厚 (2.2cm)　重量 (177.2g)　凝灰岩製　砥面 5 面	図版 63-2	R127
4	石製品　砥石	P3 柱痕跡	ほぼ完形	長 17.0cm　幅 5.7cm　厚 4.8cm　重量 498.8g　凝灰岩製　砥面 5 面　断面三角形の深い削痕あり	図版 63-4	R321

第 75 図　SI17 竪穴建物跡　出土遺物 (4)

〔**出土遺物**〕土器は、建物の北東部と南西部を中心に分布している（第 71 図）。床面から土師器鉢（第 72 図 2 ～ 4・6・7）、壺（第 72 図 11、第 73 図 2・3・5）、甕（第 74 図 1、第 75 図 1）、有孔鉢（第 72 図 10）、砥石（第 75 図 3）、磨石（2）、炭化米、K1 堆積土から土師器壺（第 73 図 1）、甕（第 74 図 2）、P3 から砥石（第 75 図 4）、周溝上面から土師器器台（第 72 図 1）、鉢（5）、壺（第 72 図 12、第 73 図 4）、甕（第 74 図 3）が出土した。この他に、7 層から屋根材の可能性がある焼土塊が出土した。

【SI18 竪穴建物跡】（平・断面図：第 76 図、出土遺物：第 77 図）

〔**位置・検出**〕B 区の中央北側に位置し、標高 48m の丘陵尾根頂部の平坦面に立地する。後世の削平により西側が壊され、東辺、南北辺の東半のみの検出である。床面施設の精査まで行った。なお、主柱穴は未確認である。

〔**平面形・規模**〕全体の形状は不明だが、方形あるいは長方形になるとみられる。規模は、南北 6.0m、東西 3.7m 以上である。

〔**方向**〕東辺で見るとほぼ真北を向いている。

〔**壁**〕地山を壁とし、高さは、最も残りの良い東辺南側で床面から 20cm である。

〔**床面**〕掘方埋土と地山を床面としている。掘方埋土は、東辺と北辺の東側、南辺の東側の幅 0.7 ～ 1.3m の溝状の範囲に分布する。ほぼ平坦である。

〔**炉**〕中央で焼面 1 ヶ所（Y1）を検出した。規模は、長軸 80cm、短軸 55cm である。

〔**周溝**〕東辺と南辺で検出した。東辺では南側で一部途切れており、南辺の周溝と接続しない。上幅 13 ～ 30cm、下幅 4 ～ 10cm、深さ 3 ～ 10cm、断面は「U」字形である。底面は、東辺で南側から北側へ、南辺で東側から西側へ標高を下げながら緩やかに傾斜する。堆積土は自然堆積である。

〔**土坑**〕南辺中央には長軸 210cm、短軸 50cm の範囲で不整形の落ち込みがあり、その中央に楕円形の土坑（K1）を検出した。K1 の規模は長軸 52cm、短軸 47cm、深さ 64cm である。K1 の南西部には幅 35cm、奥行き 25cm の土坑状のくぼみが取り付く。このくぼみは、南辺の周溝と接続し、これにより、K1 と周溝とが接続する。K1 の堆積土は 6 層に分かれ、いずれも自然堆積である。3 層には炭化物、焼土、土器片が多く含まれる。

〔**堆積土**〕7 層に分かれ、いずれも自然堆積である。8 層には焼土が多く含まれる。

〔**出土遺物**〕床面から土師器鉢（第 77 図 1）、壺（2）、K1 堆積土から土師器鉢、甕（3・4）、堆積土から土師器器台（5）が出土した。

【SI19 竪穴建物跡】（平・断面図：第 78 図、各平面図：第 79・80 図、出土遺物：第 81 ～ 83 図）

〔**位置・検出**〕B 区の北辺東側に位置し、標高 47 ～ 48m の丘陵頂部から北側に傾斜する緩斜面上に立地する。建物内の中央東側がカクランによって壊されている。床面施設の検出まで行った。床面と床面直上層から炭化材が検出され、床面直上層には焼土や炭化物が多く含まれていることから焼失竪穴建物跡と考えられる。

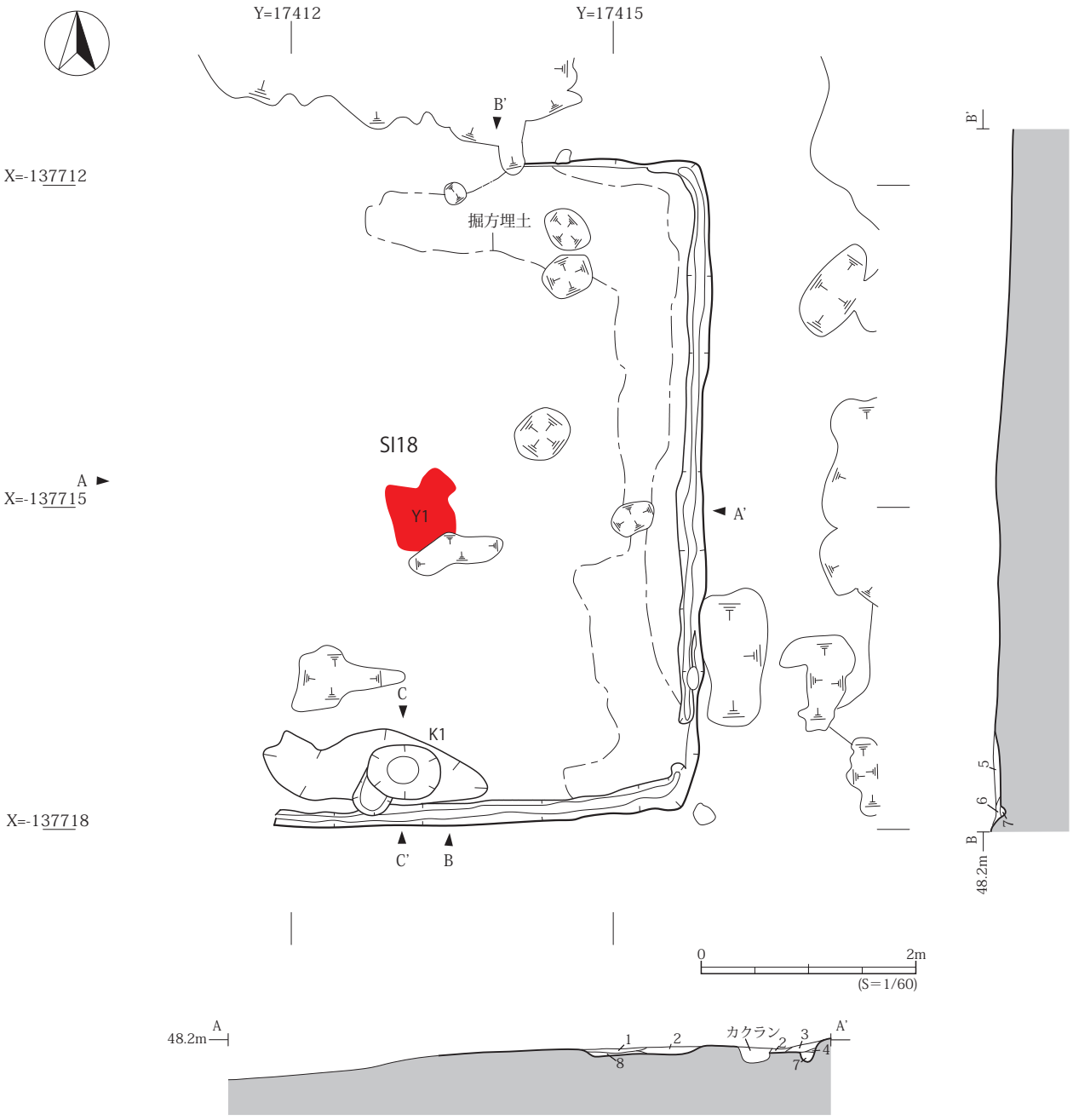
〔**平面形・規模**〕方形で、規模は、南北 5.4m、東西 5.9m である。

〔**方向**〕西辺でみると北で東に約 4°偏る。

〔**壁**〕北東隅は SX14 整地層、それ以外は地山を壁としている。高さは、最も残りの良い南辺で床面から 56cm である。

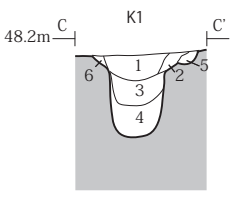
〔**床面**〕掘方埋土を床面としている。南側から北側にかけて標高を下げながら緩やかに傾斜し、両者の高低差は 16cm である。

〔**主柱穴**〕4 個（P1 ～ 4）検出した。円形、楕円形で、掘方の規模は長軸 26 ～ 42cm、短軸 25 ～ 35cm である。3 個（P1 ～ 3）で柱痕跡を確認し、長軸 15 ～ 18cm の楕円形である。



A-A'、B-B'

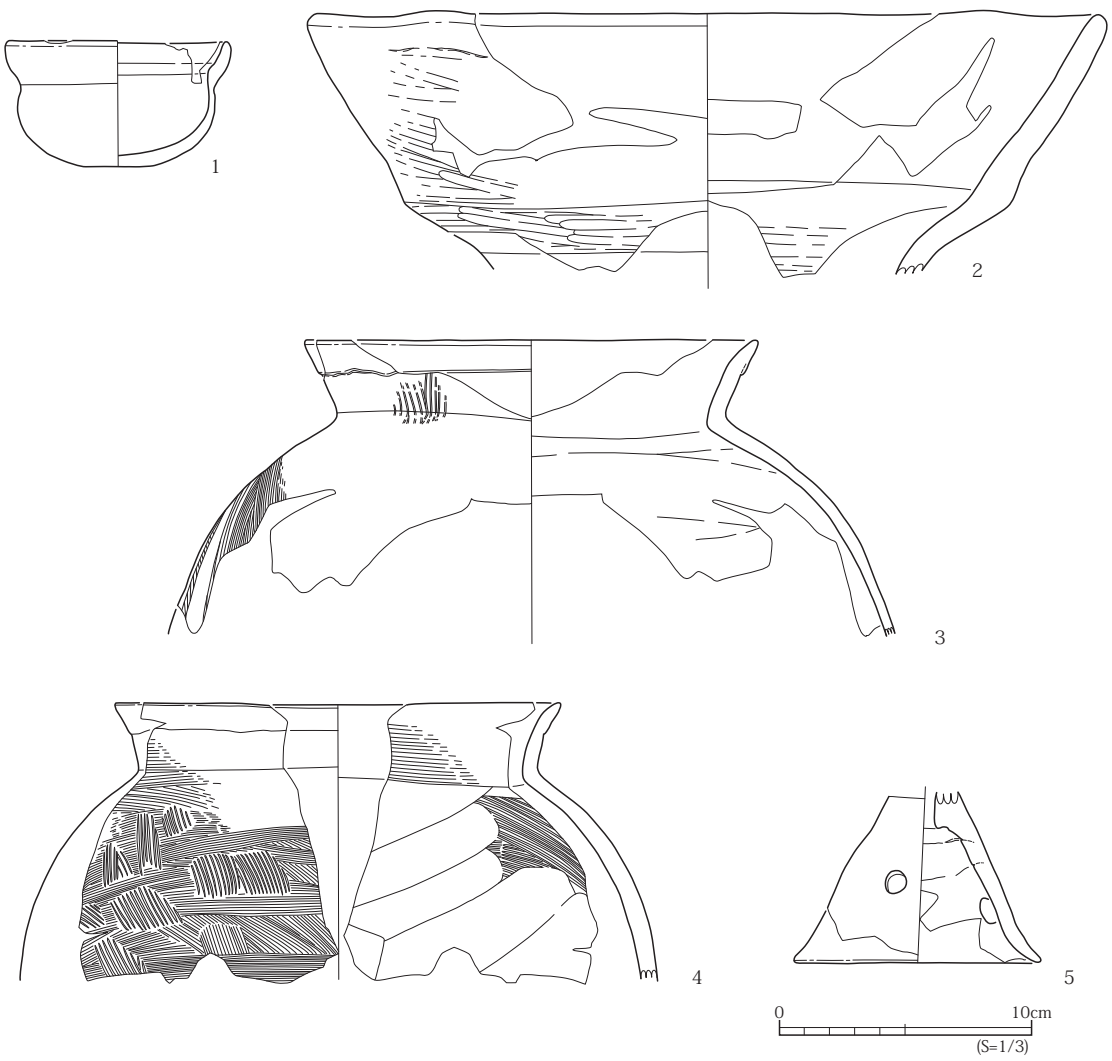
層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒をわずかに含む	自然堆積
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒をわずかに含む	
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土、地山粒をわずかに含む	
4	褐色 (10YR4/4)	シルト質粘土	地山小ブロックを多量に含む	
5	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	炭化物をわずかに含む	
6	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒をわずかに含む	
7	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	周溝堆積土
8	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土を多量に含む	機能時の堆積土



K1 (C-C')

層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物粒・片をわずかに含む	自然堆積
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	炭化物、焼土をわずかに含む	
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	炭化物粒・片を多量に含む	
4	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土	砂を含む	
5	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロックをわずかに含む	
6	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒をわずかに、地山小ブロックを多量に含む	

第 76 図　SI18 竪穴建物跡



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　鉢	床	ほぼ完形	8.6	3.9	5.0	外・内：調整不明	図版 64-2	R152
2	土師器　壺	床	(口頸)1/3	(31.0)		(10.5)	外：(口～頸) ヘラミガキ　内：(口～頸) ヘラミガキ？　二重口縁	図版 64-5	R153
3	土師器　甕	K1-4 層	(口～体上)1/4	(17.8)		(11.7)	外：(口) 調整不明 (頸～体) ハケメ→ナデ　内：(口～頸) 調整不明 (体) ヘラナデ？　複合口縁	図版 64-3	R155
4	土師器　甕	K1-4 層	(口～体上)1/5	(17.6)		(11.1)	外：(口～頸) ナデ (体) 細かいハケメ→粗いハケメ 内：(口～頸) ナデ (体) 粗いハケメ→ナデ　複合口縁	図版 64-4	R156
5	土師器　器台	2 層	(脚)3/4		(9.6)	(7.2)	外・内：調整不明　円窓 3	図版 64-1	R157

第 77 図　SI18 竪穴建物跡　出土遺物

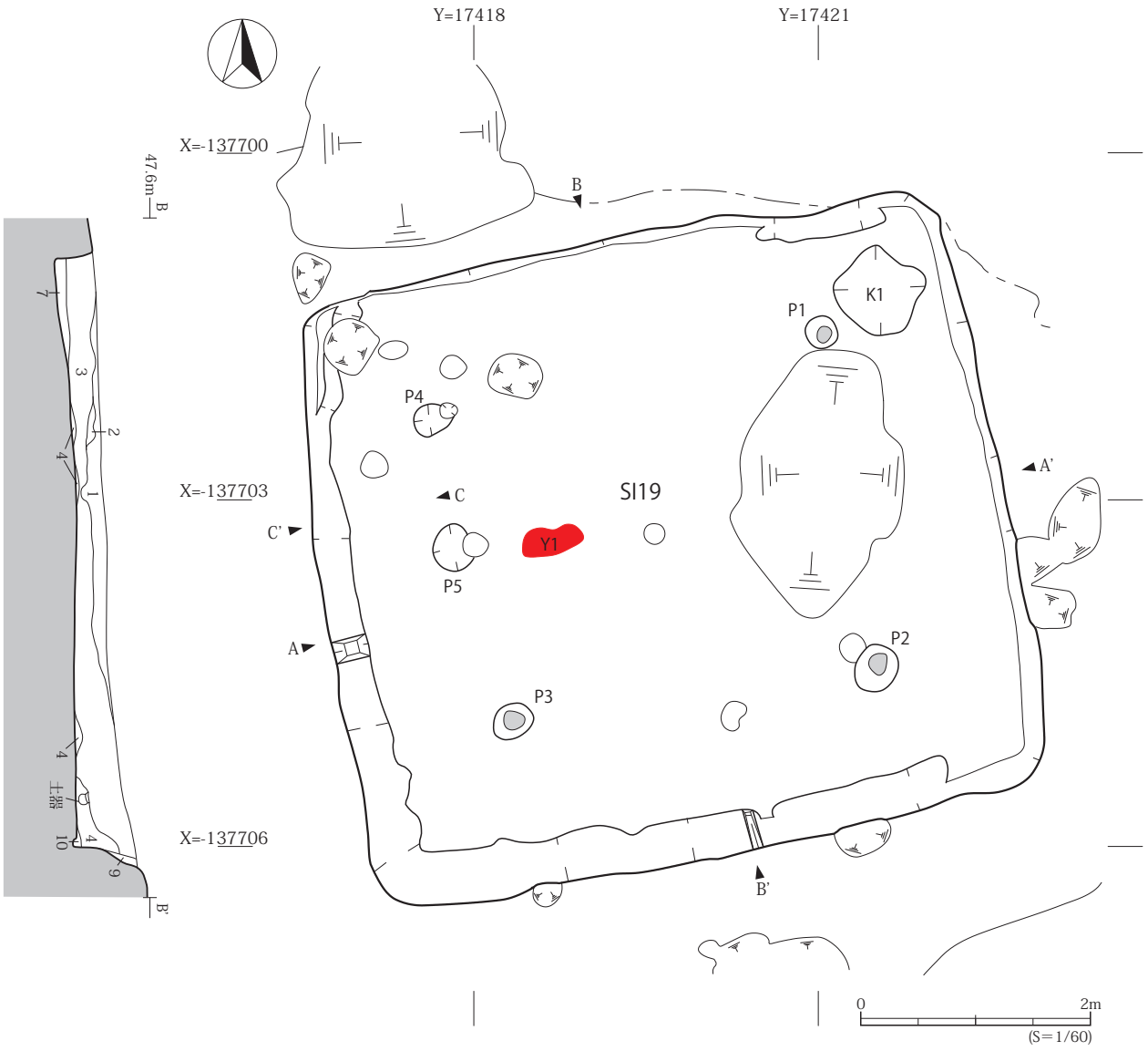
〔**炉**〕中央西寄りで焼面 1 ヶ所（Y1）を検出した。規模は、長軸 55cm、短軸 26cm である。

〔**周溝**〕北辺東側と西辺、南辺で検出した。上幅 17 ～ 38cm、精査を行った部分では下幅 4 ～ 10cm、深さ 3 ～ 8cm、断面は「U」字形である。堆積土は自然堆積である。

〔**土坑**〕1 基（K1）検出した。北東隅に位置し、不整方形で、規模は長軸 67cm、短軸 63cm である。

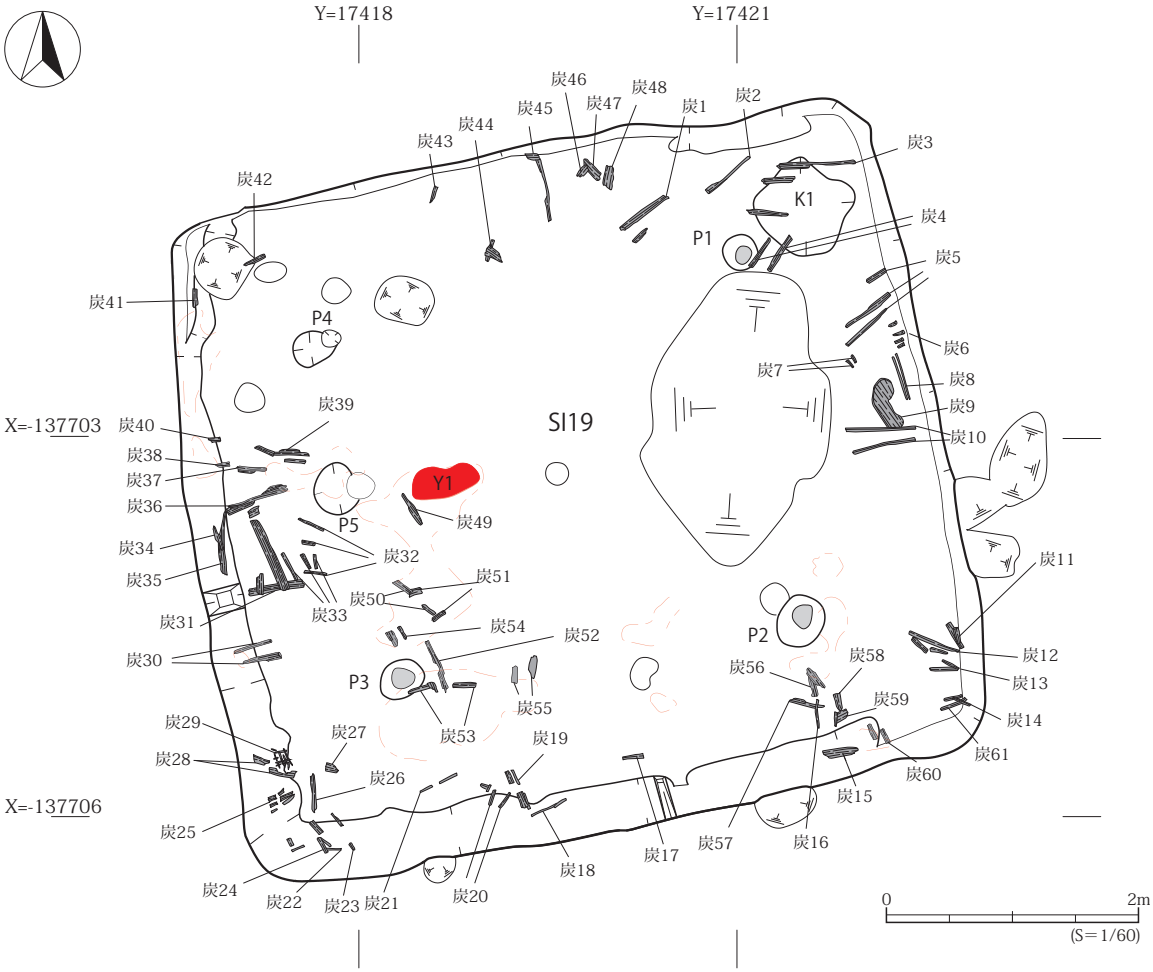
〔**その他**〕ピット 1 個（P5）を検出した。P5 は中央西側に位置し、長軸 40cm、短軸 30cm の楕円形である。

〔**堆積土**〕9 層に分かれ、いずれも自然堆積である。2 層は灰白色火山灰を主体とする層、4 層は地山ブロックを多く含む層、5 ～ 8 層は焼土や地山小ブロックを含む層である。5 層は、中央から北西側と南側に分布する（第 80 図）。



層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土をわずかに含む	自然堆積土
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	灰白色火山灰を多量に含む	
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物を多量に含む	
4	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	炭化物、地山小ブロックを多量、焼土を少量含む	屋根材崩壊土
5	褐色 (10YR4/6)	シルト	焼土、地山小ブロックを多量、炭化物を含む	火災による堆積土
6	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロックをわずかに、炭化物、焼土小ブロックを含む	
7	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物、地山小ブロックを多量に含む	
8	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	炭化物、地山小ブロックを多量に含む	
9	明黄褐色 (10YR6/8)	シルト	地山ブロックを多量に含む	壁崩壊土
10	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物、焼土を少量、地山小ブロックを多量に含む	周溝堆積土

第 78 図　SI19 竪穴建物跡

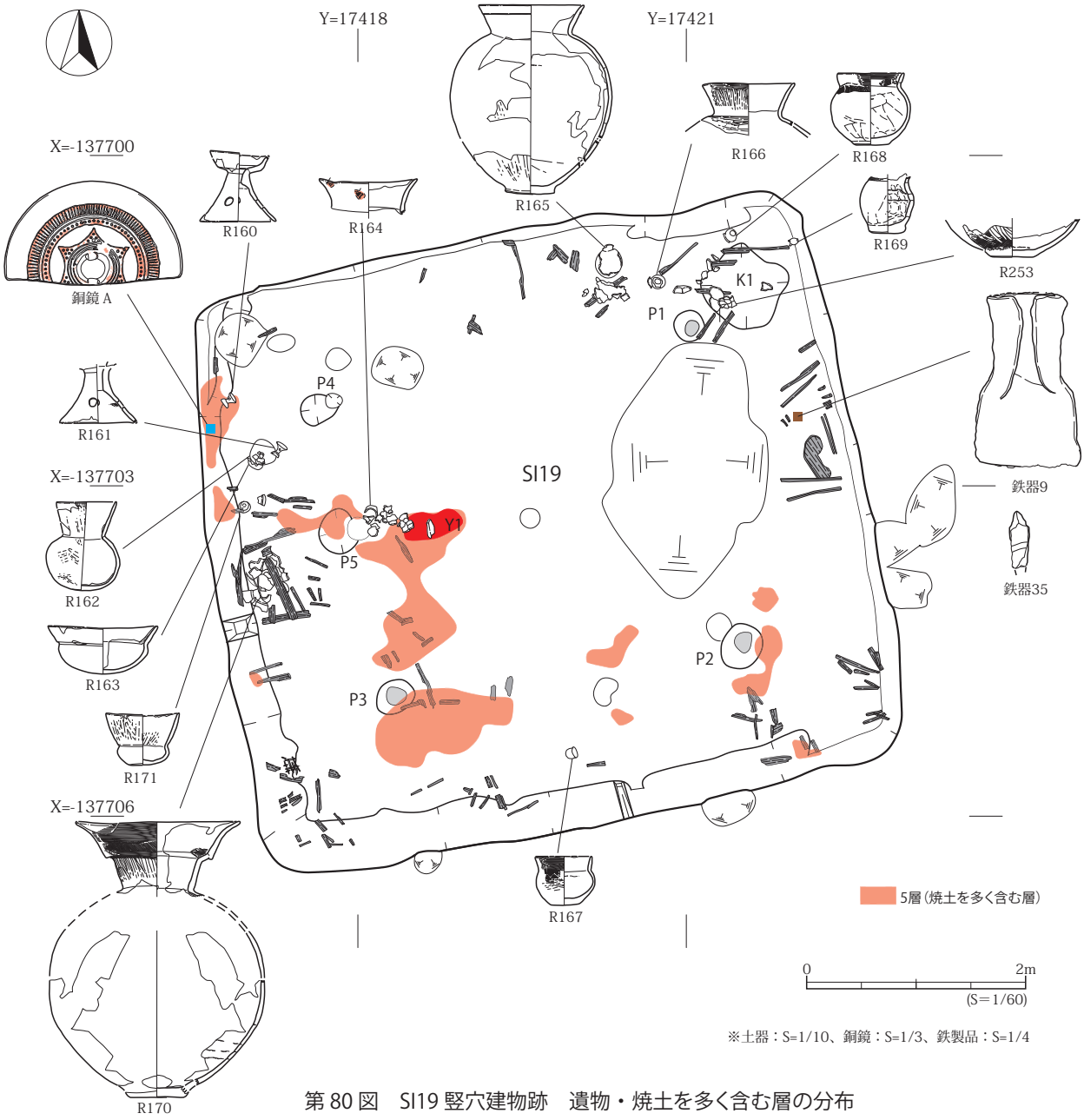


SI19 炭化材属性表

No	出土層	方向		残存	規模（cm） 長さ	規模（cm） 幅	備考
1	7・8層	北東－南西	水平	良	46	5	垂木か
2	7・8層	北東－南西	水平	不良	44	4	垂木か
3	7・8層	東西	水平	やや良	62	5	垂木か
4	7・8層	北東－南西	斜位	不良	33	4	垂木か
5	3層	北東－南西	斜位	良	44	5	垂木か
6	4層	東西	垂直	良		4	垂木か
7	7・8層	北西－南東	水平	不良	8	3	横木か
8	9層	南北	水平	良	36	2	
9	床	東西	水平	良	40	15	板材か
10	7・8層	東西	水平	やや良	60	3	垂木か
11	9層	南北	斜位	良	22	4	横木か
12	7・8層	北西－南東	斜位	良	43	4	垂木か
13	4層	北西－南東	斜位	良	23	5	垂木か
14	4層	東西	－	やや良	22	4	垂木か
15	7・8層	東西	水平	良	28	8	横木か
16	7・8層	南北	水平	良	22	2.5	垂木か
17	7・8層	東西	水平	やや良	16	5	横木か
18	9層	東西	水平	やや良	31	2	壁材か
19	7・8層	南北	斜位	良	13	7	垂木か
20	4層	北東－南西	斜位	良	13	5	垂木か
21	7・8層	東西	水平	やや良	16	5	垂木か
22	9層	東西	水平	やや良	12	2	壁材か
23	7・8層	南北	斜位	やや良	14	3	垂木か
24	7・8層	南北	斜位	やや良	28	7	垂木か
25	4層	東西	斜位	やや良	21	6	垂木か
26	4層	南北	斜位	良	32	5	垂木か
27	7・8層	東西	水平	不良	10	5	
28	4層	東西	斜位	やや良	34	8	垂木か
29	床	－	－	－	－	－	網状か
30	床	東西	水平	不良	44	8	垂木か
31	7・8層	東西	水平	やや良	58	8	垂木か

No	出土層	方向		残存	規模（cm） 長さ	規模（cm） 幅	備考
32	7・8層	東西	水平	やや良	18	3	垂木か
33	7・8層	南北	水平	不良	24	2.5	横木か
34	4層	南北	水平	やや良	20	2.5	横木か
35	7・8層	南北	水平	良	52	5	横木か
36	7・8層	東西	水平	良	50	3	垂木か
37	7・8層	東西	水平	やや良	24	4	垂木か
38	4層	東西	－	やや良	12	3	垂木か
39	7・8層	東西	水平	やや良	44	5	垂木か
40	7・8層	東西	水平	やや良	9	3	垂木か
41	7・8層	南北	水平	不良	14	4	横木か
42	7・8層	南北	水平	やや良	18	3	横木か
43	7・8層	北東－南西	水平	やや良	14	3	垂木か
44	7・8層	北西－南東	水平	やや良	15	5	
45	7・8層	南北	水平	良	49	5	垂木か
46	7・8層	北東－南西	水平	やや良	11	5	
47	7・8層	北西－南東	水平	やや良	18	5	垂木か
48	7・8層	南北	水平	やや良	18	6	垂木か
49	7・8層	南北	水平	やや良	29	6	垂木か
50	7・8層	北西－南東	水平	不良	15	5	垂木か
51	床	東西	水平	不良	11	6	垂木か
52	7・8層	南北	水平	やや良	40	8	垂木か
53	7・8層	東西	水平	不良	54	8	垂木か
54	7・8層	南北	水平	不良	14	7	垂木か
55	7・8層	南北	水平	やや良	19	10	垂木か
56	床	南北	水平	不良	22	8	垂木か
57	床	北西－南東	水平	不良	28	8	横木か
58	床	南北	水平	やや良	14	5	垂木か
59	7・8層	東西	水平	不良	12	7	垂木か
60	7・8層	南北	水平	不良	12	5	垂木か
61	7・8層	東西	水平	不良	12	4	

第 79 図　SI19 竪穴建物跡　炭化材の分布と属性



第 80 図　SI19 竪穴建物跡　遺物・焼土を多く含む層の分布

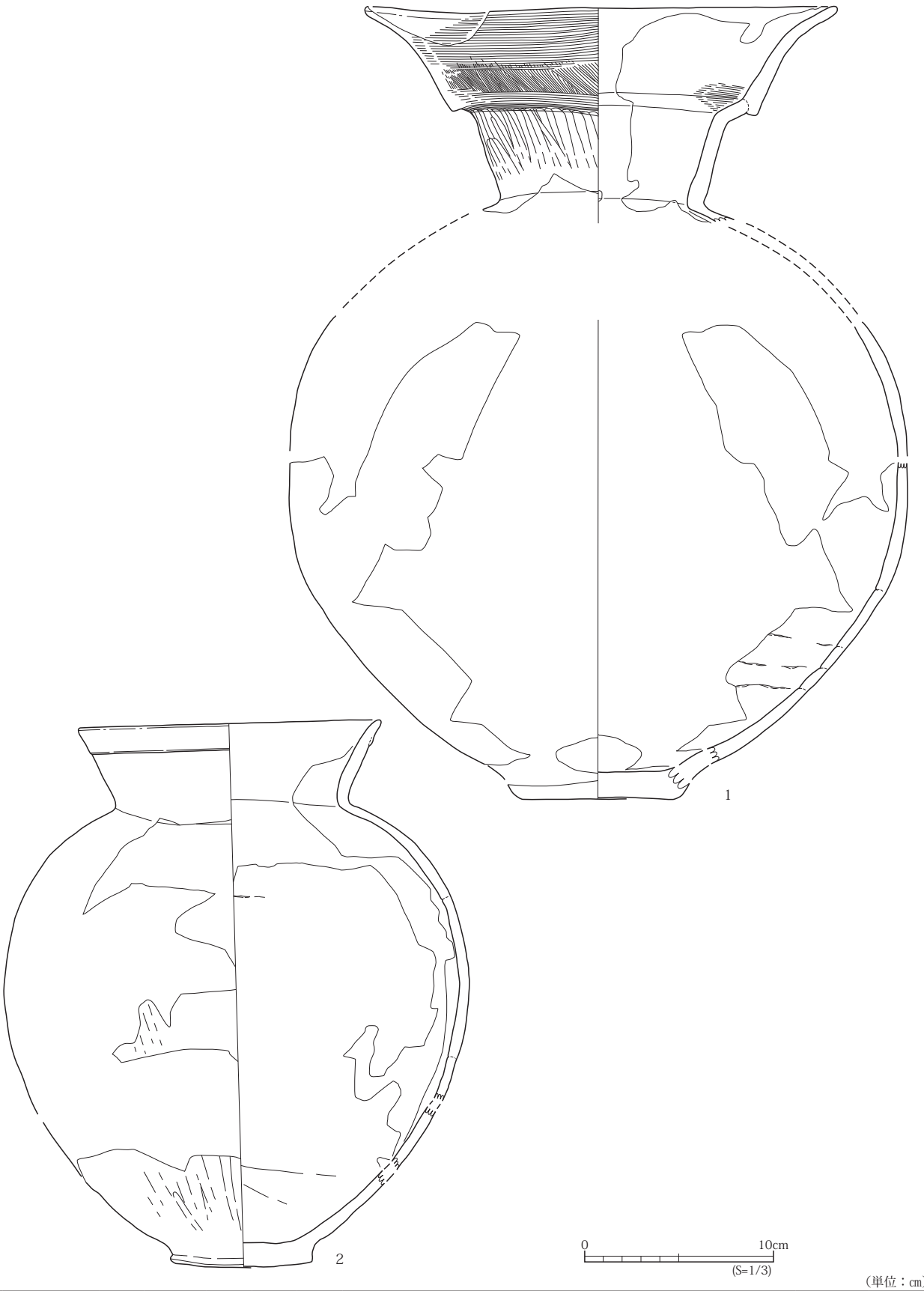
〔**炭化材**〕4 層上面、7・8 層上面、床面で多数確認し、61 点を記録した（第 79 図）。各辺の壁際に分布し、板材の可能性があるもの（炭 9）、各辺に直交・斜交するもの（炭 1 ～ 6・10・12 ～ 14・16・19 ～ 21・23 ～ 26・28・30 ～ 32・36 ～ 40・43・45・47・48・56・58 ～ 60）や並行するもの（炭 8・11・15・17・18・22・33 ～ 35・41・42）がある。このうち、炭 1・9 について C14 年代測定分析を実施した（附章 6）。

〔**出土遺物**〕遺物は北東部と西辺中央部を中心に分布している（第 80 図）。床面で土師器壺（第 82 図 1）、焼土や炭化物を多く含む 5 ～ 8 層から土師器器台（第 81 図 1・2）、鉢（3 ～ 8）、壺（第 81 図 9 ～ 12、第 82 図 2）、銅鏡（第 83 図 1）、鉄製品（2･3）、堆積土から管玉（第 83 図 4）、砥石（5）が出土した。銅鏡は 5・6 層、鉄製品は 6・7 層の層理面で出土している。

（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　器台	7層	4/5	(8.9)	11.6	(10.1)	外：(口) ナデ？（脚）調整不明　内：調整不明	図版 64-6	R160
2	土師器　器台	7層	(脚)4/5		10.6	(8.4)	外：調整不明　内：ハケメ？	図版 64-7	R161
3	土師器　鉢	7層	完形	11.0	2.3	8.0	外：(口) ナデ？(頸) ヘラミガキ（体）調整不明（底）平底 内：(口～頸) ヘラミガキ (体～底) 調整不明	図版 64-8	R171
4	土師器　鉢	7・8層	2/5		(4.6)	(7.3)	外：(口) ヘラミガキ (体上半) ナデ (体下半～底) ヘラケズリ？→ナデ 内：(口) ナデ、一部ヘラミガキ (体) ナデ	図版 65-1	R329
5	土師器　鉢	7層	完形	10.0	5.6	10.9	外：(口) ナデ（体）ハケメ→ナデ？　内：(口）ハケメ→ナデ（体～底）ナデ	図版 65-2	R168
6	土師器　鉢	7層	完形	8.5	4.6	7.4	外：(口) ナデ (体) ハケメ→ヘラミガキ　内：調整不明	図版 65-3	R167
7	土師器　鉢	7層	2/3		5.6	(8.7)	外：(頸) ナデ（体）ナデ？　内：オサエ、ナデ	図版 65-4	R169
8	土師器　鉢	7層	3/5	16.7		7.3	外：調整不明　内：(口）ナデ（体～底）調整不明	図版 65-7	R163
9	土師器　壺	7層	1/2	(9.0)	5.0	13.5	外：(口) ナデ（頸）ヘラミガキ（体）ヘラミガキ　内：(口～頸）調整不明 (体～底）ヘラナデ	図版 65-5	R162
10	土師器　壺	5層	(口)4/5	14.8		(5.4)	外：ナデ、ハケメ、一部赤彩　内：調整不明	図版 65-9	R164
11	土師器　壺	7層	(口)2/3	13.8		(7.8)	外：(口) ナデ（頸）ヘラミガキ　内：調整不明	図版 65-8	R166
12	土師器　壺	7層	(底)2/3		6.6	(5.8)	外：(体) ハケメ→ヘラミガキ　内：調整不明	図版 65-10	R253

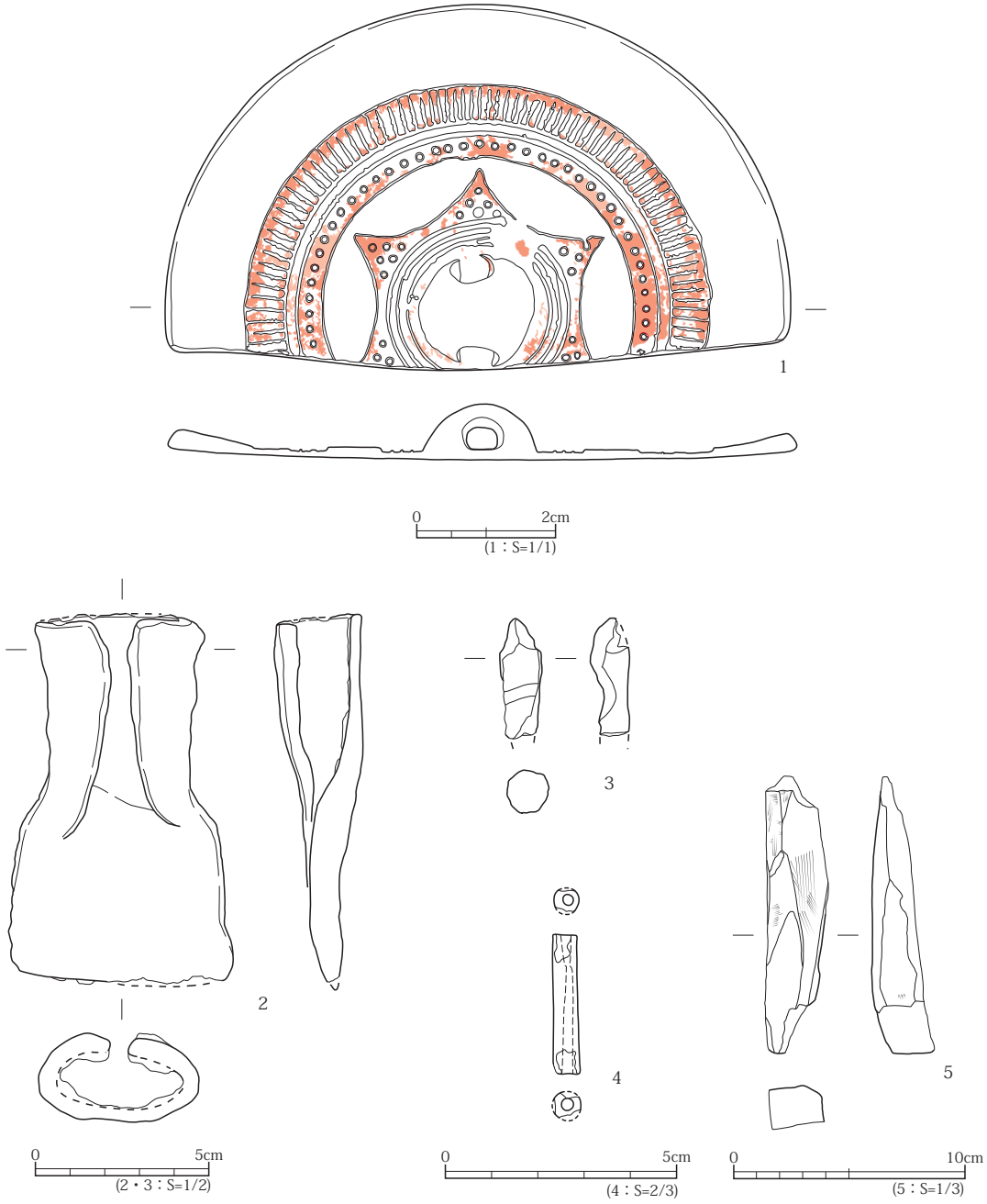
第 81 図　SI19 竪穴建物跡　出土遺物 (1)



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	床	(口・体)2/3	24.6	8.6	(36.5)	外：(口～頸) ハケメ→ナデ (頸) ヘラミガキ　内：(口) ナデ (頸) ハケメ 二重口縁	図版 66-1	R170
2	土師器　壺	7 層	2/3	(15.8)	7.3	28.9	外：(口～頸・底) 調整不明 (体) ヘラミガキ　内：(口～頸) 調整不明 (体～底) ヘラナデ　複合口縁	図版 65-6	R165

第 82 図　SI19 竪穴建物跡　出土遺物 (2)



No.	器種	層	特徴	写真図版	登録番号
1	銅鏡　内行花文鏡	6 層	破鏡　径 90mm　厚 0.8 ～ 2.7mm　重量 47.66g　鏡背文様：(外から) 素文縁、櫛歯文、一列の珠文、6 弁内行花文 (花文間に珠文)、三重圏線　鏡背面に赤色顔料付着　破断面を研磨	図版 67-1	銅鏡 A
2	鉄製品　斧	5 ～ 8 層	有袋有肩　ほぼ完形　長 10.5cm　重量 222.5g　袋部幅 4.0 ～ 4.8cm　袋部厚 2.5cm　刃部幅 6.4cm　刃部厚 0.9 ～ 1.0cm	図版 66-2	鉄器 9
3	鉄製品　不明	5 ～ 8 層	破損　長 (3.5cm)　幅 (1.3cm)　厚 (1.2cm)　重量（5.1g）	図版 66-3	鉄器 35
4	玉類　管玉	3 層	ほぼ完形　長 29.8mm　直径 5.2mm　孔径 2.0 ～ 2.2mm　重量 1.0g　緑色凝灰岩製　灰白色　両面穿孔	図版 66-4	管玉 127
5	石製品　砥石	3 層	破損　長 (12.2cm)　幅 (2.6cm)　厚 (2.2cm)　重量 (86.3g)　頁岩製　砥面 2 面	図版 66-5	R173

第 83 図　SI19 竪穴建物跡　出土遺物 (3)

【SI20 竪穴建物跡】（平・断面図：第 84 図、出土遺物：第 85 図）

〔位置・検出〕 B 区の北東隅に位置し、標高 46 ～ 48m の北東側に傾斜する緩斜面上に立地する。北辺中央から東辺北側にかけてカクランによって壊されている。北辺東側と東辺北側は掘方埋土のみの検出である。床面施設の検出まで行った。

〔平面形・規模〕 方形で、規模は南北 5.5m、東西 5.8m である。

〔方向〕 西辺でみると北で東に約 23°偏る。

〔壁〕 地山を壁とし、南辺では周溝底面から垂直に、それ以外は外側に傾斜をもって立ち上がる。高さは、最も残りの良い南辺中央で床面から 39cm である。

〔床面〕 掘方埋土と地山を床面としている。中央部分が地山で、掘方埋土はその周囲に分布する。床面には細かな凹凸がある。南西側から北西隅にかけて標高を下げながら緩やかに傾斜する。

〔炉〕 中央やや西寄りで焼面 1 ヶ所（Y1）を検出した。規模は長軸 40cm、短軸 30cm である。

〔周溝〕 西辺、南辺と東辺の南端で検出した。西辺と南辺は一部途切れている。上幅 10 ～ 20cm である。

〔土坑〕 1 基（K1）検出した。南西隅に位置し、円形で規模は長軸 64cm、短軸 60cm である。

〔その他〕 主柱穴は未確認であるが、ピット 2 個（P1・2）を検出した。P1 は北東部、P2 は南東部に位置する。楕円形で、規模は P1 が長軸 52cm、短軸 48cm 、P2 が長軸 38cm、短軸 34cm である。いずれも柱抜取穴が確認された。

〔堆積土〕 12 層に分かれ、いずれも自然堆積である。2 層には灰白色火山灰小ブロックが含まれる。

〔出土遺物〕 K1 上面から土師器器台（第 85 図 5）、堆積土から土師器高坏（1・2）、器台（3・4）、鉢（6）、壺（7）、甕（8・9）が出土した。

【SI21 竪穴建物跡】（平・断面図：第 86 図、出土遺物：第 87 図）

〔位置・検出〕 B 区北東部に位置し、標高 48m の丘陵頂部から北側に傾斜する緩斜面上に立地する。北東隅と西辺中央部がカクラン、中央部が SI36 竪穴建物跡によって壊されている。床面施設の検出と一部で精査まで行った。

〔重複〕 SI36 竪穴建物跡と重複し、これより古い。

〔平面形・規模〕 長方形で、規模は南北 5.6m、東西 4.3m である。

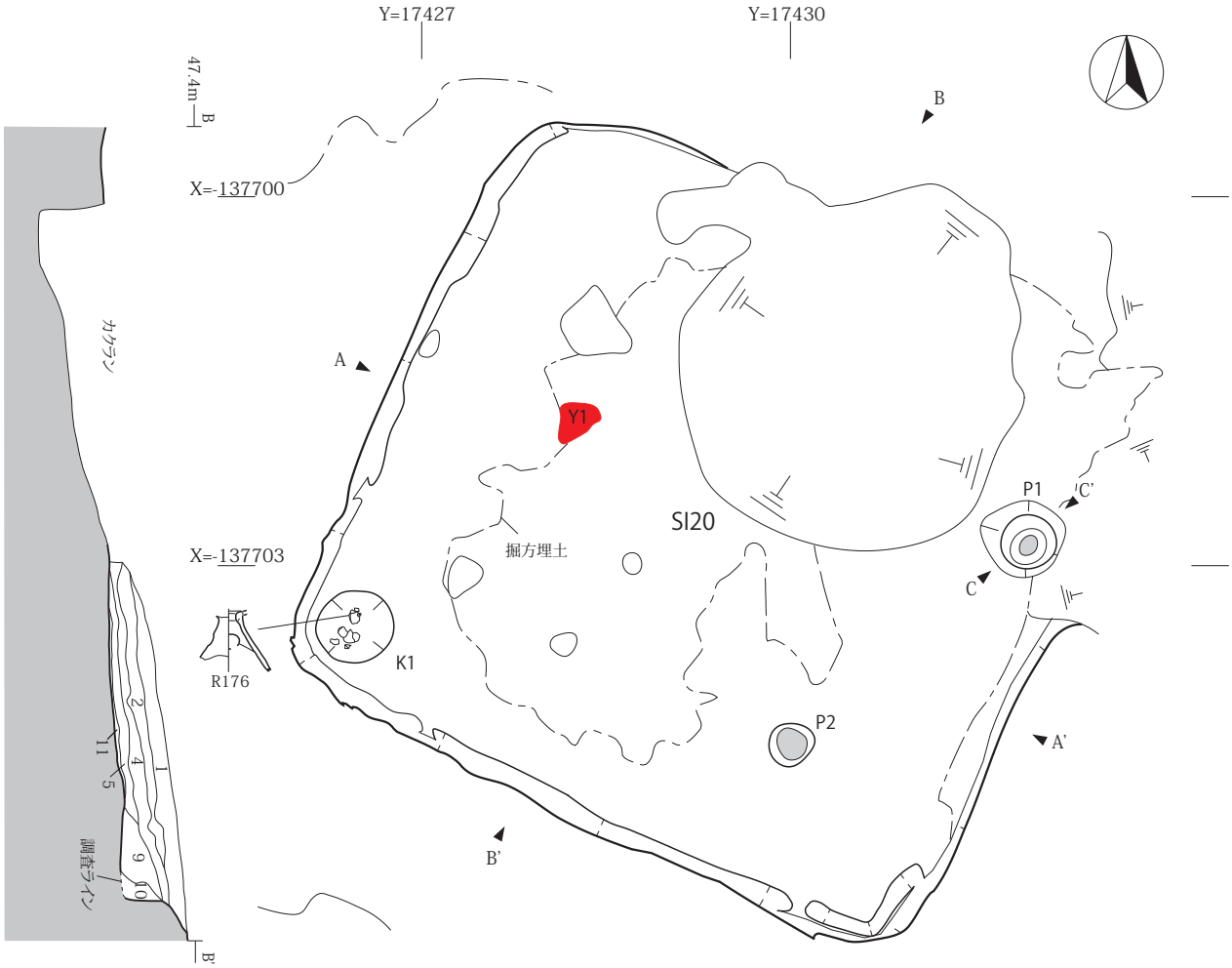
〔方向〕 東辺でみると、ほぼ真北である。

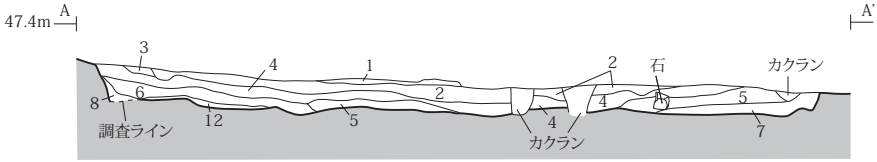
〔壁〕 地山を壁とし、床面からやや外側に傾斜をもって立ち上がる。高さは、最も残りの良い南辺で床面から 25cm である。

〔床面〕 掘方埋土と地山を床面としている。掘方埋土は中央部と北東隅に分布する。ほぼ平坦で、南北方向では、中央部分の標高が高く、それより南北に標高を下げながらわずかに傾斜する。

〔周溝〕 北辺、東辺南側、南辺中央より東側と西側の一部、西辺北端と中央で検出した。上幅 7 ～ 39cm である。

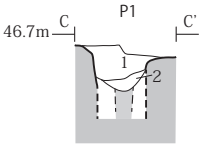
〔土坑〕 1 基（K1）検出した。南東隅に位置し、南北方向に長軸を持つ楕円形である。規模は、長軸 117cm、短軸 100cm、深さ 37cm である。床面から 25cm の位置に、南側から西側にかけて幅 8





A-A'、B-B'

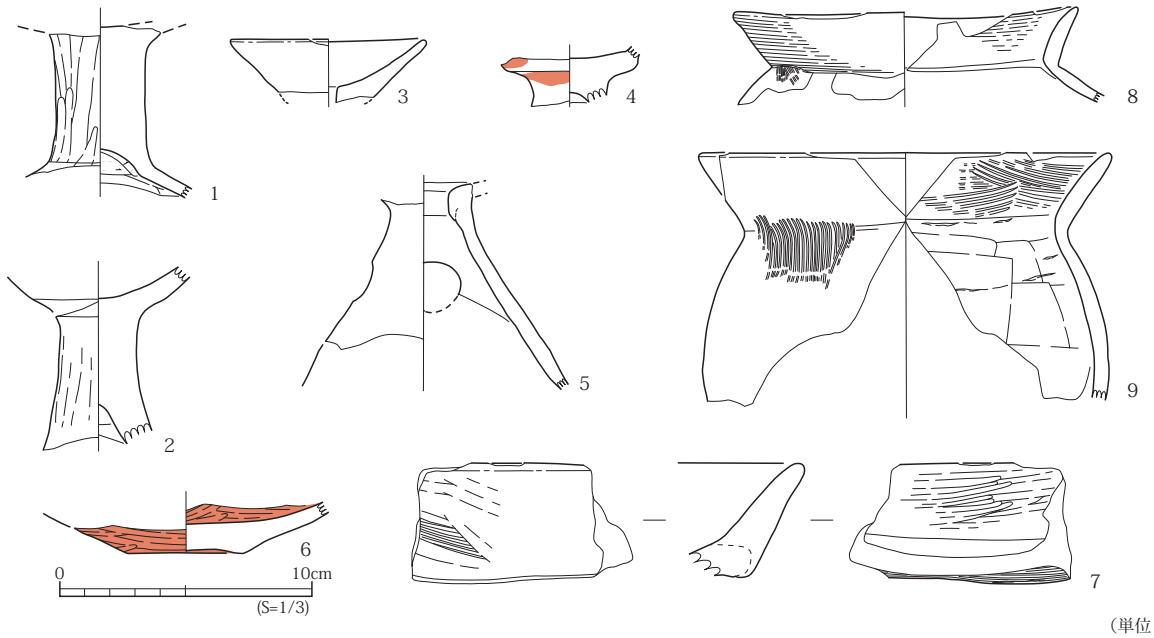
層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト		自然堆積
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	灰白色火山灰小ブロックをわずかに含む	
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物片をわずかに含む	
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト小ブロックを含む	
5	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物片、焼土粒をわずかに含む	
6	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を少量含む	
7	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロック、灰黄褐色 (10YR4/2) シルト小ブロックをやや多く含む	
8	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物、地山粒、黒褐色 (10YR3/2) シルト粒をわずかに含む	
9	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒を含む	
10	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山小ブロックをやや多く含む	
11	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物をわずかに含む	
12	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物をわずかに含む	



P1 (C-C')

層	土色	土性	含有物など	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物粒、地山粒・小ブロックを含む	抜取穴
2	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山小ブロックをやや多く含む	

第 84 図　SI20 竪穴建物跡



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　高坏	9 層	(脚)2/3			(6.8)	外：ヘラミガキ　内：ヘラケズリ　脚部上部中実　屈折脚	図版 68-1	R174
2	土師器　高坏	3～6 層	(脚)1/2			(7.8)	外：(坏) 調整不明 (脚) ハケメ→ヘラミガキ　内：(坏) 調整不明 (脚) ナデ？脚部上部中実	図版 68-2	R175
3	土師器　器台	9 層	(受)1/1	7.8			外・内：調整不明	図版 68-4	R178
4	土師器　器台	3～12 層	(受)1/2			(2.4)	外・内：調整不明、一部赤彩　貫通孔なし	図版 68-3	R177
5	土師器　器台	K1 上面	(脚)2/3			(8.2)	外・内：調整不明　円窓 3	図版 68-5	R176
6	土師器　鉢	7 層	(底)1/3		4.6	(2.1)	外・内：ヘラミガキ→赤彩	図版 68-7	R180
7	土師器　壺	3～11 層	口縁部			(4.8)	外：(口) ハケメ→ヘラミガキ (頸) ナデ　内：(口) ヘラミガキ　二重口縁	図版 68-8	R181
8	土師器　甕	3～10 層	(口)2/3	13.5		(2.9)	外：(口) ナデ (体) ハケメ　内：(口) ナデ (体) 調整不明	図版 68-6	R183
9	土師器　甕	9 層	(口～体)1/4	(16.0)		(10.0)	外：(口) 調整不明 (体) ハケメ　内：(口) ハケメ (体) ナデ	図版 68-9	R182

第 85 図　SI20 竪穴建物跡　出土遺物

～ 25cm の段が付く。4 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**溝**〕1 条（D1）検出した。北辺中央部に位置する南北方向の溝跡で、北側は建物の外側に延びる。検出長 2.1m、幅 15 ～ 20cm である。

〔**その他**〕ピット 6 個（P1 ～ 6）を検出した。P1 は北東、P2 は南東、P3 は北西、P4 は北辺中央、P5 は南辺中央、P6 は中央に位置し、長軸 20 ～ 30cm、短軸 15 ～ 24cm の円形、楕円形で、P3 では径 14cm の柱痕跡が確認された。P1 ～ 3 は主柱穴の可能性がある。

〔**堆積土**〕5 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

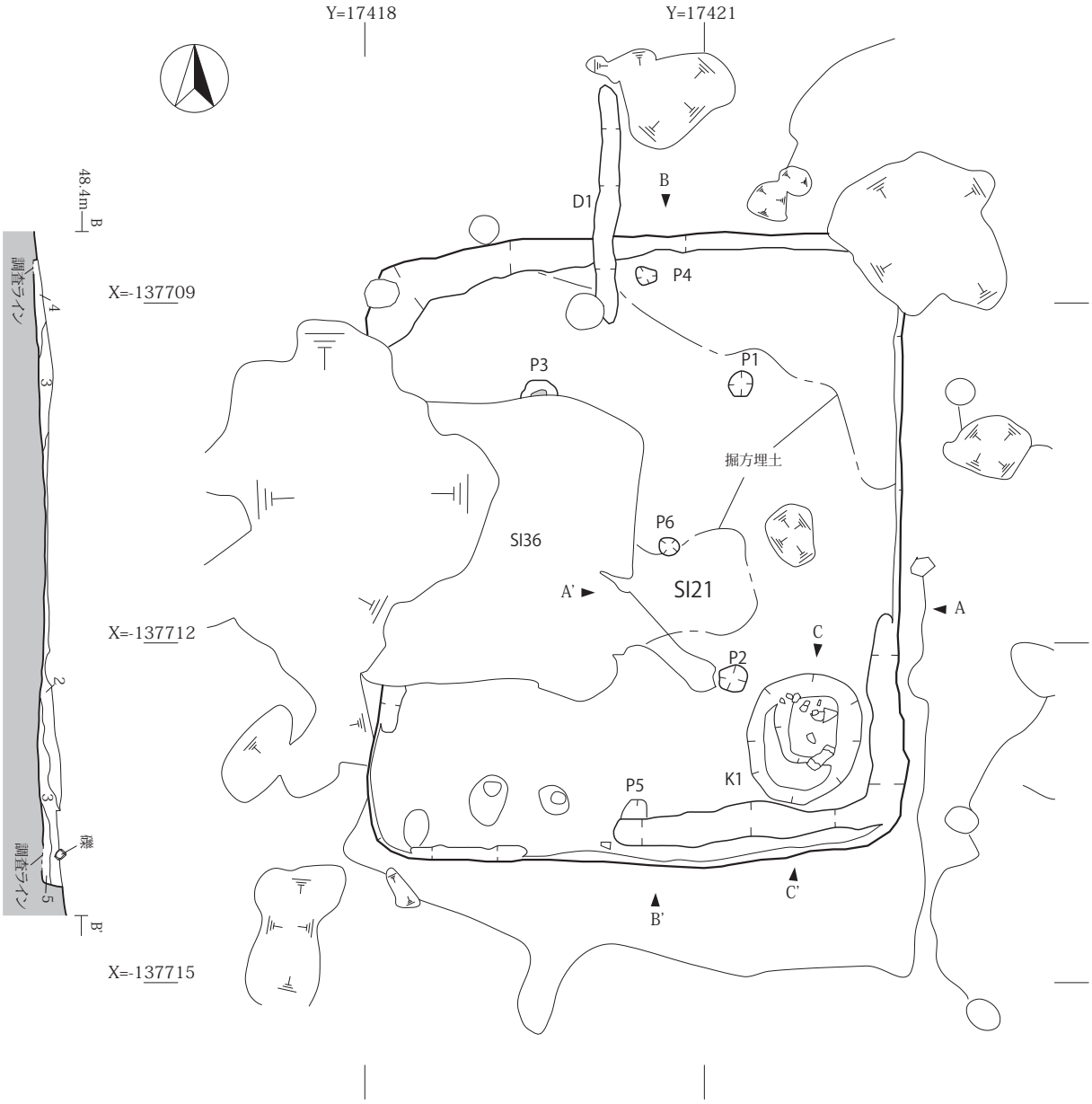
〔**出土遺物**〕堆積土から土師器高坏（第 87 図 1）、鉢、甕（2）、磨＋敲石（3）が出土した。

3）その他

整地層 1 ヶ所を検出した。

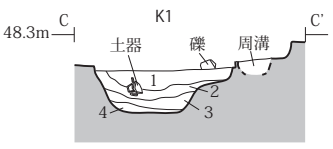
【SX14 整地層】（平面図：第 7 図、出土遺物：第 88 図）

B 区北辺の中央から東側に位置し、B 区の北側にある東方向の沢の沢頭部分に行われた整地層である。東西約 25m のみの検出である。SA4 材木塀跡、SI13・19 竪穴建物跡と重複し、SA4 より新しく、SI13・19 より古い。地山ブロックを多く含む砂質シルトである。整地層中から土師器壺（第 88 図 1）が出土した。



A-A'、B-B'

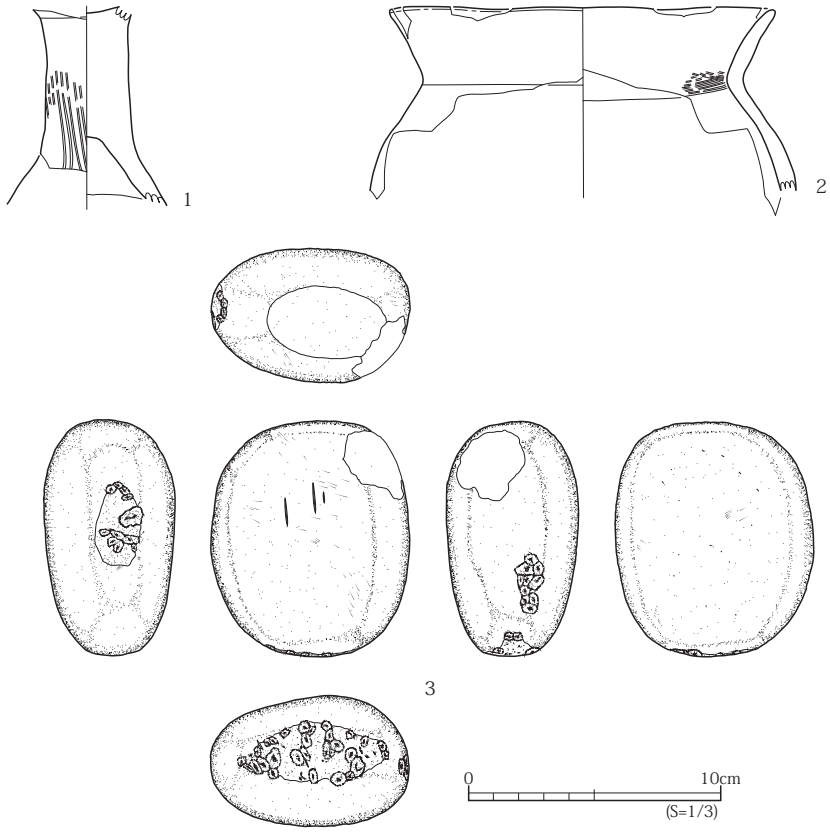
層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物を少量含む	自然堆積
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物を少量含む	
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物を少量含む	
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物を少量含む	
5	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒を含む	



K1 (C-C')

層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物、焼土をやや多く含む	自然堆積
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物をわずかに含む	
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト質粘土	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロックを含む	
4	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト質粘土		

第 86 図　SI21 竪穴建物跡

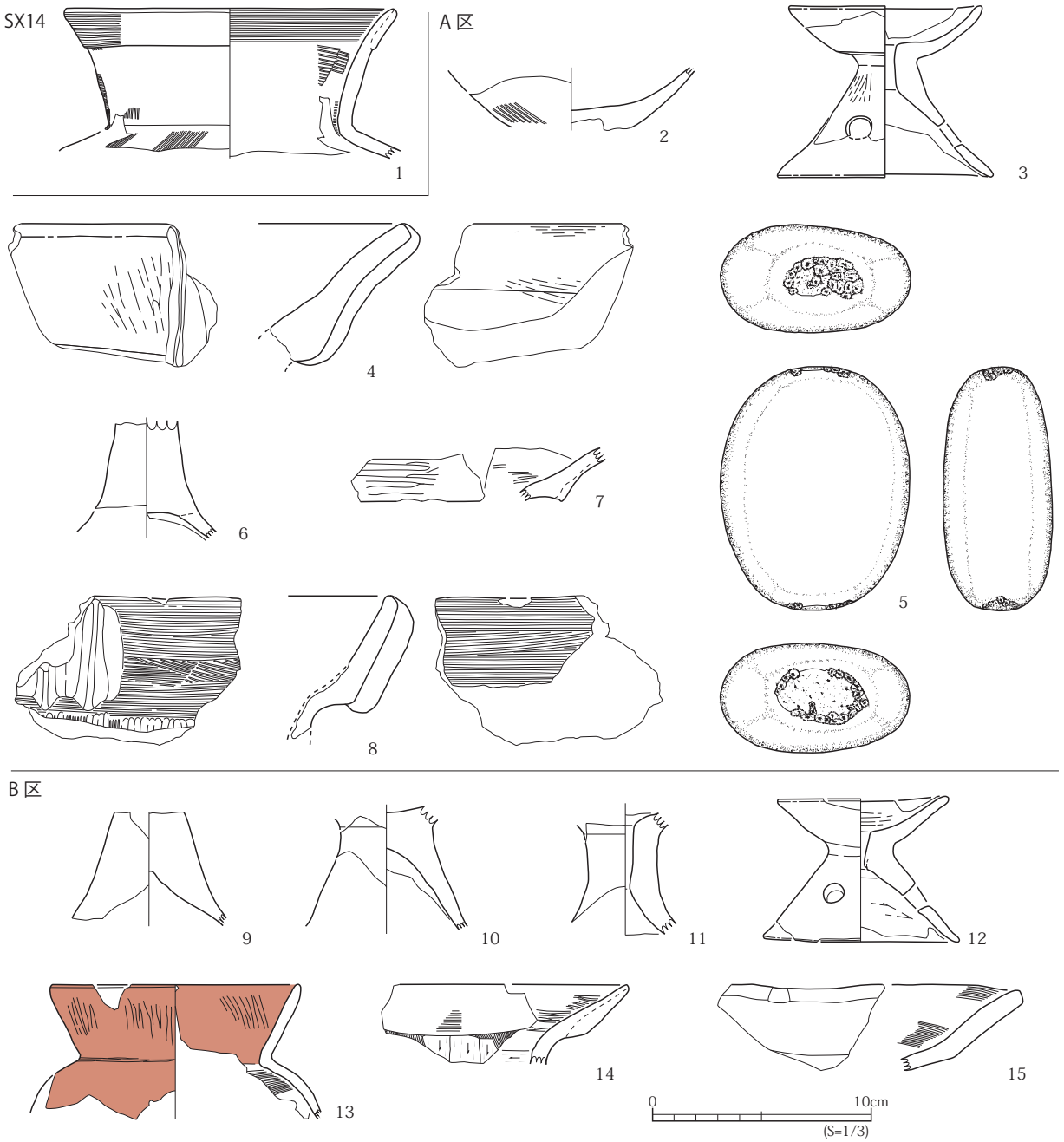


No.	器種	層	残存	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　高坏	3層	脚部	器高 (8.0cm)　外：(脚) ハケメ　内：(脚) 調整不明　脚部上部中実	図版 68-10	R184
2	土師器　甕	2・3層	(口～体)1/4	口径 (15.2cm)　器高 (8.3cm)　外：調整不明　内：(口) ハケメ (体) 調整不明	図版 68-11	R185
3	石器　磨＋敲石	4層	ほぼ完形	長 9.5cm　幅 8.1cm　厚 5.5cm　重量 500g　頁岩製　端部に敲打痕　それ以外磨面	図版 68-12	R187

第 87 図　SI21 竪穴建物跡　出土遺物

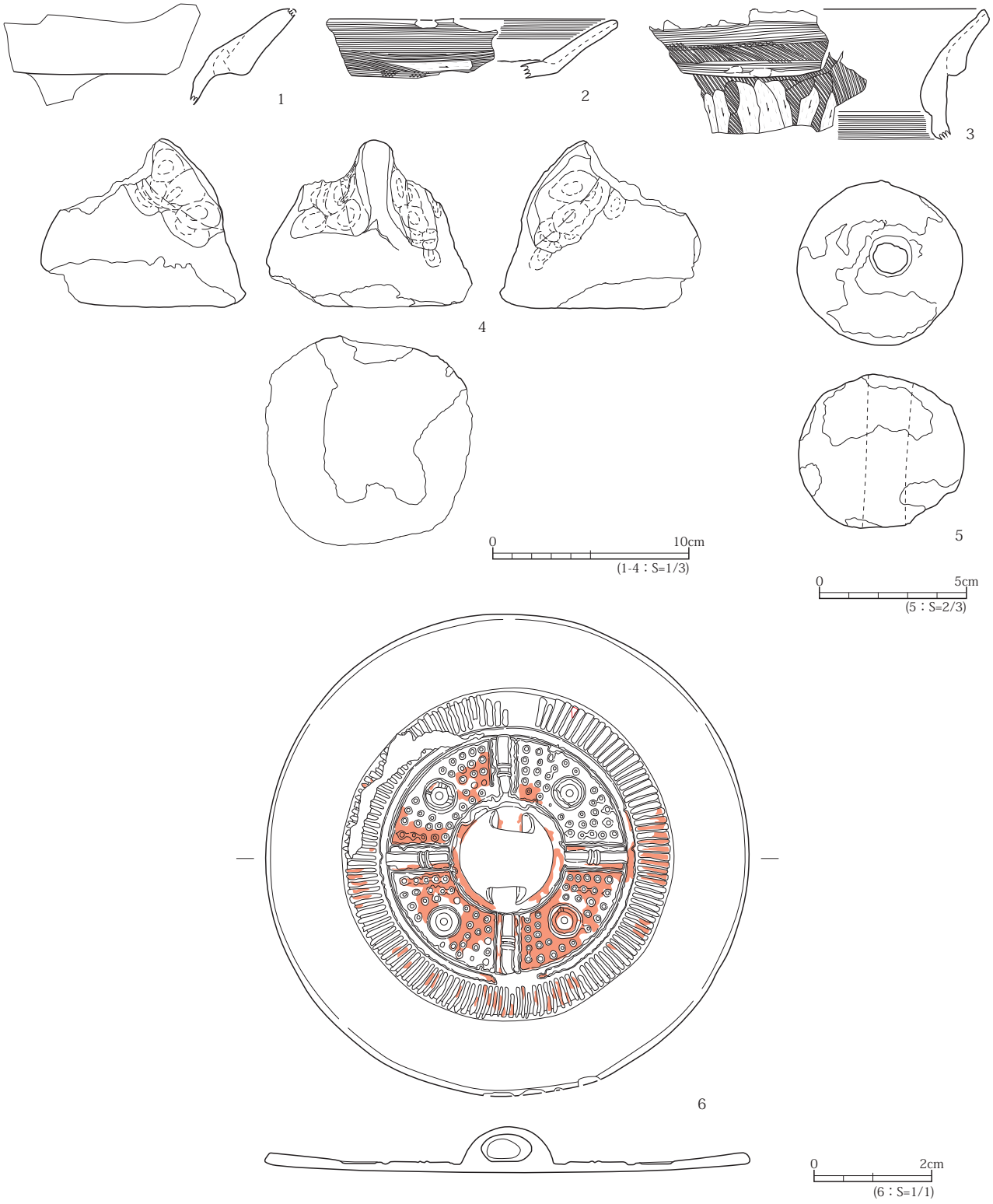
4）その他の出土遺物

遺構確認面、遺構と重複するカクラン、表面採集資料などから出土した特徴的な遺物を第 88 ～ 89 図にまとめた。第 88 図 2 ～ 8 は、A 区から出土した遺物で、2 ～ 5 は今回の調査で検出した竪穴建物跡の中で最も規模の大きい SI64 竪穴建物跡の遺構確認面、SI64 内にあるカクランから出土したものである。第 88 図 9 ～ 15、第 89 図は B 区から出土した遺物で、第 89 図 6 は西辺と北辺の一部のみの検出である SI27 竪穴建物跡から出土した銅鏡、第 89 図 1・5 は SI25・26 の遺構確認面から出土したもの、第 89 図 4 は 2 号塚の盛土から出土したものである。



No.	器種	遺構・層	残存	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	SX14 整地層	(口)1/4(体)一部	口径 15.2cm　器高 (6.8cm)　外：(口～体) ハケメ→ (口) 粘土帯貼付→ナデ 内：(口) ハケメ→ナデ　複合口縁	図版 69-8	R254
2	土師器　高坏	SI64 確認面	坏部	外：ハケメ　内：調整不明	図版 69-2	R301
3	土師器　器台	SI64 カクラン	2/3	口径 8.6cm　脚部径 (9.8cm)　器高 7.8cm　外：(受) 調整不明 (脚) ヘラミガキ？　内：調整不明	図版 69-1	R305
4	土師器　壺	SI64 確認面	口縁部	器高 (6.5cm)　外：ヘラミガキ、棒状浮文　内：ヘラミガキ　二重口縁	図版 69-5	R302
5	石器　磨＋敲石	SI64 カクラン	完形	長 11.1cm　幅 8.7cm　厚 5.0cm　重量 720g　砂岩製　端部に敲打痕　それ以外磨面	図版 69-7	R307
6	土師器　高坏	A 区表採	脚部	外・内：調整不明　脚部中実	図版 69-4	R324
7	土師器　壺	SI62 確認面	口縁部	外：ハケメ　内：調整不明	図版 69-3	R313
8	土師器　壺	A 区表採	口縁部	器高 (6.5cm)　外：(口) ハケメ→ナデ→棒状浮文貼付 (頸) ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内：(口) ハケメ→ナデ　二重口縁	図版 69-6	R314
9	土師器　高坏	SI12 確認面	脚部	外・内：調整不明　脚部上部中実	図版 69-14	R257
10	土師器　高坏	B 区排土	脚部	外：(脚) ハケメ→ヘラミガキ？　内：(体) 調整不明、(脚) ナデ？　脚部中空	図版 69-9	R267
11	土師器　器台	B 区確認面	脚部	器高 (5.5cm)　外：調整不明　内：(受) ヘラミガキ、一部赤彩 (脚) 調整不明	図版 69-11	R274
12	土師器　器台	B 区排土	ほぼ完形	口径 7.6cm　底径 (8.8cm)　器高 6.6cm　外：調整不明　内：(受) ヘラミガキ (脚) ナデ？	図版 69-10	R277
13	土師器　壺	SI13 周辺確認面	(口)4/5(体上)一部	口径 11.4cm　器高 (6.1cm)　外：(口～体) ヘラミガキ→赤彩　内：(口) ヘラミガキ→赤彩	図版 69-12	R276
14	土師器　壺	2 号塚確認面	口縁部	外：ヘラケズリ、ヘラナデ→ナデ　内：ヘラミガキ、ヘラケズリ　二重口縁	図版 69-16	R260
15	土師器　壺	SI17 周辺確認面	口縁部	外：調整不明　内：ヘラナデ、ナデ　二重口縁	図版 69-17	R272

第 88 図　その他の出土遺物 (1)



No.	器種	遺構・層	残存	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　壺	SI25 確認面	口縁部	外・内：調整不明　二重口縁	図版 69-15	R255
2	土師器　壺	SI8 周辺確認面	口縁部	外：ハケメ→ナデ→ハケメ、ヘラケズリ、ナデ　内：ナデ　二重口縁	図版 69-18	R263
3	土師器　壺	沢部分確認面	口縁部	外：ハケメ→粘土貼付→ハケメ→ナデ、オサエ、ヘラケズリ　内：ナデ？　複合口縁	図版 69-19	R268
4	土製品　支脚	2 号塚盛土	一部	高さ (8.8cm)　幅 (10.8cm)　厚 (10.8cm)	図版 69-13	R259
5	土製品　土玉	SI26 確認面	完形	最大径 3.1cm　器高 2.9cm　孔径 0.6 ～ 0.8cm	図版 69-20	R256
6	銅鏡　珠文鏡	SI27 確認面	ほぼ完形	直径 82.0mm　厚 1.1 ～ 2.0mm　重量 47.61g　鏡背文様：(外から) 素文縁、櫛歯文、4 分割した区画に一重圏線をもつ乳文と周囲に 5 列の珠文、一重圏線　鏡背面に赤色顔料付着	図版 70-1	銅鏡 B

第 89 図　その他の出土遺物 (2)

（2）古代

竪穴建物跡 5 棟を検出し、これらについては遺構精査を終了している。

【SI5 竪穴建物跡】（平・断面図：第 90 図、出土遺物：第 91 図）

〔**位置・検出**〕B 区西端に位置し、標高 46 ～ 47m の丘陵尾根の先端から南側に傾斜する緩斜面上に立地する。北西隅と南西隅はカクランや自然崩落、後世の削平により壊されている。南辺西側は掘方埋土のみの検出である。SI8 竪穴建物跡堆積土上面と地山で検出した。

〔**重複**〕SA4 材木塀跡、SI7・8 竪穴建物跡と重複し、これらより新しい。

〔**平面形・規模**〕隅丸方形で、規模は、南北 3.3m、東西 3.6m である。

〔**方向**〕東辺でみると北で西に約 5°偏る。

〔**壁**〕東辺と北辺の東端が SI8 堆積土と掘方埋土、それ以外が地山を壁とし、床面から急角度で立ち上がる。高さは、最も残りの良い東辺北側で床面から 40cm である。

〔**床面**〕掘方埋土を床面としている。北側から南側へ標高を下げながら緩やかに傾斜し、両者の高低差は 10cm である。

〔**カマド**〕北辺東端に付設されている。燃焼部とカマド両側壁、煙道部、煙出しピットが残存している。カマドは周溝埋土上に構築されている。燃焼部の規模は、側壁内側で測ると幅 55cm、奥行き 50cm である。カマド両側壁は部分的な残存であり、規模は、左側壁が長さ 30cm、幅 25cm、高さ 2.5cm、右側壁が長さ 50cm、幅 25cm、高さ 4 ～ 6cm である。奥壁は建物跡壁面と一致し、高さは 19cm である。

煙道部は、長さ 130cm、幅 30cm、深さ 5 ～ 19cm、煙出しピットは長軸 30cm、短軸 20cm の楕円形で深さ 18cm である。

堆積土は 3 層に分かれ（第 90 図 5 ～ 7 層）、いずれも自然堆積である。

〔**周溝**〕北辺と東辺で検出した。上幅 40cm、下幅 5 ～ 15cm、深さ 10cm である。底面は、北辺では東側から西側へ、東辺では北側から南側へ標高を下げながら緩やかに傾斜する。前者の高低差は 9cm、後者の高低差は 13cm である。堆積土は自然堆積である。

〔**堆積土**〕3 層に分かれ、いずれも自然堆積である。1 層には灰白色火山灰が含まれる。

〔**出土遺物**〕床面から須恵器坏（第 91 図 1）、堆積土から須恵器坏（2）、蓋（3）が出土した。

【SI7 竪穴建物跡】（平・断面図：第 92 ～ 95 図、出土遺物：第 96・97 図）

〔**位置・検出**〕B 区の北西隅に位置し、標高 46 ～ 47m の丘陵尾根先端部に立地する。煙道部がカクランにより壊されている。カマド、周溝、張り出し部が 1 度（SI7A → SI7B）改修されている。

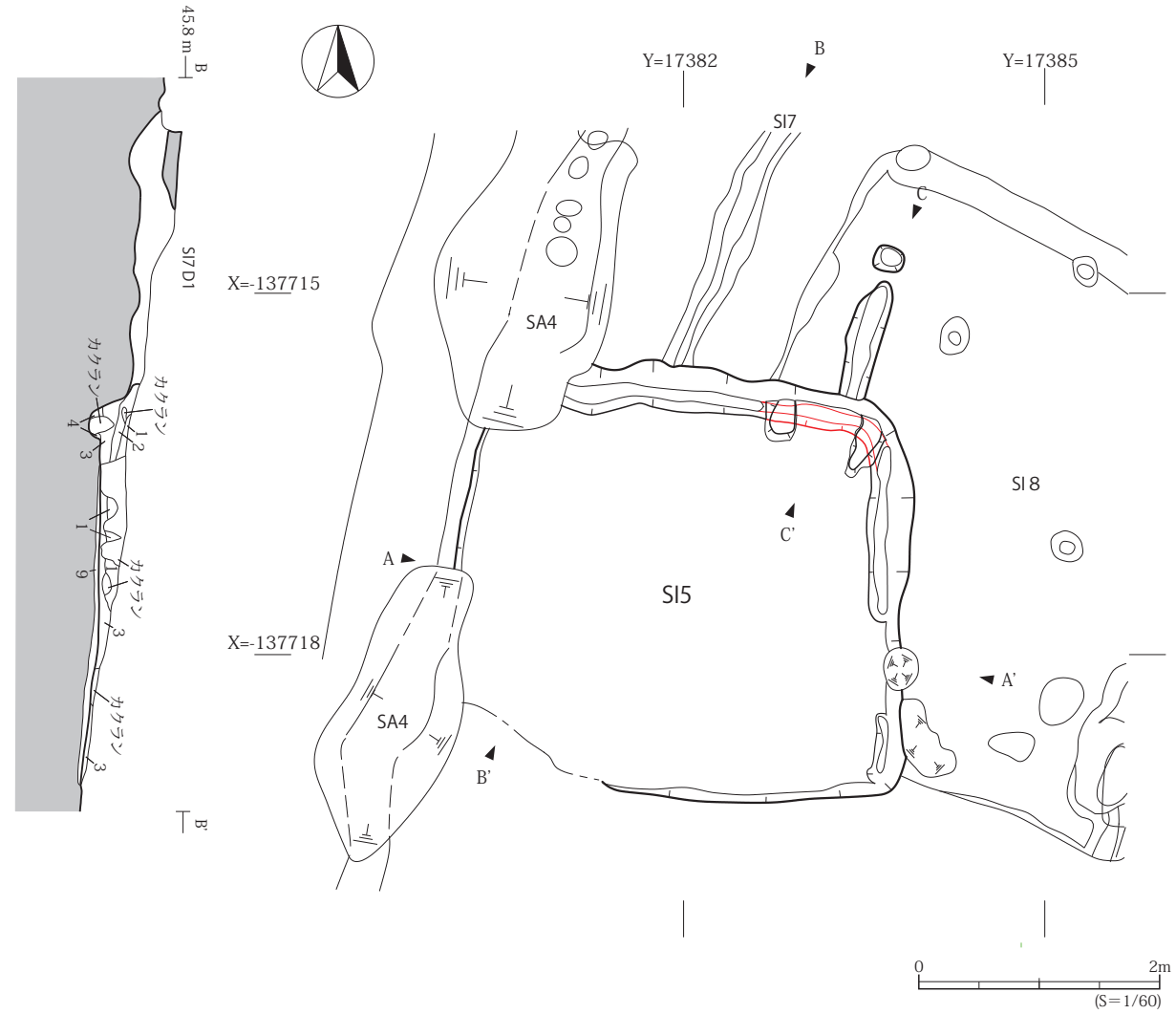
〔**重複**〕SI5 竪穴建物跡、SA4 材木塀跡と重複し、SA4 より新しく SI5 より古い。

〔**平面形・規模**〕隅丸方形で、南北 5.3m、東西 5.6m である。

〔**方向**〕南辺でみると、東で北へ 22°偏る。

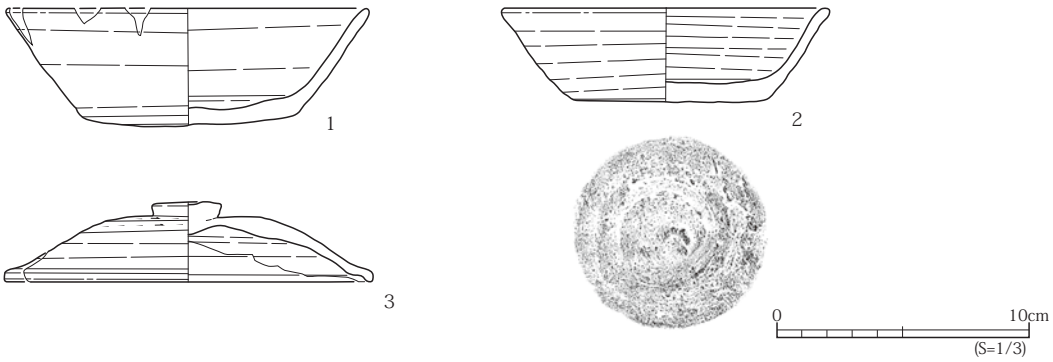
〔**壁**〕地山を壁とし、床面からほぼ垂直に立ち上がる。高さは、最も残りの良い北辺中央で床面から 30cm である。

〔**床面**〕東側 1/4 が掘方埋土と地山、それより西側がにぶい黄褐色シルトにより貼床されている。



層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	灰白色火山灰を含む	自然堆積
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小ブロックを少量含む	
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	
4	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小ブロックを含む	周溝堆積土
5	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む	自然堆積
6	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小ブロックを少量含む	
7	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山粒・小ブロックを多量に含む	
8	褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	地山粒・小ブロックを多量に含む	周溝埋土
9	褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	地山ブロック多量、地山粒を含む	掘方埋土

第 90 図　SI5 竪穴建物跡



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	須恵器　坏	床・3層	ほぼ完形	14.2	8.5	4.7	外：(口～体) ロクロナデ (底) ヘラ切り無調整　内：ロクロナデ	図版 71-1	R1001
2	須恵器　坏	堆	完形	12.7	7.7	3.7	外：(口～体) ロクロナデ (底) ヘラ切り無調整　内：ロクロナデ	図版 71-2	R1003
3	須恵器　蓋	5層	4/5	(14.4)		3.2	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　摘径 2.7cm　内：ロクロナデ	図版 71-3	R1002

第 91 図　SI5 竪穴建物跡　出土遺物

東側の標高が高く、西側にむかって標高を下げながら緩やかに傾斜する。

〔**主柱穴**〕4 個 (P1 ～ 4) 検出した。掘方の規模は長軸 40 ～ 52cm、短軸 32 ～ 44cm、深さ 38 ～ 58cm である。3 個（P1・3・4）で柱抜取穴、すべての柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡は長軸 8 ～ 18cm の円形、楕円形、長楕円形である。

SI7A

〔**カマド**〕東辺中央に付設されている。カマド両側壁の一部が残存するのみである。燃焼部、側壁の規模は不明である。

〔**周溝**〕南辺、東辺、北辺の東側、西辺の南側で検出した。規模は、上幅 2 ～ 6cm、下幅 3 ～ 10cm、深さ 2cm である。堆積土は自然堆積である。

〔**その他**〕溝跡 2 条（D1・3）、土坑 1 基（K2）、柱穴 1 個（P5）、張り出し部 1 ヶ所を検出した。

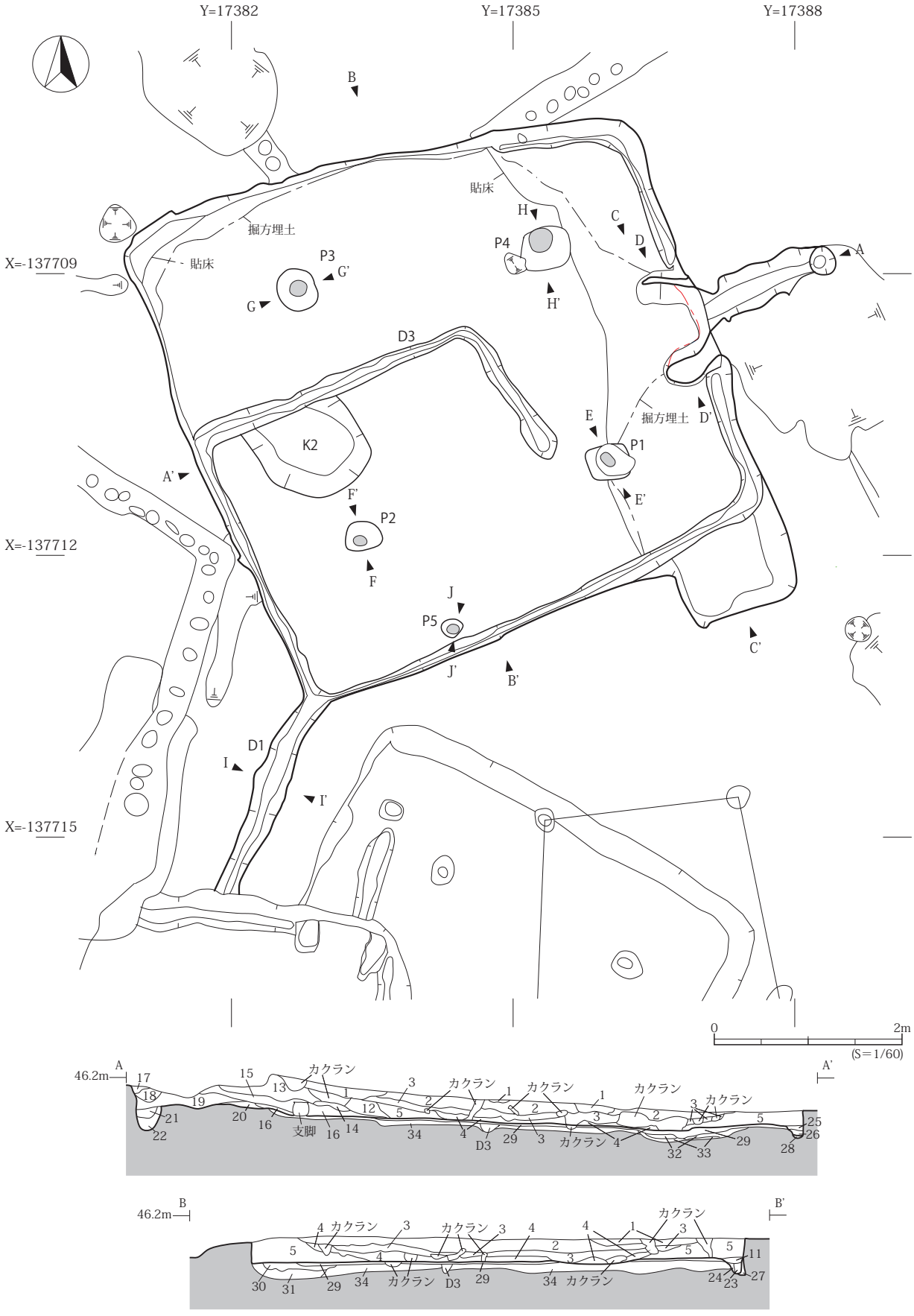
D1 は建物跡の南西隅から南西方向に延びる溝跡である。北端は周溝に接続し、南端は SI5 により壊されている。検出長は 2.2m、上幅 20 ～ 38cm、下幅 5 ～ 15cm、深さ 11 ～ 30cm で、建物南西隅から南西に 1.0m の範囲では地山による天井部が残存していた。堆積土は自然堆積である。

D3 は西辺中央部から東に延び、東端が南に折れ曲がる鉤形の溝跡で、貼床の下で検出した。西端は周溝に接続する。検出長は東西方向 3.0m、南北方向 1.6m、上幅 10 ～ 30cm、下幅 5 ～ 12cm、深さ 12 ～ 14cm である。堆積土は 1 層で人為的埋土である。

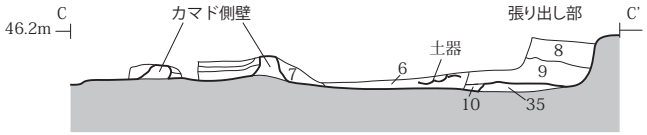
K2 は中央西側に位置し、貼床の下で検出した。北側が D3 と重複し、これより古い。楕円形とみられ、残存する規模は長軸 1.3m、短軸 1.1m、深さ 12 ～ 15cm である。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも人為的埋土である。

P5 は南辺の中央西寄りに位置し、径 21cm の円形で、深さは 22cm である。柱痕跡が確認され、径 12cm の円形である。

南東隅から南東方向への凸形の張り出し部が検出された。B 期で拡幅されており A 期の規模は不明である。底面に人為的埋土が行われ（第 93 図 35 層）、その後に周溝が造られている。

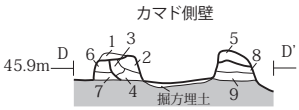


第 92 図　SI7A 竪穴建物跡



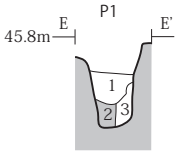
A-A'、B-B'、C-C'

層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックをわずかに含む	自然堆積
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山小ブロックをわずかに含む	
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト質粘土	炭化物、地山小ブロック・ブロックを含む	
5	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	
6	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに、焼土、炭化物を含む	
7	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭化物、焼土、地山粒・小ブロックをわずかに含む	
8	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭化物、焼土、地山小ブロックをわずかに含む	
9	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山小ブロック・ブロックを多量に含む	
10	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山小ブロックを含む	
11	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭化物、地山粒・小ブロックをわずかに含む	
12	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山小ブロック・ブロックをわずかに含む	
13	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロック・大ブロックを多量に含む	
14	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土を多量に含む	
15	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロックを含む	
16	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土、地山小ブロックを含む	
17	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	
18	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	
19	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロック・ブロックを含む	
20	褐色 (10YR4/4)	シルト	焼土、地山ブロックを含む	
21	褐色 (10YR4/6)	シルト	焼土、地山小ブロックを含む	
22	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒を含む	
23	褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	地山粒・小ブロックをわずかに含む	B 期周溝堆積土
24	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒・小ブロックを多量に含む	
25	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	
26	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒・小ブロックを多量に含む	
27	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒・小ブロックを含む	A 期周溝堆積土
28	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒・小ブロックを含む	
29	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山粒をわずかに含む	貼床
30	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	掘方埋土
31	黄褐色 (10YR5/6)	シルト質粘土	地山粒・小ブロックを多量に含む	
32	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	K2 埋土
33	暗褐色 (10YR3/3)	シルト質粘土	炭化物を多量に、地山粒をわずかに含む	
34	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト質粘土	地山小ブロック・ブロックを多量に含む	掘方埋土
35	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	炭化物をわずかに、地山小ブロックを含む	



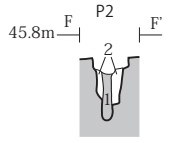
カマド（D-D'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山粒をわずかに含む	自然堆積
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロックを含む	B 期カマド構築土
3	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロックをわずかに含む	
5	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭化物、焼土を多量に、地山小ブロックをわずかに含む	
6	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒をわずかに含む	A 期カマド構築土
7	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山小ブロック・ブロックを多量に含む	
8	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山小ブロックを含む	
9	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山小ブロック・ブロックを多量に含む	



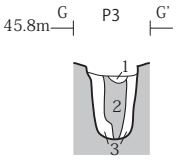
P1（E-E'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山粒を多量、地山小ブロックをわずかに含む	抜取穴
2	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	シルト質粘土	地山粒をわずかに、地山小ブロック・ブロックを多量に含む	柱痕跡
3	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	シルト質粘土	地山粒をわずかに、地山小ブロック・ブロックを多量に含む	掘方埋土



P2（F-F'）

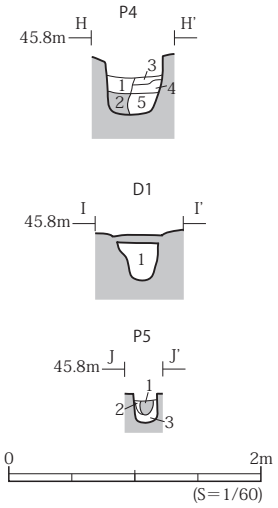
層	土色	土性	含有物など	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト質粘土	地山粒をごくわずかに含む	柱痕跡
2	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト質粘土	地山粒・小ブロックをわずかに含む	掘方埋土



P3（G-G'）

層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒をわずかに含む	抜取穴
2	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト質粘土	地山小ブロックを多量に含む	柱痕跡
3	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト質粘土	地山小ブロック・ブロックを多量に含む	掘方埋土

第 93 図　SI7 竪穴建物跡　断面（1）



P4(H-H')

層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	地山粒・小ブロックを多量に含む	抜取穴
2	褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	地山粒を含む	柱痕跡
3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト質粘土	地山小ブロックをわずかに含む	掘方埋土
4	黄褐色 (10YR5/6)	シルト質粘土	地山小ブロック・ブロックを多量に含む	
5	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	シルト質粘土	地山小ブロック・ブロックを多量に含む	

D1(I-I')

層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小ブロックを含む	自然堆積

P5(J-J')

層	土色	土性	含有物など	備考
1	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	柱痕跡
2	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト質粘土	地山粒をわずか、地山小ブロックを多量に含む	掘方埋土
3	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト質粘土	地山粒をわずか、地山小ブロックを含む	

第 94 図　SI7 竪穴建物跡　断面（2）

〔**出土遺物**〕K2 埋土から須恵器高台坏（第 96 図 1）が出土した。

SI7B

A 期のカマド、周溝、張り出し部を改修している。

〔**カマド**〕燃焼部とカマド両側壁、煙道部、煙出しピットが残存している。燃焼部の規模は、側壁の内側で測ると幅 70cm、奥行き 65cm である。燃焼部中央よりやや奥壁側で、支脚とみられる高さ 14cm の土師器甕（第 96 図 5）が逆位の状態で出土した。カマド側壁は黄褐色、褐色、暗褐色シルトにより A 期の側壁を覆って構築されている。規模は、左側壁が長さ 60cm、幅 40cm、高さ 22cm、右側壁が長さ 62cm、幅 35cm、高さ 24cm である。奥壁は建物跡壁面と一致し、高さは 8cm である。

煙道部の天井部分はカクランにより壊され残存していなかった。規模は、長さ 150cm、幅 10 ～ 20cm、深さ 8 ～ 22cm である。底面は東端に向かって緩やかに標高が上がる。

煙出しピットは径 30cm の円形で、深さは 23cm である。煙道部の先端よりも 26cm 深い。

堆積土は 11 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**周溝**〕南東隅以外は A 期の周溝を埋め戻して新たに掘削されている。北東隅とその周辺では 3 ヶ所で途切れる。規模は上幅 4 ～ 11cm、下幅 4 ～ 18cm、深さ 13 ～ 18cm である。堆積土は自然堆積である。

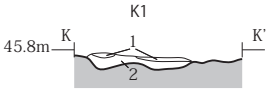
〔**その他**〕土坑 1 基（K1）、溝跡 2 条（D1・2）、柱穴 1 個（P6）、張り出し部 1 ヶ所、焼面 1 ヶ所（Y1）を検出した。なお、D1 は A 期と同様である。

K1 は北東部に位置する。規模は長軸 100cm、短軸 68cm の不整な楕円形で、深さは 13cm である。堆積土は 2 層に分かれ自然堆積である。

D2 は南辺中央東寄りに位置する南北方向の溝跡で、南端は周溝に接続する。検出長 70cm、上幅 12 ～ 16cm、下幅 5 ～ 10cm、深さ 2 ～ 3cm である。

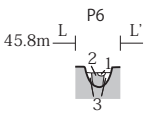
P6 は南辺中央西寄りに位置する。長軸 28cm、短軸 20cm の楕円形で、深さは 14cm である。柱痕跡が確認され、長軸 12cm、短軸 10cm の楕円形である。

南東隅の張り出し部は、A 期を拡幅して造られており、規模は幅 132cm、奥行き 96cm である。



K1(K-K')

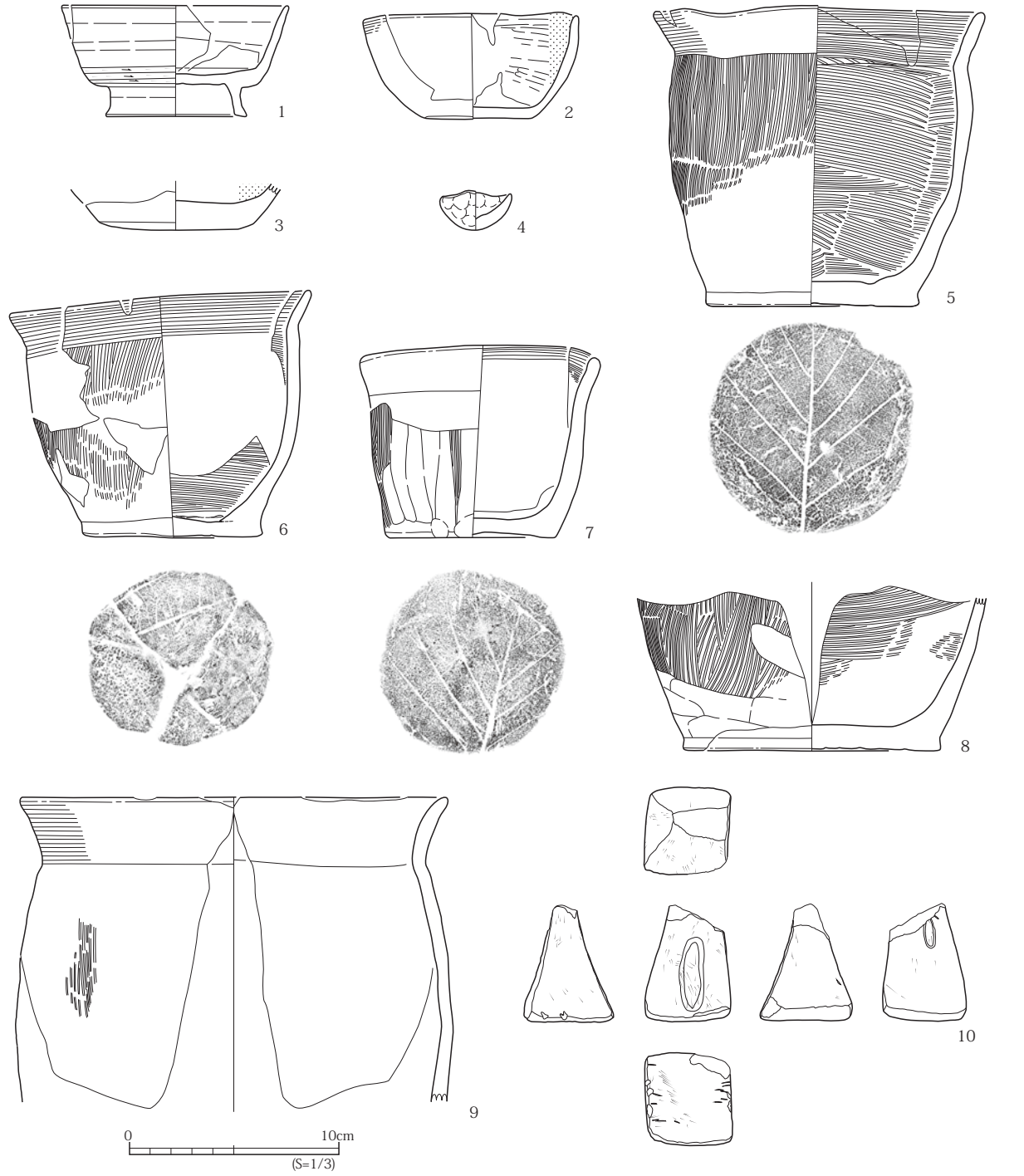
層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト質粘土	地山小ブロックを多量に含む	自然堆積
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	焼土、地山小ブロックを多量に含む	



P6(L-L')

層	土色	土性	含有物など	備考
1	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山粒・小ブロックを含む	柱痕跡
2	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト質粘土	地山粒をわずか、地山小ブロックを含む	
3	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト質粘土	地山粒をわずか、地山小ブロックを多量に含む	掘方埋土

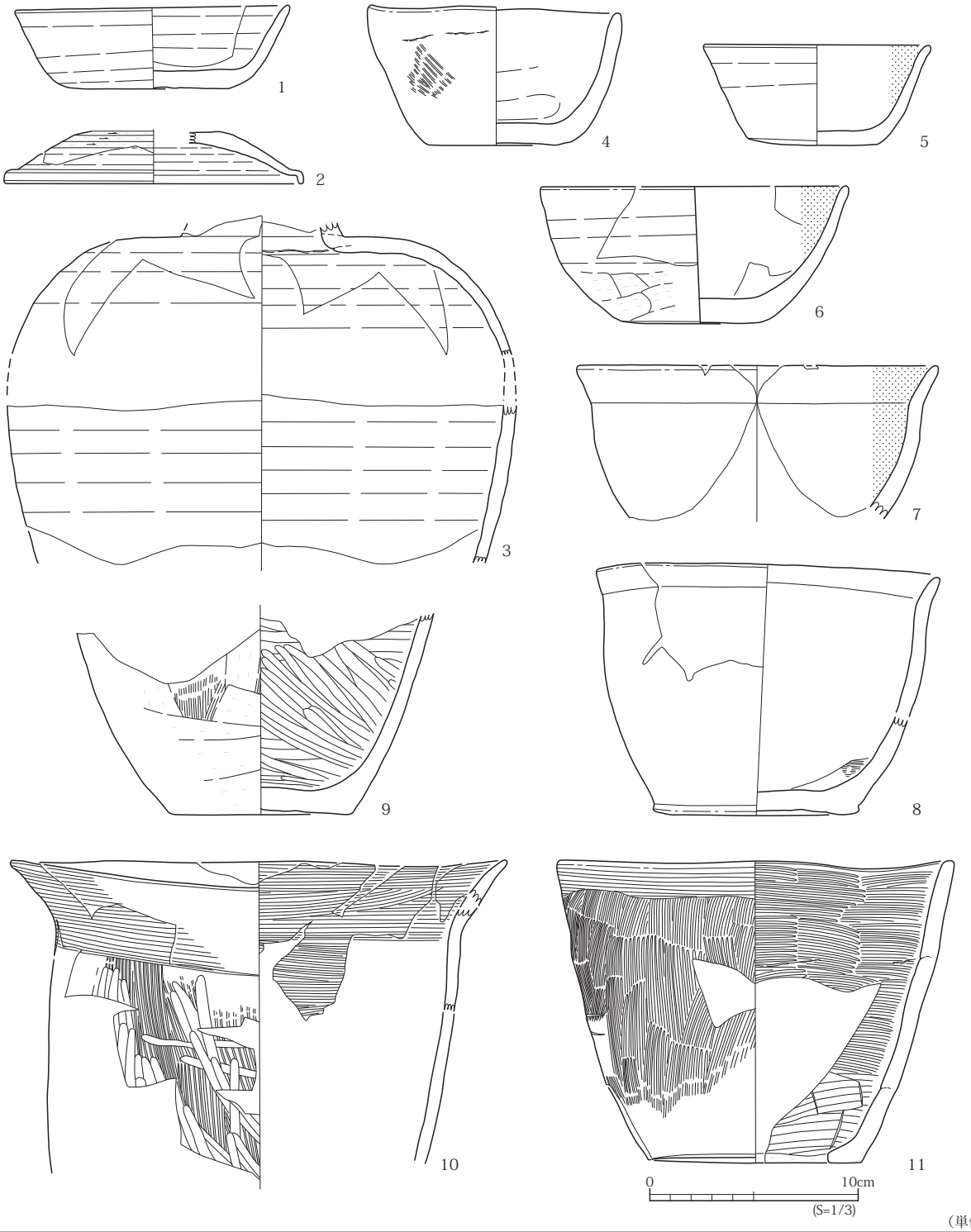
第 95 図　SI7B 竪穴建物跡



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	須恵器　高台坏	K2	4/5	(11.8)	7.4	5.2	内・外：ロクロナデ (体下端・底) ヘラ切り→回転ヘラケズリ	図版 71-4	R1027
2	土師器　埦	床	3/5	11.1	5.6	5.0	外：(口) ヨコナデ (体～底) 調整不明　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 71-5	R1023
3	土師器　坏	床・6 層	底部		15.4	(2.2)	内・外：ロクロナデ (底) 切り離し不明→ヘラケズリ　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 71-7	R1004
4	土師器　手捏土器	20 層	完形	3.2		1.9	外・内：オサエ、ナデ	図版 71-6	R1024
5	土師器　甕	カマド支脚	完形	15.6	10.1	14.3	外：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ (底) 木葉痕　内：(口) ハケメ→ヨコナデ (胴) ハケメ	図版 71-10	R1007
6	土師器　甕	床・カマド 8 層・SD3-3 層	3/5	(14.2)	8.6	11.6	外：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ (底) 木葉痕　内：(口) ハケメ→ヨコナデ (胴～底) ハケメ	図版 71-11	R1014
7	土師器　甕	2 層・P5・6・SD3-5 層	3/5	(12.6)	8.6	(9.0)	外：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ→ナデ (底) 木葉痕　内：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ	図版 71-9	R1028
8	土師器　甕	床・22 層	底部		(12.2)	(7.8)	外：(胴) ハケメ→ナデ (底) 木葉痕　内：(胴) ハケメ (底) ナデ	図版 71-12	R1006
9	土師器　甕	K1	1/5	(20.0)		(14.8)	外：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ　内：(口～胴) 調整不明	図版 71-8	R1026
10	石製品　砥石	床	破損				長 (5.6cm)、幅 4.0cm、厚さ 4.3cm、重量 101.7g　凝灰岩製　研面 4 面	図版 73-3	R1030

第 96 図　SI7 竪穴建物跡　出土遺物 (1)



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	須恵器　坏	6層	9/10	13.0	7.6	3.9	外：(口～体) ロクロナデ (底) ヘラ切り→ナデ　内：ロクロナデ	図版 72-1	R1020
2	須恵器　蓋	2層	1/5	(14.2)		(2.5)	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ	図版 72-2	R1008
3	須恵器　長頸瓶	5層	胴部				外：ロクロナデ　内：ロクロナデ　頸部三段構成	図版 72-6	R1018
4	土師器　鉢	6層	完形	11.8	6.0	6.7	外：(口) ヨコナデ (体) ハケメ？ (底) 木葉痕？　内：ナデ	図版 72-4	R1005
5	土師器　坏	6層	1/2	11.8	6.9	4.8	内・外：ロクロナデ　(底) 切り離し・調整不明　内：ヘラミガキ？→黒色処理	図版 72-3	R1021
6	土師器　埦	2～5層	2/3	14.6	6.6	6.9	内・外：ロクロナデ　(体下部・底) 切り離し不明→手持ちヘラケズリ 内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 72-5	R1009
7	土師器　鉢	5層	1/5	(17.0)		(7.4)	外：(口～胴) 調整不明　内：調整不明→黒色処理	図版 73-1	R1017
8	土師器　甕	5層	2/5	(16.2)	9.9	(12.0)	外：(口～胴) 調整不明 (底) 木葉痕　内：(口) 調整不明 (胴) ハケメ (底) ナデ	図版 72-8	R1015
9	土師器　甕	5層	(胴～底)2/5		8.8	(9.5)	外：(胴) ハケメ→ヘラケズリ (底) 木葉痕　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 72-7	R1016
10	土師器　甑	2～6層	1/4	(23.6)		(15.3)	外：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ→ヘラミガキ　内：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ	図版 73-2	R1022
11	土師器　甑	6層	4/5	18.6	10.2	14.5	外：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ、ヘラ書き「＝」(底) ヘラケズリ 内：(口～胴上部) ハケメ (胴下部) ハケメ→ヘラナデ	図版 72-9	R1019

第 97 図　SI7 竪穴建物跡　出土遺物 (2)

Y1 は中央南寄りに位置する。規模は、長軸 63cm、短軸 43cm である。

〔**堆積土**〕9 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**出土遺物**〕床面から土師器坏（第 96 図 3）、埦（2）、甕（6・8）、砥石（10）、カマド支脚である土師器甕（5）、K1 から土師器甕（9）、P5・P6 から土師器甕（7）、堆積土から土師器手捏土器（4）、須恵器坏（第 97 図 1）、蓋（2）、長頸瓶（3）、土師器坏（5）、埦（6）、鉢（4・7）、甕（8・9）、甑（10・11）が出土した。なお、第 96 図 6・7 は SD3 大溝跡 3・5 層出土土器と接合する。

【SI33 竪穴建物跡】（平・断面図：第 98 図、その他の平面図：第 99 図、出土遺物：第 100 図）

〔**位置**〕B 区中央に位置し、標高 48m の丘陵頂部から西側へ傾斜する緩斜面上に立地する。SI17 竪穴建物跡堆積土上面で検出した。床面と床面直上層から炭化材が検出され、床面直上層には焼土や炭化物が多く含まれていることから焼失竪穴建物跡と考えられる。

〔**重複**〕SI17 竪穴建物跡と重複し、これより新しい。

〔**平面形・規模**〕隅丸方形で、南北 3.6m、東西 3.3m である。

〔**方向**〕東辺でみると北で西に 6°偏る。

〔**壁**〕SI17 堆積土を壁とし、床面から外側に傾斜をもって立ち上がる。高さは、最も残りの良い東辺北端で床面から 39cm である。

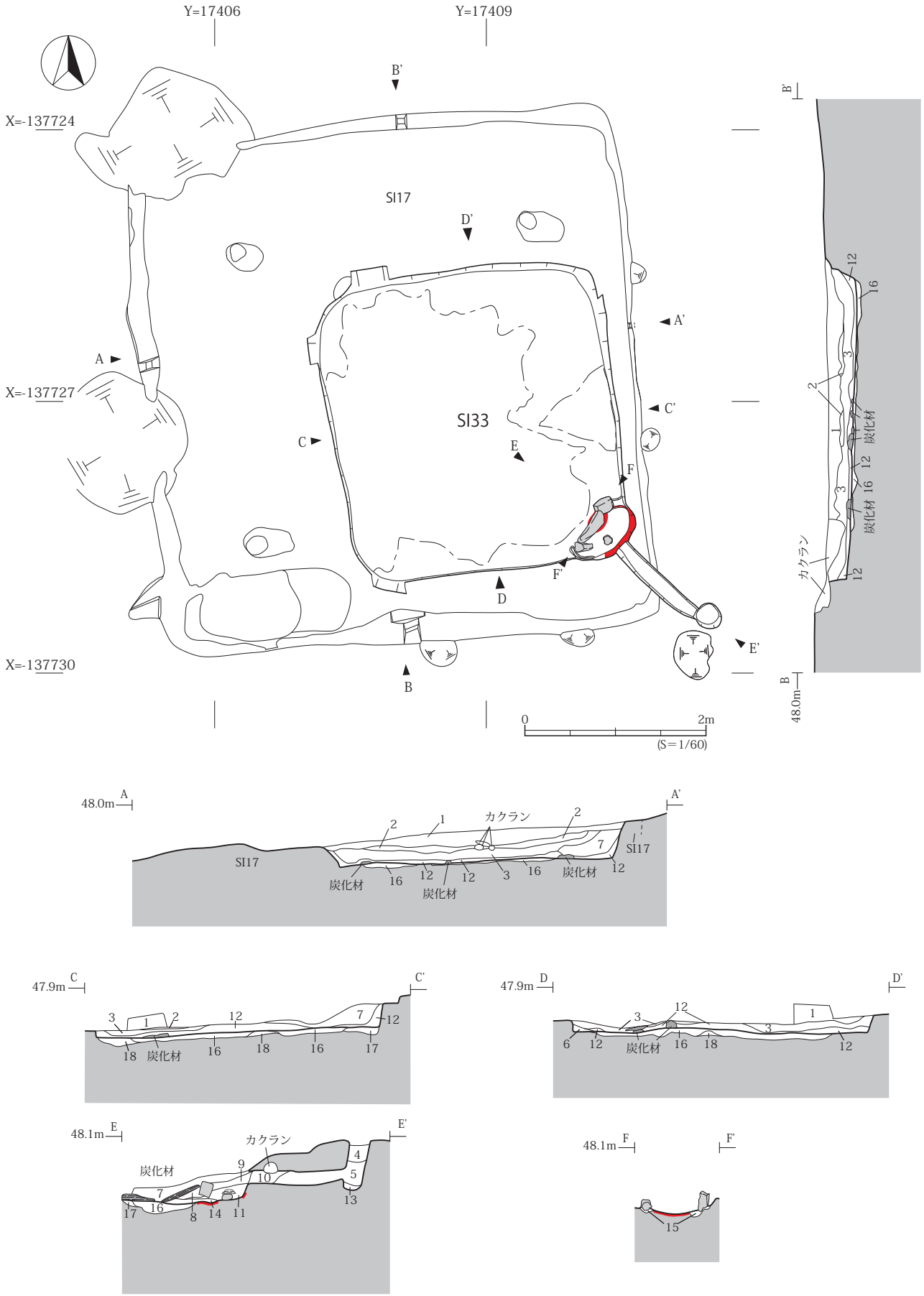
〔**床面**〕掘方埋土と縁辺のみ SI17 掘方埋土を床面としている。床面には細かな凹凸がある。最も標高が低い北西部に向かって緩やかに傾斜する。

〔**カマド**〕南東隅に付設されている。燃焼部とカマド両側壁、煙道部、煙出しピットが残存している。燃焼部と両側壁、奥壁の一部に被熱の痕跡が認められた。

燃焼部の規模は、側壁の内側で測ると幅 70cm、奥行き 40cm である。カマド両側壁は部分的な残存である。左側壁は、壁際の削り出し部分と、先端の凝灰岩切石からなる。削り出し部分は長さ 12cm、幅 8cm、高さ 11cm、凝灰岩切石は西側に倒れた状態で検出され、長さ 22cm、幅 10cm である。右側壁は、壁際の灰黄褐色シルト土で作り出された構築土部分と、先端の凝灰岩切石からなる。構築土部分は長さ 12cm、幅 10cm、高さ 16cm、凝灰岩切石は立位の状態で検出され、長さ 20㎝、幅 10cm である。両側壁に用いられた凝灰岩切石は直方体に整形されたもので、被熱の痕跡が認められた。凝灰岩切石の下部には、それらを据えるために掘られた楕円形の据方が認められた。左側壁に伴う据方は長軸 31cm、短軸 24cm、深さ 7cm、右側壁に伴う据方は長軸 22cm、短軸 14cm、深さ 11cm である。両側壁に挟まれた位置から、長さ 42cm、幅 12cm の側壁と同じく直方体に整形された凝灰岩切石が横位の状態で検出された。各面が被熱しており、出土状況からカマドの天井石であったと考えられる。

燃焼部底面は緩やかにくぼむ。幅 30cm、奥行き 19cm の範囲で被熱の痕跡が認められた。燃焼部の中央よりやや奥壁側で、礫と逆位の状態の赤焼土器坏（第 100 図 2）が重なった状態で出土した。奥壁は建物跡壁面と一致し、高さは 18cm である。14 層が機能時の堆積土である。

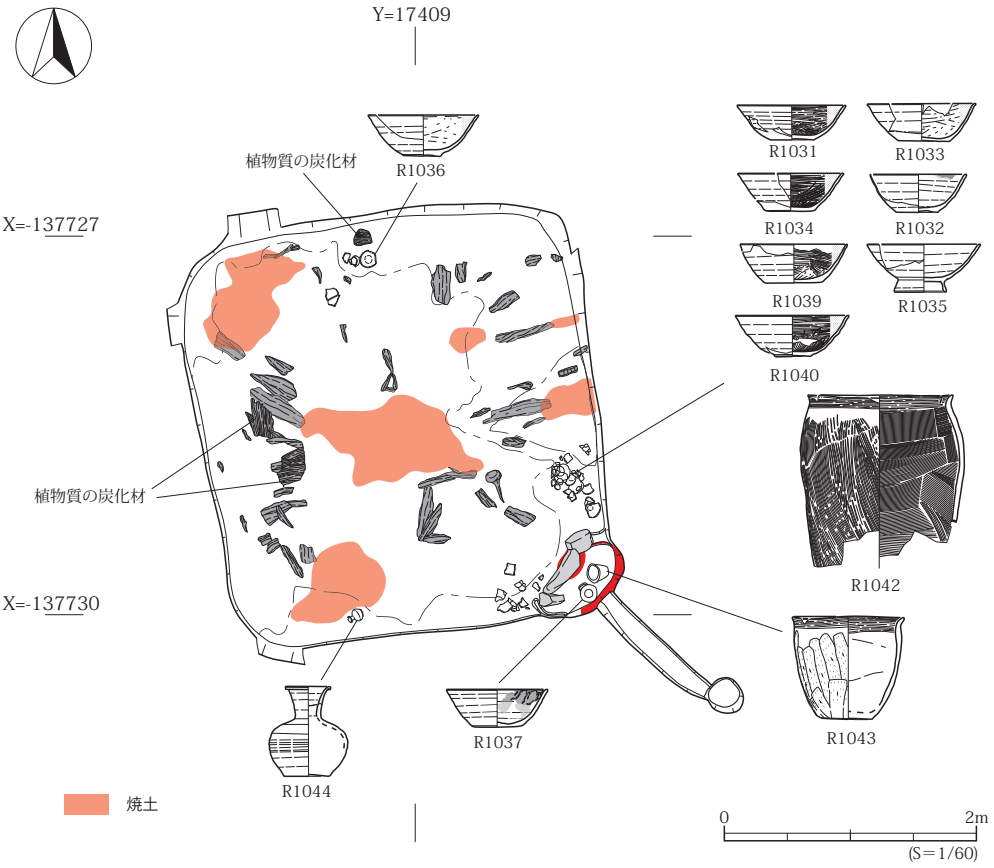
煙道部は天井が残存した状態で検出された。SI17 竪穴建物跡の堆積土と地山を刳り抜いて造られており、長さ 106cm、幅 14 ～ 20cm、高さ 14cm である。底面は、南東側の先端に向かって浅くなる。



第 98 図　SI33 竪穴建物跡

A-A'、B-B'、C-C'、D-D'、E-E'、F-F'

層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	炭化物をわずかに含む	自然堆積
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	灰白色火山灰を多量に含む	
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物、焼土、地山粒・ブロックを少量含む	
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物をわずかに、地山粒を少量含む	
5	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物、地山粒を少量含む	
6	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	炭化物、焼土をわずかに、地山粒・小ブロック・ブロックを多量に含む	
7	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物、焼土を少量、地山粒・ブロックを多量に含む	屋根材崩壊土
8	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物、焼土を少量、地山粒～大ブロックを多量に含む	
9	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物を少量、黒褐色 (10YR2/2) シルトブロックを含む	
10	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山粒・小ブロックを含む	
11	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒をわずかに、炭化物、焼土を含む	火災による堆積土
12	明赤褐色 (2.5YR5/6)	砂質シルト	炭化物、焼土を多量に、地山粒をわずかに含む	
13	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物を少量、焼土、地山粒をわずかに含む	機能時の堆積土
14	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物、焼土を多量に、地山粒をわずかに含む	
15	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物粒、焼土粒、地山粒を含む	切石据方埋土
16	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物片、焼土小ブロックを多量、地山小ブロックを含む	掘方埋土
17	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小ブロックを多量、炭化物片を含む	
18	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物片、焼土小ブロックを多量、地山小ブロックを少量含む	



第 99 図　SI33 竪穴建物跡　炭化材・遺物の出土状況

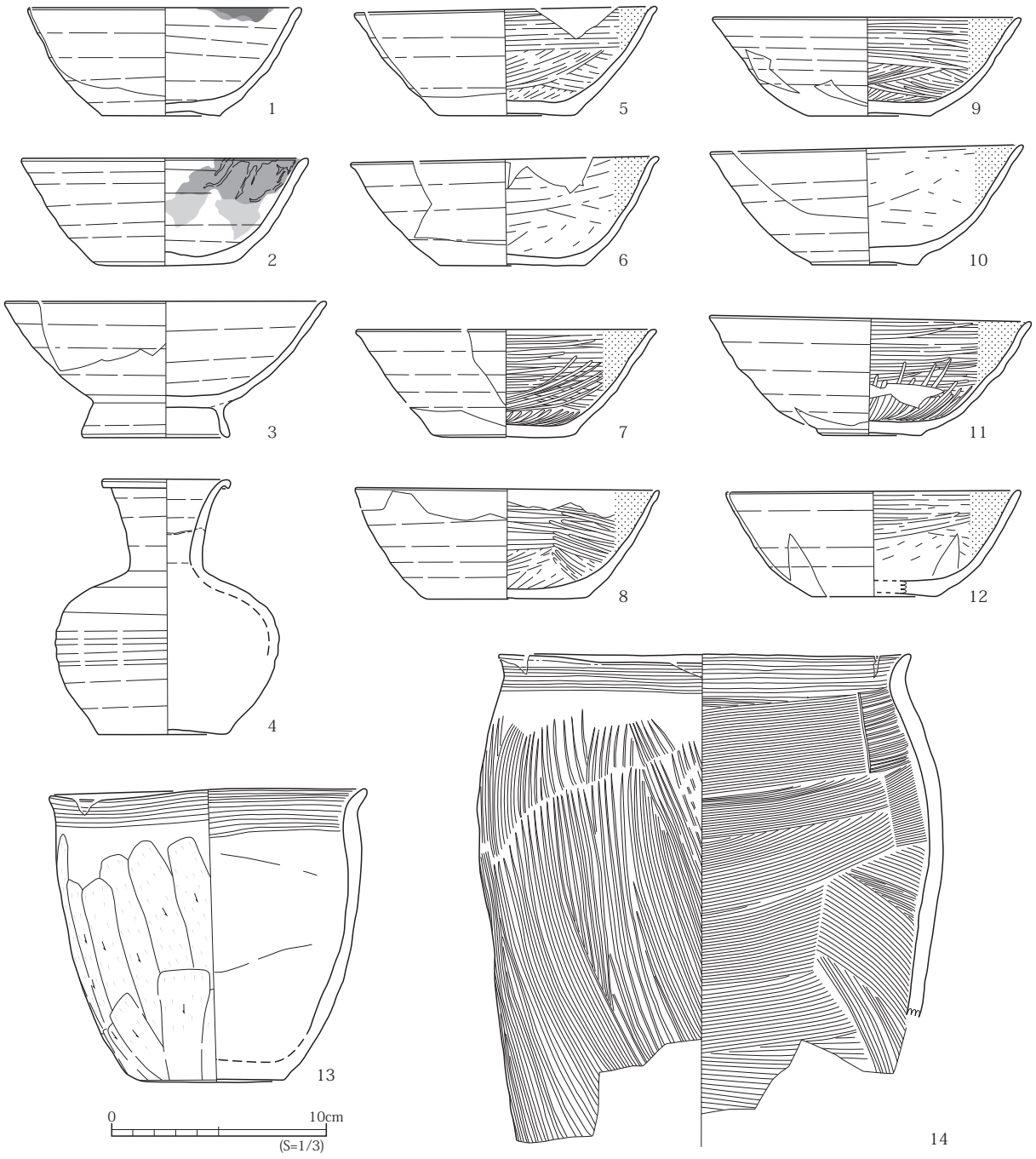
※土器：S=1/10

煙出しピットは径 26cm、深さ 55cm で、煙道部先端の底面よりも 13cm 深い。底面は北西側にオーバーハングしている。煙道部と煙出しピットの堆積土は 3 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**炭化材**〕床面から多数確認された（第 99 図）。全面に分布し、放射状と各辺に平行する 2 種類の炭化材が認められる。植物質の炭化材も複数確認され、これらは放射状に分布する材の一部を覆っていた。

〔**堆積土**〕12 層に分かれ、いずれも自然堆積である。2 層は灰白色火山灰、7 ～ 10 層は地山ブロックを多く含む層、12 層は炭化物、焼土を多く含む層である（第 98 図）。

〔**出土遺物**〕カマドの北側で分布が集中する（第 99 図）。掘方埋土から土師器坏（第 100 図 5）、床面から赤焼土器坏（1）、高台坏（3）、須恵器長頸瓶（4）、土師器坏（6 ～ 11）、甕（14）、カマドから赤焼土器坏（2）、土師器甕（13）、堆積土から土師器坏（12）が出土した。



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	赤焼土器　坏	床・11 層	1/2	12.6	5.5	5.0	外：(口～体) ロクロナデ (底) 回転糸切り無調整　内：ロクロナデ、油煙付着	図版 73-5	R1032
2	赤焼土器　坏	カマド	1	13.2	6.6	5.0	外：(口～体) ロクロナデ (底) 回転糸切り無調整　内：ロクロナデ、油煙付着	図版 73-6	R1037
3	赤焼土器　高台坏	床	4/5	14.8	6.8	6.3	外：(口～体) ロクロナデ (底) 回転糸切り→ナデ　内：ロクロナデ	図版 73-4	R1035
4	須恵器　長頸瓶	床	ほぼ完形	5.7	6.1	11.9	外：(口～胴) ロクロナデ (底) 回転糸切り→手持ちヘラケズリ 内：ロクロナデ　頸部２段構成	図版 74-7	R1044
5	土師器　坏	掘方埋土	1/4	13.9	6.2	5.0	外：(口～体) ロクロナデ (底) 回転糸切り無調整　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 73-7	R1038
6	土師器　坏	床	3/5	14.1	6.8	5.0	外：(口～体) ロクロナデ (底) 回転糸切り無調整　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 73-8	R1033
7	土師器　坏	床	3/5	13.8	6.6	5.0	外：(口～体) ロクロナデ (底) 回転糸切り無調整　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 74-1	R1034
8	土師器　坏	床	4/5	(14.0)	7.5	5.15	外：(口～体) ロクロナデ (底) 回転糸切り無調整　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 74-2	R1039
9	土師器　坏	床	3/5	14.0	5.6	4.6	外：(口～体) ロクロナデ (底) 回転糸切り無調整　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 74-4	R1031
10	土師器　坏	床	4/5	14.4	4.9	5.5	外：(口～体) ロクロナデ (底) 回転糸切り無調整　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 74-5	R1036
11	土師器　坏	床	1/4	(14.8)	4.6	5.45	外：(口～体) ロクロナデ (底) 回転糸切り無調整　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 74-6	R1040
12	土師器　坏	1 層	1/5	(13.6)	(5.8)	4.9	外：(口～体) ロクロナデ (底) 回転糸切り無調整　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 74-3	R1041
13	土師器　甕	カマド支脚	完形	14.6	6.8	13.6	外:(口) ヨコナデ(胴～底) ヘラケズリ　内:(口) ヨコナデ､(胴～底) ヘラナデ?	図版 74-8	R1043
14	土師器　甕	床	(口~胴)2/3	(19.1)		(22.8)	外：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ　内：(口) ヨコナデ (胴) ハケメ	図版 74-9	R1042

第 100 図　SI33 竪穴建物跡　出土遺物

【SI34 竪穴建物跡】（平・断面図：第 101 図、出土遺物：第 102 図）

〔**位置**〕B 区北辺の西側に位置し、標高 46 ～ 48m の丘陵尾根から北に傾斜する緩斜面上に立地する。地山と SI9 竪穴建物跡堆積土上面で検出した。北半部がカクランによって壊されている。

〔**重複関係**〕SI9 竪穴建物跡と重複し、これより新しい。

〔**平面形・規模**〕隅丸長方形で、規模は南北 3.5m、東西 2.4m である。

〔**方向**〕西辺でみると北で西に約 16°偏る。

〔**壁**〕北半は地山、南半は SI9 堆積土を壁とし、床面から急角度で立ち上がる。高さは、最も残りの良い南辺で床面から 24cm である。

〔**床面**〕カマド周辺が掘方埋土、中央は地山、南側は SI9 堆積土を床面としている。南側へ向かって標高を下げながら緩やかに傾斜し、中央部と南辺の高低差は 11cm である。

〔**カマド**〕北辺中央に付設されている。燃焼部とカマド両側壁が残存している。燃焼部の規模は、側壁の内側で測ると、幅 75cm、奥行き 72cm である。側壁は褐色シルトで構築されており、規模は、左側壁が長さ 71cm、幅 22cm、高さ 11cm、右側壁が長さ 81cm、幅 25cm、高さ 14cm である。燃焼部底面は緩やかにくぼむ。底面南西側には、幅 22m、奥行き 33cm の範囲で被熱の痕跡が認められた。奥壁は建物跡壁面と一致し、高さ 10cm である。堆積土は 5 層に分かれ、6・7 層がカマド崩壊土である。

〔**周溝**〕東辺中央から南側で検出した。規模は、上幅 10 ～ 18cm、下幅 3 ～ 5cm、深さ 2 ～ 4cm である。堆積土は自然堆積である。

〔**貯蔵穴**〕北西隅で 1 基（K1）検出した。長軸 58cm、短軸 56cm の円形で、深さは 8cm である。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**その他**〕床面中央南西寄りで焼面を 1 ヶ所検出した。規模は長軸 23cm、短軸 13cm である。

〔**堆積土**〕5 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**出土遺物**〕床面から土師器甕（第 102 図 1）、堆積土から土師器坏（3 ～ 5）、遺構確認面から鉢（2）等が出土した。

【SI36 竪穴建物跡】（平・断面図：第 103 図、出土遺物：第 104 図）

〔**位置**〕B 区北東部に位置し、標高 48m の丘陵頂部から北側に傾斜する緩斜面上に立地する。西辺から中央部にかけてカクランによって壊されている。SI21 竪穴建物跡堆積土上面で検出した。

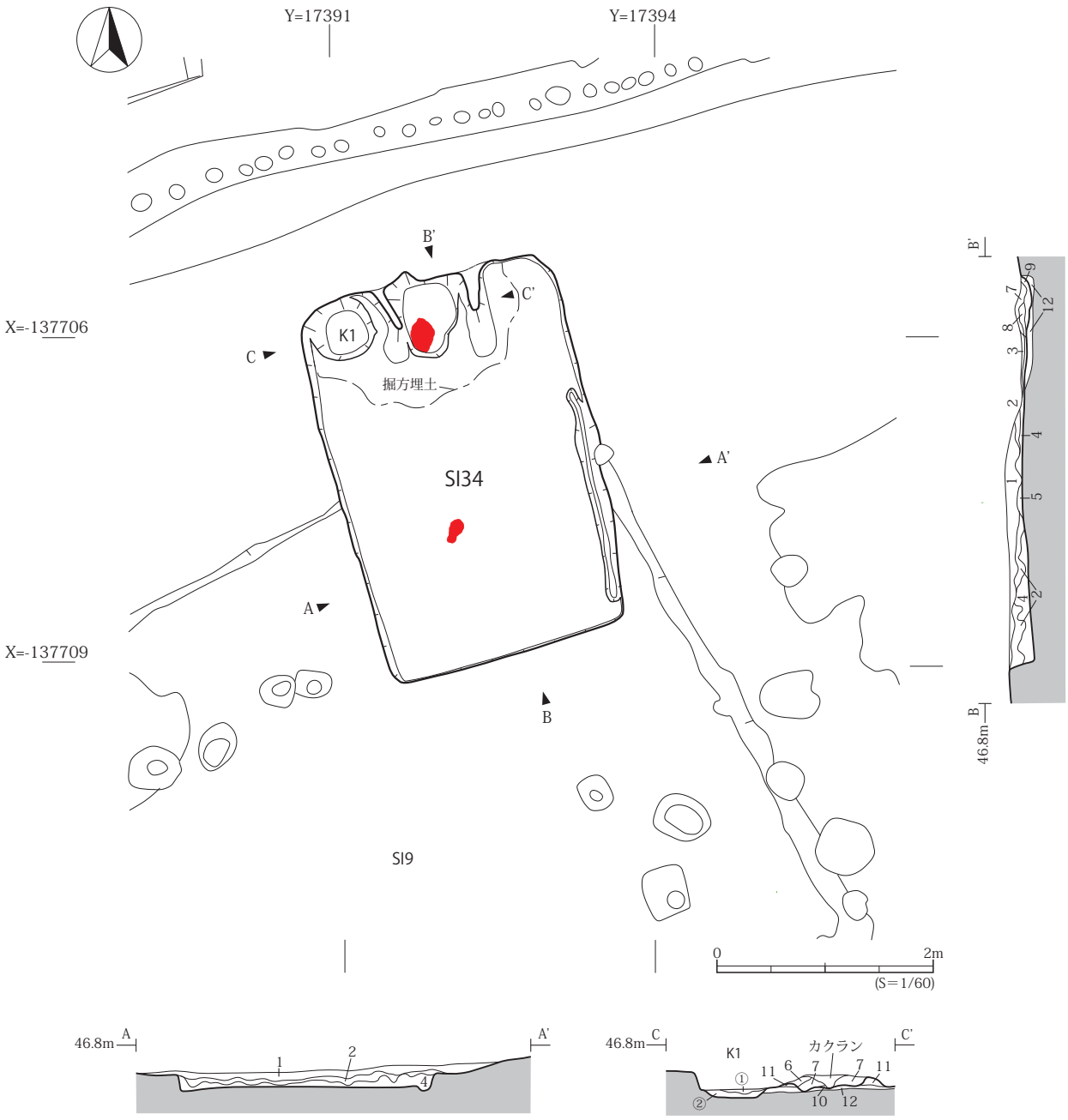
〔**重複**〕SI21 竪穴建物跡と重複し、これより新しい。

〔**平面形・規模**〕西辺がカクランにより壊されているが、隅丸方形であるとみられる。規模は、南北 3.1m、東西 2.2m 程度である。

〔**方向**〕東辺でみると北で東に約 6°偏る。

〔**壁**〕SI21 堆積土と地山を壁とし、床面から外側に傾斜を持って立ち上がる。高さは、最も残りの良い南辺で床面から 17cm である。

〔**床面**〕掘方埋土と白色粘土の貼床を床面としている。貼床は南西部に分布する。



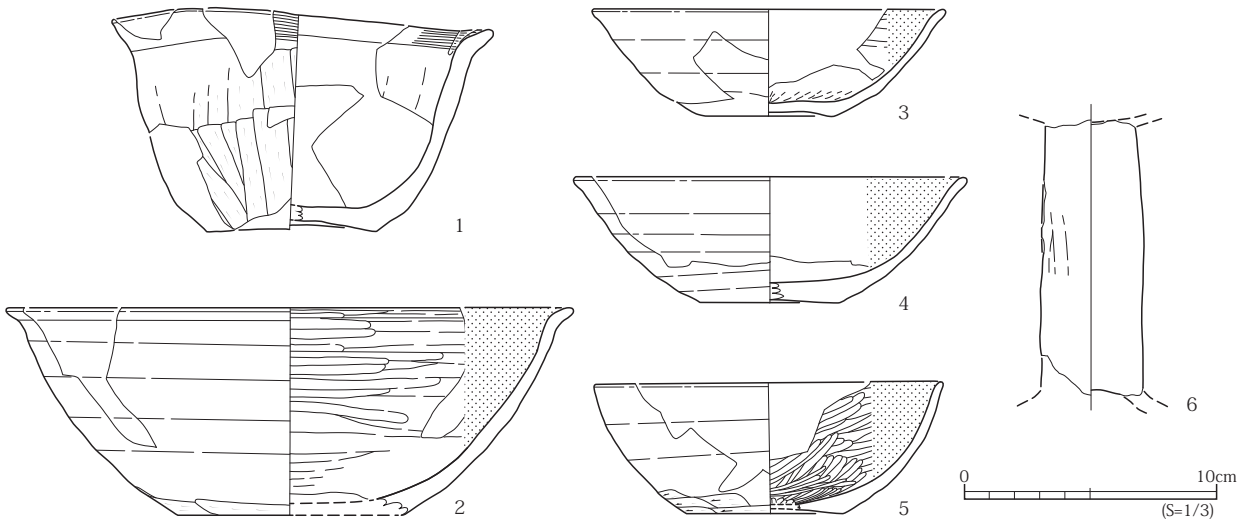
A-A'、B-B'

層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物を多量に含む	自然堆積
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を少量含む	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土をわずかに、地山粒を少量含む	
4	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒をわずかに含む	
5	暗褐色 (10YR3/3)	焼土主体	焼土を多量に含む	
6	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	焼土を少量含む	カマド崩壊土
7	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	焼土ブロックを多量に含む	
8	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山粒を少量含む	自然堆積
9	黄褐色 (10YR5/8)	シルト	地山小ブロックを多量に含む	
10	暗赤褐色 (5YR3/6)	焼土主体	焼土を多量に含む	機能時の堆積土
11	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	地山小ブロックを多量に含む	カマド構築土
12	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト		掘方埋土

K1（C-C'）

層	土色	土性	含有物など	備考
①	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	炭化物、地山粒をわずかに含む	自然堆積
②	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物、焼土、地山小ブロックを少量含む	

第 101 図　SI34 竪穴建物跡



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器　甕	床	3/5	14.9	(6.7)	9.0	外：(口) ヨコナデ (胴～底) ヘラケズリ　内：ナデ？	図版 75-3	R1049
2	土師器　鉢	確認面	1/3	(22.2)	(9.0)	8.2	外：(口～体) ロクロナデ (体下端) 手持ちヘラケズリ　内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 75-6	R1048
3	土師器　坏	1 層	1/4	(15.4)	(5.4)	5.0	外：(口～体) ロクロナデ (底) 回転糸切り無調整　内：ヘラミガキ？→黒色処理	図版 75-4	R1047
4	土師器　坏	1 層	2/5	(13.8)	5.0	4.2	外：(口～体) ロクロナデ (体下端) ヘラケズリ？ (底) 回転糸切り無調整 内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 75-2	R1046
5	土師器　坏	1 層	3/5	13.7	6.3	5.2	外：(口～体) ロクロナデ (体下端) 手持ちヘラケズリ (底) 回転糸切り無調整 内：ヘラミガキ→黒色処理	図版 75-1	R1045
6	土師器　高坏	確認面	(脚)2/3			(10.9)	外：ヘラミガキ？　内：ナデ？　脚部中実	図版 75-5	R1050

第 102 図　SI34 竪穴建物跡　出土遺物

〔**カマド**〕住居東辺の南側に付設されている。燃焼部とカマド左側壁、煙道部、煙出しピットが残存している。燃焼部の規模は、幅は右側壁が残存しないため不明で、奥行きは 68cm である。左側壁はにぶい黄褐色シルトで構築されており、規模は長さ 53cm、幅 21cm、高さ 8cm である。なお、左側壁の北側に接して長さ 20cm、幅 14cm の凝灰岩切石が検出された。複数の面が被熱しており、カマドに伴うものとみられる。切石の据方は確認されておらず、カマド上部に組まれていたものの可能性がある。

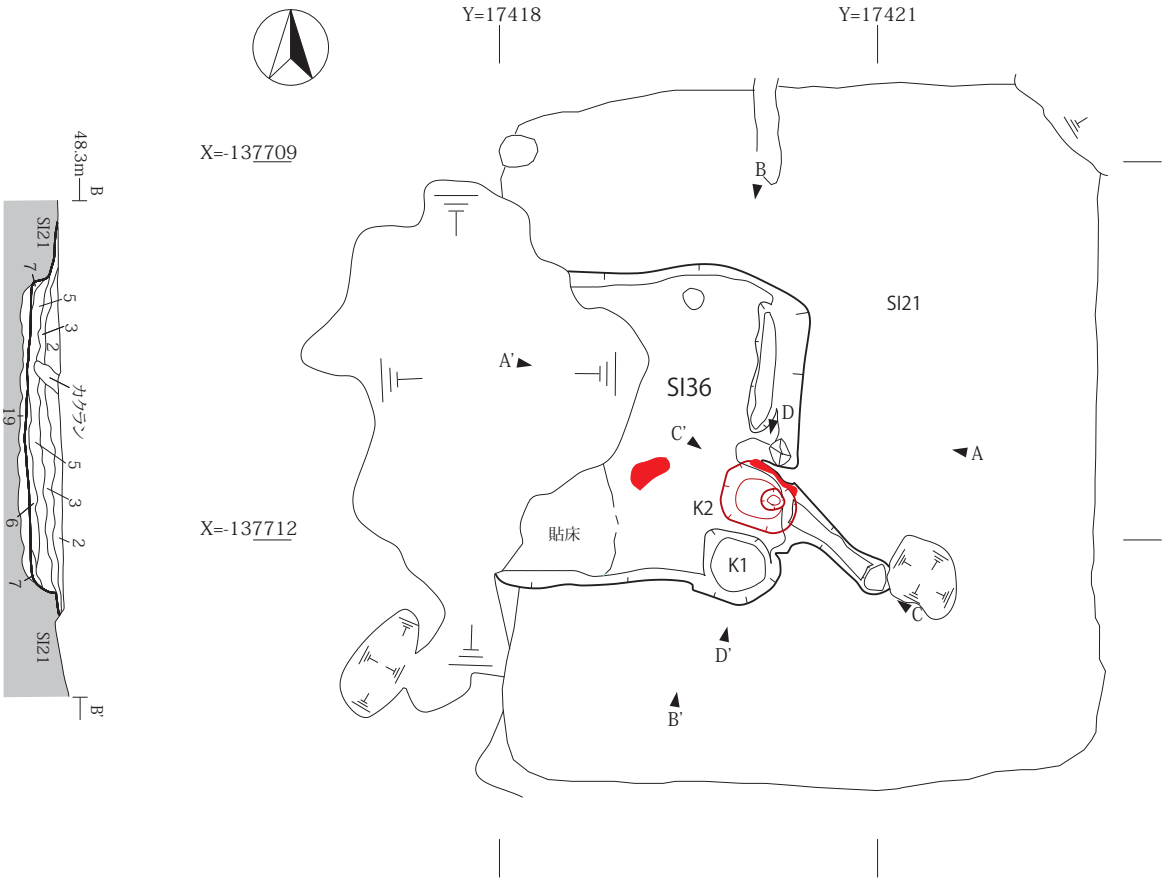
燃焼部は床面よりもわずかにくぼむ。被熱の痕跡は左側壁の内側でのみ確認された。燃焼部底面中央には長軸 64cm、短軸 49cm、深さ 6cm の楕円形の土坑（K2）が検出され、焼土を少量含むシルトで埋め戻されている。この土坑の底面の東端には、これを掘りこんだ径 16cm、深さ 4cm の円形のピットが検出されており、これについては位置から支脚据方の可能性がある。奥壁は建物跡壁面と一致し、高さ 5cm である。

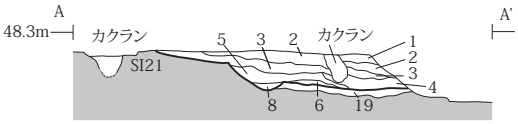
煙道部は長さ 70cm、幅 18 ～ 34cm、深さ 4 ～ 9cm で、東辺に対して 35°南に傾いている。煙出しピットは、先端部がカクランによって壊されているが、長軸 29cm、短軸 24cm の楕円形で、深さは 8cm である。煙道部先端の底面よりも 3cm 深い。

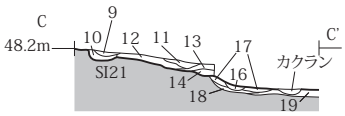
堆積土は 6 層確認され、いずれも自然堆積である。

〔**貯蔵穴**〕床面の南東隅で 1 基 (K1) 検出した。長軸 65cm、短軸 52cm の不整な楕円形で、深さは 13cm である。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**周溝**〕東辺北半で検出した。規模は、検出長 105cm、上幅 16 ～ 26cm、下幅 10 ～ 13cm、深さ 6cm である。堆積土は自然堆積である。

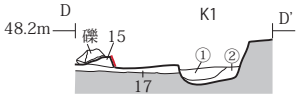






A-A'、B-B'、C-C'

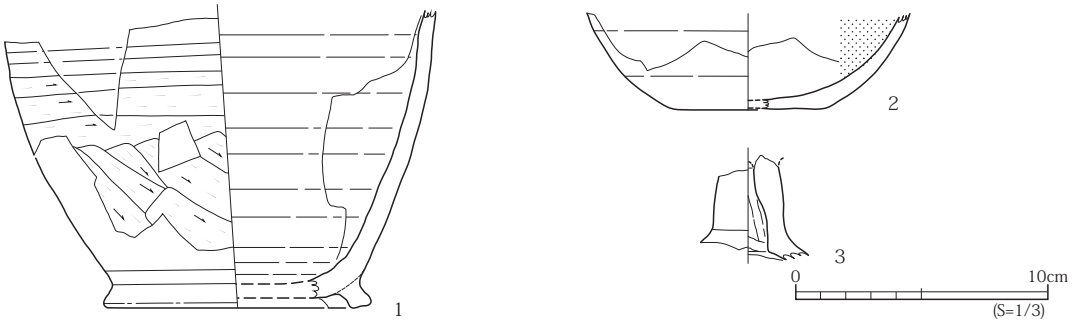
層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物を含む	自然堆積
2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物を含む	
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物を含む	
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	灰白色火山灰、炭化物を含む	
5	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物を少量含む	
6	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	炭化物、焼土を含む	
7	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロックを多量に含む	
8	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物を少量含む	自然堆積
9	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む	
10	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物、焼土をやや多く含む	
11	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む	
12	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物、焼土をわずかに含む	
13	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む	
14	暗赤褐色 (5YR3/3)	シルト	焼土ブロックを非常に多く含む	カマド崩壊土
15	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物、黒褐色シルトブロックを少量含む	カマド構築土
16	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	炭化物、焼土を含む	支脚据方埋土
17	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物、焼土を少量含む	K2 埋土
18	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物、焼土をわずかに含む	
19	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	炭化物をわずかに、地山ブロックを多量に含む	掘方埋土



K1（D-D'）

層	土色	土性	含有物など	備考
①	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	焼土ブロック、炭化物を多量に含む	自然堆積
②	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	焼土ブロック、炭化物を少量含む	

第 103 図　SI36 竪穴建物跡



（単位：cm）

No.	器種	層	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号
1	須恵器　長頸瓶	床・13 層・K1-1 層	(胴)2/5		(10.6)	(11.8)	外：(胴) ロクロナデ→回転ヘラケズリ→手持ちヘラケズリ (底) 切り離し不明→回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ	図版 75-9	R1053
2	土師器　坏	13 層	(底)1/3		(6.0)	(3.8)	外：(口〜体) ロクロナデ (体下端) ヘラケズリ？ (底) 回転糸切り→ヘラケズリ　内：調整不明→黒色処理	図版 75-7	R1054
3	土師器　高坏	4 〜 5 層	(脚)2/3			(4.2)	外：ヘラミガキ　内：ナデ　脚部中空	図版 75-8	R1055

第 104 図　SI36 竪穴建物跡　出土遺物

〔**その他**〕中央南寄りで焼面 1 ヶ所を検出した。規模は長軸 34cm、短軸 14cm である。

〔**堆積土**〕7 層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔**出土遺物**〕床面から須恵器長頸瓶（第 104 図 1）、堆積土から土師器坏（2）等が出土した。

（3）中近世

塚 2 基を検出し、精査した。

1）塚

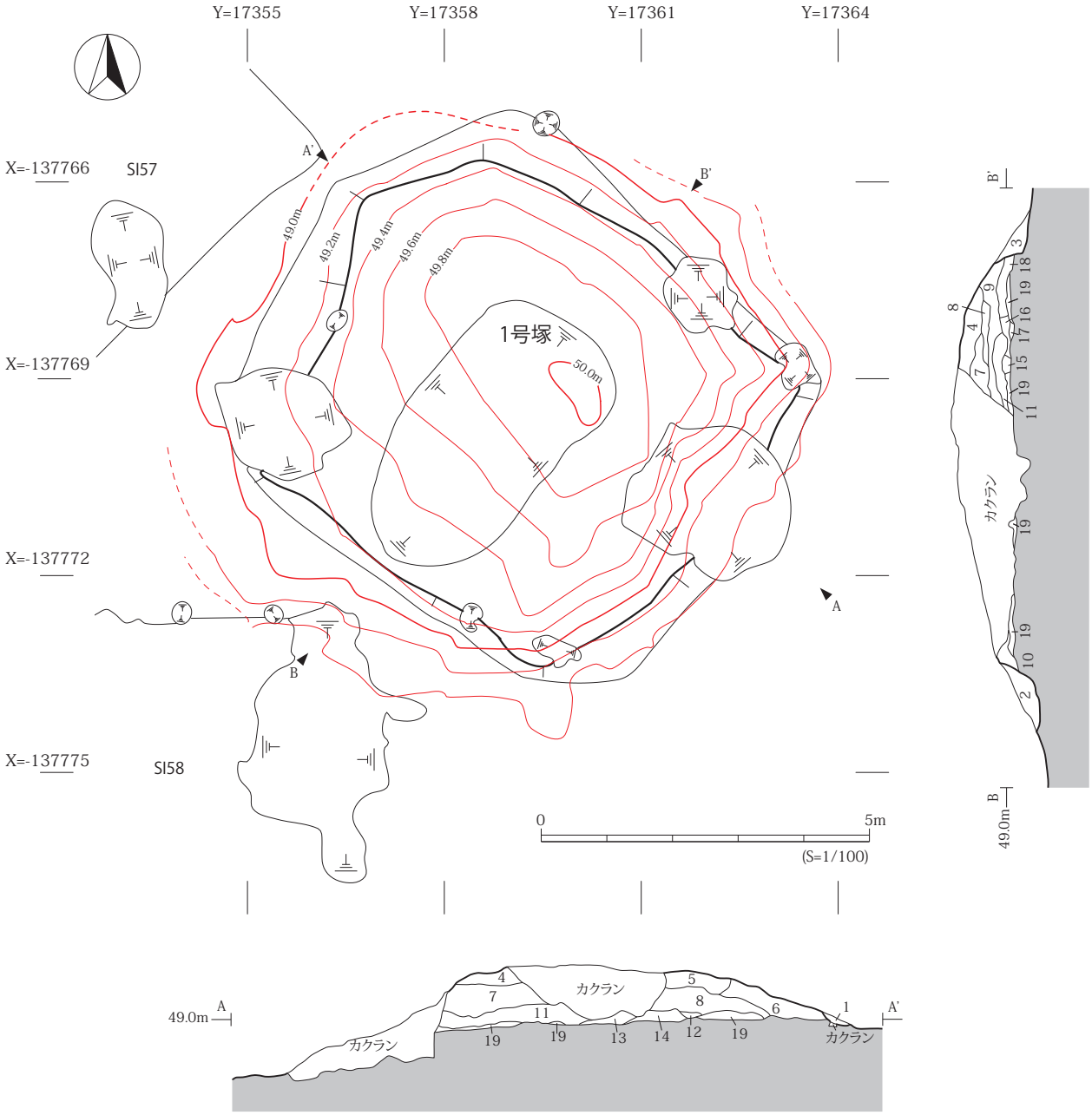
【1 号塚】（平・断面図：第 105 図）

A 区の南東端に位置し、標高 49m の丘陵尾根頂部に立地する。頂部、南東辺、北西隅がカクランによって壊されている。平面形は方形で、規模は基底部が北東辺 6.2m、南東辺 6.0m、高さが中心部で 0.9m である。塚の頂部はほぼ平坦で、断面形は北東―南西方向の断面でみると丸みを帯びた台形である。19 層に分かれ、1 〜 3 層が崩壊土、4 〜 19 層が盛土である。造成については、最初に丘陵尾根が平坦に削り出されて基底部が造られる。基底部は、地山よりも 30cm 高く削り残され、台座状となる。そして水平に盛土が行われ、塚が成形される。盛土から土師器が出土した。

【2 号塚】（平・断面図：第 106 図）

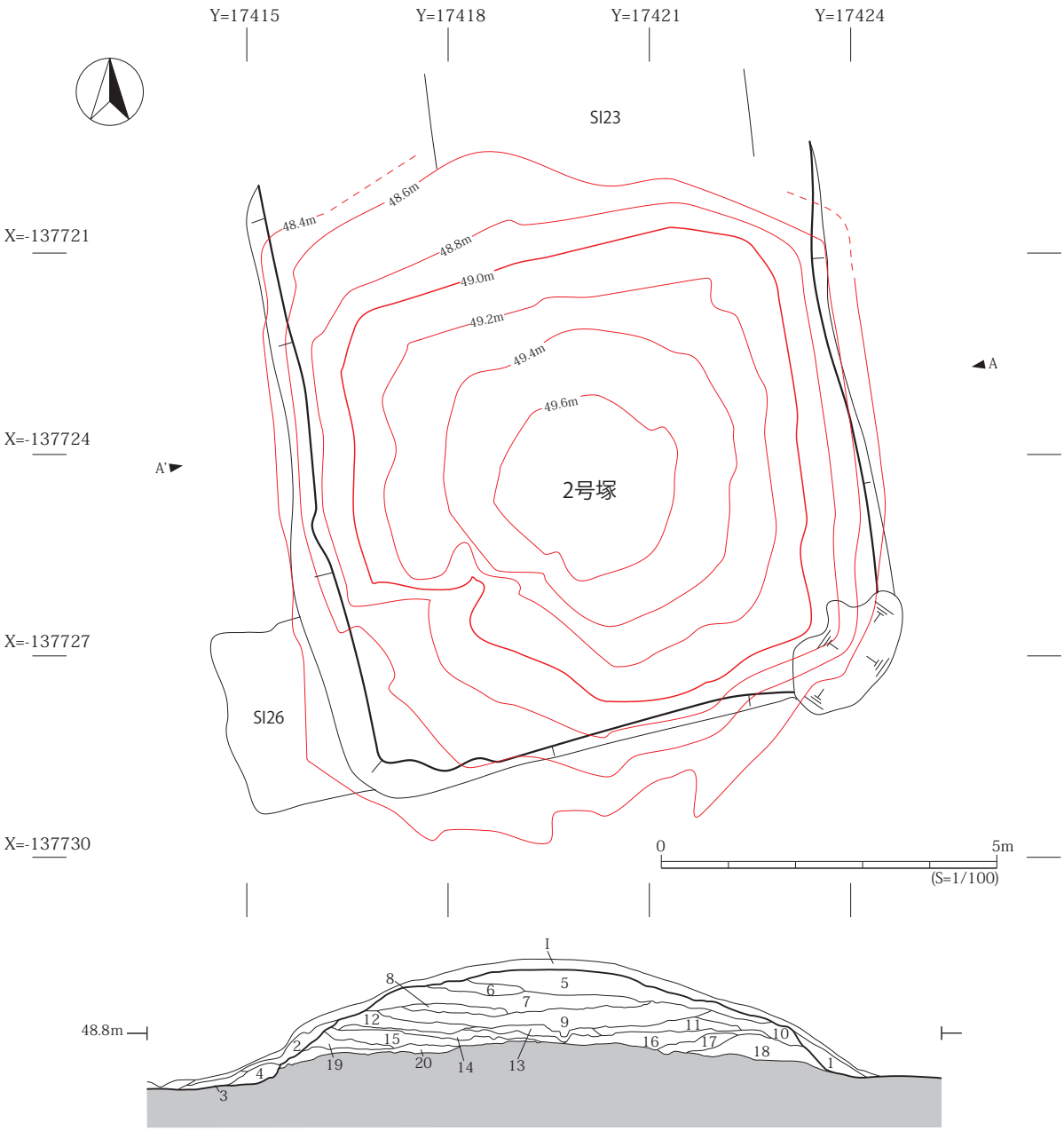
B 区の中央東寄りに位置し、標高 48m の丘陵尾根頂部に立地する。南東隅がカクランによって壊されている。SI23・25・26 竪穴建物跡と重複し、これらより新しい。

平面形は方形で、規模は基底部が東西 8.8m、南北 9.3m、高さが中心部で 1.25m である。塚の頂部はほぼ平坦で、断面形は東西断面でみると、丸みを持つ台形である。20 層に分かれ、1 〜 4 層が崩壊土、5 〜 20 層が盛土である。造成については、最初に丘陵尾根が平坦に削り出されて基底部が造られる。基底部は、東西・南辺で地山よりも 24 〜 37cm 高く削り残され、台座状となる。次に、基底部に水平に盛土が行われて塚が造られる。盛土は、最初に縁辺、その後凹部となった中央に、そしてそれらを覆って行われている。盛土から土師器、土製品が出土した（第 89 図 4）。



層	土色	土性	含有物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり、地山小ブロックを少量含む	
2	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	しまりあり、地山粒・小ブロックをわずかに含む	崩壊土
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	しまりあり、地山粒・小ブロック・ブロックをごくわずかに含む	
4	黒褐色 (10YR3/1)	シルト質粘土	しまりあり、褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト小ブロック・ブロックを含む、地山小ブロック・ブロックを少量含む	
5	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山小～大ブロックを含む	
6	褐色 (10YR4/4)	シルト	しまりあり	
7	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト質粘土	しまりあり、地山粒～大ブロックを多く含む	
8	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	しまりあり、地山小～大ブロックを少量含む	
9	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり	
10	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	しまりややあり、地山粒・小ブロック・ブロックを含む	
11	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	しまりあり、地山粒・小ブロックを少量含む	
12	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	しまりあり、地山小ブロック・ブロックを含む	盛土
13	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	しまりあり	
14	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	しまりあり	
15	黒褐色 (10YR2/3)	シルト質粘土	しまりあり、暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト小ブロック・ブロックを含む、地山粒・小ブロックをわずかに含む	
16	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	しまりあり、黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土小ブロックを含む	
17	黒褐色（10YR3/1）	シルト質粘土	しまりあり、褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト小ブロック・ブロックを含む、地山小ブロック・ブロックを少量含む	
18	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト質粘土	しまりあり、褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト小ブロック・ブロックを含む	
19	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	しまりあり	

第 105 図　1 号塚

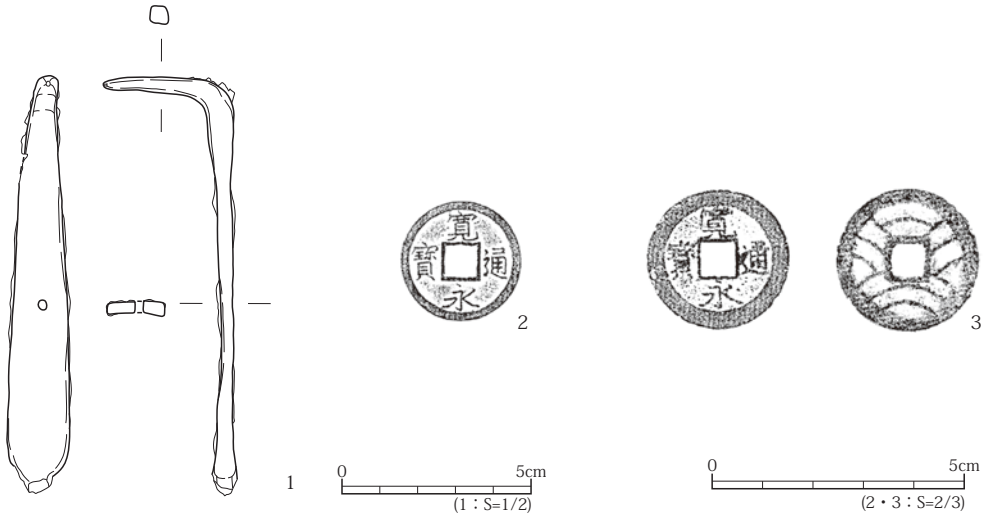


層	土色	土性	含有物など	備考
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりややあり	崩壊土
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりややあり、地山粒・小ブロックをわずかに含む	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりややあり、炭化物粒、地山粒をわずかに含む	
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりややあり	
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりややあり、地山小ブロックを少量含む	盛土
6	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりややあり、地山粒・小ブロックを少量含む	
7	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりややあり、地山小ブロック・ブロックを少量を含む、黒褐色 (10YR3/2) シルトブロックを含む	
8	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりややあり、地山粒をわずかに含む	
9	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりあり、地山粒・小ブロックを多量に含む	
10	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりややあり、地山粒をわずかに含む	
11	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりややあり、地山粒をわずかに含む	
12	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりややあり、地山粒をわずかに含む	
13	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	しまりあり、地山粒をわずかに含む	
14	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりあり、地山粒をわずかに含む	
15	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	しまりあり、地山粒・小ブロックを多量に含む	
16	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりあり、炭化物片を少量、地山粒・小ブロックを多量に含む	
17	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりややあり、地山粒・小ブロックをわずかに含む	
18	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりややあり、炭化物粒、地山粒をわずかに含む	
19	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりややあり、地山粒をわずかに含む	
20	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりあり、焼土粒、地山粒をわずかに含む、灰黄褐色 (10YR6/2) シルト、小ブロックを多量に含む	

第 106 図　2 号塚

2）その他の出土遺物

A 区と B 区の間の沢部分から鉄製品が 1 点（第 107 図 1）、SD3 大溝跡の遺構確認面と SX41 盛土遺構の表土から銅銭が 1 点ずつ出土した。いずれも寛永通宝である（2・3）。



（単位：cm）

No.	器種	遺構・層	長さ・直径	幅・孔径	厚さ	重量 (g)	特徴	写真図版	登録番号
1	鉄製品　鏃？	沢部分	(11.0)	(3.5)	0.3 ～ 0.5	25.2	目釘孔あり	図版 75-10	鉄器 13
2	銅銭　寛永通宝	SD3 確認面	23.9	6.0	1.1	2.6	背：無文　新寛永	図版 75-11	R1056
3	銅銭　寛永通宝	SX41　表土	28.2	6.3	1.2	5.0	背：波模様　新寛永	図版 75-12	R1057

第 107 図　その他の出土遺物

第 4 表　その他の遺構属性表

遺構名		区	特徴	平面図
SB37	掘立柱建物跡	B	1 × 1 間　総長：2.6m × 2.2m　方向：E-33° -N　重複：SI9 → SB37	第 7 図
SB42	掘立柱建物跡	B	1 × 1 間　総長：2.7m × 2.1m　方向：N-8° -E　重複：SI8 → SB42	
SK35	土坑	B	平面形：楕円形　断面形：皿状　長軸 1.74 m　短軸 1.3m　深さ 0.14m　重複：SI9 → SK5	

第Ⅳ章　総括

１．古墳時代

（１）遺物

土器、銅鏡、鉄製品、玉類、垂飾品、土製品、石製品、石器、繊維、赤色顔料、動物遺存体、植物遺存体が出土した。

個別の記載を行う前に、特に遺物が多く出土した焼失竪穴建物跡の遺物の出土状況について特徴をまとめ、一括性について検討する。

焼失竪穴建物跡である SI8・10・13・17・19 では、火災後の自然堆積層、地山ブロックが主体となる層（以下地山ブロック主体層）、炭化物や焼土を多く含む層の大きく３種類の層が認められた。炭化物や焼土を多く含む層は床面直上の広い範囲で検出され、その特徴から火災によって生じた層であると考えられる（以下、火災由来層）。地山ブロック主体層の性格については後述するが、屋根材の一部と推定される。出土遺物とこれらの層との関係は、以下の３点にまとめられる。

A：竪穴建物の柱材や屋根材である炭化材の多くは床面と火災由来層から出土している

B：地山ブロック主体層は炭化材と火災由来層の直上にそれらを覆って堆積している

C：様々な遺物が床面とともに火災由来層から出土しており、土器には、正位の状態で潰れたものや倒れて潰れたものが多く、中には完形の土器が横倒しの状態で出土しているものがある

A の炭化材の状況から、竪穴建物の柱材や屋根材が堆積する際に一定程度の火災由来層が形成されていたことが推察される。B の状況は、火災が始まり火災由来層が形成され、それから時間を置かずに屋根材の一部の可能性がある地山ブロック主体層が堆積したことを示す。さらに、C の遺物の出土状況から、火災が生じ、地山ブロック主体層が堆積するまでの間に遺物が投棄されることや、火災後に大規模に片付けられて元の位置を大きく移動しているわけではないことが考えられる。したがって、床面と床面直上に堆積している火災由来層から出土した遺物は一括性の高い資料であり、出土層の性格からそれぞれの竪穴建物跡に伴うと考えられる。この前提に基づき各遺構における遺物の出土状況を整理したのが第５表である。

１）土器

入の沢遺跡では SI10・13・17・19 を中心に多数の土師器が出土している（第５表）。ここではこれらの土器の特徴をまとめ、編年的位置づけについて検討する。本来であれば、土器の分類を行い器種の組み合わせによって土器群を設定し、それを基に各種の検討を行うべきであるが、入の沢遺跡の調査は一部にとどまっており、今後の調査によって新たな資料が増加する可能性があることから、ここではそれらの作業を行わず、遺構ごとに記述することとする。

また、SI10・13・17・19 の床面、床面施設または火災由来層から出土した土器は、高い割合で接合し、個体と形状の復元可能なものが多い。形状の復元ができなかったものについても、出土状況や

第５表　遺物の出土状況

区	遺構	堆積土＼遺物	土器	銅鏡	鉄製品										玉類						垂飾品	土製品		石器・石製品					その他
					剣	鏃	両頭金具	短冊形鉄斧	有袋鉄斧	方形板刃先	鑿	刀子	工具	不明	勾玉	管玉	臼玉	丸玉	棗玉	ガラス小玉		土玉	支脚	砥石	敲石	磨＋敲石	磨石	台石	
A区	SI56	4・5層	3																										
	SI63	1・3～6層	5																			4							
		P2 遺構確認																				1							
	SD1	20・21層	4																										
		表土	1																										
B区	SI8	1・3～6層	2																					2					
		K1-1層	1																										
		床																						1		1			
	SI9	3層	1																										
		床																							1				
	SI10	1・2層	2																										
		屋根材崩壊土（5～8層）	4																										
		火災の堆積土（9～11層）	12																					1			1		
		機能時の堆積土（18層）																						1					
		床	22																										
		周溝上面	1								1																		
		周溝堆積土（B期）																						1					
		K1-1～5層	16																										
		P3堆	1																										
		P3堆 ,D1堆 , 床直 , 堆	1																										
		P8埋	1																										
	SI13	2層											1			1											1		
		2～7層	1																					3					
		火災の堆積土（8～13層）	19	2	5	2	1	3	2	2		1	4	1	7	82	16	2	2	88	1			1		2		1	繊維、水銀朱、ベンガラ、人骨、炭化米、モモ核
		床	9												4	21	1		2	32	1								
		周溝上面	2																										
		周溝堆積土	3						1				1			2				1									
		K1-1～7層	8										1							2									
		K1-1～5層 ,D1-1層	1																										
		D1堆積土	1																										
	SI15	K1	1																										
		床	1																										
	SI17	屋根材崩壊土（5層）	1																										
		床	21																					1			1		
		周溝上面	5																										
		K1堆積土	2																										
		P3柱痕跡																						1					
	SI18	2層	1																										
		床	2																										
		K1-4層	2																										
	SI19	3層														1								1					
		火災の堆積土（5～8層）	16	1					1					1															
		床	2																										
	SI20	3～12層	8																										
		K1上面	1																										
	SI21	2～4層	2																										
	SD3	大別6層	2																										
	SX14	整地層	1																										

：遺構に伴う遺物　　※土器は個体数

土器の特徴から別個体と認識できたものがあり、個体識別が一定の精度で実施可能と判断された。そのため、各遺構の全体量を提示するために口縁部または底部から胴部が 1/6 以上残存するものについて個体識別を行い（宇野 1992、酒井 2012、奈良文化財研究所編 2010b）、その数を集計した（第６表）。

記述は中心的な遺構である SI13 から行う。

第６表　各遺構における器種構成

遺構	層	高坏	器台	鉢	鉢 or 壺	壺	甕	台付甕	甕 or 壺	有孔鉢	計
SI10	5～11層	1	2	4		3	4	1	2		17
	床	2	3	4	1	6	6				22
	K1		6	5		2	2			1	16
	P3		1								1
	P8							1			1
	周溝上面			1							1
	計	3	12	14	1	11	12	2	2	1	58
SI13	8～13層	2		3		12	2				19
	床	2	3	1		2				1	9
	周溝			1		4					5
	D1			1		1					2
	K1	4	2	2							8
	計	8	5	8		19	2			1	43
SI17	5層						1				1
	床			5	5	6	4			1	21
	K1					1	1				2
	周溝上面		1	1		2	1				5
	計		1	6	5	9	7			1	29
SI19	5～8層		2	7	1	6					16
	床				1	1					2
	計		2	7	2	7					18

①特徴

A．SI13 竪穴建物跡出土土器（第 108 図）

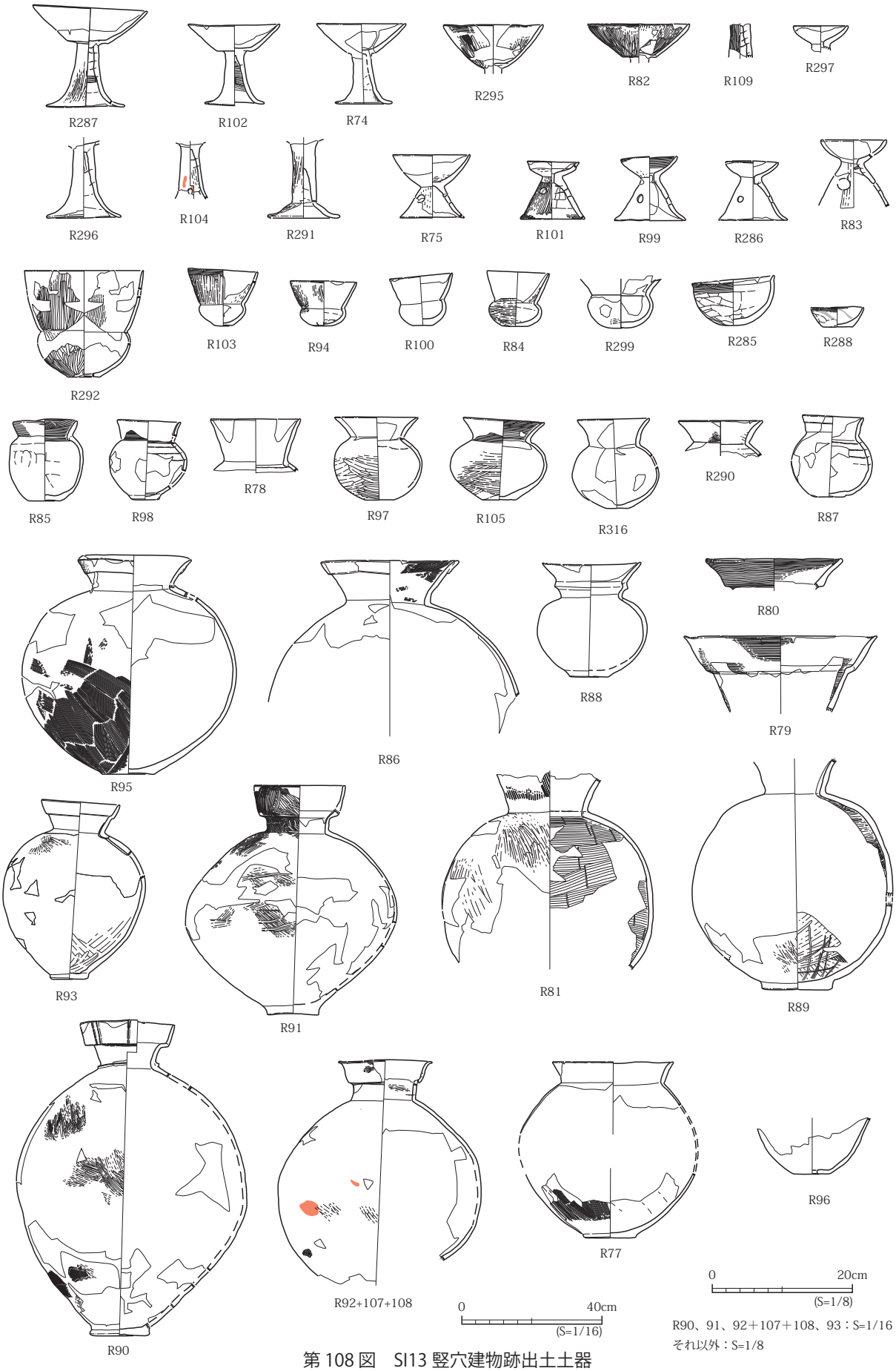
床面と床面施設、および火災に由来する 8 ～ 13 層から出土した土器には、高坏、器台、鉢、壺、甕、有孔鉢があり、個体数は全体で 43、器種ごとでは高坏 8、器台 5、鉢 8、壺 19、甕 2、有孔鉢 1 である（第 6 表）。壺が全体の半数近くを占め、特に二重口縁の壺の割合が高いこと、高坏の出土量が多いこと、一方で甕の出土は僅かであることが特徴である。

【高坏】脚部の形状から、中空の長脚で裾部が「八」字状に広がるもので（R74・102・104・287・296）、坏部は埦状（R74）と底部に稜をもつ逆台形（R102・287）、脚上部が中実棒状で下部が中空、裾部が屈折して内湾しながら開くもの（R291）、脚部が中空の円錐状で坏部が埦状になるもの（R75）が認められる。調整はいずれもヘラミガキが主体で、ハケメの後にヘラミガキの痕跡が確認できるもの（R295）もある。なお、R82 と R287 では坏部と脚部の接合方法が確認でき、両者を成形した後、R287 は坏部底面に作出した凸部に円筒状の脚部上端を、R82 は坏部底面を凹形に脚部上端を凸形にして組み合わせて接合させている。R104 の脚部で円窓 3 個と赤彩、R75 の脚部で円窓 3 個が認められる。R82 は細粒で小礫などの混入物も目立たず精良な胎土である。

【器台】脚部の形状から、円錐状に直線的に広がり裾部が外反するもの（R99・101・286）と、円錐状に内湾気味に広がるもの（R83）がある。前者には受部が内湾気味に立ち上がって口縁部に至るもの（R99・286）と、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が外面に稜をもって直線的に立ち上がるもの（R101）、後者には受部が内湾気味に立ち上がって口縁部に至るもの（R83）がある。いずれも貫通孔と 3 個の円窓が認められる。調整は、口縁部にナデが施されるもの（R99・101）もあるが、それ以外の確認できる範囲ではヘラミガキが主体である。

【鉢】体部から口縁部にかけての屈曲が器高の中央あるいはそれより下位にあり、最大径が口縁部にあるものでいわゆる小型丸底鉢（R84・94・100・103・299）、小型丸底鉢を大型にしたもの（R292）、体部は緩やかに内湾し、口縁部は短く外傾する短頸鉢（R285）、体部から口縁部にかけて屈曲を持たない無頸鉢（R288）がある。小型丸底鉢は口頸部がわずかに外傾して内湾気味に立ち上がるものが主体で、R299 のみ大きく外傾する。調整については、小型丸底鉢とそれを大型にした形状の鉢が内外面ともヘラミガキで、前者の体部外面が横方向のヘラミガキであるのに対して後者は縦方向である。短頸鉢と無頸鉢の外面調整はナデ、オサエである。器形により調整の方法が異なり、さらに類似した器形でも大きさにより細部の調整方法が異なっている。胎土では、R94 や R292 が緻密で精良である。無頸鉢である R288 は口縁部から底部にかけて斜方向に油煙状の付着物が認められる。

【壺】口縁部の形状から、単純口縁（R78・85・97・98・105・290・316）、複合口縁（R86・87・95）、二重口縁（R79・80・88・90・91・92 ＋ 107 ＋ 108・93）に分けられる。単純口縁の壺には、口縁部が外傾するもの（R78・85・98）と「く」字状に屈曲して外反するもの（R97・105・290・316）があり、前者には体部が張らず長胴のもの（R85）と体部が張るもの（R98）がある。後者はいずれも体部が張る形状で類似し、黒斑が認められる。調整の確認できたものでは、口縁部がナデ、R85 の体部がナデ、オサエ、R97・105 の体部が横方向に密なヘラミガキである。



R90、91、92＋107＋108、93：S=1/16
それ以外：S=1/8

第 108 図　SI13 竪穴建物跡出土土器

複合口縁の壺は器高 12cm 程度（R87）と 30cm 前後（R86・95）があり、R87・95 は、口縁部に貼付される粘土が薄く、複合部が明瞭ではないが、R86 は粘土が厚く貼付され明瞭な複合部となる。体部の器形が分かるものは球形で、調整は R95 の体部外面と R86 の口頸部内面にハケメが認められる。

二重口縁の壺は、器高 20cm 未満（R88）と 40cm 以上（R90 ～ 93）がある。頸部が外反するもの（R88）、外傾するもの（R79・90・93）、直立するもの（R91・92 ＋ 107 ＋ 108）に分けて記述する。R88 の口頸部は、頸部が外反し、口縁部が内傾してさらに直線的に外傾する形状である。体部は扁平な球形である。調整は体部内面にヘラナデが施されるが、それ以外は不明である。R79 は口頸部のみの残存で、頸部が外傾し、口縁部分が内湾気味に外傾する。調整は頸部外面がヘラミガキ、口縁部外面と口頸部内面がナデである。R90 は器高 80.2cm で、頸部と口縁部は外傾し、外面には縦位の棒状浮文が 6 ヶ所均等に貼り付けられる。棒状浮文は 1 ヶ所のみ 1 条 1 単位で、それ以外は 2 条 1 単位である。頸部と体部の境には突帯が 1 条めぐる。体部は倒卵形で、器壁の厚さは 1cm 以上あり厚手である。調整は、体部外面がハケメの後ヘラミガキ、体部内面が最大径部分を境に上半がナデ、下半がハケメの後ナデである。R93 は器高 49.7cm で、口頸部は頸部が外傾し、口縁部は内湾気味に立ち上がる形状である。体部は倒卵形で外面の調整はヘラミガキ、内面はナデである。体部の器壁の厚さが 1cm 程度あり、厚手である。R91 は器高 65.4cm で、口頸部は頸部が直立し、口縁部が内湾気味に立ち上がる形状である。口縁端部は面取りされている。体部は強く張る扁平な形状で、器壁は薄く大きさに対して軽量である。調整は、口頸部外面がハケメの後ヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ、内面は口頸部、体部ともにハケメの後ナデである。胎土も精良である。R92 ＋ 107 ＋ 108 は口縁部から体部下半までの残存で、器高は 64.2cm 以上である。口頸部は、頸部が直立し、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部が外反する形状である。体部は球形である。調整は、口縁部外面がナデ、体部外面がハケメの後ヘラミガキ、口頸部内面がヘラミガキ、体部内面がハケメの後ナデである。体部外面には赤彩が認められる。

これらの他に、頸部から体部下半（R81）、頸部から底部（R89）のものがあり、体部は球形で、R81 は頸部外面にハケメ、体部外面にヘラミガキ、内面にヘラナデ、R89 は体部内外面ともにハケメの後ヘラミガキが施されている。

【甕】R77 は体部が接合しないが同一個体と考えられ、「く」字状の短い口縁部と球形の体部で、底部は平底である。調整は、体部外面がハケメ、ヘラケズリである。体部中央の器壁の厚さが 3 ～ 4mm と非常に薄いことが特徴である。

【有孔鉢】底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる器形で、底部中央付近に穿孔が 1 ヶ所行われている（R96）。調整は不明である。

B．SI10 竪穴建物跡出土土器（第 109 図）

床面と床面施設、および火災に由来する 5 ～ 11 層出土土器には、高坏、器台、鉢、壺、甕、有孔鉢があり、個体数は全体で 58、器種ごとでは高坏 3、器台 12、鉢 14、壺 11、鉢または壺 1、甕 12、台付甕 2、甕または壺 2、有孔鉢 1 である（第 6 表）。多くの器種で構成され、器台や鉢による

小型器種が豊富なこと、そして甕が全体のおよそ 1/4 を占めることが特徴的である。

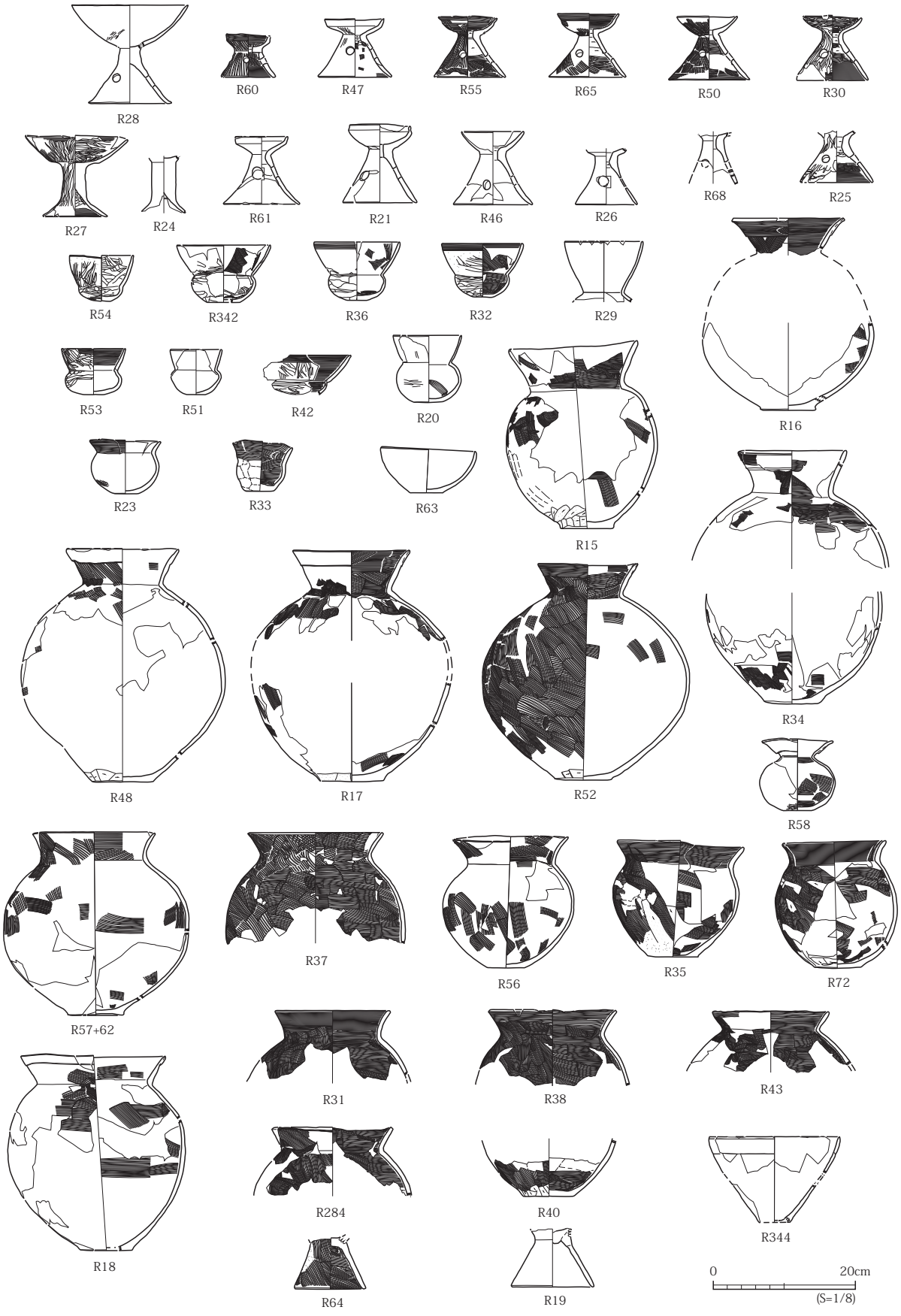
【高坏】円錐状で脚上部は中実となり坏部が埦形（R28）と、脚上部が中実の柱状で下部が屈曲して開き、坏部は底部に稜をもつ逆台形（R27）の 2 種類が認められる。R28 は全体的に被熱しており調整は不明瞭だが、坏部外面にヘラミガキの痕跡がわずかに確認できる。R27 は、坏部が口径に対して器高の低い形状である。調整は、坏部内外面がナデの後ヘラミガキ、脚部外面がヘラミガキ、脚部内面がナデの後ヘラケズリで、このヘラケズリにより脚部下半に中空部分が作出されている。R24 は脚部のみの残存で、R27 に類似する。

【器台】脚部の形状から、円錐状で直線的に広がるもの（R21・26・46・47・50・55・60・61・65・68）と、円錐状で内湾気味に広がるもの（R25・30）の大きく 2 種類に分けられる。前者には、受部が内湾気味に立ち上がって口縁部に至るもの（R46・50）と、体部が外傾し口縁部は外面に稜をもって直線的に開くもの（R47・60・61）、体部が内湾しながら立ち上がり口縁部は屈曲して端部が外傾するもの（R55・65）、体部が内湾しながら立ち上がり口縁部は外面に稜をもって内湾するもの（R21）がある。後者には、受部が内湾気味に立ち上がって口縁部に至るもの（R30）のみ認められる。

いずれも貫通孔と円窓が認められ、内外面の調整後に貫通孔は上から下、円窓は外側から内側に穿孔される。円窓は R60 のみ 4 個で、それ以外は 3 個である。調整には、受部と脚部外面でハケメ主体（R50・55・60・65）とヘラミガキ主体（R25・30・47）が認められる。受部内面では、外面がハケメ主体のものは全てナデ（R50・55・60・65）で、外面がヘラミガキ主体のものは内面もヘラミガキが施されている（R30）。器形と調整の関係は多様だが、その中でも脚部が円錐状に直線的に広がり、受部は体部が内湾しながら立ち上がり口縁部が屈曲し端部の外傾する R55・65 と外面ハケメ調整、脚部が円錐状で内湾気味に広がる R25・30 と外面ヘラミガキ調整に関係が認められる。受部と脚部の接合方法については、R47 と R60 でその痕跡が明瞭であり、受部と脚部を別に作り、円筒状の脚部上端を受部下端に接合したと推定される。外面では、接合後にその部分の調整が行われ、稜が形成されたと考えられるものも認められる（R21・26・50・55・65）。

【鉢】小型丸底鉢（R20・32・36・42・51・53・54・342）、体部が内湾しながら立ち上がり、体上部で屈曲して口縁部が短く外傾する甕形の鉢（R23・33）、無頸鉢（R63）がある。小型丸底鉢は口頸部高よりも体部高が低いもの（R32・36・54・342）と両者が同程度あるいは体部の方が高いもの（R20・51・53）がある。底部はどちらも平底である。調整は、外面と口縁部内面にヘラミガキが施されるもの（R54）と外面がヘラミガキで口縁部内面がナデのもの（R32・36・42・53・342）がある。R32 は体部下端にヘラケズリが施されている。甕形の鉢については、R23 で体部が張り、口縁部が屈曲するのに対して、R33 では体部の張りが弱く、口縁部は緩やかに外傾する。調整は、前者が口縁部外面ナデ、体部ヘラミガキ、後者は口縁部外面ナデ、体部ヘラナデである。R42 は細粒で精良な胎土である。

【壺】口縁部の形状から、単純口縁（R15･29）、複合口縁（R16･17･34･48･52･58）に分けられる。単純口縁の壺は口頸部が長い直口壺（R29）と外傾して大きく開くもの（R15）がある。R15 は体部



第 109 図　SI10 竪穴建物跡出土土器

が球形で、調整は外面がヘラナデを主体とし体下部にはヘラケズリ、口縁部内面にはハケメとヘラナデ、体部内面にはヘラナデが施される。複合口縁の壺（R16・17・34・48・52）は、口縁部が直線的に外傾し、体部は扁平な球形である。複合口縁部は貼付される粘土が薄く、複合部は明瞭ではない。R16 の口縁端部は面取りされている。調整は、外面がハケメ主体（R16・48・52）、ヘラナデ主体（R17・34）、ハケメとヘラナデ（R17）があり、口頸部内面においても R16 以外は外面と同様の調整が認められる。また、体部下端にはヘラケズリが施されるものがある（R17・48・52）。R58 は器高 10cm 程度の小型で、頸部が外傾し、口縁部は外反する。調整は外面と口頸部内面がヘラミガキと推定され、この範囲が赤彩されている。

【甕】単純口縁（R31・35・37・38・43・56・57 ＋ 62・72・284）、複合口縁（R18）、台付甕（R19・64）がある。単純口縁の甕については、口径 18 ～ 20cm、器高 20cm 以上（R37・57 ＋ 62）と、口径 15 ～ 18cm、器高 19cm 以下（R35・56・72）があり、形状は、口縁部が緩やかに外傾し、体部が球形である。外面調整には、ハケメ主体（R37・56・57 ＋ 62）とヘラナデ主体（R31・35・38・43・72・284）があり、前者には、外面の口縁端部付近まで調整が行われ、口頸部内面においても外面と同様の調整が行われている。この他に、体部下端にヘラケズリが施されるもの（R40・72）、口縁端部が面取りされるもの（R37・38・57 ＋ 62・284）が認められる。また、R40 では、円盤状の粘土を底部にし、そこに粘土紐を積み上げて体部を作出している。台付甕は台部のみの残存で、R64 は外面調整がハケメである。

【有孔鉢】R344 は口縁部と底部破片で同一個体と考えられる。体部から口縁部まで直線的に外傾する。口縁部は複合口縁であるが、粘土の貼付が薄く複合部は明瞭ではない。

なお、SI10 出土土器には色調や焼成、器面の残存状況から胎土の共通するものが確認できた。その特徴は、胎土が細粒で小礫などの混入物が目立たないこと、色調が灰白色で一部橙色や赤褐色に発色していることである。器種は器台（R30・25）、小型丸底鉢（R32・36・54・342）、壺（R34）甕（R31・35・38・39・40・41・43・44・72・284）である。

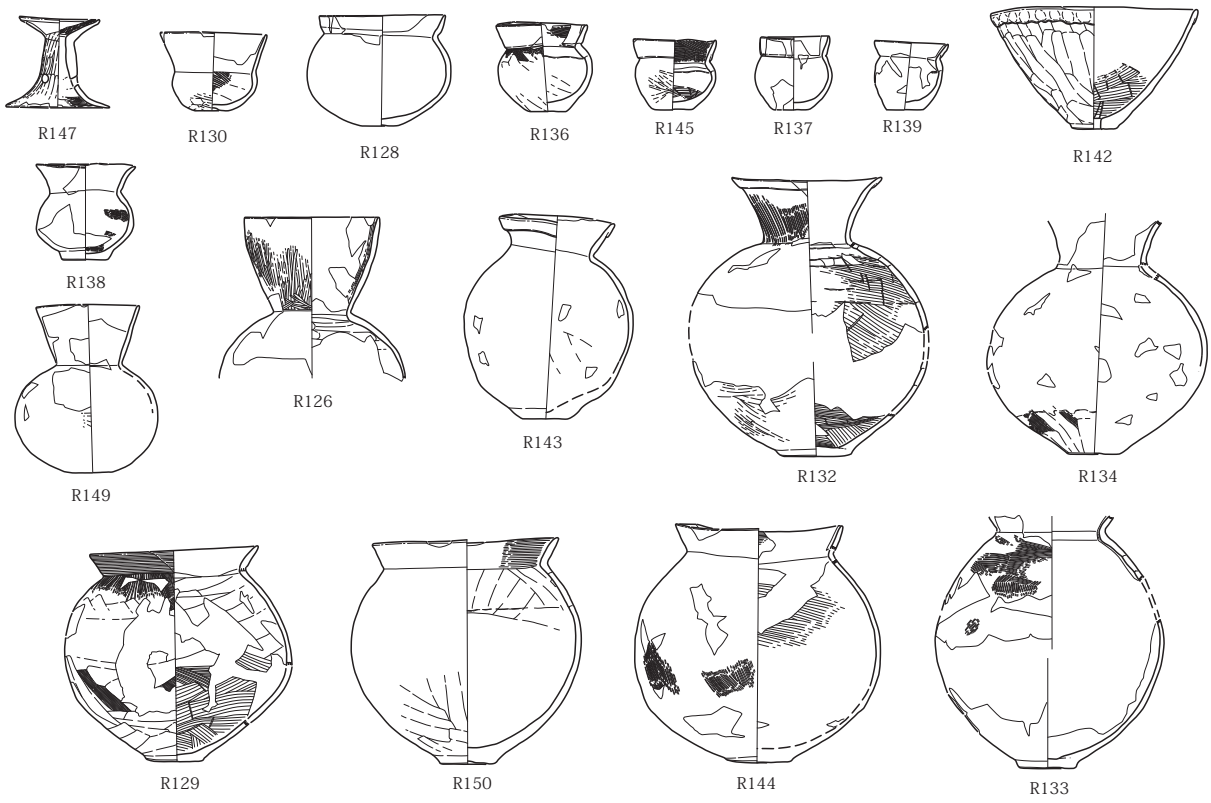
C. SI17 竪穴建物跡出土土器（第 110 図）

床面および床面施設、屋根材崩壊土である 5 層から出土した土器には器台、鉢、壺、甕、有孔鉢があり、個体数は全体で 29、器種ごとでは器台 1、鉢 6、壺 9、鉢または壺 5、甕 7、有孔鉢 1 である（第 6 表）。器台や鉢といった小型器種の割合が低く、甕の出土量の多い点が特徴的である。

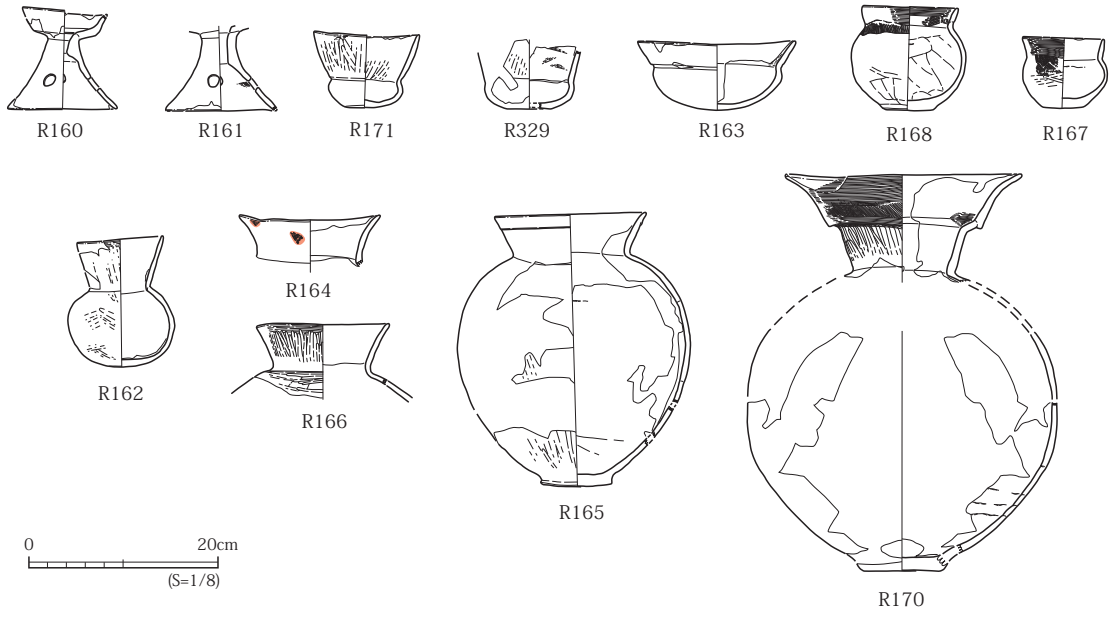
【器台】脚部は柱状で、受部は体部が直線的に外傾し口縁端部が直立する（R147）。貫通孔と円窓 3 個が認められ、外面と受部内面にヘラミガキが施される。胎土は細粒で混入物が目立たず精良である。

【鉢】小型丸底鉢（R130）、甕形の鉢（R128・136・137・139・145）がある。R130 は口径と体部径が大きく、底部はくぼみ底である。調整は、体下部でヘラケズリとヘラミガキが認められる。甕形の鉢には単純口縁（R128）と複合口縁状のもの（R136・137・139・145）があり、後者の調整が確認できるものは外面がハケメやヘラミガキ、口頸部内面がハケメである。

SI17



SI19



第 110 図　SI17・19 竪穴建物跡出土土器

【壺】口縁部の形状から、単純口縁（R126・138・149）と複合口縁（R132・143）に分けられる。単純口縁の壺には、器高 10cm の小型で体部が張り、口縁部が外反する広口壺（R138）と、直線的（R149）、内湾気味にのびる直口壺（R126）がある。体部は扁平な球形である。複合口縁の壺は、口縁部が直線的に外傾し、体部の張りの弱い球形となるもの（R143）と、口縁部が長く外反し体部が球形となるもの（R132）がある。調整は、R132 の頸部外面がハケメ、体下部がヘラミガキである。

【甕】口縁部は短く外傾し、体部は中位に最大径がある球形である（R129・133・144・150）。体部外面の調整は、ハケメ（R133・144）、ハケメの後ヘラナデ（R129）、ヘラナデ（R150）であり、R129 は体部内面もハケメの後ヘラナデが施されている。R150 の体部内外面には横方向に帯状の付着物が認められる。

【有孔鉢】体部から口縁部まで内湾しながら立ち上がる（R142）。口縁部は複合口縁であるが、粘土の貼付が薄く複合部は明瞭ではない。

D. SI19 竪穴建物跡出土土器（第 110 図）

床面および火災に由来する 5 ～ 8 層出土土器には器台、鉢、壺があり、個体数は全体で 18、器種ごとでは器台 2、鉢 7、壺 7 点、鉢または壺 2 点である。今回の調査で甕は出土していない。

【器台】受部は外傾し口縁部が外面に稜をもって直線的に開き、脚部は円錐状に広がる（R160）。受部外面の口縁端部にナデの痕跡が認められるが、それ以外の調整は不明である。

【鉢】小型丸底鉢（R171・329）、体部が皿状で頸部が屈曲して口縁部が外傾する浅鉢（R163）、甕形の鉢（R167･168）がある。R171 は口頸部高に対して体部高が低く、底部は丸底状となる。調整は、内外面ともにヘラミガキである。R167・168 は口縁部外面がナデ、体部外面がハケメの後ナデやヘラミガキで、R168 では口頸部内面にハケメの後ナデが施されている。

【壺】口縁部の形状から、単純口縁（R162・164・166）、複合口縁（R165）、二重口縁（R170）に分けられる。単純口縁の壺には、頸部が直線的にのびる直口壺（R162）や、外反（R164）、外傾（R166）するものがあり、外面調整はヘラミガキ主体である。複合口縁の壺（R165）は、口頸部が直線的に外傾し、体部は球形である。口縁部に貼付される粘土が薄く、複合部は明瞭ではない。体部外面の調整はヘラミガキである。二重口縁の壺（R170）は、頸部が外傾し口縁部が外反する形状で、体部は球形と推定される。外面調整は、口縁部がハケメの後ナデ、頸部がヘラミガキである。

②編年的な位置

SI13･10･17･19 から出土した土器の特徴は、氏家和典氏によって設定された古墳時代前期の「塩釜式」土器（氏家 1957）の範疇に入るものである。これらの土器について、宮城県北部地域の一括資料と対比し、編年的な位置を検討する。

【SI13】類似する土器群に美里町山前遺跡 30・31 号住居跡（青山 1999）、登米市佐沼城跡 SD105 溝跡（迫町教育委員会 1995）、栗原市伊治城跡 SD260・261・273 溝跡（築館町教育委員会 1992）出土土器がある。山前遺跡 30･31 号住居跡では床面から多くの土器が出土し、その器種構成は高坏、

器台、小型丸底鉢、無頸鉢、単純口縁壺、複合口縁壺、二重口縁壺、甕である。高坏には脚部が中空の円錐状で坏部が椀状のものと、坏部は残存していないが脚部が中空の長脚で裾部が「ハ」字状に広がるものがあり、R287・102・75 と器形・調整・法量の面で類似する。小型丸底鉢（R94）には器形と大きさ、壺（R81・89）には体部の形状や調整で類似するものがある。一方、複合口縁の壺については、複合部の特徴が異なり、甕についても器形が異なる。

佐沼城跡 SD105 溝跡では堆積土から多くの土器が集中して出土し、その器種構成は高坏、器台、小型丸底鉢、浅鉢、短頸鉢、単純口縁の壺、複合口縁の壺、甕、有孔鉢である。高坏には、脚上部が中実で円錐状のもの、長脚で裾部が「ハ」字状に広がるもの、脚上部が中実棒状で下部が中空、裾部が屈折して開くものがある。SI13 では前二者が認められないが、後者とは脚部形状と調整が類似する（R291）。鉢では、小型丸底鉢を大型にしたもの（R292）や短頸鉢（R285）、壺（R81・89）、有孔鉢（R96）において類似が認められる。一方、小型丸底鉢の器形や調整、器台の脚部の形状や円窓の有無で異なる特徴が認められる。

伊治城跡 SD260･261･273 溝跡は堆積土から多くの土器が集中して出土し、その器種構成は、高坏、器台、小型丸底鉢、浅鉢、単純口縁壺、甕である。この内、高坏は小破片であり比較の対象から除外する。器台では脚部のみ出土したものと R101・286、そして大型の壺（R91）が器形、外面調整、大きさの点で類似する。一方、伊治城跡 SD260・261・273 出土土器で主体となる鉢や甕については器形、調整の各点で特徴が異なる。

器種構成や、細部には相違点は認められるが、高坏や小型丸底鉢に代表される個別の器種において、SI13 は山前遺跡 30・31 号住居跡出土土器や佐沼城跡 SD105 出土土器と類似点が認められ、伊治城跡 SD260・261・273 出土土器とも部分的ではあるが類似する。

【SI10】類似する土器群に佐沼城跡 SD105 溝跡、伊治城跡 SD260・261・273 溝跡出土土器がある。佐沼城跡 SD105 出土土器では、高坏の脚部形状において脚上部が中実で下部が中空の円錐状（R28）と脚上部が中実の柱状で下部が屈曲して開くもの（R27・24）、小型丸底鉢（R32・36・42）では体部径が大きく、内面のヘラミガキが省略される点が類似する。さらに、一部の壺（R17・48・52）や甕（R72）の器形、器形や調整は異なるが複合口縁の甕（R18）が出土する点にも類似が認められる。一方、佐沼城 SD105 と SI10 で多く出土している器台については器形や調整、円窓の有無、甕については口縁部形状で異なる特徴が認められる。伊治城跡 SD260・261・273 出土土器では、器種構成は異なるが、小型の甕（R56・72）で類似が認められる。

この他に、脚上部が中実で下部が中空の円錐状脚部をもち坏部が椀状の高坏（R28）は、仙台市大野田古墳群 SI3・4（仙台市教育委員会 2009a）、口縁部にハケメが残る甕（R37・56・57 ＋ 62）は、石巻市新金沼遺跡第 17 号住居跡（石巻市教育委員会 2003）でも認められる。

以上より、一部で大野田古墳群や新金沼遺跡と類似する土器があるが、主体は佐沼城跡と類似する。

【SI17・19】類似する土器群に佐沼城跡 SD105 溝跡、伊治城跡 SD260・261・273 溝跡出土土器がある。佐沼城跡 SD105 出土土器とは器種構成が異なるが、SI17 では小型丸底鉢（R130）、甕（R129・144・150）、有孔鉢（R142）の器形や調整、SI19 では浅鉢（R163）や壺（R170）の体部形状が類

似する。伊治城跡 SD260・261・273 出土土器とは、SI17 では高坏や器台が少なく、鉢と甕が器種構成の主体となる点は類似する。小型丸底鉢では、体部径が大きく頸部の屈曲の弱いものがあり、これらには体部外面下半にヘラケズリが施されている。ヘラミガキの有無の点は異なるが、この特徴は R130 で認められる。また、口縁部が複合口縁状になる鉢があり、これは R136・137・145 と、甕の器形や調整についても R129・144・150 との類似が認められる。SI19 では、小型丸底鉢（R329）の器形が類似するが、内外面の調整において相違がある。

SI13・10・17・19 出土土器間では、SI13 と SI19 で小型丸底鉢（R94 と R171）、SI13 と SI17 で壺（R81・89 と R132・134）、SI13 と SI10 で推定ではあるが甕の体部形状（R77 と R57 ＋ 62）、SI10 と SI17・19 で壺の体部形状（R17・48 と R132、R170）、SI17・19 で、鉢（R136 と R168、R137・139・145 と R167）、壺（R149 と R162、R143 と R165）、壺の体部形状（R132 と R170）が類似する。SI17 と SI19 では多くの共通点が確認されるが、それ以外では一部の類似にとどまる。一方、SI13・10・17・19 は火災により焼失しており、後述するが、その時期は同じであったと推定されることから、これらの竪穴建物跡出土土器は、器種構成や個別の器種内の形状が多様ではあるが、同時期の一括性の高い土器群と考えられる。

したがって、SI13・10・17・19 出土土器は、類例として比較を行った山前遺跡 30・31 号住居跡、佐沼城跡 SD105 溝跡、伊治城跡 SD260・261・273 溝跡出土土器と同時期と推定される。塩釜式の編年については、丹羽茂（宮城県教育委員会 1983c・1985）、次山淳（1992）、辻秀人（1995）、青山博樹（2010）の各氏により詳細な検討が行われており、類例とした土器群の編年的な位置から、SI13・10・17・19 出土土器は古墳時代前期後半に相当すると考えられる。

その他の遺構から出土した土器については、遺構に確実に伴う出土事例は少ないが、その特徴は SI13・10・17・19 出土土器と大きく異なることはない。したがって、これらの土器についても古墳時代前期後半と考えられ、今回の調査で出土した土器については大きな時間差は認められない。

③ SI13・10・17・19 出土土器の比較

SI13・10・17・19 出土土器について器種、内外面の調整、胎土、使用の各項目により比較を行い、それぞれの特徴を明確にする。

〔器種構成〕 主体となる器種は、SI13 が高坏、鉢、壺、SI10 が器台と鉢、壺、甕、SI17 が鉢、壺、甕、SI19 が鉢と壺で、鉢と壺が主要な器種である点は共通する。一方、細部では、小型丸底鉢が主体となる SI10 や、二重口縁壺が主体となる SI13 のように特徴は異なる。器種構成の内容や出土数を考慮すると、SI13 は特殊であり、SI10 の小型器種が多い点も特徴的である。

〔調整〕 SI13 は器種や大きさの違いを問わずヘラミガキが主体であり、高坏や小型丸底鉢では内面にもヘラミガキが施される。高坏や中・大型の壺の外面にハケメの後にヘラミガキが施されるものもある。また、大型の壺や甕には、体部の器壁が非常に薄いものがあり、技術的な精度の高い土器と評価でき、これは SI13 でのみ認められる特徴である。SI10 は、外面調整において小型器種である高坏

と鉢ではヘラミガキ主体であるが、器台はヘラミガキ主体とハケメ主体、壺と甕ではハケメ主体とヘラナデ主体のそれぞれ2種類が認められる。内面調整では、高坏がヘラミガキ、小型丸底鉢はヘラミガキ以外が主体になり、この点はSI13と異なる。SI17は、器台と鉢の小型器種と壺にヘラミガキが主体的である一方で、ハケメやナデ調整についても程度の差はあるが器種を問わず認められる。SI19は、小型丸底鉢や一部の壺でヘラミガキ、その他の鉢ではハケメが認められる。また、SI10・17・19出土土器の外面調整にハケメが施されるものについては、それらの内面の口頸部にもハケメが施されるものが多く認められる。

器種と調整には関係が認められ、それらはそれぞれで異なる傾向となる。ヘラミガキが施されるという点で調整が最も丁寧なのはSI13、次にSI10、SI17という順になり、SI19は量が少なく、器面の残りが悪いことから全体の傾向は不明である。この傾向は土器製作の技術系統や製作者集団、時間差、あるいは土器の性格を表す可能性がある。

〔**胎土**〕SI10出土土器以外は全体的に器面の状態が悪いという特徴があるが、その中でもSI13の高坏（R82）、小型丸底鉢を大型にしたもの（R292）、小型丸底鉢（R94）、大型壺（R91）やSI10の小型丸底鉢（R42）、SI17の器台（R147）は精良である。

SI10出土土器は器面の状態が良好なものが多く、その中には良質で特徴的な胎土の一群が認められる。器種は器台と小型丸底鉢、壺、甕で、特に甕で多く認められる。各器種の器形は類似し、外面調整は器台と小型丸底鉢がヘラミガキ主体、甕が細かいハケメのようなヘラナデで、甕については工具の共通性が認められる。また、遺存状態の程度から明確に同じとは判断できないが、黄褐色や黄橙色の砂粒を多く含む胎土で、外面調整にハケメを主体とする土器が一定量認められる。器種は、器台、壺、甕で、ハケメの特徴が類似しており工具が共通する可能性がある。なお、両方の調整が認められる土器も僅かに存在する（R17）。胎土、器形、調整に共通性を持つ2種類の異なる土器群が1つの遺構から共伴して出土した珍しい事例である。そして、これらは後述するが、竪穴建物内の分布でも相違が認められる。

〔**使用**〕SI13では甕に付着物は認められない。SI10では、外面ハケメ調整の甕（R18・56・57＋62）にのみ、SI17でも甕に付着物が確認できた。全体的に煮炊きと推定される付着物の痕跡は少ない。

以上をまとめると、器種構成が特殊なSI13出土土器は、器面の遺存状況の影響もあり胎土については不明だが、どの器種においてもヘラミガキ主体の丁寧な調整が認められる。そして、器壁が薄い甕と壺や、大型の壺にみられるように土器製作の技術的な水準が高いと考えられ、この他に小型と大型の土器が主体となること等、器種構成とともに、それ以外の面でも他とは異なる特徴をもった土器群と評価できる。一方、SI10出土土器は、土器製作の技術では一般的であるが、胎土と土器製作に関わる属性に明瞭な関係が認められ、特殊性が認められた。SI17出土土器は、ヘラミガキ以外の調整が各器種で認められ、器種を越えた調整のあり方はSI13と類似するが、その手法はSI13ほど入念ではない点に特徴が認められる。他と比べて大型で使用痕跡のある甕が一定量出土しており、この点もSI17出土土器の特徴である。

2）銅鏡

4 面出土した（第 111 図）。内訳は珠文鏡 2 面、櫛歯文鏡 1 面、内行花文鏡 1 面で、いずれも仿製鏡である。詳細な位置づけは附章 1 に詳しいので、ここでは、それぞれの特徴と東北地方の中での出土事例の確認を行う。

①特徴

【珠文鏡】SI13 と SI27 から 1 面ずつ出土した。第 111 図 1 は SI13 中央東側で、鏡背面を上にして水平の状態で出土している。脆弱であり土ごと取り上げた。破損しており、全体の 2/3 程度の遺存状況である。鏡面と鏡背面には緑青が付着し、光沢は認められない。直径 5.5cm、厚さ 1.2 ～ 1.7mm、重量 11.56g である。鈕は直径 1.15cm のやや歪んだ円形で、断面は鏡背面からの高さが 4.5mm の半球状である。鈕孔は中央に位置し、長軸 3.6 ～ 4.4mm、短軸 3.0 ～ 3.9mm の横に長い楕円形である。X 線写真では、厚みに大きな偏りは認められない（図版 51-1b）。

鏡背文様については、内区と外区の間に小さな段があり、外区は素文縁と幅の広い一列の鋸歯文からなる。縁は反りのある幅広の平縁で、幅 5.0 ～ 6.2mm、厚さ 1.5 ～ 1.7mm である。内区は外側から一列の櫛歯文と珠文、圏線がめぐる。圏線と連結する珠文があること、鈕に接する圏線や珠文を画す圏線が鈕孔正面部分で途切れること、もう一方の鈕孔正面では鏡面がくぼむこと等、文様の鋳潰れが認められる。また、鏡背面の文様の凸部には摩耗が確認できる。

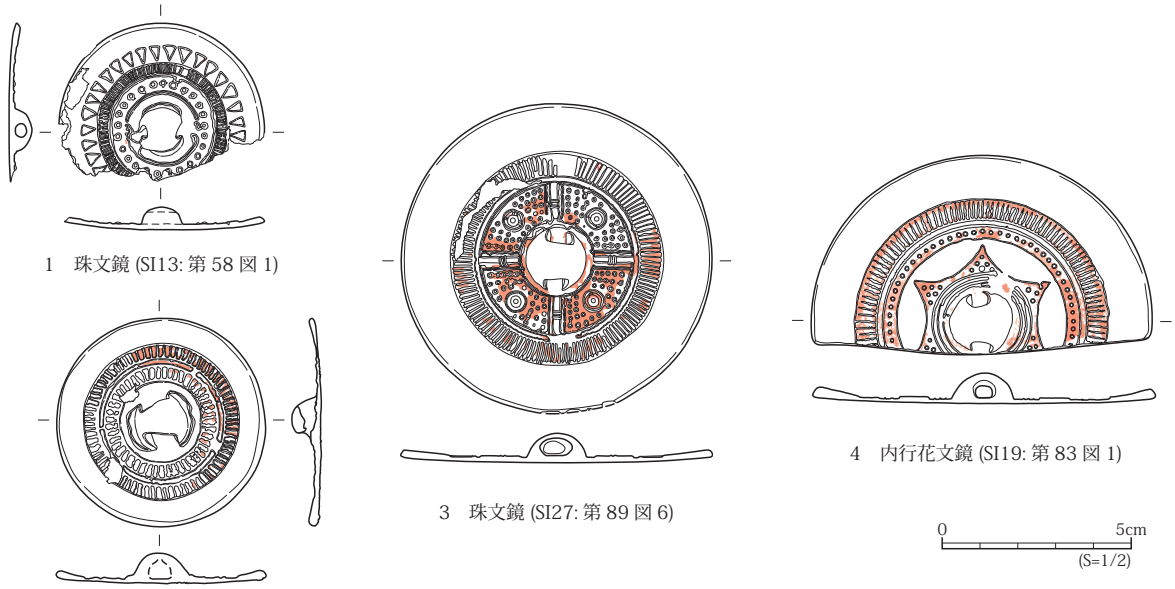
鏡背面の文様の凹部にはわずかではあるが赤色顔料の付着が認められた。また、鏡面には繊維が付着しており、分析の結果苧麻であることが判明した（附章 3）。

第 111 図 3 は SI27 北辺壁際で、鏡面を上にしてほぼ水平の状態で出土した。土ごと取り上げている。内区や縁の一部が破損しているが、全体の形状や鏡背面の文様構成は復元可能である。遺存状態は良好で、全体的に黒緑色で光沢が認められる。直径 8.2cm、厚さ 1.1 ～ 2.0mm、重量 47.61g である。鈕は直径 1.6cm の円形で、断面は鏡背面からの高さが 6.4mm の半球状である。鈕孔は中央からやや斜め上方に位置し、長軸 8.9mm、短軸 4.7mm の横に長い楕円形である。X 線写真では、鏡背面の内区外側の櫛歯文部分が半円状に薄く、その付近の珠文が配されている区画部分も他と比べて薄手である（図版 70-1b）。したがって、厚みには、鈕を境に偏りが認められる。

鏡背面の文様については、内区と外区の間に段があり、外区は素文縁である。縁は反りのある幅広の平縁で、幅 12.8 ～ 13.0mm、厚さ 1.4 ～ 2.0mm である。内区は放射状に太い突帯で 4 等分に区画され、その外側に櫛歯文がめぐる。突帯は幅 2.1mm 前後の断面かまぼこ状で、中央にはそれに直交する幅 1mm 前後の突帯が 2 条認められる。放射状に延びる突帯の両脇には幅 0.7mm 前後の小規模な突帯が並行する。それぞれの区画内には、中心に円圏座の乳文、その周囲に 5 列の珠文が配置されている。区画内の珠文には、珠文同士が連結しているものもある。また、紐孔正面には突帯や櫛歯文の不鮮明な部分があり、その延長線上の外区でも器面に非常に細かな凹凸が認められることから、鋳造を行う際の湯口を表す可能性がある。

鏡背面の文様の凸部には摩耗が確認でき、凹部や鈕孔では赤色顔料の付着が広範囲で認められた。

【内行花文鏡】SI19 で 1 面出土した（第 111 図 4）。西辺中央より北側の壁際から、鏡面を上にし



第 111 図　入の沢遺跡出土銅鏡

て西から東に傾斜した状態で出土した。全体の半分のみの遺存であるが、破断面が研磨されていることから、破片のまま使用された「破鏡」であったと考えられる。遺存状態は良好で、全体的に黒灰色で光沢が認められる。直径 9.0cm、厚さ 0.8 ～ 2.7mm、重量 47.66g である。鈕は直径 1.6cm の円形で、断面は鏡背面からの高さが 7.0mm の半球状である。鈕孔は中央に位置し、長軸 6.0mm、短軸 4.7mm の横に長い楕円形である。X 線写真では厚みに大きな偏りは認められない（図版 67-1b）。

鏡背面の文様については、外区は素文縁で、縁はやや反りのある幅広の平縁であり、幅 11.1 ～ 11.2mm、厚さ 1.3 ～ 2.7mm である。内区は外側から櫛歯文、圏線、一列の珠文、内行花文、三重の圏線で、内行花文は 6 花文と考えられる。花文間には珠文が配置される。三重の圏線には、途切れてくぼむ部分が認められる。鏡背面の文様の凸部は摩耗しており、凹部には赤色顔料の付着が広範囲で認められた。

【櫛歯文鏡】SI13 で 1 面出土した（第 111 図 2）。南辺東側のベッド状施設上から、鏡背面を上にして水平の状態で出土し、土ごと取り上げた。内区の一部が破損しているが、全体の形状や鏡背面の文様構成は復元可能である。遺存状態は良好で、鏡背面には緑青が付着するが黒緑色である。光沢は認められない。直径 5.5cm、厚さ 0.8 ～ 2.2mm、重量 16.41g である。鈕は直径 1.4cm の円形で、断面は鏡背面からの高さが 6.6mm の半球状である。鈕孔は長軸 7.9mm、短軸 5.0mm の不整形である。他の銅鏡よりも、面径に対して鈕と鈕孔が大型である。X 線写真では、内区とその外側の外区の一部で薄く、厚みに偏りが認められる（図版 51-2b）。

鏡背面の文様については、内区と外区の間に小さな段があり、外区は素文縁である。縁は反りのある幅広の平縁で、幅 6.3 ～ 7.0mm、厚さ 1.2 ～ 2.1mm で、外縁が最も厚い。内区は外側から二重の櫛歯文、圏線である。二重の櫛歯文の間には圏線同士がつながる部分や、鈕孔正面部分には圏線が途切れる部分が認められる。

鏡背面の文様の凸部は摩耗しており、凹部には赤色顔料の付着が広範囲で認められる。また、鏡面

には繊維が付着しており、分析の結果苧麻であることが判明した（附章 3）。

②東北地方における出土事例

東北地方の古墳時代前期の遺構から銅鏡が出土した遺跡は、山形県山形市馬洗場 B 遺跡（山形県埋蔵文化財センター 2004c）、福島県南相馬市桜井古墳群上渋佐支群 7 号墳（原町市教育委員会 2001）、会津坂下町森北古墳群 1 号墳（創価大学・会津坂下町教育委員会 1999）、会津若松市会津大塚山古墳（会津若松市史出版委員会 1964、福島県立博物館 1994）、会津若松市田村山古墳（田村山古墳周溝調査刊行会 1981）である（第 114 図、第 8・9 表）。出土した銅鏡は、馬洗場 B 遺跡の内行花文鏡破鏡（復元径 8.2cm）、田村山古墳の内行花文鏡（径 11.2cm）、内行花文鏡破鏡（復元径 11.2cm）、桜井古墳群上渋佐支群 7 号墳の珠文鏡（径 8.7cm）、森北古墳群 1 号墳の珠文鏡（径 8.4cm）、会津大塚山古墳の三角縁神獣鏡（径約 22cm）、変形四獣鏡（径 9.5cm）、捩文鏡（径 10.2cm）であり、古墳の副葬品としての出土が主体である。破鏡を除いた面径では、古墳出土銅鏡が 8cm 以上であり、入の沢遺跡の SI27 出土珠文鏡がこれに相当する。関東地方では、古墳以外に竪穴建物跡から小型の銅鏡の出土事例が多く認められるが（篠宮・森下編 2010）、東北地方ではこれまで確認されておらず、入の沢遺跡が初の事例である。

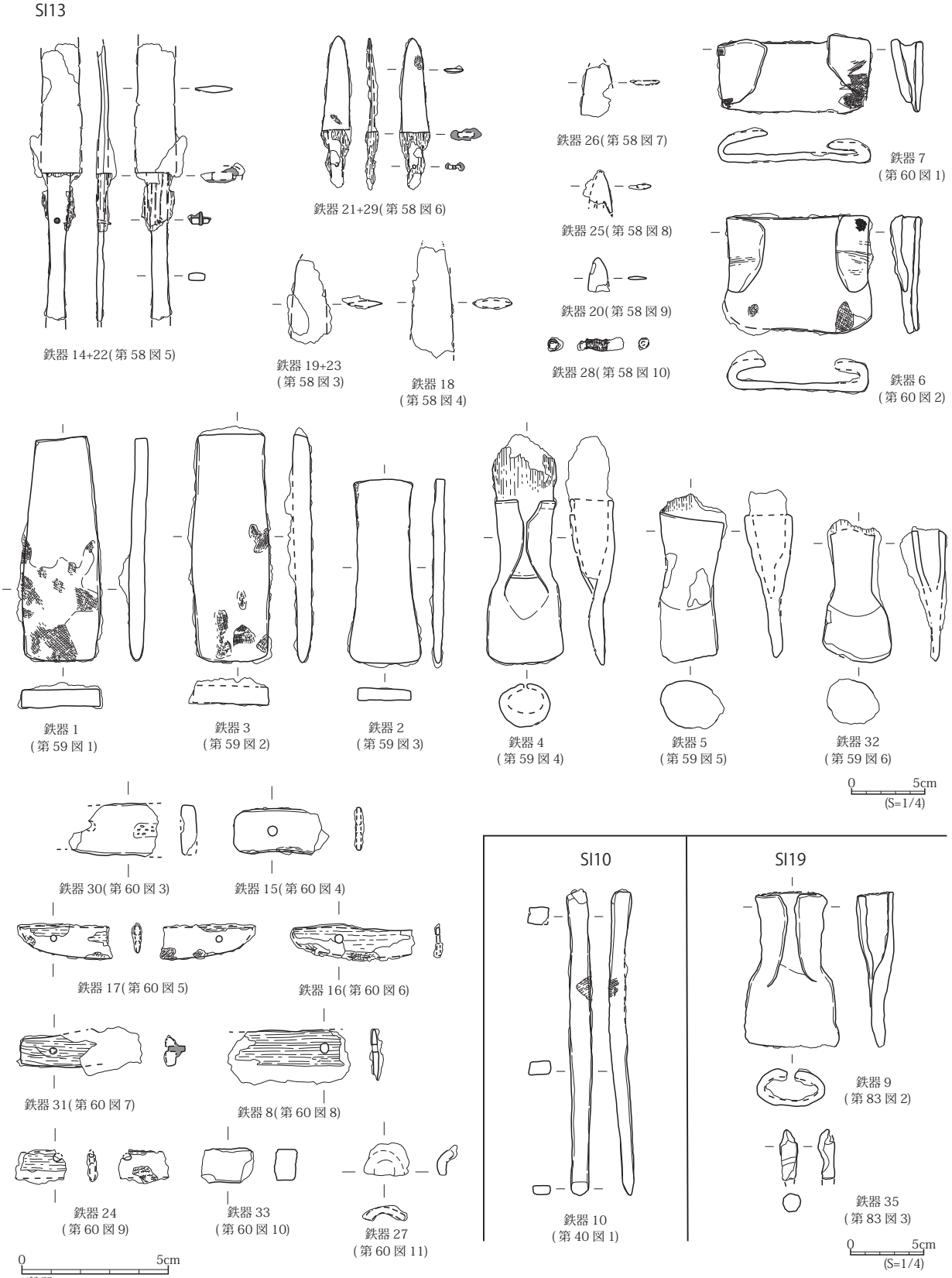
3）鉄製品

剣、鏃、両頭金具、斧、方形板刃先、鑿、刀子または剣、工具等が出土した（第 112 図）。SI19 から有袋鉄斧 1 点と不明鉄製品 1 点、SI10 から鑿 1 点が出土した以外は、全て SI13 からの出土である。出土した鉄製品全点を図示している。

①特徴

【剣】5 点出土した。出土位置は鉄器 18 と 19 ＋ 23 以外はベッド状施設上である。鉄器 14 ＋ 22 は身部上半と茎の下端部が破損している。残存長 18.8cm、身部では残存長 8.8cm、残存幅 2.7cm、残存厚 0.5 ～ 0.7cm、茎部では残存長 10.0cm、残存幅 1.5cm、残存厚 0.4 ～ 0.5cm であり、重量は 43.9g である。推定される全長の中で茎部の割合が高く、長茎短剣と考えられる（池淵 1993、杉山 2016）。身部は、残存部分の中央付近から先端部の方向にかけてわずかに湾曲する。断面は凸レンズ形である。関は直角関で、茎部はそこから下端に向かって緩やかに狭まる。茎部の中央より身部側には目釘孔が 1 個認められ、木製の目釘が残存する。茎部には木質が部分的に残存しており、木製の柄装具が装着されていたと推定される。関周辺の木質は錆に覆われており、そこから柄装具の規模を推定すると、幅 2.8cm、厚さ 1.3cm となる。

鉄器 21 ＋ 29 は身部と茎部上半が残存する。残存長 10.3cm、身部では長さ 6.4cm、幅 1.9cm、厚さ 0.3cm、茎部では残存長 3.9cm、残存幅 0.8cm、残存厚 0.3cm であり、重量は 10.5g である。身部は中央付近から先端部にかけてわずかに湾曲する。断面は凸レンズ形である。関は直角関で、茎部は関から下端に向かって緩やかに狭まる。茎部には目釘孔が 1 個認められる。身部の先端と基部に近い部分に繊維が付着している。茎部には木質が残存しており、木製の柄装具が装着されていたと



第 112 図　入の沢遺跡出土鉄製品

推定される。

鉄器 18・19 ＋ 23・26 は、身部のみの残存である。先端に近く、断面はいずれも凸レンズ形である。

【鏃】可能性のあるものを含めて 2 点出土した。出土位置はベッド状施設上である。鉄器 25 は、破損により鏃身部と片側の関部、一部の茎部のみの残存であるが、長三角形で腸抉をもつ短茎鏃と考えられる。残存長 2.8cm、残存幅 1.5cm、残存厚 0.3cm、重量 1.9g である。断面は凸レンズ形である。鉄器 20 は破損しており全体形が不明だが、鉄器 25 と平面形が類似することや断面形が扁平であることから鏃の可能性がある。残存長 2.3cm、残存幅 1.3cm、残存厚 0.2cm、重量 0.8g である。

【両頭金具】1 点出土した。出土位置はベッド状施設上である。鉄器 28 は、円筒状の金具の中に、両端部に膨らみをもつ棒状の部材を入れて組み合わせた両頭金具である。完形で、両頭の片側端部の錆化が著しく、X 線写真でも明瞭に確認できないが、もう一方の端部の状況から長さ 2.4cm 程度と考えられる。円筒部の径は 0.8cm で、端部はわずかに折り返されている。外面には弓本体と推定される木質が残存しており、その幅は 1.3cm である。両頭は径 0.5cm で、平面形は頂部がやや扁平となる楕円形であり、棒状部分は径 0.2cm と推定される。

【斧】7 点出土した。内訳は、短冊形鉄斧 3 点（鉄器 1 ～ 3）、有袋鉄斧 3 点（鉄器 4・5・9・32）で、SI19 から有袋鉄斧 1 点（鉄器 9）が出土した以外は全て SI13 からの出土である。

鉄器 1・3 は中央付近に最大幅をもつ形状である。鉄器 1 はベッド状施設上から出土した。完形で、長さ 15.2cm、幅 5.3cm、厚さ 1.1cm、刃部幅 4.7cm、重量 384.4g である。基部よりも刃部が厚い。断面形状から、刃部は両刃であるが先端は鋭利ではない。表面と左側面の中央から刃部にかけて繊維が付着しており、繊維製品に包まれていたと考えられる。

鉄器 3 は、SI13 のベッド状施設上に位置する大型壺（第 56 図 R90）の体部破片内面側に接着した状態で出土した。完形で、長さ 15.6cm、幅 5.2cm、厚さ 1.2cm、刃部幅 4.6cm、重量 453.8g である。断面形状から、刃部は両刃で、鉄器 1 よりは先端が鋭利である。表面の中央から刃部にかけて繊維が付着しており、繊維製品に包まれていたと考えられる。

鉄器 2 は Y1 上面から出土した。刃部に最大幅を持つ撥形で、完形である。長さ 12.5cm、幅 4.8cm、厚さ 0.8cm、刃部幅 4.8cm、重量 187.5g である。断面形状から刃部は両刃であるが、先端は鋭利ではない。基部側の両側面には、鉄器 2 の長軸に直交する方向に複数の繊維状の痕跡が認められ、基部にはこれらが巻かれていたと考えられる。

鉄器 1 ～ 3 は、短冊形鉄斧を体系的に分析した古瀬清秀氏の分類によれば小型で（古瀬 1974・1991）、新潟県保内山王山古墳の検討を行った小林高範氏の分類によれば小型 I に該当する（小林 1989）。

鉄器 4 は突出度の小さい肩をもつ鉄斧である。完形で、長さ 11.1cm、袋部の長さ 6.5cm、幅 4.1cm、厚さ 3.0cm、刃部幅 5.2cm、重量 248g である。袋部は横断面が円形で、袋部折り返し合わせ目は密着せず、中央部で 2mm の間隔があり、刃部側と基部側は開く形状となる。厚みが最大となる点と袋部の折り返し部分の刃部側端部の位置が一致しないこと、刃部と袋部の境が明瞭であることから、袋部と刃部が別個に製作され、それらが鍛接されたものと考えられる（金田 1995）。断面形状から、

刃部は片刃の可能性がある。袋部内には木質が残存する。

鉄器 5 はベッド状施設上から出土した。無肩の鉄斧で、刃部の片側側面が破損している。長さ 11.6cm、袋部の長さ約 5.7cm、幅 4.2cm、厚さ 3.2cm、刃部残存幅 3.8cm、重量 164.9g である。袋部は横断面が円形で、袋部折り返し合わせ目は X 線写真でも明瞭に確認できなかった。断面形状から、刃部は片刃の可能性がある。袋部には木質が残存する。

鉄器 32 は東辺南側の周溝堆積土から、刃部を下にして突き刺さるような状態で出土した。突出度の小さい肩をもつ鉄斧である。完形で、長さ 9.1cm、袋部の長さ約 4.0cm、幅 3.1cm、厚さ 2.3cm、刃部幅 4.7cm、重量 92.9g である。袋部は横断面が円形で、袋部折り返し合わせ目は X 線写真でも明瞭に確認できなかった。断面形状から、刃部は両刃と考えられる。袋部には木質が残存する。

鉄器 9 は SI19 の東辺中央から出土した。突出度の小さい肩をもつ鉄斧である。長さ 10.5cm、袋部の幅 4.8cm、厚さ 2.5cm、刃部幅 6.4cm、重量 222.5g である。袋部は横断面が楕円形で、袋部折り返し合わせ目は密着せず、もっとも近接する部分でも 5mm の間隔がある。刃部から袋部にかけて徐々に厚さが減じ、基部では 0.3cm になる。厚さが最大となるのが袋部の折り返し部分の刃部側端部であること、刃部から袋部にかけて厚みが減ることから、1 つの素材から刃部と袋部をつくりだす製作技法であったと考えられる（金田 1995）。

【方形板刃先】鍬か鋤の刃先と考えられるもので、2 点出土した（鉄器 6・7）。SI13 のベッド状施設上に位置する大型壺（第 56 図 R90）の体部破片内面側に接着して出土し、その際 2 点は交差して重なった状態であった（第 60 図、図版 53）。いずれも完形である。鉄器 7 は、長さ 5.3cm、基部幅 10.4cm、刃部幅 9.5cm、厚さ 0.3 ～ 0.7cm、重量 96.1g である。刃部の形状は直線で、角は隅丸である。断面形状から両刃と考えられるが、先端は鋭利ではない。基部は片側が斜めに折り返され、断面形状でも折り返し部分の高さが異なり、平面断面ともに左右で非対称となる。折り返し部分の刃部側端部は、板状部分と接していない。刃部の左右両端と基部には繊維の付着が認められた。刃部には繊維製品、基部の折り返し部分には繊維製品と斜方向の紐状の繊維が付着しており、この内繊維製品は分析の結果、苧麻素材と判明した（附章 3）。

鉄器 6 は、長さ 8.0cm、基部幅 9.7cm、刃部幅 10.2cm、厚さ 0.4 ～ 0.7cm、重量 169.5g である。刃部の形状は直線あるいはやや内湾で、角は隅丸である。断面形状から両刃と考えられるが先端は鋭利ではない。基部は平面、断面ともに対称で、折り返し部の刃部側端部は板状部分と接していない。刃部と基部に繊維の付着が認められ、基部には繊維製品と長軸に並行する紐状の繊維、刃部には繊維製品が付着している。

【鑿】1 点出土した（鉄器 10）。出土位置は SI10 東辺中央の B 期周溝上面である。ほぼ完形で、長さ 20.8cm、幅 1.5cm、厚さ 1.2cm、重量 56.6g である。断面は基部側が方形で、中央から刃部にかけては長方形となる。刃部は片刃である。中央よりやや基部寄りで、長軸に直交、斜向する繊維状の痕跡が認められ、柄に関わるものの可能性がある。

【その他】刀子または剣 1 点、工具 7 点、不明 2 点が出土した。鉄器 30 は刀子または剣の茎部であり、目釘孔が確認できる。表面には白色の有機質の付着が認められ、骨角片と推定されることから、鹿角

製装具の一部である可能性がある。鉄器 8・15 ～ 17・24・31・33 は工具の茎と考えられる。このうち、鉄器 8・15 ～ 17・24・31 では目釘孔が確認でき、鉄器 31 では目釘が残存している。木質が残存するもの（鉄器 8・15 ～ 17・24・31）や、繊維が付着するもの（鉄器 16・17・24）がある。鉄器 27 と鉄器 35 は不明鉄製品で、いずれも破損している。鉄器 27 は丸みを持った形状で、繊維の付着が認められる。鉄器 35 は棒状で、端部が尖る。

②付着繊維と残存する木質から推定される鉄製品の保管方法

剣 2 点、両頭金具 1 点、有袋鉄斧 3 点、工具 6 点には木質が残存しており、柄や弓に装着された状態であったことが分かる。また、剣 1 点、短冊形鉄斧 2 点と方形板刃先 2 点、工具 3 点には繊維が付着しており、このうち剣と工具には木質が残存していることから、柄が装着された状態で繊維に包まれていたと考えられる。また、短冊形鉄斧 1 点と方形板刃先 2 点については、柄は装着されず、大型の壺の中で繊維に包まれて保管されており、方形板刃先については 2 点が交差して重ねられ、紐状の繊維で十字に結わえられて、苧麻を素材とした繊維製品で包まれていたと考えられる。

短冊形鉄斧には鉄器 1・3 と鉄器 2 で形状と法量が異なり、前者が着柄されずに繊維に包まれているのに対して、後者は繊維に包まれず、基部に着柄の可能性がある繊維状の痕跡が認められる。両者は出土位置も異なっており、形状と法量、付着物から推定される保管方法、出土位置に関係が認められる。有袋鉄斧には繊維が認められない一方で、木質が残存する割合が高く、短冊形鉄斧とは異なる特徴である。器種間における繊維や木質の残存状況の相違、剣や斧で確認できる同一器種内での細別形態での相違、さらに短冊形鉄斧で確認できる細別形態内における属性の相違は、それらの使用・保管方法と密接に関わると考えられる。

③東北地方の中での位置づけ

古墳時代前期の東北地方では、確実に遺構に伴うか不明なものを含めても 34 遺跡でしか鉄製品の出土が確認できない（第 114 図、第 8・9 表）。内訳は古墳 16、その他の遺跡 18 で、遺跡数では両者に大きな差は認められないが、出土量や器種の豊富さは古墳から出土した鉄製品が圧倒している。特に、鏃以外の武器や武具、斧は入の沢遺跡 SI13・19 を除いて古墳の副葬品以外では出土していない。前期古墳では、農工具類、特に斧と副葬品との関係の強さが指摘されており（古瀬 1974、内田 2001、村上・山村 2003、福永 2012）、SI13・19 の出土事例は特殊である。SI10 で出土した工具である鑿も集落での出土は認められない。両頭金具は東北地方の古墳を含めた遺跡でも出土例がなく、全国的にみても当該期では新潟県胎内市城の山古墳（水澤 2013a）と長野市大星山三号墳（長野県埋蔵文化財センター 1996）に続く 3 例目という非常に特殊な遺物である。

組成では、SI13 で出土した武器・武具、農工具が共伴するものが、宮城県角田市西屋敷 1 号墳（角田市教育委員会 1992）、山形県南陽市長岡山遺跡 SH53 墓坑（南陽市教育委員会 2013）、米沢市成島古墳群 1 号墳（米沢市教育委員会 2003）、福島県いわき市愛谷遺跡方墳（いわき市教育委員会 1985b）、伊達市高野古墳（遠藤 1999）、郡山市大安場古墳 1 号墳（郡山市教育委員会 1998）、会

津坂下町森北古墳群 1 号墳（創価大学・会津坂下町教育委員会 1999）、会津若松市会津大塚山古墳（会津若松市史出版委員会 1964、福島県立博物館 1994）で認められる（第 114 図、第 8・9 表）。入の沢遺跡 SI13 の方が武器・武具よりも農工具の割合が高い点で、これらの古墳出土鉄製品の組成と相違が認められるが、出土量の点では会津大塚山古墳以外と同等かあるいはそれ以上となり、集落遺跡の出土としては前例がない[註 1)]。

4）玉類・垂飾品

勾玉、管玉、棗玉、丸玉、臼玉、ガラス小玉、石製垂飾品が出土した[註 2)]。これらは管玉 1 点が SI19 から出土した以外は全て SI13 からの出土である。生産地や時期については附章 2 で詳述されているため、ここでは各器種の特徴と、東北地方の中での出土事例の確認を行う。

①特徴

【勾玉】12 点出土し、11 点図示した（第 61 図 3 ～ 13）。図示した 11 点は全て完形で、長さ 39.8mm、幅 24.7mm の大型（3）、長さ 14 ～ 21mm、幅 8 ～ 13mm の中型（4 ～ 10）、長さ 10 ～ 12mm、幅 6 ～ 8mm の小型（11 ～ 13）に分けられる。大型の 3 は黒褐色半透明の琥珀製で、頭部に 2 条の線刻が施される丁字頭であり、線刻は上部に比べ下部の方が短い。全面が滑らかな曲面となり、断面は丸みをもつ。中型は滑石製（4・5・7・9・10）と水晶製（6・8）で、いずれも平面形は縦長の「C」字状である。穿孔方法は 7 のみ片面穿孔で、それ以外は両面穿孔である。小型は翡翠製（11）と滑石製（12・13）である。頭部から尾部まで厚さの変化がない平坦な形状で、平面形はいずれも縦長の「C」字状である。穿孔方法は 6 と 11 が片面穿孔で、それ以外は両面穿孔である。

【管玉】107 点出土し、91 点図示した（第 62・63 図、第 64 図 1 ～ 14、第 83 図 4）。完形のものは 68 点認められ、長さ 12.1 ～ 39.45mm、直径 3.3 ～ 12.1mm、孔径 1.0 ～ 5.0mm である。石材は緑色凝灰岩製（第 62 図、第 63 図 1 ～ 29）、滑石製（第 63 図 30 ～ 42、第 64 図 1 ～ 11）、鉄石英製（第 64 図 12）、碧玉製（第 64 図 13・14）であり、この中で緑色凝灰岩製が 77 点で全体の 72% を占め、次に滑石製が 27 点で 25% となる。碧玉製は 2 点、鉄石英製は 1 点であり、出土量は僅かである。

穿孔方法については、両面穿孔が主体で、片面穿孔の可能性があるもの（第 62 図 29、第 64 図 12）はわずかである。多くは鉄針穿孔と考えられるが、第 64 図 12・14 については孔内に擦痕が観察できることから、石針穿孔の可能性がある。両面穿孔の穿孔形態は、長身な逆台形または三角形を合わせた鼓形状と円筒状があり[註 3)]、この中には 2 度穿孔された痕跡が認められるものもある（第 62 図 5）。

端面には、穿孔部周辺あるいは外縁の稜が摩耗して丸みを帯びるものが多い。また、側面に稜を残すものが 2 点認められる（第 63 図 14、第 64 図 12）。この他に焼失竪穴建物跡出土であることから、ススが付着したもの（第 62 図 1・4・5・10・13・26・34、第 63 図 1・2・21・32・33・36、第 64 図 3・4・6・8・11）、被熱により器面に変化が生じたものが認められる（第 62 図 2）。

【棗玉】4 点出土し、全て図示した（第 61 図 14 ～ 17）。いずれも完形で、長さ 10.3 ～ 15.7mm、直径 7.0 ～ 10.55mm、石材は煙水晶製（14・15）と滑石製（16・17）である。14・15・17 の中

央部には長軸と直交して鈍い稜がめぐる。いずれも両面穿孔である。

【丸玉】4 点出土し、2 点図示した（第 61 図 18･19）。全て琥珀製で、遺存状況が悪く破損している。

【臼玉】17 点出土し、全て図示した（第 61 図 20 ～ 36）。いずれも完形で、直径 4.5 ～ 6.6mm、厚さ 1.4 ～ 3.9mm である。全て滑石製である。

【ガラス小玉】123 点出土した（第 3 表、図版 55・56）。完形のものは 116 点認められる。色調は、紺色透明（図版 55-41 ～ 43、図版 56-60）、濃青色透明（図版 55-44）、淡青色透明（図版 55-45 ～ 95、図版 56-1 ～ 30）、淡青色半透明（図版 56-31 ～ 67）である。この中には、被熱により赤変したものも存在する（図版 56-31）。法量は長軸 2.3 ～ 8.6mm、厚さ 1.8 ～ 6.3mm で、長軸 4.0 ～ 4.5mm、厚さ 2.0 ～ 4.5mm が主体となる。長軸 8.0mm 以上、厚さ 5.0mm 以上のものは紺色透明に限定される。

端面の研磨については、淡青色透明のものはいずれも明瞭であるが、淡青色半透明のものは研磨の痕跡が顕著ではないものが多数を占め、確認できないものも存在する。

【垂飾品】2 点出土し、全て図示した（第 61 図 1・2）。いずれも琴柱形石製品の「本村型」（亀井 1972）とされるもので、同形同大である。完形で、長さ 25.2 ～ 26.4mm、幅 25.3mm、厚さ 3.3 ～ 3.7mm、重量 2.9 ～ 3.0g である。平面形は、両者とも上部が台形状で側面の上部には抉りが施され、下部は背合わせ勾玉状となる。台形部分の上部には径 2.5mm の円孔、中央には縦 7.9 ～ 8.3mm、横 1.9 ～ 3.2mm の隅丸長方形の孔が 2 つ並行して穿たれる。文様については、第 61 図 1 が表裏ともに隅丸長方形の孔の上に綾杉線刻文、下にＶ字状の線刻とその内側に 2 ～ 3 条の平行線刻文、第 61 図 2 が表裏ともに隅丸長方形の孔の上に 3 ～ 4 条の平行線刻文、下にＶ字状の線刻とその内側に 2 ～ 3 条の平行線刻文である。

②東北地方における出土事例

東北地方の古墳時代前期の遺跡で玉類が出土したのは、確実に遺構に伴うか不明なものを含めて 26 遺跡であり、内訳は古墳 11、その他の遺跡 16 である[註 4)]（第 114 図、第 8・9 表）。出土量は、遺跡の種類を問わず総点数 10 点以下が主体で、40 点以上が宮城県加美町大塚森古墳（辻 2008）、角田市西屋敷 1 号墳（角田市教育委員会 1992）、100 点以上が会津若松市会津大塚山古墳（会津若松市史出版委員会 1964、福島県立博物館 1994）である。組成では、管玉やガラス玉、両者で構成されるものが 5 割以上を占め最も多い。入の沢遺跡 SI13 のように 3 種類以上の器種で構成されるのは西屋敷 1 号墳と会津大塚山古墳のみである。なお、入の沢遺跡 SI13 出土玉類の総点数は 269 点であり、東北地方でも最も多い出土となるが、各器種の割合では、ガラス玉が 123 点と最も多く、次に管玉 107 点となり、器種の割合としては全体の傾向と一致する。

垂飾品は、東北地方では山形県河北町下槇遺跡（山形県教育委員会 1981b）で類例が認められる。竪穴建物跡からの出土や、1 遺跡で 2 点出土する点が入の沢遺跡の事例と共通する。

5）土製品

土製支脚と土玉である。土製支脚は 2 号塚の盛土から 1 点出土した（第 89 図 4）。上部と底部が

破損している。幅、厚さともに 10.8cm、残存高 8.8cm である。底部は平坦で、正面の中央に長さ 5cm、幅 1.8cm の縦方向の凸部が作り出されている。調整はナデと凸部はオサエである。宮城県内では、佐沼城跡（迫町教育委員会 1995）、鶴館遺跡（大郷町教育委員会 2011）、山前遺跡（青山 1999）、山王遺跡（宮城県教育委員会 1998）、野田山遺跡（宮城県教育委員会 1992）、宮前遺跡（宮城県教育委員会 1983c）、中筋遺跡（山元町教育委員会 2015）等で出土事例が認められる。

土玉は 6 点出土した。内訳は SI63 から 5 点（第 22 図 6 ～ 10）、SI26 の遺構確認面から 1 点（第 89 図 5）である。径 2.7 ～ 3.8cm で主体は 3cm 前後、孔径は 0.6 ～ 1.3cm で主体は 0.6 ～ 0.9cm である。

6）石製品・石器

石製品は砥石、石器は磨＋敲石、磨石、台石である。

①特徴

【砥石】12 点出土した（第 113 図）。石材は砂岩、頁岩、凝灰岩で、大きさは 100g 未満の小型のものから 6kg を超える大型のものまである。形状は直方体のものが多い。

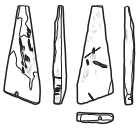
100g 未満のものは R69・115・173 である。いずれも細粒の石材で石質も緻密である。R69 は頁岩製で、破損しており形状は不明である。表面と側面が砥面として利用されているが、主体は表面である。R115 は凝灰岩製で、破損しているが、平面は三角形である。表面と両側面、下面が砥面として利用されている。左側面で断面三角形の浅い溝状の削痕が認められる。R173 は頁岩製で、破損しており形状は不明である。表面と側面が砥面として利用されている。

100g 以上 1.0kg 未満のものは R8・116 ～ 118・127・321 である。R8 は砂岩製で破損している。形状は板状で、表裏面と側面が砥面として利用されている。少量ではあるが、側面を中心に断面三角形の浅い溝状の削痕が認められる。R116 ～ 118 は頁岩製で緻密な石質である。いずれも破損している。同一個体の可能性があるが接合は確認できない。R116 は側面が砥面として利用され、本来的な形状は直方体状であった可能性がある。R127 と R321 は細粒の凝灰岩製で石質は緻密である。R127 は破損しているが、形状は直方体と推定される。表裏面と両側面、上面が砥面として利用されている。R321 は直方体状と推定される。破損後に、破損した面も利用され、その結果、砥面は表裏面と両側面、下面の 5 面である。表面には断面三角形の深い溝状の削痕が認められる。

1.0kg 以上のものは R7・45・6・59 である。R7 は頁岩製で破損している。形状は直方体で、6 面がすべて砥面として利用されており、その中でも、表面と両側面、上面の利用頻度が高い。両側面と上面で断面三角形の浅い溝状の削痕が多く認められ、右側面では深い溝状の削痕もわずかに認められる。R45 は砂岩製でほぼ完形である。形状は直方体で、使用痕と出土状況から小口面を表面としていたと考えられる。表面と両側面が砥面として利用され、表面には断面三角形の深い溝状の削痕が認められる。SI10 の炉跡傍で、炉から生じた焼土層上面より出土していることから機能面に据えられていたと推定される。R6 は砂岩製で破損している。形状は円盤状で、表裏面と両側面が砥面として利用されている。表裏面とも中央部がくぼむ。R59 は砂岩製で完形である。形状は直方体で、上端

砥石
100g 未満

R69
(SI10: 第 40 図 3)



R115
(SI13: 第 65 図 1)

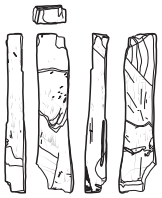
R173
(SI19: 第 83 図 5)

100g 以上 1.0Kg 未満

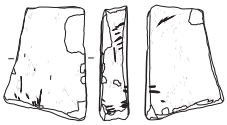
R117
(SI13: 第 64 図 16)

R118
(SI13: 第 64 図 15)

R116
(SI13: 第 64 図 17)



R127(SI17: 第 75 図 3)

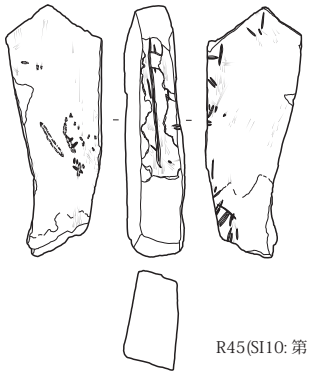


R8
(SI8: 第 25 図 5)

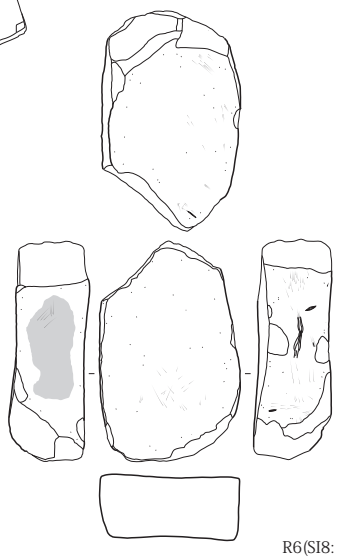
R321(SI17: 第 75 図 4)

1.0Kg 以上

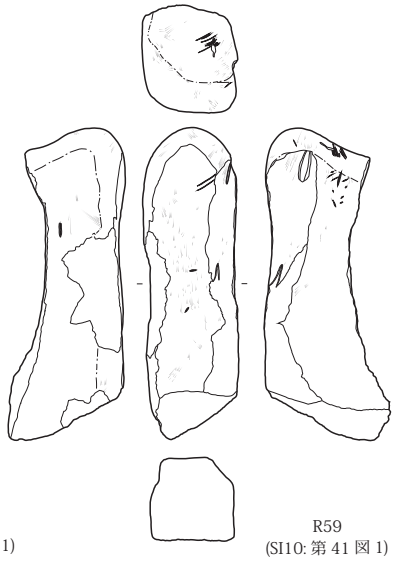
R7(SI8: 第 25 図 4)



R45(SI10: 第 40 図 2)



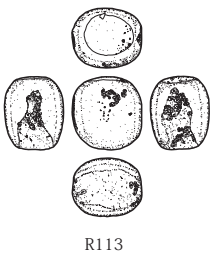
R6(SI8: 第 26 図 1)



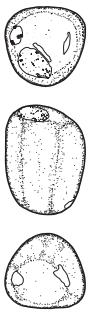
R59
(SI10: 第 41 図 1)

磨＋敲石　A 類

R9
(SI8: 第 25 図 6)



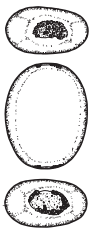
R113
(SI13: 第 65 図 3)



R114
(SI13: 第 64 図 18)

B 類

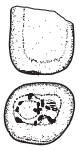
R187
(SI21: 第 87 図 3)



R307
(SI64: 第 88 図 5)

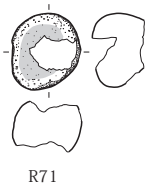
R14
(SI9: 第 28 図 2)

不明

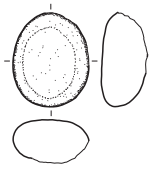


R112
(SI13: 第 65 図 2)

磨石

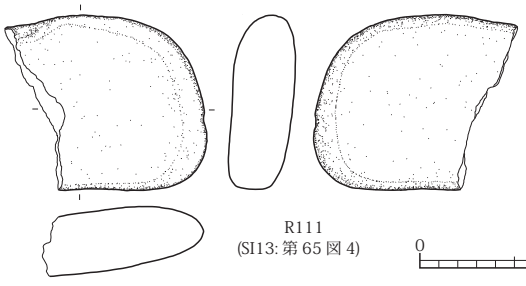


R71
(SI10: 第 40 図 4)



R135
(SI17: 第 75 図 2)

台石



R111
(SI13: 第 65 図 4)

0　20cm
(S=1/8)

第 113 図　入の沢遺跡出土石製品・石器

部は丸みを持つ。表面と両側面、上面が砥面として利用されている。表面は中央よりやや上側がくぼむ。上面で断面三角形の浅い溝状の削痕が認められる。

【磨＋敲石】円礫を素材とし、磨面と敲打痕が認められるものを磨＋敲石として分類した（第 113 図）。7 点出土し、石材は砂岩、頁岩である。上下の端部の特徴によって分類を行った。

A 類：端部が平滑な磨面になるもの

B 類：端部が平滑な磨面になり、相対する端部には浅い敲打痕があるもの

A 類は 3 点（R9・113・114）あり、R113 には両側面に細かい敲打痕が帯状に認められる。B 類は 3 点（R14・187・307）あり、敲打痕がある端部も明瞭な面となっている。この他に、破損により分類不明のものが 1 点（R112）ある。長さ 10cm 前後の楕円形で、重量は 500 ～ 800g が主体であり、A・B 類に大きさの差異は認められない。いずれも付着物は確認できなかった。

【磨石】円礫を素材とし、磨面が認められるものである（第 113 図）。2 点出土した（R71・135）。どちらも安山岩製で、R71 は被熱している。

【台石】扁平な円礫を素材とし、大型のものである（第 113 図）。1 点出土した（R111）。安山岩製で形状は円盤状である。

②砥石と磨＋敲石について

特徴的な石器である砥石と磨＋敲石について検討を行う。

【砥石】大きさと石材との関係では、破損しているものが多いが、大よそ 1.0kg 未満で頁岩製や凝灰岩製といった細粒で緻密な石質のものが高い割合を占める。一方、1.0kg 以上では砂岩製が多く、両者には一定の関係が認められる。また、特徴的な痕跡である断面三角形の溝状の削痕については、1.0kg 以上の大型の砥石で認められる割合が高い。

溝状の削痕については、鋭利な対象物により形成されたものと想定される。入の沢遺跡では鉄製品が多く出土していることから、これらの削痕は鉄製品に関係し、大型の砥石の多くはその補修に利用されていたと考えられる。一方、溝状の削痕が認められないものには、小型で良質の石材が多く、大型の砥石とは異なる利用方法が想定される。

【磨＋敲石】礫石器は、縄文時代の遺跡に一般的に出土する遺物である。今回入の沢遺跡で一定量出土したことから、古墳時代前期においても確実に伴うことが明らかとなった。特に、7 点出土した磨＋敲石には、特徴的な属性が認められた。それは、縄文時代の同種の石器と比べて敲打痕が浅いこと、端部が平滑な磨面になることである。これらから、磨＋敲石については、端部を敲打と磨る方法で用いていたことが推定される。対象物は不明だが、石器の遺存状況が完形のものが多く、敲打痕や磨面の特徴から相対的に軟質のものを対象にしていたと考えられる。

古墳時代の礫石器についてはこれまで注目されてこなかったが、石は量が豊富で入手が容易な素材であり、当時も一般的に利用されていた可能性があることから、今後は検出に努め、積極的に評価していく必要がある。

7）繊維

銅鏡と鉄製品に付着した状態で出土した。いずれもSI13から出土したもので、このうち、銅鏡2面と方形板刃先1点に付着した繊維については分析が行われ、多くの情報が得られている（附章3）。

東北地方の古墳時代前期の遺跡で、繊維あるいは繊維製品が出土したのは7遺跡認められ、いずれも古墳の主体部から出土している（第114図、第8・9表）。福島県南相馬市桜井古墳群上渋佐支群7号墳（原町市教育委員会2001）と会津坂下町森北古墳群1号墳（創価大学・会津坂下町教育委員会1999）では銅鏡に、福島県浪江町本屋敷古墳群1号墳（法政大学1985）、郡山市大安場古墳1号墳（郡山市教育委員会1998）、山形県米沢市成島古墳群1号墳（米沢市教育委員会2003）では鉄製品に、福島県会津若松市会津大塚山古墳（会津若松市史出版委員会1964、福島県立博物館1994）では銅鏡や鉄製品に付着した状態で検出された。また、宮城県加美町大塚森古墳（辻2008）では漆塗り布製品、会津大塚山古墳では靭が出土している。

分析により素材が推定されたのは森北古墳群1号墳のみで、被子植物の双子葉植物を素材としたものとされ、麻類と考えられている（創価大学・会津坂下町教育委員会1999）。

8）赤色顔料

水銀朱とベンガラである。銅鏡4面の鏡背面に付着したものの他に、SI13竪穴建物跡の南辺中央よりやや東側のベッド状施設上で、水銀朱が1ヶ所、ベンガラが3ヶ所から出土した。出土層は火災由来層である。両者とも脆弱であったことから土ごと取り上げた。水銀朱の産地推定については附章4で分析結果が掲載されており、三重県の丹生鉱山産とのことである。

水銀朱は取り上げの際に崩れており、規模は推定値となる。長軸4.0cm、短軸3.5cm、厚さ1.0cm程度の円盤状で、鮮やかな朱色であり、粉末状のものの集積である（図版56-70中央）。

ベンガラは水銀朱の両側で5cm程度離れた位置から出土した（図版56-70左右）。どちらも長軸、短軸ともに5cm、厚さ1.5～2.0cmであり、水銀朱と同様円盤状である。この付近から出土したもう1ヶ所のベンガラは、長軸、短軸ともに4cmで、周囲の土を除去していないため詳細な形状は不明であるが、平面は円形状とみられる（図版56-71）。ベンガラについても全て粉末状の集積である。ベンガラは同一種類にも関わらず3ヶ所に分かれて出土している。これについては、使用量や使用機会ごとの保管、保管の大きさの単位等、使用方法と保管形態や方法に関わると考えられる。

水銀朱とベンガラには土や炭化物の混入は認められず、わずかに離れて分布していた。鉱物ではなく粉末状の状態であることから、本来的には何らかの入れ物の中で保管されていたと推定される。土器や容器と考えられる炭化材等は検出されなかったことから、木製あるいは布等の有機質の素材の入れ物が利用され、それは火災の影響を大きく受けずに腐朽したことが推定される。なお、出土した石製品に赤色顔料の付着は認められず、今回の調査結果からは、遺跡内での水銀朱やベンガラの精製作業が行われた痕跡は確認できない。

東北地方の古墳時代前期の遺跡で水銀朱が出土したのは、宮城県加美町大塚森古墳（辻2008）、仙台市遠見塚古墳東槨（仙台市教育委員会1983a）、福島県南相馬市桜井古墳群上渋佐支群7号墳（原

町市教育委員会 2001)、郡山市大安場古墳群 1 号墳（郡山市教育委員会 1998)、会津坂下町森北古墳群 1 号墳（創価大学・会津坂下町教育委員会 1999）の 5 例で（第 114 図、第 8・9 表)、いずれも主体部からの検出である。

9）動物遺存体

焼骨である。SI13 竪穴建物跡の南辺東側のベッド状施設上で、火災由来層である 10 ～ 13 層から出土した。一定の大きさと形状を維持していたものが 2 点確認され、これらは横位で並行した状態で出土している。これ以外には、回収した土壌の水洗篩により検出された骨片がある。いずれも SI13 が焼失した際に受けたと考えられる熱により白色化している[註 5)]。

取り上げた 2 点については、やや扁平で緩やかに湾曲した形状であり、長さ 5.6 ～ 6.1cm、幅 1.1 ～ 1.2cm である。形態的には肋骨の可能性がある。これらの同定作業の結果は附章 5 で詳しく説明されており、ヒトの四肢骨の可能性が高く、皮膚や筋といった軟部組織が残存した状態で被熱したとのことである。

10）植物遺存体

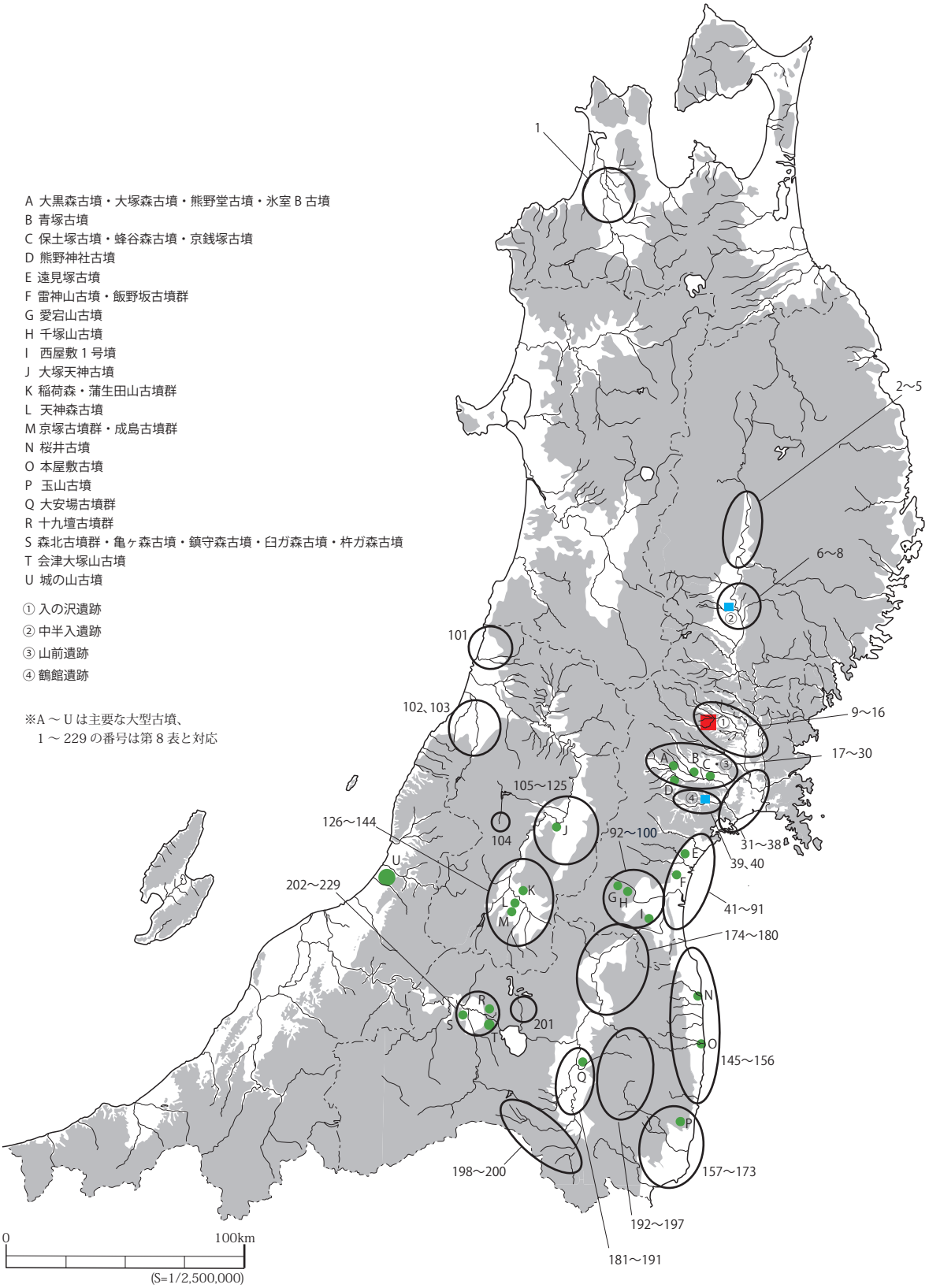
コメ、モモ核が出土した。これらは被熱により全て炭化しており、黒色化している。回収した土壌の水洗篩により検出した。コメが出土したのは SI10・13・17・19 竪穴建物跡であるが、ほとんどは SI13 からの出土であるため（第 7 表)、SI13 出土のものについてのみ記述する[註6)]。

第 7 表　植物遺存体集計一覧

遺構	小グリッド	層	炭化米（コメ）			モモ核	
			点数	重量（g）	容量（ml）	点数	重量（g）
SI13	a-1	8・9 層	1		0.1 以下		
	a-2（2・3 含む）	8・9 層	6	0.01	0.1 以下		
	a-3	8・9 層	288	2.27	5.9		
	a-4	8・9 層	2	0.01 以下	0.1 以下		
	b-1	8・9 層	15	0.09	0.1 以下		
	b-3	8・9 層	26	0.19	0.3		
	b-4	8・9 層	2	0.01	0.1 以下		
	c-1	8 ～ 13 層	4	0.02	0.1 以下		
	c-2	8・9 層	846	8.16	24.5		
	c-3	8 ～ 13 層	38	0.32	0.5	1	1.01 g
	c-4	8・9 層	11	0.11	0.1 以下		
	d-2	8 ～ 13 層	957	8.18	23.5		
	d-3	8 ～ 13 層	6894	48.82	135.9		
	d-4	8・9 層	52	1.15	0.5		
計			9142	69.33	191.1	1	1.01
SI10		K1 2 層	1	0.01 以下	0.1 以下		
SI17		床	1	0.01 以下	0.1 以下		
SI19		3 層	2	0.01 以下	0.1 以下		

コメは、全て脱穀された玄米の状態であった。点数は 9,142 点、重量は 69.33g、容量は 191.1ml である[註7)]。最も多く出土した小グリッド d-3（第 49 図）の任意に抽出した 100 点の計測値の平均は、長さ 4.3mm、幅 2.7mm、厚さ 2.0mm である。長幅比は 1.4 ～ 1.8 の範囲で、上條信彦氏・田中克典氏（田中ほか 2015）の粒型分類基準によると短短粒から中短粒を主体とする。

古墳時代前期のコメについては、岩手県奥州市高山遺跡（高山遺跡調査委員会・水沢市教育委員会 1978)、宮城県大崎市留沼遺跡（宮城県教育委員会 1980c）で炭化米として出土している。高山遺跡では、100 点分析され（田中ほか 2015)、計測値の平均は、長さ 4.7mm、幅 2.9mm である。長幅比は 1.4 ～ 1.8 の範囲で、粒型は短短粒から中短粒を主体とする。89 点には種皮や籾が付着した状態であった。留沼遺跡では、第 1 号住居跡床面から 807 点の炭化米が出土している（佐藤 1982)。計測値の平均は、長さ 4.15mm、幅 2.42mm、厚さ 1.76mm である。長幅比は 1.4 ～ 2.0 が主体で、粒形は短短粒から長短粒である。コメの特徴から籾の状態で焼けたと推定され、穂付の状



第 114 図　東北地方の古墳時代前期の遺跡

第８－１表　東北地方の古墳時代前期遺跡の内容（１）

※報告書を基に集成

No.	県	遺跡	市町村	立地	遺構								遺物								文献
					古墳	方形周溝	円形周溝	SB	SI	SK	SD	その他	土器	銅鏡	鉄製品	玉類	石器	石製品	土製品	木製品	その他	
1	青森	隠川(11)遺跡	五所川原市	段丘								遺構外	○				○				縄文土器	青森県1999
2	岩手	耳取遺跡	滝沢市	台地								遺構外	○									滝沢村1986
3		仏沢Ⅲ遺跡	滝沢市	台地								遺構外	○									滝沢村センター2008
4		永福寺山遺跡	盛岡市	丘陵								土坑墓、表採	○		○	○						盛岡市1997
5		安倍館遺跡	盛岡市	台地						1			○								弥生、縄文土器	盛岡市1999
6		高山遺跡	奥州市	低位段丘					1				○					○				高山遺跡・水沢市1978
7		中半入遺跡	奥州市	段丘					6				○			○	○		○		琥珀小塊	岩手県埋文2002
8		西大畑遺跡	奥州市	段丘								溝、表採	○									県1981
9	宮城	伊治城跡	栗原市	河岸段丘	2(方)	3	12		1		6		○					○	○		縄文土器(北大式)	築館町1990～1995・1998、栗原市2009・2011
10		入の沢遺跡	栗原市	丘陵					12以上				○	○	○	○	○	○	○		繊維、朱、焼骨	本書
11		宇南遺跡	栗原市	台地		1			4				○									県1979・1980e
12		鶴ノ丸遺跡	栗原市	丘陵		3	5		4				○					○				県1981b
13		東館遺跡	栗原市	丘陵		1							○									県1980c
14		大境山遺跡	栗原市	丘陵					11				○				(○)	○	○			瀬峰町1983
15		佐沼城跡	登米市	丘陵				1	5	2	1	材木塀跡	○			○	○	○	○			迫町1995
16		大泉遺跡	登米市	沖積平野							1		○								縄文土器	県1993
17		大塚森古墳	加美町	台地	1(円)								○			○					矢柄、朱、漆塗り布製品(靱)	辻2008
18		地蔵車遺跡	加美町	自然堤防							○	水田、小溝状遺構群、土器集中	○									加美町2005・2011
19		元宿遺跡	加美町	自然堤防					4				○									中新田町2002
20		原江遺跡	加美町	自然堤防					8				○									中新田町2002
21		色麻古墳群	色麻町	沖積平野					3				○				○					県1983b
22		留沼遺跡	大崎市	自然堤防、沖積平野					2	○	○	竪穴遺構、道路、堤防、水田、土器集中	○								梯子上の炭化木製品、炭化米	県1980c、古川市1995・1999
23		堤根遺跡	大崎市	沖積平野									○									古川市2002
24		新田柵跡	大崎市	丘陵	1(円)								○									田尻町2001
25		野崎遺跡	大崎市	河岸段丘					2	1			○									大崎市2008
26		神明遺跡	大崎市	自然堤防					6	1			○									大崎市2011
27		矢根八幡遺跡	大崎市	自然堤防					2	1		焼面、包含層	○									大崎市2015
28		山前遺跡	美里町	河岸段丘					25		○		○				○			○	竹製品	小牛田町1976
29		成田遺跡	美里町	自然堤防		1				○	4	湿地	○									美里町2008
30		館ノ山遺跡	美里町	台地					1				○									美里町2010
31		新田東遺跡	石巻市	丘陵					1				○					○				県2003a
32		田道町遺跡	石巻市	微高地					10	3			○									石巻市1992・1993
33		新山崎遺跡	石巻市	浜堤		3				5	8	井戸、竪穴状遺構、土器集中地点	○					○	(○)	○		石巻市2000
34		新金沼遺跡	石巻市	浜堤					39	2			○			○	○	○	○		縄文土器	石巻市2003
35		梨木畑貝塚	石巻市	丘陵								土器集中、墓	○						○		人骨	石巻市2004
36		須江糠塚遺跡	石巻市	丘陵					7				○		(○)		○	○	○			河南町1987
37		関ノ入遺跡	石巻市	丘陵					2				○									河南町1993・2004
38		里浜貝塚	東松島市	丘陵							1		○									東松島市2008
39		鶴館遺跡	大郷町	丘陵					5	2	1	土塁、遺物包含層	○									大郷町1994・2011
40		下草古城跡	大和町	自然堤防								土器集中	○									県1994a・1996
41		山王遺跡	多賀城市	沖積低地					5	2	6	水田、小溝状遺構群、河川	○					○		○		県1995・1998、多賀城市1997・2006・2010
42		市川橋遺跡	多賀城市	沖積低地						1	1	河川	○									県2000
43		遠見塚古墳	仙台市	自然堤防	1(前方後円)								○			○					櫛	仙台市1976・1977・1979～1981・1983
44		南小泉遺跡	仙台市	自然堤防					3			河川	○									仙台市1991b・1998・2012
45		今泉城跡	仙台市	自然堤防						4			○						○			仙台市1980b
46		今泉遺跡	仙台市	自然堤防						1			○						○			仙台市1994a
47		藤田新田遺跡	仙台市	浜堤		2			5	8	3		○					○				県1994b
48		押口遺跡	仙台市	自然堤防								SX1、河川	○				○			○		仙台市1996
49		中在家南遺跡	仙台市	自然堤防		3						畑、河川	○				○	○	○	○		仙台市1996
50		高田A遺跡	仙台市	自然堤防							2		○									仙台市2002b
51		荒井畑中東遺跡	仙台市	自然堤防						2			○					○				仙台市2011
52		鴻ノ巣遺跡	仙台市	自然堤防						2		SX1	○									仙台市1982
53		燕沢遺跡	仙台市	段丘					4				○									仙台市1984a
54		沼向遺跡	仙台市	浜堤	10(円7、方3)	7			54	1		SX1506・3613	○			○	○	○	○			仙台市2000・2010ac
55		安久東遺跡	仙台市	自然堤防		1							○									県1980g
56		中田畑中遺跡	仙台市	自然堤防					1			SX2	○					○				仙台市1983b
57		戸ノ内遺跡	仙台市	自然堤防		1			4				○		(○)			(○)				仙台市1984b
58		六反田遺跡	仙台市	自然堤防					1				○					○				仙台市1987a
59		富沢遺跡	仙台市	後輩湿地								水田	○							○		仙台い1991a・2004b
60		土手内遺跡	仙台市	丘陵					2				○						○			仙台市1992
61		昭和北遺跡	仙台市	自然堤防					2				○					(○)				仙台市1994b
62		伊古田遺跡	仙台市	自然堤防					2	1			○					○				仙台市1995a
63		四郎丸館跡	仙台市	自然堤防		4					1		○									仙台市1995b・1997・2009b
64		後河原遺跡	仙台市	自然堤防								水田	○									仙台市1999
65		原遺跡	仙台市	段丘	2(方)								○						(○)			仙台市2002a
66		元袋遺跡	仙台市	自然堤防						1			○									仙台市2004a
67		大野田古墳群	仙台市	自然堤防					7				○					○				仙台市1990a・2005・2009a・2010b
68		下ノ内遺跡	仙台市	自然堤防					2				○									仙台市1990a・2013b
69		大野田遺跡	仙台市	自然堤防					3				○									仙台市2014
70		大野田官衙遺跡	仙台市	自然堤防					2				○									仙台市2011・2015b
71		西台畑遺跡	仙台市	自然堤防					9	2		ピット、SX2	○									仙台市2013a・2015a
72		西野田遺跡	名取市	丘陵			2		4				○				○					県1974
73		宇賀崎1号墳	名取市	自然堤防	1(方)								○		○						琥珀玉	県1980d
74		清水遺跡	名取市	自然堤防					2			包含層	○									県1981a

第８－２表　東北地方の古墳時代前期遺跡の内容（２）

No.	県	遺跡	市町村	立地	遺構								遺物								文献
					古墳	方形周溝	円形周溝	SB	SI	SK	SD	その他	土器	銅鏡	鉄製品	玉類	石器	石製品	土製品	木製品	その他	
75	宮城	今熊野遺跡	名取市	丘陵		11			2				○									県1985
76		野田山遺跡	名取市	丘陵					20				○		○		○	○	○			県1992　名取市2002
77		山の神遺跡	名取市	自然堤防					3				○									県1993a
78		宮下遺跡	名取市	丘陵					8				○									名取市1975
79		雷神山古墳	名取市	丘陵	1(前方後円)								○									名取市1978
80		十三塚遺跡	名取市	丘陵					4				○						○		石釧	名取市1979・2004
81		愛島東部丘陵遺跡	名取市	丘陵		○	○						○			○						名取市1987
82		鶴巻前遺跡	名取市	自然堤防									○									名取市1994
83		原遺跡	名取市	自然堤防			1		2				○									名取市1999a
84		下余田遺跡	名取市	自然堤防					1				○									名取市1999b
85		町裏遺跡	名取市	浜堤					2	3		小溝状遺構群	○									名取市2012
86		下増田飯塚古墳群	名取市	浜堤		5			10				○									名取市2012
87		北原遺跡	岩沼市	丘陵					36				○									県1993b
88		宮前遺跡	亘理町	丘陵					26			焼土遺構	○					○				県1983c
89		堀の内遺跡	亘理町	海岸段丘					4	3		包含層	○									亘理町1997・2002
90		北経塚遺跡	山元町	丘陵		3			2				○									山元町2010・2013
91		的場遺跡	山元町	段丘					2		1		○									山元町2014
92		大橋遺跡	蔵王町	丘陵					2			埋甕	○		○							県1980f
93		堀の内遺跡	蔵王町	丘陵					2				○		○							蔵王町1997
94		六角遺跡	蔵王町	丘陵					9				○									蔵王町2008・2014
95		原遺跡	蔵王町	丘陵					1				○									蔵王町2014
96		愛宕山遺跡	蔵王町	丘陵					1				○									蔵王町2015
97		梅田遺跡	白石市	微高地					1				○		○							白石市1984
98		西屋敷1号墳	角田市	丘陵	1(円)										○	○						角田市1992
99		大坊遺跡	角田市	自然堤防					1				○									角田市2003
100		薬師堂遺跡	角田市	自然堤防					2				○									角田市2005
101	山形	関B遺跡	酒田市	沖積地								排水路	○									県1983
102		畑田遺跡	鶴岡市	自然堤防					6	7	4	SX107・110・156、河川	○					○				県センター1995a
103		玉作2遺跡	鶴岡市	沖積地						3		SP8、ピット、SX96	○			○						県センター2009・2011
104		E-1号墳	西川町		○										○							米沢市2003
105		高瀬山遺跡	寒河江市	河岸段丘			2		11	1			○				○					寒河江市1998、県センター2005・2012a
106		熊野台遺跡	河北町	舌状地					5	3			○									県1980
107		下槇遺跡	河北町	微高地					7				○								本村型琴柱形石製品	県1981b
108		菖蒲江1遺跡	天童市	扇状地					12	2		SX18、河川	○					○			骨片	県センター2002a
109		蔵増押切遺跡	天童市	微高地					12		1	河川	○									県センター2003
110		板橋2遺跡	天童市	扇状地					15	2			○					○	○		石釧	県センター2004d
111		高擶南遺跡	天童市	扇状地					23	12	4	SX273、河川	○			○		○	○	○	荒割りされた流紋岩、管玉未製品	県センター2004e
112		寺裏遺跡	山形市	微高地								包含層	○									県1976
113		山形西高敷地内遺跡	山形市	扇状地					4	1			○									県1979
114		坊屋敷遺跡	山形市	微高地					4				○									県1981a
115		今塚遺跡	山形市	自然堤防					30	2		SX141・143・65・165、小溝状遺構群、河川	○					○				県センター1994a
116		長表遺跡	山形市	自然堤防		1		2	22				○			○		○				県センター2001a
117		志戸田遺跡	山形市	微高地		1				2		河川	○						○			県センター2001b
118		山形元屋敷遺跡	山形市	低地								河川	○									県センター2002b
119		服部・藤治屋敷遺跡	山形市	自然堤防								河川	○							○		県センター2004a
120		荻原遺跡	山形市	微高地					8			SX14	○						○			県センター2004b
121		馬洗場B遺跡	山形市	自然堤防					19			木組遺構、河川	○	○			○			○	四方転び箱	県センター2004c
122		梅野木前1遺跡	山形市	自然堤防				1	16	1	1	SX243・244・345、小溝状遺構群、水田、河川	○					○	○	○		県センター2007a
123		川前2遺跡	山形市	自然堤防					13	5		遺物集中	○					○				県センター2012c
124		一ノ坪遺跡	山形市	自然堤防					3				○					(○)				山形市2001
125		双葉町遺跡	山形市	自然堤防					4				○									山形市2005
126		岡ノ台遺跡	白鷹町	河岸段丘					1		1？		○									県センター1994b
127		黒藤館跡	白鷹町	河岸段丘		3							○									県センター1994c
128		廻り屋遺跡	白鷹町	河岸段丘					12			河川	○					○				県センター1995b
129		諏訪前遺跡	南陽市	自然堤防		1						SX4	○									県1986
130		庚壇遺跡	南陽市	自然堤防				1				包含層	○			○						県センター2007b
131		百刈田遺跡	南陽市	自然堤防								河川	○									県センター2010
132		稲荷森古墳	南陽市	丘陵	1(前方後円)								○									南陽市1989
133		蒲生田山古墳群	南陽市	丘陵	2(前方後方)								○		○							南陽市2012
134		長岡山遺跡	南陽市	丘陵		4					2	SH53(墓坑)、遺構外	○		○							南陽市2013
135		清水上遺跡	南陽市	自然堤防		2							○									南陽市2015
136		明神崎遺跡	高畠町	丘陵						1		SX204・205	○									県1990
137		鎌倉上遺跡	米沢市	後背湿地				3	6			SX19・50、小溝状遺構群	○			○						県センター2012b
138		八幡原No.4(柿の木)	米沢市	扇状地					1				○									米沢市1982
139		大清水遺跡	米沢市	扇状地		1		1	6	7			○									米沢市1986
140		此丘尼平遺跡	米沢市	河岸段丘		3			1				○									米沢市1988
141		横山古墳	米沢市	丘陵	1(方)							墓坑1	○			○						米沢市2000
142		成島古墳群	米沢市	丘陵	1(前方後円)										○	○			○		靫1、布、漆塗り遺物	米沢市2003
143		京塚古墳群	米沢市	丘陵	2(前方後円、円)																	米沢市2004a
144		大西遺跡	米沢市	自然堤防		2	2						○		○	○						米沢市2004b
145		三貫地遺跡	新地町	丘陵					3		1		○						○			新地町1978
146		山田B遺跡	相馬市	丘陵					1				○				○					県1997b
147		飯崎館跡1号墳	南相馬市	河岸段丘	1(円)								○									南相馬市2010
148		桜井高見町Ａ遺跡	南相馬市	河岸段丘	1(円)				2				○									東北学院大・原町市1996
149		相馬胤中居館跡	南相馬市	沖積地					1	1			○									原町市1997
150		高見町A遺跡	南相馬市	河岸段丘					7				○									原町市2000
151		桜井古墳群上渋佐支群7号墳	南相馬市	河岸段丘	1(方)								○	○	○						布	原町市2001

第８－３表　東北地方の古墳時代前期遺跡の内容（３）

No.	県	遺跡	市町村	立地	遺構								遺物									文献
					古墳	方形周溝	円形周溝	SB	SI	SK	SD	その他	土器	銅鏡	鉄製品	玉類	石器	石製品	土製品	木製品	その他	
152		荒井前遺跡	南相馬市	沖積低地	2(方)				1	1			○					○	○			原町市2002
153		東広畑遺跡	南相馬市	段丘					1				○									小高町2002
154		本屋敷古墳群	浪江町	河岸段丘	3(前方後方1､方2)				3				○		○	○			○		布､櫛	法政大学1985
155		毛萱遺跡	富岡町	丘陵					1			集石遺構	○									馬目･山田1972
156		上郡B遺跡	富岡町	河岸段丘					1				○									県2002a
157		白岩堀ノ内遺跡	いわき市	丘陵							2		○									県1997a
158		内宿遺跡	いわき市	微高地					3	1			○									いわき市1982
159		応時遺跡	いわき市	丘陵					1				○									いわき市1984
160		愛谷遺跡	いわき市	丘陵	1(方)				2				○		○	○					○	いわき市1985b
161		龍門寺遺跡	いわき市	丘陵					5				○									いわき市1985a
162		上ノ内遺跡	いわき市	丘陵					2			祭祀遺構	○									いわき市1994
163		寺台遺跡	いわき市	丘陵					1	2			○									いわき市1988
164		泉町Ｃ遺跡	いわき市	浜提						5		柱穴群、柵列	○									いわき市1997
165		折返Ａ･菅俣B遺跡	いわき市	浜堤				1	103	14		柵列	○		○		○	○	○	○	(模造品勾玉)､貝容器､鳥形土器	いわき市1998･2003
166		桜町遺跡	いわき市	河岸段丘					1				○									いわき市2002b
167		砂畑遺跡	いわき市	浜堤	2(円)				8	3			○		○				○			いわき市2002a･2004
168		白土城跡	いわき市	丘陵					1				○						○			いわき市2006
169		玉山古墳	いわき市	丘陵	1(前方後円)								○									いわき市2009a
170		水品遺跡	いわき市	丘陵					1				○				○	○	○			いわき市2010
171		神力前B遺跡	いわき市	浜堤					21	3	1		○		○				○			いわき市2008･2009b･2013a
172		古川遺跡	いわき市	沖積平野					1				○			(○)						いわき市2013b
173		原前遺跡	いわき市	浜堤					1				○		○			○				いわき市2014
174		北前遺跡	伊達市	沖積地					1				○									伊達市2010
175		大泉みずほ遺跡	伊達市	沖積平野		3			6				○									保原町2000
176		菖蒲沢A遺跡	伊達市	自然堤防	1(不明)				2				○									保原町2003
177		高野古墳	伊達市		円										○			○				遠藤1999
178		中ノ内遺跡	福島市	河岸段丘					1				○									福島市1988
179		岩田遺跡	福島市	低地帯					1			SX03～05	○					○				福島市1991
180		勝口前畑遺跡	福島市	砂礫段丘					13	3			○		(○)			○	○			福島市1995ab･1996
181		百目木遺跡	本宮市	自然堤防					6				○		(○)							本宮町1995･1996･1997･1998･2001･2002
182		北ノ脇遺跡	本宮市	自然堤防					2				○					○				本宮町　2002
183		三ツ坦古墳群	郡山市	扇状地		1？							○									郡山市1984
184		宮田A遺跡	郡山市	河岸段丘		1							○									郡山市1985
185		東丸山遺跡	郡山市	河岸段丘		4			5				○								鉛製ペンダント1	郡山市1987
186		北山田遺跡	郡山市	丘陵					7				○				○					郡山市1988
187		鴨打Ａ遺跡	郡山市	丘陵					3				○				(○)					郡山市1991･1993
188		清水内遺跡	郡山市	扇状地					1				○									郡山市1996a･1999a
189		上之内遺跡	郡山市	河岸段丘					2				○					○				郡山市1996b
190	福島	大安場古墳群	郡山市	丘陵	1(前方後方)								○		○						朱､石訓､布	郡山市1997～2005
191		仲の町遺跡	須賀川市	自然堤防？					1				○									須賀川市2001
192		台の前Ａ遺跡	田村市	河岸段丘					2				○									船引町　1999
193		本飯豊遺跡	小野町	丘陵											○							県1993
194		落合遺跡	小野町	丘陵					25	7			○					○	○			県1995
195		江平遺跡	玉川村	丘陵					2				○									県2002b
196		大池下遺跡	石川町	丘陵					1				○									県1987
197		殿畑遺跡	石川町	丘陵					1				○									県1994
198		道南遺跡	西郷村	丘陵					4				○					(○)				県1975
199		大塚遺跡	白河市	河岸段丘					1			土器集中	○									白河市2012
200		松並平遺跡	棚倉町	河岸段丘					1				○									棚倉町1985
201		笠森A遺跡	猪苗代町	丘陵					3	2		SX3	○		○		○	○	○			猪苗代町2001
202		荒屋敷遺跡	喜多方市									性格不明遺構	○									県2005
203		東上川原遺跡	喜多方市	自然堤防								埋没河川	○								動物骨(焼骨)	喜多方市2000
204		中谷地遺跡	喜多方市	扇状地							1		○									喜多方市2010
205		家西遺跡	喜多方市		10(前方後円1、前方後方6､方3)							前方後円形の溝	○									喜多方市2014･2015
206		舘ノ内遺跡	喜多方市	微高地		2			1	2			○									塩川町1998
207		内屋敷遺跡	喜多方市	河岸段丘		7			1			方形区画施設	○									塩川町2004
208		十九壇古墳群	喜多方市	丘陵	4(前方後方1､方3)								○		○							遠藤1999
209		宮東遺跡	会津坂下町	河岸段丘		1	3			3			○									会津坂下町1990a
210		中西遺跡	会津坂下町	河岸段丘					6				○									会津坂下町1990a
211		男壇遺跡	会津坂下町	河岸段丘		4							○									会津坂下町1990a
212		樋渡台畑遺跡	会津坂下町	河岸段丘					6	11	18		○					○				会津坂下町1990b
213		臼が森古墳	会津坂下町	扇状地	1(前方後円)								○									会津坂下町1993a
214		森前遺跡	会津坂下町	扇状地			2		1				○									会津坂下町1993a
215		亀ヶ森古墳	会津坂下町	微高地	1(前方後円)																埴輪	会津坂下町1993b
216		東舘遺跡	会津坂下町	自然堤防					1		1		○									会津坂下町1994a
217		宮ノ北遺跡	会津坂下町	河岸段丘					7				○		○	○	○	○			菅玉未製品	会津坂下町1994b
218		杵が森古墳	会津坂下町	扇状地	1(前方後円)	10		3	12	1			○									会津坂下町1995
219		鎮守森古墳	会津坂下町	微高地	1(前方後方)								○									会津坂下町1998
220		次郎坂古墳群	会津坂下町	山地	1(円)							土器集中	○									会津坂下町2008
221		盗人沢遺跡	会津坂下町	扇状地					1				○									会津坂下町2011
222		森北古墳群	会津坂下町	丘陵	1(前方後方)								○	○	○	○					漆塗り製品､布､朱	創価大学･会津坂下町1999
223		屋敷遺跡	会津若松市	沖積段丘		3	2		3	8			○									県1991a
224		和泉遺跡	会津若松市	自然堤防				1	9	1	1		○			(○)	(○)	○	○			県1991b
225		田村山古墳	会津若松市	沖積地	1(円)								○	○	○	○						田村山古墳1981
226		会津大塚山古墳	会津若松市	丘陵	1(前方後円)								○	○	○	○	○	○			丹､靭､紡錘車形石製品､櫛	史出版委員会1964･県立博物館1994
227		堂ヶ作山古墳	会津若松市	丘陵	1(前方後円)							河川	○		(○)			○	○			会津若松市1992･1996
228		郡山遺跡	会津若松市	台地									○									会津若松市2014
229		桜町遺跡(第1次)	湯川村				1						○									県2005

第９表　東北地方の古墳時代前期における銅鏡、鉄製品、玉類等が出土した遺跡・遺構

竪穴建物跡

県	遺跡	市町村	遺構	銅鏡	鉄製品	玉類	その他	文献
岩手	中半入遺跡	奥州市	304号			臼玉6	剥片(黒曜石製)、羽口、琥珀小塊1	岩手埋文2002
宮城	入の沢遺跡	栗原市	SI10		鑿1			本書
	入の沢遺跡	栗原市	SI13	珠文鏡1、櫛歯文鏡1	剣、鏃、両頭金具、短冊形鉄斧、有袋鉄斧、方形板刃先、刀子、工具	勾玉、管玉、臼玉、棗玉、丸玉、ガラス小玉	本村型琴柱形石製品2	
	入の沢遺跡	栗原市	SI19	内行花文鏡(破鏡)1	有袋鉄斧1	(管玉1)		
	入の沢遺跡	栗原市	SI27	珠文鏡1				
	新金沼遺跡	石巻市	22号			管玉1		石巻市2003
	新金沼遺跡	石巻市	24号			ガラス小玉1		
	須江糠塚遺跡	石巻市	4号		(鏃1)			河南町1987
	沼向遺跡	仙台市	SI3025			(管玉1)		仙台市2010a
	戸ノ内遺跡	仙台市	4号		(刀子1)			仙台市1984b
	野田山遺跡	名取市	3号		鏃1			県1992
	大橋遺跡	蔵王町	2号		不明			県1980f
	堀の内遺跡	蔵王町	3号		細片不明			蔵王町1997
	梅田遺跡	白石市	3号		鎌1			白石市1984
山形	下槇遺跡	河北町	4号				本村型琴柱形石製品1	県1981b
	下槇遺跡	河北町	5号				本村型琴柱形石製品1	
	高擶南遺跡	天童市	ST4			菅玉未製品1		県センター2004e
	高擶南遺跡	天童市	ST212			菅玉1		
	長表遺跡	山形市	ST11			菅玉1		県センター2001a
福島	折返A遺跡	いわき市	20号		不明1			いわき市1998
	菅俣B遺跡	いわき市	3号		不明2			いわき市2003
	砂畑遺跡	いわき市	2号		刀子1			いわき市2004
	神力前B遺跡	いわき市	31号		不明1			いわき市2009b
	古川遺跡	いわき市	3号			(臼玉1)		いわき市2013b
	原前遺跡	いわき市	1号		筒状製品1			いわき市2014
	勝口前畑遺跡	福島市	SI12		(不明1)			福島市1995b
	百目木遺跡	本宮市	132号		(鉄鎌)			本宮町2001
	笠森A遺跡	猪苗代町	SI1		鎌１			猪苗代町2001
	宮ノ北遺跡	会津坂下町	1号		鉄針1			会津坂下町1994b
	宮ノ北遺跡	会津坂下町	7号			菅玉未成品		
	和泉遺跡	会津若松市	SI03			(管玉1)		県1991b

墓

県	遺跡	市町村	遺構	銅鏡	鉄製品	玉類	その他	文献
岩手	永福寺山遺跡	盛岡市	土坑墓1		鎌2			盛岡市1997
	永福寺山遺跡	盛岡市	土坑墓3		刀子1			
宮城	大塚森古墳	加美町	円墳1			管玉1、ガラス小玉53	矢柄11、靫1、朱	辻2008
	遠見塚古墳	仙台市	前方後円墳			管玉1、ガラス小玉4	櫛20	仙台市1976・1977・1979～1981・1983
	沼向遺跡	仙台市	5号方墳			ガラス小玉4		仙台市2000
	宇賀崎1号墳	名取市	方墳		鏃2		琥珀玉	県1980d
	愛島東部丘陵遺跡	名取市	方形周溝			管玉1		名取市1987
	西屋敷1号墳	角田市	円墳1		剣1、鏃2、短冊形鉄斧1、鉇1	勾玉2、管玉15、ガラス小玉26		角田市1992
山形	E-1号墳	西川町			鉇、鉄製品			米沢市2003
	蒲生田山古墳群	南陽市	丘陵		鉄刀1、鉄斧1、鉄製品1、環状鉄製品1			南陽市2012
	長岡山遺跡	南陽市	SH53(墓坊)		剣5、鏃4、有袋斧1、刀子1、鑿1、鉇1			南陽市2013
	横山古墳	米沢市	方墳			菅玉1		米沢市2000
	成島古墳群	米沢市	1号墳(前方後円)		鹿角装剣1、鏃2、鉇1	菅玉7	鞍1、漆塗り遺物、布	米沢市2003
	大西遺跡	米沢市	1号円形周溝		刀子1			米沢市2004b
	大西遺跡	米沢市	4号方形周溝		鑿1	臼玉20、ガラス小玉6		
福島	桜井古墳群 上渋佐支群7号墳	南相馬市	7号墳(方)	珠文鏡1	鉇1		布	原町市2001
	本屋敷古墳群	浪江町	1号墳(前方後方)		刀子2、金具1	管玉2、ガラス小玉6	櫛2、布	法政大学1985
	本屋敷古墳群	浪江町	4号墳(方)			ガラス小玉2		
	愛谷遺跡	いわき市	方墳		刀1、剣1、袋状斧1、有肩斧1、直刀鎌1	臼玉29		いわき市1985b
	高野古墳	伊達市	円墳		刀2、剣1、鏃10、有袋鉄斧1		砥石1	遠藤1999
	大安場古墳群	郡山市	1号墳(前方後方墳)		大刀1、剣1、槍1、短冊形鉄斧1、刺突状鉄製品1、剣形鉄製品1、鎌1		石釧1、布	郡山市1997～2005
	十九壇古墳群	喜多方市	3号墳(方)		剣1			遠藤1999
	森北古墳群	会津坂下町	前方後方	珠文鏡	槍1、鉇2、針1	管玉2	漆塗り製品、布、朱	創価大学・会津坂下町1999
	田村山古墳	会津若松市	円墳	内行花文鏡2(内1面は破鏡)	直刀1、剣2、刀子2	(管玉3、ガラス小玉10)		田村山古墳1981
	会津大塚山古墳	会津若松市	前方後円(北棺)	三角縁神獣鏡1、変形四獣鏡1	太刀1、刀1、剣7、小刀1、銅鏃29、鉄鏃48、斧5、鉇3、刀子2、棒状鉄製品3	勾玉1、菅玉79、算盤玉2、ガラス小玉61	台石1、砥石1、石杵1、靭1、櫛2、丹	会津若松市史1964・県立博物館1994
	会津大塚山古墳	会津若松市	前方後円(南棺)	捩文鏡1	刀1、剣5、銅鏃4、鉄鏃41、斧2	管玉40	靭1、紡錘車形石製品1	
	堂ヶ作山古墳	会津若松市	前方後円墳1		(有袋鉄斧1、刀子)		砥石4、鶏形土製品1	会津若松市1992・1996

その他

県	遺跡	市町村	遺構	銅鏡	鉄製品	玉類	その他	文献
岩手	永福寺山遺跡	盛岡市	表採			勾玉 1、菅玉 2		盛岡市 1997
宮城	佐沼城跡	登米市	SK104			管玉 1	勾玉 1	迫町 1995
	佐沼城跡	登米市	SD105			管玉 3		
山形	玉作 2 遺跡	鶴岡市	SK83			勾玉未製品		県センター 2011
	板橋 2 遺跡	天童市	SK872				石釧	県センター 2004d
	高擶南遺跡	天童市	SK278			菅玉 2		県センター 2004e
	馬洗場 B 遺跡	山形市	遺構外	内行花文鏡 (破鏡)1				県センター 2004c
	庚壇遺跡	南陽市	包含層			菅玉 1	菅玉母岩？	県センター 2007b
	鎌倉上遺跡	米沢市	SX50 捨て場			菅玉 2		県センター 2012b
福島	東丸山遺跡	郡山市	9 号墓方形周溝				鉛製ペンダント 1	郡山市 1987
	本飯豊遺跡	小野町	遺構外		方形板刃先 3、直刃鎌 1			県 1993

態で住居内へ取りこまれていた可能性が指摘されている。これらと入の沢遺跡出土コメとを比較すると、大きさと粒型の面では共通し、同種のコメを生産していた可能性がある。一方、出土状態は異なり、遺跡内、竪穴建物内での保管方法の相違が想定される。また、宮城県北部で水田遺構あるいは炭化米が出土したのは、大崎市留沼遺跡、加美町地蔵車遺跡（加美町教育委員会 2011）であり、栗原地域では入の沢遺跡が唯一の事例である。

モモ核は、1 点出土し、半分のみの遺存状態である。長さ 1.9cm、幅 1.5cm、重量 1.01g である。

（2）遺構

精査を行った遺構を対象に、時期、特徴、全体の遺構配置について検討する。

1）遺構の時期

SD1・3 大溝跡は、堆積土下層から出土した土器がこれらに伴うことから、古墳時代前期後半と考えられる。SA71・4 材木塀跡については、SA4 が SI7 竪穴建物跡と重複しこれより古いこと、SI10 の北側では焼土や炭化物を多く含む火災由来層に覆われていること、出土遺物は認められないが、SD1・3 と並行すること、古墳時代の竪穴建物跡と一定の間隔を持って位置することから、SD1・3 と同じ時期と考えられる。SX72・41 盛土遺構については、SD1・3 と並行し、それらの壁や底面の地山と SX72・41 の盛土の特徴が類似することから一連の造成によるものと推定され、これらも SD1・3 と同時期と考えられる。

焼失竪穴建物跡である SI10・13・17・19 は、伴う土器から古墳時代前期後半と考えられる。その他の竪穴建物跡については、出土土器が少ないが、SI10・13・17・19 出土土器と大きく特徴が異なるものは認められないことから、古墳時代前期後半と考えられる。

整地層についても、出土土器や竪穴建物跡との位置関係から、同時期と考えられる。

2）各遺構の検討

竪穴建物跡、大溝跡、材木塀跡、盛土遺構について特徴をまとめ、類例との比較を通してその特質を明らかにする。

①竪穴建物跡

精査を行った 12 棟について、概要、構造、遺物の出土位置、造成手順、性格について検討を行う。

A. 概要

第 10 表に属性、第 115 図に平面図を集成した。これに基づいて概要をまとめる。

〔**立地**〕標高 46 ～ 49m の丘陵尾根上に分布する。尾根頂部付近に立地するのが 3 棟（SI15・18・21）、尾根上が 1 棟（SI9）、北斜面が 5 棟（SI13・19・20・56・63）、西～南西斜面が 2 棟（SI10・17）、南斜面が 1 棟（SI8）である。

〔**平面形**〕長軸の長さに対する短軸の長さの割合が 90％以上を方形、90％未満のものを長方形とした（宮城県教育委員会 1993b）。内訳は、方形 7 棟、長方形 4 棟、不明 1 棟である。

〔**規模**〕長軸の長さを基準にすると、長軸 7.0m 以上が 2 棟（SI13・56）、長軸 6.0m 以上 7.0m 未

第 10 表　竪穴建物跡属性表

遺構名	区	平面形	改修		焼失建物	規模(m)		主柱穴					炉	周溝				溝			土坑	備考
			数	遺構		長軸	短軸	数	北(m)	南(m)	東(m)	西(m)	数	北	南	東	西	溝	間仕切状の溝	外延溝	数	
SI56	A	長方形	―	―		7.0	5.7	―	―	―	―	―	複数	一部？	ほぼ全	―	全	―	―	―	―	
SI63	A	方形	―	―		5.0	4.8	4	2.8	2.4	2.6	2.4	複数	―	一部	―	ほぼ全	―	―	―	1	
SI8	B	方形	―	―	○	4.5	4.4	4	2.2	2.3	2.3	2.3	複数	全	―	全	一部	―	○	○	1	
SI9	B	方形	―	―		6.4	5.9	4	3.6	3.7	3.45	3.4	―	全	一部	全	全	―	○	―	1	
SI10	B	長方形	1	周溝､土坑	○	5.9	5.3	4	2.9	2.6	3.0	3.0	複数	全	全	全	ほぼ全	○	―	○	1	遺物多数
SI13	B	長方形	1	周溝､溝､土坑	○	7.0	6.2	4	3.5	3.55	3.3	3.2	1	一部途切れる	全	全	全	○		○	2	ベッド状施設あり､遺物多数
SI15	B	方形	1	周溝		4.5～	4.3	―	―	―	―	―	―	一部	全	全	不明	○	―	○	1	
SI17	B	方形	―	―	○	5.8	5.5	4	3.2	3.0	3.3	3.3	1か	全	全	全	全	―	―	○	1	遺物多数
SI18	B	方形？	―	―		6.0	3.7～	―	―	―	―	―	1	―	○	全	不明	―	―	不明	1	
SI19	B	方形	―	―	○	5.9	5.4	4	3.5	3.2	2.9	2.7	1	一部	ほぼ全	―	全	―	―	―	1	遺物多数
SI20	B	方形	―	―		5.8	5.5	―	―	―	―	―	1	不明	ほぼ全	ごく一部	ほぼ全	―	―	―	1	
SI21	B	長方形	―	―		5.6	4.3	4か	1.8	―	2.6	―	不明	全	ほぼ全	一部	一部	―	―	―	1	

満が 2 棟（SI9・18）、長軸 5.0m 以上 6.0m 未満が 6 棟（SI10・17・19 ～ 21・63）、長軸 4.0m 以上 5.0m 未満が 2 棟（SI8・15）である。

〔**床面**〕掘方埋土を床面とするもの 8 棟（SI8 ～ 10・13・17・19・56・63）、掘方埋土と地山を床面にするもの 3 棟（SI18・20・21）、不明 1 棟（SI15）である。

〔**主柱穴**〕建物平面の対角線上に 4 個認められるもの 7 棟（SI8 ～ 10・13・17・19・63）、4 個の可能性があるもの 1 棟（SI21）、未確認 4 棟（SI15・18・20・56）である。

〔**炉・焼面**〕9 棟（SI8・10・13・17 ～ 20・56・63）で検出した。このうち、床面を掘りくぼめて炉にしたものが 2 棟（SI10・13）で認められる。焼面が 1 ヶ所のものは 4 棟（SI13・18 ～ 20）、複数あるものは 4 棟（SI8・10・56・63）であり、建物内での位置としては、中央 2 棟（SI8・56）、中央で西寄り 3 棟（SI19・20・63）、中央で北寄り 2 棟（SI10・13）で、2 棟（SI17・18）については詳細不明である。SI13 の Y1 堆積土からは片面に被熱の痕跡がある紡錘形の礫が 2 点出土した。石材はどちらも砂岩で、長さ 18cm、幅・厚さ 6.5cm、重量 800g のものと、長さ 23.5cm、幅 8cm、厚さ 7.5cm、重量 1,600g のものである。支脚として利用された可能性がある。

〔**周溝**〕12 棟すべてで検出した。ほぼ全周するものは 4 棟（SI9･10･13･17）で､2 辺が 1 棟（SI63）、それ以外は 3 辺で認められる。全周しないものについては、標高の高い方角の壁際とそれに接続させて標高の低い方へ向かう壁際に巡らせている（SI8・15・18 ～ 20・56・63）。また、全周するものについては、標高の高い方角の周溝の方が低い方角の周溝よりも幅が広く造られる傾向がある。周溝の堆積土は全て自然堆積であり、開渠であることから、周溝の巡る位置や規模については、降雨の際の水対策が反映されたものと考えられる。3 棟（SI10・13・15）で 1 度改修されており、SI13 は全周、SI10・15 は標高の高い壁際を巡る 1 ないし 2 辺の改修である。

〔**溝跡**〕建物内を縦断する溝跡（SI10・13）、建物外に延びる外延溝（SI8・10・13・15・17）、周溝と直交する小規模な溝跡（SI8・9）の 3 種類が認められる。建物内を縦断する溝跡は、周溝、土坑と接続する。外延溝には、竪穴建物跡が立地する地形で最も標高の低い位置でかつ A 区と B 区の

間の沢に向けられるもの（SI8・15・17）と、最も標高の低い位置にあるもの（SI13）、A区とB区の沢に向けられるもの（SI10）の3種類がある。

〔**土坑**〕11棟で検出した。SI13のみ2基で、他は1基の検出である。周溝と溝跡と接続するものは6棟（SI8・10・13・15・17・18）ある。竪穴建物跡内の位置としては、南西隅5棟（SI9・10・15・17・20）、北東隅2棟（SI19・63）、南東隅2棟（SI8・21）、南西隅と北西隅1棟（SI13）、詳細不明1棟（SI18）である。地形との関係では、標高の高い方角に位置するものが3棟（SI10・13・20）、低い方角に位置するものが6棟（SI8・13・15・17・19・63）、特に関係が認められないものが3棟（SI9・18・21）である。

〔**その他**〕ベッド状施設、土坑周囲の土手状の高まりを1棟（SI13）で検出した。

B. 構造

精査を行った竪穴建物跡は、床面施設の組み合わせにより3種類に大別できる（第115図）。

・SI13・10：周溝、建物内を縦断する溝跡、外延溝、土坑が認められ、これらが接続するもの
・SI8・15・17：周溝、外延溝と土坑が認められ、これらが接続するもの
・SI9・19・20・21・56・63：周溝、土坑、あるいはこれらのいずれかが認められるが、土坑と周溝は接続しないもの

なお、SI18はSI8等との類似が考えられたが、全体を検出できていないため不明とした。

SI13・10、SI8・15・17は床面施設が特徴的であり、特殊な構造である。また、SI13・10、SI8・17・19は焼失竪穴建物跡であり、建物の構造に関する情報が多く得られた。そのため、これらの竪穴建物跡を対象に、個別にその構造を検討し、その後類例との比較を通して位置づけを行う。対象とするのは、SI13・10、SI8・15・17、SI19である。記述は、最も複雑な構造であるSI13と、SI10を中心にSI8・15・17・19を含めて行う。

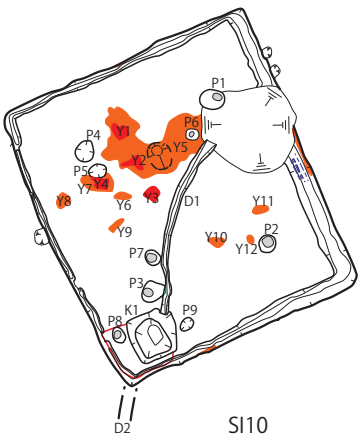
＜個別の検討＞

【SI13】（第115・116図）

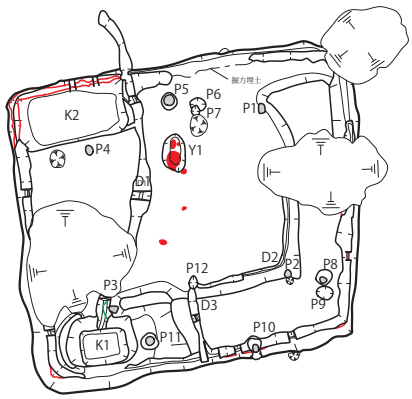
〔**主柱**〕4個の柱痕跡が検出され、南北3.5～3.55m、東西3.2～3.3mの間隔で配置された4本柱を主柱として上屋を支えていたと考えられる。柱痕跡は、長軸15～20cm、短軸12～15cmの楕円形、隅丸長方形であり、割材が用いられた可能性がある。柱と推定される炭化材は検出できなかったが、柱痕跡の堆積土には炭化物や焼土が多く含まれていたことから、柱材は火災とその後の経過の中で腐朽したことが推定される。なお、主柱穴の掘方は建物の掘方埋土に覆われており柱痕跡のみの検出であった（図版12-1）。

〔**屋根**〕屋根材と推定されるものに、炭化材と地山ブロック主体層がある。

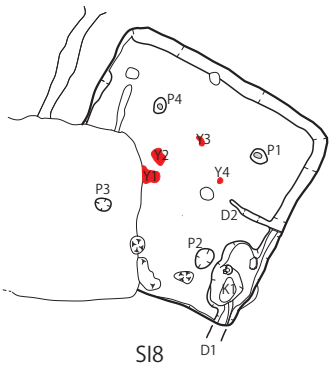
第116図炭6・11は、径15～17cm、長さ60～75cmと大型で、検出位置は炭6がP1-P4間、炭11がP1-P2間であり、これらの柱穴間の線上、あるいは線と並行する位置にあることから、梁・桁材であったと推定される。その他の炭化材には、径10cm前後を主体として各辺に直交するものや並行するものがあり、垂木や横木と推定される。両者とも壁際に分布するものが主体である。復元



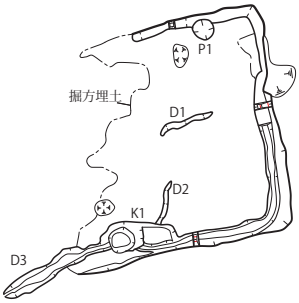
SI10



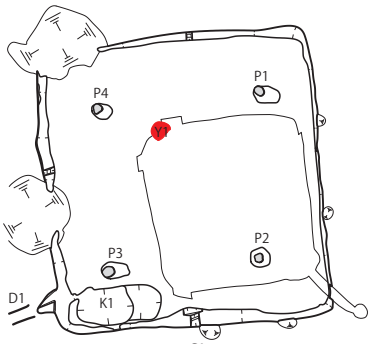
SI13



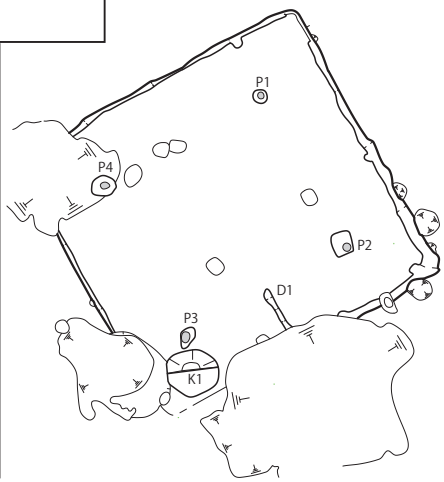
SI8



SI15

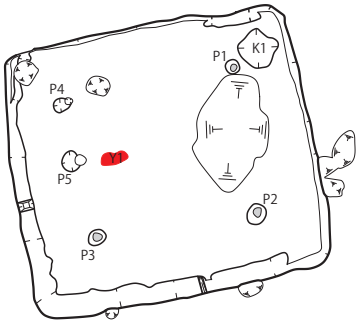


SI17

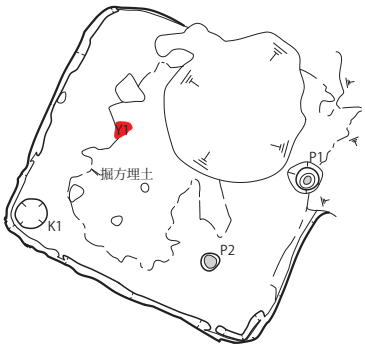


SI9

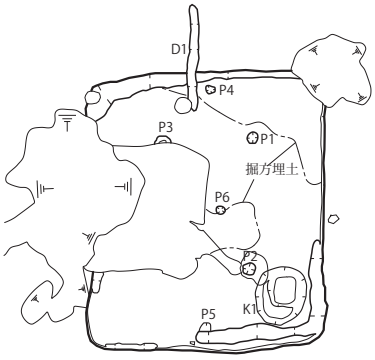
SI18



SI19

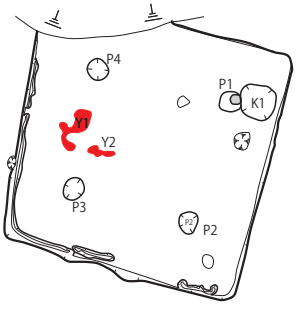


SI20



SI21

SI56



SI63

第 115 図　竪穴建物跡の集成

S=1/150　上が座標北

第 116 図　SI13・10・17・19竪穴建物跡の炭化材と遺物の出土位置　S=1/100　上が座標北

した竪穴建物による焼失実験では、火災時に上屋上部の棟部分の燃焼が早く、建物中央部の上屋の炭化材の遺存が少なくなることが確認されており（石守 2001）、SI13 の状況はこれに類似する。

建物の北側を中心に、地山ブロック主体層が検出された。この層は、炭化材や火災由来層の直上に面的に堆積しており、群馬県渋川市中筋遺跡 1 号竪穴式住居（渋川市教育委員会 1987）で確認された屋根材を構成する「土屋根」の一部と考えられる。このうち、被熱したものには拳大の塊になっているものが一定量認められた（図版 57-9）。この塊の中には植物繊維等の混入物は検出されなかったことから、拳大程度の粘土を叩き締めながら屋根に積み上げていったと考えられる。なお、この地山ブロック主体層の分布は床面全面にはならない。焼失実験では、棟まで土を葺くと床面全体に、梁・桁の高さまで葺くと壁際に分布することが指摘されており（石守 2001）、これを参考にすると土を葺いた範囲を推定できる可能性がある。ただし、SI13 では斜面地という立地の特徴や屋根の構造、焼失の状況等の複雑な要因が地山ブロック主体層の堆積に関係してくると想定されるため、土葺きの範囲については更なる検討が必要である。

屋根の構造としては、後述する壁の特徴から、伏屋式の竪穴建物であったと考えられる。

〔**壁**〕壁材痕跡や壁柱穴が認められず、竪穴掘削によって形成された地山を壁として利用している。地山の壁を保護する材については確認できていない。なお、P10 は B 期の南辺周溝の自然堆積土を掘りこんだ柱穴であり（第 116 図）、応急的な柱と考えられるが、これが壁に関わる機能であったか、屋根に関わる機能を有していたかは不明である。

〔**出入口**〕出入口の梯子受穴と考えられる「壁際ピット」（宮城県教育委員会 1992・1993b）は認められなかったが、立地する地形の傾斜、床面施設や遺物の位置から、標高の低い北辺周溝が開放している部分の可能性が高いと考えられる。

〔**内部施設**〕周溝と溝跡、土坑、土坑周囲の土手状の高まり、ベッド状施設、炉跡で構成される。

周溝と溝跡（D1 ～ 3）、土坑（K1・2）：周溝が 1 度改修され、K2 が新たに造られることで床面施設の配置が変化するため A 期と B 期に分けて記述する。

A 期は、周溝、建物内を縦断して建物外へ延びる溝跡（D1）、ベッド状施設周辺の溝跡（D2・3）、土坑（K1）により構成される。D2・3 は、精査を行った部分では A 期と考えられる堆積土は認められなかったため、B 期で改修されたと考えられる。周溝は、北辺で一部途切れる以外は全周する。K1 は南西隅に位置し、それに周溝と D1 が接続する。K1 の西・北東側には、床面からの高さ 2 ～ 4cm の土手状の高まりが認められる。床面の標高は、南東隅のベッド状施設上が最も高く、K1 周辺と北西隅が最も低い。したがって、標高の高い南・東側から建物内へ流入あるいは浸透する水を周溝により K1 に集め、一定量を超えると D1 へ、西側については西辺周溝から北辺周溝へ至り D1 より建物外へ排水させていたと考えられる。K1 については、これに加えて水溜の機能も備えた可能性がある。なお、D1 の北辺周溝と接続する部分の底面は、北辺周溝底面より 8cm 高く、周溝内で一定の水量を超えると D1 に流入するように造られている。また、土手状の高まりは、K1 からの溢水を防止する堤防の機能を果たしていたと考えられる。

B 期は、周溝、溝跡（D1 ～ 3）、土坑（K1・2）で構成され、標高の低い北西隅に K2 が造られ、

これに周溝とD1が、底面に高低差をもって接続する。床面標高の最高地点と最低地点はA期と同様で、周溝については、精査した地点の下端の標高値から、東辺は北から南へ、南辺は南東隅と南西隅からK1へ、西辺は南側がK1、北側がK2に向かって標高を下げながら緩やかに傾斜する。D2はベッド状施設の裾、D3はベッド状施設を縦断してD2と周溝を接続しており、いずれも堆積土は自然堆積であることから、ベッド状施設の水対策としての機能が想定される。なお、D2は、東辺中央付近のカクラン部分でベッド状施設を横断して東辺周溝と接続していた可能性がある。建物内へ流入、浸透する水に対する集水方法はA期と同様だが、排水方法は異なり、西辺周溝とK2の接続、D1とK2の接続により、K2が水量や水流の調整を行う升のような機能を果たしたと考えられる。また、B期の周溝やD1～3、K2には、機能時と考えられる堆積土がそれぞれ深さ1/2程度認められることから、流水による堆積土の形成が進んでいたことが推定される。K2にはこれらの堆積土を受ける役割もあった可能性がある。

SI13では、標高の高い地点に水を集める土坑（K1）を設けていることが特徴的である。この要因は、周溝やベッド状施設を縦横断するD2・3との接続から、様々な遺物が出土したベッド状施設周辺での排水を円滑に進め、滞水や溢水を防ぐためであったと推定される。ベッド状施設を中心に、周溝、溝跡、土坑が有機的に関連して機能を果たしていたと考えられる。

K1の断面形は上部が皿状、それより下位が逆台形と2段構成となる。皿状部分の北側には、小規模ではあるが板状の炭化材（第116図炭19）が検出されており、この炭化材はK1の蓋の一部であると考えられる。残りの部分については、K1の堆積土に炭化物を多く含む層があることから、火災により焼失したと推定される。したがって、断面形で確認された上部の皿状の部分は、蓋の据え方と考えられる。

K2では西壁から北壁にかけて幅の狭い板状の炭化材（第116図炭23・24・25）が検出された。出土状況から伴うものと考えられ、蓋の可能性がある。蓋と仮定すると、K2は長軸215cm、短軸120cmと大型であることから、一枚の板ではなく、他の材と組み合わせたものであると推測される。

古墳時代前期の竪穴建物跡の土坑あるいは貯蔵穴に蓋材が認められる事例に、山形県天童市菖蒲江1遺跡ST5（山形県埋蔵文化財センター2002a）、高擶南遺跡ST202・211（山形県埋蔵文化財センター2004e）、埼玉県さいたま市白鍬宮腰遺跡第2号竪穴住居跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団1998）、三重県四日市市辻子遺跡SH2（三重県埋蔵文化財センター2004b）がある（松井2015）。菖蒲江1・高擶南遺跡では板材、白鍬宮腰遺跡では丸太材、辻子遺跡では板材と棒状の材による組み合わせで蓋が作られており、SI13の蓋材は菖蒲江1・高擶南遺跡や辻子遺跡の事例と共通する可能性がある。

また、周溝やD1～3の堆積土上層には、炭化物を多く含む黒褐色の層が認められ、これらも蓋の痕跡の可能性がある。

ベッド状施設：建物の東辺から南辺にかけての範囲に位置し、床面との高低差は10cmである。前述した周溝、D1～3、K1の機能と後述する遺物の出土位置から、床面とは異なる目的で造られ、利用された施設であったと考えられる。この機能としては、寝台、棚、祭壇等が想定されているが（宮本1990）、SI13では、特殊なものを配置する場であったと考えられる。

【SI10、SI8・15・17、SI19】（第 115・116 図）

壁については、SI13 と同様であり、出入口についてはそれを表す遺構が検出されなかったことから説明を省略し、主柱、屋根、内部施設について検討する。

〔**主柱**〕SI15 以外は 4 本柱を主柱として上屋を支えていたと考えられる。柱と推定される炭化材は検出できなかったが、柱痕跡の堆積土には炭化物や焼土が多く含まれていたことから、柱材は火災とその後の経過によって腐朽したことが推定される。

〔**屋根**〕SI10・8・15・17 には、屋根材と推定されるものに、炭化材と地山ブロック主体層、焼土塊が主体の層がある。

炭化材には、壁際を中心に各辺に直交、並行するものがあり、小規模であることから垂木や横木であったと推定される。この他に SI10 では、第 116 図炭 3 が、分散して出土しているが同一個体と考えられ、径 23cm、長さ 88cm と大型で、検出位置が P1-P4 間の北側でこれに並行していることから、梁あるいは桁材であったと推定される。SI10 では、炭化材の出土量が少量で残存状況も不良である。

SI10 の北側と西側、南東隅で、SI13 と同様の「土屋根」と考えられる地山ブロック主体層が検出された。この層は SI8・17・19 でも確認でき、SI8 は中央と標高の高い方角の壁際、SI17 は標高の低い方角の壁際、SI19 は標高に関係なく壁際に分布する。SI10 では、さらにその直下に、地山ブロック主体層が被熱して焼土化した層が建物中央から東側にかけて分布していた。この焼土層は、硬化した拳大の焼土塊になっており（図版 42-6）、この部分の燃焼の程度が大きかったことが推測される。これらの焼土塊は大きさや混入物の特徴から SI13 と同様のものであったと推測される。地山ブロック主体層と焼土塊層の分布から、SI10 では屋根全体に土が葺かれていたと考えられる。

SI10 では、焼面と地山ブロック主体層、焼土塊層、炭化材の分布から、竪穴建物の焼失の状況を検討することができる。火災の出火位置は、焼面の規模から Y5 付近と推定され、焼土塊層の分布範囲であるその上部から北・東方向に火が移り屋根が燃焼したと考えられる。これらの範囲では、垂木や横木が燃焼し、さらにその上に葺かれた土も被熱し、焼土塊となる。そして、柱材、梁・桁材が崩壊したと推測される。梁あるいは桁材と推定される第 116 図炭 3 は P1-P4 間よりやや北側に位置しており、屋根は真下ではなく、標高の低い北側に向かって落下したと推測される。SI10 の北側の SA4 材木塀跡は炭化物や焼土が多く含まれる層に覆われており（第 18 図）、この推測の傍証となる。

屋根の構造としては､壁材が検出されなかったことにより伏屋式の竪穴建物であったと考えられる。

〔**内部施設**〕周溝、溝跡、土坑、炉跡により構成される。SI10 は周溝と土坑、SI15 は周溝が 1 度改修されているが、位置に大きな変更がないため、機能に相違はないと考えられる。これらの床面施設の主体的な機能は排水であったと考えられる。

いずれも A 区と B 区の間の沢に面する位置に土坑と外延溝が設置されており、それらの設置位置には竪穴建物跡が立地する地形との関係が認められる。SI8・15・17 の土坑と外延溝は、標高の低い位置に設置され、外延溝は周溝と同じ方向で延長する。一方、SI10 の土坑と外延溝は、標高ではなく沢への距離が最も近い位置に設置され、外延溝は、周溝とは方角を変えて延長する。SI10 では、周溝底面が北側から南側へ傾斜し、床面も土坑が位置する南西部では土坑に向かって標高を下げなが

ら緩やかに傾斜する。

各竪穴建物跡の土坑は、底面が 2 段となり、深い方の底面は接続する周溝、溝跡の底面よりも低い位置にある。これらの土坑は SI13 と同様、水量や水流の勢いを調整する升のような役割を果たしていたと考えられる。また、水利用のための水溜の機能も有していた可能性がある。

SI10 の D1 の堆積土 2 層は炭化物層であり、これは蓋材の可能性がある。分布範囲も D1 に限られていたことから、D1 は機能時には蓋がされて暗渠状になっていたと考えられる。

SI10 の炉は、Y1 ～ 4 と Y5 のくぼみの部分と考えられる。特に Y1 ～ 4 は被熱により非常に硬化しており、重度の火の使用が行われた可能性がある。このような硬化面になった焼面は他の竪穴建物跡では確認できない。

＜床面施設の類例＞

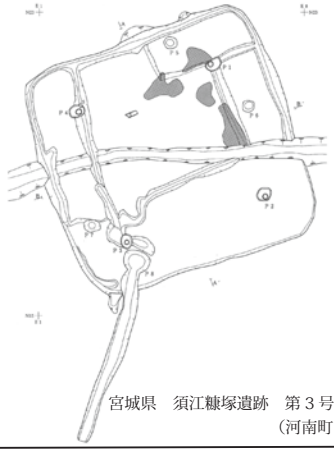
検出された床面施設のうち、主柱穴、溝跡、土坑、ベッド状施設について類例との比較を行い、その位置づけを行う。

SI13 では主柱穴の掘方が建物の掘方埋土に覆われており柱痕跡のみの検出であった。東北地方の古墳時代前期における同様の事例は、宮城県蔵王町大橋遺跡第 1 住居跡（宮城県教育委員会 1980f）で認められる。また、福島県小野町落合遺跡第 33 号竪穴住居跡でも、柱穴の掘方が確認できず柱痕跡のみの検出であり、柱材を埋め込んでいたと解釈されているが（福島県教育委員会・いわき市教育文化事業団 1995）、これについても同様の事例であった可能性がある。

入の沢遺跡の竪穴建物跡で検出された特徴的な床面施設である建物内を縦断する溝跡、外延溝、土坑、土坑周囲の土手状の高まり、ベッド状施設について、類例となる遺構を第 117 図と第 11 表にまとめた。周溝、建物内を縦断する溝跡、外延溝、土坑（ピット）、ベッド状施設が検出されたのは宮城県石巻市須江糖塚遺跡第 3 号住居跡（河南町教育委員会 1987）のみである。また、SI10 と同様の、周溝、建物内を縦断する溝跡、外延溝、土坑が検出され、これらが接続するのは、福島県いわき市折返 A 遺跡第 42 号竪穴住居跡（いわき市教育委員会 2003）、建物内を縦断する溝跡が土坑と接続するのは、宮城県亘理町宮前遺跡第 2 号住居跡（宮城県教育委員会 1983c）、須江糖塚遺跡第 4・11 号住居跡（河南町教育委員会 1987）であり、類例はわずかである。これらは、個々の床面施設の規模、形状や位置、それらの接続の方法等、細部で SI13・10 と異なる。周溝と土坑、外延溝が検出された SI8・15・17 の類例は認められず、外延溝のみ検出されたものに、宮前遺跡第 49 号住居跡（宮城県教育委員会 1983c）、宮城県仙台市土手内遺跡 SI10（仙台市教育委員会 1992）、福島県郡山市上之内遺跡 1 号住居跡（郡山市教育委員会 1996b）がある程度である。また、土坑周囲の土手状の高まりについては、宮城県登米市佐沼城跡 SI105（迫町教育委員会 1995）、福島県大玉村上ノ台遺跡 6 号住居跡（大玉村教育委員会 1992）のみで、土坑の周囲ではないが、宮城県栗原市宇南遺跡第 2 号住居跡（宮城県教育委員会 1980e）でも類例が確認できる。

一方、東北地方以外では、東海、関東地方で外延溝や土坑周囲の土手状の高まりを持つ竪穴建物跡が認められる。外延溝を有する竪穴建物跡については、東海地方で事例が多く、三重県で弥生時代中期には出現し、後期には愛知県、静岡県でも認められるようになり範囲が広がること、建物の隅に位

周溝・建物内溝・外延溝・土坑・ベッド状施設



宮城県　須江糠塚遺跡　第 3 号住居跡
（河南町 1987）

周溝・建物内溝・外延溝・土坑

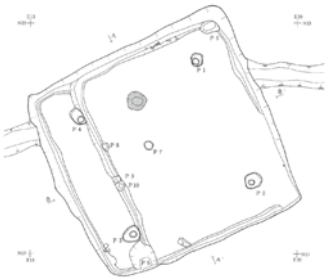
福島県　折返 A 遺跡　第 42 号竪穴住居跡
（いわき市 2003）

周溝・外延溝・土坑

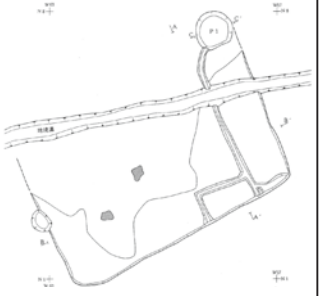
愛知県　高橋遺跡　13-SB13
（豊田市 2015）

建物内溝・土坑

宮城県　宮前遺跡　第 2 号住居跡
（宮城県 1983c）



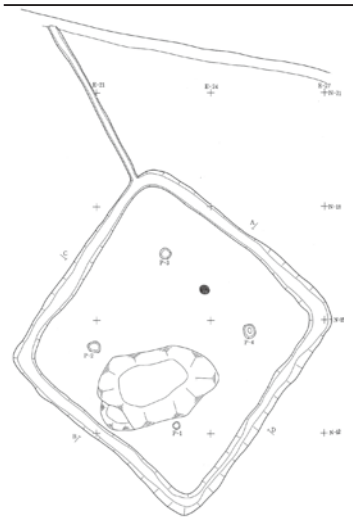
宮城県　須江糠塚遺跡　第 4 号住居跡
（河南町 1987）



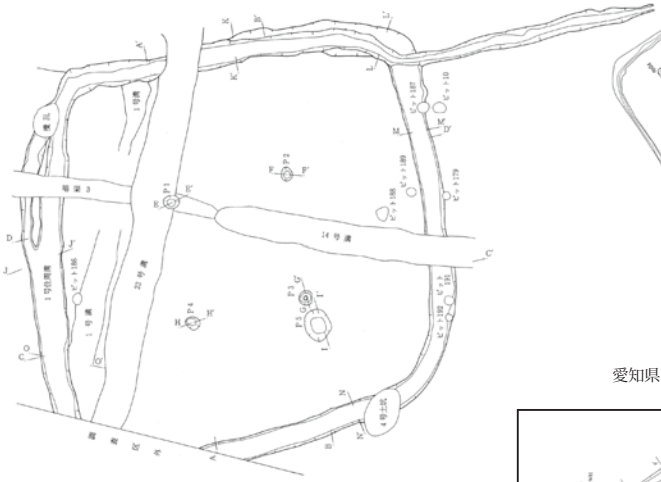
宮城県　須江糠塚遺跡　第 11 号住居跡
（河南町 1987）

外延溝

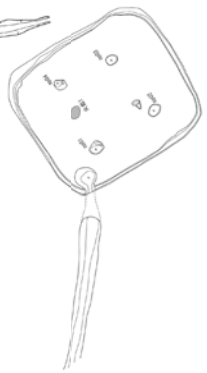
宮城県　宮前遺跡　第 49 号住居跡
（宮城県 1983c）



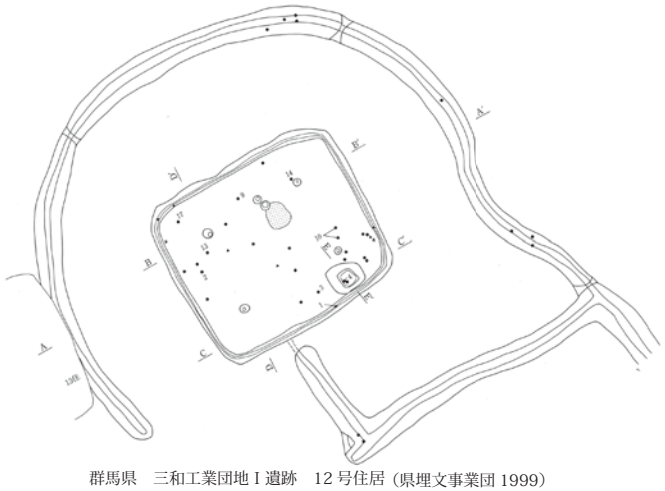
宮城県　土手内遺跡　SI10（仙台市 1992）



福島県　上之内遺跡　1 号住居跡（郡山市 1996b）

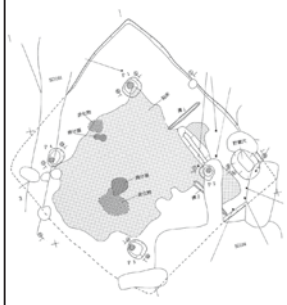


愛知県　高橋遺跡　11-SB37
（豊田市 2015）



群馬県　三和工業団地 I 遺跡　12 号住居（県埋文事業団 1999）

土坑周囲の土手状の高まり



宮城県　佐沼城跡　SI105
（迫町 1995）

福島県　上ノ台遺跡　6 号住居跡
（大玉村 1992）

愛知県　高橋遺跡　11-SB50
（豊田市 2015）

0　10m
(S=1/200)

第 117 図　竪穴建物跡の床面施設の類例

図は各報告書より転載

第 11 表　竪穴建物跡の床面施設の類例一覧

県	市町村	遺跡	遺構	時期	床面施設					特徴	文献
					ベッド状施設	建物内溝	外延溝	土坑	土坑周囲の土堤		
宮城	栗原市	宇南遺跡	第2号住居跡	古墳前期					△	土坑の周囲には位置していない	県1980e
	登米市	佐沼城跡	SI105	古墳前期					○		迫町1995
	石巻市	須江糖塚遺跡	第3号住居跡	古墳前期	○	○	○	○		「⌐」形	河南町1987
	石巻市	須江糖塚遺跡	第4号住居跡	古墳前期	○	○		○		一辺	
	石巻市	須江糖塚遺跡	第11号住居跡	古墳前期		○		○			
	仙台市	土手内遺跡	SI10	古墳前期			○				仙台市1992
	名取市	野田山遺跡	2号住居跡	古墳前期	○					一部	県1992
	名取市	野田山遺跡	6号住居跡	古墳前期	○					一辺	
	名取市	野田山遺跡	23号住居跡	古墳前期	○					「L」字形	
	亘理町	宮前遺跡	第2号住居跡	古墳前期		○		○			県1983c
	亘理町	宮前遺跡	第49号住居跡	古墳前期			○				
山形	山形市	梅野木前1遺跡	ST242	古墳前期	○					「コ」字形	県埋文センター2007a
	山形市	梅野木前1遺跡	ST250	古墳前期	○					「コ」字形	
	山形市	梅野木前1遺跡	ST270	古墳前期	○					「=」相対する辺にベッド状施設あり	
	河北町	熊野台遺跡	47号住居跡	古墳前期	○					「「」形	県1980
福島	いわき市	折返A遺跡	第42号竪穴住居跡	古墳前期		○	○	○			いわき市2003
	郡山市	北山田遺跡	4号住居跡	古墳前期	○					「⌐」形	郡山市1988
	郡山市	上之内遺跡	1号住居跡	古墳前期			○				郡山市1996b
	大玉村	上ノ台遺跡	6号住居跡	古墳前期					○		大玉村1992
	会津坂下町	樋渡台畑遺跡	第2号住居跡	古墳前期	○					「コ」字形	会津坂下町1990b
群馬	伊勢崎市	三和工業団地Ⅰ遺跡	9号住居	古墳前期			○				県埋文事業団1999
	伊勢崎市	三和工業団地Ⅰ遺跡	12号住居	古墳前期			○			外周溝が伴い、外延溝と接続する	
埼玉	深谷市	明戸東遺跡	第2号住居跡	弥生末～古墳初頭					○	土坑を覆う炭化材(蓋)あり	県埋文事業団1989
静岡	浜松市	中平遺跡	SB4・10・14・15・16・22・60・74・80・83・86・87・88・91・96・103・108・118・119・130・149・159・160・165	弥生後期～古墳前期			○				浜松市1982
	浜松市	中平遺跡	SB54	弥生後期～古墳前期			○	○			
	浜松市	坊ヶ跡遺跡	SB02・09・12・14・15・16・26・27・28・29・31・34・42・44・49・51・54・58・59・62・63・67・78・79・84・89・93・94・95・96・98・99・100・101・105・106・107・109・110・111・112・113・118・120・121・122・125	弥生後期末～古墳前期			○				浜松市文化協会2004
	浜松市	坊ヶ跡遺跡	SB35・37・91・92・103	弥生後期末～古墳前期			○	○			
	浜松市	大平遺跡	SB01・02・07・08・09・12・13・14・15・24・25・27・29・32・33・34・35・36・38・39・41・46・52・58	古墳前期			○				浜松市文化協会1992
	浜松市	大平遺跡	SB30	古墳前期			○	○			
	浜松市	大平遺跡	SB05・30・40・44・53・57	古墳前期			○	○			
	浜松市	大平遺跡	SB40	古墳前期			○	○			
	浜松市	大平遺跡	SB44	古墳前期			○	○			
	浜松市	大平遺跡	SB57	古墳前期			○	○			
	浜松市	大平遺跡	SB53	古墳前期			○	○			
愛知	豊田市	高橋遺跡	11-SB50	古墳前期				○	○		豊田市教育委員会2015
	豊田市	高橋遺跡	13-SB02・5-T11-SB02	古墳前期			○				
	豊田市	高橋遺跡	11-SB17・11-SB37・13-SB13	古墳前期			○	○			
岐阜	多治見市	喜多町西遺跡	SB02	古墳前期			○				多治見市2005
三重	四日市市	伊坂遺跡	SH103	古墳前期			○				県埋文センター2004a
	四日市市	辻子遺跡	SH2	古墳前期						土坑を覆う炭化材(蓋)あり	県埋文センター2004b
	明和町	北野遺跡(第5次)	SH19	古墳初頭			○				県埋文センター1996
	松阪市	村竹コノ遺跡	SH304・729・730	弥生後期～古墳初頭			○				県埋文センター2009
	菰村	北野遺跡	SB75・78・87	古墳前期			○				県埋文センター1991

置し周溝と接続する事例が多いこと、その中には建物隅に土坑状のものがあること、外延溝が認められる竪穴建物は全体の半数以下の割合であること、等の特徴がある（神谷 2015）。関東地方では、群馬県伊勢崎市三和工業団地Ⅰ遺跡で建物の隅に位置する事例が確認されている（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999、飯島 2004）。これらは、入の沢遺跡の SI8・15・17 の事例と類似するが、一定の規模や深さを持つ土坑が周溝や外延溝と高低差をもって接続する例はわずかである[註 8)]。また、土坑周囲の土手状の高まりのあるものについては、埼玉県明戸東遺跡第 2 号住居跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989）や愛知県豊田市高橋遺跡 11-SB50（豊田市教育委員会 2015）で認められる。高橋遺跡では弥生時代後期の竪穴建物跡でも一定量検出されている（豊田市教育委員会・豊田市郷土史研究会 1977）。

この他に、古墳時代前期の竪穴建物跡で検出されたベッド状施設の類例としては、宮城県名取市野田山遺跡 2・6 号住居跡（宮城県教育委員会 1992）、石巻市須江糖塚遺跡第 3・4 号住居跡（河南町教育

委員会 1987)、山形県山形市梅野木前 1 遺跡 ST242・250・270（山形県埋蔵文化財センター 2007a)、河北町熊野台遺跡第 47 号住居跡（山形県教育委員会 1980)、福島県郡山市北山田遺跡 4 号住居跡（郡山市教育委員会 1988)、会津坂下町樋渡台畑遺跡第 2 号住居跡（会津坂下町教育委員会 1990b）があり、入の沢遺跡の SI13 と同じく建物の二辺にわたって認められるものは、野田山遺跡 23 号住居跡、須江糖塚遺跡第 3 号住居跡、熊野台遺跡第 47 号住居跡、北山田遺跡 4 号住居跡の 4 例である。

比較できる遺構は限定的であり、細部では相違点が認められた。特に SI13 は構成する床面施設が多く、各施設が規模や形状の面から一定の精度で造られ、そしてそれらが有機的に関係する点で当該期の竪穴建物としては複雑な構造と言える。そして、その構造は類例と比較すると特異である。SI13 には及ばないが、SI10 も各施設の精度やそれらの有機的な関連が想定され、SI8・15・17・18 も SI13、SI10 に準じて当該期では特殊な構造との位置付けが可能である。

C. 遺物の出土位置

焼失竪穴建物で遺物が多く出土した SI13・10・17・19 を対象に、出土位置の検討を行う。これらは火災による廃絶直前の状態を表していると考えられるため、遺物の内容と出土状況から推定される建物内の配置を検討する。遺物の出土位置の模式図は第 116 図、文中の鉄製品と土師器の器種の後に括弧つきで示した番号は、遺物の登録番号であり、それぞれの遺物出土状況で示した遺物の番号と一致する。多数の遺物が出土した SI13、次に SI10・17・19 の順に記述する。

【SI13】遺物は、主柱穴よりも外側で立地する地形の標高の高い方角の壁際と、炉（Y1）周辺から出土した（第 47・48・116 図)。南東部のベッド状施設、南西部の K1 周辺、中央よりやや北側の Y1 周辺の 3 つの範囲に分布する。確認された 3 つの範囲では出土する遺物の組成や土器の器種に相違が認められる。

ベッド状施設:銅鏡（櫛歯文鏡、珠文鏡)、鉄製品、玉類、垂飾品、土師器、赤色顔料（水銀朱、ベンガラ)、動物遺存体（焼骨)、植物遺存体（炭化米、モモ核）が出土し、SI13 の中で遺物の種類と量が最も多い（第 47・48・116 図)。銅鏡、鉄製品、玉類、垂飾品、赤色顔料、動物遺存体のほとんどはこの範囲からの出土である。

櫛歯文鏡は南辺東側の中央部、珠文鏡はベッド状施設の裾部から鏡面を下にして出土した。いずれも鏡面に繊維が付着しており、櫛歯文鏡は密度の異なる 2 種類の繊維に、珠文鏡は 1 種類の繊維に包まれていたと考えられる（附章 3)。珠文鏡は、出土位置から、本来的にはベッド状施設上にあったものが火災の影響か火災後に移動した可能性がある。

鉄製品には、剣 3 点、鏃 1 点、鏃または剣 1 点、両頭金具 1 点、短冊形鉄斧 2 点、有袋鉄斧 2 点、方形板刃先 2 点、工具 3 点があり、剣 1 点と有機質が付着した刀子あるいは剣 1 点もここから出土した可能性がある。このうち短冊形鉄斧 1 点（第 47 図鉄器 3）と方形板刃先 2 点（鉄器 6・7）は出土状況から、苧麻製の繊維製品に包まれて大型の壺の中で保管されていたと考えられる。この他に、短冊形鉄斧 1 点（鉄器 1)、剣 1 点（鉄器 21 ＋ 29）にも繊維が付着しており、繊維製品に包まれていたと考えられる。また、両頭金具（鉄器 28）と有袋鉄斧 2 点（鉄器 5・32）には木質が残存して

おり、前者は弓に装着された状態、後者は短冊形鉄斧とは異なり着柄された状態で配置されていたと考えられる。

玉類には勾玉、管玉、臼玉、棗玉、丸玉、ガラス小玉、垂飾品には本村型琴柱形石製品がある。特に、玉類と垂飾品の大多数はベッド状施設から出土しており、玉類は南東隅（c-3 区）（第 49 図）、垂飾品は東辺中央付近（c-2 区）に集中する。

土師器には、大型の壺、高坏、小型壺、鉢がある。大型の壺は 4 点あり、いずれも正位の状態である。大型の壺（第 47 図 R 91・92 ＋ 107 ＋ 108）は壁際に配置されており、もう 1 個体（R 90）も同様に配置されていたものが北側に崩れたと推定される。小型の器種は東辺周溝内からの出土で、南辺周溝からの出土は認められない。周溝堆積土上面の高坏（R 104）、小型壺（R 97・105）と周溝堆積土内の鉢（R 288）、小型壺（R 290・316）は、ベッド状施設上に配置されていたものが、火災時やその直後に倒れて周溝内あるいは周溝上面に移動したか、あるいは周溝の蓋の上に配置されていたものが周溝内に落下した可能性が推定される。

水銀朱は 1 ヶ所、ベンガラは 3 ヶ所から出土した。位置は南辺中央よりやや東側である。水銀朱とベンガラ 2 ヶ所はそれぞれ 5cm 程度の間隔をあけて出土しており、有機質の入れ物で保管されていたと推定される。ヒトの四肢骨（附章 5）と考えられる焼骨もこの付近から出土した。炭化米は東辺の中央寄りから多く出土している。付近で出土したのは大型の壺（R 91）のみであり、保管形態は不明である。

ベッド状施設では南東隅から東辺中央、南辺中央までの範囲に、銅鏡、鉄製品、玉類、垂飾品、大型の壺や小型の器種の土師器、水銀朱やベンガラが配置されている。銅鏡や水銀朱の希少性、鉄製品を繊維で包み、一部は大型の壺の中で保管していることから、ベッド状施設の特に南東隅周辺は特殊品を配置・保管する場であったと考えられる。

土坑（K1）周辺：ガラス小玉、土師器、植物遺存体（炭化米）が出土した。ガラス小玉は K1 堆積土から出土し、調査時に確認できたものは 2 点である。

土師器には、高坏、器台、鉢、壺、有孔鉢があり、特に小型器種の割合が高い。このうち、鉢（第 47 図 R 100）は高坏（R 102）坏部、壺（R 98）は器台（R 99）受部にそれぞれ据えられており、東側や南側に倒れた状態で出土した。これらはそれぞれ組み合う 1 対の土器と考えられる。また、K1 の堆積土内の同じ地点から高坏（R 287・296）や器台（R 286）と鉢（R 299）が出土しており、これらも具体的な組み合わせは特定できないが、同様のものと推定される。K1 には木製の蓋が存在したと考えられ、対となる高坏（R 102）と鉢（R 100）、器台（R 99）と壺（R 98）や、器台（R 101）、鉢（R 103）、壺（R 87）は蓋の上に配置されていたと考えられる。これら以外に、完形の壺（R 88）や鉢（R 94）が横位で周溝、中型の壺（R 95）が正位で D1 上面にあたる位置から出土している[註 9)]。横位の鉢（R 85）は口縁部が K1 を向くことから、ベッド状施設の西端に配置されていたものが倒れた可能性がある。中型の壺（R 86）も同様の可能性がある。

炭化米はこの範囲から最も多く出土した。保管形態は明らかにできなかったが、土器内で保管されていたと仮定すると、ベッド状施設の西端（R86）、あるいは D1 の南端（R 95）に位置していたも

のから散布した可能性がある。

土坑周辺は、主として小型の器種の保管・配置の場として利用されていたと考えられる。

炉（Y1）周辺：鉄製品、土師器が出土した。鉄製品は短冊形鉄斧 1 点（第 47 図 鉄器 2）であり、Y1 堆積土上面から出土した。基部に繊維状のものが付着しており、着柄されていた可能性がある。

土師器には、高坏、器台、鉢、壺、甕がある。Y1 に近接して出土した器台（R 83）と鉢（R 84）は 1 対になる可能性がある。Y1 の東側から、高坏（R 74・75）、二重口縁の壺（R 79・80）、そして SI13 では僅かしか確認できない甕（R 77）が出土している。甕については、口縁部と底部が離れた位置から出土した。炉周辺では、土師器の様々な器種が少量ずつ配置されている。

【SI10】主柱穴よりも外側で、中央北側から北東側にかけての炉（Y1・2・5）周辺と南西隅の土坑（K1）周辺を中心に出土した（第 32・116 図）。

炉（Y1・2・5）周辺：土師器、石製品（砥石）、炭化米、白色粘土が出土した。土師器には高坏、器台、鉢、壺、甕がある。器種ごとでは、高坏（第 32 図 R 24・27・28）、器台（R 25・26・30）、鉢（R 32・33・36・42・342）の小型の器種の主体は北側、甕（R 31・35・37 ～ 41・44・72・284）は南側、壺（R 15 ～ 17・29・34）の主体は北端、北東端に分布し、高坏、器台と壺、甕は異なる分布となる。また、小型器種でも、高坏、器台は東側、鉢は西側に分布し、器種ごとで分布範囲が異なる。出土状態としては、遺存状態の良好なもので正位（高坏：R 28）、横位（壺：R 15・16、高坏・器台：R 24 ～ 27・30）、逆位（鉢：R 33）があり、屋根材に葺かれた土が被熱により硬化し焼土塊となって落下したため、その影響で細かく潰れた状態で出土したものもある（甕：R 31・35・38 ～ 41・44・72・284）。したがって、炉（Y1 ～ 4）周辺には、小型の器種と甕、その北側には壺が配置されていたと考えられる。また、SI10 出土土器の胎土、製作技術で認められた 2 つの土器群のうち、灰白色の色調で調整にヘラナデを多用する土器群（R 25・30 ～ 32・34 ～ 36・38 ～ 41・43・44・72・284・342）は中央より南側にまとまる傾向があり、調整にハケメを多用する土器群（R 37）は南側に 1 点のみの出土となる。

砥石（R 45）は分布の南端で Y5 のくぼむ地点に位置し、機能時の堆積土と考えられる焼土層の上面に据えられていた。

土坑（K1）周辺：土師器、石製品（砥石）が出土した。土師器には、器台、鉢、壺、甕、台付甕がある。器種ごとの分布では特に傾向は認められない。器台と鉢、小型壺は対になる可能性がある。胎土、製作技術で認められた 2 つの土器群については、K1 内から調整にハケメを多用する土器群（第 32 図 R 50・52・55・56・57 ＋ 62・60・64・65）が集中して分布し、炉周辺でまとまって分布した灰白色のヘラナデを多用する土器は 1 例（R 54）のみである。両者の土器群には、炉周辺と K1 周辺とで明瞭な分布の相違が確認できる。

砥石（R 59）は K1 の東側の南壁際に位置する。

K1 内から出土した土器は、炭化物や焼土を多く含む堆積土出土であることから、火災時あるいは火災直後に流入したものと考えられる。出土した土器は遺存状態がよく、破片も集中して出土したことから、高所からの落下とは考え難い。したがって、炭化材は未検出だが、K1 は木製の蓋に覆われてお

り、土器はその上に配置されていたことが推定される。また、D1 から出土した壺（第 32 図 R 48）や P3 から出土した器台（R 47）については、D1 には蓋がされていたと考えられることから、D1 の蓋上に配置され、火災によって蓋材とともに土器も落下あるいは横転したことが推測される。したがって遺物の配置としては、K1 蓋上の中央に壺（R 52）、甕（R 57 ＋ 62）、その周囲に小型の器種である器台（R 21・50・55・60・61・65）、鉢（R 20・23・51・53・54・63）、壺（R 58）、そして、P3 と D1 が重複する位置には、D1 の蓋上に器台（R 47）、壺（R 48）というものであったと考えられる。

その他：鉄製品（鑿）、土師器、石製品（砥石）が出土した。鑿（第 32 図 鉄器 10）は東辺中央付近の周溝上面で出土し、木質は認められないが繊維状の痕跡が認められる。土師器は P2 の北側で甕（R 18）が逆位の状態で出土した。

【SI17】北東隅、北西隅、南西隅の K1 周辺の 3 つの範囲からまとまって遺物が出土した（第 71・116 図）。いずれも主柱穴よりも外側の壁際である。土器の器種構成では、北東隅と南西隅が類似する。北東隅では土師器、石製品（砥石）が出土した。土師器には鉢、壺、甕があり、出土状態は正位（鉢：R 128・130、甕：R 129）と横位（壺：R 132、甕：R 133）である。北西隅では土師器の鉢と壺が出土した。横位のものが多い。南西隅では土師器の器台、鉢、壺、甕、有孔鉢が出土した。正位（器台：R 147）と横位（有孔鉢：R 142、壺：R 143、鉢：R 145）、K1 内に落ち込んでいるもの（壺：R 149、甕：R 150）がある。K1 は精査をしていないが堆積土は自然堆積であり、機能時は開放していたと考えられる。K1 内から出土した壺（R 149）、甕（R 150）は遺存状態が良好で、ほぼ完形の状態であったことから、炭化材は検出できていないが、SI13・10 の K1 と同様、SI17 の K1 にも蓋があり、そこに配置されていた土器が火災により蓋が焼失して K1 に落下した可能性がある。これら以外では、北辺中央の壁際で壺（R 134）が 1 個体出土している。

【SI19】K1 周辺、炉（Y1）周辺の 2 つの範囲からまとまって出土した（第 80・116 図）。炉周辺で出土した一部の土師器以外は、主柱穴よりも外側の壁際から出土する。また、分布範囲によって遺物の組成が異なり、主体となる土師器の器種構成も異なる。K1 周辺では、鉄製品（有袋鉄斧）、土師器の鉢、壺が出土した。有袋鉄斧（鉄器 9）には繊維や木質が認められず、着柄されていない状態であったと考えられる。土師器は、横位（壺：R 165・166、鉢：R 168・169）で出土したものが多い。炉（Y1）周辺では、銅鏡（内行花文鏡）、器台、鉢、壺が出土した。内行花文鏡は鏡面を上にして、土器は横位（器台：R 160・161）、逆位（鉢：R 171）の状態で出土している。

D. 造成手順

SI10 では主柱穴と建物内を縦断する溝跡（D1）（主柱穴→ D1）、SI13 では主柱穴と掘方埋土、主柱穴と建物内を縦断する溝跡（D1）（主柱穴→掘方埋土→ D1）とで新旧関係が認められ、一部ではあるが建物を造る際の具体的な手順が明らかとなった。したがって、これら 2 棟について造成手順を検討する。

SI10 では、最初に掘方を掘削し、埋土により床面を造り、主柱穴を建て、D1 を掘削している。その他の床面施設の造成順序は確認できていないが、周溝や D1・2、土坑（K1）は密接に関連してい

ることから、D1 と同様に主柱穴を建てた後に造っていたと考えられる。屋根については、どの段階で架構したか不明である。SI13 では、最初に掘方を掘削し、床面を作る前に主柱穴を建てている。その後に埋土により床面とベッド状施設を造り、床面施設を造成している。屋根の造成順については、SI10 と同様不明である。

竪穴建物を構成する施設の中で、力学的に配置が最も重要なのは屋根を支える主柱穴であり、屋内空間の視点からも主柱穴の位置が重要と考えられる。SI10・13 のように多くの床面施設を持つ竪穴建物跡では、主柱穴がその他の遺構の配置を決める際の一つの基準になったと推定される。

E. 性格

遺物、遺構の検討結果に基づいて、竪穴建物跡の性格を推定する。

【SI13】 B 区では最大の規模で、かつ床面施設の構成から複雑な構造を有した特殊な竪穴建物跡である。周溝全体の改修や新たな土坑の掘削等、改修の規模が他の竪穴建物跡より大きい。出土遺物は特殊なものが多く、日常的に使用されるものは少ない。土師器についても、高坏と鉢を中心とする小型の器種と大小の壺が主体で甕がごく僅かという器種構成や、成形や調整から他とは異なる特徴を持つ土器群である。特に大型の二重口縁の壺は類例が僅かで、4 個体が並んで出土する例は異例である。遺構、遺物の配置からは床面上での作業空間は大きく限定される。床面の硬化面も明確には確認できなかったこともあり、SI13 は居住・生活とは異なる性格の建物と推定される。SI13 の屋根構造は伏屋式と考えられ、精査を行った他の竪穴建物跡と相違はないことから、外観の構造で他の竪穴建物跡と優劣や相違を判断する根拠は認められない。また、B 区北辺中央の北斜面に位置し、周辺には広場と考えられる空間もなく、立地の面を含めて祭祀等の特別な活動を行う場としての機能を持ったとも考えられない。出土遺物の内容や配置からは、倉庫として貴重なものを保管する機能の竪穴建物であったと考えられる。

【SI10】 床面施設の構成は SI13 と同様一般的ではなく、複数の炉跡が硬化面になるのも特徴的である。ただし、ベッド状施設等の特殊な床面施設や非日常的な遺物は認められない。遺物は土師器が主体で、50 個体以上出土した。小型の器種と壺、甕が主体となり、使用痕跡が認められた甕はごく僅かである。遺構や遺物の配置から床面上での作業空間は限定され、これらから、SI10 についても居住・生活とは異なる機能を有した竪穴建物であった可能性がある。

なお、土器の配置には、胎土と調整技術によって確認できた 2 つの土器群において異なる傾向が確認できた。これらには一部の器種で用途にも相違が認められ、1 棟の竪穴建物の中で分布と用途が異なる 2 種類の土器群が存在する可能性がある。SI10 や遺跡の性格を考えるうえで注目される。

【SI19】 竪穴建物の構造の面で特殊性は認められないが、出土遺物に内行花文鏡と有袋鉄斧があることは特殊である。土師器には鉢が主体で二重口縁の壺がある一方、甕が認められない。遺物の面からは SI19 も居住・生活とは異なる機能を有した竪穴建物であった可能性がある。

【SI17】 竪穴建物の構造は、土坑とそれに接続する周溝、外延溝の存在から特殊であるが、遺物は土師器主体で、器種は甕と鉢が中心であり、当該期の竪穴建物跡出土土師器の器種構成としては一

般的である。甕には付着物が認められ、使用の痕跡が明瞭である。立地についても南西斜面であり、SI13・10・19 とは異なる。したがって、SI17 は居住・生活空間を備えた「竪穴住居」と考えられる。

【その他の竪穴建物跡】SI8・15 は SI17 と床面施設が類似するが、出土遺物も少量であり性格は不明である。その他の竪穴建物跡についても同様に不明である。

②区画施設

A. 特徴

区画施設には大溝跡、材木塀跡、盛土遺構がある。これらは並行しており、一体となって区画施設を形成していたと考えられる。以下、それぞれの特徴を記述する。

【SD1 ～ 3 大溝跡】3 条検出し、その内容を第 12 表にまとめた。SD1 は A 区の南西側に位置し、検出長 40m、SD2 は A 区北側に位置し、調査は行っていないが推定される長さは 43m 以上、SD3 は B 区の西側から北側に位置し、検出長は部分的に検出したものを含めると 112m である。これらは位置関係や堆積土の類似から接続する一連の大溝跡と考えられる。未精査の部分を含めると総長 330m 程度と推定される。精査を行った範囲では、いずれも丘陵斜面上に立地しており、丘陵斜面が急角度に削り出されて造られたものと考えられる。SD1 底面と A 区との高低差は 4.7m、SD3 底面と B 区との高低差は 4.0m である。

平面形は地形にあわせた不整形で、A 区と B 区の間にある沢と B 区北側に延びる丘陵尾根の中間地点にあたる SD3 北西隅には、北西方向へ奥行き幅ともに 7m の凸形の張り出し部が認められた。張り出し部には様々な機能が考えられるが、SA4 材木塀跡が途切れることなく張り出し部に並行して検出されたこと、柱穴等の遺構が認められないことから、出入口施設の可能性は低い。

一定の範囲を調査した SD3 では、張り出し部とそれより東側・南側で下幅と深さ、断面形に異なる特徴が認められた。張り出し部では、それ以外の範囲と比べて下幅が広く、深さが浅くなる。そのため､それ以外の範囲が「V」字形かそれに近い断面形になるのに対して張り出し部では逆台形となる。

【SA71・4 材木塀跡】2 条検出した。SA71 は A 区南西縁、SA4 は B 区の西側から北西側の縁辺部でいずれも緩斜面上に立地する。本来は、A・B 区の丘陵尾根平坦面の縁に位置していたと想定されるが、現在までの間で縁辺が崩壊したことで、緩斜面上での検出位置になったと考えられる。

SA71 は掘方の幅 20 ～ 70cm、深さ 39 ～ 100cm 程度、SA4 は掘方の幅 20 ～ 60cm、深さは SI7 と重複する地点で 30cm、SI13 の北側で 96cm である。SA4 では材痕跡が確認され、長軸 10 ～ 20cm の円形、楕円形で、材の間隔は 1 ～ 35cm である。なお、A 区の北縁でも同様の遺構の存在を確認している。

【SX72・41 盛土遺構】SD1 の南西側と、SD3 の西側から北側にかけての丘陵斜面には、旧表土上に盛土が行われていた。SX41 の一部では高まりとして残っていること、盛土の特徴から SD1・3 掘削時に生じた土を起源としていると考えられること、SD1・3 に並行していること、SD1 の堆積土には南西側の壁際に盛土遺構の崩壊土と考えられる層（第 9 図 19 層）が認められることから、盛土遺構は土塁の可能性がある。

B. 類例との比較

入の沢遺跡で検出された大溝跡、材木塀跡、盛土遺構について類例との比較を行い、それぞれの位置づけを行う。そして、それらの組み合わせとしての区画施設の特徴を検討する。

【溝跡】東北地方における古墳時代前期の遺跡で、区画施設と考えられる溝跡が検出されたのは宮城県栗原市伊治城跡（築館町教育委員会 1992・1998）、登米市佐沼城跡（迫町教育委員会 1995）、美里町山前遺跡（小牛田町教育委員会 1976）、大郷町鶴館遺跡（大郷町教育委員会 1994・2011）、福島県会津坂下町東舘遺跡（会津坂下町教育委員会 1994a）である（第 114 図、第 8 表）。いずれも部分的な調査であり、全容が判明したものはないが、立地、平面形、規模、断面形、溝跡で区画された内部の検出遺構の各点で比較を行う（第 12 表）。

立地では、入の沢遺跡と鶴館遺跡、佐沼城跡が丘陵で、それ以外は河岸段丘である。佐沼城跡と河岸段丘上の遺跡は、入の沢遺跡や鶴館遺跡と比べて遺跡内での平坦な地形の割合が高い。周辺の低地との高低差では、入の沢遺跡と山前遺跡、鶴館遺跡が 20m 以上と大きいが、それ以外は 10m 以下である。平面形がわかるものは少ないが、伊治城跡は方形、入の沢遺跡、山前遺跡、鶴館遺跡は地形に合わせた不整形と推定される。張り出し部は、入の沢遺跡と山前遺跡でのみ検出されている。山前遺跡の張り出し部は奥行き約 14m、幅約 16m であり、入の沢遺跡の 2 倍以上の規模である。溝跡の規模では、上幅 2 ～ 3m 主体が入の沢遺跡、伊治城跡、佐沼城跡、3 ～ 6m 主体が山前遺跡、鶴館遺跡、11m 以上が東舘遺跡である。断面形では、逆台形が伊治城跡、大きく開く逆台形が佐沼城跡と東舘遺跡、「V」字形や「U」字形、逆台形が入の沢遺跡、山前遺跡、鶴館遺跡である。溝跡で区画された内部には、入の沢遺跡、佐沼城跡、山前遺跡、鶴館遺跡で竪穴建物跡が検出され、佐沼城跡では掘立柱建物跡も検出されている。入の沢遺跡は、溝跡の規模は異なるが、立地や平面形、断面形等の諸点で鶴館遺跡との共通点が認められ、立地や規模に相違はあるが、張り出し部を有することや溝跡の内部の遺構の状況において山前遺跡とも類似点が確認できる。

東日本を対象に、形状の推定が可能な古墳時代前期の区画溝跡を集成したのが第 12 表である。当該期では関東地方に類例が一定数確認できるため（東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会編 1998）、関東地方の遺跡と比較を行う。立地では台地や河岸段丘といった低地との高低差が小さい平坦な地形が主体、溝跡の平面形は方形を基準としたものが主体であり、これらについては入の沢遺跡と異なる特徴となる。規模では、一部で小規模のものがあるが、多くは入の沢遺跡と同程度である。張り出し部の規模については、奥行きに対して幅が大きいものが多く、入の沢遺跡の張り出し部のように幅と奥行きの大きさが同程度のものは茨城県茨城町奥谷遺跡（茨城県教育財団 1989）のみである。なお、張り出し部はこの時期、九州地方の小迫辻原遺跡（大分県教育委員会 1999、日田市教育委員会 2000・2011）や小部遺跡（宇佐市教育委員会 2004）でも確認できる。溝跡で区画された内部には、竪穴建物跡が検出されているものが主体である。その中でも 5 棟以下の茨城県那珂市森戸遺跡（茨城県教育財団 1990）、栃木県さくら市四斗蒔遺跡（橋本 1999・2000）と、10 棟以上と推定される栃木県小山市下犬塚遺跡（小山市教育委員会 1992）、埼玉県熊谷市北島遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005）、千葉県柏市呼塚遺跡（地域文化財研究所 2012）、柏市戸張一番割遺跡（山

第 12 表　古墳時代前期の区画溝跡

県	遺跡	市町村	立地	遺構	平面形	その他の遺構			規模（m）				断面形	備考	文献
						材木塀跡（布掘溝跡）	土塁跡	張り出し部	検出長	上幅	下幅	深さ			
宮城	入の沢遺跡	栗原市	丘陵	SD1	不整形	○	○	○	40	4	1.3	1.4	逆台形	1 ヶ所のトレンチ調査のみ	本書
				SD3 張り出し部の東側					112	2.9	0.5 ～ 1.0	0.8 ～ 1.2	「V」字形		
				SD3 張り出し部						2.4 ～ 3.5	1.0 ～ 1.9	0.7 ～ 0.9	逆台形		
				SD3 張り出し部の南側						3	0.3 ～ 0.8	1.1 ～ 1.5	「V」字形		
	伊治城跡	栗原市	河岸段丘	SD260・261	方形	○	×	×	38	2.3 ～ 3.0	0.7 ～ 1.2	1.2	逆台形		築館町 1992・1998
				SD273・274・275					33.2	0.9 ～ 3.4	0.3 ～ 2.0	—	—		
				SD483					8	2.5	0.8	1	逆台形		
				SD491					3	2.0 以上	—	0.5 以上	逆台形		
	佐沼城跡	登米市	丘陵	SD105	不明	○	×	?	19	2.6 ～ 3.0	1.5 ～ 2.0	0.4 ～ 0.5	大きく開く逆台形	区画の内部に竪穴建物跡あり	迫町 1995
	山前遺跡	美里町	河岸段丘	大溝 1	不整形	?	×	○	—	3 ～ 6	—	1.0 ～ 4.0	「V」字形、「U」字状、逆台形		小牛田町 1976
				大溝 2										区画溝か？	
				大溝 3											
	鶴館遺跡	大郷町	丘陵	第 2 号溝跡	不整形	?	○	?	125	3.0 ～ 9.0	0.5 ～ 2.0	1.5	「U」字形		大郷町 1994・2011
				第 11 号溝跡					22	1.5 ～ 2.5	0.5 ～ 0.7	0.2 ～ 0.5	—		
				SD2					62	3.4 ～ 4.6	0.4 ～ 1.4	1.1 ～ 2.4	「V」字形、「U」字状、逆台形		
福島	東舘遺跡	会津坂下町	河岸段丘	SD01	不明	×	×	?	182	11.0 ～ 17.5	1.0 ～ 5.5	1.8 ～ 2.2	大きく開く逆台形	平面形は「コ」字状	会津坂下町 1994a
茨城	森戸遺跡	那珂市	河岸段丘	第 10.11 号堀	方形か	×	×	○	99	2.9 ～ 4.7	1.8 ～ 2.4	0.8 ～ 1.3	逆台形		県教育財団 1990
	奥谷遺跡	茨城町	河岸段丘	第 5 号溝	方形か	×	×	○	76	2.2 ～ 4.3	1.0 ～ 4.8	0.6 ～ 1.0	逆台形		県教育財団 1989
	国生本屋敷遺跡	常総市	台地	方形居館跡	方形か	○	×	×	長軸 80、短軸 76	4	不明	2	不明	区画の内部に竪穴建物跡あり	阿部編 2006
栃木	堀越遺跡	矢板市	低位台地	方形区画遺構	方形	○	×	×	北辺 50.6、南辺 49.5、東辺 47.1、西辺 46.3	2.8 ～ 4.4	1.2 ～ 2.1	1.0 ～ 1.6	逆台形	区画の内部には竪穴建物跡 1 棟のみ	とちぎ生涯学習文化財団 2005
	四斗蒔遺跡	さくら市	段丘	1 号遺構　濠	方形	○	○	○	—	3.0 ～ 4.0	0.8 ～ 1.6	1.2	逆台形	区画の内部に竪穴建物跡あり	橋本 1999・2000
				2 号遺構　濠	方形	○	×	×	—	4.1	2.5	1.6	逆台形		
	下犬塚遺跡	小山市	台地	1 号溝	方形	×	×	?	62	1.8	0.2	1	「V」字形	区画の内部に竪穴建物跡多くあり	小山市 1992
群馬	有馬条理遺跡	渋川市	微高地	1 号溝	方形	○	×	?	南北 63、東西 73	1.2	不明	0.4 ～ 0.5	不明		県埋文事業団 1989
埼玉	北島遺跡	熊谷市	自然堤防	第 464 号溝跡	方形	×	×	○	282	0.85 ～ 3.8	0.2 ～ 2.0	0.39 ～ 1.44	逆台形、「V」字形		県埋文事業団 2005
千葉	高岡大山遺跡	佐倉市	台地	環濠	円形	×	×	×	長軸 60、短軸 57	1.2 ～ 2.8	0.8 ～ 2.2	0.5 ～ 1.2	逆台形	土橋あり、区画の内部に竪穴建物跡多くあり	印旛郡市センター 1993
	呼塚遺跡	柏市	台地	1 号溝	方形か	○	×	○	100	3.6 ～ 5.0	1.3 ～ 2.2	1.0 ～ 1.5	逆台形	区画の内部に竪穴建物跡多くあり	地域文化財研究所 2012
	戸張一番割遺跡	柏市	台地	1 号濠	方形	×	×	○	南北 84、東西 120	2.3 ～ 3.7	0.1 ～ 0.4	1.2 ～ 2.1	「V」字状	区画の内部に竪穴建物跡多くあり	柏市 2006
東京	赤羽台遺跡	北区	台地	方形区画溝	方形	×	×	×	長軸 53.5、短軸 47.5	1.3	不明	0.1 ～ 0.25	箱堀状	区画の内部に竪穴建物跡あり	東北新幹線赤羽地区遺跡調査会調査団 1992
長野	石川条理遺跡	長野市	自然堤防	方形区画遺構	方形	×	×	○	東西 120、南北 60	10 ～ 13	—	—	—	区画の内部に土器廃棄土坑、井戸あり	県埋文センター 1997
静岡	土橋遺跡	袋井市	微高地	SD102	方形	×	×	×	63	1.1 ～ 2.3	0.6 ～ 1.8	0.2 ～ 0.5	逆台形	区画の内部に掘立柱建物跡あり	袋井市 1985
	小深田遺跡	焼津市	微高地	溝	方形	×	×	×	東西 21、南北 18	2	—	0.3 ～ 0.4	—	区画の内部に掘立柱建物跡、竪穴建物跡、井戸跡あり	焼津市 1982・1984
大分	小部遺跡	宇佐市	河岸段丘	SD01	円形	○	×	○	220	1.0 ～ 2.5	—	0.4 ～ 0.9	「V」字形		宇佐市 2004
	小迫辻原遺跡	日田市	台地	1 号方形環濠建物	方形	○	×	×	1 辺 47	3.5	—	1.5	逆台形、「V」字形	区画の内部に掘立柱建物跡あり	県 1999
				2 号方形環濠建物	方形	○	×	×	1 辺 36	2	—	1	逆台形	区画の内部に掘立柱建物跡あり	
				3 号方形環濠建物	方形	×	×	×	1 辺 20	1	—	0.5	逆台形	区画の内部に掘立柱建物跡あり	
				1 号環濠	不整形か	×	×	○	100	2.5	—	1	逆台形	区画の内部に竪穴建物跡あり	
				2 号環濠	円形	○	×	○	290	3	—	1.5	—	区画の内部に竪穴建物跡あり	
				3 号環濠	隅丸方形	×	○	×	1 辺 100	4.5	—	1.6	「V」字形、逆台形	区画の内部に竪穴建物跡あり	

武考古学研究所 1985、柏市教育委員会 2006）があり、入の沢遺跡は後者と共通する。

古墳時代前期の溝跡により竪穴建物跡群を区画する遺跡は、東北地方よりも関東地方の方が多く、かつ東北地方よりも古い時期のものが多い（東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会編 1998）。入の沢遺跡と関東地方の諸遺跡とは、立地や溝跡の平面形は異なるが、規模の面では張り出し部を持つ遺跡と類似する特徴がある。

【材木塀跡】大溝跡とともに材木塀跡が検出されたのは、宮城県伊治城跡、佐沼城跡である。なお、福島県いわき市折返 A 遺跡・菅俣 B 遺跡（いわき市教育委員会 2003）、東舘遺跡では柱列跡が検出されている。佐沼城跡では、掘方の幅 40 ～ 50cm、深さ 30cm、材痕跡は円形で径 15cm 前後、材痕跡の間隔は 10 ～ 18cm である。東北地方以外では新潟県荒川町道端遺跡（新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005）、茨城県常総市国生本屋敷遺跡（阿部編 2006）、栃木県矢板市堀越遺跡（旧登口遺跡）（とちぎ生涯学習文化財団 2005）、栃木県さくら市四斗蒔遺跡、群馬県渋川市有馬条理遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989）、千葉県柏市呼塚遺跡、大分県日田市小迫辻原遺跡、大分県宇佐市小部遺跡に類例が認められる。いずれも区画施設である溝跡の内側に材木塀跡の掘方と考えられる布掘の溝跡が検出されている。古墳時代前期には、区画施設としての溝跡と材木塀跡の組み合わせが、東北地方から九州地方まで事例は少ないながら認められ、入の沢遺跡はその中でも最北の事例と言える。

【盛土遺構（土塁跡）】盛土遺構または土塁跡が検出されたのは、宮城県鶴館遺跡と栃木県四斗蒔遺跡、大分県小迫辻原遺跡である。いずれも入の沢遺跡と同様大溝跡の外側に存在したと推定され、鶴館遺跡では積土の一部（大郷町教育委員会 1994）、四斗蒔遺跡では濠跡から土塁の積土の可能性がある堆積土が確認されている（橋本 1999・2000）。

【区画施設の構成】区画施設では、A 類：溝跡、材木塀跡（布掘溝跡）、盛土遺構（土塁跡）から成るものが入の沢遺跡と栃木県四斗蒔遺跡、B 類：溝跡、材木塀跡（布掘溝跡）から成るものが伊治城跡、佐沼城跡、茨城県国生本屋敷遺跡、栃木県堀越遺跡、群馬県有馬条理遺跡、千葉県呼塚遺跡、C 類：溝跡のみが山前遺跡、鶴館遺跡、福島県東舘遺跡、茨城県森戸遺跡、茨城県奥谷遺跡、栃木県下犬塚遺跡、埼玉県北島遺跡、千葉県高岡大山遺跡（印旛郡市文化財センター 1993）、千葉県戸張一番割遺跡、東京都赤羽台遺跡（東北新幹線赤羽地区遺跡調査会調査団 1992）である。このうち、張り出し部が認められるものは、A 類の入の沢遺跡、四斗蒔遺跡、B 類の呼塚遺跡、C 類の山前遺跡、森戸遺跡、奥谷遺跡、北島遺跡、戸張一番割遺跡である。

入の沢遺跡については複数の区画施設を組み合わせた構造であることが特徴である。この複数の区画施設の存在と丘陵上の立地から防御性が重視されたことが想定され、このような遺跡は、鶴館遺跡等、現状では東北地方太平洋側の宮城県北部にのみ確認できる（古川ほか 1993、藤沢・大谷 1998、青山 1999）。ただし、溝跡で区画される遺跡が確認できること、溝跡の内側に材木塀跡が並行するものがあること、張り出し部が造られること、溝跡の内側に竪穴建物跡が多く認められること等、遺構の構成という点では関東地方を中心とする地域との類似も認められる。

3）遺構の配置

古墳時代前期の遺構の配置を示したものが第 118 図である。大溝跡は、A 区と B 区の境付近にある南から入る谷部分とその西側の急斜面の範囲は不明であるが、それ以外では現地形の状況から A・B 区全体を区画すると考えられる。材木塀跡と盛土遺構についても、大溝跡に並行して同様の範囲を巡ると推定される。

遺構の中心となる竪穴建物跡は、A・B 区の丘陵尾根上、緩斜面上に多く認められる。精査を行ったのは一部であるが、平面形や堆積土の特徴から未精査のものの多くもこの時期と考えられ、それらを合計すると竪穴建物跡は 39 棟で、この他に竪穴建物跡の可能性があるものが 8 基認められる。A 区は B 区に比べて標高が高く、その尾根頂部には 1 辺 8m を超える SI64 と 1 辺 7m の SI57 が方向をそろえて位置している。また、A 区は B 区よりも竪穴建物跡の検出数も少なく、A 区と B 区では遺構の規模や配置の面で異なる特徴が認められる。

入の沢遺跡では、重複する竪穴建物跡が少ないが、それぞれの位置関係から複数の遺構期の存在が想定される。一方、出土遺物は古墳時代前期後半に限定されており、現時点では、長期にわたって継続した遺跡とは考えにくい。精査を行った遺構が一部に限られるため、遺構期の詳細な時期や様相、変遷の検討は今後の課題である。

焼失した竪穴建物跡に注目すると、これらは遺跡の最終段階には同時に存在し、これらの焼失後に遺跡が廃絶したと推定される。ただし、検出した範囲では、材木塀跡と大溝跡に火災の痕跡が認められず、最終段階に機能していた施設のすべてが火災にはあっていない可能性がある。

（3）遺跡の位置づけ

遺跡の性格、周辺遺跡との関係を検討し、遺跡の位置づけを行う。

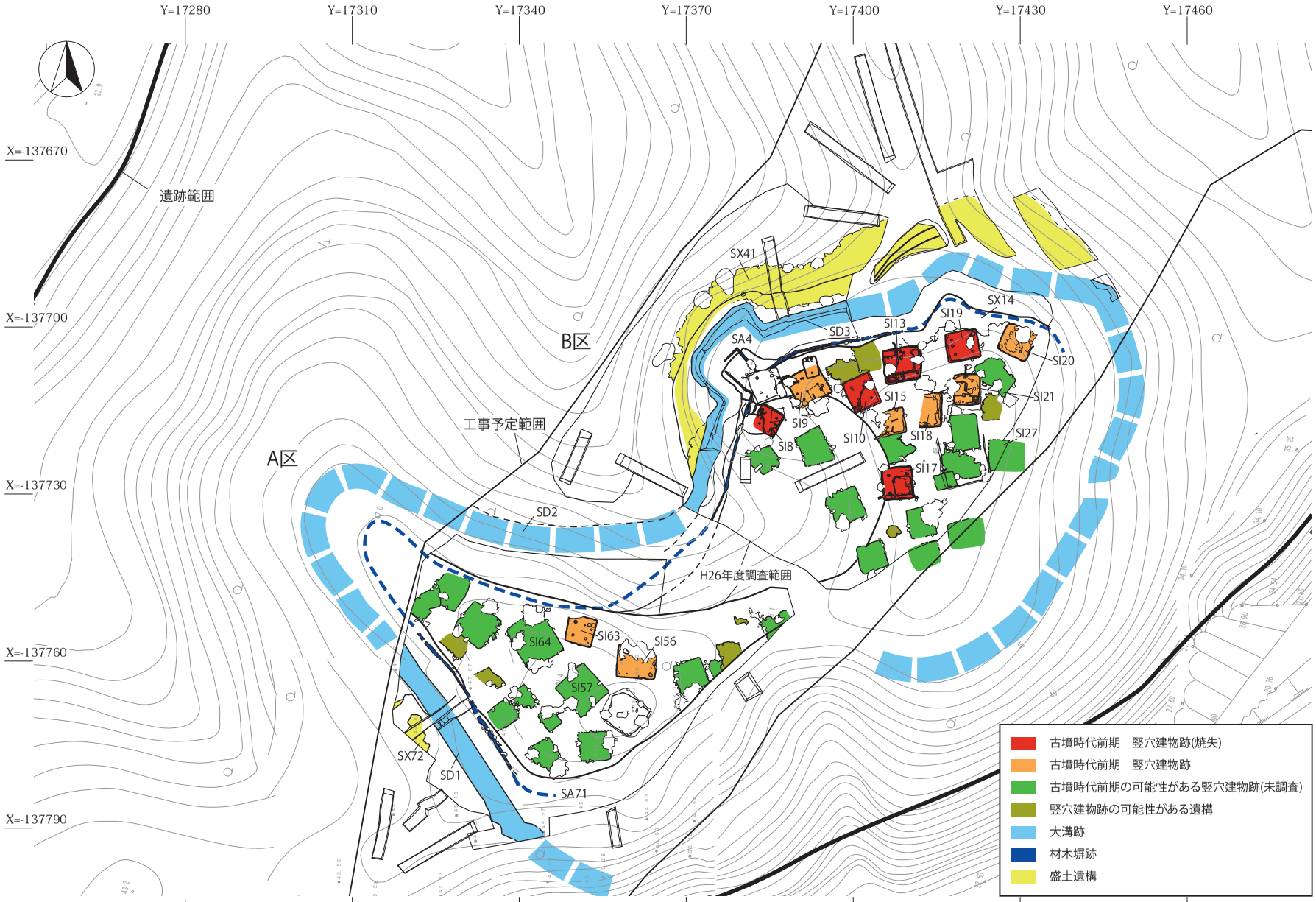
1）遺跡の性格

遺物と遺構それぞれの性格をまとめ、それらを総合させ、他遺跡との比較を通して遺跡の性格を推定する。遺物については SI13 竪穴建物跡出土遺物を中心とする。

①遺物

竪穴建物跡からは銅鏡や鉄製品が出土し、特に SI13 竪穴建物跡は、銅鏡、鉄製品、玉類・垂飾品、赤色顔料、炭化米、そして土器や石器・石製品が 1 棟の竪穴建物跡から出土している点で大変珍しい事例である。その組成について比較対象となるのは、東北地方では福島県会津若松市会津大塚山古墳のみで、SI13 出土遺物はこれに準じる内容と量である。このような遺跡は、東北地方では類例がなく、現時点では唯一の集落遺跡と位置付けられる。そして、銅鏡、鉄製品、玉類、垂飾品、繊維、水銀朱の各種遺物の出土事例としては当該期では最北である。一方で、古墳では副葬されない本村型琴柱形石製品が出土しており、集落遺跡の特徴も認められる。

出土遺物には、銅鏡に代表されるように古墳文化が浸透している地域で確認できる使用、維持、保管に関わる様々な痕跡が認められる。このことから、単に保有しているということだけではなく、これらの扱い方を知りえていたことが推定され、これらの現象が東北地方太平洋側の古墳文化の北縁域



第 118 図　古墳時代の入の沢遺跡

である入の沢遺跡でも確認できる点は重要である。

銅鏡や鉄製品、玉類、水銀朱といった流通による入手以外考えられない遺物が認められることは、古墳時代前期の各遺物の様々な広域流通の枠組みの中に入の沢遺跡が含まれていることを示している。玉類で確認できる石材と法量の多様性は、一括での入手ではなくその時々における小単位での入手と推定される。それらの中には集落の機能時期と同時期に製作されたものも存在し、製作から流通までの間に大きな時間差が認められないものもある。さらに、一部の玉類や水銀朱のように、畿内地域との関係を推察できるものもある。

これらの個々の遺物や組成は東北地方で比較すると特殊性が際立つが、一方で銅鏡の集落出土事例が全国的に見ても関東地方で多いことや、そこで出土する器種が入の沢遺跡 SI13 出土銅鏡と類似すること（篠宮・森下編 2010、森下 2015、脇山 2012・2015）、玉類で関東地方との類似性が確認できること等、全国的な古墳時代遺跡の中でその内容をみていくことも遺跡の理解には重要と考える。

②遺構

入の沢遺跡は低地との高低差が大きい丘陵上に立地し、その丘陵は広い範囲にわたって平坦面が確認できる地形ではなく、その範囲が限定される地形である。これは、周辺の遺跡が低地との高低差が小さい低平な丘陵や台地上に立地することとは異なる特徴である。さらに、当該期の東北地方では、区画施設が検出された遺跡は僅かであり、大溝跡と材木塀跡、盛土遺構が検出されたのは入の沢遺跡のみである。一方、区画施設内部で検出されたのは竪穴建物跡のみであり、この点は当該期の遺跡と同様の特徴である。

東北地方における竪穴建物跡が検出された遺跡の中で、調査範囲の影響もあるが、20 棟以上検出されたのは入の沢遺跡を含めて 13 遺跡である（第 8 表）。それらには密集して多くの重複関係が認められるものと、広い範囲に一定の距離をもって分布するものがある。入の沢遺跡では、大溝跡等により区画された限定的な空間に、互いに近接し密集するが、重複関係はごく一部のみという他遺跡とは異なる特徴が認められる。さらに、個別の竪穴建物跡の構造も東北地方の中では類例がごく僅かであり、その特徴や出土遺物から竪穴建物跡には居住とそれ以外の機能が想定された。立地や区画施設の存在、構成とともに、竪穴建物跡や竪穴建物跡群の各点で他の遺跡とは異なる特徴を有している。

③遺跡

A. 遺物と遺構のまとめ

土師器、方形を基準とする竪穴建物跡、そして炭化米の出土から推定される稲作の存在、さらに、竪穴建物跡から出土した銅鏡や鉄製品、玉類、水銀朱等の古墳の副葬品として位置づけることも可能な遺物から、前期大型古墳の分布域の北に位置しながらも、古墳文化を特徴づける様々な要素が認められる集落遺跡として位置付けることができる。遺物の特殊性とともに、防御性を強く意識した区画施設と、その内部の居住以外にも様々な機能を有したと考えられる竪穴建物跡群の特殊性も際立っており、遺物・遺構の両面で類例のない遺跡と言える。

遺物における他遺跡との隔絶した差、当該期の広域流通の枠組みに含まれること、大溝跡に代表される大規模な土木事業による造成、それを可能にする労働力の編成と造成技術、経済力から、入の沢遺跡は有力者によって造営された、当該期における古墳文化の中で最北に位置する拠点的な大規模集落と考えられる。そして、低地との高低差のある丘陵上に竪穴建物跡が密集する様子は、当該期の東北地方の遺跡の中でも一般的な立地の在り方ではないことから、自然発生的な集落ではなく意図的に造営された集落と考えられる。その規模や複数の竪穴建物跡から銅鏡が出土することから、様々な集団が関与して造営・経営がなされた可能性もある。入の沢遺跡の大きな特徴の一つである大規模な区画施設の存在は、この集落形成の要因が関係するものと推定される。

B. 立地

入の沢遺跡は、奈良時代の城柵である伊治城跡の南側に隣接している（第 119 図）。伊治城跡は一迫川に面した河岸段丘上に立地し、その範囲は東西 700m、南北 900m と広大である。古代の城柵は水運の便を考慮した陸上交通路の要衝に位置することが指摘されており（熊谷 2004）、伊治城跡は、古代の主要な陸上交通路に近接し、水上交通と陸上交通の結節点に位置していたと推定される。古墳時代の陸上交通路は不明であるが、古代の道路はそれ以前の在来の交通路を整備して造られたと推定され（永田 2016）、当該期においても入の沢遺跡周辺に南北を縦貫する陸上交通路が存在した可能性が考えられる[註 10)]。したがって、入の沢遺跡は、南の古墳文化の地域と水陸の交通路で接続しながら、より北の地域にも臨める位置にある集落と考えられる。

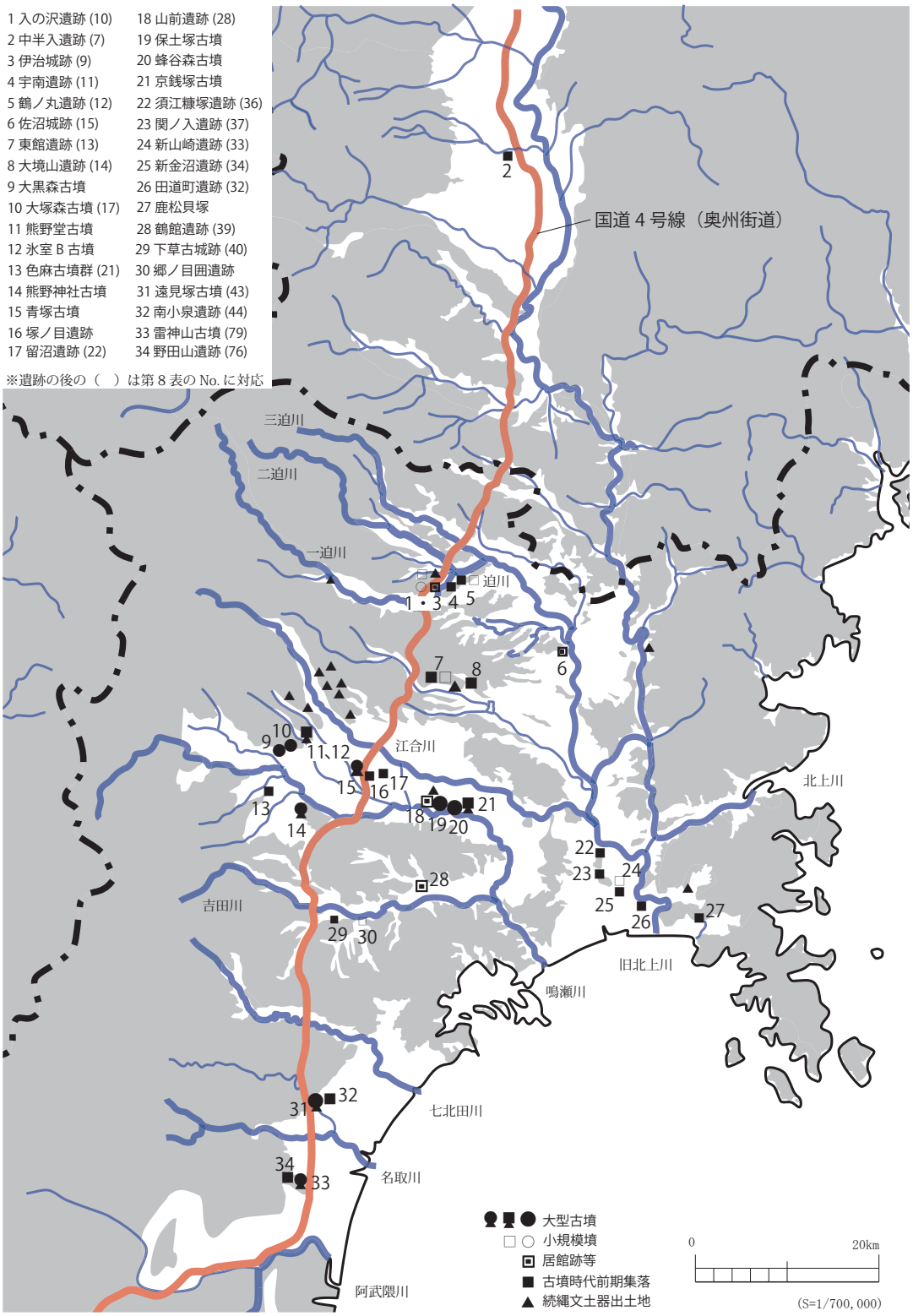
C. 古墳文化の北縁域に位置する遺跡の特質

入の沢遺跡から出土した遺物の評価については、その内容と東北地方の遺跡との比較から、頻繁な再利用により残存しにくい金属製品の特徴を考慮しても、古墳時代集落の実際の姿を表すとは考えられない。また、祭祀を主目的として保有された可能性も想定されるが、それに関わる遺構が認められず現段階ではその可能性は低いと考えられる。これ以外に考えられる要因として、古墳の副葬品として集積された可能性[註 11)] と、祭祀以外の遺跡の性格に関わる可能性が挙げられる。

祭祀以外の遺跡の性格としては、古墳文化の北縁域で交通の要衝に位置する点が注目される。古墳文化の周縁に位置する遺跡には、日本海側では新潟県胎内市城の山古墳（水澤 2013ab・2014abc）、太平洋側では時期は異なるが岩手県奥州市中半入遺跡（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002）がある（第 114・119 図）。

城の山古墳は、新潟県北部の蒲原平野の扇状地に立地し、日本海に面した地域では古墳時代前期の最北に位置する前方後円墳である。全長は 62m で、主体部からは畿内との関係を想定させる価値の高い副葬品が出土している（水澤 2013b・2014abc、菊地 2013、福永 2013）。この要因として、北陸と会津地方を結ぶ交通の要衝、北方地域との交流という役割の重要性が副葬品に表れたものと考えられている。

中半入遺跡は、北上川とその支流である胆沢川の合流点付近に立地する古墳時代中期後半の集落遺



第 119 図　宮城県北部の地勢と古墳時代前期遺跡の分布　※辻 2008 を基に作製

跡である。溝跡による方形区画やその内部に並行する材木塀跡が検出され、方形区画の内外には竪穴建物跡があり、区画の外側に分布するものの中には皮革加工や鍛冶工房と考えられるものも認められる。出土遺物には多量の陶邑産須恵器や、琥珀、黒曜石製石器、方割石、ウマ遺存体があり、遺構、遺物の両面で特殊な遺跡である。中期の古墳文化では最北の拠点的集落と考えられている（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002）。

城の山古墳や中半入遺跡は、古墳文化の北縁に位置する点、そして周辺の古墳や集落とは異なる特殊な遺物が出土している点で入の沢遺跡と共通する。集落遺跡である中半入遺跡では、具体的な検討が行われており、南北の地域を対象とした物資の流通、生産を担い、その背景には古墳文化側からの北の地域に産する物資の需要により、中半入遺跡が続縄文文化との交流の窓口、相互交易の拠点となった可能性が指摘されている。須恵器に代表される畿内との関わりが推定される遺物の存在は、古墳文化内における中半入遺跡の重要性を表すと考えられ、それは付近に所在し、中半入遺跡と密接な関係が想定されている列島最北端の前方後円墳である角塚古墳の存在からも明らかである。これらの事例から、入の沢遺跡の遺物も、古墳文化の北縁域に位置する遺跡の特殊な性格が反映されたものと考えられる。

なお、入の沢遺跡と中半入遺跡は北縁域の集落でありながら貴重な器物の広域流通の中に含まれる点、遺物・遺構の特殊性、長期間にわたって継続しない点、そして、一時的に他地域と関係を強くするが長期には及ばず、拠点となる地域も固定されない点が共通する。東北地方太平洋側の北縁域では、古墳時代の各時期によって、その時々の状況で地域間の関係の程度が異なり、それがこれらのような拠点的な集落の形成要因の一つになったと推定される[註 12)]。

D. 焼失竪穴建物跡について

入の沢遺跡では焼失竪穴建物跡が高い割合で検出され、そこから多くの遺物が出土している。これらは、屋根構造が土屋根であり類焼する可能性は高くないこと、隣接する竪穴建物跡だけでなく、距離がある竪穴建物跡も焼失していること、精査していない竪穴建物跡にも火災の痕跡が確認できたこと、そして火災後に片づけ作業の行われたものが調査した中では認められないことから、同じ契機で火災にあったと考えられる。そして、上記の理由からすべての竪穴建物跡の火災を失火と位置付けることは困難であり、人為的な関与が想定される。

火災の要因については、異なる文化である続縄文文化（辻 2015ab）と同じ文化である古墳文化を対象とした「争い」や、竪穴建物跡あるいは集落の廃絶に関わる行為の可能性がある。火災にあっているのは竪穴建物跡のみで、今回検出した材木塀跡ではその痕跡はなく、大溝跡にも火災を想定させる層は確認できないこと、SI13・19 に代表される竪穴建物内に銅鏡や鉄製品等の貴重な道具類が残されており、SI13 ではベッド状施設上でそれらがまとまって出土していること、SI13 では皮膚や筋等の軟部組織が残存した状態で被熱したヒトの四肢骨が焼骨の状態で出土していること（附章 5）は、火災の要因を考えるうえでも注意される。

いずれにしても、火災の後に遺跡を継続させた痕跡が認められず、遺跡廃絶に関わる大きな出来事

との位置付けが可能であるが、現時点ではこれらを整合的に解釈することは困難であり、また、ヒトの骨が出土するという非常に重要な事実があるため、更なる調査により全体像を把握したうえで検討する必要がある。

2）周辺の遺跡との関係

①伊治城跡、佐沼城跡

入の沢遺跡の近隣に位置する伊治城跡（築館町教育委員会 1992）、鶴ノ丸遺跡第 7 住居跡（宮城県教育委員会 1981b）、宇南遺跡第 2 住居跡（宮城県教育委員会 1980e）、そして佐沼城跡（迫町教育委員会 1995）は出土土器の特徴から大きく捉えて同時期の遺跡・遺構と考えられる（第 119 図）。

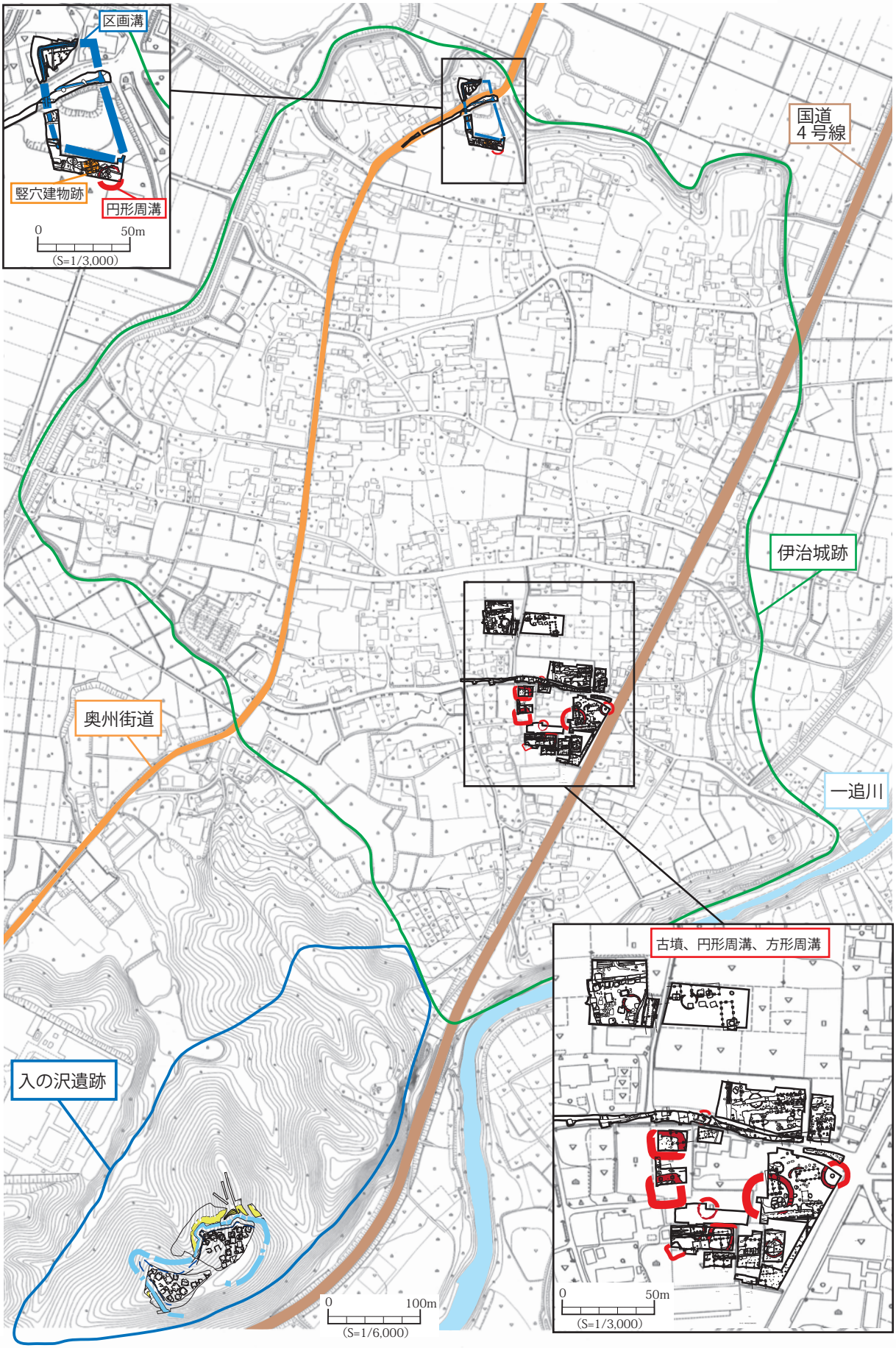
入の沢遺跡の北側に隣接する伊治城跡（第 3 図 2）では、北端部で方形の溝跡と材木塀跡、竪穴建物跡、中央部で小規模な方墳、円形周溝、方形周溝が検出されている（第 120 図）。方形の溝跡からは多量の土師器とともに続縄文土器が出土しており、両者の交流が想定されている（大谷 2014a）。調査が行われたのは一部であるが、墓域と居館あるいは祭祀の場と考えられる遺構が主体であり、それらが南北に分かれて位置することは特徴的である。1 棟ではあるが竪穴建物跡が存在すること、遺跡範囲は広大で、平坦な地形が広がることから、集落域が分布する可能性はあるが、現時点で、立地と遺構の種類、出土遺物の内容、土器の器種構成の相違から入の沢遺跡とは性格の異なる遺跡と考えられ、両遺跡は機能を分けた一体の遺跡群の可能性がある。入の沢遺跡では出土しない続縄文土器が伊治城跡では出土していることから、北方地域との交流の具体的な場所の一つとして伊治城跡がその役割を担った可能性がある。また、一迫川の対岸の低平な台地上には鶴ノ丸遺跡（第 3 図 6）と宇南遺跡（第 3 図 7）が位置し、数棟の竪穴建物跡が検出されている。位置関係から入の沢遺跡と関連する可能性がある集落遺跡である。

佐沼城跡は、入の沢遺跡が面する一迫川の下流の迫川中流域に位置する（第 119 図）。独立棟持柱建物の可能性がある建物跡や溝跡、それに並行する材木塀跡が検出され、溝跡からは多量の土器が出土する特殊な遺跡である。宮城県北部で北上川の支流の河川に面する立地や水系が共通すること、当該期では類例の僅かな遺構群が認められ、土師器も類似しており、入の沢遺跡と佐沼城跡は遺跡を機能させるうえで何らかの関係性を持っていたと考えられる。

宮城県北部では、これらの遺跡のように、立地や検出遺構から性格が異なる遺跡が関係性を持ち、地域の中で相互に機能していたと推測される。

②山前遺跡、鶴館遺跡

山前遺跡（小牛田町教育委員会 1976、青山 1999）と鶴館遺跡（大郷町教育委員会 1994・2011）は、宮城県北部に位置し（第 119 図）、入の沢遺跡と同時期と推定され、かつ同様の遺構構成となる遺跡である[註 13)]。これらの遺跡は、時期と地域を限定した特有の遺跡であり、この地域の特質を反映したものと考えられる。そこで、入の沢遺跡の成果を基にした観点から、両遺跡の位置づけを検討する。ただし、山前遺跡と鶴館遺跡はともに区画施設内の状況が不明のため、入の沢遺跡と同程度の精度で



第 120 図　入の沢遺跡と伊治城跡の遺構配置

比較を行うことはできない。そのため、河川を臨む丘陵上あるいは微高地上の交通の要衝に位置する点に注目し（大郷町教育委員会 1994、藤沢・大谷 1998）、遺跡の位置と立地を中心に検討を行う。

仙台平野以北である宮城県北部の地勢は、奥羽脊梁山脈から太平洋に向かって東西に幾条にも延びる大小の河川、丘陵と、河川周辺に広がる東西方向の平野で構成されており、これらは複雑に入り組んでいる（第 119 図）。この宮城県北部において、脊梁山脈から仙台湾に注ぐ大きな河川の中流域にこれらの遺跡が位置し、地域、河川を異にして分布すること、そしてこのような集落が同時期に現在のところ宮城県北部にのみ確認され、東北地方太平洋側の古墳時代前期の北縁域に特徴的とされることは（古川ほか 1993、藤沢・大谷 1998、青山 1999）、各遺跡の機能や形成要因を考えるうえで注目される。一つの可能性としては、複雑な地形に応じて展開される様々な生業に対しての、陸上交通路とともに、山地と海岸部を視野に入れた河川交通による経済的活動が考えられる。山前遺跡では外来系の土器や黒曜石製石器が出土しており、続縄文文化や東北地方以外の地域との交流が推定されている（青山 1999、大谷 2014b）。したがって、これらの遺跡は、東西南北の各地域との交流を目的とした立地で、さらに、区画施設を伴うその特異性に注目すると、山前遺跡と鶴館遺跡も意図的に造営された集落の可能性がある。なお、山前遺跡の周辺には前期の全長 66m の前方後方墳である京銭塚古墳や径 47m の円墳である保土塚古墳が所在しており、これらとの関係が指摘されている（青山 1999、大谷 2014b）。そのため、山前遺跡は大型古墳を築造する有力者による集落の可能性があり、現時点で付近に前期古墳が確認できていない入の沢遺跡や鶴館遺跡とは集落の造営主体が異なることも推測される。

3）入の沢遺跡の位置づけ

入の沢遺跡は、遺物・遺構の総体として全国的に類例のない遺跡と考えられ、これは、畿内を中心とする古墳文化と北方の続縄文文化との境界である地域に位置する本遺跡の特徴と考えられる。出土遺物からは、土器が在地の特徴であるのに対して、銅鏡や玉類等の広域流通の中で入手する遺物には関東地方や畿内地域との関係が推察された。したがって、本遺跡は古墳時代における北縁域の地域性とともに、地域間の様々な交流の実態を具体的に検討できる貴重な資料と言える。さらに、目的に基づいて造営された、古墳文化の最北の拠点的な集落と考えられる入の沢遺跡の出現は、古墳時代の辺境にあたる東北地方太平洋側に対して、積極的な展開が行われた出来事として評価することができ、国家形成と辺境地域との関係史を検討するうえでも重要である。そして、大型の古墳が分布しない地域で認められた本遺跡の成果は、古墳が分布する意味、古墳と集落の関係といった古墳時代の主要な課題を考える際の重要な資料の一つになりうる。

2. 古代以降

（1）古代

1）遺物

SI5・7・33・34・36 竪穴建物跡出土土器、SD3 大溝跡大別 1 ～ 5 層出土土器の特徴を記述し、編年的位置づけを行う。

①土器

A. SI5 竪穴建物跡出土土器

床面から須恵器坏（第 91 図 1）、堆積土から須恵器坏（2）、蓋（3）が出土した。坏はいずれもやや底径の大きい逆台形状を呈し、底部ヘラ切り後ナデである。蓋（3）は天井部が盛り上がってやや丸みをもち、天井部には回転ヘラケズリが施される。摘みは扁平な方形で中央がわずかにくぼむ。

床面と堆積土から出土した坏の特徴が類似することから、堆積土出土土器を含めて検討する。蓋の天井部や、坏の形状は、伊治城跡 SI173 住居跡出土土器（築館町教育委員会 1991）に類似する。一方、栗原市宇南遺跡第 3 住居跡（宮城県教育委員会 1980e）や栗原市原田遺跡 SI31 住居跡（宮城県教育委員会 2009）出土土器では、坏の器形は共通するが、SI5 出土坏に比べて底径の縮小化が進んでいる。これらが 9 世紀前半とされていることから、SI5 出土土器は 8 世紀末から 9 世紀初頭と考えられる。

B. SI7 竪穴建物跡出土土器

貼床下の K2（第 96 図 1）、床面（2・3・6・8）、カマドや K1・P5（4・5・7・9）と、堆積土（第 97 図 1 ～ 11）から出土している。床面や床面施設出土土器には須恵器高台坏、土師器坏・埦・甕がある。須恵器高台坏（第 96 図 1）は底部切り離し後底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施される。土師器坏（3）はロクロ調整で、埦（2）は非ロクロ調整である。甕は小型（5 ～ 7）と大型（8）があり、いずれも非ロクロ調整で、胴部外面は縦位ハケメ、内面は横位ハケメである。堆積土出土土器には須恵器坏・蓋・長頸瓶、土師器坏・埦・鉢・甕・甑がある。須恵器坏（第 97 図 1）は口径に比して器高がやや低く、底部はヘラ切り後ナデである。須恵器蓋（2）は天井部が平坦な陣笠状を呈し、回転ヘラケズリが施される。長頸瓶（3）は肩部と胴部で接合しないが同一個体と考えられ、頸部三段構成である。土師器坏（5）ロクロ調整で、器高の高い逆台形状を呈す。鉢は非ロクロ調整（4）、埦はロクロ調整（6）で、6 は底径が縮小化し、底部から体部下半にかけて手持ちヘラケズリが施される。鉢（7）は小型で内面に黒色処理が施される。甑は頸部がくびれるもの（10）と直線的に外傾するもの (11) があり、11 は胴部中位にヘラ書き「＝」が確認できる。

床面や床面施設出土土器と堆積土出土土器で大きな相違が認められないことから、一括して検討する。土師器は非ロクロ調整の埦とロクロ調整の坏が共伴し、須恵器は坏が口径に比して器高が低く、蓋は天井部が平坦なもので構成される。これらは伊治城跡 SI490・491 住居跡出土土器（築館町教育委員会 2000）の特徴に近く、伊治城Ⅰ～Ⅱ期とされ、また、集落においてロクロ土師器が出現するのは 8 世紀後半以降とされていることから（佐藤 2007）、SI7 出土土器はおおむね 8 世紀後半頃と考えられる。

C. SI33 竪穴建物跡出土土器

掘方埋土、床面およびカマドから赤焼土器坏・高台坏、須恵器長頸瓶、土師器坏・甕、堆積土から土師器坏が出土している。赤焼土器坏（第 100 図 1・2）は口径に比して器高の高い逆台形状で体部にやや丸みをもち、口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切り無調整で、いずれも内面に油煙の痕跡が確認できる。高台坏（3）は高台が「ハ」の字状に開き端部端面に面が認められる。土師器坏（5 ～ 12）はロクロ調整で、底部は回転糸切り無調整である。内面はヘラミガキ後黒色処理である。甕は非ロクロ調整で、13 は小型で胴部が底部に向けてすぼまり、短い口縁部がわずかに外反する。胴部外面ヘラケズリ、内面ナデである。14 は大型の長胴甕で肩部がやや張り、短い口縁部がわずかに外反する。胴部外面に縦位ハケメ、内面に横位ハケメが施される。

同様の特徴を示す土器は、栗原市佐内屋敷遺跡第 33 号住居跡（宮城県教育委員会 1983a）、栗原市大境山遺跡 23 号住居跡（瀬峰町教育委員会 1983）色麻町色麻古墳群第 14・27・31 号住居跡（宮城県教育委員会 1984）で出土しており、10 世紀前半と考えられている（宮城県教育委員会 1984）。SI33 では堆積土中に 10 世紀前葉に降下したと考えられる灰白色火山灰層が認められることから、10 世紀前葉を中心とした時期と考えられる。

D. SI34 竪穴建物跡出土土器

床面から土師器甕（第 102 図 1）、堆積土から土師器坏・鉢（2 ～ 5）が出土した。土師器甕（1）は非ロクロ調整で小型のバケツ状を呈し、短い口縁は外方へ屈曲する。胴部外面ヘラケズリ、内面ナデである。土師器坏（3 ～ 5）はロクロ調整で、底部は回転糸切り無調整（3 ～ 5）である。鉢（2）は大型で体部下端に手持ちヘラケズリが施される。床面から出土したのは土師器甕のみで詳細な時期比定は難しいが、類似した非ロクロ土師器甕は SI33 の他、佐内屋敷遺跡第 28 号住居跡（宮城県教育委員会 1983a）で出土しており、9 世紀後半から 10 世紀前半と考えられる。

E. SI36 出土土器

床面から須恵器長頸瓶、堆積土から土師器坏が出土した。須恵器長頸瓶（第 104 図 1）には胴部外面にヘラケズリが施される。坏（2）はロクロ調整で底部には回転糸切り後手持ちヘラケズリが施される。出土遺物が少なく詳細な時期比定は難しいが、9 世紀後半から 10 世紀前半と考えられる。

F. SD3 大溝跡大別 1 ～ 5 層出土土器

須恵器坏・埦・高台坏・甕・長頸瓶、土師器坏・鉢・甕・甑・手捏ね土器が出土した。大別層ごとにみれば、5 層からは須恵器坏（第 14 図 3）、土師器坏（第 15 図 1）・甕（第 14 図 4・5）が出土しており、須恵器坏は口径に比して器高がやや低く、底部外面はヘラ切り後ナデののち、線刻「×」が施される[註 14)]。土師器坏は非ロクロ調整で、扁平な半球形で平底状を呈する。甕はいずれも非ロクロ調整で頸部に段があり、胴部内外面にハケメが施される。

3 層からは須恵器坏（第 15 図 3 ～ 5）・高台坏（6・7）・甕（8）、土師器坏（第 15 図 9 ～ 12、

第 16 図 1 ～ 3）・手捏土器（4・5）・甕（6 ～ 8）・甑（9）が出土しており、須恵器坏は口径に比して器高がやや低く、底部は 3 が回転糸切後に回転ヘラケズリ、4 が回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ、5 が回転ヘラ切後ナデで、5 には底部周縁に圏線状の圧痕が観察できる。8 の甕は平底で、胴部外面に平行タタキ、内面に無文当具痕が認められる。土師器坏は非ロクロ調整（第 15 図 9 ～ 12）とロクロ調整（第 16 図 1 ～ 3）があり、前者は扁平な半球状で平底（9・10）と丸底状（11・12）がある。後者は 2 の底部切り離しが静止糸切りである。7・8 の甕はいずれも胴部外面は縦位ハケメ、内面は横位ハケメ後ヘラナデであり、7 は頸部の段が沈線状となるが、8 は明確に作り出される。9 の甑はバケツ状を呈し、胴部中位に一対の把手が貼り付けられる。胴部外面に縦位ハケメ、内面に横位ハケメやナデが施される。

1 層からは須恵器長頸瓶（第 17 図 1）、土師器坏（2）が出土しており、2 はロクロ調整である。

3 ～ 5 層は類似した土器様相を示している。非ロクロ土師器坏やロクロ土師器坏の器形、甕の特徴から、8 世紀後半から 9 世紀前半の時期と考えられる。1 層出土のロクロ土師器は、2 層に灰白色火山灰が堆積していることから 10 世紀前葉以降と考えられ、SI33 出土土器と大きな相違は認められないことから、10 世紀前半頃と推定される。

②その他

SI7 から砥石 1 点、SD3 の堆積土から鉄製品 2 点が出土した。砥石（第 96 図 10）は細粒の凝灰岩製で形状は三角錐である。鉄製品は刀子（第 17 図 3）と棒状の鉄製品の先端部（4）である。刀子は破損しており残存長 11.5cm で、関は両関、茎部には柄装具が残存する。

2）遺構

5 棟の竪穴建物跡が検出された。これらの時期は、出土した土器の年代から SI7 が 8 世紀後半、SI5 が 8 世紀末から 9 世紀初頭、SI33 が 10 世紀前葉、SI34・36 が 9 世紀後半から 10 世紀前半と考えられる。

第 14 表はこれらの竪穴建物跡の属性をまとめたものである。1 辺 4m 以下の隅丸方形、隅丸長方形のものが多く、床面施設では、主柱穴と周溝が認められるものが SI7、貯蔵穴が認められるものが SI7・34・36 である。カマドはシルト土で構築されているものが多いが、SI33 では凝灰岩切石と地山削り出し、シルト土で構築されている。また、SI7 では南東隅に張り出し部が設けられており、類例は栗原市四ツ壇遺跡 2 号住居跡（栗原市教育委員会 2006）でも確認できる。その他の特徴として、SI33 は焼失竪穴建物跡であり、カマドは壊れた状態で、カマドの支脚には内面に油煙の痕跡がある赤焼土器坏が逆位の状態で被せられていた。さらに、土器がカマドの傍にまとめられており、これらからカマドを人為的に破壊して土器を整理してその後に竪穴建物に火をつけたものと考えられる。また、検出された炭化材には植物質の束になったものが認められ、炭化材の上を覆っていたことから、これらは屋根に葺かれた植物質の材と推定される。

第 13 表　古代の竪穴建物跡属性表

遺構名	区	時期	平面形	方向	規模 (m)		主柱穴	カマド			貯蔵穴（土坑）		周溝	備考
					長軸	短軸		位置	側壁	煙道長（m）	位置	形状		
SI5	B	8 世紀末～ 9 世紀初頭	隅丸方形	N-5° -W	3.6	3.3	－	北辺東端	シルト土	1.3	－	－	無	
SI7A	B	8 世紀後半	隅丸方形	E-22° -N	5.6	5.3	4	東辺中央	シルト土	不明	－	－	有	1 度改修されている。貼床あり、南東隅に張り出し部あり
SI7B										1.5	カマド左側	不整な楕円形	有	
SI33	B	10 世紀前葉	隅丸方形	N-6° -W	3.6	3.3	－	南東隅	地山削り出し＋切石、シルト土＋切石	1.1	－	－	無	焼失建物
SI34	B	9 世紀後半～ 10 世紀前半	隅丸長方形	N-16° -W	3.5	2.4	－	北辺中央	シルト土	不明	カマド左側	円形	無	
SI36	B	9 世紀後半～ 10 世紀前半	隅丸方形	N-6° -E	3.1	2.2	－	東辺南側	シルト土	0.7	カマド右側	不整な楕円形	無	焼面あり、煙道部が斜方向になる

（2）中近世

検出された遺構は塚 2 基である。いずれも丘陵尾根頂部に立地し、平面は方形で、規模は、1 辺 6.0 ～ 9.3m、高さが中心部で 0.9 ～ 1.25m である。造成方法は、最初に丘陵尾根が平坦に削り出されて周囲よりも一段高い台座状の基底部が造られ、その上に盛土が行われて成形されるというものである。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、遺跡内には今回調査を行ったもの以外にも塚が確認されており（第 4 図）、その中には中世の可能性のあるものが認められている（栗原市教育委員会 2014）。また、B 区では、表土や SD3 大溝跡遺構確認面から寛永通宝が出土しており、これらから中近世の可能性が推定される。

3. 今後の課題

今回の調査では、大溝跡と材木塀跡によって区画された範囲に多くの竪穴建物跡が認められ、豊富な遺物が出土したことから当該期の最北に位置する拠点的な集落であることが判明した。しかし一方で、調査は部分的であり、遺跡の理解を行うためには多くの課題が存在する。

（1）調査範囲内外の大溝跡・材木塀跡の位置を確認し、区画範囲とその規模を明らかにする。
（2）材木塀跡について、その構造の解明を行う。併せて、出入り口部分の有無及び構造を確認する必要がある。
（3）盛土遺構としたものの分布範囲と実態を明らかにする。
（4）出入り口の存在が推定される沢や丘陵尾根部分において、区画施設の外側で通路等の遺構の有無を確認する。
（5）今回検出した以外の張り出し部の有無とその位置について確認する。
（6）今回の調査は B 区を中心に実施したため、A 区の様相が不明であり、A 区の内容を把握する必要がある。特に、A 区には今回検出した中で最も大型の竪穴建物跡が認められることから、その性格を明確にするための調査が必要である。
（7）調査した 12 棟のうち焼失竪穴建物跡が 5 棟確認され、検出した竪穴建物跡にもその可能性があるものが認められたことから、A・B 区の焼失竪穴建物跡の棟数とその分布を確認する必要が

ある。

（8）B区のSI27竪穴建物跡からは検出面である堆積土上面で銅鏡が出土した。この銅鏡は遺存状況もよく、入の沢遺跡では大型のものである。SI27は未精査であり、銅鏡が出土する竪穴建物跡の詳細とその出土位置・層の確認を行うことが必要である。

（9）西側に近接する大仏古墳群との関係を明らかにする必要がある。

4．まとめ

入の沢遺跡は、宮城県北部の内陸部に位置し、北上川の支流である一迫川流域の標高約49mの丘陵上に立地する大規模な遺跡である。遺跡の時期は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中近世にわたるが、主体は古墳時代前期である。保存状態の良好な遺跡の一部を調査した結果、貴重な成果が得られた。以下、要点をまとめる。

古墳時代前期

（1）丘陵尾根とその周囲の平坦面・緩斜面、丘陵斜面から前期後半の大溝跡、材木塀跡、盛土遺構、竪穴建物跡、整地層が検出された。

大溝跡と材木塀跡、盛土遺構は並行する区画施設で、今回の調査では一部の検出であるが、全周すると考えられる。大溝跡は丘陵斜面を等高線にほぼ並行してめぐり、平面形は地形にあわせた不整形で、推定総長は330mである。材木塀跡は丘陵尾根の縁辺を巡る。盛土遺構は大溝跡の斜面下方に立地し、土塁の可能性がある。

竪穴建物跡は39棟検出され、この他にその可能性があるものが8基認められる。このうち12棟の調査を実施した。5棟確認された焼失竪穴建物跡は保存状態が良好なものが多く、屋根構造や床面施設の機能、遺物の配置等多くの知見を得ることができた。

（2）区画施設については、当該期で検出された遺跡は東北地方では僅かであり、大溝跡と材木塀跡、盛土遺構が検出されたのは入の沢遺跡のみである。

竪穴建物跡は、検出数が多く互いに近接し密集するが、重複関係はごく一部のみという特徴的な分布となる。さらに、床面施設の構造は複雑で類例が僅かであり、特に、SI13竪穴建物跡は構成する床面施設が多く、それらが有機的な関係をもって配置されており、特殊な構造といえる。また、居住・生活の機能が推定されるSI17竪穴建物跡が存在する一方で、規模、構造、出土遺物の面から倉庫として貴重なものを保管する機能を有したと考えられるSI13竪穴建物跡も認められる。

（3）出土遺物は、土師器、銅鏡、鉄製品、玉類、垂飾品、土製品、石製品、石器、繊維、赤色顔料、動物遺存体、植物遺存体である。

銅鏡は4面出土し、内訳は珠文鏡2面、櫛歯文鏡1面、内行花文鏡破鏡1面、鉄製品は28点出土し、内訳は剣5点、鏃とその可能性のあるもの2点、両頭金具1点、斧7点、方形板刃先2点、鑿1点、刀子または剣1点、工具等9点である。玉類は勾玉12点、管玉107点、棗

玉 4 点、丸玉 4 点、臼玉 17 点、ガラス小玉 123 点、垂飾品は 2 点出土した。これらは銅鏡 2 面、鉄製品 3 点、管玉 1 点以外は全て SI13 竪穴建物跡 1 棟からの出土である。

出土遺物の時期は、土師器の特徴から古墳時代前期後半と考えられる。

（4）SI13 竪穴建物跡出土遺物は、竪穴建物跡出土としては異例であり、その組成は、前期古墳の副葬品に相当する。東北地方でも上位の出土量であり、銅鏡、鉄製品、玉類、垂飾品、繊維、水銀朱は、当該期における最北の出土事例である。これらの存在は古墳時代前期の各遺物の様々な広域流通の枠組みの中に入の沢遺跡が含まれていることを示している。

（5）前期大型古墳の分布域の北に位置しながらも、古墳文化を特徴づける様々な要素が認められる集落遺跡であり、遺構・遺物の内容から、当該期における古墳文化の中で最北に位置する拠点的な大規模集落と位置付けることができる。

（6）入の沢遺跡は、遺跡・遺構・遺物のいずれも保存状態が良好であり、そこから多くの情報が得られている。これらは、古墳文化の実態について、北縁域という地域の視点から具体的に検討できる貴重な資料と言える。そして、大型の古墳が分布しない地域で認められた本遺跡の成果は、古墳が分布する意味、古墳と集落の関係といった古墳時代の主要な課題を考える際の重要な資料の一つになりうる。

奈良・平安時代

（1）竪穴建物跡 5 棟を検出した。8 世紀後半が 1 棟、8 世紀末から 9 世紀初頭が 1 棟、10 世紀前葉が 1 棟、9 世紀後半から 10 世紀前半が 2 棟であり、8 世紀後半の SI7 竪穴建物跡には張り出し部や外延溝が認められる。伊治城跡と並行する時期のものもあり、伊治城跡と入の沢遺跡の関係を考えるうえで重要な資料である。

（2）出土遺物は赤焼土器、須恵器、土師器、鉄製品、石製品である。

その他

（1）縄文土器、弥生土器、石器が出土した。遺構は認められない。

（2）丘陵尾根上に中近世の塚 2 基を検出した。

註

註 1：全国的な視点に立つと、入の沢遺跡の短冊形鉄斧（小林 1989）と、長茎短剣（池淵 1993）は、径 30m 以下の円・方墳で出土する水準のものとのことである。

註 2：管玉とガラス小玉については、ここで挙げた点数以外にも個体数に計数できない細片が存在する。また、回収した土壌のすべてを水洗していないため、今後点数は増加する可能性がある。

註 3：穿孔痕については米田克彦氏の分類（2009）を参考にした。

註 4：沼向遺跡では古墳と竪穴建物跡から出土しているため、それぞれ 1 遺跡として集計している。

註 5：出土状況を確認した 2 点については、脆弱であったため土ごと取り上げた。そして、乾燥後に一部の土を除去して骨を露出させ、その部分にアセトンで希釈したセメダイン C を含侵させて硬化させるという方法を繰り返して、土の除去と薬品による資料の強化を行った。精査の作業中に細かく分解したため、接合作業を行い元の形状の復元を試みたが、被熱による変形により完全には行えず、現在は 12 の単位となっている。

註 6：土壌を回収したのは SI13 のみで、SI10・17・19 出土炭化米は、土器の中に入っていた土壌中に含まれていたものである。

註 7：回収した土壌全てを水洗篩にかけておらず、点数は増える可能性がある。

註 8：周溝と外延溝が建物隅で接続する宮前遺跡第 49 号住居跡、土手内遺跡 SI10、上之内遺跡 1 号住居跡と先に挙げた東海、関東の遺跡の事例は類似する。

註 9：壁際から倒位の状態で出土した高坏と小型丸底鉢、器台と小型壺、壺については、竪穴建物の壁と屋根材との間にある空間に配置され、それが火災後に建物内へ落ち込んだという考えもある。しかし、壁の高さは 50cm 以上あるにも関わらずこれらの土器は完形であったことから、低い位置に配置されていたものが倒れたものと考えている。

註 10：地形的に現代の交通路を参考に過去の交通路を想定する事例は認められる（青山 2014 等）。

註 11：入の沢遺跡の西側には大仏古墳群が隣接し、調査が行われておらず詳細は不明だが、立地の特徴から古墳時代前期になる可能性もある。

註 12：古墳や集落等の検討からも指摘されている（藤沢 2001・2007・2012）。

註 13：鶴館遺跡では遺構から出土した土器が少ないが、その中には入の沢遺跡出土土器と類似するものが含まれることから、大きく捉えて同時期のものが存在すると推定される。

註 14：安達訓仁氏の集成によれば、伊治城跡における同様の刻書は 14 例、栗原市内でも 9 例確認できる（安達 2016）。

引用・参考文献

＜論文等＞

青山博樹 1997「東北南部における古墳編年と土師器編年の対応についての予察」『福島考古』第 38 号 pp.37-54

青山博樹 1999「小牛田町山前遺跡出土の塩釜式土器とラウンドスクレーパー―北辺の古墳時代社会と続縄文社会―」『宮城考古学』第 1 号　pp.67-80

青山博樹 2010「古墳時代前期の土器編年―仙台平野とその周辺―」『北杜』辻秀人先生還暦記念論集 pp.17-36

青山博樹 2011「土師器の編年⑦東北」『古墳時代の考古学 1』pp.136-145

青山博樹 2014「列島東北部の交流拠点とその性格」『久ヶ原・弥生町期の現在―相模湾／東京湾の弥生後期の様相―』pp.181-189

青山博樹 2015「三　古墳出現期の列島東北部」『東北の古代史 2　倭国の形成と東北』pp.78-103

安達訓仁 2016「発掘調査からみた伊治城と古代栗原郡」『栗原市伊治城から読み解く東北古代史』pp.9-46 東北学院大学アジア流域文化研究所公開シンポジウム

阿部義平 1988「国生本屋敷遺跡の発掘調査」『歴博』32 pp.8-9

阿部義平編 2006「茨城県常総市国生本屋敷遺跡発掘調査報告」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 129 集

飯島義雄 2004「所謂「三和工業団地Ⅰ遺跡型」の「周溝をもつ建物」の構造」『研究紀要』22 pp.251-267 群馬県埋蔵文化財調査事業団

飯塚武司 2011「古墳時代の区画溝の成立とその性格」『法政考古学』pp.15-44

猪狩みち子 1996「落合遺跡における竪穴式住居跡の家屋構造について」『いわき市教育文化事業団研究紀要』第 7 集 pp.31-68

池淵俊一 1993「鉄製武器に関する一考察―古墳時代前半期の刀剣類を中心として―」『古代文化研究』第 1 号 pp.41-104

石野博信 1990『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館

石野博信 2011「放射状区画珠文鏡考」『研究紀要第 4 号』pp.1-5 兵庫県立考古博物館

石守　晃 1995「復元住宅を用いた焼失実験の成果について」『研究紀要』12 pp.95-102 群馬県埋蔵文化財調査事業団

石守　晃 2001「復元住宅を用いた焼失実験 再び」『研究紀要』19 pp.95-104 群馬県埋蔵文化財調査事業団

伊丹　徹 2002「古墳時代前期の異形垂飾品 (所謂本村型琴柱形石製品) について」『神奈川県小田原市下曽我遺跡　永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点』pp.341-348

伊藤博幸 1998「北上盆地南部」『第 24 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』東北地方の古代集落 pp.97-158

伊藤博幸 2006「陸奥型甕・出羽型甕・北奥型甕―東北地方の平安期甕の製作技法論を中心に―」『陶磁器の社会史』

井上克弘・山田一郎 1990「東北地方を覆う古代の珪長質テフラ " 十和田―大場浮石 " の同定」『第四紀研究』第 29 巻 2 号 pp.121-130

井上雅孝 2006「岩手県における古墳時代前期の土器様相―塩釜式併行期の土器編年―」『岩手考古学』第 18 号 pp.1-30

氏家和典 1957「東北土師器の型式学分類とその編年」『歴史』第 14 輯 pp.1-14

内田真雄 2001「8　鉄製農工具」『寺戸大塚古墳の研究Ⅰ前方部副葬品研究篇』pp.117-128

宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集 pp.215-232

遠藤千映美 1999「第 5 章　森北 1 号墳出土鉄製品の検討」『森北古墳群』pp.151-163

大賀克彦 2015「玉類の流通からみた古墳時代前期の東北地方―入の沢遺跡出土玉類を中心に―」『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』pp.33-45

大久保徹也 2000「古墳文化（前期）」『季刊考古学 70』pp.43-46

大谷　基 2014a「伊治城跡」『古墳と続縄文文化』pp.236-239

大谷　基 2014b「山前遺跡」『古墳と続縄文文化』pp.256-259

大村　直 2010a「周辺地域における集団秩序と統合過程－弥生時代中期から古墳時代前期の千葉県市原市地域を中心に―」『考古学研究』第 56 巻第 4 号 pp.37-55

大村　直 2010b「土器の移動と移住」『房総の考古学　史館終刊記念』pp117-132

小黒智久 2014「北の古墳築造周縁域と続縄文社会」『古墳と続縄文文化』pp.285-305

小山正志・竹原秀雄 1994『新版　標準土色帳』

香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」編 2015『ふたかみ邪馬台国シンポジウム 15　邪馬台国時代の " みちのく " と大和　資料集』

金田善敬 1995「有袋鉄斧の製作技法の検討」『古代吉備』第 17 集 pp.61-79
神谷真佐子 2015「第 2 節　排水溝を持つ竪穴建物について」『高橋遺跡』pp.257-272
亀井正道 1972「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』第 8 号 pp.31-170
菊地芳朗 2001「東北地方の古墳時代集落―その構造と特質―」『考古学研究』第 47 巻第 4 号 pp.55-75
菊地芳朗 2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会
菊地芳朗 2013「出土武器類からみた城の山古墳」『第 2 回シンポジウム　城の山古墳の謎に迫る』pp.7-12
熊谷公男 2004『蝦夷の地と古代国家』日本史リブレット 11　山川出版社
熊谷公男 2016「古代国家北縁の二つの境界―栗原市入の沢遺跡の発見によせて―」『日中韓周縁域の宗教文化Ⅱ』pp.33-51
小池　寛 2005「共同研究　古墳時代集落の囲繞施設について」『京都府埋蔵文化財情報』第 97 号 pp.7-16
河野正訓 2012「鉄鏃（方形板刃先）の構造」『古代学研究所紀要』第 16 号 pp.19-35
小林高範 1989「3．11 号墳出土の鉄器について」『新潟県三条市　保内山王山古墳群』pp.162-165
小林孝秀 2015「千葉県松戸市検出の環濠と方形周溝墓―下総北西部における「古墳出現期」の様相から―」『駒澤考古』第 40 号 pp.59-70
酒井将史 2012「土器の計測法と定量化に関する基礎的検討」『篠窯跡群大谷 3 号窯の研究』pp.309-318 大阪大学考古学研究室篠窯調査団
佐藤敏也 1982「(6) 留沼遺跡・第 1 号住居跡出土の炭化米」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和 56 年度分)』pp.56-63
佐藤敏幸 2007「宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト文化交流の研究』pp.164-209
篠宮　正・森下章司編 2010『弥生・古墳時代銅鏡出土状況資料集』日本考古学協会 2010 年度兵庫大会
白石太一郎・設楽博己編 1994「共同研究「日本出土鏡データ集成」2 弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 56 集
白石太一郎・設楽博己編 2002「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データベース集成補遺 1」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 97 集 pp47-122
白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ pp.1-38
杉井　健 2012「古墳時代の繊維製品・皮革製品」『講座日本の考古学 8　古墳時代下』pp.197-236
杉山和徳 2016「長茎短身剣に関する一考察」『埼玉考古』第 51 号 pp.37-54
杉山林継・篠原祐一 2006「古墳時代祭祀研究の現状と課題」『季刊考古学』第 96 号 pp.14-17
高橋　敏 2003「最北の破鏡－鏡片分布から見た古墳出現期の動態 (予察) －」『研究紀要』創刊号 pp.45-54 山形県埋蔵文化センター
高橋　敏 2015「破鏡と四方転びの箱　破鏡及び鏡片の再集成と馬洗場 B 遺跡出土例からみえてくるもの」『研究紀要』第 7 号 pp.23-44　山形県埋蔵文化センター
高橋誠明 2014「古墳築造周縁域の地域社会の動向」『古墳と続縄文文化』pp.175-194
高橋誠明 2015「古墳時代前期の倭国北縁の社会―宮城県北部の様相―」『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』pp.46-63
田島明人 2012「古墳確立期の広域編年―東日本を対象とした検討（その 5）―」『東生』第 1 号　pp.11-68
田島明人 2015「東日本にみる 9・10 期の高坏」『東生』第 4 号　pp.1-44　東日本古墳確立期土器検討会
田中克典・佐藤洋一郎・上條信彦 2015『日本の出土米Ⅱ　佐藤敏也コレクションの研究』冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト研究報告書 4
田中新史 1979「古墳出土の飾り弓―鋲飾りの弓の出現と展開―」『伊知波良』1 pp.8-30
次山　淳 1992「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班　埋蔵文化財研究会 15 周年記念論文集』pp.235-248
辻　秀人 1993「東北南部の古墳出現期の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』pp.283-297 日本考古学協会 1993 年度新潟大会
辻　秀人 1994「東北南部における古墳出現期の土器編年―その 1　会津盆地―」『東北学院大学論集―歴史学・地理学―』第 26 号 pp.105-140
辻　秀人 1995「東北南部における古墳出現期の土器編年―その 2―」『東北学院大学論集―歴史学・地理学―』第 27 号 pp.39-88
辻　秀人 1996「蝦夷と呼ばれた社会―東北北部社会の形成と交流―」『古代王権と交流 1　古代蝦夷の世界と交流』pp.215-248
辻　秀人 2001「東北の弥生土器と土師器」『アジア文化史研究』第 1 号 pp.1-18 東北学院大学大学院文化研究科アジア文化史専攻
辻　秀人 2008「大塚山古墳の研究」『東北学院大学論集　歴史と文化』第 43 号

辻　秀人 2010「続縄文文化と弥生・古墳文化の関係を考える」『北海道考古学』第 46 号 pp.9-22
辻　秀人 2015a「3・4 世紀の陸前の集落と古墳」『ふたかみ邪馬台国シンポジウム 15　邪馬台国時代の“みちのく”と大和　資料集』pp.47-62
辻　秀人 2015b「東北地方の古墳時代のはじまり」『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』pp.75-88
東北学院大学アジア流域文化研究所編 2015『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』東北学院大学アジア流域文化研究所公開シンポジウム
東北・関東前方後円墳研究会編 2014『古墳と続縄文文化』高志書院
永田英明 2014「文献からみた古代『官道』論の課題」『国士舘考古学』第 6 号
永田英明 2016「四　古代東北の軍事と交通―城柵をめぐる交通関係―」『日本古代の交通・交流・情報 1』pp.206-232
奈良文化財研究所編 2010a『発掘調査の手引き―集落遺跡発掘編―』同成社
奈良文化財研究所編 2010b『発掘調査の手引き―整理・報告書編―』同成社
西川修一 1991「相模後期弥生社会の研究」『古代探叢Ⅲ－早稲田大学考古学会創立40周年記念考古学論集－』pp.249-273
西川修一 1995「東・北関東と南関東－南関東圏の拡大－」『古代探叢Ⅳ－滝口宏先生追悼考古学論集－』pp.175-208
西川修一 2013「２・3 世紀のサガミの集落と古墳」『ふたかみ邪馬台国シンポジウム 13　邪馬台国時代の関東と近畿　資料集』pp26-42
西川修一 2014「報告２　相模と武蔵地域の様相」『平成 26 年度地域史フォーラム　地域の歴史を求めて　古代国家形成期の東京低地－ 3・4 世紀の東京低地の様相を探る－』葛飾区郷土と天文の博物館
西川修一 2016「環壕機能の多様性について―弥生環壕集落のその後―」『魂の考古学―豆谷和之さん追悼論文編－』pp341-350
野島　永 1995「古墳時代の有肩鉄斧をめぐって」『考古学研究』第 41 巻第 4 号 pp.53-57
橋本博文 1985「古墳時代首長層居宅の構造とその性格」『古代探叢Ⅱ―早稲田大学考古学会創立 35 周年記念考古学論集―』pp.271-298
橋本博文 1999「(18) 古墳時代の首長層居館と奥津城」『環日本海地域の自然・人・文化　新潟大学創立 50 周年記念学内貴重学術資料公開展示会図録』pp.110-112
橋本博文 2000『古墳時代における首長層の居館と奥津城の関連性に関する研究』平成 9 年度～平成 11 年度科学研究費補助金（基礎研究（c）(2)）研究成果報告
橋本博文 2012「古墳時代の豪族居館」『講座日本の考古学 8　古墳時代下』pp.324-350
橋本博文 2013「④古墳時代の居住形態群」『古墳時代の考古学 6 』pp.181-195
林原利明 2002「永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点Ｋ 6 号住居址出土の銅鏡 (重圏文鏡)」『神奈川県小田原市下曽我遺跡　永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点』pp.333-340
坂　靖 2009「豪族の居住地と墳墓」『古墳時代の遺跡学―ヤマト王権の支配構造と埴輪文化―』pp.78-91
東日本古墳確立期土器検討会 2014『東生』第 3 号
東日本埋蔵遺文化財研究会群馬県実行委員会編 1998『第 8 回　東日本埋蔵文化財研究会　古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』
比佐陽一郎 2002「弓金具の再検討」『考古学ジャーナル』No.496 pp.24-27
比田井克仁 2004a「古墳時代前期における関東土器圏の北上」『史館』第 33 号　pp.101-137
比田井克仁 2004b「地域政権と土器移動―古墳時代前期の南関東土器圏の北上に関連して―」『古代』第 116 号 pp.113-130
平間幸人 2001「仙台平野における小型丸底鉢について」『仙台市富沢遺跡保存館研究報告』4　pp.48-62
廣谷和也 2008「東北南部における古墳出土鉄鏃の変遷」『古文化談叢』第 60 号 pp.107-128
福島県立博物館 1994『企画展　会津大塚山古墳の時代－激動の三・四世紀－』
福永伸哉 2012「副葬品」『講座日本の考古学 8　古墳時代下』pp.430-453
福永伸哉 2013「畿内から見た城の山古墳」『第 2 回シンポジウム　城の山古墳の謎に迫る』pp.21-24
藤沢　敦 2000「栗原・登米・本吉地方の古墳墓」『阿部正光君追悼集』pp.69-80
藤沢　敦 2001「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』第 48 巻第 3 号 pp.41-55
藤沢　敦 2007「倭と蝦夷と律令国家―考古学的文化の変異と国家・民族の境界―」『史林』90 巻 1 号 pp.4-27
藤沢　敦 2009「墳墓から見た古代の本州島北部と北海道」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 152 集 pp.441-458

藤沢　敦 2011「古墳時代の「境界」と「民族」」『季刊考古学』117 pp.54-59
藤沢　敦 2012「住居と集落」『講座日本の考古学８　古墳時代下』pp.297-323
藤沢　敦 2013「古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての東北地方日本海側の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 179 集 pp.365-390
藤沢　敦 2014「古墳文化と続縄文文化の相互関係」『古墳と続縄文文化』pp.9-28
藤沢　敦 2015「四　不安定な古墳の変遷」『東北の古代史２　倭国の形成と東北』pp.107-133
藤沢　敦・大谷基 1998「宮城県地域における豪族居館について」『第 8 回　東日本埋蔵文化財研究会　古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』pp.78-99
古川一明ほか 1993「1 東北南部の集落の概要」『日本考古学協会 1993 年度新潟大会　東日本における古墳出現過程の再検討』pp.298-299
古瀬清秀 1974「古墳時代鉄製工具の研究―短冊形鉄斧を中心として―」『考古学雑誌』第 60 巻第 2 号 pp.31-56
古瀬清秀 1991「農工具」『古墳時代の研究』第 8 巻 pp.71-91
堀田孝博 2005「古墳時代の織物利用」『季刊考古学』第 91 号 pp.70-73
本田光子 1990「石杵考」『古代』第 90 号 pp.111-140
松井孝宗 2015「屋内土坑の再検討―弥生、古墳時代の竪穴住居跡内の貯蔵穴をめぐって―」『駒澤考古』第 40 号 pp.71-87
松木武彦 1999「副葬品から見た古墳の成立過程」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集』pp185-204
三浦浩人 2015「出羽国南部における古墳時代前期の住居空間と祭祀空間」『さあべい』第 30 号 pp.42-58
水澤幸一 2013a「城の山古墳の発掘調査」『第 1 回城の山古墳シンポジウム　眠りから覚めた城の山古墳』pp.1-23
水澤幸一 2013b「発掘後の調査成果」『第 2 回城の山古墳シンポジウム　城の山古墳の謎に迫る』pp.1-5
水澤幸一 2014a「城の山古墳第 7 次・8 次調査の成果と出土鞍解説」『第 3 回城の山古墳シンポジウム　解き明かされた城の山古墳』pp.1-6
水澤幸一 2014b「縁辺の古墳と在地社会―城の山古墳を中心にして―」『古墳と続縄文文化』pp.57-78
水澤幸一 2014c「城の山古墳」『古墳と続縄文文化』pp.140-143
水澤幸一 2016「古墳時代前期の両頭金具について」『考古学論究』第 17 号 pp.59-66
宮本長二郎 1990「ベッド状遺構と屋内施設」『季刊考古学』32 pp.58-64
宮本長二郎 1989「古墳時代竪穴住居論」『研究論集Ⅷ』pp.201-232 奈良国立文化財研究所学報 (第 47 冊)
村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
村上恭通・山村芳貴 2003「農工具」『考古資料大観』第 7 巻 pp.265-271
村上裕次 2015a「入の沢遺跡の調査成果」『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』pp.11-22
村上裕次 2015b「古墳時代前期北縁の拠点的な集落―宮城県栗原市入の沢遺跡」『季刊考古学』第 133 号 pp.89-90・93-94
村田晃一 1995「宮城郡における 10 世紀前後の土器」『福島考古』第 36 号 pp.47-72
村松洋介 2006「鏡の祭祀－非副葬鏡の問題を中心に―」『季刊考古学』第 96 号 pp.40-43
森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』74 巻 6 号 pp.1-43
森下章司 1998「鏡の伝世」『史林』81 巻 4 号 pp.1-34
森下章司 2015「銅鏡からみた入の沢遺跡と東北の古墳時代」『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』pp.23-32
八木光則 2006「北奥の赤焼土器」『考古学の諸相Ⅱ』坂詰秀一先生古希記念論集　pp.743-758
八木光則 2015a「「入の沢遺跡」の頃の東北北部社会」『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』pp.64-74
八木光則 2015b「五　古墳時代併行期の北日本」『東北の古代史２　倭国の形成と東北』pp.134-161
柳沼賢治 2012「古墳時代前期の交流と地域間関係」『福島考古』第 54 号 pp.39-58
柳沢和明・白崎恵介　1997「考察」『多賀城跡』pp.61-77
山本　靖 2005「古墳時代に形成された方形環濠」『専修考古学』第 11 号 pp.19-38
米田克彦 2009「穿孔技術からみた出雲玉作の特質と系譜」『出雲玉作の特質に関する研究―古代出雲における玉作の研究Ⅲ―』pp.93-126　島根県古代文化センター
立命館大学考古学論集刊行会 2011『倭製鏡一覧』立命館大学考古学資料集第 4 冊
脇山佳奈 2012「祭祀遺跡・集落遺跡出土の仿製鏡」『舞鶴市千歳下遺跡発掘調査報告書』pp.65-71・76-81

脇山佳奈 2015「重圏文鏡の画期と意義」『広島大学大学院文学研究科　広島大学考古学研究室紀要』第 7 号 pp.13-37
和田晴吾 2015「ヤマト王権の動向と東北の古墳時代社会」『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』pp.89-94
渡井英誉 1998「大廓式土器小考―大廓式土器の画期とその展開―」『庄内式土器研究』ⅩⅥ　pp.39-58　庄内式土器研究会
渡井英誉・竹内順一 1999「大廓式と呼ばれる大型壺―大廓式土器の成立と移動―」『静岡県考古学研究』No.31　pp.45-59　静岡県考古学会

＜報告書＞
青森県
青森県教育委員会 1999『隠川 (11) 遺跡Ⅰ・隠川 (12) 遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財報告書第 260 集
岩手県
岩手県教育委員会 1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－XI－ (水沢地区)』岩手県文化財調査報告書第 60 集
岩手県埋蔵文化財センター 1982『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書（Ⅱ)』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第 34 集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『中半入遺跡・蝦夷塚古墳』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 380 集
滝沢村教育委員会 1986『耳取遺跡』滝沢村文化財調査報告書第 3 集
滝沢村埋蔵文化財センター 2008『仏沢Ⅲ遺跡』滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第 3 集
高山遺跡調査委員会・水沢市教育委員会 1978『高山遺跡』水沢市文化財報告書第 1 集
水沢市教育委員会 1986『水沢遺跡群範囲確認調査』水沢市文化財調査報告書第 15 集
水沢市教育委員会 1988『胆沢城跡発掘調査概報』
盛岡市教育委員会 1997『永福寺山遺跡』
盛岡市教育委員会 1999『安倍館遺跡』
秋田県
秋田県教育委員会 1988『一般国道 7 号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第 167 集
宮城県
石巻市教育委員会 1992『田道町遺跡』石巻市文化財調査報告書第 4 集
石巻市教育委員会 1993『田道町遺跡』石巻市文化財調査報告書第 5 集
石巻市教育委員会 2000『新山崎遺跡』石巻市文化財調査報告書第 8 集
石巻市教育委員会 2003『新金沼遺跡』石巻市文化財調査報告書第 11 集
石巻市教育委員会 2004『梨木畑貝塚』石巻市文化財調査報告書第 12 集
大崎市教育委員会 2008『野崎遺跡・欠下遺跡・若林遺跡』大崎市文化財調査報告書第 4 集
大崎市教育委員会 2011a『神明遺跡』大崎市文化財調査報告書第 13 集
大崎市教育委員会 2011b「天神前遺跡」『平成 23 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』pp.19-24
大崎市教育委員会 2015『矢根八幡遺跡』大崎市文化財調査報告書第 21 集
大郷町教育委員会 1994『鶴館遺跡』大郷町文化財調査報告書
大郷町教育委員会 2011『鶴館遺跡』大郷町文化財調査報告書第 2 集
角田市教育委員会 1992『西屋敷 1 号墳・吉ノ内 1 号古墳発掘調査報告書』角田市文化財調査報告書第 8 集
角田市教育委員会 2003『角田郡山遺跡 XI ほか』角田市文化財調査報告書第 28 集
角田市教育委員会 2005『角田郡山遺跡 XIII ほか』角田市文化財調査報告書第 30 集
河南町教育委員会 1987『須江糠塚遺跡』河南町文化財調査報告書第 1 集
河南町教育委員会 1993『須江窯跡群　関ノ入遺跡』河南町文化財調査報告書第 7 集
河南町教育委員会 2004『関ノ入遺跡』河南町文化財調査報告書第 13 集
加美町教育委員会 2005『地蔵車遺跡』加美町文化財調査報告書第 4 集
加美町教育委員会 2011『地蔵車遺跡Ⅱ』加美町文化財調査報告書第 21 集
栗駒町教育委員会 1995『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第 3 集
栗原市教育委員会 2006『四ツ壇遺跡ほか』栗原市文化財調査報告書第 3 集
栗原市教育委員会 2009『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第 9 集
栗原市教育委員会 2011『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第 13 集

栗原市教育委員会 2013『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第 17 集
栗原市教育委員会 2014『城下遺跡ほか』栗原市文化財調査報告書第 18 集
小牛田町教育委員会 1976『山前遺跡』
小牛田町教育委員会 1979『山前遺跡－史跡環境整備報告書―』
蔵王町教育委員会 1997『堀の内遺跡』蔵王町文化財調査報告書第 1 集
蔵王町教育委員会 2008『六角遺跡』蔵王町文化財調査報告書第 6 集
蔵王町教育委員会 2014『磯ヶ坂遺跡ほか』蔵王町文化財調査報告書第 17 集
蔵王町教育委員会 2015『蔵王町内遺跡発掘調査報告書 2』蔵王町文化財調査報告書第 20 集
白石市教育委員会 1984『梅田遺跡調査報告書』白石市文化財調査報告書第 22 集
志波姫町教育委員会 2005『御駒堂遺跡』志波姫町文化財調査報告書第 1 集
瀬峰町教育委員会 1983『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第 4 集
仙台市教育委員会 1976『昭和 50 年度　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報』
仙台市文化財調査報告書第 11 集
仙台市教育委員会 1977『昭和 51 年度　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報』
仙台市文化財調査報告書第 12 集
仙台市教育委員会 1979『史跡遠見塚古墳　昭和 53 年度環境整備予備調査概報』
仙台市文化財調査報告書第 15 集
仙台市教育委員会 1980a『史跡遠見塚古墳昭和 54 年度環境整備予備調査概報』
仙台市文化財調査報告書第 20 集
仙台市教育委員会 1980b『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第 24 集
仙台市教育委員会 1981『史跡遠見塚古墳　昭和 55 年度環境整備予備調査概報』
仙台市文化財調査報告書第 26 集
仙台市教育委員会 1982『宮城県仙台市鴻ノ巣遺跡』仙台市文化財調査報告書第 44 集
仙台市教育委員会 1983a『史跡遠見塚古墳　昭和 57 年度環境整備予備調査概報』
仙台市文化財調査報告書第 48 集
仙台市教育委員会 1983b『宮城県仙台市中田畑中遺跡』仙台市文化財調査報告書第 53 集
仙台市教育委員会 1984a『燕沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第 62 集
仙台市教育委員会 1984b『戸ノ内遺跡』仙台市文化財調査報告書第 70 集
仙台市教育委員会 1987a『六反田遺跡Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第 102 集
仙台市教育委員会 1987b『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第 109 集
仙台市教育委員会 1989『仙台市岩切　鴻ノ巣遺跡』仙台市文化財調査報告書第 123 集
仙台市教育委員会 1990a『下ノ内遺跡』仙台市文化財調査報告書第 136 集
仙台市教育委員会 1990b『大野田古墳群』仙台市文化財調査報告書第 138 集
仙台市教育委員会 1991a『富沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第 149 集
仙台市教育委員会 1991b『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第 153 集
仙台市教育委員会 1992『土手内』仙台市文化財調査報告書第 165 集
仙台市教育委員会 1994a『今泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第 185 集
仙台市教育委員会 1994b『昭和北遺跡』仙台市文化財調査報告書第 186 集
仙台市教育委員会 1995a『伊古田遺跡』仙台市文化財調査報告書第 193 集
仙台市教育委員会 1995b『四郎丸館跡』仙台市文化財調査報告書第 200 集
仙台市教育委員会 1996『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第 213 集
仙台市教育委員会 1997『四郎丸館跡』仙台市文化財調査報告書第 218 集
仙台市教育委員会 1998『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第 225 集
仙台市教育委員会 1999『後河原遺跡』仙台市文化財調査報告書第 236 集
仙台市教育委員会 2000『沼向遺跡第 1 ～ 3 次調査』仙台市文化財調査報告書第 241 集
仙台市教育委員会 2002a『仙台市太白区西多賀　原遺跡』仙台市文化財調査報告書第 257 集
仙台市教育委員会 2002b『小鶴城跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 261 集
仙台市教育委員会 2004a『元袋遺跡』仙台市文化財調査報告書第 272 集
仙台市教育委員会 2004b『富沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第 273 集
仙台市教育委員会 2005『大野田古墳群』仙台市文化財調査報告書第 290 集
仙台市教育委員会 2009a『大野田古墳群』仙台市文化財調査報告書第 339 集
仙台市教育委員会 2009b『山口遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 345 集
仙台市教育委員会 2010a『沼向遺跡第 4 ～ 34 次調査』仙台市文化財調査報告書第 360 集

仙台市教育委員会 2010b『大野田古墳群』仙台市文化財調査報告書第 364 集
仙台市教育委員会 2010c『沼向遺跡第 36 次調査』仙台市文化財調査報告書第 368 集
仙台市教育委員会 2011『法領塚古墳他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 393 集
仙台市教育委員会 2012『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第 408 集
仙台市教育委員会 2013a『西台畑遺跡』仙台市文化財調査報告書第 411 集
仙台市教育委員会 2013b『伊古田遺跡・大野田古墳群・下ノ内遺跡』仙台市文化財調査報告書第 413 集
仙台市教育委員会 2014『大野田遺跡』仙台市文化財調査報告書第 424 集
仙台市教育委員会 2015a『西台畑遺跡第 12 次調査』仙台市文化財調査報告書第 433 集
仙台市教育委員会 2015b『仙台平野の遺跡群 25』仙台市文化財調査報告書第 437 集
多賀城市教育委員会 1991『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 26 集
多賀城市教育委員会 1997『山王遺跡Ⅰ』多賀城市文化財調査報告書第 45 集
多賀城市教育委員会 2006『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 86 集
多賀城市教育委員会 2010『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 100 集
田尻町教育委員会 1998『新田柵跡推定地』田尻町文化財調査報告書第 3 集
田尻町教育委員会 2001『新田柵跡推定地 4』田尻町文化財調査報告書第 6 集
築館町教育委員会 1990『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 3 集
築館町教育委員会 1991『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 4 集
築館町教育委員会 1992『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 5 集
築館町教育委員会 1993『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 6 集
築館町教育委員会 1994『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 7 集
築館町教育委員会 1995『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 8 集
築館町教育委員会 1998『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 11 集
築館町教育委員会 2000『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 13 集
築館町教育委員会 2002『嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第 15 集
築館町教育委員会 2003『嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第 16 集
築館町教育委員会 2005a『鰻沢遺跡』築館町文化財調査報告書第 18 集
築館町教育委員会 2005b『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 19 集
築館町史編纂委員会 1976『築館町史』
中新田町教育委員会 2002『元宿遺跡　原江遺跡』中新田町文化財調査報告書第 26 集
名取市教育委員会 1975『宮下遺跡』名取市文化財調査報告書第 1 集
名取市教育委員会 1978『史跡雷神山古墳』名取市文化財調査報告書第 5 集
名取市教育委員会 1979『十三塚遺跡昭和 53 年度遺構確認調査報告』名取市文化財調査報告書第 6 集
名取市教育委員会 1985『昭和 59 年度愛島東部丘陵遺跡群詳細分布調査 1』名取市文化財調査報告書第 15 集
名取市教育委員会 1987『愛島東部丘陵遺跡群　遺跡詳細分布調査Ⅲ』名取市文化財調査報告書第 18 集
名取市教育委員会 1994『仙台東道路関係遺跡調査報告書』名取市文化財調査報告書第 33 集
名取市教育委員会 1999a『原遺跡』名取市文化財調査報告書第 41 集
名取市教育委員会 1999b『宮城県名取市　下余田遺跡』名取市文化財調査報告書第 42 集
名取市教育委員会 2002『宮城県名取市　野田山遺跡』名取市文化財調査報告書第 47 集
名取市教育委員会 2004『宮城県名取市　十三塚遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第 55 集
名取市教育委員会 2012『宮城県名取市　町裏遺跡・鶴巻前遺跡・下増田飯塚古墳群他』
名取市文化財調査報告書第 60 集
名取市教育委員会 2016『辻遺跡・下余田遺跡・本村遺跡他』名取市文化財調査報告書第 67 集
迫町教育委員会 1995『佐沼城跡』迫町文化財調査報告書第 2 集
東松島市教育委員会 2008『里浜貝塚Ⅵ』東松島市文化財調査報告書第 6 集
古川市教育委員会 1995『留沼遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第 17 集
古川市教育委員会 1999『留沼遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第 25 集
古川市教育委員会 2002『堤根遺跡　中沢遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第 31 集
美里町教育委員会 2008『成田遺跡』美里町文化財調査報告書第 4 集
美里町教育委員会 2010『館ノ山遺跡　館ノ山館跡』美里町文化財調査報告書第 6 集
宮城県教育委員会 1974『東北新幹線関係遺跡調査報告Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第 35 集
宮城県教育委員会 1979『宇南遺跡』宮城県文化財調査報告書第 59 集
宮城県教育委員会 1980 a『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 62 集
宮城県教育委員会 1980 b『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 63 集

宮城県教育委員会 1980c『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 65 集
宮城県教育委員会 1980d『金剛寺貝塚　宇賀崎貝塚　宇賀崎 1 号墳他』宮城県文化財調査報告書第 67 集
宮城県教育委員会 1980e『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 69 集
宮城県教育委員会 1980f『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 71 集
宮城県教育委員会 1980g『東北新幹線関係遺跡調査報告Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 72 集
宮城県教育委員会 1981a『東北新幹線関係遺跡調査報告Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第 77 集
宮城県教育委員会 1981b『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第 81 集
宮城県教育委員会 1982『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第 83 集
宮城県教育委員会 1983a『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ』宮城県文化財調査報告書第 93 集
宮城県教育委員会 1983b『宮城県営圃場整備等関連　遺跡詳細分布調査報告書 (昭和 57 年度)』
宮城県文化財調査報告書第 95 集
宮城県教育委員会 1983c『朽木橋横穴古墳群　宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第 96 集
宮城県教育委員会 1984『宮城県営圃場整備等関連　遺跡詳細分布調査報告書 (昭和 58 年度)』
宮城県文化財調査報告書第 100 集
宮城県教育委員会 1985『今熊野遺跡　一本杉遺跡　馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第 104 集
宮城県教育委員会 1992『野田山遺跡』宮城県文化財調査報告書第 145 集
宮城県教育委員会 1993a『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 154 集
宮城県教育委員会 1993b『北原遺跡』宮城県文化財調査報告書第 159 集
宮城県教育委員会 1994a『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 160 集
宮城県教育委員会 1994b『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第 163 集
宮城県教育委員会 1995『山王遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 167 集
宮城県教育委員会 1996『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 169 集
宮城県教育委員会 1998『山王遺跡町地区の調査』宮城県文化財調査報告書第 175 集
宮城県教育委員会 2000『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第 184 集
宮城県教育委員会 2001『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 187 集
宮城県教育委員会 2003a『新田東遺跡』宮城県文化財調査報告書第 191 集
宮城県教育委員会 2003b『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第 192 集
宮城県教育委員会 2005『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 202 集
宮城県教育委員会 2009『原田遺跡・下萩沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第 219 集
宮城県教育委員会 2012『大天馬遺跡』宮城県文化財調査報告書第 231 集
宮城県教育委員会 2014「入の沢遺跡」『平成 26 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』pp.1-4
宮城県教育委員会 2016a『大天馬遺跡・後沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第 241 集
宮城県教育委員会 2016b『御駒堂遺跡』宮城県文化財調査報告書第 244 集
山元町教育委員会 2010『北経塚遺跡―店舗開発工事に係る発掘調査報告書―』
山元町文化財調査報告書第 4 集
山元町教育委員会 2013『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 5 集
山元町教育委員会 2014『的場遺跡』山元町文化財調査報告書第 6 集
山元町教育委員会 2015『中筋遺跡』山元町文化財調査報告書第 10 集
亘理町教育委員会 1997『堀の内遺跡』亘理町文化財調査報告書第 7 集
亘理町教育委員会 2002『堤の内遺跡』亘理町文化財調査報告書第 8 集

山形県

寒河江市教育委員会 1998『高瀬山遺跡』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 16 集
南陽市教育委員会 1989『山形県南陽市稲荷森古墳』南陽市埋蔵文化財調査報告書第 4 集
南陽市教育委員会 2012『蒲生田山古墳群　総合公園内遺跡群　発掘調査報告書』
南陽市埋蔵文化財調査報告書第 5 集
南陽市教育委員会 2013『長岡山遺跡・長岡山東遺跡発掘調査報告書』南陽市埋蔵文化財調査報告書第 7 集
南陽市教育委員会 2015『清水上遺跡』南陽市埋蔵文化財調査報告書第 9 集
山形県教育委員会 1976『山形県文化財発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 6 集
山形県教育委員会 1979『山形西高敷地内遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第 17 集
山形県教育委員会 1980『熊野台遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第 31 集
山形県教育委員会 1981a 山形市『柏倉地区遺跡群発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 33 集
山形県教育委員会 1981b『下槇遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第 39 集
山形県教育委員会 1983『関 B 遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第 68 集

山形県教育委員会 1986『諏訪前遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第 102 集
山形県教育委員会 1990『明神崎遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第 157 集
山形県教育委員会 1992『山形西高敷地内遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第 173 集
山形県埋蔵文化財センター 1994a『今塚遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 7 集
山形県埋蔵文化財センター 1994b『岡ノ台遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 15 集
山形県埋蔵文化財センター 1994c『黒藤館跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 16 集
山形県埋蔵文化財センター 1995a『畑田遺跡・中野遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 22 集
山形県埋蔵文化財センター 1995b『廻り屋遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 27 集
山形県埋蔵文化財センター 2001a『長表遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 87 集
山形県埋蔵文化財センター 2001b『志戸田遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 92 集
山形県埋蔵文化財センター 2002a『菖蒲江 1 遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 105 集
山形県埋蔵文化財センター 2002b『山形元屋敷遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 109 集
山形県埋蔵文化財センター 2003『蔵増押切遺跡』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 112 集
山形県埋蔵文化財センター 2004a『服部遺跡・藤治屋敷遺跡』
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 119 集
山形県埋蔵文化財センター 2004b『萩原遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 120 集
山形県埋蔵文化財センター 2004c『馬洗場 B 遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 123 集
山形県埋蔵文化財センター 2004d『板橋 1 遺跡　板橋 2 遺跡』
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 125 集
山形県埋蔵文化財センター 2004e『高擶南遺跡・菖蒲江 1 遺跡・菖蒲江 2 遺跡』
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 132 集
山形県埋蔵文化財センター 2005『高瀬山遺跡 (HO 地区)』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 145 集
山形県埋蔵文化財センター 2007a『梅野木前 1 遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 160 集
山形県埋蔵文化財センター 2007b『庚壇遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 161 集
山形県埋蔵文化財センター 2009『玉作 2 遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 171 集
山形県埋蔵文化財センター 2010『百刈田遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 184 集
山形県埋蔵文化財センター 2011『玉作 2 遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 192 集
山形県埋蔵文化財センター 2012a『高瀬山遺跡 (HO 地区)』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 200 集
山形県埋蔵文化財センター 2012b『鎌倉上遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 201 集
山形県埋蔵文化財センター 2012c『川前 2 遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 204 集
山形市教育委員会・山武考古学研究所 2001『一ノ坪遺跡』山形市埋蔵文化財調査報告書第 12 集
山形市教育委員会 2005『双葉町遺跡』山形市埋蔵文化財調査報告書第 24 集
米沢市教育委員会 1982『水神前遺跡　柿の木遺跡　二タ俣 B 遺跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書第 6 集
米沢市教育委員会 1986『大清水遺跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書第 17 集
米沢市教育委員会 1988『比丘尼平発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第 21 集
米沢市教育委員会 2000『遺跡詳細分布調査報告書第 13 集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第 72 集
米沢市教育委員会 2003『遺跡詳細分布調査報告書第 16 集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第 82 集
米沢市教育委員会 2004a『遺跡詳細分布調査報告書第 17 集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第 84 集
米沢市教育委員会 2004b『大西遺跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書第 85 集

福島県

会津坂下町教育委員会 1990a『福島県営会津南部ほ場整備事業　阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』
会津坂下町文化財調査報告書第 16 集
会津坂下町教育委員会 1990b『福島県営会津南部ほ場整備事業　若宮地区遺跡発掘調査報告書』
会津坂下町文化財調査報告書第 17 集
会津坂下町教育委員会 1993a『福島県営ほ場整備事業　坂下北部地区遺跡発掘調査報告書』
会津坂下町文化財調査報告書第 32 集
会津坂下町教育委員会 1993b『亀ヶ森古墳　国指定史跡亀ヶ森古墳試掘調査報告書』
会津坂下町文化財調査報告書第 37 集
会津坂下町教育委員会 1994a『福島県営ほ場整備事業　坂下北部地区遺跡発掘調査報告書』
会津坂下町文化財調査報告書第 41 集
会津坂下町教育委員会 1994b『福島県営ほ場整備事業　阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』
会津坂下町文化財調査報告書第 42 集

会津坂下町教育委員会 1995『杵ガ森古墳　杵ガ森古墳・稲荷塚遺跡発掘調査報告書』
会津坂下町文化財調査報告書第 33 集
会津坂下町教育委員会 1998『鎮守森古墳　国指定史跡鎮守森古墳発掘調査報告書』
会津坂下町文化財調査報告第 50 集
会津坂下町教育委員会 2008『陣が峯城跡　町内遺跡範囲内容確認調査報告書Ⅱ』
会津坂下町文化財調査報告書第 60 集
会津坂下町教育委員会 2011『盗人沢遺跡』会津坂下町文化財調査報告書第 66 集
会津若松市教育委員会・堂ヶ作山古墳調査団 1992『堂ヶ作山古墳Ⅱ』会津若松市文化財調査報告第 22 号
会津若松市教育委員会・堂ヶ作山古墳調査団 1996『堂ヶ作山古墳Ⅲ』会津若松市文化財調査報告第 50 集
会津若松市教育委員会 2014『郡山遺跡Ⅸ』会津若松市文化財調査報告書 140 号
会津若松市史出版委員会 1964『会津若松市史』
猪苗代町教育委員会 2001『磐根地区発掘調査報告書Ⅲ』猪苗代町文化財調査報告書第 35 集
いわき市教育委員会 1982『内宿遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 7 冊
いわき市教育委員会 1984『応時遺跡緊急発掘調査概報』福島県いわき市勿来町大高応時所在
いわき市教育委員会 1985a『龍門寺遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 11 冊
いわき市教育委員会 1985b『愛谷遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 12 冊
いわき市教育委員会 1988『寺台遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 18 冊
いわき市教育委員会 1994『上ノ内遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 38 冊
いわき市教育委員会 1997『泉町Ｃ遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 50 冊
いわき市教育委員会 1998『折返Ａ遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 54 冊
いわき市教育委員会 2002a『荒田目条里制遺構・砂畑遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 84 冊
いわき市教育委員会 2002b『桜町遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 91 冊
いわき市教育委員会 2003『折返Ａ遺跡・菅俣Ｂ遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 95 冊
いわき市教育委員会 2004『牛転古墳群・小茶円遺跡・砂畑遺跡・内宿遺跡』
いわき市埋蔵文化財調査報告第 104 冊
いわき市教育委員会 2006『白土城跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 116 冊
いわき市教育委員会 2008『神力前Ｂ遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 126 冊
いわき市教育委員会 2009a『県指定史跡　玉山古墳』いわき市埋蔵文化財調査報告第 135 冊
いわき市教育委員会 2009b『神力前Ｂ遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 138 冊
いわき市教育委員会 2010『水品遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 142 冊
いわき市教育委員会 2013a『神力前Ｂ遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 153 冊
いわき市教育委員会 2013b『古川遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 154 冊
いわき市教育委員会 2014『震災復興関連市内遺跡発掘調査報告（平成 25 年度）』
いわき市埋蔵文化財調査報告第 165 冊
大玉村教育委員会 1992『上ノ台遺跡発掘調査報告』大玉村文化財調査報告書第 4 集
小高町教育委員会 2002『東広畑Ｂ遺跡』小高町文化財調査報告書第 4 集
喜多方市教育委員会 2000『県営担い手育成型大規模ほ場整備事業に関わる埋蔵文化財発掘調査』
喜多方市文化財調査報告書第 6 集
喜多方市教育委員会 2010『県営経営体育成基盤整備事業　駒形第一地区発掘調査報告書』
喜多方市文化財調査報告書第 7 集
喜多方市教育委員会 2014『県営経営体育成基盤整備事業　駒形第二地区発掘調査報告書』
喜多方市文化財調査報告書第 14 集
喜多方市教育委員会 2015『県営経営体育成基盤整備事業　駒形第二地区発掘調査報告書 2』
喜多方市文化財調査報告書第 19 集
郡山市教育委員会 1984『三ツ担古墳群　1・2 号墳発掘調査概要』
郡山市教育委員会 1985『郡山東部Ⅴ』
郡山市教育委員会 1987『郡山カルチャーパーク関連報告第 1 集』
郡山市教育委員会 1988『郡山東部 8』
郡山市教育委員会 1991『郡山東部 11』
郡山市教育委員会 1993『郡山東部 13』
郡山市教育委員会 1996a『御前南土地区画整理事業関連』
郡山市教育委員会 1996b『民間宅地造成関連』
郡山市教育委員会 1997『大安場古墳群』

郡山市教育委員会 1998『大安場古墳群』
郡山市教育委員会 1999a『御前南土地区画整理事業関連』
郡山市教育委員会 1999b『大安場古墳群』
郡山市教育委員会 2003『大安場古墳群』
郡山市教育委員会 2004『大安場古墳群』
郡山市教育委員会 2005『大安場古墳群』
塩川町教育委員会 1998『県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業　塩川西部地区遺跡発掘調査報告書 3』
塩川町文化財調査報告第 4 集
塩川町教育委員会 2004『県営経営体育成基盤整備事業　塩川西部地区遺跡発掘調査報告書 7』
塩川町文化財調査報告第 12 集
白河市教育委員会 2012『舟田境遺跡 (第 3 次調査)　大塚遺跡発掘調査報告書』
白河市埋蔵文化財調査報告書第 61 集
新地町教育委員会 1978『三貫地　田丁場 A 地点調査報告　田丁場 B 地点調査概報』
新地町埋蔵文化財調査報告書
須賀川市教育委員会 2001『仲の町遺跡』須賀川市文化財調査報告書第 43 集
創価大学・会津坂下町教育委員会 1999『森北古墳群』
伊達市教育委員会 2010『平成 18 ～ 20 年度市内遺跡発掘調査報告書』伊達市埋蔵文化財調査報告書第 9 集
棚倉町教育委員会 1985『松並平遺跡』
田村山古墳周溝調査報告書刊行会 1981『福島県北会津村会津田村山古墳』
東北学院大学・原町市教育委員会 1996『桜井高見町 A 遺跡発掘調査報告書』
原町市埋蔵文化財調査報告書第 12 集
原町市教育委員会 1997『原町市内遺跡発掘調査報告書 1　平成 7 年度試掘調査』
原町市埋蔵文化財調査報告書第 14 集
原町市教育委員会 2000『福島県緊急雇用対策事業関連遺跡発掘調査報告書』
原町市埋蔵文化財調査報告書第 24 集
原町市教育委員会 2001『桜井古墳群上渋佐支群 7 号墳発掘調査報告書』
原町市埋蔵文化財調査報告書第 27 集
原町市教育委員会 2002『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
原町市埋蔵文化財調査報告書第 29 集
福島県教育委員会 1975『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅰ』福島県文化財調査報告書第 80 集
福島県教育委員会 1987『国営総合農地開発事業　母畑地区遺跡分布調査報告 11』
福島県文化財調査報告書第 173 集
福島県教育委員会 1994『国営総合農地開発事業　母畑地区遺跡分布調査報告 33』
福島県文化財調査報告書第 287 集
福島県教育委員会 1991a『東北横断自動車道遺跡調査報告 12』福島県文化財調査報告書第 262 集
福島県教育委員会 1991b『東北横断自動車道遺跡調査報告 13』福島県文化財調査報告書第 263 集
福島県教育委員会 1997a『常磐自動車道遺跡調査報告 10』福島県文化財調査報告書第 332 集
福島県教育委員会 1997b『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ』福島県文化財調査報告書第 333 集
福島県教育委員会 2002a『常磐自動車道遺跡調査報告 32』福島県文化財調査報告書第 391 集
福島県教育委員会 2002b『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告 12』
福島県文化財調査報告書第 394 集
福島県教育委員会 2005『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告 5』福島県文化財調査報告書第 430 集
福島県教育委員会・いわき市教育文化事業団 1993『東北横断自動車道遺跡調査報告 24』
福島県文化財調査報告書第 295 集
福島県教育委員会・いわき市教育文化事業団 1995『東北横断自動車道遺跡調査報告 29』
福島県文化財調査報告書第 309 集
福島市教育委員会 1988『昭和 62 年度一般国道 13 号福島西道路関連遺跡発掘調査報告』
福島市埋蔵文化財報告書第 27 集
福島市教育委員会 1991『岩田遺跡』福島市埋蔵文化財報告書第 41 集
福島市教育委員会 1995a『勝口前畑遺跡 2』福島市埋蔵文化財報告書第 68 集
福島市教育委員会 1995b『勝口前畑遺跡 3』福島市埋蔵文化財報告書第 74 集
福島市教育委員会 1996『勝口前畑遺跡 4』福島市埋蔵文化財報告書第 88 集
船引町教育委員会 1999『堀越地区遺跡発掘調査報告書Ⅵ』船引町文化財調査報告書第 25 集

法政大学 1985『本屋敷古墳群の研究』
保原町教育委員会 2000『大泉みずほ遺跡発掘調査報告書』保原町文化財調査報告書第 15 集
保原町教育委員会 2003『菖蒲沢Ａ遺跡発掘調査報告書』保原町文化財調査報告書第 17 集
馬目順一・山田　広 1972『福島県双葉郡富岡町　毛萱遺跡』南奥考古学研究叢刊第 2 冊
南相馬市教育委員会 2010『飯崎館跡』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第 17 集
本宮町教育委員会 1995『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅵ』本宮町文化財調査報告書第 20 集
本宮町教育委員会 1996『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅶ』本宮町文化財調査報告書第 21 集
本宮町教育委員会 1997『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅷ』本宮町文化財調査報告書第 24 集
本宮町教育委員会 1998『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅸ』本宮町文化財調査報告書第 25 集
本宮町教育委員会 2001『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅹ Ⅱ』本宮町文化財調査報告書第 35 集
本宮町教育委員会 2002『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告Ⅹ Ⅳ』本宮町文化財調査報告書第 37 集

新潟県

三条市教育委員会 1989『新潟県三条市　保内三王山古墳群』
新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ』
新潟県埋蔵文化財調査報告書第 142 集

栃木県

小山市教育委員会 1992『下犬塚遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告書第 29 集
栃木県教育委員会 1988『栃木県埋蔵文化財保護行政年報〔昭和 62 年度〕』
栃木県埋蔵文化財調査報告第 99 集
とちぎ生涯学習文化財団 2005『堀越遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 287 集

群馬県

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『下佐野遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 77 集
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989『有馬条里遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 97 集
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『熊野堂遺跡 (2)』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 100 集
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992『神保下條遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 137 集
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『三和工業団地Ⅰ遺跡（2)』
群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 251 集
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『成塚向山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 426 集
渋川市教育委員会 1987『中筋遺跡』

茨城県

茨城県教育財団 1989『一般国道 6 号線道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書』
茨城県教育財団文化財調査報告書第 50 集
茨城県教育財団 1990『一般国道 349 号線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』
茨城県教育財団文化財調査報告書第 55 集

埼玉県

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989『深谷市　新田裏・明戸東・原遺跡』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 85 集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998『浦和市　白鍬宮腰遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 227 集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005『熊谷市　北島遺跡Ⅹ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 302 集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012『反町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 393 集

千葉県

市原市文化財センター 1986『千葉家市原市　潤井戸西山遺跡』
印旛郡市文化財センター 1993『千葉県佐倉市高岡遺跡群Ⅰ』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 71 集
柏市教育委員会 2006『不動山遺跡（第 2 次）不動山遺跡（第 7 次）一番割遺跡（第 2 次）今泉遺跡（第 2 次）
一番割遺跡（第 4 次）一番割遺跡（第 8 次)』柏市埋蔵文化財調査報告書第 56 集
地域文化財研究所 2012『呼塚遺跡』柏市埋蔵文化財調査報告書第 71 集
山武考古学研究所 1985『戸張一番割遺跡』柏市埋蔵文化財調査報告書

東京都

東北新幹線赤羽地区遺跡調査会調査団 1992『赤羽台遺跡』

長野県

長野県埋蔵文化財センター 1996『大星山古墳群・北平 1 号墳』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 20
長野県埋蔵文化財センター 1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15』
長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 26

岐阜県
多治見市教育委員会 2005『喜多町西遺跡発掘調査報告書』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第 75 号
静岡県
浜松市教育委員会 1982『中平遺跡』
浜松市文化協会 1992『佐鳴湖西岸遺跡群』
浜松市文化協会 2004『坊ヶ跡遺跡』
袋井市教育委員会 1985『土橋遺跡』
焼津市教育委員会 1982『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』
焼津市教育委員会 1984『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』
愛知
豊田市教育委員会 2015『高橋遺跡中央区・南西区』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 66 集
豊田市教育委員会・豊田市郷土史研究会 1977『高橋遺跡第七次発掘調査報告書』豊田市郷土資料館報告十二
三重県
三重県埋蔵文化財センター 1991『平成 2 年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』
三重県埋蔵文化財調査報告 94-2
三重県埋蔵文化財センター 1996『北野遺跡（第 5 次）発掘調査概報』三重県埋蔵文化財調査報告 133-5
三重県埋蔵文化財センター 2004a『伊坂遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 227-4
三重県埋蔵文化財センター 2004b『辻子遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 227-6
三重県埋蔵文化財センター 2009『村竹コノ遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告 123-9
岡山県
岡山県教育委員会 1996『津寺遺跡 3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第 104
岡山県教育委員会 1998『津寺遺跡 5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第 127
大分県
大分県教育委員会 1999『小迫辻原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道完形埋蔵文化財発掘調査報告書 10 集
日田市教育委員会 2000『小迫辻原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 15 集
日田市教育委員会 2011『史跡小迫辻原遺跡』保存管理計画書
宇佐市教育委員会 2004『小部遺跡』宇佐地区遺跡群発掘調査報告書Ⅰ

附　　章

附章１　入の沢遺跡出土鏡の意義

大手前大学　森下章司

１．はじめに

入の沢遺跡からは、珠文鏡（SI13 出土）、櫛歯文鏡（SI13 出土）、内行花文鏡片（SI19 出土）、珠文鏡（放射状区画入　SI27 出土）の４面もの銅鏡が出土した。すべて古墳時代前期に製作された仿製鏡（倭鏡）である。以下にその特徴と位置づけを述べる。古墳時代前期の銅鏡分布の北限の地での出土であり、古墳をふくめて一遺跡の出土鏡数として東北地方では異例の多さである。いずれも竪穴建物からの出土であり、出土状況も明確であることから、建物における銅鏡の使用状況、集落出土の銅鏡の評価において、きわめて重要な情報を提供してくれる。合わせて、その意義を説く。

２．銅鏡の位置づけ

珠文鏡（SI13 出土　径 5.5cm　図 1-1）　1/3 ほど破損している。内区の珠文は一列であり、櫛歯文を経て、外区に一条の鋸歯文を巡らす。外区と内区の間には小さな段をもつ。これらの点は、古墳時代前期の仿製珠文鏡の特徴である（森下 1991　脇山 2013 の A-B 類）。苧麻製の布が付着。

岩本崇は、珠文の入れ方や他の文様・形態要素を検討し、珠文鏡を「列状系」と「充填系」の２つの系列に大別した（岩本 2015）。本鏡の特徴は「列状系」に該当する。列状系は古墳時代前期でも比較的早い段階に副葬が始まり、この段階の副葬例は畿内以外の地に多いという。東北の地で出土した本例も、そうした分布の特徴に関する見解を裏付ける材料となる。

櫛歯文鏡（SI13 出土　径 5.5cm　図 1-2）。内区に櫛歯文を二重に巡らす。主文を圏線とみたてて重圏文鏡にふくめる論もあるが（脇山 2015 の２類）、小型鏡であることや鏡体の特徴は重圏文鏡・珠文鏡と共通する。わずかな段を介して続く外区は素文。鈕は比較的大きい。遺存状況のためか、やや線表現が他の鏡と比べて太くみえる。外区の特徴などから、古墳時代前期仿製鏡と位置づけられる。赤色顔料付着。鏡面には苧麻製の布も付着。集落出土鏡に赤色顔料が確認された例は、千葉県戸張一番割遺跡出土例（平岡・井上 1985）などにある。

内行花文鏡片（SI19 出土　復元径 9.0cm　図 1-3）　鈕を含む半分強の鏡片である。破面は明瞭に研磨されており、鏡片として使用されていたことを示す。内区は六花に復元でき、花文間は珠文で埋める。花文外周に珠文列、その外側に櫛歯文帯を巡らす。外区は素文。鈕座部分などに鋳潰れがややめだつ。赤色顔料付着。

六花は仿製内行花文鏡でもっとも数が多い。また花文間を珠文で埋める例も、奈良県新山古墳ほか前期後半の古墳に例がある（宮内庁 2005）。内区外周の珠文列＋櫛歯文帯は、中国製内行花文鏡の二重の櫛歯文帯と雲雷文帯の省略形とみることができ、大阪府壺井御旅山古墳出土の仿製内行花文鏡などに例をみる（田代編 1968）。いずれも古墳時代前期後半の仿製内行花文鏡の特徴を示す。

図 1　入の沢遺跡出土鏡（1: 珠文鏡　SI13、2: 櫛歯文鏡　SI13、3: 内行花文鏡片　SI19、4: 珠文鏡　SI27）

破面は縁が特に丁寧に研磨されるが、破面中央には研磨が及ばず凹みとなる部分が残る。この研磨は、とくに破面の角を落とすことに目的があったと考えられる。弥生時代後期～古墳時代前期の鏡片には、穿孔を施して垂飾品として利用したと想定される例が多い。本鏡には穿孔は無いものの、本来は垂飾品として加工されたものであろうか。

珠文鏡（放射状区画入　SI27 出土　径 8.2cm　図 1-4）　内区を断面蒲鉾形の突帯で四つに区切り、各区画の中央に円圏座の小乳を配し、間を珠文で埋める。いわゆる放射状区画珠文鏡である（吉田 1999）。突帯は中央に短線の区切りがある。内区外周に櫛歯文を巡らし、段を隔てて続く外区は素文。赤色顔料が付着する。鋳上がりは良好であるが、櫛歯文帯の一部などに、やや大きな鋳潰れがみられる。

放射状区画珠文（乳文）鏡に関しては、森北 1 号墳の出土にもとづいた吉田博行による集成と分類研究がある（吉田 1999）。区画線と珠文・乳文の表現の組合せから 7 類に区分しており、区画して珠文や乳文を入れるという特徴は共通しながら多様であることも示された。入の沢鏡のように四区画のものと、八区画のものに大別できる。そして四区画式は、空間の関係もあり、珠文ではなく乳文を少数入れるものが多く、また外区に鋸歯文を用いるものがめだつ。いずれにしても前期を中心とした時期に位置づけられる。

吉田の集成以後出土した例などに、千葉県大竹 13 号墳（田形編　1991）、同下田遺跡（倉田 1998）、神奈川県高田南原遺跡第Ⅱ地点（天野 2006）、富山県板屋谷内 C6 号墳（越前ほか編 2008）、石川県神谷内 18 号墳例（小西編 2004）などがある。入の沢遺跡例も加えて分布の特徴が明確となった（図 2）。東北や北陸、山陰、九州中部など、銅鏡の出土数が少ない地域での例が多く、とくに北陸など銅鏡出土数自体が僅少な地での複数出土が目を引く。放射状区画珠文（乳文）鏡は、銅鏡分布の周縁地域で主に流通した仿製鏡であったことが示される。

図 2　放射状区画珠文鏡の分布

年代と種類　これらの 4 面の仿製鏡の製作年代はおおむね古墳時代前期後半を示し、遺跡の年代と矛盾しない。小型鏡と鏡片である点は、集落出土鏡の種類として一般的である。ここでは詳論しないが、文様構成や形状の特徴、丁寧な研磨、類例との関係から、いずれも畿内で製作されたものと考える。

3．銅鏡分布と入の沢遺跡出土鏡

東北の銅鏡出土　入の沢遺跡出土鏡は、古墳時代前期としては、銅鏡分布の北限の出土例となる。古墳の副葬鏡を含めても最も北の出土となる。

入の沢遺跡の南の大崎平野には前期の古墳が集中する。埋葬施設が未調査のものが多いものの、発掘がなされた大塚森古墳では銅鏡の副葬はみられない（辻 2010）。さらに南方の仙台平野には、墳長 110 mの大型前方後円墳である遠見塚古墳があり、2 基の粘土槨が発掘されているが、銅鏡の副葬は確認されていない。宮城県全域を見渡しても、確実な前期の銅鏡出土例は他に見当たらない。

以上のような分布状況をみると、入の沢遺跡の 4 面の銅鏡出土は、単に北限の出土例というにとどまらず、周囲の銅鏡分布状況から突出した例ということができる。鏡だけでなく、SI13 出土品のように古墳の副葬品に比されるような多数の鉄器や玉類の出土とも重なる。この集落に多数の器物が集積していたことを物語る。

さらに列状系珠文鏡と放射状・区画珠文鏡のように、銅鏡分布の周縁地域に出土例が多い鏡をふくむことに注意したい。周囲からは突出してはいるものの、古墳時代の銅鏡流通の枠組みの中で入の沢遺跡にもたらされたものと考える。こうした小型鏡は千葉、茨城など関東地方の集落遺跡から多く出土している。次に述べる建物内での使用という風習と共に、関東地方から入の沢遺跡に製品がもたらされた可能性が考えられる。

集落の銅鏡出土　小型銅鏡や鏡片が集落から出土した例は全国に分布する（篠宮・森下編 2010）。こうした状況は弥生時代後期の北部九州で始まり、やがて西日本各地でみられるようになる。さらに

弥生時代末～古墳時代前期までには東日本を含む範囲に広がる。

集落の銅鏡出土例は、南は鹿児島まで広がっており、入の沢遺跡は北限の例となる。入の沢遺跡の場合、前期古墳が築かれた大崎平野よりさらに北方の地にある集落から銅鏡が出土したことに意義がある。

４．建物と銅鏡

入の沢遺跡の銅鏡は、いずれも竪穴建物内から出土した。集落遺跡出土の小型銅鏡・鏡片は、竪穴建物からの出土例が多く確認される（篠宮・森下編 2010）。その理由について、これまで明確には説明されていない。入の沢遺跡の場合、火災を受けた状態の竪穴建物からの出土であり、住居や集落における小型銅鏡の保管・使用状況を考える上で重要な資料となる。詳しい状況を確認しておこう。

ＳＩ 13 竪穴建物　長方形の竪穴建物で南北 6.2 m、東西 7.0 m。主柱穴は 4 つある。建物内にさまざまな施設を設けることが特徴である。東辺と南辺に沿って床面より 10cm ほど高い逆Ｌ字形の高まり、ベッド状施設がある。また溝や集水坑など排水に関わる施設がめだつ。

このベッド状施設の上面から多量の器物が出土した。これらの上に焼土や炭化物をふくむ層が積重なっており、屋根材が被さった状態と想定できる。したがって、こうした出土状況は火災を受けた際の器物の配置をほぼ反映しているものとみられる。本例の場合は建物内での器物の保管状況を示すものとみることができる。

出土品は銅鏡２面に加え、玉類、石製垂飾品、各種鉄製品、骨、朱、土器など豊富である。鉄器の一部は大型の土器に納められていたものらしい。これらの器物の多くはベッド状施設の上に集めて置かれていたものと復元できる。銅鏡２面はそれぞれ離れた場所から出土しているが、鏡背面を上に向け、水平に近い状態で出土した。また苧麻製の布で包まれていたらしい。

朱の出土も注目される点であり、古墳の副葬品に用いられるような器物を建物の一角に並べ置いたものとみる。

ＳＩ 19 竪穴建物　隅丸方形で南北 5.4 m、東西 5.9 mの竪穴建物で火災を受けている。やや西寄りに炉があり、その背後の壁際、中央よりやや北に近い位置から、内行花文鏡片が出土した。この鏡片は壁際で鏡面を上に向け、破面を下にして内側にやや傾斜した状態で出土した。周辺からは小型の器台、壺、鉢が出土している。銅鏡、土器のほか、鉄製品もみつかっている。

ＳＩ 27 竪穴建物　竪穴内は未調査であるが、SI19 竪穴建物と同様に壁際の場所から、放射状区画珠文鏡が出土した。鏡面を上に向け、ほぼ水平に近い状態であった。床面よりも高い位置になりそうである。

建物内での出土状況　こうした建物内から銅鏡が出土するのは、具体的にどのような状況によるものか明確ではなかった。竪穴建物から出土した場合、１）建物内に設置ないし使用されていたものが放棄ないし意図的に遺棄されたのか、２）建物廃絶の折の儀式として埋置されたのか、区別がむずかしい。

上でみたように、入の沢遺跡の出土状況は火災によって焼け落ちた屋根材などの下から遺物が発見

されているのであり、２）の後から埋置されたのではないことが確実である。

またＳＩ 19 建物のように竪穴建物の壁際から銅鏡が出土した例は多く、宮崎県西ノ別府遺跡 SA1（重圏文鏡）、香川県下川津遺跡ＳＨⅡ 09（小型仿製鏡）、広島県真亀Ｃ地点遺跡（小型仿製鏡）、岡山県津寺遺跡竪穴住居 310（重圏文鏡）、長野県篠ノ井遺跡ＳＢ 7250（重圏文鏡）、千葉県二又堀遺跡ＳＩ 105（重圏文鏡）、同県東谷遺跡 64 号住居（鏡片）、群馬県中溝・深町遺跡 22 号住居跡（仿製内行花文鏡）などがある（篠宮・森下編 2010 参照）。こうした出土状況は、小型銅鏡や鏡片が建物の屋根内面や壁に懸架されていたことを示すと考える。

一方ＳＩ 13 竪穴建物のように、２面の銅鏡が玉類や鉄器、土器など他の器物多数と共に並べ置かれていたものは例をみない。入の沢遺跡の大きな特色である。

５．まとめ

以上のように入の沢遺跡の出土鏡は、1）銅鏡分布・前期古墳分布の北限の地での４面もの出土、2）周辺地域の古墳出土鏡の中でも突出した状況、3）建物内での銅鏡の使用状況を示すことなど多面的な評価の対象となる資料である。

遺跡の一部の調査だけで、これほどの数量の銅鏡ほかの器物が出土したのであり、さらに大量に保有されていた可能性は考えておく必要がある。東北地方の古墳時代のみならず、銅鏡を重視した「古墳文化」の広がりや、その背景を考える上でも、きわめて重要な意義を有する。

引用・参考文献

天野賢一・永井淳（編） 2006 『高田南原遺跡第Ⅱ地点』かながわ考古学財団調査報告 199、財団法人かながわ考古学財団

石野博信 2011 「放射状区画珠文鏡考」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第４号、兵庫県立考古博物館、1 - 5 頁

岩本 崇 2014 「銅鏡副葬と山陰の後・終末期古墳－文堂古墳出土鏡の年代的・地域的位置の検討－」『兵庫県香美町村岡 文堂古墳』大手前大学史学研究所研究報告第 13 号、大手前大学史学研究所・香美町教育委員会、135-161 頁

金三津道子・新宅茜（編） 2008 『板屋谷内Ｂ・Ｃ古墳群・堂前遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書第 38 集、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

宮内庁書陵部陵墓課 2005 『古鏡集成』、学生社

倉田義広 1998 『千葉市下田遺跡』、財団法人千葉市文化財調査協会

小西昌志（編） 2004 『神谷内古墳群Ｃ支群』金沢市文化財紀要 208、金沢市

篠宮正・森下章司（編） 2010 『弥生・古墳時代銅鏡出土状況資料集』、大手前大学史学研究所

下垣仁志 2016 『列島出土鏡集成』平成 25 年～ 27 年度科学研究費補助金（若手研究Ｂ）研究成果報告書（第二分冊）、立命館大学文学部

田形孝一（編） 1991 『笊田遺跡・三ツ田台遺跡・大竹古墳群（1）－大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』

財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 61 集、君津郡市文化財センター
高橋　敏　2003 「最北の破鏡」『山形県埋蔵文化財センター　研究紀要』創刊号、山形県埋蔵文化財センター、45-54 頁
高橋誠明　2014 「古墳築造周縁域の地域社会の動向」『古墳と続縄文文化』、高志書院、175-194 頁
田代克己（編） 1968 『羽曳野市壺井御旅山前方後円墳発掘調査概報』大阪府文化財調査概要 1967 年度、大阪府
辻　秀人　2008 「倭国周縁域と大和王権－東北地方を中心として－」『百済と倭国』、高志書院、93-114 頁
辻　秀人　2010 「大塚森古墳の研究」『歴史と文化』第 43 号、東北学院大学論集
土居健司・吉田博行（編） 1999 『森北古墳群』森北古墳群測量・発掘調査報告書、創価大学・会津坂下町教育委員会
東北学院大学アジア流域文化研究所　2015 『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』東北学院大学アジア流域文化研究所公開シンポジウム資料
平岡和夫・井上荘之助　1985 『戸張一番割遺跡－千葉県柏市戸張一番割遺跡調査報告書』、山武考古学研究所
藤沢　敦　2014 「古墳文化と続縄文文化の相互関係」『古墳と続縄文文化』、高志書院、9-28 頁
三品典生　2006 『西ノ別府遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 124 集、宮崎県埋蔵文化財センター
吉田博行　1999 「放射状区画をもつ珠文・乳文鏡について」『森北古墳群』森北古墳群測量・発掘調査報告書、創価大学・会津坂下町教育委員会、139-150 頁
脇山 佳奈　2013 「珠文鏡の研究」『史学研究 』279 号、広島史学研究会、1-28 頁
脇山佳奈　2015 「重圏文鏡の画期と意義」『広島大学考古学研究室紀要』第 7 号、広島大学大学院文学研究科、13 － 37 頁

附章２　入の沢遺跡出土の玉類

奈良女子大学　大賀克彦

１．はじめに

入の沢遺跡ではＳＩ 13 竪穴建物跡から勾玉 12 点、管玉 106 点、棗玉４点、丸玉４点、臼玉 17 点、ガラス小玉 123 点、琴柱形石製品２点、ＳＩ 19 竪穴建物跡から管玉１点と多量の玉類が出土している。特に、ＳＩ 13 竪穴建物跡から出土した玉類は、竪穴建物跡からの出土例としては特に多量で、興味深い構成を示す。基本的な記載は本文に譲り、本稿では生産地や製作時期に関する検討を行う。さらに、それらがセットを構成することが持つ時期比定論上の含意と、玉類の流通における地域性との関係にも言及したいと思う。なお、古墳時代の時期区分および時期表現は大賀（2002 a・2013 a）に基づく。

２．入の沢遺跡出土玉類の個別的検討

（１）勾玉

琥珀製勾玉は２点あるが、１点は破片で詳細不明である。もう１点（第 61 図３）は整美な定形勾玉で、丁字頭勾玉となる点が特徴である。弥生時代においては、勾玉を含めて琥珀製の玉類は極めて稀で、実質的には古墳時代に入ってから出現するものと考えてよい。古墳時代前期に遡る製作遺跡は確認されていないが、主に比較的大型の勾玉が出土する西日本と、小型の勾玉と算盤玉、棗玉、丸玉などの比率が高い関東を中心とした東日本という地域性が認められる（大賀 2013 b）。少なくとも、それぞれに対応する製作地の存在が想定される。入の沢遺跡例は丁字頭勾玉である点を含めて、西日本的な種類である。西日本においては、琥珀製勾玉は福岡県石塚山古墳（前Ⅲ期）や兵庫県ヘボソ塚古墳（前Ⅳ期古相）の事例から前期前半に遡って出現していることが判る。中期になるといったん琥珀製勾玉の流通は衰退するので、入の沢遺跡例の製作時期は前期に限定できる。ちなみに、東日本における琥珀製丁字頭勾玉の類例としては群馬県軍配山古墳が挙げられる。

水晶製勾玉（第 61 図６・８）は２点ある。水晶製勾玉も古墳時代前期に新出する玉類の一つである。前期に遡る出土例は山陰から畿内北部を中心とした西日本と関東周辺から東海東部にかけての東日本にまとまって確認される（石橋・大賀・西川 2016）。前者に対応する製作遺跡は未発見であるが、奈良県新沢 500 号墳例を典型として、山陰系勾玉としての形状的特徴を具備することから、島根県東部地域で製作された山陰系の構成要素であると考えられる（河村 1992、大賀 2009 a・2013 b）。後者に対応する製作遺跡としては埼玉県反町遺跡および前原遺跡が知られ、広く関東系の玉類として把握することができる。ただし、東日本における出土例の形状的な変異を考慮すると、未発見の製作遺跡が潜在する可能性が高い。入の沢遺跡の２点は関東系に帰属するが、細部の形状や穿孔方法が異なることから、製作地が全く同じではないかもしれない。また、関東系の水晶製勾玉は草刈Ⅱ期後半

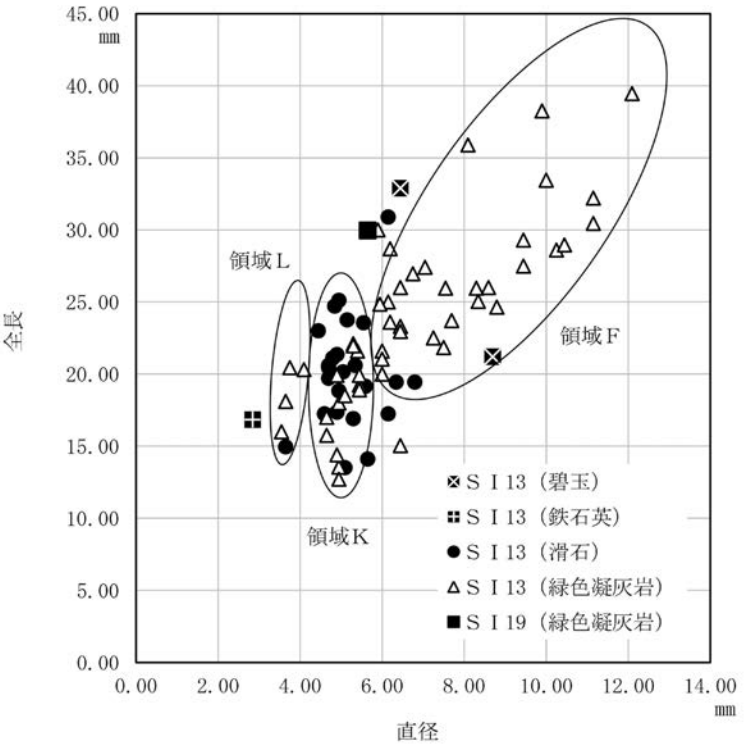
に出現する（石橋・大賀・西川 2016）。古墳の副葬品による時期区分との対応関係には不確実性が残るが、前Ⅳ期新相ないし前Ⅴ期に対比される。また、消費地資料からその製作は中期には継続しないことから、入の沢遺跡例の製作時期は前期に限定できる。

翡翠製勾玉（第 61 図 11）は小型で抉りが小さく、扁平な半玦形勾玉である。このような特徴を具備した翡翠製勾玉は弥生時代の北陸西部地域で製作されたものである（大賀 2012 ａ）。特に、整った半玦形を呈することから、弥生時代中期中葉～後葉に製作されたものである可能性が高い。入の沢遺跡においては明確な伝世品として出土したものである。

他の７点の勾玉はいわゆる滑石製である（註１）。石材や法量が雑多で、製作時からのセットとは考えられない。現状では、滑石製勾玉の多様性から、個々の生産地や製作時期を明らかにすることは難しいが、入の沢遺跡例は製作時期に一定の時間差を含んでいる可能性がある。例えば、第 61 図７は大きさの割に厚みが大きく、丸味の強い断面形を持ち、孔の周辺がやや窪む。石材的な特徴も加味すると、弥生時代後期の関東周辺で散見される滑石製勾玉（大賀 2009 ｂ）に類似する。一方、第 61 図 12 や第 61 図 13 は全長が 10㎜程度と小型で、側面が平坦で扁平な形状を呈する。このような特徴を持つ滑石製勾玉は前Ⅶ期～中Ⅱ期にかけて盛行する滑石製玉類の多量副葬において特徴的に出現する。

（2）管玉

管玉は緑色凝灰岩製 78 点、滑石製 26 点、碧玉製２点、鉄石英製１点が出土しており、そのうち緑色凝灰岩製１点のみはＳＩ 19 竪穴建物跡からの出土である。点数が多い緑色凝灰岩製および滑石製は石材的にも法量的にもかなり雑多で、製作時のセット関係を見出すことは困難である。そこで、大枠としての生産地の区分を目的として検討を行う。特に、緑色凝灰岩製に関しては風化によって欠損している個体が多いことから、完存している個体の法量を材質ごとに第１図に示す（註２）。



第１図　入の沢遺跡出土管玉の法量分布

最初に注目されるのは、滑石製の大部分が直径 4.45 ～ 5.65㎜、全長 13.50 ～ 25.10㎜の範囲にまとまることである。欠損品のためプロットから除外した２点も、本来はこの範囲に含まれると推定される。このような法量を示す滑石製の管玉は、関

東において製作遺跡が確認されることや、関東を中心とした東日本と畿内の前期古墳からまとまって出土することから、代表的な関東系の玉類であると考えている（大賀 2008 a・2013 b）。また、関東系の滑石製管玉の法量が集中する範囲は領域Kと呼称している。領域Kを指向する関東系の滑石製管玉は、同じく関東系の水晶製勾玉と相前後して草刈Ⅱ期後半、すなわち前Ⅳ期新相ないし前Ⅴ期に出現する（石橋・大賀・西川 2016）。しかし、中Ⅰ期に入るとまとまった出土を見なくなることから、その製作は前Ⅶ期までに限定される。

領域Kから外れる滑石製管玉は、直径が 6.00㎜を超える 4 点と 4.00㎜以下の 1 点である。直径が 6.00㎜を超える太形品は、領域Kを指向する通有の関東系の滑石製管玉と共通した出現状況を示すことから（大賀 2008 a）、関東系のやや変則的な事例であると評価することができる。一方、直径が 4.00㎜以下の細形品は東日本では出土が稀で、畿内を中心とした西日本を中心に出土する。奈良県曽我遺跡において多量の未製品が出土しており、畿内系の構成要素であると考えられる。

領域Kに集中する滑石製管玉と比較すると、緑色凝灰岩製管玉の法量分布は大きく異なる。まず、欠損品を含めても、領域Kにプロットされるのは約 1 ／ 4 に相当する 20 点前後だけである。残余のうち、40 点以上は直径 6.00㎜以上、全長 20.00㎜以上の大型品で、緩い比例関係を示すようにプロットされる。これらの大型品がプロットされる範囲を領域Fとする（大賀 2013 b）。ＳＩ 19 竪穴建物跡から出土した 1 点は領域Fからも領域Kからもやや外れるが、ＳＩ 13 竪穴建物跡出土品に類似した法量の緑色凝灰岩製品および滑石製品各 1 点が存在し、併せて領域Fに準じるものと判断しておく。一方、15 点前後は直径が 3.00 ～ 4.00㎜で、全長が 15.00㎜を超えるスマートな形状を呈する（註 3）。これらの管玉がまとまる範囲を領域Lとする（大賀 2013 b）。

領域Kを指向する緑色凝灰岩製管玉は関東周辺の前期古墳から普遍的に出土し、玉作遺跡の未製品とも対応することから、関東系の構成要素である（大賀 2012 b）。また、領域Lを指向する緑色凝灰岩製管玉は、前述した同規格の滑石製管玉と同様に、代表的な畿内系の構成要素であり、前Ⅶ期に出現し、中Ⅱ期まで盛行する（大賀 2013 b）。それに対して、領域Fを指向する緑色凝灰岩製管玉の生産地や製作時期はやや複雑な問題である。まず、量を問わなければ、弥生時代後期に遡る事例が存在するが、量的に増加するのは前Ⅳ期新相～前Ⅴ期にかけての時期である。生産の中心となるのは北陸西部地域で、前期後半の当該地域では領域Fを指向する緑色凝灰岩製管玉が斉一的に製作される。しかし、前期後半においては、領域Fを指向する緑色凝灰岩製管玉は北陸東部、中部高地、南関東、東北南部の各地で製作が確認されることから、特定の生産地に限定することができない。入の沢遺跡例は石材が雑多で、法量的にもまとまりを欠く。このような特徴は関東周辺の事例と類似することから、関東産が中心であると想定される。

目視による判断であるが、碧玉製管玉のうち 1 点（第 64 図 13）は猿八産の碧玉製であると考えられる。領域Fに近い大型品であるが、直径が類似する他の緑色凝灰岩製品に比べるとややスマートである。この個体に関しては、孔内に土が残存しているため、穿孔具の種類を判断することができない。石針で穿孔されたものであれば、弥生時代中期中葉に遡り、北陸東部系として固有の法量的指向性が顕在化する以前のものと判断される（大賀 2011）。しかし、鉄錐穿孔であるなら、標準的な北

陸東部系には出現しない規格である。猿八産碧玉は、古墳時代に入ると基本的に利用されなくなるが、宮城県西屋敷１号墳例のように北陸東部系とは異なる規格の管玉が僅かに確認できることから、それらの事例との関係が想起される。碧玉製管玉のもう１点（第 64 図 14）は女代南Ｂ群碧玉製であると考えられる。直径 8.70㎜を計る太形品で、現状では領域Ｆの境界付近にプロットされる。ただし、この個体は一端が二次的に研磨されている可能性が高く、本来はもう少し全長が長かったと推定され、領域Ｆの標準的な法量を示す。石針で穿孔されており、弥生時代中期中葉に製作されたものの伝世品である。一方、鉄石英製の１点（第 64 図 12）は直径 2.85㎜と、緑色凝灰岩製管玉における領域Ｌよりもいっそうスマートな形状を呈する。このような法量的指向性は、弥生時代中期後葉～終末期の佐渡島で製作された北陸東部系の猿八産碧玉製や鉄石英製の管玉に固有の特徴である（大賀 2011）。入の沢遺跡例は石針で穿孔されていることから、弥生時代中期後葉に製作されたものの伝世品である。

（3）棗玉・丸玉・臼玉

棗玉のうち２点（第 61 図 14・15）は煙水晶製である。胴部中央に鈍い稜を持つ。鉄錐によって両面から穿孔される。古墳時代以前の日本列島では、水晶素材の中での煙水晶の利用も、水晶を素材とした棗玉の製作も極めて稀なものである。そのため、２点は法量の相違が大きいが、形状や穿孔方法の共通性を加味すると、製作時からのセットであると考えられる。類例がほとんど見出せないため、生産地や製作時期に関する限定は困難である。

丸玉は、全形を窺うことができる２点と、小片を併せて４個体分が出土している。すべて琥珀製である。孔内には土が残存している個体もあるが、鉄錐によって穿孔されたと考えられる。前述したように、古墳時代前期の琥珀製玉類の様相には、西日本と東日本という大きく二つの地域性が認められる。丸玉や算盤玉といった小形の琥珀玉は、千葉県大厩浅間様古墳、長野県篠ノ井遺跡群高速道地点ＳＭ 7016、岐阜県前波長塚古墳など東日本の古墳からまとまった点数で出土する。特に、南関東周辺での出土が目立つことは千葉県銚子市における良質な原材の産出と無関係とは考え難く、周辺での製作が推定される。琥珀製玉類は中期前半にいったん衰退し、中期後半以降は棗玉が大部分となることから（斎藤 2008、大賀 2013 ｂ）、入の沢遺跡例は前期に特定することができる。

棗玉２点と臼玉 17 点はすべていわゆる滑石製である。いずれも多量副葬が目立つ種類であるが、入の沢遺跡での出土数は多くない。また、出土点数の割に石材や細部形状の相違が著しく、雑多な構成となっている。結論から述べると、これらの滑石製玉類は前Ⅶ期以降に盛行し、畿内を中心とした西日本からの流入が想定されるものと考えている。まず、滑石製棗玉では、胴部中央に鈍い稜を持つ１点（第 61 図 17）が一般的なものである。このような特徴を具備する滑石製棗玉は、前Ⅶ期～中Ⅱ期の伊勢湾岸～畿内～瀬戸内東半部にまとまった出土が集中する（大賀 2008 ａ）。また、製作地としては新潟県南押上遺跡など、倭王権との関係が深いことが想定される糸魚川市周辺の玉作遺跡において多量に製作されていることが明らかとなってきた。関東周辺では群馬県下佐野遺跡において微量の滑石製棗玉未製品の出土が報告されており、消費地資料としても神奈川県久地伊屋之免古墳や東野台２号墳において前期に遡る事例が存在する。しかし、東日本では滑石製棗玉の出土数は非常に少

なく、当該地域からの流入は想定し難い。一方、滑石製臼玉の場合はやや変則的な消長を示す。前Ⅶ期以降に流通量が激増する点は滑石製棗玉と同様であるが、同時に前Ⅴ期～前Ⅵ期に遡る可能性が高い事例が散見される点が注意される。特に、茨城県常陸鏡塚古墳、同・丸山１号墳、群馬県片山１号墳、長野県森将軍塚古墳など関東周辺に著名な事例が目立つ（大賀 2008 ａ）。この点では、関東周辺から流入した可能性も否定はできない。ただし、関東周辺では前Ⅴ期～前Ⅶ期に比定される事例は限定的で、中Ⅰ期以降に流通量が激増するのに対して、畿内周辺では前Ⅶ期以降に激増するという画期のズレが認められる。このことは入の沢遺跡への流入経路を判断する上で留意すべきである。

（4）ガラス小玉

ガラス小玉は、ガラス原料の組み合わせを反映した基礎ガラスの材質に生産集団の特徴が最も表れる。また、基礎ガラスの材質は製作技法や着色剤の選択とも明確な対応関係を持っている（大賀 2002 ｂ、Oga and Tamura 2013）。目視による判断であることから、全く誤認がないとは言えないが、大別５種類、細別６種類のガラス小玉に区分された。

第一のグループは、中アルミナタイプのカリガラス製（Group PI）（註４）の小玉である。ガラス小玉 125・163・164・180（図版 55 － 41 ～ 44）の４点が該当する。すべて引き伸ばし法によって製作される。ガラス小玉 125・163・164 は色調に濃淡が認められるが、いずれもコバルトで着色された紺色透明を呈する。一方、ガラス小玉 180 はやや緑味を帯びた濃青色透明を呈し、他の３点とは色調が異なる。おそらく銅とマンガンによる複合的な発色であると考えられる。Group PI に帰属する小玉のほとんどはコバルト着色の紺色透明を呈するが、銅とマンガンによって着色されたものなど、着色技法が異なるものが少量含まれる点と整合している（大賀・田村 2016）。すべて端面が研磨されて、平坦になっているという特徴を示す。また、以下に述べる他のグループよりも全体的に大型である。

第二のグループは、高アルミナタイプのカリガラス製（Group PII）の小玉である。入の沢遺跡出土資料では最も多く、82 点が該当する。すべて引き伸ばし法で製作され、銅によって着色された淡青色透明を呈する。端面が研磨されて、平坦になっているという特徴を示す。

第三のグループは、高アルミナタイプのソーダガラス製（Group SIIB）の小玉である。29 点が該当する。すべて引き伸ばし法で製作され、銅によって着色された淡青色半透明を呈する。一見すると第二のグループと類似するが、仔細に見ると、やや透明感が乏しく、僅かに緑色味を帯びた淡青色を呈する場合が多いことから、区別可能である。また、端面は全く研磨されないか、僅かに研磨されるのみで、第二のグループのように平坦面とはならない。

第四のグループは、ナトロン主体タイプのソーダガラス製（Group SIV）の小玉である。ガラス小玉 170 の１点が該当する（図版 56 － 60）。引き伸ばし法で製作され、コバルトで着色された紺色透明を呈する。製作技法や着色技法が共通する第一のグループとの目視による判別は容易ではないが、微妙な色調の相違や孔内の様相などから判断した。端面が研磨されて、完全に平坦となっている。

第五のグループは、プロト高アルミナタイプのソーダガラス製（Group SVB）の小玉である。他

のグループよりも小型で、器壁も薄いため、欠損品が多いが、ガラス小玉 129・184・191・197・207・209・211 の７点を計数した（図版 56 － 61 ～ 67）。他のグループと異なって端面が破断面となっており、連珠法で製作されたことが判る。銅によって着色された淡青色を呈するが、やや透明感は乏しい。色調が類似する第二および第三のグループよりも小型である。

ガラス小玉は種類が多く、日本列島へは少しずつ時期を異にして流入することから、時期的な指標としての有効性が高い。ただし、流通総量が多いことから、一定量の伝世品の出現が避けられない。また、日本列島への流入が断絶期を挟んで２回に分離する種類も複数存在する。そのため、年代論的な含意を理解するためには、比率や使用痕の有無なども総合的に考慮する必要がある。

入の沢遺跡例は、古墳時代前Ⅴ期に出現する Group SIIB と（大賀 2008 ｂ）、古墳時代中期前半には流通量が激減する Group PII が中心的な構成要素であることから、前Ⅴ期～前Ⅶ期の範囲に位置付けることができる。Group SIIB に関しては、端面の研磨が乏しい点も整合的である。Group SVB は弥生時代終末期～古墳時代前期前半に特徴的に流入する種類であるが（大賀 2008 ｂ）、最もまとまった点数で出土したのは前Ⅴ期の兵庫県白水瓢塚古墳や福島県会津大塚山古墳南棺であり、時期的な位置付けに矛盾はない。Group PI と Group SIV は弥生時代後期後半～終末期と古墳時代中期前半に分かれて流入する。分類上はいずれの時期に帰属するか判断できないが、出土数が寡少であることは、先の時期に流入したものの伝世品であるという判断が蓋然的であることを示している。

また、古墳時代前期における Group PII から Group SIIB への移行には地域性が認められ、全体的に前期後半の東日本において移行が不徹底である（大賀 2003）。個々の事例における量比の変異は大きいが、入の沢遺跡への流入経路を判断する上で留意される。同様に、出土量が比較的少ない Group SVB が数点ずつ出土する事例が、南関東の前期古墳に散見される点も注目される。

（５）琴柱形石製品

琴柱形石製品は玉類とは言い難いが、玉類と同様に懸垂して使用されたと考えられる。また、玉類と同じ工房で製作され、流通経路を検討する上で指標的な要素となることから、ここで触れておく。

琴柱形石製品は２点出土している（第 61 図１・２）。２点とも下部には外方向に向けた勾玉の下半部が表現されており、亀井（1972）が本村型と分類するもので、伊丹分類（伊丹 2002・2003）の甲種に帰属する。特に、第 61 図 1 は山形県下槇遺跡出土例と文様表現の細部までよく類似している。群馬県下佐野遺跡において多量の未製品が出土したことから、生産地が群馬県南西部の玉作遺跡であることが明らかとなった（註５）。また、本村型の琴柱形石製品に関しては、櫻井（2002）や伊丹（2002・2003）が集成や基礎的な検討を行っており、時期的には古墳時代前期に相当する時期の住居跡から出土する場合が多く、分布は関東を中心とした東日本に偏っていることを指摘している。管見に触れた出土例を加えても、以上の理解に変更はない。製作地の状況を加味すると時期的に中期には継続しないと限定できる点と、千葉県草刈遺跡における複数個体の出土など、南関東における出土数が多いことが流通経路を考える上で留意される。

３．セットとしてみた入の沢遺跡出土の玉類

入の沢遺跡から出土した玉類は、点数が多いだけではなく、種類も多様である。個別的に見た場合の位置付けは前節において詳述した。しかし、それらの玉類は管玉１点を除いて、ＳＩ 13 竪穴建物跡からまとまって出土しており、全体がセットを構成しているという点を評価する必要がある。

製作時期という点では、少数の玉類は弥生時代に遡るものと考えられた。例えば、翡翠製勾玉、碧玉製管玉、鉄石英製管玉などである。ガラス小玉の Group PI と Group SIV も該当する。しかし、大部分は古墳時代前期に日本列島へ流入した、もしくは列島内で製作されたものである。

これらは大きく３群に大別される。第一は前期でも前半に流入する種類で、ガラス小玉の Group PII や Group SVB が該当する。第二は前Ⅳ期新相～前Ⅴ期にかけて出現、もしくは普及する種類で、水晶製勾玉、領域Ｋや領域Ｆを指向する緑色凝灰岩製もしくは滑石製の管玉、ガラス小玉の Group SIIB、本村型の琴柱形石製品などである。第三は、前Ⅶ期に出現もしくは普及する種類で、領域Ｌを指向する緑色凝灰岩製もしくは滑石製の管玉、小型の滑石製勾玉、滑石製棗玉、滑石製臼玉である。これらがＳＩ 13 竪穴建物跡において共伴していることから、最終的に廃棄、もしくは遺棄された時期の上限は前Ⅶ期と考えられる。一方、以上の三つのグループの中で、中Ⅰ期以降にも生産もしくは流入が継続するのは第三のグループのみで（註６）、他の玉類は前Ⅶ期までに基本的に流通が途絶する種類である。また、畿内系の緑色凝灰岩製勾玉のように、中Ⅰ期以降に新出する種類も全く含まれていない。以上の点から、ＳＩ 13 竪穴建物跡から出土した玉類のセットが中Ⅰ期以降に降る可能性は低い。結局、出土した玉類の組成からみて、ＳＩ 13 竪穴建物跡は前Ⅶ期に特定することができる。ＳＩ 19 竪穴建物跡に関しては、出土した玉類が管玉１点のみであるが、特に時期差を認める必要性は見出せない。

次に、生産地や流通経路の問題を取り上げる。入の沢遺跡出土の玉類の組成的特徴は２点にまとめることができる。

一つは、関東地域との関係の深さである。水晶製勾玉、領域Ｋを指向する緑色凝灰岩製もしくは滑石製の管玉、本村型の琴柱形石製品など、明らかに関東周辺で製作されたと考えられる玉類が多く含まれている。領域Ｆを指向する緑色凝灰岩製管玉に関しては、他地域で製作された個体が混ざっている可能性もあるが、石材や法量の雑多さは関東産が多くを占めていることを示唆している。また、ガラスはもともと日本列島の外部から製品として流入したものであるが、前Ⅶ期の段階で Group SIIB の流通量が少なく、Group PII からの転換が不徹底であるのは東日本の特徴である。すなわち、ガラス小玉に関しても、関東を経由して流入したと推定することに問題はない。

付言しておくと、関東産と考えられる玉類も個々の生産地は分散的である。琴柱形石製品は群馬県南西部の玉作遺跡で特徴的に製作されているのに対し、滑石製管玉は群馬県南西部と利根川下流域、緑色凝灰岩製管玉は利根川下流域と相武地域、水晶製勾玉は相武地域でも北部に当たる埼玉県下の玉作遺跡で製作が確認されている。これらの生産地が異なる玉類は、関東周辺では完全に混在して流通していることから、入の沢遺跡における出土品が個々の生産地から個別的に流入したものか、セットとなったのちに流入したものか、判断することは難しい。

もう一つは、畿内から流入したと考えられる玉類が少なからず組成している点である。領域Lを指向する緑色凝灰岩製もしくは滑石製の管玉が代表的である。前Ⅶ期に出現もしくは普及する小型の滑石製勾玉、滑石製棗玉、滑石製臼玉についても同様である可能性がある。これらの玉類に関しては、中Ⅰ期～中Ⅱ期にかけては日本列島全域に比較的斉一的に出土するのに対して（註７）、前Ⅶ期の段階では畿内周辺に限定される傾向が認められる。すなわち、入の沢遺跡において当該の種類が一定の比率を占めている点は、畿内地域との直接的な交渉の存在を窺わせるもので、見過ごすべきではない。

最後に、簡単ではあるが、周辺地域の前半期古墳から出土した玉類の組成と比較しておく。東北南部地域において玉類が出土している主要な事例を第１表にまとめた（註８）。個々の事例について詳細に時期比定することは難しいが、確実に前Ⅳ期以前に位置付けられる事例は含まれず、宇賀崎１号墳および愛谷古墳が中Ⅰ期～中Ⅱ期に降る可能性があるほかは、いずれも前Ⅴ期～前Ⅶ期に比定されると考えている点を指摘しておく。

まず、古墳ごとに組成の違いは大きい。ただし、出現する種類はほとんど入の沢遺跡例と共通している。また、事例数が充分ではないため、完全に明瞭とは言い難いが、全体として関東産の管玉の出土数もしくは出土頻度が高いことや、ガラス小玉における Group SIIB の流通量が多くはなく、Group PII が比較的多く残存することが指摘できる。すなわち、地域的な傾向としても、入の沢遺跡例との類似性が認められる。ただし、時期的な影響も無視できないが、入の沢遺跡例の方が畿内地域との関係を窺わせる玉類が占める比率が少し高いように思われる。

第１表　東北南部の前半期古墳出土玉類の組成

遺跡	所在地	勾玉	管玉						ガラス小玉						その他
					緑色凝灰岩			滑石		引き伸ばし法		連珠	鋳型法		
										カリガラス		ソーダガラス			
		翡翠	総数	猿八産碧玉（領域Se）	北陸系／関東系 領域F	関東系 領域K	畿内系 領域L	領域K	総数	中アルミナ PⅠ コバルト	高アルミナ PⅡ 銅	高アルミナ SⅡB 銅	高アルミナブロト SⅤB 銅	コバルト	
遠見塚古墳（東槨）	宮城		1						4		2			1	
沼向５号墳	宮城								4			4			
八木山緑町ＳＫ１	宮城		6		5	1									
八木山緑町ＳＫ10	宮城		6		2			4							
宇賀崎１号墳	宮城														琥珀玉１
大塚森古墳（東棺）	宮城								2		2				
大塚森古墳（西棺）	宮城		1			1			53		53				
西屋敷１号墳	宮城	2	15	2		1	3	7	26		7	19			
横山１号墳（第２）	山形		1					1							
成島１号墳	山形		7		4	2	1								
会津大塚山古墳（南棺）	福島	1	79		52	27			61+	20			41+		琥珀算盤玉２
会津大塚山古墳（北棺）	福島		40		40										
森北１号墳	福島		2		2										
本屋敷１号墳（後方）	福島		1						6						
本屋敷４号墳（第１）	福島								2						
愛谷古墳	福島														滑石臼玉29

4．結語

以上、入の沢遺跡から出土した玉類について検討を行い、生産地や製作時期についての理解を示してきた。また、出土した多量の玉類のほとんどが1軒の竪穴建物からまとまって出土しているという点から、セット全体が形成された時期や流入経路に関する含意についても私見を述べてきた。すなわち、入の沢遺跡の玉類は古墳時代前期末（前Ⅶ期）の様相を示しており、全体的には関東地域との関係もしくは類似性が強く、こうした特徴は周辺の前期古墳から出土している玉類の組成とも共通するものと評価した。ただし、周辺の前期古墳から出土している玉類と比較して、畿内地域との直接的な関係がやや強い可能性が窺える点にも注目すべきである。玉類から見た以上のような評価は、入の沢遺跡を営んだ集団の出自や目的にも関連するものであると考える。

註

註1　第61図4は岩石学的には緑色凝灰岩製かもしれない。ただし、形状や法量的な特徴から、古墳時代中期前半に特徴的に出現する畿内系の緑色凝灰岩製勾玉とは区別される。考古学的には、古墳時代前期の東日本の玉作遺跡において製作される滑石製勾玉と親縁なものであることから、ここに含めておいた。

註2　碧玉製管玉の1点（第64図14）は本来の全長が失われていると考えているが、他とは異なる種類であり、以下の議論で取り上げるために表示に加えた。

註3　この法量的指向性を持つ緑色凝灰岩製管玉は、石材的にも風化の影響が大きい軟質のものが多く、欠損品の出現率が非常に高い。

註4　ガラスの材質の分類と名称はすべてOga and Tamura（2013）に依拠する。ただし、誤解を招かない場合には、この材質名称によって、当該の材質を持つガラス玉類を指示することがある。また、各材質には製作技法や着色技法が異なるガラス玉類が包含されているが、以下で材質名称に言及する場合は、入の沢遺跡出土品に確認できる種類のみを指示している。ちなみに、カリガラスにおける材質の細分や着色技法との対応関係に関しては大賀・田村（2016）において詳述しておいたので、併せて御参照頂きたい。

註5　群馬県南西部地域と共通した玉生産を行う千葉県野田市桜台遺跡からも未製品が出土している。

註6　第二のグループに帰属するガラス小玉のGroup SIIBは中Ⅰ期以降も多量の流通が継続する。しかし、中Ⅰ期～中Ⅱ期のものは端面が顕著に研磨されて、臼玉状を呈する場合が一般的であり、入の沢遺跡例とは区別される。

註7　滑石製棗玉に関しては、中Ⅰ期～中Ⅱ期においても畿内～瀬戸内東部への集中が著しい（大賀2008 a）。この点は、滑石製棗玉の生産地が限定的で、新潟県下の姫川下流域の玉作遺跡に集中する点と関連するかもしれない。

註8　他にも前半期に遡る可能性がある未報告資料が若干存在するが、玉類の構成も確認できていないことから、除外してある。

引用・参考文献

石橋宏・大賀克彦・西川修一 2016「つくば市面野井古墳群の再検討」『東生』第５号

伊丹徹 2002「古墳時代前期の異形垂飾品（所謂本村型琴柱形石製品）について」『下曽我遺跡・永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点』

伊丹徹 2003「所謂本村型琴柱形石製品～Ｂ級威信財～追記」『西相模考古』第 12 号

大賀克彦 2002 a「凡例　古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』（『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅴ）

大賀克彦 2002 b「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』（『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅴ）

大賀克彦 2003「紀元三世紀のシナリオ」『風巻神山古墳群』（『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅶ）

大賀克彦 2008 a「成塚向山１号墳出土の玉類　―滑石製品の出現と生産に関する認識を中心に―」『成塚向山古墳群』（『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書』第 426 集）

大賀克彦 2008 b「白水瓢塚古墳出土の玉類」『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』

大賀克彦 2009 a「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究』

大賀克彦 2009 b「弥生時代後期の玉作」『一山典還暦記念論集考古学と地域文化』

大賀克彦 2011「弥生時代における玉類の生産と流通」『講座日本の考古学』第５巻弥生時代（上）

大賀克彦 2012 a「古墳時代前期における翡翠製丁字頭勾玉の出現とその歴史的意義」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』（『平成 21 ～ 23 年度科学研究費補助金若手研究（Ｂ）研究成果報告書』）

大賀克彦 2012 b「塚越古墳出土玉類の評価」『塚越古墳』（『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書』15）

大賀克彦 2013 a「前期古墳の築造状況とその画期」『第 13 回播磨考古学研究集会の記録　前期古墳からみた播磨』

大賀克彦 2013 b「玉類」『副葬品の型式と編年』（『古墳時代の考古学』第４巻）

大賀克彦・田村朋美 2016「日本列島出土カリガラスの考古科学的研究」『古代学』第８号

亀井正道 1972「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』第８号

河村好光 1992「攻玉技術の革新と出雲玉つくり」『島根考古学会誌』第９集

河村好光 2010『倭の玉器　―玉つくりと倭国の時代―』青木書店

斎藤あや 2008「古墳時代後期における琥珀製棗玉の再検討」『史叢』第 78 号

櫻井久之 2002「難波宮下層出土の石製垂飾について」『大阪歴史博物館研究紀要』第１号

中村房夫 2016「本村型琴柱形石製品について　―学史を中心に―」『静岡県考古学研究』第 47 号

Oga, K., Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in the Yayoi-Kofun Periods (3th Century BCE – 7th Century CE). Journal of Indian Ocean Archaeology, 9.

附章 3　宮城県栗原市入の沢遺跡出土資料に伴う繊維製品の調査

奈良県立橿原考古学研究所　奥山誠義

1．はじめに

入の沢遺跡では、銅鏡 2 面と鉄製品に織物の付着が確認された。東北歴史博物館において実資料を見学し、材料調査のため一部試料（小片）の提供を受け、奈良県立橿原考古学研究所の実験室において詳細調査をおこなった。

2．方法

材料調査に供された小片については、実体顕微鏡およびデジタルマイクロスコープにより観察をおこなった。さらに、一部の試料を採取し走査電子顕微鏡（SEM）と生物顕微鏡による観察を行った。引き続き、赤外分光分析による材料調査を実施した。測定は、試料の状態等に応じて、顕微 FT-IR 法による透過測定（以下､TR）あるいは全反射 FT-IR 法による測定（以下､ATR）をおこなった。TR は、試料を二枚のダイヤモンドセルに夾んで、圧縮・薄層化し、顕微鏡画像を確認しながら測定箇所を指定し、任意の箇所を選択的に測定する局所分析が可能である。一方、ATR は、直径 2mm のゲルマニウム（Ge）結晶上に試料を密着させ、試料表面で全反射する光を測定し，試料表面の吸収スペクトルを得る方法である。ATR では、密着した部分全体の定性分析を行うことが可能である。

3．調査所見

（1）銅鏡C（珠文鏡：SI13出土）に付着した織物

銅鏡 C は、鏡面接触面に平織り組織を確認した（Fig.1 ～ 3）。鏡辺縁部に目の詰まった織り組織を持つ平織りを確認した。中央部にも平織り組織が確認できたが、やや目の粗い透き目の織り組織のように見えた。二種類の織物が存在するように見えたが、いずれの織物も鏡に接触していたと考えられる位置関係を示すため、後者は織りがゆるんだもので、二種類は同一の織物であると考えられる。表面には土壌が付着し、織りの状況は不明瞭で、糸の太さ・織密度の確認は困難であった。繊維は触れると容易に粉末化する状態で、無機質（鉱物）化あるいは炭化している可能性が考えられた。

供試試料について SEM 観察をおこなった結果、単繊維の直径は 40 μ m 程度で、繊維断面形は非三角形で中空の管が押しつぶされたような断面形を呈していた（Fig.6）。この特徴から植物性の繊維が示唆された。さらに断面形状の特徴を観察すると、断面中央にみられる「内腔（ルーメン）」と呼ばれる空隙が極めて狭小で塞がれた形態が確認された。これらは、主に苧麻にみられる特徴であることから、本試料は苧麻製である可能性が示唆された。

引き続き、赤外分光分析による材料調査を併せて実施した。測定は、顕微 FT-IR 法による透過測定であった。測定結果を、Fig.8 に示した。Fig.8 の（a）および（b）は、測定のために試料を圧縮薄層

化して観察された飴色部分と黒色部分の結果である。(c) には、参考資料として、現代産植物性繊維（苧麻）の測定結果である。(a) および (b) に対して (c) の各ピークを基に比較・検討した。Fig.8 の (a) および (b) においては、OH 伸縮振動に帰属される 3400cm^{-1} 付近のピーク、C=C に帰属される 1584 cm^{-1} のピーク、CH 変角振動に帰属される 1371 cm^{-1}、C-O 伸縮振動に帰属される 1036 cm^{-1} が確認された。これらのピークはセルロースやヘミセルロースに由来する。一方、1600 cm^{-1} のピークは、(a) では顕著に現れていた。木材は炭化するとセルロース及びヘミセルロースが熱分解し 1600 cm^{-1} 付近に顕著なピークが生じることが指摘されている（栗山　1976)。植物性繊維の主成分は、木材同様セルロースおよびヘミセルロースから構成されていることから、この 1600cm^{-1} は試料が炭化していることを示唆するものと考えられる。

（2）銅鏡D（櫛歯文鏡：SI13出土）に付着した織物

銅鏡 D の鏡面には、目の細かな緻密な平織り組織が観察された（Fig. 9~10)。糸には撚りが無く非常に緻密であった。鏡の中央を境にして織りの方向が変化しており、埋没時に織物に皺がよった可能性が考えられる。銅鏡 D が接触していた土には、鏡に付着しているものとほぼ同様な織り組織（緻密な織り組織）が観察できた（Fig.11 ～ 12)。また、この緻密な織り組織の下にやや太い糸で構成される平織りも確認できた。銅鏡 D は、緻密な平織りと太い糸で織られた平織りの二種類の織物で包まれていた可能性が示唆された。

改めて、材料調査に供された小片について、表面観察を行った（Fig.11 ～ 13)。表面には目の詰まった織物（織物①）が広がる。糸幅 0.3mm（300 μ m）程の糸を平織して、織密度（1cm あたりの経糸と緯糸の本数）30 × 25 の緻密な織物を構成していた。織物を構成する糸に撚りは見られなかった（Fig.13)。繊維は触れると容易に粉末化する状態で、無機質（鉱物）化あるいは炭化している可能性が予想された。緻密な織物の下に、やや織りが緩慢な目の粗い織物（織物②）の存在が推定された（Fig. 10)。織物②は、織物①と織り糸の方向がやや異なっていた。糸に撚りがかかっていない点は同様であった。

さらに、一部の試料を採取し走査電子顕微鏡（SEM）と生物顕微鏡による観察を行った（Fig.14 ～ 15)。SEM 観察の結果、織物①および②ともに、単繊維直径は 40 μ m 程度で、単繊維断面形は非三角形で中空の管が押しつぶされたような断面形を呈していた。断面中央の内腔（ルーメン）は極めて狭小で塞がれた形態を呈していた。この特徴は、主に苧麻にみられる特徴であることから、本試料は苧麻製である可能性が示唆された。引き続き、赤外分光分析による材料調査を併せて実施した。測定は、顕微 FT-IR 法による透過測定であった。織物①および織物②に対する FT-IR 測定の結果を Fig.16 および 17 に示した。Fig.16 の (a) および (b) は、織物①を測定のために圧縮薄層化して観察された黒色部分と飴色部分の結果である。(c) は、参考資料として、現代産植物性繊維（苧麻）の測定結果である。(a) および (b) に対して (c) の各ピークを基に比較・検討した。(a) および (b) においては、OH 伸縮振動に帰属される 3300cm^{-1} 付近のピーク、CH_2 変角振動に帰属される 1429 cm^{-1}、CH 変角振動に帰属される 1372 cm^{-1}、C-O-C 伸縮振動に帰属される 1161 cm^{-1}、C-O 伸縮振動に帰属される 1040 cm^{-1} 付近のピークを確認した。これらのピークはセルロースやヘミセルロースに由来する。一

方、(a) および (b) における 1600 cm^{-1} 付近のピークは、現生試料 (c) に比して顕著に現れていた。

Fig.17 の (a) および (b)、(c) は、織物②を測定のために圧縮薄層化して観察された黒色部分と飴色部分、褐色部分の結果である。(d) には、参考資料として、現代産植物性繊維 (苧麻) の測定結果である。(a) および (b)、(c) 対して (d) の各ピークを基に比較・検討した。(a) および (b) においては、OH 伸縮振動に帰属される 3300 cm^{-1} 付近のピーク、CH_2 変角振動に帰属される 1428 cm^{-1}、CH 変角振動に帰属される 1372 cm^{-1}、C-O-C 伸縮振動に帰属される 1161 cm^{-1} 、C-O 伸縮振動に帰属される 1040 cm^{-1} を確認した。(c) においては、1040 cm^{-1} 以下のピークのみ確認した。これらの検出ピークは、いずれもセルロースやヘミセルロースに由来する。一方、(a) および (b) においては、1600 cm^{-1} 付近のピークが顕著に現れていた。織物①および②において検出した 1600 cm^{-1} 付近の顕著なピークは、銅鏡 C の織物繊維同様に、炭化によりセルロース及びヘミセルロースが分解し生じた新たなピークである可能性が考えられる。以上より、銅鏡 D の鏡面付着織物①および織物②の繊維は、植物性繊維であり、炭化が進んでいる可能性が考えられる。

(3) 鉄器7 (方形板刃先) に付着した織物

鉄器 7 (方形板刃先) は、一部に平織物の存在が確認されており、方形板刃先は織物で包まれていた可能性が考えられる。織物は小片が分布しているのみで織物全体をうかがい知ることは困難であった。材料調査のため供された小片の試料をもとに織物材料を調査した (Fig.19)。織物は、織密度が 12 × 12 程度であると推測され、織物を構成する糸は径が 0.5mm (500 μ m) ほどであった (Fig. 20)。糸の撚りの有無については、表面の付着物により観察が困難であったため確認できなかった。生物顕微鏡による繊維断面観察の結果、長軸径 10 ～ 20μm ほどの空洞が多数観察された。この空洞は腐朽等によって繊維の実体が消滅した結果生じたものと考えられる。その形状は三角形状を呈すものから楕円形、扁平形を呈すものなど様々であった。ただ、一部に繊維の実体が残っている箇所が確認できた (Fig21 の○印部分)。その繊維断面は楕円形状を呈し、狭小な内腔を持つことが確認できた。その特徴は植物性繊維に見られ、特に苧麻に特徴的なものであることから、本資料の織物を構成した繊維は植物性繊維であり、苧麻である可能性が示唆された。続いて、ATR による材料調査を実施した。測定の結果を Fig. 22 に示した。(a) は鉄器 7 付着繊維の ATR 測定結果であり、(b) は現代産植物性繊維 (大麻繊維)、(c) は現代産精練絹糸の IR スペクトルを示した。測定の結果、3694 cm^{-1}、3622 cm^{-1}、1635 cm^{-1}、1419 cm^{-1}、997 cm^{-1}、909 cm^{-1}、797 cm^{-1}、747 cm^{-1}、523 cm^{-1}、455 cm^{-1}、423 cm^{-1} のピークを検出したが、これらのピークは植物性繊維、絹糸いずれにも属さないものであった。この IR スペクトルは、銅鏡 C および D のスペクトルと全体的によく似た波形を示しているが、わずかにピークが異なっており、同様な物質とは判断できない。本試料の繊維成分はすでに変質しているものと考えられ、FT-IR では材料が同定できなかった。鉄器 7 付着の織物は観察所見から、植物性繊維の苧麻である可能性が考えられる。

4．まとめ

銅鏡 C、D いずれの銅鏡の付着織物も、断面形状および赤外分光分析の結果から植物性繊維と考え

られる。さらに断面形状および繊維断面に見られる内腔の特徴から、「苧麻」と推察される。銅鏡 D の表面に見られる織りの緻密な織物（織物①）は、1 本の糸（糸幅）が 0.3mm 程度で、織密度 30 × 25 程度の織物であった。方形板刃先の織物は、0.5mm ほどの植物性繊維の苧麻製の糸で、織密度 12 × 12 と推測される織物であった。一部の試料については、劣化が著しく、観察試料化に伴い粉末化が顕著であったため、十分な観察が行えなかった。それらは今後、調査方法の検討などにより、改めて調査がなされ、成果が得られることを期待したい。

なお、本件において注目すべき点は、銅鏡 D の織物①が植物性繊維により非常に緻密な織物が織られていた点である。これに類似した織物は、筆者の管見によれば表 1 に示す 5 例である。本資料は、日本で最も北で確認された例と考えられる。

引用文献

栗山旭 「木材の炭化過程に関する研究」『林業試験場研究報告』第 304 号 pp.7-76（1976）

布目順郎 「付表 7　布（1）日本」『布目順郎著作集 4』 桂書房（1999）

表１　高い織密度を示した植物性繊維による織物を出土した遺跡（布目　1999 一部加筆）

遺跡名	所在地	時　代	付着資料	素　材	織密度
入の沢遺跡	**宮城県栗原市**	**古墳前期**	**銅鏡**	**苧麻**	**30 × 25**
登呂遺跡	静岡県静岡市	弥生後期	遊離	大麻	28
西弥護免遺跡	熊本県菊池郡大津町	弥生後期末	小型内行花文鏡（仿製）	大麻	25 × 20
国分尼塚 1 号墳	石川県七尾市	古墳前期	鞍下縁を構成	不明	26
園部垣内古墳	京都府南丹市	古墳前期	擬銘帯神獣鏡	苧麻	35
南塚古墳	大阪府箕面市	古墳後期	遊離	苧麻	40 × 18

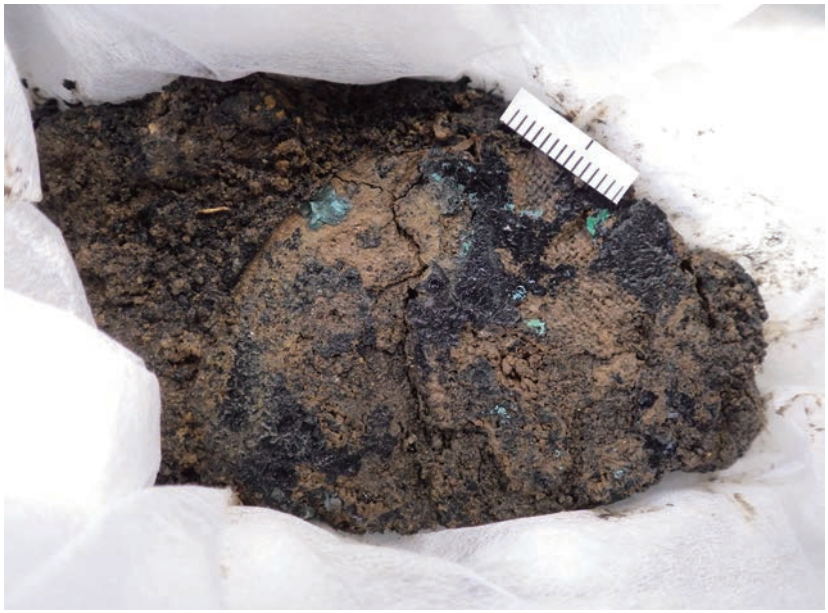


Fig. 1　銅鏡 C 全体　（目盛間隔は 1mm）

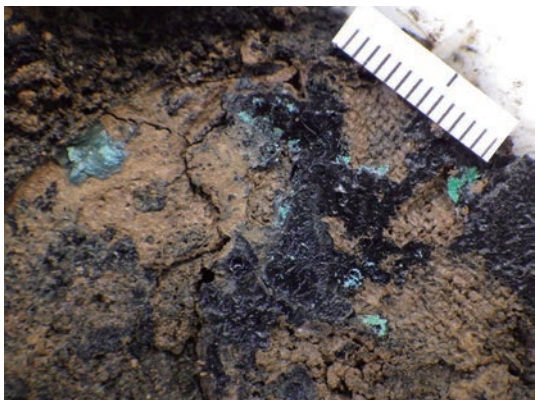


Fig. 2　銅鏡 C 全体　部分拡大 (1)（目盛間隔は 1mm）

Fig. 3　銅鏡 C 全体　部分拡大 (2)（目盛間隔は 1mm）

Fig. 4　銅鏡 C 詳細調査供試試料（全体）

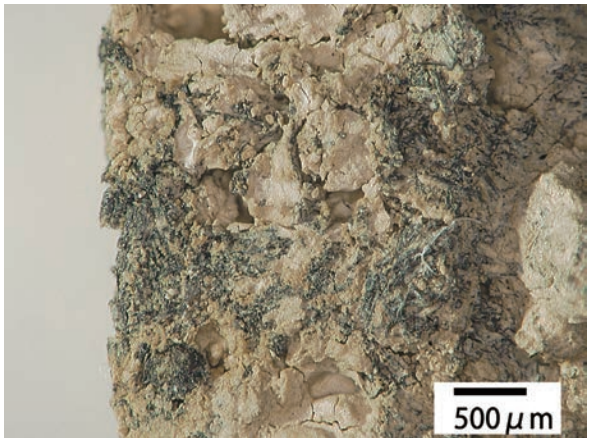


Fig. 5　銅鏡 C 詳細調査供試試料（部分拡大）

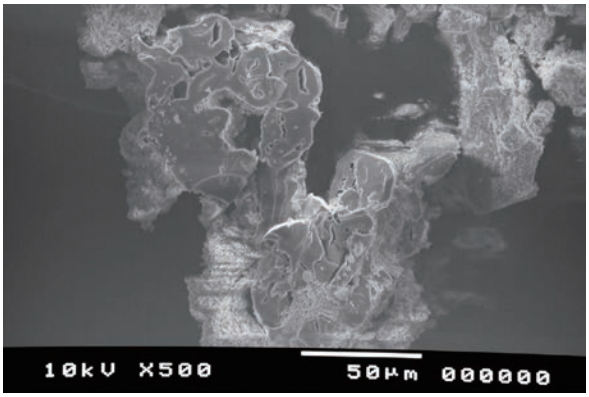


Fig. 6　銅鏡 C　繊維断面 SEM 画像

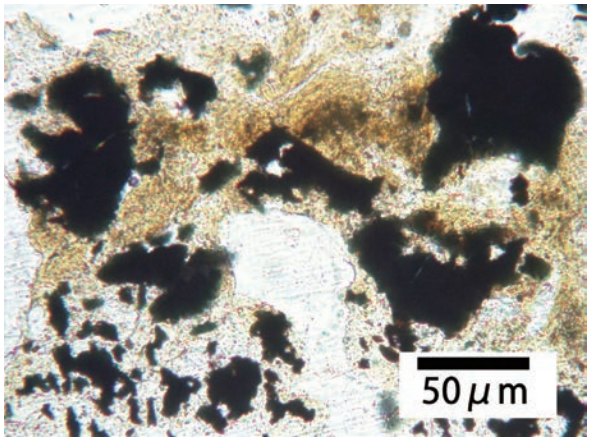


Fig. 7　銅鏡 C　繊維断面（透過光）

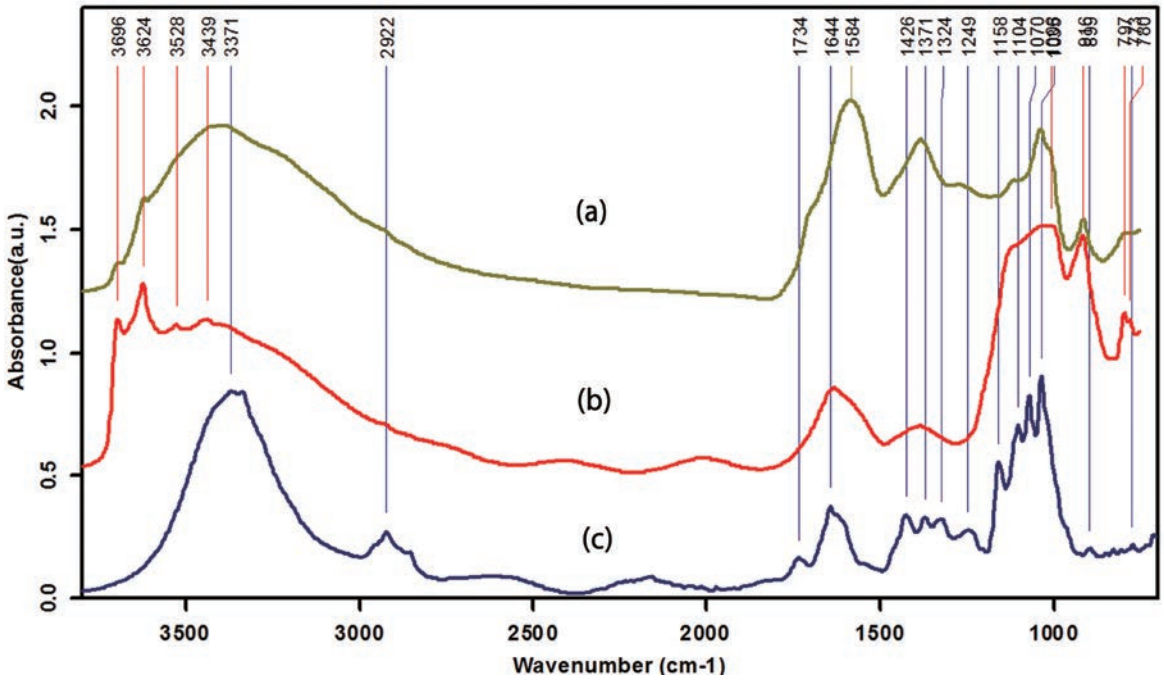


Fig. 8　銅鏡 C 繊維の IR スペクトル　a: 銅鏡 C 飴色部分、b: 銅鏡 C 黒色部分、c: 植物性繊維（苧麻繊維）

Fig. 9　銅鏡 D 全体（目盛間隔は 1mm）

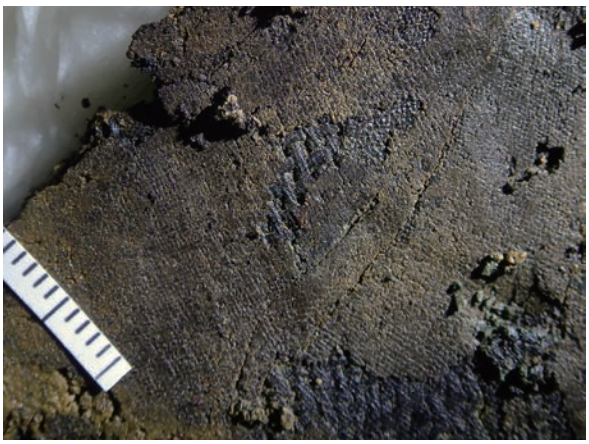


Fig. 10　銅鏡 D 全体　部分拡大（目盛間隔は 1mm）

Fig. 11　銅鏡 D 詳細調査供試試料（全体）

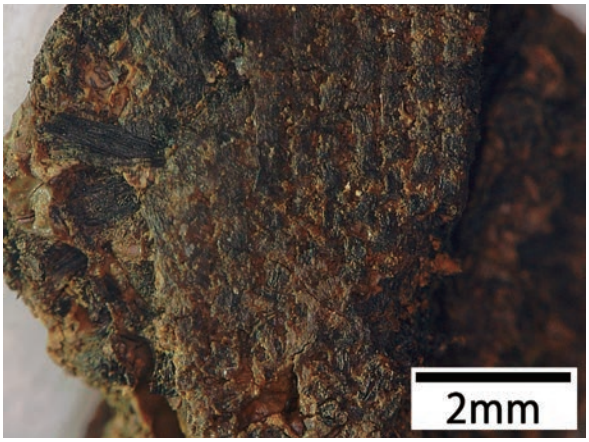
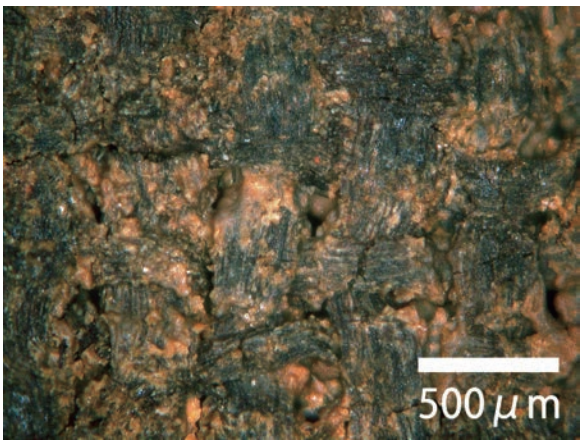


Fig. 12　銅鏡 D 詳細調査供試試料（部分拡大）



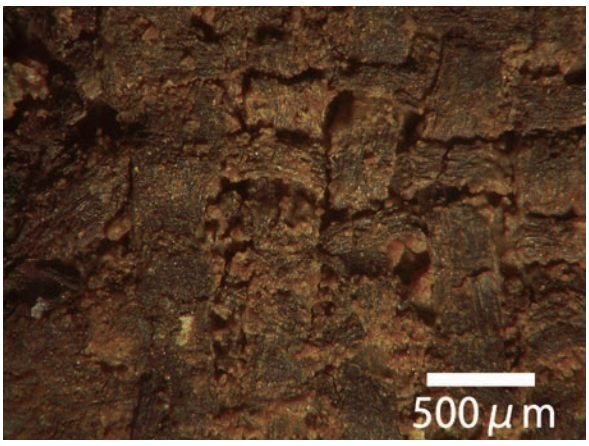


Fig. 13　銅鏡 D 詳細調査供試試料（部分拡大、右は左図をさらに部分拡大）

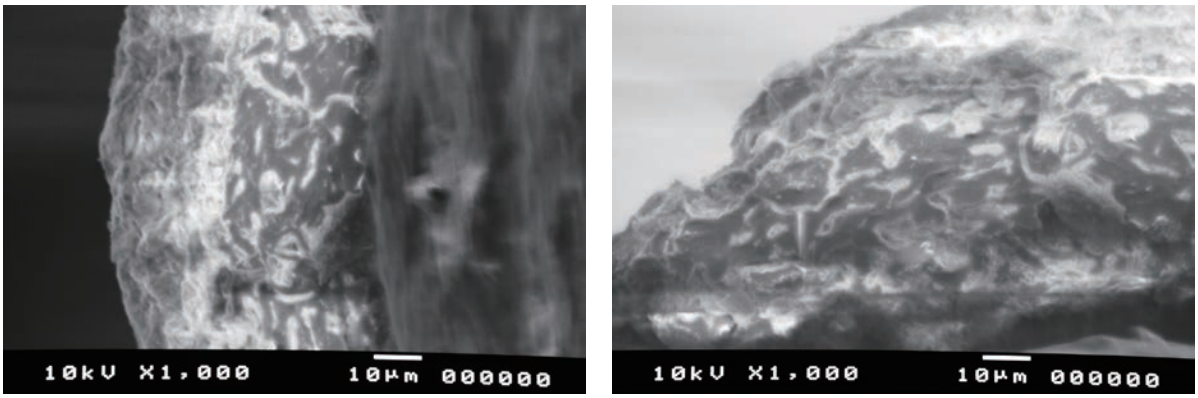


Fig. 14　銅鏡 D　織物①の繊維断面 SEM 画像

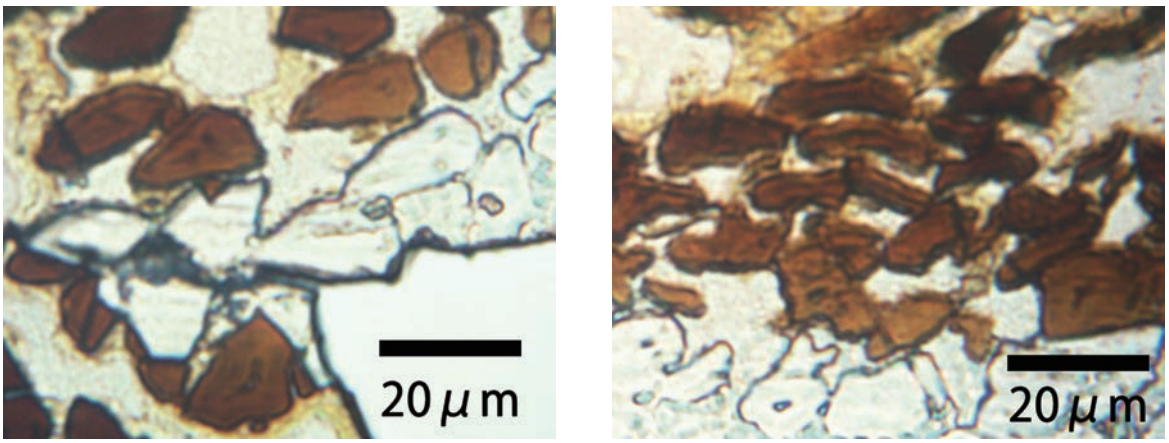


Fig. 15　銅鏡 D　織物①の繊維断面（透過光）

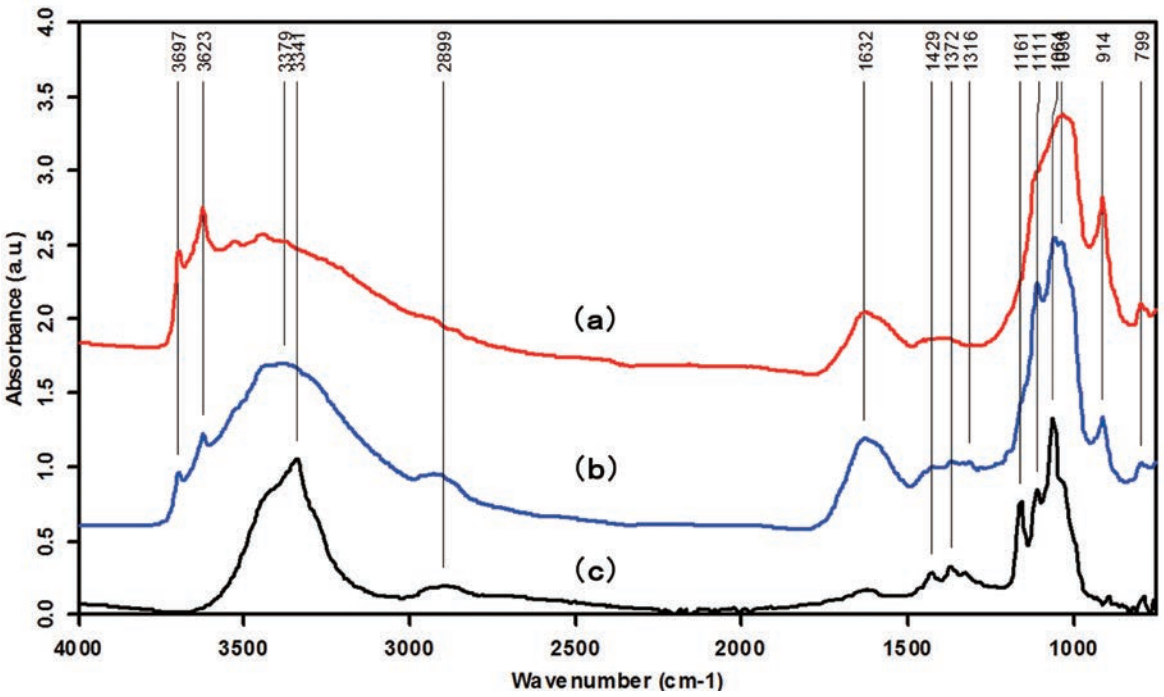


Fig. 16　銅鏡 D　織物①の IR スペクトル　a: 銅鏡 D 織物①黒色部分、b: 銅鏡 D 織物①飴色部分、c: 植物性繊維（苧麻繊維）

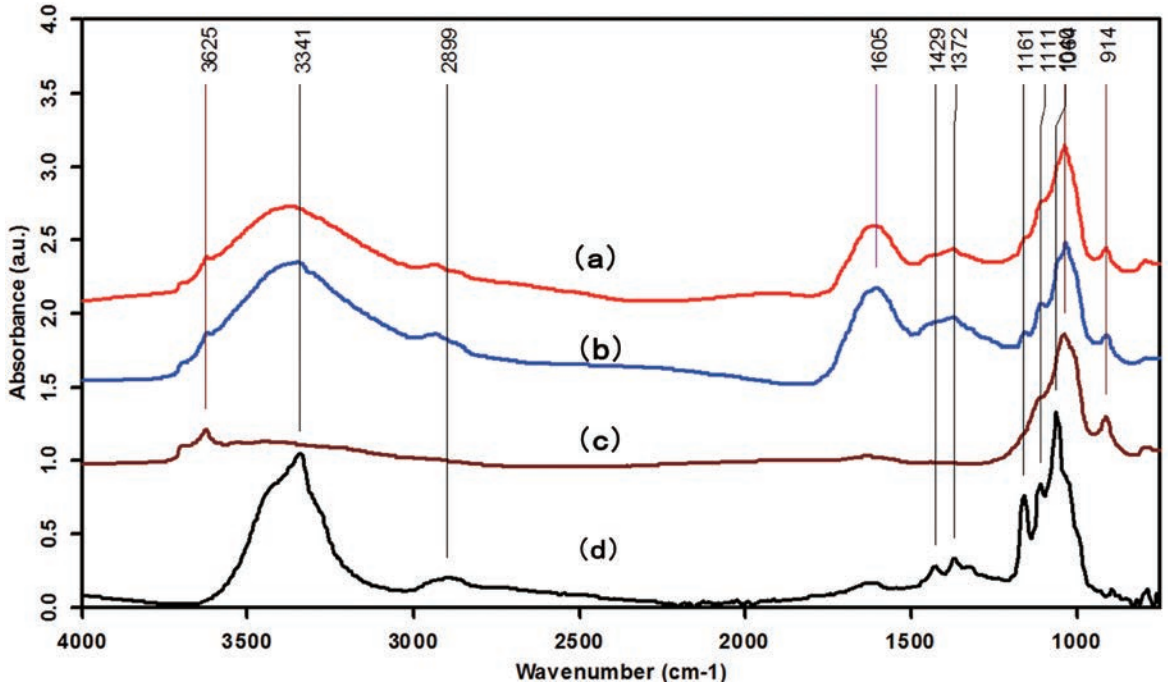


Fig. 17　銅鏡 D　織物②の IR スペクトル　a: 銅鏡 D 織物②黒色部分、b: 銅鏡 D 織物②飴色部分、c: 銅鏡 D 織物②褐色部分、d: 植物性繊維（苧麻繊維）

Fig. 18　方形板刃先の全体

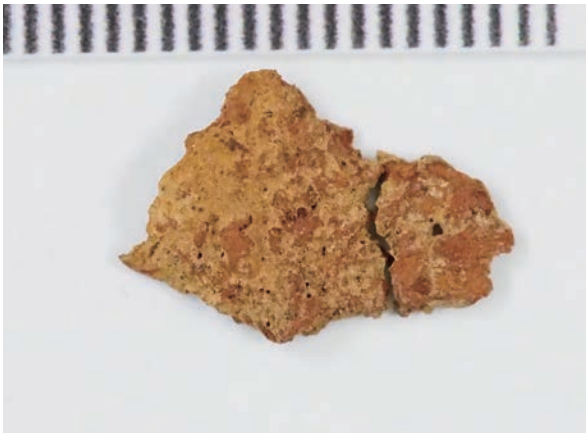


Fig. 19　方形板刃先付着繊維詳細調査供試試料（全体）（目盛間隔は 0.5mm）

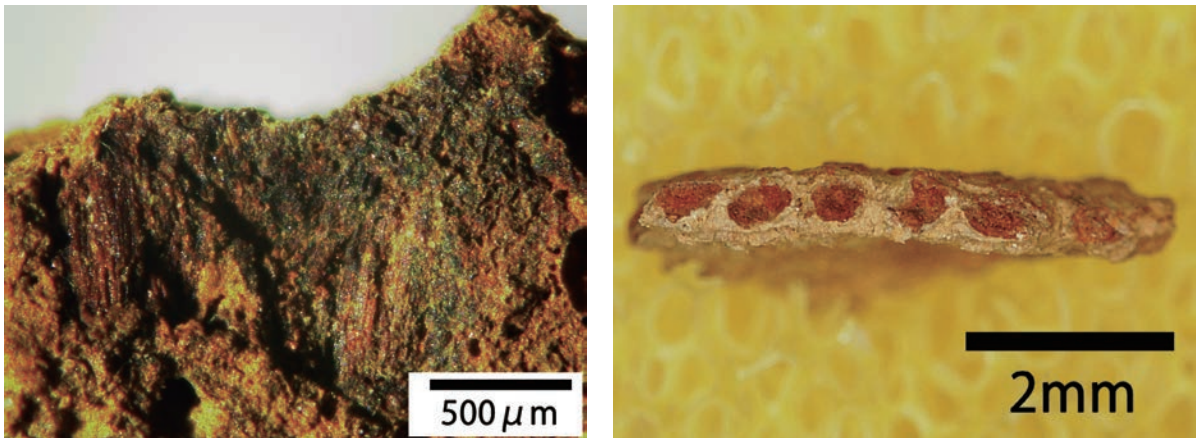


Fig. 20　方形板刃先付着繊維　詳細調査供試試料（部分拡大、左：表面、右：破断面）

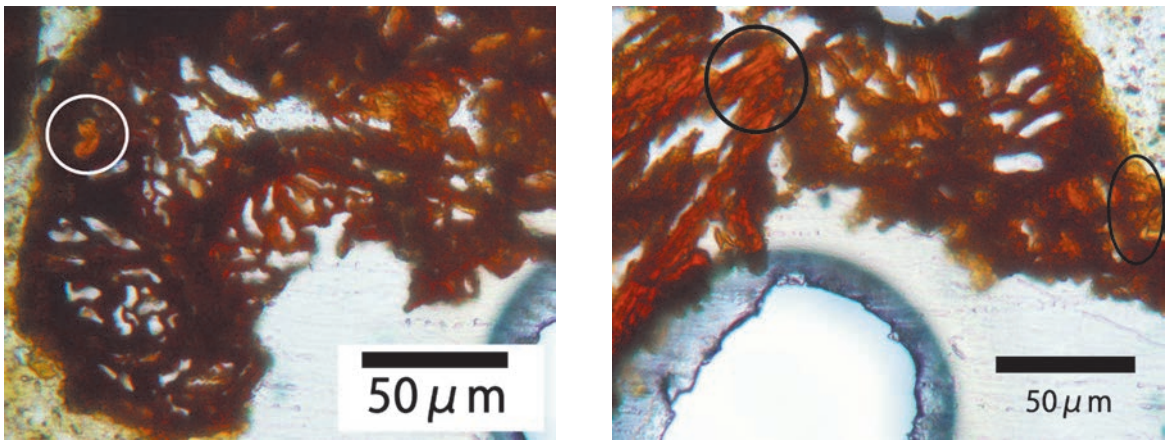


Fig. 21　方形板刃先付着繊維の断面（透過光）

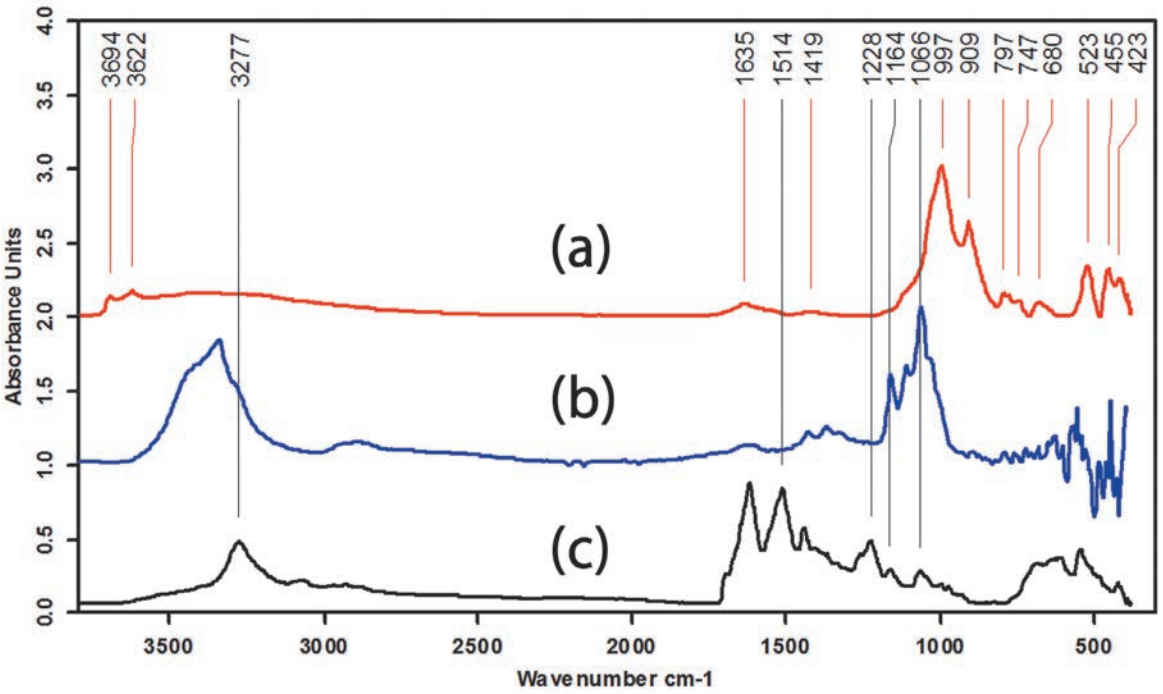


Fig. 22　方形板刃先付着繊維の IR スペクトル　a: 方形板刃先付着繊維、b: 植物性繊維（大麻）、c: 家蚕精練絹糸

附章４　入の沢遺跡出土朱の産地推定

近畿大学理工学部生命科学科　南　武志

１．概要

宮城県栗原市で発掘された入の沢遺跡から出土した朱の産地推定を硫黄同位体分析で行った。今回分析に使用した朱は、入の沢遺跡の古墳時代前期竪穴建物跡より採取された。朱に含まれる硫黄の同位体分析を行ったところ、–5.18 ‰のδ^{34}S値を得た。古代日本の主な朱産地である三重県丹生鉱山（–7.3 ± 1.9 ‰）、奈良県大和水銀鉱山（–2.1 ± 1.6‰）、徳島県水井鉱山（–2.4 ± 1.4‰）および古代中国の朱産地である貴州省満山特区（+22.6 ± 3.6 ‰）と陝西省旬阻郡（+10.5 ± 0.1 ‰）の硫黄同位体比と入の沢遺跡出土朱の硫黄同位体比を比較したところ、三重県丹生鉱山産に近いと考えられる。また、類似のδ^{34}S値を示す朱が近畿地方の墳墓から検出されていることと、銅鏡などの遺物が同時に見つかっていることを考え合わせると、朱は古代大和政権よりもたらされた可能性が高いと推察する。

２．はじめに

古代において鉱物を原料に用いる赤色顔料には、朱（硫化水銀）、ベンガラ（酸化鉄（Ⅲ））、鉛丹（四三酸化鉛）の三種類がある。このうち朱は最も鮮やかな紅色を呈す。弥生時代中期から古墳時代にかけて朱が用いられた墳墓が西日本を中心に数多く認められており、遺体表面や周辺に朱を散布した墳墓や、周囲の壁面を朱で赤色に塗布した墳墓などが観察されている。この風習は古代中国から伝承したと思われ、弥生時代から古墳時代の西日本ではいくつかの有力な豪族の墳墓において 10 kg を超える多量の朱の使用が報告されている。我々は、この朱の産地推定を朱の構成成分である硫黄の同位体分析から行っている。硫黄は 25 種類の同位体が存在するが、その中に安定同位元素として ^{32}S、^{33}S、^{34}S、^{36}S の 4 つを持っている。その存在割合は 95.02％、0.75％、4.21％、0.02％である。硫黄同位体分析はこの中の ^{32}S と ^{34}S の割合を調べる方法であり、硫黄を含む鉱物が出来るときに蒸発や拡散あるいはｐＨの変化などの様々な要因によって ^{32}S と ^{34}S の割合が異なることが知られている。そこで、標準物質のキャニオン・ディアブロ隕石の硫化鉄の硫黄同位体比と比較して下記の式によりδ^{34}S（‰）値を算出する。すわなち、キャニオン・ディアブロ隕石より ^{34}S に富む場合は、プラスのδ^{34}S 値を呈し、^{32}S に富む場合はマイナスのδ^{34}S 値を呈する。^{32}S は火山に含まれる亜硫酸ガスに比較的多く存在することが知られ、火山国である日本では一般に ^{32}S に富む鉱物が多く存在する。そこで、朱の産地推定が可能かどうか、辰砂（朱）鉱山鉱石の

$$\delta^{34}\mathrm{S}\ (‰) = \left(\frac{\left(\frac{^{34}\mathrm{S}}{^{32}\mathrm{S}}\right)_{\mathrm{sample}}}{\left(\frac{^{34}\mathrm{S}}{^{32}\mathrm{S}}\right)_{\mathrm{standard}}} - 1 \right) \times 1000$$

硫黄同位体分析を行い比較した。

日本には 100 を超える辰砂（朱）鉱山が存在する。その中で古代に朱を採取した鉱山として次の条件にあてはまる鉱山を探索することから始めた。すなわち、①露頭付近に鉱石が存在する。②古文書や遺跡から古墳時代以前に朱を採取していたと考えられる。③多量の鉱石が存在する。この条件にあうのは、日本では三重県丹生鉱山（–7.3 ± 1.9 ‰）、奈良県大和水銀鉱山（–2.1 ± 1.6‰）、徳島県水井鉱山（–2.4 ± 1.4‰）の 3 鉱山であった。また中国の辰砂（朱）産地では、貴州省満山特区（+22.6 ± 3.6 ‰）と陝西省旬阻郡（+10.5 ± 0.1 ‰）があてはまる [1]。しかもそれぞれの鉱山鉱石の硫黄同位体分析を行った結果、中国産と日本産では全く異なる値が得られ、日本産の中でも丹生鉱山産と他の 2 つの鉱山産で有意に異なる値が得られた。我々はこの結果をもとにして各地の墳墓から出土した朱の硫黄同位体分析を行い、産地推定を試みている。今回、宮城県栗原市の入の沢遺跡から出土した朱の産地推定を行う機会に恵まれたので、報告する。

3．測定試料と方法

宮城県栗原市の入の沢遺跡の古墳時代前期竪穴建物跡から採取された朱の塊より試料を採取し、宮城県教育庁文化財保護課から提供していただいた。

硫黄同位体分析は前報 [2] に従って行った。すなわち、およそ 5 mg の朱に逆王水（濃硝酸：濃塩酸 ＝ 3：1）を 4 ml 加え、95℃で 2 時間加熱し、臭素を 1 から 2 滴加え、95℃で再加熱することで硫黄イオンを硫酸イオンとし、超純水を同量加えたのちに、65℃に加温して 1M 塩化バリウム液 1 ml を加え、硫酸バリウムの沈殿を得た。この沈殿物を超純水で数回洗浄後、乾燥させ分析サンプルとした。硫酸バリウム量として約 40 μ g をスズ箔に包み元素分析装置（vario PYRO cube, ジャスコインタナショナル株式会社、東京）に供し、生じた二酸化硫黄ガスを直接安定同位体比質量分析装置（IsoPrime 100, ジャスコインタナショナル株式会社）に導入して硫黄同位体分析を行い、キャニオン・ディアブロ隕石の硫黄同位体比と比較した。

4．結果と考察

入の沢遺跡は、栗原市築館字城生野入の沢・峯岸に所在し、標高49 mの丘陵上に位置する。縄文時代、古墳時代前期、奈良・平安時代、鎌倉〜江戸時代までの遺跡が存在するが、その中でも古墳時代が中心であり、古墳時代の竪穴建物跡から朱の塊が発見された。この朱の硫黄同位体分析を行ったところ、–5.18 ‰の δ^{34}S 値を得た。この δ^{34}S 値をこれまで測定した辰砂（朱）鉱山鉱石の δ^{34}S 値と比較した。

日本国内の100カ所を超える辰砂（朱）鉱山は、北海道・東北地方に存在する鉱山と中央構造線沿いに存在する鉱山に大きくわけることができる。このうち、中央構造線沿いの辰砂（朱）鉱山の硫黄同位体比はほとんどマイナスの δ^{34}S 値を示している。これに対し、北海道・東北地方の辰砂（朱）鉱山では、マイナスの δ^{34}S 値を示す鉱山とプラスの δ^{34}S 値を示す鉱山が混在している [3]。この中で北見地方と北海道中央部の辰砂（朱）鉱山の多くはマイナスの δ^{34}S 値を示すが、日高地方の鉱山で

ある西舎鉱山鉱石は+2.87 ‰、日高・様似鉱山鉱石は+6.36 ‰、道央地域に存在する明治鉱山鉱石は+9.22 ‰を示す。

縄文時代の遺跡が北海道と青森県に存在しており、朱と漆を混ぜた赤色塗料を塗布した赤色色彩土器が縄文時代に使用されていた。我々は、青森県八戸市の縄文時代遺跡である是川中居遺跡から出土した朱塗布土器から朱の硫黄同位体分析を行っている。その結果、是川中居遺跡出土籃胎漆器片（大）のδ^{34}S値は+2.61 ‰、簞胎漆器片（小）のδ^{34}S値は+7.46 ‰、腕輪片のδ^{34}S値は+4.61 ‰であり、いずれもプラスのδ値を示した。この結果をもとに、北海道あるいは青森県の辰砂（朱）鉱山鉱石の硫黄同位体比より是川中居遺跡で用いられた朱の産地を推定したところ、北海道日高地方を含む道央地区からもたらされた可能性が高いと推察した[4)]。このことは、北海道産の朱が東北地方にもたらされたとしても道央地区の朱が主であったと思われ、マイナスのδ値を示した入の沢遺跡出土朱は北海道からもたらされた可能性は低く、また入の沢遺跡の場合は同時に出土した遺物などから考察しても北海道産辰砂（朱）鉱石を使用した可能性は低いと考えられる。

そこで古墳時代までに辰砂（朱）鉱石を採取していたと考えられる三重県丹生鉱山、奈良県大和水銀鉱山および徳島県水井鉱山の辰砂（朱）鉱石の硫黄同位体比と比較したところ、–7.3 ± 1.9 ‰のδ値が得られた丹生鉱山産の可能性が高いと推察した。古墳時代に今回の入の沢遺跡出土朱と類似のδ^{34}S値を示す墳墓出土朱は、古代大和政権の中心地である奈良県五条猫塚古墳出土朱において–5.5 ‰のδ値を検出した以外に、奈良県から離れた京都府赤阪今井墳墓出土朱で–5.9 ‰のδ値を、京都府太田南5号墳出土朱で–5.2 ‰のδ値を、さらに福井県花野谷1号墳出土朱で–5.5 ‰のδ値が得られた[5)]。

三重県産と思われる朱がどうして東北地方までもたらされたのか。非常に興味のある課題である。我々は、弥生時代後期において前述の墳墓に近接し、しかも近い時期に築造された西日本の日本海沿岸の島根県出雲西谷墳丘墓、京都府大風呂南墳墓群、福井県小羽山 30 号墳など、いわゆる地方の王国の墳墓で中国産朱が用いられたことを報告している[5)]。また、北部九州では弥生時代後期に多くの墳墓で中国産と思われる朱が用いられていたが、古墳時代初頭の津古庄掛古墳では丹生鉱山産と思われる国産朱の使用が認められている。その一方、古墳時代前期中葉の一貴山銚子塚古墳では中国産朱が使用されていたことを発表している。このように北部九州では古墳時代に入り、古代大和政権の影響力が北部九州まで到達していたと思われる[6)]。すなわち、古代大和政権の権力拡大に伴い古代大和政権の近くに位置する丹生鉱山や大和水銀鉱山から採取した朱を、威信物外交手段として朱を用いたのではないだろうか。今後考古学研究者の判断にゆだねたいところである。

以上、入の沢遺跡から出土した朱を硫黄同位体分析した結果、古代大和政権の影響が強い三重県丹生鉱山産の可能性が高いと推察した。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 26242016 の助成を受けたものです。また、分析に用いた朱試料は宮城県教育庁文化財保護課より提供していただいた。ここに深謝いたします。

参考文献

1）南　武志（2015）西谷 3 号墓の朱の産地推定 . 西谷 3 号墓発掘調査報告書 , 島根大学考古学研究室調査報告第 14 冊、出雲弥生の森博物館研究紀要第 5 集 153-156

2）M. Kawano, M. Tokuda, S. Imazu, T. Minami (2014) Determination of original mine of vermilion collected from ancient burial mounds in Japan using an improved sulfur isotope analytical method for small amounts of vermilion. Journal of Applied and Laser Spectroscopy 1, 37-40

3）南　武志、豊　遙秋、今津節生（2008）日本における辰砂鉱山鉱石のイオウ同位体比分析 . 近畿大学理工学総合研究所報告　20 号 41-48

4) 南　武志（2015）是川中居遺跡出土漆製品に付着した朱の産地推定の試み . 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 「漆と縄文人」特別展図録、98-99

5）南　武志、河野摩耶、古川　登、高橋和也、武内章記、今津節生 (2013) 硫黄同位体分析による西日本日本海沿岸の弥生時代後期から古墳時代の墳墓における朱の産地同定の試み、地球化学 47:237-243

6）河野摩耶、南　武志、今津節生（2014）九州北部地方における朱の獲得とその利用 - 硫黄同位体比分析による朱の産地推定 -、古代　132 号 27-38

附章 5　入の沢遺跡出土焼骨の肉眼形態学的および骨組織形態学的分析結果

新潟医療福祉大学　澤田純明

1．はじめに

宮城県栗原市入の沢遺跡にて 2014 年に実施された発掘調査において、古墳時代前期の竪穴建物跡（SI13）から十数点の焼骨片が出土した。調査担当者からの依頼を受けてこれらを実見したところ、中型ないし大型哺乳類の四肢骨片と思しき骨片が確認できたものの、肉眼観察ではそれらが人骨なのか動物骨なのかを識別することは困難であった。そこで、骨片 2 点を試料として骨構造の比較組織形態学的分析を行ったところ、これらが人骨の可能性が高いとの結論を得た。本稿でこの分析の内容と結果を報告する。

2．出土焼骨の概要と肉眼観察所見

竪穴建物跡から出土した骨片群には調査担当者により 1 ～ 12 の番号が付されており、骨番号 1 ～ 7 は長さ 2cm 以上 10cm 以下の四肢骨片、骨番号 8 ～ 11 は長さ 1cm 程度の骨片、骨番号 12 は長さ 1cm 以下の数点の骨片群である（図 1）。四肢骨片は、骨体の長さおよび骨質の厚さから中型ないし大型哺乳類に由来すると思われたが、動物種の特定は困難であった。いずれも焼骨で、焼成していない骨は見つかっていない。元来この竪穴建物内に焼骨しか存在していなかったのか、それとも、当初は焼骨と非焼骨の双方があったにも関わらず、非焼骨が土中での続成作用で分解され、非焼骨に比べて残りやすい性質を持つとされる焼骨（Mays1998）のみが残存する結果となったのかは判然としない。出土焼骨は全てよく焼成し、骨体の色調は白色を呈していた。また、四肢骨片の幾つかには多数の輪状の亀裂が生じており、骨体の捻転も認められた。

焼成による骨の形質変化については多くの実験がなされており（Shipman et al.1984、Nicholson1993、Holden et al. 1995）、色調変化のパターンは次の 1 ～ 3 としてまとめられる。（1）

図 1　入の沢遺跡出土焼骨（上段左から骨番号 1、2、3、中段左から骨番号 4、5、下段左から骨番号 6、7、8、9、10、11、右側最下段小片 7 点は全て骨番号 12。スケールバーは 2cm）

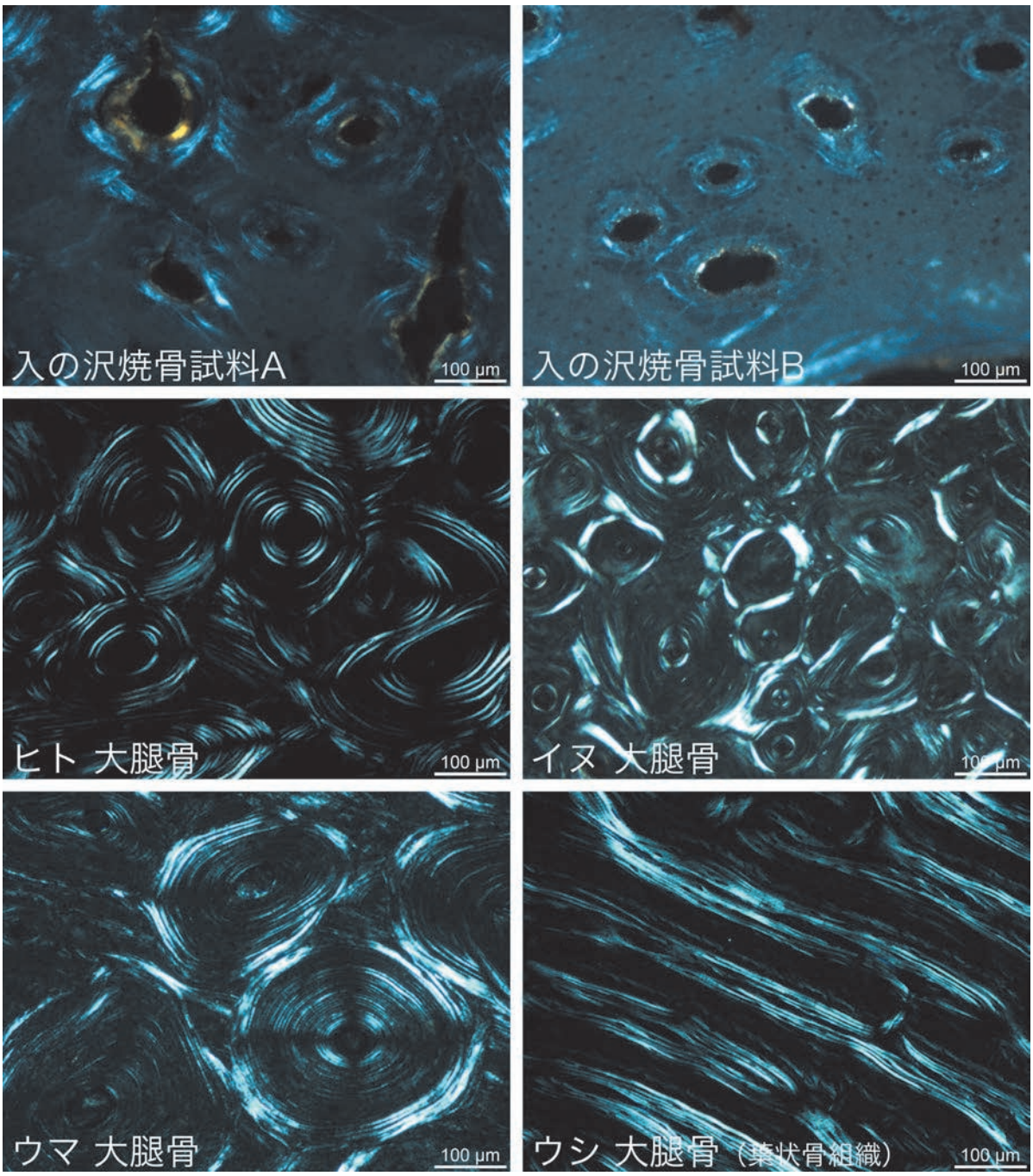


図 2　入の沢焼骨試料および各種比較標本の偏光顕微鏡像
（右下のウシは葉状骨組織、他は全てオステオンを主体とする骨組織）

低い温度で焼成された骨は暗赤色や茶褐色の色調を帯びる。（2）焼成温度が高くなるにつれて、骨は黒色ないし灰青色となる。（3）高温で焼成された骨は灰白色ないし白色を呈する。骨体が白色を帯びる焼成温度は、Shipman et al.（1984）では約 650℃以上、Holden et al.（1995）では 800℃以上とされている。色調のみならず、骨体の形状も焼成によって変化することが知られており、池田（1981）は、四肢長骨における輪状の亀裂や捻転は、皮膚や筋などの軟部組織が残っている状態において焼かれたときに生じる様相であると述べている。これらの知見に鑑みれば、出土焼骨は、軟部組織が残存している状態、すなわち死後長時間を経ていないときに、高温で焼成されたものと推察でき

よう。

3．出土焼骨の骨組織形態学的検討

（1）骨組織形態と種同定

哺乳類をはじめとする多くの脊椎動物の骨は、基本的に 2 種類の骨質から成り立っている。一つは、骨梁が縦横に交錯している「海綿質」で、肋骨や四肢骨端の内部などを形成する。もう一つは、四肢骨の骨幹部などを形づくる「緻密質」で、骨が密につまっているように見える硬い骨質である。緻密質にはごく細い血管の通る管腔が多数存在するが、骨体の長軸に平行して走向する管腔を「ハバース管」といい、ハバース管の周囲に同心円状の層板が取り囲んでいる構造を「オステオン」と呼ぶ。ハバース管やオステオンのサイズは動物種により異なることが明らかにされており、これらのサイズから動物種をある程度まで推定することが可能である（Mulhern and Ubelaker2012）。特に、ハバース管の大きさ、およびハバース管のオステオンに対する面積比は、人獣鑑別の指標として有効である（Harsányi 1993、澤田ほか 2010）。また、ある種の動物群に発達する特徴的な緻密質構造、例えば、ヒト以外の哺乳類に出現する列状に並ぶオステオンや、偶蹄類（ウシやブタなど）・奇蹄類（ウマなど）に見られる葉状骨（plexiform bone/laminar bone）などの骨質の有無も、動物種の同定指標となる（Hillier and Bell2007）。

骨組織構造の特徴を利用した人獣鑑別の方法は、実際上の要請が強い法医学分野において高く評価されてきたが、近年では人類学・考古学分野でも考古資料を材料とした種同定の論文・報告が増えてきている（Cuijpers2006、澤田ほか 2010、Sawada et al.2014）。今回、先行研究で種同定の有効性が確かめられているオステオンとハバース管のサイズ、および列状に並ぶオステオンや葉状骨の有無を検討することで、人獣鑑別を試みた。

（2）出土焼骨試料と比較標本データ

緻密質の比較組織学的所見は、主に四肢骨骨幹部の緻密質について蓄積されている。出土焼骨の四肢骨片から、中・大型哺乳類の骨幹部と思われる 2 点（骨番号 2、6）を、骨組織形態学的分析の試料として抽出した（骨番号 2：試料 A、骨番号 6：試料 B）。

試料との比較のため、本報告と観察・計測基準を同じくする澤田ほか（2010）、Sawada et al.（2014）、澤田（2015）から、ヒト、ニホンザル、ウサギ、ウマ、イノシシ、ニホンジカ、カモシカ、ウシ、キツネ、タヌキ、イヌ、クマのデータを利用した。

（3）方法

試料 A・B を澤田ほか（2010）の方法にしたがって樹脂に包埋し、樹脂が十分に重合硬化した後、四肢長骨の長軸に対して垂直な横断面を得るように硬組織切断機（SP1600, Leica）で薄切して、切片をプレパラートに封入した。検鏡には偏光観察の可能な光学顕微鏡（Imager A1, Zeiss）を使用した。顕微鏡像を CMOS カメラ（Go-5, QImaging）で撮影し、澤田ほか（2010）と Sawada et al.（2014）

表　入の沢遺跡焼骨試料および各種比較標本の骨組織形態計測値

分類群	標本番号	n	On.Ar (μ m^2)		H.Ar (μ m^2)		H-On 示数	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
入の沢遺跡焼骨試料								
入の沢試料 A	測定値	36	21723.0	5298.6	1473.5	707.3	6.99	3.25
入の沢試料 A	焼成前推定値 1	36	25556.5	6233.7	1733.6	832.1	6.99	3.25
入の沢試料 A	焼成前推定値 2	36	31032.8	7569.5	2105.1	1010.4	6.99	3.25
入の沢試料 B	測定値	4	23657.0	2683.6	1424.6	115.6	6.06	0.59
入の沢試料 B	焼成前推定値 1	4	27831.7	3157.2	1676.0	136.0	6.06	0.59
入の沢試料 B	焼成前推定値 2	4	33795.7	3833.7	2035.1	165.1	6.06	0.59
霊長目								
ヒト（上腕骨）	Homo03Ha	39	31463.8	10540.8	2040.9	894.7	6.9	3.2
ヒト（大腿骨）	Homo01Fa	54	41846.8	15999.8	2524.5	1189.9	6.4	3.1
ヒト（大腿骨）	Homo02Fa	55	33931.6	12228.2	1734.3	994.3	5.4	3.0
ヒト（大腿骨）	Homo04Fa	46	35774.2	11193.3	2336.2	920.5	6.9	3.0
ヒト（大腿骨）	Homo05Fa	22	36560.1	12066.7	1748.7	985.1	5.4	3.5
ヒト（大腿骨）	Homo06Fa	26	49038.7	22959.9	2334.5	1327.7	5.4	3.6
ニホンザル（大腿骨）	Macaca01Fa	12	36154.1	10694.8	1317.3	605.3	4.4	1.3
ウサギ目								
ウサギ（上腕骨）	Leporidae02Hp	6	10869.5	1895.5	168.5	76.1	1.5	0.6
ウサギ（大腿骨）	Leporidae02Fl	13	11136.7	4659.0	165.8	84.1	1.7	1.0
奇蹄目								
ウマ（大腿骨）	Eq01F	55	41422.9	23738.4	1371.1	692.8	3.9	2.4
偶蹄目								
イノシシ（上腕骨）	Sus01H	28	25294.5	11043.3	463.7	166.8	2.0	0.7
イノシシ（大腿骨）	Sus01F	11	24932.9	10758.4	680.7	386.8	3.0	1.7
ブタ（上腕骨）	Sus02H	87	19673.2	7155.0	646.0	287.1	3.5	1.6
ブタ（大腿骨）	Sus02F	29	25740.1	7559.2	827.7	359.7	3.2	1.0
ニホンジカ（上腕骨）	Cervus02Ha	51	19076.6	6231.2	469.4	139.4	2.6	0.9
ニホンジカ（上腕骨）	Cervus03Ha	30	20618.6	7048.2	503.5	172.9	2.6	0.8
ニホンジカ（大腿骨）	Cervus01Fp	39	17965.2	8821.4	506.8	220.8	3.2	1.4
ニホンジカ（大腿骨）	Cervus03Fp	48	22522.9	9747.8	722.2	317.6	3.4	1.4
カモシカ（大腿骨）	Cap01F	32	26140.1	8269.3	485.8	208.0	2.0	1.0
ウシ（上腕骨）	Bos04Ha	71	43209.7	14662.3	591.4	241.9	1.5	0.7
ウシ（大腿骨）	Bos02Fa	25	31532.4	10001.6	699.6	283.2	2.3	0.8
ウシ（大腿骨）	Bos03Fa	16	28061.3	10802.0	714.8	338.1	2.6	1.0
食肉目								
キツネ（下顎骨）	Vulpes01M	21	32937.9	10748.3	294.6	142.3	1.9	0.5
タヌキ（大腿骨）	Nyctereutes01Fp	13	22022.3	11545.9	480.1	192.8	2.5	1.1
イヌ（大腿骨）	Canis01Fa	26	12789.2	5187.9	298.2	163.3	3.7	2.1
イヌ（脛骨）	Canis01Ta	65	15291.4	4916.0	273.3	131.0	2.8	0.8
クマ（上腕骨）	Ursus01Ha	114	26356.1	11206.4	719.5	296.4	3.1	1.6
クマ（橈骨）	Ursus01Ra	109	29614.9	11581.4	942.1	400.1	3.4	1.2
クマ（大腿骨）	Ursus01Fa	131	22203.2	8273.8	637.3	318.1	3.0	1.4
クマ（脛骨）	Ursus01Ta	138	22496.6	8158.6	715.9	356.1	3.3	1.3

n: 完形のオステオンの個数．　On.Ar: 完形のオステオンの面積．　H.Ar: 完形のオステオン内にあるハバース管の面積．　H-On 示数 : (H.Ar/On.Ar) × 100.　焼成前推定値 1: 試料が焼成により 15% 収縮していると仮定して焼成前の値を推定．　焼成前推定値 2: 試料が焼成により 30% 収縮していると仮定して焼成前の値を推定 .

に準じた方法で、完形のオステオンの面積（On.Ar）とハバース管の面積（H.Ar）を計測した。また、各オステオンとそのハバース管について、ハバース管の面積の値をオステオンの面積の値で除して 100 を乗じた示数（H-On 示　数：(H.Ar/On.Ar) × 100）を算出した。

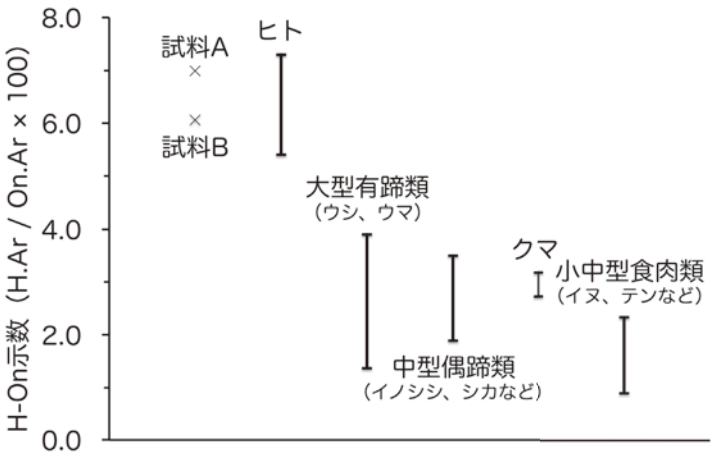


図 3　入の沢焼骨試料および各種比較標本の H-On 示数

試料は焼骨であるため、焼成による骨組織形態の収縮について考慮する必要がある。Nelson（1992）は焼骨のオステオンの直径が平均して 16.7％縮小していたことを報告しており、肉眼形態学的な調査では骨の収縮率が 30% に達する場合もあるとされる（Mays1998）。これらを参考に、焼骨試料の骨構造の収縮率を 15％ないし 30% と仮定して、焼成前の On.Ar と H.Ar の推定値を次の式で算出した。

焼成前推定値 1（15% 収縮と仮定）：推定値＝試料における組織形態の実測値／ ((1-0.15) × (1-0.15))

焼成前推定値 2（30% 収縮と仮定）：推定値＝試料における組織形態の実測値／ ((1-0.30) × (1-0.30))

（4）結果と考察

試料 A・B と比較動物標本の偏光顕微鏡像を図 2 に示した。試料は焼成ないし土中での埋存過程で劣化しており、部分的に組織形態が不明瞭であるものの、どちらの試料にも二次オステオンを主体とする構造が認められた。幼齢期に発達する一次骨がみられなかったことから、ある程度成長の進んだ個体のものと思われる。列状に並ぶオステオンや葉状骨は認められない。

試料 A・B および比較に用いたヒト・各種動物の骨組織形態計測値を表に示した。また、表のデータをもとに試料と比較標本の H-On 示数を図 3 にまとめた。試料 1・2 とも、オステオンとハバース管の面積（On.Ar、H.Ar）の焼成前推定値および H-On 示数は、ヒトの平均値もしくはその 1 標準偏差の範囲内に収まっていた。特に、人獣鑑別の指標として優れるハバース管の面積において、試料の値はヒトおよびウマの平均値の範囲と重なり、他の動物と異なっていた。人獣鑑別に有効なもう一つの指標である H-On 示数は、骨組織構造の面積の比なので一次計測値である On.Ar や H.Ar に比べて焼成による収縮の影響が小さいと考えられるが、試料の値は 6.99（試料 A）および 6.06（試料 B）でヒトの範囲（5.4-7.3）のみと重なり、ヒト以外の動物（1.5-4.4）とは明瞭に相違していた。すなわち、試料 A・B にヒト以外の動物に出現する特徴はなく、計測値がいずれもヒトの範囲に重なる値を示したことから、試料 A・B は人骨とみなして大過ない。

4. まとめ

入の沢遺跡から出土した焼骨について、肉眼形態学的検討および骨組織形態学的検討を行った結果、

これらが人骨であり、死後長時間を経ていないうちに高温で焼成されたものと考えられた。ただ、この組織学的鑑別法は骨構造サイズの統計的な検討を基盤とするため、人骨であると断定せず、ヒトの可能性が高いと結論するのが適切であろう。

文献

池田次郎 . 1981. 出土火葬骨について . 太安萬侶墓 , 奈良県立橿原考古学研究所 , pp. 79-88.

澤田純明 . 2015. 湧別市川遺跡出土骨の組織形態学的種同定 . 福田正宏編 , 日本列島北辺域における新石器／縄文化のプロセスに関する考古学的研究—湧別市川遺跡の研究—, 東京大学大学院新領域創成科学研究科 , pp. 91-94.

澤田純明・奈良貴史・中嶋友文・斉藤慶吏・百々幸雄・平田和明 . 2010. 骨組織形態学的方法による骨小片の人獣鑑別：東北北部の平安時代遺跡から出土した焼骨の分析 . Anthropological Science (Japanese Series), 118: 23-36.

Cuijpers A.G.F.M. 2006. Histological identification of bone fragments in archaeology: telling humans apart from horses and cattle. International Journal of Osteoarchaeology, 16:465-480.

Harsányi L. 1993. Differential diagnosis of human and animal bone. In: Grupe G. and Garland A.N. (eds.) Histology of Ancient Human Bone: Methods and Diagnosis. Springer, pp.79-94.

Hillier M. and Bell L.S. 2007. Differentiating human bone from animal bone: a review of histological method. Journal of Forensic Sciences, 52:249-263.

Holden J.L. Phakey P.P., and Clement J.G. 1995. Scanning electron microscope observations of incinerated human femoral bone: a case study. Forensic Science International, 74:17-28.

Mays S. 1998. The Archaeology of Human Bones. Routledge, London.

Mulhern D.M. and Ubelaker D.H. 2012. Differentiating human from nonhuman bone microstructure. In: Crowder C.M. and Stout SD. (eds.), Bone Histology, CRC Press, Boca Raton, pp. 109-134.

Nelson, R., 1992. A microscopic comparison of fresh and burned bone. Journal of Forensic Science, 37, 1055-1060.

Nicholson R.A. 1993. A morphological investigation of burnt animal bone and an evaluation of its utility in archaeology. Journal of Archaeological Science, 20: 411-428.

Sawada J., Nara T., Fukui J., Dodo Y., Hirata K. 2014. Histomorphological species identification of tiny bone fragments from a Paleolithic site in the Northern Japanese Archipelago. Journal of Archaeological Science, 46: 270-280.

Shipman P., Foster G., Schoeninger M. 1984. Burnt bones and teeth: an experimental study of colour, morphology, crystal structure and shrinkage. Journal of Archaeological Science, 11: 307-325.

附章 6　入の沢遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1．測定対象試料

入の沢遺跡は、宮城県栗原市築館字城生野入の沢・峯岸に所在する。測定対象試料は、竪穴建物跡出土の火災に伴う炭化材と炭化米の合計 8 点である（表 1）。炭化材は、残存する最外年輪部（3 年輪程度）を採取して試料とした。多くは試料採取時に小片化していたが、No.3 は、直径約 17cm、長さ 30cm 以上の芯持ち丸木ないし半割材、No.7 は直径 3.5 ～ 4.5cm 芯持ち丸木で材の原形を留め、それぞれ現存する最外年輪は、本来の最外年輪に近い可能性がある。試料が出土した遺構の時期は、いずれも古墳時代前期（4 世紀後半）と推定されている。

2．測定の意義

古墳時代前期の拠点的な集落の実年代による年代的位置づけを検討する。

3．化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（2）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。

（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（6）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4．測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、14C の計数、13C 濃度（13C/12C）、14C 濃度（14C/12C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5．算出方法

（1）δ 13C は、試料炭素の 13C 濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）14C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。14C 年代は δ 13C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。14C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（3）pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。pMC が小さい（14C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（14C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ 13C によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の 14C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の 14C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ＝ 68.2％）あるいは 2 標準偏差（2 σ＝ 95.4％）で表示される。グラフの縦軸が 14C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ 13C 補正を行い、下 1 桁を丸めない 14C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、14C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6．測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。試料 8 点の 14C 年代は、2020 ± 30yrBP（試料 No.1）から 1740 ± 30yrBP（試料 No.4）の間にある。暦年較正年代（1 σ）は、最も古い No.1 が 45cal BC ～ 16cal AD の範囲、最も新しい No.4 が 252 ～ 333cal AD の範囲で示される。推定される遺構の時期より全体的に古く、特に No.1 と No.8 は同じ遺構から出土した No.2、No,7 より明確に古い値となっている。

全体に古い傾向を示したことについては、次の 2 つの理由が考えられる。まず、試料 No.1 ～ 8 が含まれる 1 ～ 3 世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜 2009、坂本 2010 など）。日本

版較正曲線を用いてこれらの試料の測定結果を較正した場合、ここで報告する較正年代値より新しくなる可能性がある。

また、今回測定された試料のうち、7点の炭化材はいずれも残存最外年輪部を試料としているが、樹皮直下にある本来の最外年輪が確認された試料はない。このため、炭化材のもととなった樹木が伐採等で死んだ年代より古い年代値が示されている可能性がある。形状等から本来の最外年輪に近い可能性があると見られる試料（No.3、7）もあるが、同じ遺構から出土した炭化材よりかなり古い値を示したNo.1とNo.8についてはそのように見られていないことから、この古木効果が年代差の原因となっている可能性がある。古木効果の影響がない炭化米No.4は、8点の中で最も新しい年代値を示している。

試料の炭素含有率はすべて50％を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

尾嵜大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代 , 設楽博己 , 藤尾慎一郎 , 松木武彦編弥生時代の考古学1　弥生文化の輪郭 , 同成社 , 225-235

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木ー弥生から古墳へー , 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集 ,（株）加速器分析研究所 , 85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

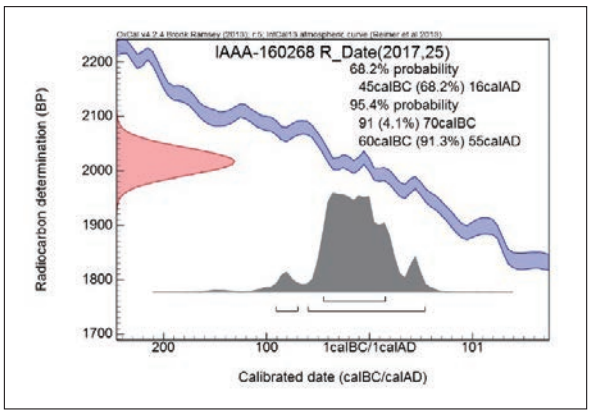
表1　放射性炭素年代測定結果（δ 13C 補正値）

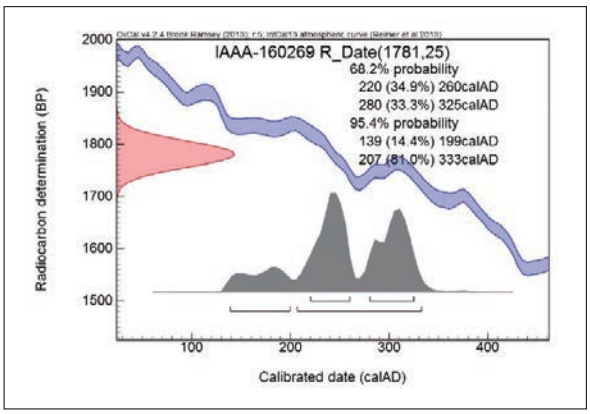
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ 13C (‰) (AMS)	δ 13C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-160268	No.1	SI10 竪穴建物跡　床　炭3	炭化材	AAA	-26.82 ± 0.51	2,020 ± 30	77.80 ± 0.25
IAAA-160269	No.2	SI10 竪穴建物跡　K1　2層　炭9	炭化材	AAA	-26.21 ± 0.51	1,780 ± 30	80.11 ± 0.25
IAAA-160270	No.3	SI13 竪穴建物跡　10-13層　炭11	炭化材	AAA	-25.42 ± 0.62	1,800 ± 30	79.92 ± 0.25
IAAA-160271	No.4	SI13 竪穴建物跡　10-13層　炭化米	炭化米	AAA	-24.77 ± 0.48	1,740 ± 30	80.49 ± 0.25
IAAA-160272	No.5	SI17 竪穴建物跡　壁　炭1	炭化材	AaA	-28.47 ± 0.59	1,800 ± 20	79.92 ± 0.24
IAAA-160273	No.6	SI17 竪穴建物跡　壁　炭2	炭化材	AAA	-27.53 ± 0.53	1,840 ± 20	79.51 ± 0.25
IAAA-160274	No.7	SI19 竪穴建物跡　7・8層　炭1	炭化材	AAA	-26.63 ± 0.56	1,780 ± 20	80.10 ± 0.25
IAAA-160275	No.8	SI19 竪穴建物跡　床　炭9	炭化材	AAA	-29.37 ± 0.41	1,950 ± 20	78.49 ± 0.24

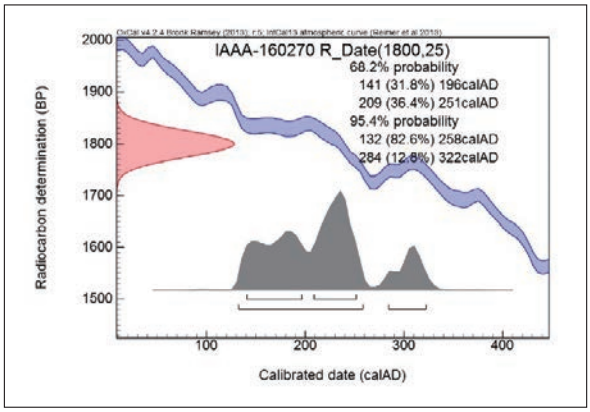
表 2　放射性炭素年代測定結果（δ 13C 未補正値、暦年較正用 14C 年代、較正年代）

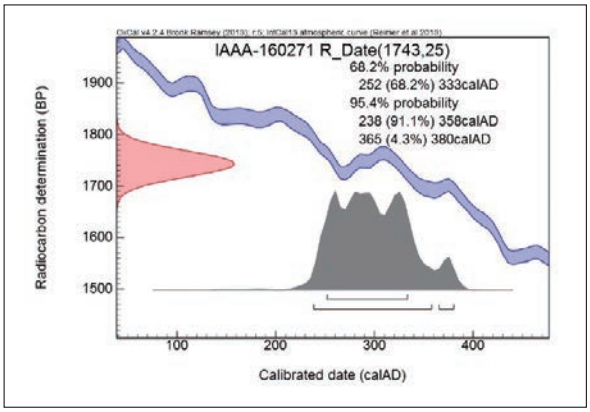
測定番号	δ 13C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age　(yrBP)	pMC　（%）			
IAAA-160268	2,050 ± 20	77.51 ± 0.23	2,017 ± 25	2calAD - 125calAD (95.4%)	91calBC - 70calBC (4.1%) 60calBC - 55calAD (91.3%)
IAAA-160269	1,800 ± 20	79.92 ± 0.23	1,781 ± 25	220calAD - 260calAD (34.9%) 280calAD - 325calAD (33.3%)	91calBC - 70calBC (4.1%) 60calBC - 55calAD (91.3%)
IAAA-160270	1,810 ± 20	79.85 ± 0.23	1,800 ± 25	141calAD - 196calAD (31.8%) 209calAD - 251calAD (36.4%)	132calAD - 258calAD (82.6%) 284calAD - 322calAD (12.8%)
IAAA-160271	1,740 ± 20	80.53 ± 0.24	1,743 ± 25	252calAD - 333calAD (68.2%)	238calAD - 358calAD (91.1%) 365calAD - 380calAD (4.3%)
IAAA-160272	1,860 ± 20	79.35 ± 0.22	1,800 ± 24	141calAD - 160calAD (10.3%) 165calAD - 196calAD (19.4%) 209calAD - 251calAD (38.6%)	132calAD - 258calAD (83.1%) 284calAD - 322calAD (12.3%)
IAAA-160273	1,880 ± 20	79.09 ± 0.23	1,842 ± 24	133calAD - 214calAD (68.2%)	88calAD - 104calAD (3.5%) 122calAD - 239calAD (91.9%)
IAAA-160274	1,810 ± 20	79.84 ± 0.23	1,782 ± 24	219calAD - 259calAD (36.2%) 281calAD - 324calAD (32.0%)	138calAD - 200calAD (14.8%) 206calAD - 265calAD (42.7%) 271calAD - 332calAD (38.0%)
IAAA-160275	2,020 ± 20	77.78 ± 0.23	1,946 ± 24	25calAD - 79calAD (68.2%)	2calAD - 125calAD (95.4%)

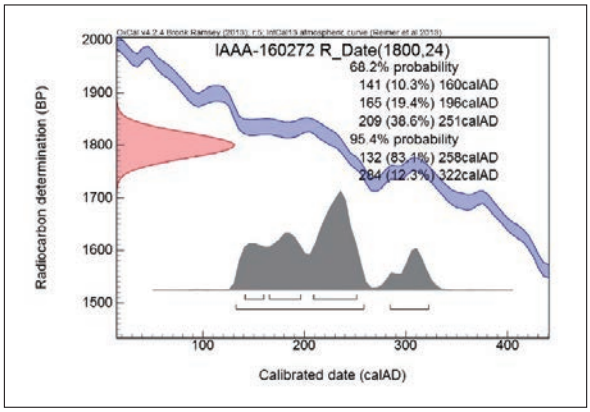
[参考値]

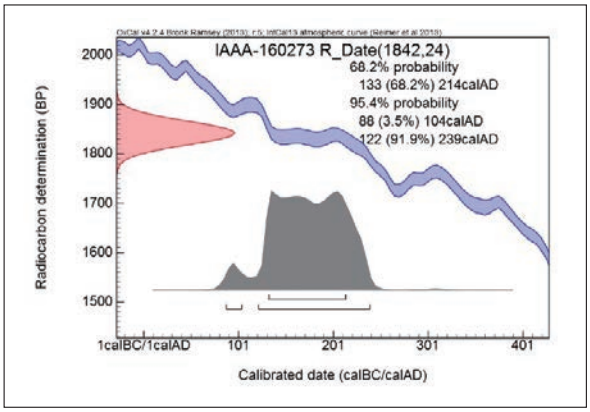


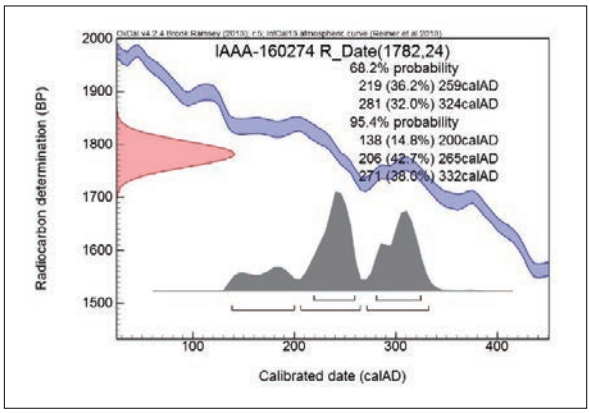


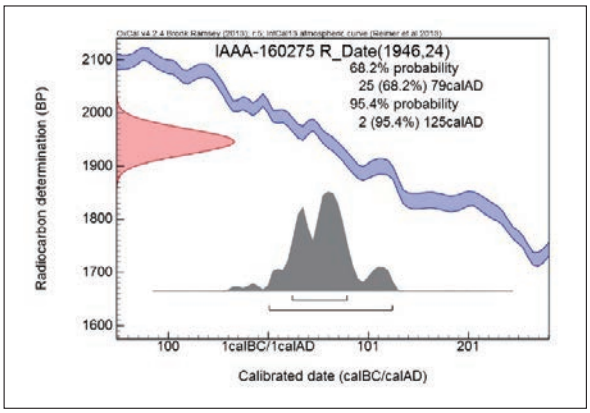












[図版] 暦年較正年代グラフ（参考）

附章 7　入の沢遺跡出土銅鏡等の保存処理と材質調査

東北歴史博物館　総括研究員　及川　規
東北歴史博物館　学　芸　員　芳賀文絵

1．はじめに

宮城県栗原市入の沢遺跡では、平成 26 年度発掘調査により、銅鏡 4 面をはじめとする金属製品、装身具、土師器等、多数の遺物が出土した。金属製品については東北歴史博物館で保存処理を行うこととなった。本稿では特に銅鏡 4 面を対象に行った状態調査、材質調査、保存処理について報告する。また遺物の取り上げおよびクリーニングの過程で赤色顔料や繊維と推定される付着物を検出し、かつそれらは遺物を取り外した跡の土壌にも付着していたことから、その土壌も保存することとし処理を行ったのでそれについても述べる。

本稿では便宜的に資料を表 1 のように表記した。観察にはデジタルマイクロスコープ（VHX-5000、KEYENCE 社製）、X 線透視・撮影装置（MUJ-22F Ⅱ [MG226/4.5]、PHILIPS = 現 YXLON 社製）を用いた。

2．保存処理

（1）銅鏡A

①搬入から応急処置・一時保管

2014 年 9 月 19 日に搬入された。写真撮影（図 1）、X 線撮影（図 2）の後、エタノール中に浸漬し脱水処理を行った。エタノール中で筆を用いて軽く土砂を除去し、ガス不透性フィルム中に脱酸素剤と共に封入し一時保管を行った。

②状態観察

目視、デジタルマイクロスコープ、X 線により状態確認を行った。破鏡で、破断面の鏡辺縁部は研磨されていること、赤色付着物があることを確認した（図 3）。大きなワレ、ヒビ等は検出されなかった。

③クリーニング・保存処理

蒸留水中で筆を用いて土砂を除去した。エタノールに浸漬（30 分× 2 回）し、脱水処理を行った。その後，実体顕微鏡下、筆、竹串、注射針、綿棒等を用いて細部の土砂を除去した。

クリーニング終了後、ベンゾトリアゾール（BTA）のエタノール溶液（以下 BTA 溶液, 5%）に浸漬（24 時間）し、防錆処理を行った。鏡面部のみをアクリル樹脂（パラロイ

表 1　資料の対照

表記名	資料
銅鏡 A	内行花文鏡（SI19 出土）
銅鏡 B	珠文鏡（SI27 出土）
銅鏡 C	珠文鏡（SI13 出土）
銅鏡 D	櫛歯文鏡（SI13 出土）
土壌 B	銅鏡 B が包埋されていた土壌
土壌 C	銅鏡 C が包埋されていた土壌
土壌 D	銅鏡 D が包埋されていた土壌

ド B72、以下 B72）のアセトン溶液（以下 B72 溶液、5%）に浸漬（1 日）し、樹脂含浸を行った。裏面（装飾面）は反転し、B72 溶液（5%）をシリンジを用いて滴下し強化した。処理後の写真を図 4 に示した。

（2）銅鏡B

①搬入から応急処置・一時保管

2014 年 11 月 14 日に搬入された。土壌ごと搬入（装飾面が土側、図 5）されたため、水分保持用に蒸留水を入れた容器と、水分中立型脱酸素剤とともにガス不透性フィルム中に封入し、一旦、冷蔵保管した。

②遺物取り上げ・状態観察

ゆっくりと常温にもどし、写真撮影（図 6）、X 線撮影（図 7）により現状を記録した。

櫛歯文帯の一部が大きく欠失しており、さらにそれにそって円弧状のワレ、その端点から外側に向かったワレ、さらに細かいヒビ等を確認した。多くのワレ･ヒビを確認したことから、鏡面にろ紙（φ 9cm）を蒸留水で貼り付け養生し、さらにアクリル板をあて、ゆっくりと反転した。反転して上面になった土壌を、形状を保持した状態で、静かに取り外した。取り外した土砂に銅鏡装飾面の陰刻と赤色付着物を検出した（図 8）。銅鏡装飾面にも赤色付着物を確認した（図 9、マイクロスコープ拡大図 10）。

③クリーニング・保存処理

蒸留水およびエタノール中で筆を用いて土砂を除去した。エタノールに浸漬（30 分、1 時間、2 時間の計 3 回）し、脱水処理を行った後、風乾した。銅鏡 B はワレの症状がひどく、資料の安定化が早急に求められた。そのため、まず鏡面の細部の土砂を除去したのち、BTA 溶液（5％）を塗布し防錆処理を行った。その後、先に鏡面部のみを B72 溶液（5％）を 3 回塗布し、鏡面部の強化を行った。鏡面部が固定できた後に反転し、裏面を実体顕微鏡下、筆、竹串、注射針、綿棒等を用いて顔料以外の細部の土砂を除去した。クリーニング終了後、BTA 溶液（5%）を塗布し、防錆処理を行った。その後、B72 溶液（5%）をシリンジを用いて滴下し強化した。処理後の写真を図 11 に示した。

④土壌 B の保存処理

銅鏡 B を取り外した土壌に、銅鏡 B 装飾面の陰刻と、赤色付着物を検出したことから、土壌（土壌 B）も保存することとし処理を行った。ステンレスバットに有機シリケート系石材強化剤（OH-100：OM-50=1:1 の混合物、以下 OM25）を入れ、表面に薬剤がかからないように高さ 5mm 程度露出させた状態で土壌 B を浸漬した（2 日間）。1 週間風乾後、全体が濡れるようにピペットを用いて OM25 を滴下し、風乾した。処理後の写真を図 12 に示した。

（3）銅鏡C

①搬入から応急処置・一時保管

2014 年 11 月 14 日に搬入された。土壌ごと搬入（鏡面が土側）されたため、銅鏡 B と同様に、水分保持用に蒸留水を入れた容器と、水分中立型脱酸素剤とともにガス不透性フィルム中に封入し、一旦、冷蔵保管した。

②遺物取り上げ・状態観察

ゆっくりと常温にもどし、写真撮影（図 13）、X 線撮影（図 14）により現状を記録した。鏡は半分のみ出土し、さらにそれが大きく 4 片に割れていた。装飾面が上なので、鈕の部分を保護するため、その形状にくりぬいた新吉野紙を蒸留水で貼り付け、その上にキムタオルを複数枚重ねて養生した（最上部はくりぬかないキムタオルを用いた）。さらにアクリル板をあて、ゆっくりと反転した。反転して上面になった土砂を、形状を保持した状態で、静かに取り外した。

目視、デジタルマイクロスコープ、X 線等により状態確認を行った。銅鏡は鱗状に剥落が進行し、多数のワレ・ヒビも確認され、非常に脆弱な状態だった。土壌を再反転し、正位置にもどして観察したところ、繊維状付着物が認められた。これについては奈良県立橿原考古学研究所奥山誠義主任研究員より詳細調査が行われた（附章 3 参照）。鏡面から剥落した破片の一部が土壌に固着していた。

土壌は、繊維状付着物の詳細調査が終了するまで、そのままの状態で保管することとした。土砂の形状が崩れないように、周囲を蒸留水を含ませた脱脂綿で養生・固定し、蒸留水を入れた容器とともに密閉容器に入れ冷蔵保管した。

③クリーニング・保存処理

繊維状付着物の詳細調査終了後、保存処理を行った。まず蒸留水およびエタノール中で筆を用いて土砂を除去した。エタノールに浸漬（30 分× 3 回）し脱水処理を行った後、風乾した。

劣化の進行が著しかったことから、資料の強化を優先することとし、BTA 溶液に浸漬（24 時間）し、防錆処理を行った。次に B72 溶液（5%）に減圧下で浸漬し樹脂含浸を行った（2-3 時間× 3 回）。その後、片面の B72 をアセトンで除去し、実体顕微鏡下、筆、竹串、注射針、綿棒等を用いて細部の土砂を除去した。クリーニング終了後、再度 B72 溶液（5%）を塗布し強化した。反対面も同様の処理を行った。破片 4 片を B72 溶液（50%）で接合した。処理後の写真を図 15 に示した。

④土壌 C の保存処理

繊維状付着物の詳細調査終了後、土壌 C の保存処理を行った。繊維状物質が付着していることから、親水性樹脂による固定を行うこととした。土壌 C をゆっくりと常温にもどし、水溶性アクリル樹脂（バインダー No.17、以下バインダー、11% 水溶液、約 15mL）を滴下含浸した。乾燥を防ぎ浸透を促すため、表面をテフロンシートで覆い、密閉容器中で保管した。2 日間静置後、再度バインダー水溶液を滴下含浸した（鏡面付着部 5%、周囲 11%、各約 5mL）。容器は密閉せずに軽くふたをのせるだけにし、

ゆっくり乾燥させた。さらにポリエチレンオキサイド樹脂（ポリオックス，1% 溶液、0.3g × 10 回）を滴下含浸し、風乾した（16 日間）。ステンレスバットに OM25 を入れ、表面に薬剤がかからないように高さ 5mm 程度露出させた状態で土壌 C を浸漬し（1 日間）、風乾した。処理後の写真を図 16 に示した。

（4）銅鏡D

①搬入から応急処置・一時保管

2014 年 12 月 10 日に搬入された。土壌ごと搬入（鏡面が土側）されたため、写真撮影（図 17、X 線撮影（図 18）により現状を記録した後、一旦、冷蔵保管した。

②遺物取り上げ・状態観察

X 線により多数のヒビ・ワレを確認し、かなり脆弱と予想されたため、まずアクリル樹脂で仮強化してから取り上げることとした。露出している装飾面を筆（馬毛）により蒸留水で洗浄、表面の土砂を除去した。その後、エタノールを塗布して脱水し 1 昼夜風乾した。露出面（装飾面）に B72 溶液（2.5%）を筆で複数回塗布し強化した。銅鏡 C と同様に，新吉野紙、キムタオル等で露出部を養生し、反転して土壌を取り外した。

鏡面と取り外した土砂に繊維状付着物を検出した。これらについても奥山主任研究員による詳細調査を行うこととしたが、炭化もしくは無機質化が進行し崩壊する可能性があったため、一部についてバインダー水溶液（2%）を塗布し強化した。蒸留水により筆で土砂を除去した後、湿潤状態を保持しながらガス不透性フィルム中に水分中立型脱酸素剤と共に封入し、冷蔵庫で保管した（鏡面部が上の状態）。

土壌は繊維状付着物の詳細調査が終了するまで、そのままの状態で保管することとし、繊維状付着物部分にバインダー水溶液（2%）を滴下含浸して強化した。その後、形状が崩れないように周囲を蒸留水を含ませた脱脂綿で養生･固定し，蒸留水を入れた容器とともに密閉容器に入れ冷蔵保管した。

③クリーニング・保存処理

鏡面の土砂を筆で除去し、エタノールを滴下し風乾、脱水した。乾燥後、B72 溶液（5%）を滴下し表面を強化した（1 時間間隔で 3 回反復）。乾燥後、過剰な B72 はアセトンを用いて綿棒（竹串の先端に脱脂綿を細くまきつけたもの = 自作）で除去した。反転し、装飾面も同様の処理を行った。さらに BTA 溶液（5%）を塗布し、防錆処理を施した。過剰な BTA はエタノールで除去した。処理後の写真を図 19 に示した。

④土壌 D の保存処理

繊維状付着物の詳細調査終了後、土壌 D の保存処理を行った。土壌 D をゆっくりと常温にもどし、ステンレスバットに OM25 を入れ、表面に薬剤がかからないように高さ 5mm 程度露出させた状態

で土壌 D を浸漬し（1 日間）、風乾した。処理後の写真を図 20 に示した。

3．材質調査

（1）調査の概要

各銅鏡地金部および赤色付着物について、ポータブル蛍光 X 線分析装置（以下　XRF）による調査を行った。XRF は試料の採取を必要とせず金属元素同定が可能であることから金属製文化財の材質調査に用いられるが、得られるのは表面（深さ数μ m 程度）についてのデータであり、出土遺物の場合、付着しているサビや土砂の影響や劣化の進行により本体の組成とは異なる可能性がある。一部資料については、より詳細な情報を得るため X 線回折分析装置（以下　XRD）による分析も行った。材質調査に用いた機器・分析条件を表 2 に示した。

（2）所見

XRF 分析により銅鏡表面のそれぞれのサンプルについて検出された主な元素の含有率を表 3 に示した。この値は当該機器内蔵データに基づくファンダメンタルパラメータ方により算出（100wt%に規格化）されたものであり、検量線法等による定量分析は行っておらず、参考値である。

表 2　材質調査機器

機器	型番・分析条件等
ポータブル蛍光 X 線分析装置	Innov-X　Systems.Inc. 社製α 4000SL X 線管球対陰極：W（タングステン）、検出器：Si-PIN、管電圧：40kV、管電流 50 μ A、照射窓径：φ 14mm、分析装置と資料の距離：5-10mm、測定時間：60 秒、測定雰囲気：大気
X 線回折分析装置	ブルカー AXS 社製 X 線回折装置 D8 Discover with GADDS 対陰極：Co（コバルト）、検出器：Hi-Star 検出器（二次元 PSPC）、管電圧：35kV、管電流：40mA、X 線照射範囲：φ 0.5mm、測定時間：300 秒、測定雰囲気：大気

表 3　銅鏡 A － D から検出された主な元素の含有率（% *1）

サンプル	Cu	Sn	Pb	Fe
銅鏡 A 装飾面（地金部）	24.7	70.83	3.37	0.84
銅鏡 A 装飾面（赤色付着物部）	24.2	67.78	3.58	4.23
銅鏡 B 装飾面（地金部）	11.2	78.32	7.95	0.73
銅鏡 B 装飾面（赤色付着物部）	12.1	73.85	8.90	4.12
銅鏡 C 装飾面（地金部）	11.0	70.65	12.83	3.70
銅鏡 D 装飾面（地金部）	18.7	64.49	13.27	2.58
銅鏡 D 鏡面（地金部）	23.8	60.13	12.06	3.13

*1　数値は分析機器の自動算出による参考値。検量線法等による定量分析はしていない。

①銅鏡 A

地金部と赤色付着物部（以下、赤色部）の XRF スペクトルを図 21、22 に示した。地金部の主要元素として銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）を検出し、青銅製であることを確認した。

地金部と赤色部を比較すると赤色部の鉄（Fe）の含有率が大きいこと、水銀（Hg、朱の構成元素）は検出されなかったこと、Pb（鉛丹の構成元素）の量に大きな差が認められなかったことから、赤色付着物は「ベンガラ」の可能性が高いと推定した。さらに XRD 分析でも「ベンガラ」の主成分である Hematite（赤鉄鉱 、Fe_2O_3）の存在が確認され（図 23）、赤色付着物は「ベンガラ」であるという推定を支持した。

②銅鏡 B

赤色付着物部（以下、赤色部）の XRF スペクトルを図 24 示した。地金部の主要元素として Cu、Sn、Pb を検出し、青銅製であることを確認した。銅鏡 A に比較して、Cu の割合が小さく、Sn と Pb の割合が大きかった。

赤色付着物は銅鏡 A と同じ理由から「ベンガラ」の可能性が高いと推定した。

土壌 B について、赤色部とそうでないところについて XRF 分析を行い比較した（図 25、26）。Fe の含有率に大きな差は認められなかったが、銅鏡 B の結果および Hg は検出されず、Pb も微量だったことから、やはり「ベンガラ」の可能性が高いと推定した。

③銅鏡 C

装飾面の地金部について測定した（図 27）。主要元素として Cu、Sn、Pb を検出し、青銅製であることを確認した。これらの含有率は銅鏡 B と類似した値を示したが、やや Sn が少なく Pb が多かった。

④銅鏡 D

装飾面と鏡面の地金部について測定した（図 28、29）。主要元素として Cu、Sn、Pb を検出し、青銅製であることを確認した。Cu や Sn の含有率は銅鏡 A に、Pb は銅鏡 C に類似した値を示した。装飾面と鏡面を比較すると装飾面では Cu が少なく Sn が多かった。

（3）小括

今回の XRF 測定では、Cu や Pb に比較して Sn の含有率が非常に高いという結果を得た。宮城県角田市郷主内遺跡出土（2000 年）の青銅製密教法具 [1] は、器種により差があるものの、Cu の含有率（wt%、以下同じ）が最も小さい花瓶 2 でも Cu：Sn：Pb=29：24：44、Cu の含有率が最も大きい飯食器では、Cu：Sn：Pb=55：15：28 であり、また他の出土青銅製品の分析例でも、Cu が 45-95%、Sn が 0-15%、Pb が 2-20% という値が報告 [2] されている。いずれの場合も、Cu の含有率が最も多く、Sn の含有率が最も少ない。これに比較すると、今回の測定試料は Sn の含有率が非常に大きいという特徴がある。錆化の進行に伴い、Cu に対する Sn や Pb の含有率が相対的に増加することが知られて

いる。XRF による測定は、錆化の進行の影響を顕著に受ける表層部分の成分の値である。そのため、今回の測定試料の Sn の含有率高値という特異性が、錆の進行に起因するものか、もしくは元々の組成の影響があるのかは本調査の範囲では不明である。本体部分の詳細な調査を行うことで、新たな知見が得られることが期待される。

4．まとめ

入の沢遺跡の平成 26 年度発掘調査により出土した銅鏡 4 面と土壌 3 点について保存処理・材質調査を行った。銅鏡はクリーニング後、金属部分（赤色付着物部分も含む）は B72 で強化した。繊維状付着物部分については、バインダーおよびポリオックスで強化した。土壌については、OM25 で強化・固定した。繊維状付着物がある土壌 C・土壌 D については、バインダーおよびポリオックスで繊維状付着物部分を処理した後、OM25 で強化・固定した。

材質調査においては、銅鏡 A-D は青銅製、赤色付着物はいずれも「ベンガラ」と結論した。今回示した構成元素の含有率はあくまで参考値であり、所見はそれに基づくものである。正確な定量およびそれに基づく考察は今後の課題である。

今後、定期的に資料の状態の経時変化を観察し、保存処理法の適否を検討し、その改善に資するとともに、必要に応じて再処理を行うこととしている。

材質調査では東北芸術工科大学の米村祥央准教授に多大なご協力をいただいた。記して謝意を表します。

文献

1）宮城県教育委員会、「郷主内遺跡」、宮城県文化財調査報告書、187、p.113（2001）

2）富沢威、赤沼英男、「銅合金を素材とする考古遺物の自然科学的研究」、季刊考古学、62、p.65（1998）

図 1　銅鏡 A 装飾面

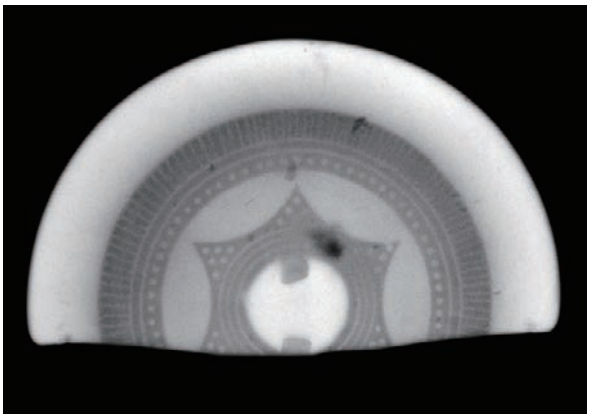


図 2　銅鏡 A（X 線像）

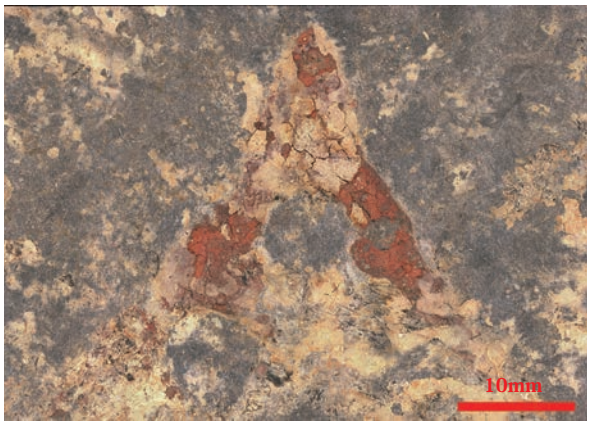


図 3　銅鏡 A 装飾面（赤色付着物部）

図 4　銅鏡 A 装飾面（処理後）

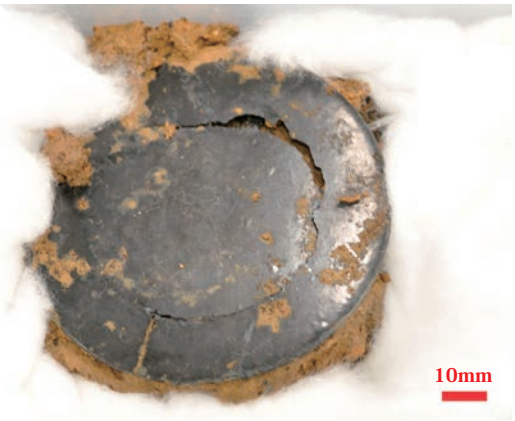


図 5　銅鏡 B 鏡面（搬入時）

図 6　銅鏡 B 装飾面（反転，土砂除去後）

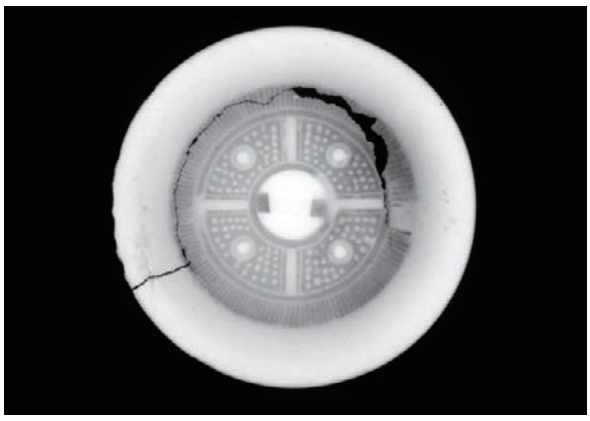


図 7　銅鏡 B（X 線像）

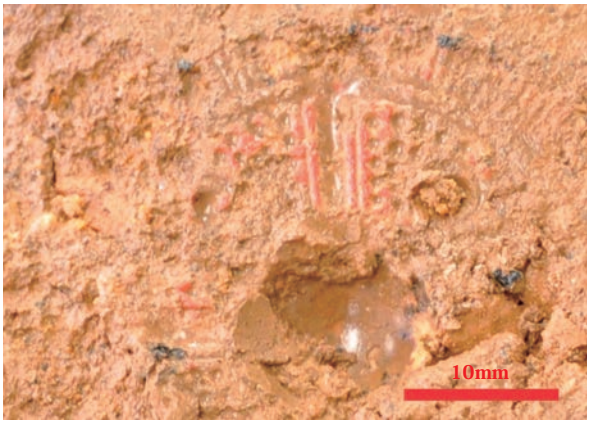


図 8　土壌 B（赤色付着物部）

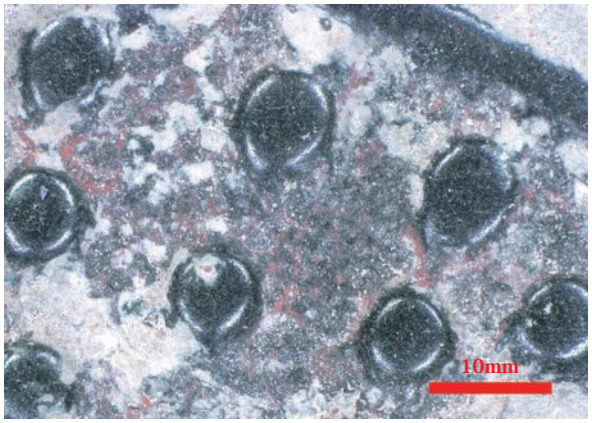


図 9　銅鏡 B 装飾面（赤色付着物部）

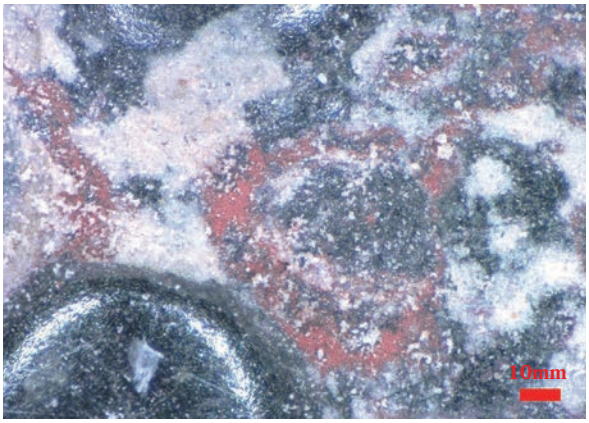


図 10　銅鏡 B 装飾面（マイクロスコープ拡大）

図 11　銅鏡 B 装飾面（処理後）

図 12　土壌 B（処理後）

図 13　銅鏡 C 装飾面

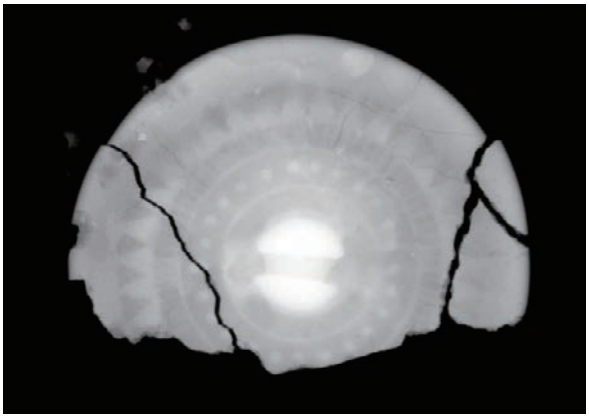


図 14　銅鏡 C（X 線像）

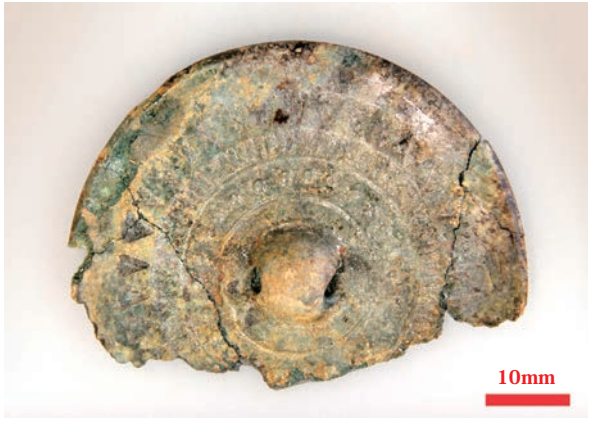


図 15　銅鏡 C 装飾面（処理後）

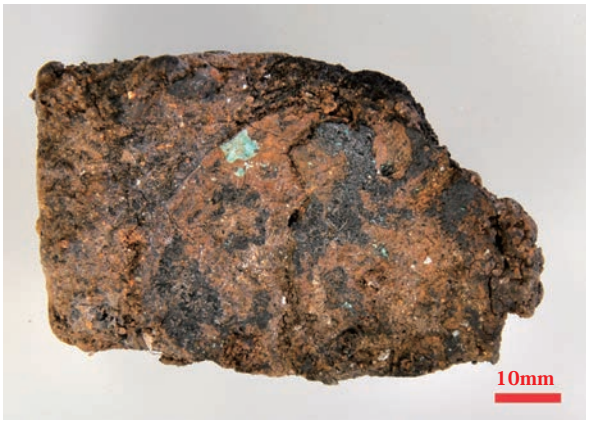


図 16　土壌 C（処理後）

図 17　銅鏡 D 装飾面

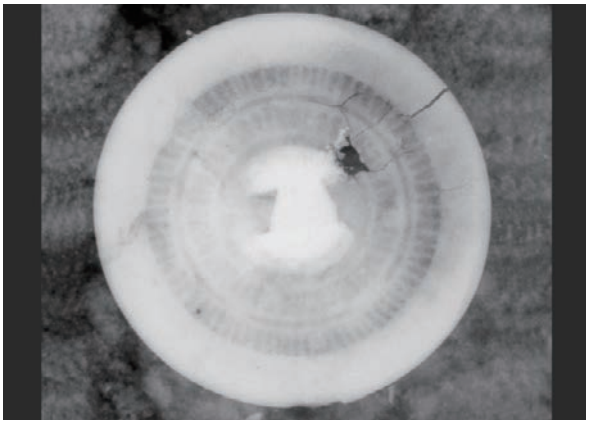


図 18　銅鏡 D(X 線像)

図 19　銅鏡 D 装飾面 (処理後)

図 20　土壌 D(処理後)

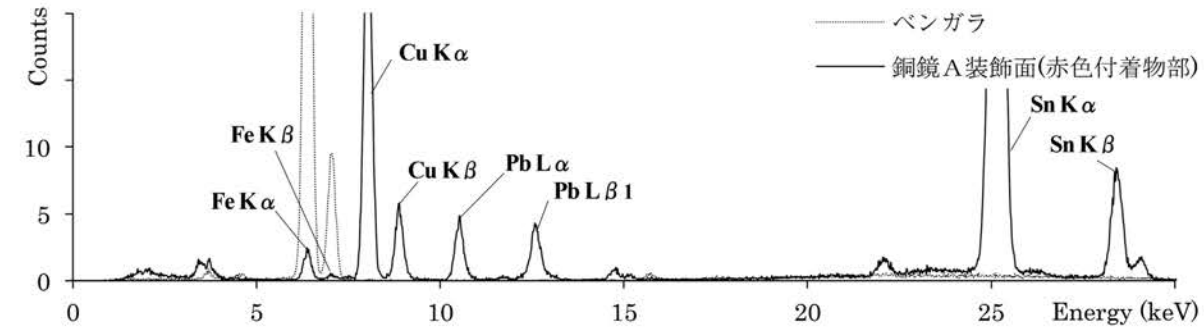


図 21　銅鏡 A 装飾面（赤色付着物部）の XRF スペクトル

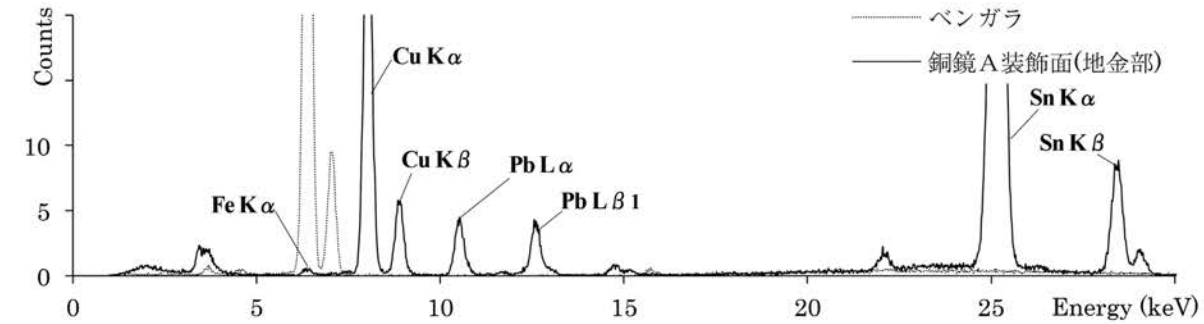


図 22　銅鏡 A 装飾面（地金部）の XRF スペクトル

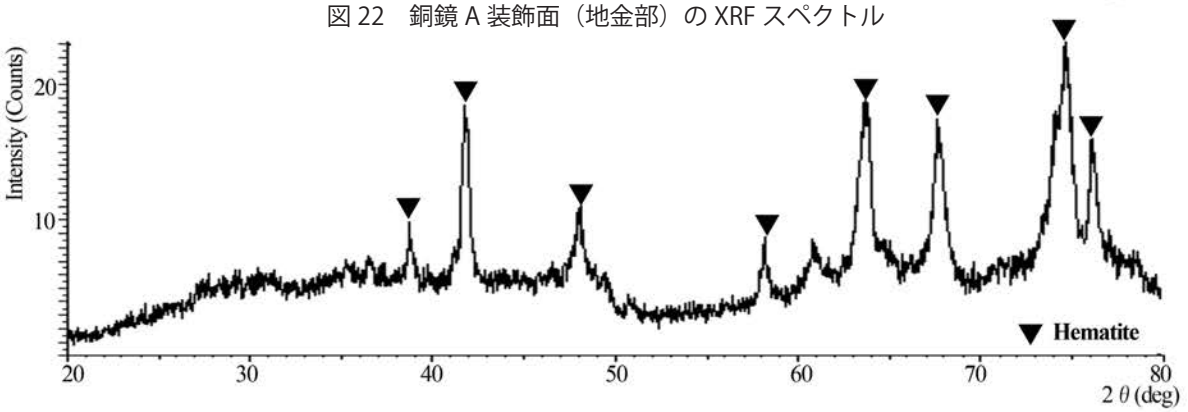


図 23　銅鏡 A 装飾面（赤色付着物部）の XRD スペクトル

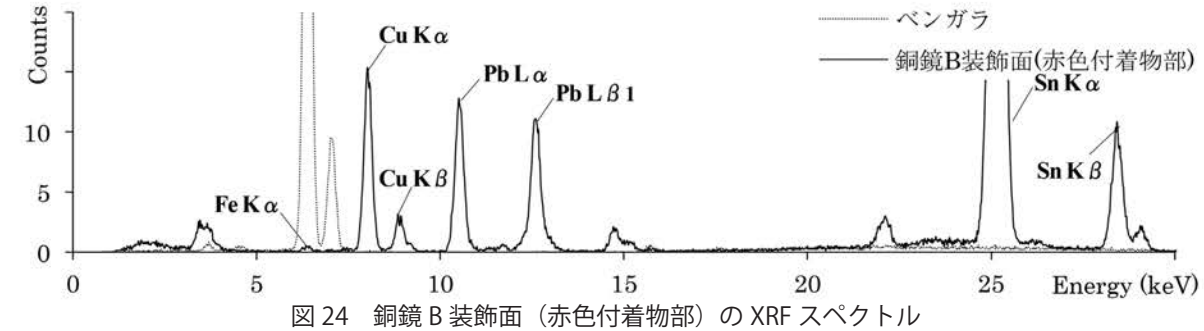


図 24　銅鏡 B 装飾面（赤色付着物部）の XRF スペクトル

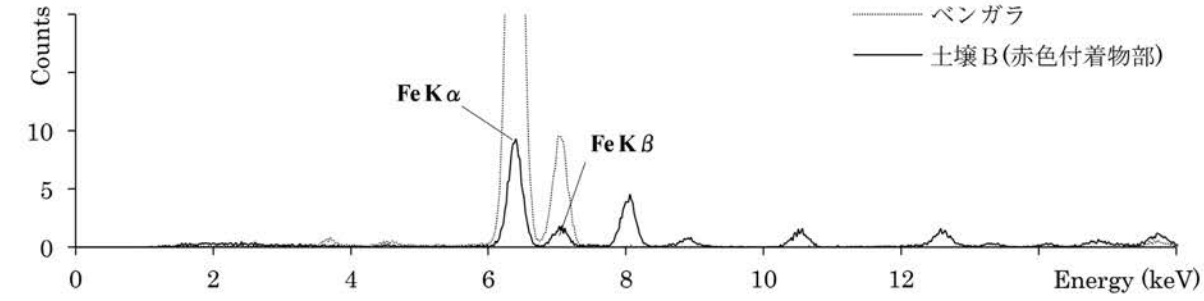


図 25　土壌 B（赤色付着物部）の XRF スペクトル

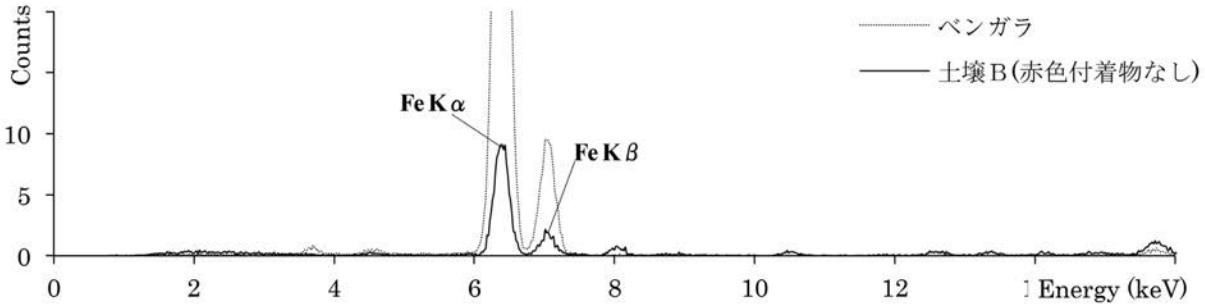


図 26　土壌 B（赤色付着物なし）の XRF スペクトル

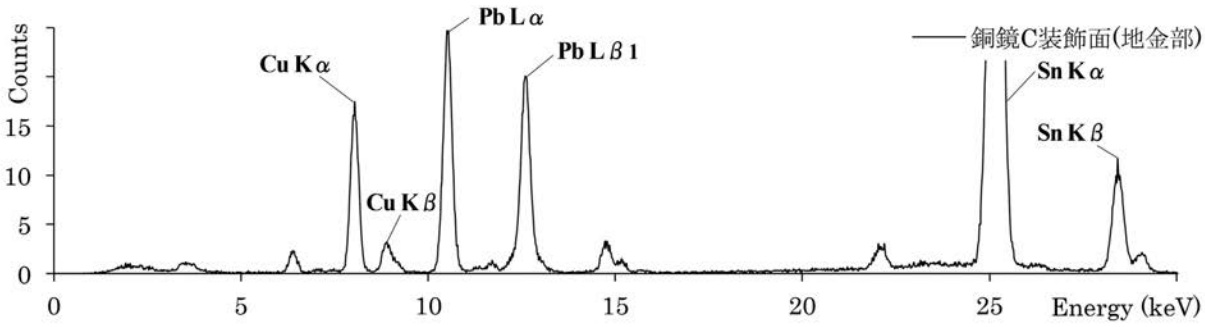


図 27　銅鏡 C 装飾面（地金部）の XRF スペクトル

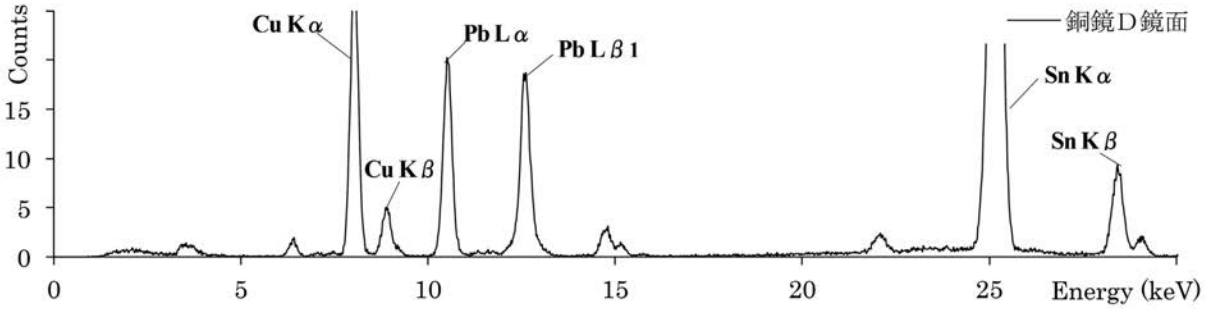


図 28　銅鏡 D 鏡面の XRF スペクトル

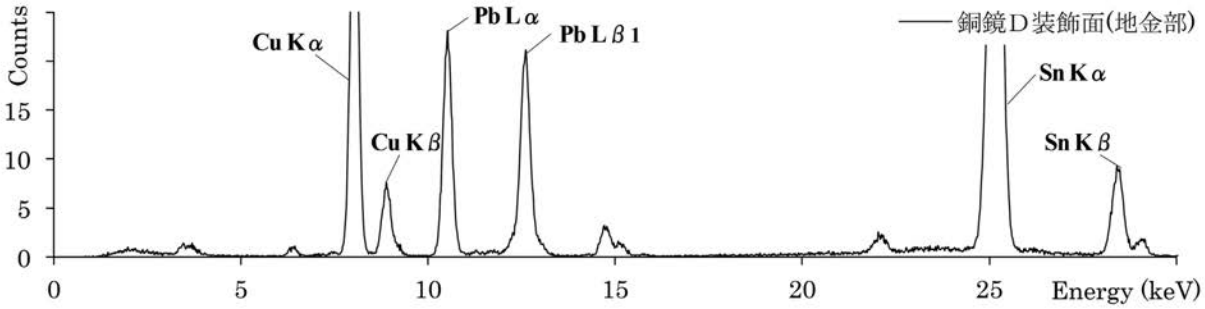


図 29　銅鏡 D 装飾面（地金部）の XRF スペクトル

附章 8　入の沢遺跡の銅鏡、繊維の 3 次元計測

（株）シン技術コンサル　小池　雄利亜

1．はじめに

地上型レーザー計測器の登場により、複雑な立体形状をコンピューターで再現する事が可能となった。データを正確に展開する事やデジタルで図化をする事も可能となり、発掘調査現場でも利用されるようになった。

Fig1　無人航空機（マルチコプター）

近年では市販デジタルカメラの画像とソフトウェアによって､3 次元データを構築する技術(以下フォトグラメトリ）の進歩や、様々なセンサーを搭載してプログラム制御による自律飛行が可能な無人航空機 Unmanned Aerial Vehicle；UAV(マルチコプターなど Fig1 参照)の登場によって、大規模な調査現場の記録が、より短時間で行う事ができるようになった。

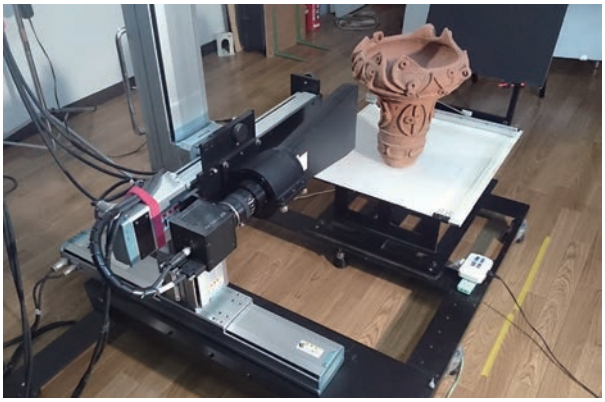


Fig2　（SIOS-1000C）

当社ではこれまでも、近接写真測量を遺構計測に応用する撮影プラットフォームの開発や、地上型レーザー計測器の導入を行い、様々な文化遺産の計測を行ってきた。

また遺物など小さな立体物のスキャンを可能とする正射投影撮像装置（SIOS-1000C）の開発を行い (Fig2 参照)、発掘調査と報告書作成に必要な様々な技術サービスの提供を行ってきた (Fig3 参照)。

Fig3 (SIOS 撮影土器正射投影画像)

スマートフォンやバーチャルリアリティーなどに代表される IT 技術の進歩や通信網など社会インフラの充実により、3 次元データの共有や公開などの利用環境も整ってきている。そのような背景により、当社でも大規模な遺構計測に限らず、考古出土資料やより詳細な記録が必要な遺構の 3 次元計測に対応する為に、1/1 もしくはそれ以上での観察が可能な機器を導入した。非接触光学式の 3 次元計測器で点間ピッチの、より細かい計測が可能となった。詳細に記録した 3 次元データの有用性や活用に関して模索を進める中で、入の沢遺跡の銅鏡と繊維が付着した土塊の 3 次元計測を 2016 年 4 月に実施した。

2．3 次元計測の目的と方法

3 次元でデータ化された情報は、コンピューター上であれば、容易に拡大縮小して扱う事ができ、自由な方向から観察を行う事が可能となる。形状データからスライスを抽出して断面の図化も行う事ができる (Fig4 参照)。

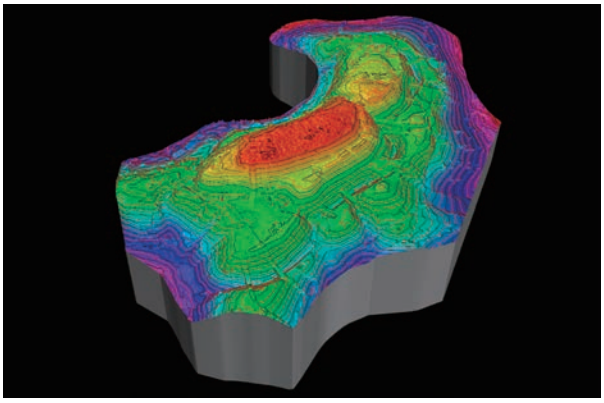


Fig4 南三陸町新田館跡 3 次元データ 南三陸町教育委員会提供

デジタルカメラの画像を形状データにマッピングする事も可能で、テクスチャから土層や焼土範囲などの色情報の観察も行う事ができる。

3 次元データは様々な利便性があるが、記録する特徴の大きさに合わせた方法の選定が重要となる。例えば、地上型レーザー計測器では、点間ピッチが最短で 3mm 程度となる為、計測ピッチより細かい形状の記録が必要な場合は不向きとなる (Fig5 参照)。またフォトグラメトリを利用した、3 次元計測の応用範囲は広いものの、小さい形状を必要な精度で計測するには膨大な写真枚数と多くのコンピューター解析作業を必要とする。その為、点間ピッチの小さい高精度な計測が可能な光学式非接触 3 次元計測器の利用が必要となる (Fig6・7 参照)。3 次元計測は、記録する形状特徴の最小サイズに合った最適な手法で実施する必要がある。

特徴の大きさ	例	特徴が 66%の確立で表現できるために必要な点群の密度	特徴が 95%の確立で表現できるために必要な点群の密度
10000mm	大規模なアースワーク	3500mm	500mm
1000mm	小規模なアースワーク / 溝	350mm	50mm
100mm	大規模な石造物	35mm	5mm
10mm	石造物の目地 / 大きめの工具の痕跡	3.5mm	0.5mm
1mm	風化した石	0.35mm	0.05mm

Fig5　文化遺産の特徴に応じた適切な点群の密度（取得解像度）

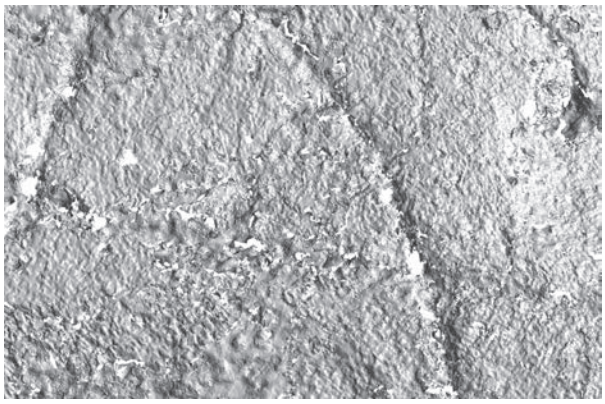


Fig6　フォトグラメトリの荒れた表面データ

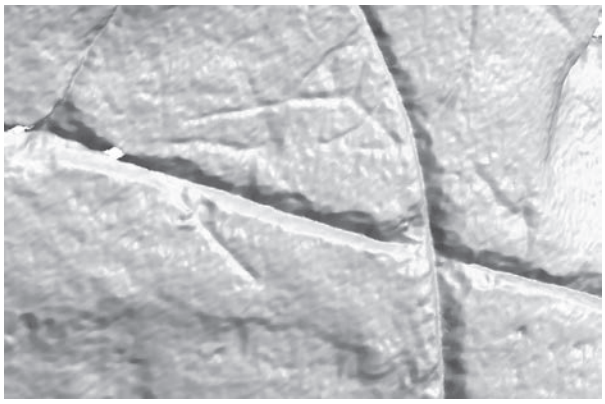


Fig7　非接触式光学 3 次元計測器データ

３．入の沢遺跡の銅鏡と繊維の計測

銅鏡と銅鏡に付着していた土塊の３次元計測を下記内容で実施した。

［実施日］2016 年 4 月 13 日

計測資料は保存処理が施された状態で計測を行った。計測に要した時間は、機器の調整と資料３点で 4 時間ほどであった。

［計測実施場所］東北歴史博物館

東北歴史博物館の撮影施設に計測器を持ち込み実施した。8㎛の精度を有する計測器は、不安定なフロアでは小さな振動であっても悪影響がある。振動による計測データの精度不良を防止する為、画像のブレを検知する機能により、不正を確認する事ができる。鉄骨造の博物館の床面は精密な計測に適した環境であった。外光は完全に遮断された環境で、室内の蛍光灯も計測時に消す事ができ、カラーデータのバランスを損なう光害の無い良好な計測が可能であった (Fig8 参照)。

Fig8　計測風景

［使用機材］smart SCAN-HE C8-8.0megapixel（以下 smart SCAN）FOV-S075　分解能 20㎛　精度 8㎛ VDI2634（光学式測定の精度ガイドライン）(Fig9 参照)

Fig9　smart SCAN

smart SCAN では中央部の White LED を光源としたプロジェクターからの格子投影を行う。その格子の変位を両サイドのカメラにより画像取得する。それらのデータから三角測量の原理で３次元データを構築する。各レンズを異なる焦点距離と交換する事により、計測可能範囲と計測深度が変更でき分解能 20 ～ 324㎛・精度 8 ～ 85㎛で計測が可能となる。LED はこれまでのハロゲンなどの光源に比べて紫外線領域の波長が少なく資料に対するダメージを軽減できる (Fig10 参照)。スキャナーで同時取得するカラーデータは、計測環境下において、ホワイトバラ

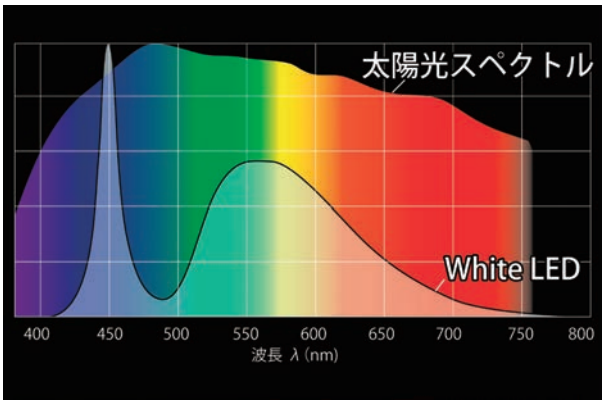


Fig10　LED スペクトル特性

ンスを調整する事が可能で、色転びの少ないカラーデータを得られる。各ショットの露出ムラは、重なり部分の RGB 値を平均化する事で、継ぎ目の目立たないテクスチャが展開可能となる。

今回の資料の計測前にも、博物館で計測器の各機能の調整を行った。レンズ毎に用意されている既知の座標値を持ったマーカーが配点されたプレートを計測して、計測精度の確認と調整を行った (Fig11 参照)。

Fig11　機器の校正作業参考スナップ

［データ編集］OPTCAT

計測データはスキャナー専用ソフト OPTCAT を用い計測時に同時に取得されている床面などの不要なデータを削除する作業を行った。各ショットの位置合わせをコンピューターによる自動計算により行い、単一のメッシュにしてテクスチャをマッピングする作業を行った。

［計測者］小池　雄利亜

上記作業に関して、小池が実施した。

［計測成果］

鏡周辺の土塊（炭化繊維痕跡）

FOV-S075　分解能 20㎛

精度 8㎛　ショット数 8

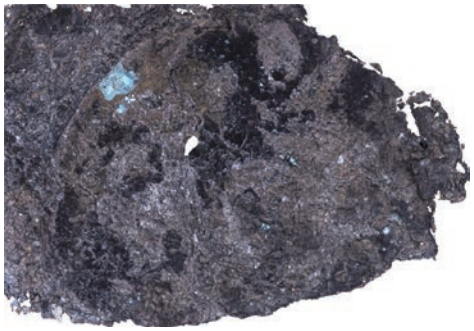


Fig12　鏡周辺の土塊 3 次元データ（カラー）

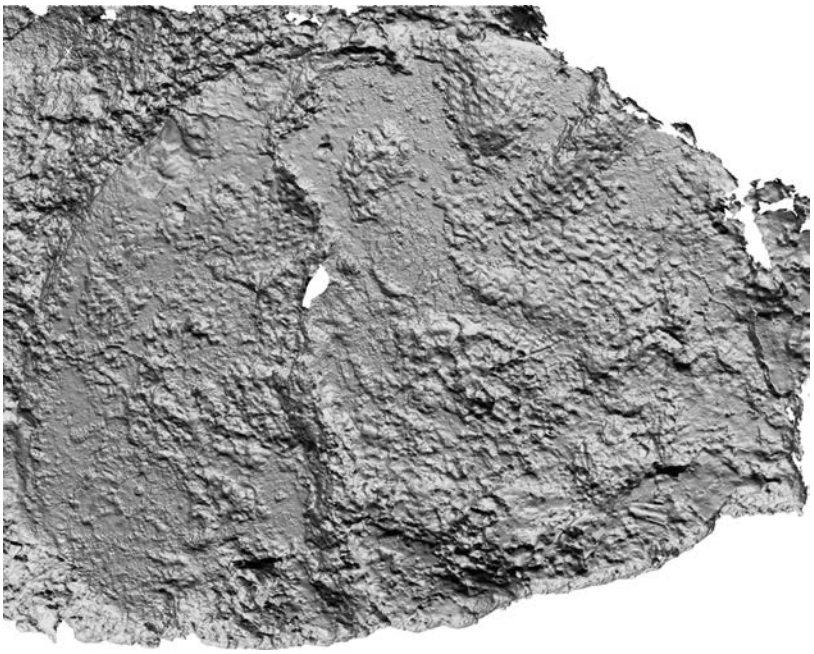


Fig13　鏡周辺の土塊 3 次元データ（陰影図）

櫛歯文鏡（SI13 竪穴建物跡）

FOV-S075　分解能 20㎛

精度 8㎛　ショット数 49

Fig14　3 次元データ（斜め俯瞰キャプチャー画像）

Fig15　櫛歯文鏡（SI13 竪穴建物跡）
3D データカラーあり

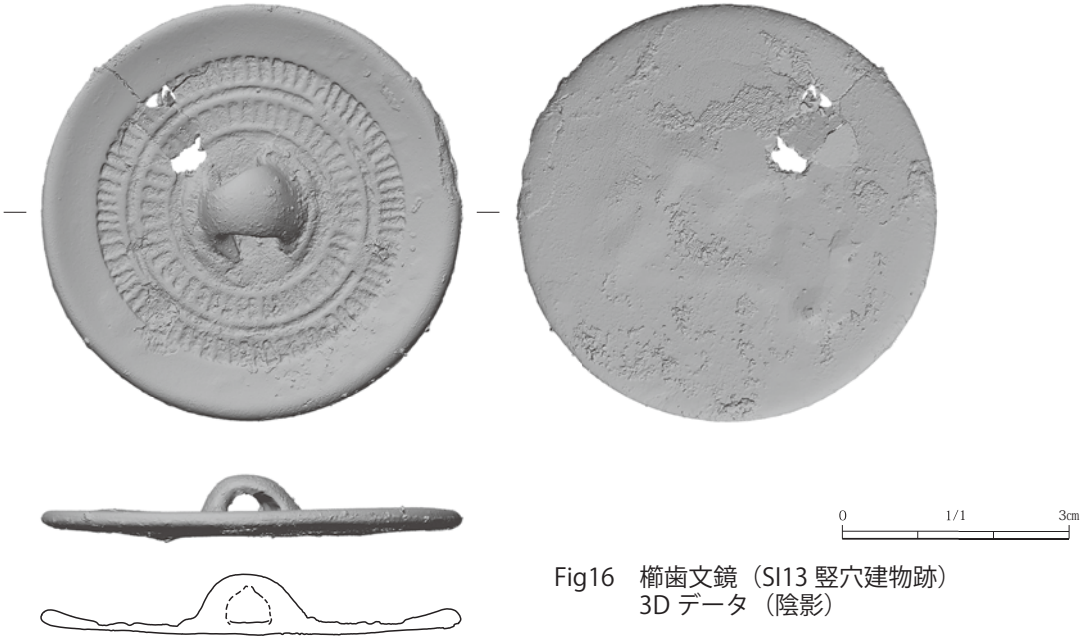


Fig16　櫛歯文鏡（SI13 竪穴建物跡）
3D データ（陰影）

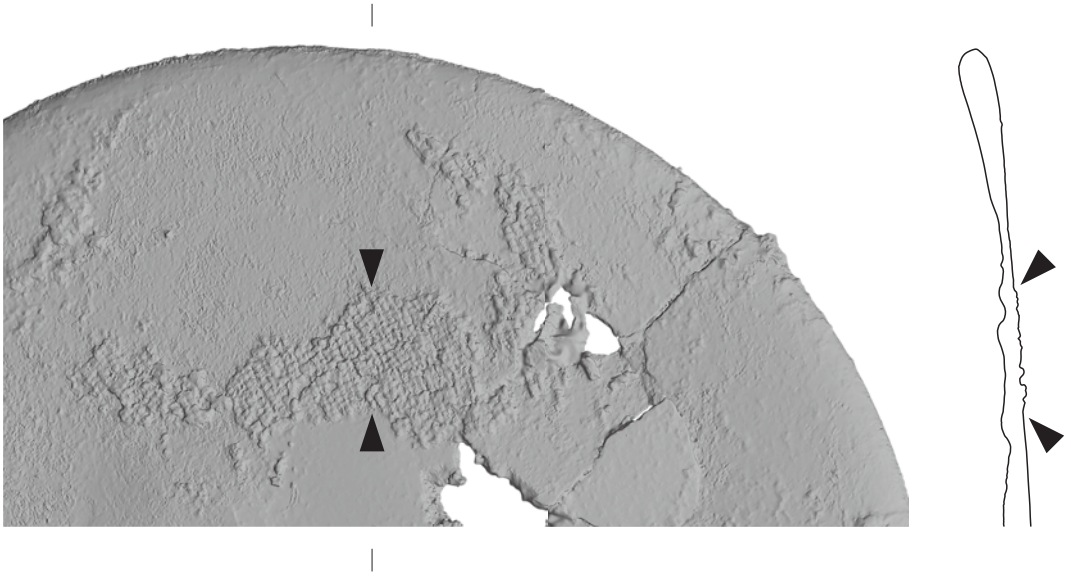


Fig17　櫛歯文鏡（SI13 竪穴建物跡）3D データ（陰影図）拡大

4．まとめ

精度 8㎛の高い分可能を有する形状データは、表面の微細な繊維の痕跡を異なる高さでデータ化する事が可能であった。

資料をデータ化する事で、劣化や破損に気を使う事なくコンピューター上で様々な方向から自由に観察する事ができる。またデータの表面色情報を単色（グレー）にして、ライティングをする事で、表面に付着した繊維の痕跡による凹凸を陰影表示する事ができ、編込みの構造を分かりやすく可視化する事ができた。

また拡大しての表示や画像出力も可能な分解能があり、データから断面を抽出して拡大して観察する事で、これまでとは異なる分析や比較も可能となる。

3 次元データは、NC を使った切削や 3D プリントによる積層にも利用可能で、型取りでは難しかった拡大縮小もデータでは容易に実施可能となる。

定期的に計測を行い劣化や変形を面的に観察する事もでき、保存や補修に 3 次元データを利用することも考えられる。

顕微鏡や望遠鏡など、これまでも様々なツールが発明され、それまで観察ができなかったものを観察する事ができ様々な成果を上げてきた。

3 次元計測も、考古学における観察や、比較分析のツールとして普及が進んで行くと考える。規模の大小や利用の目的に合った、計測手法の提案や取り組みを今後も進めて行きたい。

引用・参考文献

イングリッシュ・ヘリテッジ 2007『文化遺産のレーザー計測（日本語版）』

写　真　図　版

1. 入の沢遺跡、伊治城跡の航空写真

国土交通省 国土地理院 国土画像情報
（1962 年撮影空中写真　整理番号 MTO626X-C3-10）

2. 遺跡遠景（南東から）

図版 1　航空写真と遺跡遠景

1. 入の沢遺跡と伊治城跡（南西から）

2. 入の沢遺跡と大仏古墳群（東から）

図版 2　入の沢遺跡と周辺の遺跡

1. 調査区全景（北東から）

2. 調査区全景（北東から）

図版 3　調査区全景

1. A・B 区全景（北東から）

2. A 区全景（北東から）

3. A 区西側（南東から）

4. B 区全景（南西から）

5. B 区東側（南西から）

6. A 区　SD2（南東から）

7. B 区　張り出し部とその周辺（南西から）

8. 1 号塚と 2 号塚（南西から）

図版 4　調査前の状況

1. SD3 大溝跡と SA4 材木塀跡（北東から）

2. SD1 大溝跡　断面（南東から）

3. SD1 大溝跡　遺物出土状況 (西から)

4. SD3 大溝跡　西側断面 (北から)

5. SD3 大溝跡　張り出し部断面 (南から)

図版 5　SD1・3 大溝跡

1. SA4 材木塀跡（北東から）

2. SA4 材木塀跡　断面（東から）

3. B 区張り出し部 (南西から)

図版 6　SA4 材木塀跡、B 区張り出し部

1. SX41 盛土遺構 (東から)

2. SX41 盛土遺構　断面 (南西から)

3. SI56 竪穴建物跡 (東から)

4. SI63 竪穴建物跡 (北から)

図版 7　SX41 盛土遺構、SI56・63 竪穴建物跡

1. SI8 竪穴建物跡 (南から)

2. SI8 竪穴建物跡　炭化材・焼土検出状況 (南から)

3. SI8 竪穴建物跡　北辺炭化材検出状況 (北から)

4. SI9 竪穴建物跡 (西から)

5. SI9 竪穴建物跡　K1 断面 (北から)

6. SI9 竪穴建物跡　遺物出土状況 (南から)

図版 8　SI8・9 竪穴建物跡

1. SI10 竪穴建物跡 (北西から)

2. SI10 竪穴建物跡　遺物出土状況 (北西から)

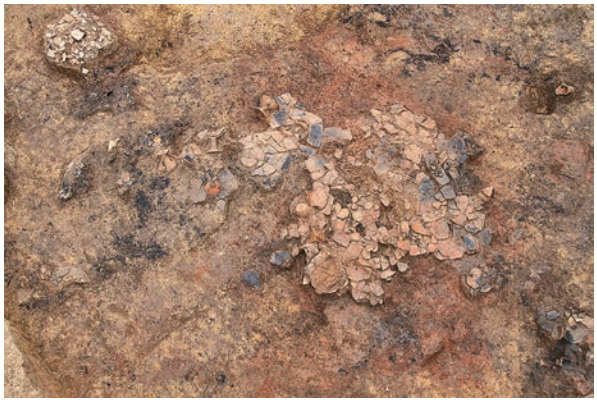
図版 9　SI10 竪穴建物跡（1）

1. SI10 竪穴建物跡　K1(北西から)

2. SI10 竪穴建物跡　D1 炭化物層検出状況 (南西から)

3. SI10 竪穴建物跡　地山ブロック層検出状況 (北から)

4. SI10 竪穴建物跡　焼土層検出状況 (北から)



5. SI10 竪穴建物跡　中央部遺物出土状況 (北西から)

6. SI10 竪穴建物跡　北東隅遺物出土状況 (東から)

7. SI10 竪穴建物跡　K1 遺物出土状況 1(南東から)

8. SI10 竪穴建物跡　K1 遺物出土状況 2(東から)

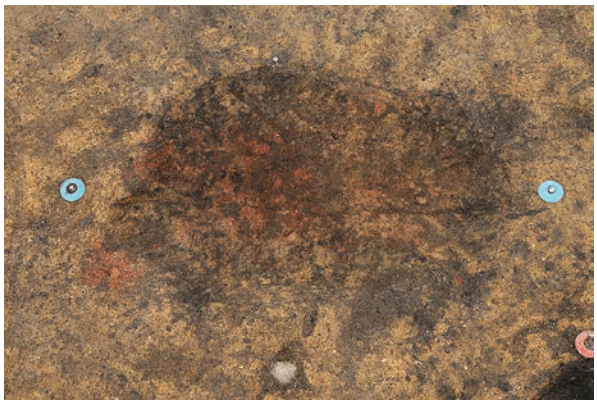
図版 10　SI10 竪穴建物跡（2）

1. SI13 竪穴建物跡 (北から)

2. SI13 竪穴建物跡　炭化材・遺物出土状況 (西から)

図版 11　SI13 竪穴建物跡（1）

1. SI13 竪穴建物跡　P3 掘方検出 (西から)



2. SI13 竪穴建物跡　Y1(東から)

3. SI13 竪穴建物跡　K1(南から)

4. SI13 竪穴建物跡　K1 炭化材検出状況 (南西から)

5. SI13 竪穴建物跡　K2(南から)

6. SI13 竪穴建物跡　D1 断面 (北から)

7. SI13 竪穴建物跡　D2 断面 (東から)

8. SI13 竪穴建物跡　D3 断面 (南から)

図版 12　SI13 竪穴建物跡（2）

1. SI13 竪穴建物跡　炭化材検出状況 (西から)

2. SI13 竪穴建物跡　地山ブロック層検出状況 (西から)

3. SI13 竪穴建物跡　東西断面 (北西から)

4. SI13 竪穴建物跡　火災層・炭化材の検出状況 (北から)

5. SI13 竪穴建物跡　珠文鏡出土状況 (北から)

6. SI13 竪穴建物跡　櫛歯文鏡出土状況 (北から)

7. SI13 竪穴建物跡　鉄製品出土状況 (北から)

8. SI13 竪穴建物跡　周溝鉄製品出土状況 (北西から)

図版 13　SI13 竪穴建物跡（3）

1. SI13 竪穴建物跡　勾玉・管玉出土状況 1(北から)

2. SI13 竪穴建物跡　勾玉・管玉出土状況 2(北西から)

3. SI13 竪穴建物跡　垂飾品出土状況 (北東から)

4. SI13 竪穴建物跡　朱検出状況 (北から)

5. SI13 竪穴建物跡　南東部遺物出土状況 (北西から)

6. SI13 竪穴建物跡　東辺中央遺物出土状況 (西から)

7. SI13 竪穴建物跡　南西部遺物出土状況 1(西から)

8. SI13 竪穴建物跡　南西部遺物出土状況 2(北西から)

図版 14　SI13 竪穴建物跡（4）

1. SI15 竪穴建物跡 (西から)

2. SI15 竪穴建物跡　D3 断面 (北から)

3. SI15 竪穴建物跡　遺物出土状況 (西から)

4. SI18 竪穴建物跡 (西から)

図版 15　SI15・18 竪穴建物跡

1.SI17 竪穴建物跡 (南から)

2. SI17 竪穴建物跡　遺物出土状況 (南から)

図版 16　SI17 竪穴建物跡（１）

1. SI17 竪穴建物跡　K1 検出状況 (北から)

2. SI17 竪穴建物跡　西辺周溝断面 (南から)

3. SI17 竪穴建物跡　D1 断面 (北東から)

4. SI17 竪穴建物跡　地山ブロック層検出状況 (南から)

5. SI17 竪穴建物跡　東辺中央炭化材検出状況 (西から)

6. SI17 竪穴建物跡　K1 遺物出土状況 (北西から)

7. SI17 竪穴建物跡　北東隅遺物出土状況 (北西から)

8. SI17 竪穴建物跡　南西隅遺物出土状況 (南東から)

図版 17　SI17 竪穴建物跡（2）

1. SI19 竪穴建物跡 (東から)

2. SI19 竪穴建物跡　炭化材・遺物出土状況 (北から)

図版 18　SI19 竪穴建物跡

1.SI19 竪穴建物跡　銅鏡出土付近の層序 (北から)

2.SI19 竪穴建物跡　内行花文鏡出土状況 (南東から)

3.SI19 竪穴建物跡　北東隅遺物出土状況 (南西から)

4.SI19 竪穴建物跡　西辺中央遺物出土状況 (南東から)

5.SI20 竪穴建物跡 (北東から)

図版 19　SI19・20 竪穴建物跡

1. SI21 竪穴建物跡 (西から)

2. SI27 竪穴建物跡　珠文鏡出土状況 1(北東から)

3. SI27 竪穴建物跡　珠文鏡出土状況 2(北から)

4. SI5 竪穴建物跡 (南から)

図版 20　SI21・27・5 竪穴建物跡

1. SI7 竪穴建物跡 (西から)

2. SI7 竪穴建物跡　カマド (西から)

3. SI7 竪穴建物跡　張り出し部断面 (西から)

4. SI7 竪穴建物跡　D1(北から)

5. SI7 竪穴建物跡　南東部遺物出土状況 (西から)

図版 21　SI7 竪穴建物跡

1. SI33 竪穴建物跡 (西から)

2. SI33 竪穴建物跡　炭化材検出状況 (西から)

3. SI33 竪穴建物跡　カマド (北西から)

4. SI33 竪穴建物跡　断面 (南から)

図版 22　SI33 竪穴建物跡

1. SI33 竪穴建物跡　炭化材検出状況 (西から)

2. SI33 竪穴建物跡　遺物出土状況 (西から)

3. SI34 竪穴建物跡 (南から)

4. SI36 竪穴建物跡 (西から)

図版 23　SI33・34・36 竪穴建物跡

1. 1 号塚　調査前の状況 (北西から)

2. 1 号塚 (北西から)

3. 1 号塚　断面 (南東から)

図版 24　1 号塚

1. 2 号塚　調査前の状況 (南西から)

2. 2 号塚 (南から)

3. 2 号塚　断面 (北から)

図版 25　2 号塚

1. SI10 竪穴建物跡出土土器

2. SI13 竪穴建物跡出土土器

図版 26　竪穴建物跡　出土土器（1）

1. SI17 竪穴建物跡出土土器

2. SI19 竪穴建物跡出土土器

図版 27　竪穴建物跡　出土土器（2）

1-4：SD1，5・6：SD3-6 層，7：SD3-5 層　　(1-7a：S=1/3，7b：S= 任意)

図版 28　SD1 大溝跡　出土遺物、SD3 大溝跡　出土遺物 (1)

1-3：5 層，4：4 層，5-9：3 層

図版 29　SD3 大溝跡　出土遺物 (2)

(1-9：S=1/3)

1-11：3 層

(1-11：S=1/3)

図版 30　SD3 大溝跡　出土遺物 (3)

1・2・4・7：3 層，3・5：1 層，6：堆積土　(1-5：S=1/3，6・7：S=1/2)

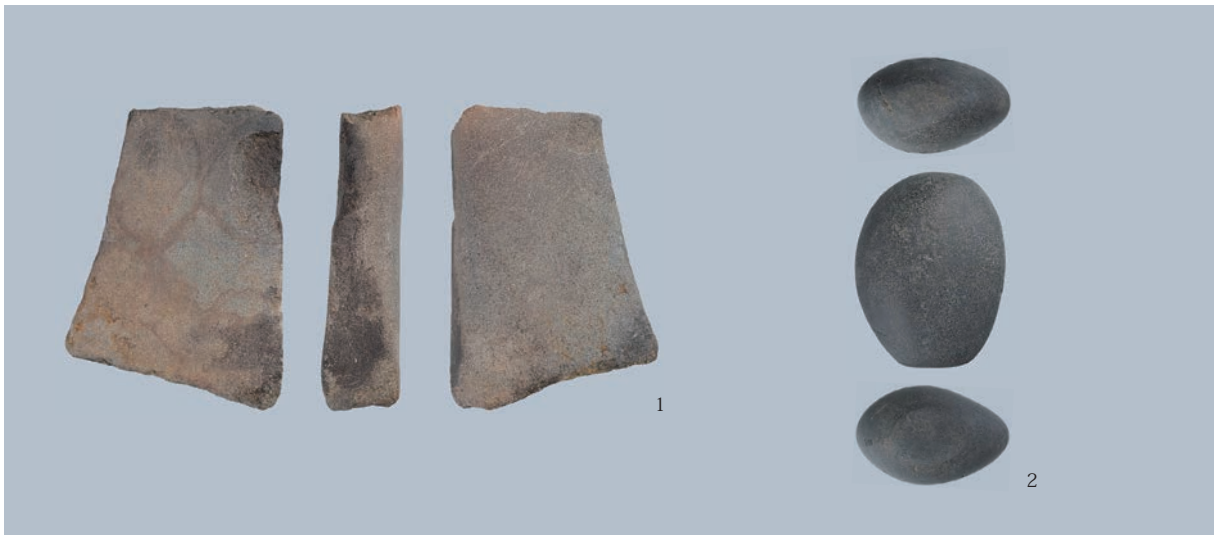
図版 31　SD3 大溝跡　出土遺物 (4)

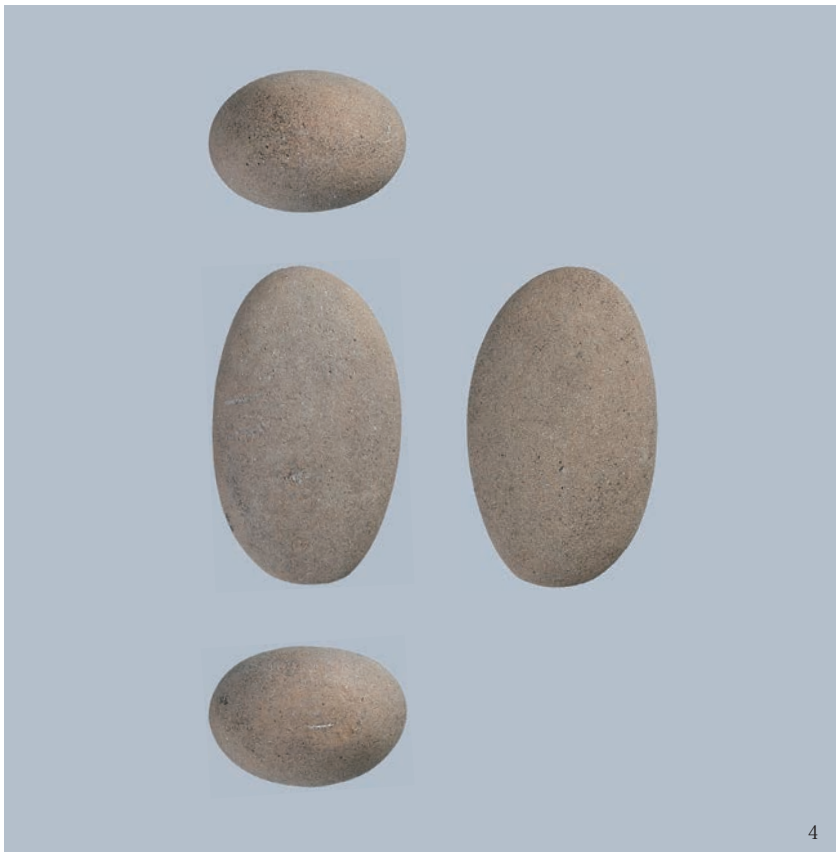
1-3：SI56，4-13：SI63　　(1-8：S=1/3，9-13：S=2/3)

図版 32　SI56・63 竪穴建物跡　出土遺物

図版 33　SI8 竪穴建物跡　出土遺物 (1)

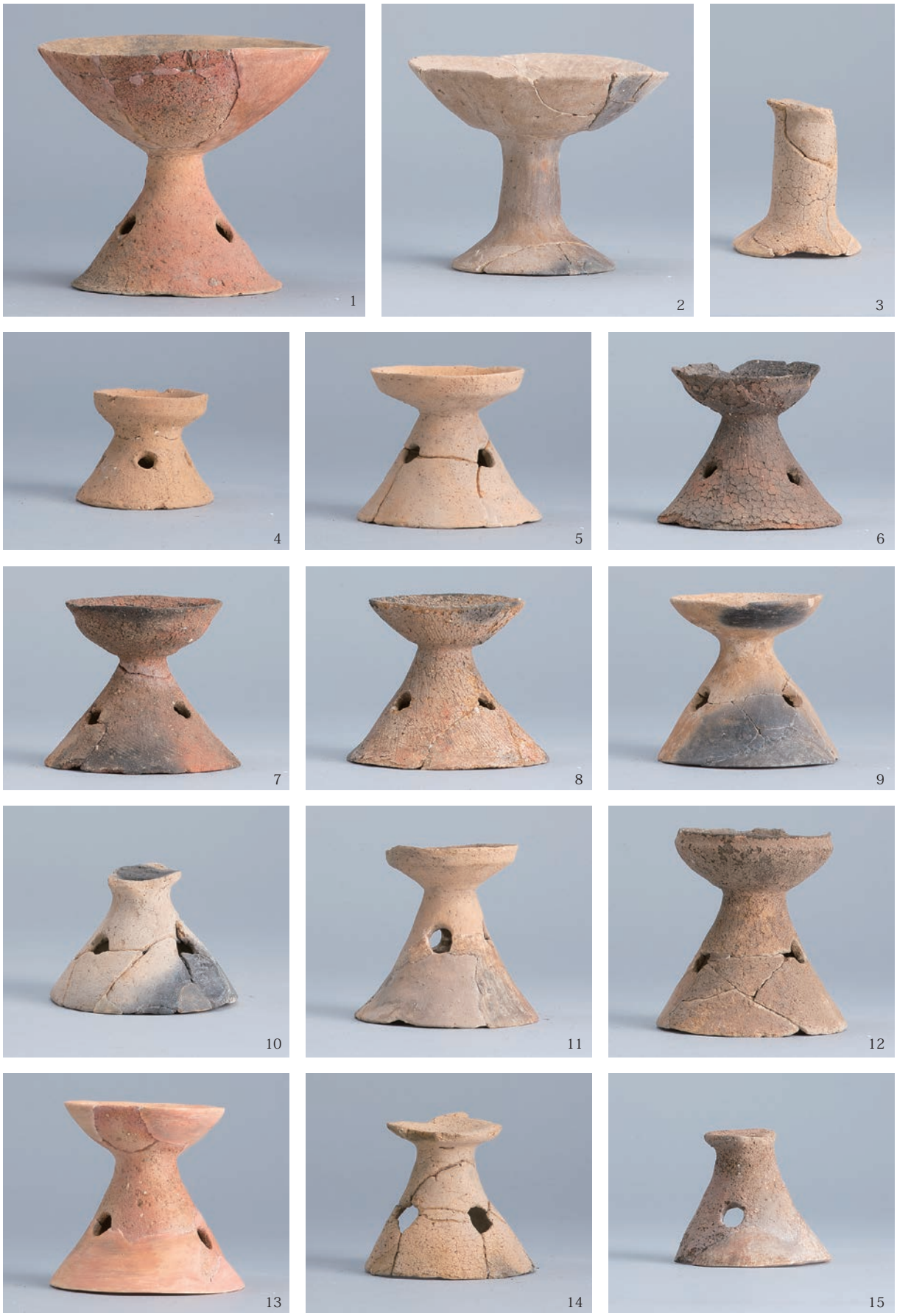
(1-5：S=1/3)





1・2：SI8，3・4：SI9　　(1-4：S=1/3)

図版 34　SI8 竪穴建物跡　出土遺物 (2)、SI9 竪穴建物跡　出土遺物



図版 35　SI10 竪穴建物跡　出土遺物 (1)

(1-15：S=1/3)

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13a

13b

図版 36　SI10 竪穴建物跡　出土遺物 (2)

(1-13：S=1/3)

図版 37　SI10 竪穴建物跡　出土遺物 (3)

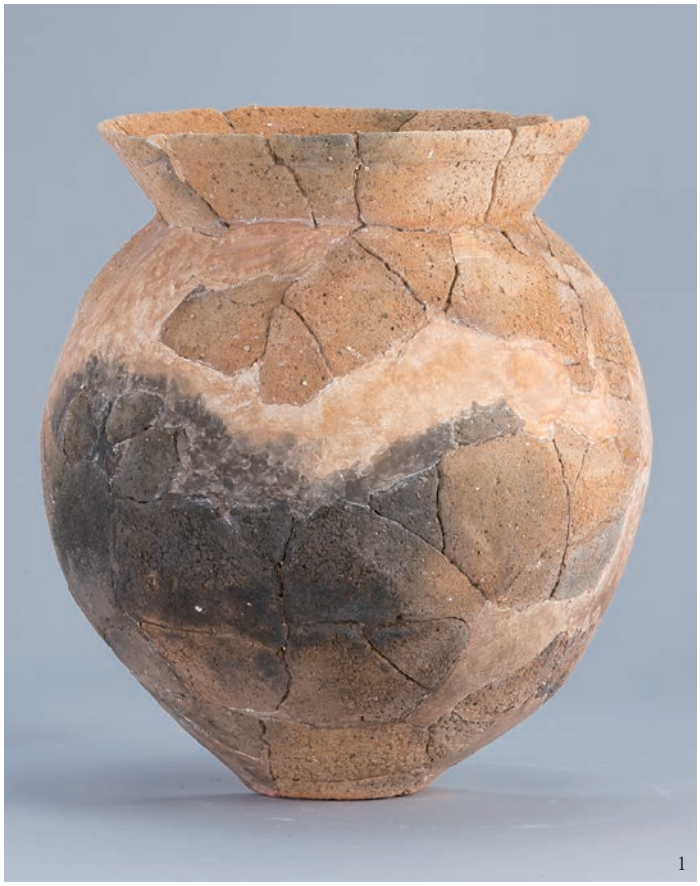
(1-4：S=1/3)

図版 38　SI10 竪穴建物跡　出土遺物 (4)

(1・2：S=1/3)

(1-6：S=1/3)

図版 39　SI10 竪穴建物跡　出土遺物 (5)


1

2

3

4

5

図版 40　SI10 竪穴建物跡　出土遺物 (6)

(1-5：S=1/3)

図版 41　SI10 竪穴建物跡　出土遺物 (7)

(1-8：S=1/3)

図版 42　SI10 竪穴建物跡　出土遺物 (8)

(1：S=1/2，2-5：S=1/3，6：S= 任意)

(1-17：S=1/3)

図版 43　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (1)

図版 44　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (2)

(1-14：S=1/3)

図版 45　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (3)

(1・2：S=1/3)

1

2

(1・2：S=1/3)

図版 46　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (4)

図版 47　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (5)

(1・2：S=1/3)

図版 48　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (6)　(1・2：S=1/6)

1

(1：S=1/6)

図版 49　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (7)

1

2

3a

4a

3b

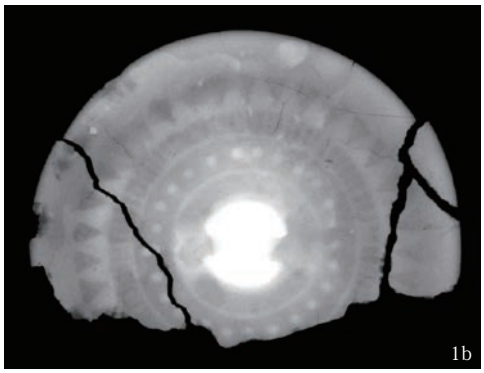
4b

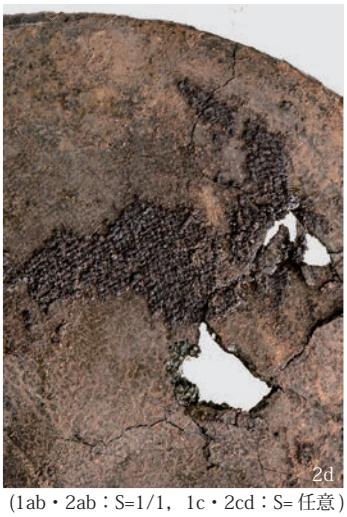
7

5 6

(1-4・7：S=1/3，5・6：S=1/2)

図版 50　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (8)





図版 51　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (9)

(1ab・2ab：S=1/1，1c・2cd：S= 任意)

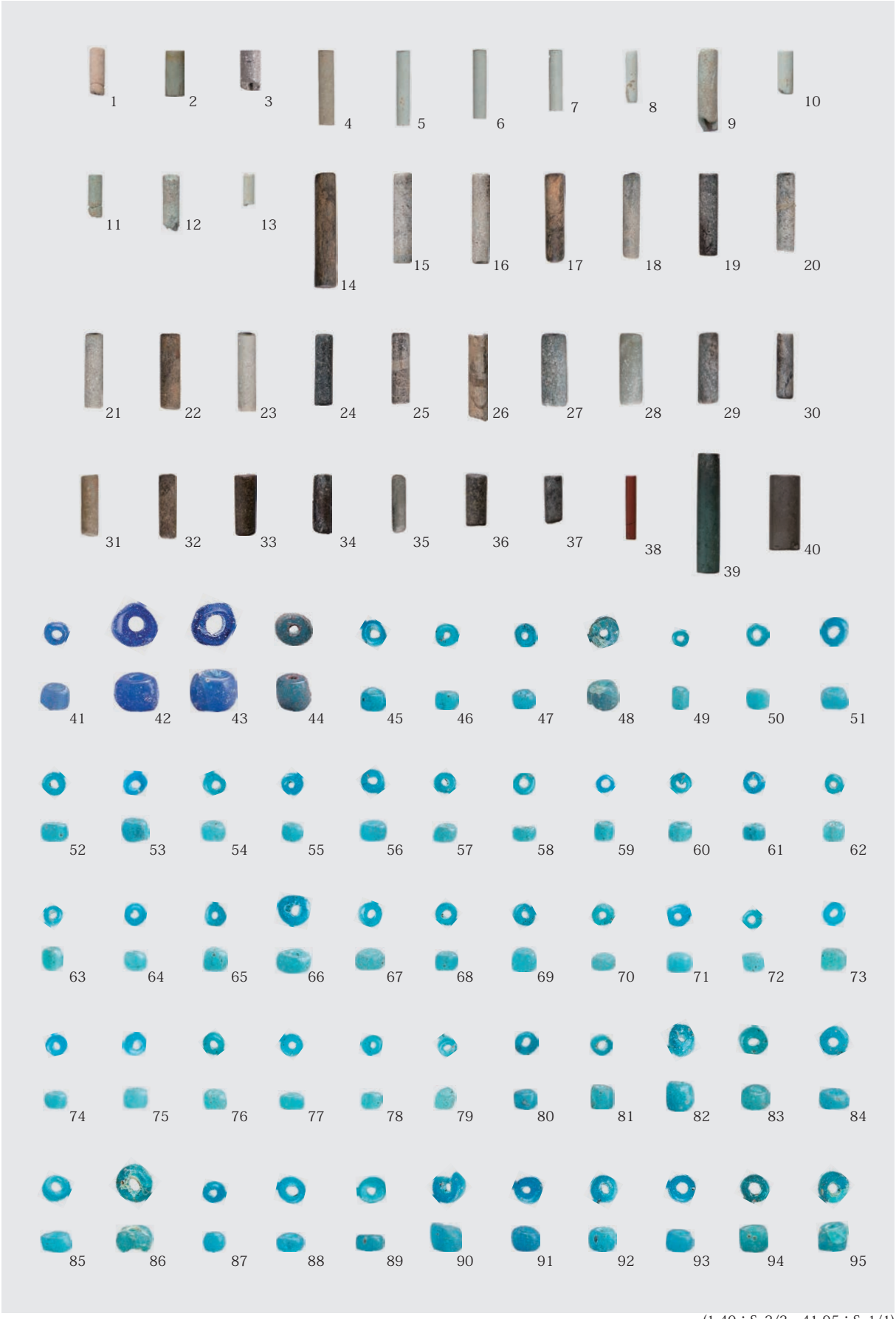
(1-3・4a・5-8・9a・10a・11：S=1/2，4bc・9b・10b：S= 任意)

図版 52　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (10)

図版 53　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (11)

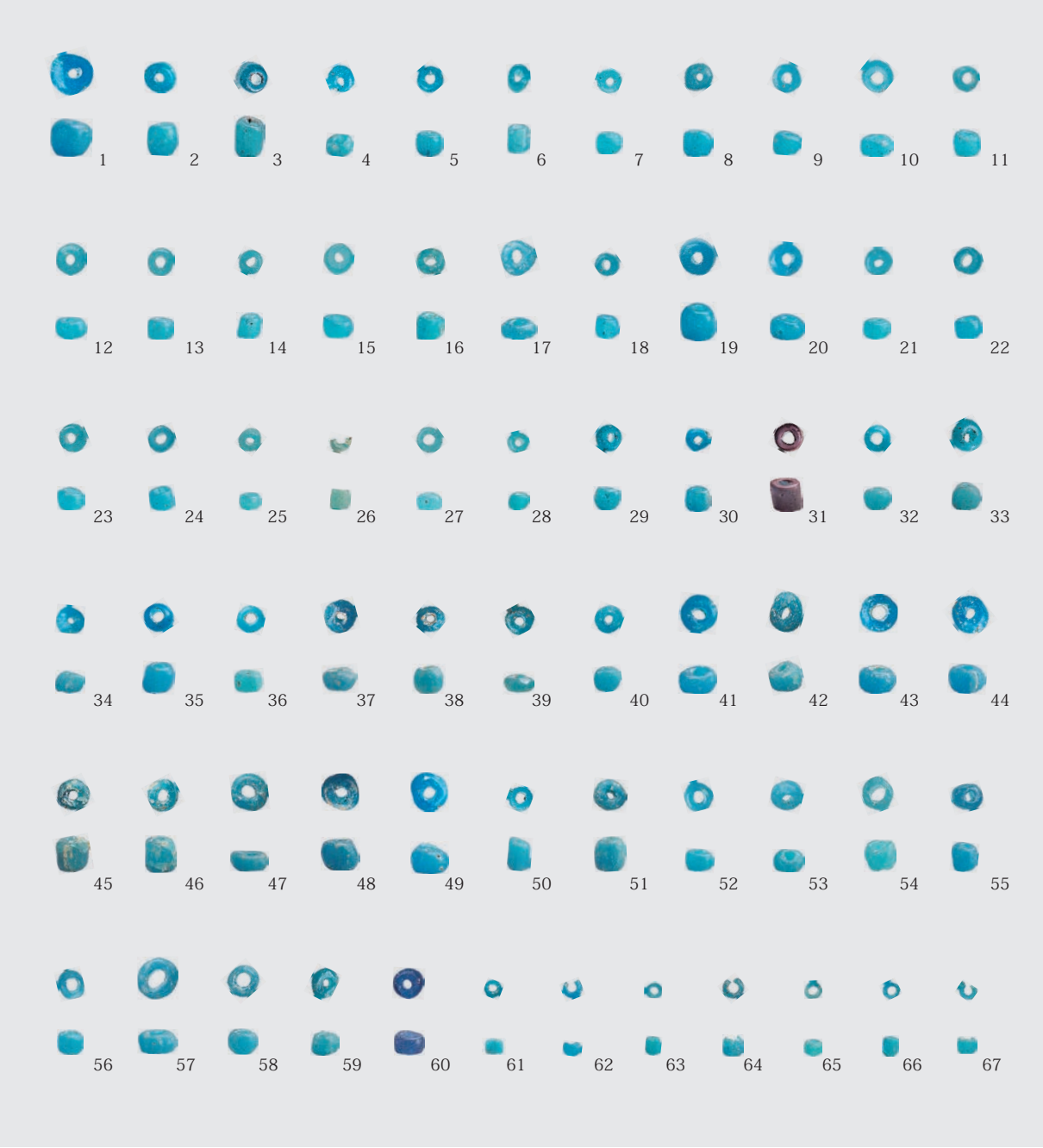
図版 54　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (12)

(1-86：S=2/3)



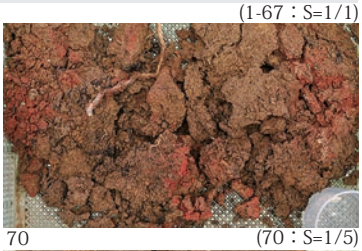
図版 55　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (13)

(1-40：S=2/3，41-95：S=1/1)

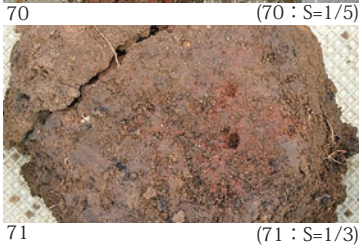


(1-67：S=1/1)

(68・69：S=1/3)

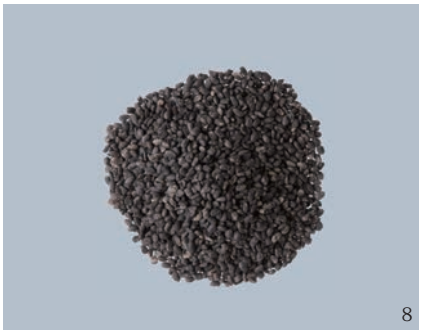


70 (70：S=1/5)



71 (71：S=1/3)

図版 56　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (14)



(1・3-6・8・9：S=1/3，2：S=1/4，7a：S=2/3，7bc：S= 任意)

図版 57　SI13 竪穴建物跡　出土遺物 (15)

図版 58　SI15 竪穴建物跡　出土遺物

(1・2：S=1/3)

(1-11：S=1/3)

図版 59　SI17 竪穴建物跡　出土遺物 (1)

1

2

3

4

5

(1-5：S=1/3)

図版 60　SI17 竪穴建物跡　出土遺物 (2)

(1-3：S=1/3)

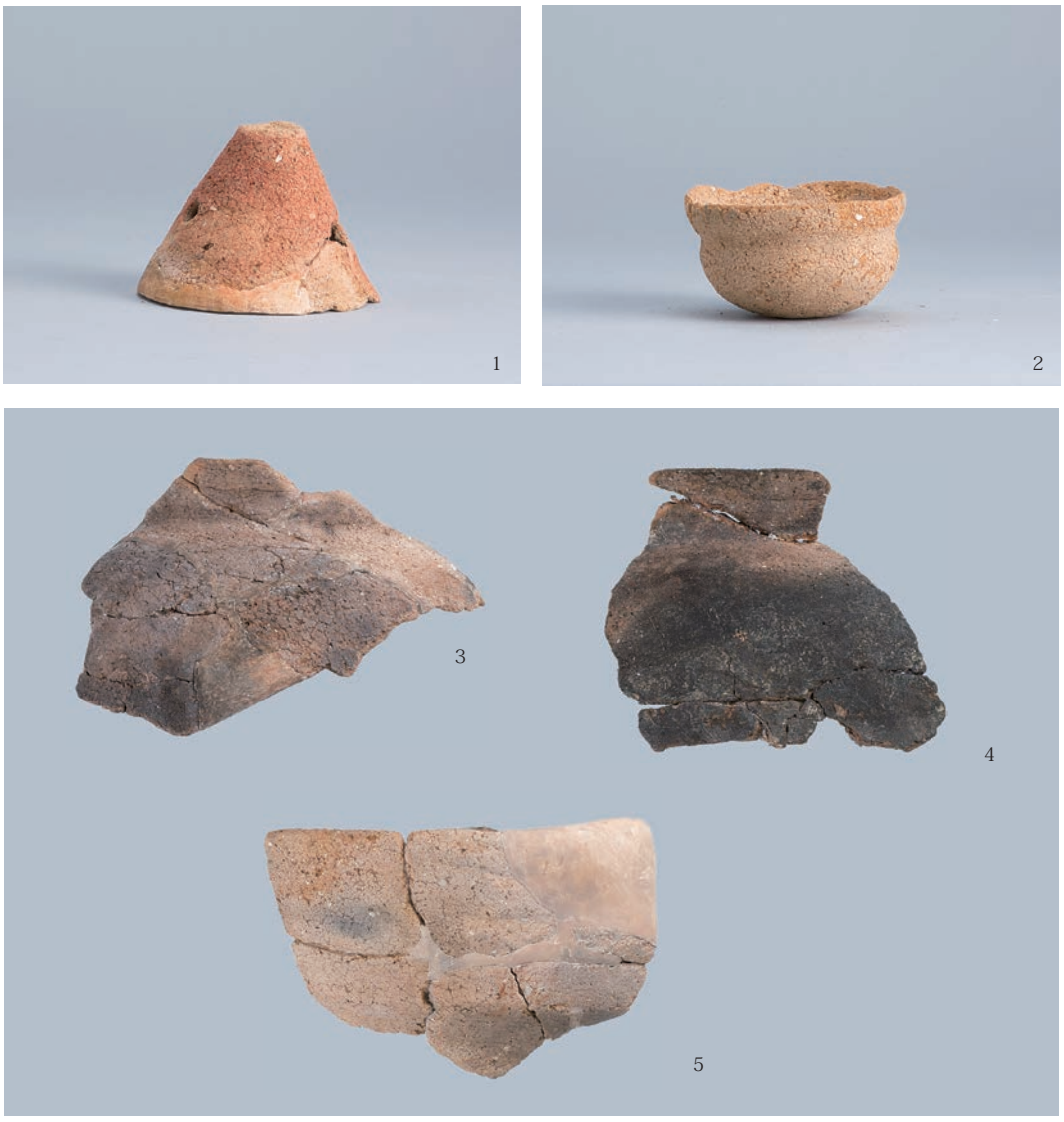
図版 61　SI17 竪穴建物跡　出土遺物 (3)

(1・2：S=1/3)

図版 62　SI17 竪穴建物跡　出土遺物 (4)

図版 63　SI17 竪穴建物跡　出土遺物 (5)

(1-4：S=1/3)



1-5：SI18，6-8：SI19　　(1-8：S=1/3)

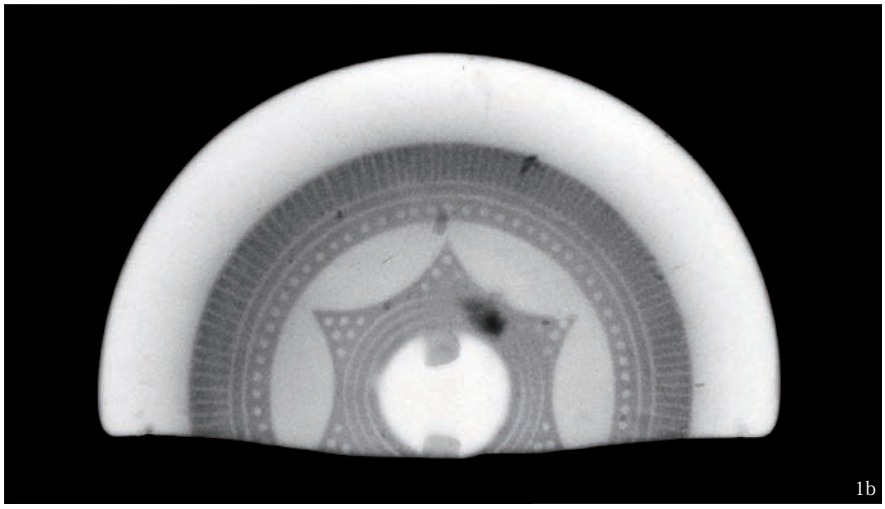
図版 64　SI18 竪穴建物跡　出土遺物、SI19 竪穴建物跡　出土遺物 (1)

(1-10：S=1/3)

図版 65　SI19 竪穴建物跡　出土遺物 (2)

(1・5：S=1/3，2・3：S=1/2，4：S=2/3)

図版 66　SI19 竪穴建物跡　出土遺物 (3)



(1ab：S=1/1，1cdef：S= 任意)

図版 67　SI19 竪穴建物跡　出土遺物 (4)

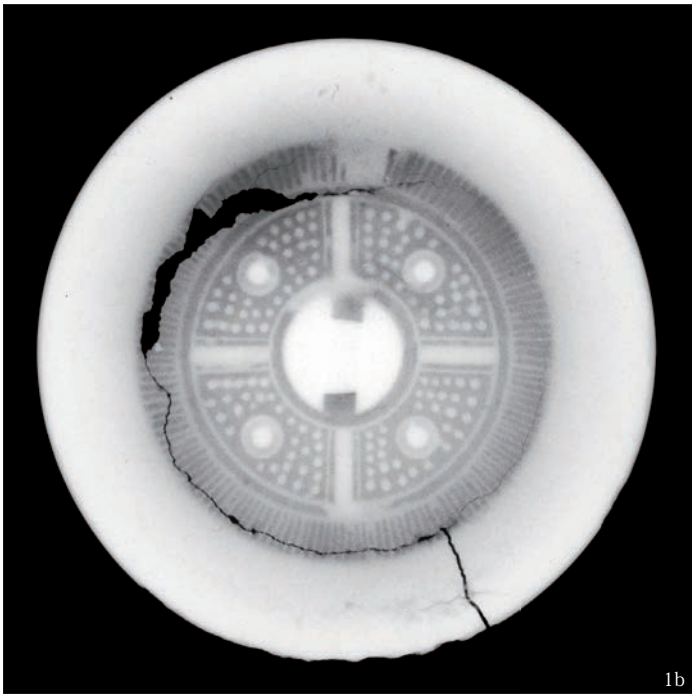
1-9：SI20，10-12：SI21　　(1-12：S=1/3)

図版 68　SI20・21 竪穴建物跡　出土遺物

(1-19：S=1/3，20：S=2/3)

1-7：A 区／ 1・7：SI64 カクラン，2・5：SI64 確認面，4・6：表採，3：SI62 確認面
8-20：B 区／ 8：SX14 整地層，9・10：排土，11：確認面，12：SI13 周辺確認面，13：2 号塚盛土，14：SI12 確認面，15：SI25 確認面，
16：2 号塚確認面，17：SI17 周辺確認面，18：SI8 周辺確認面，19：沢部分確認面，20：SI26 確認面

図版 69　その他の出土遺物 (1)



B 区／ 1：SI27

(1ab：S=1/1，1cde：S= 任意)

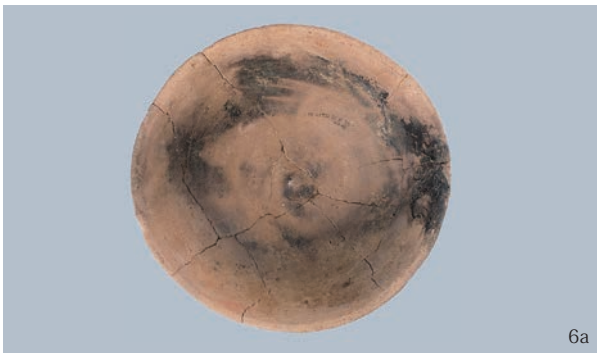
図版 70　その他の出土遺物 (2)

1-3：SI5，3-12：SI7　　(1-12：S=1/3)

図版 71　SI5 竪穴建物跡　出土遺物、SI7 竪穴建物跡　出土遺物 (1)

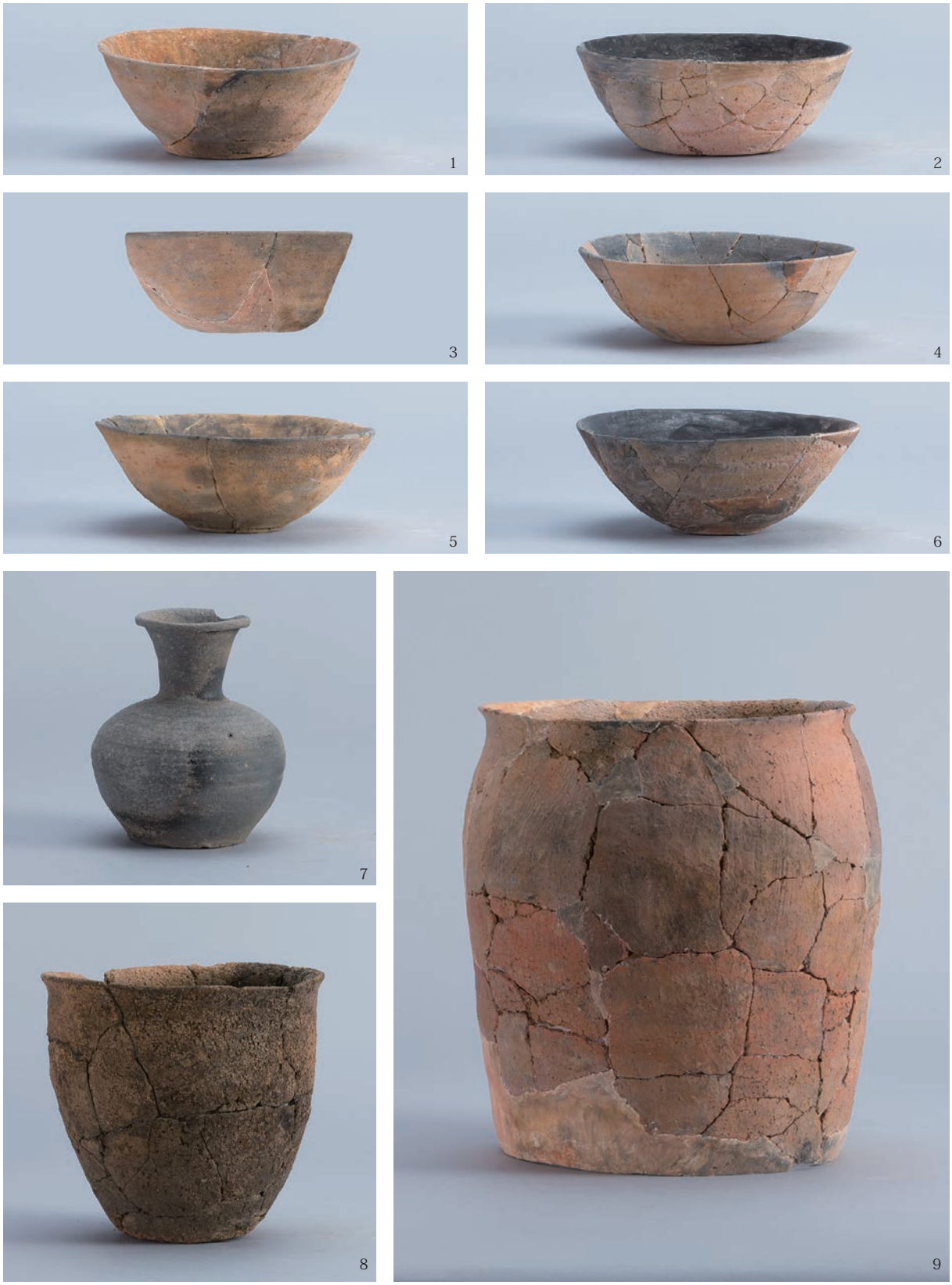
(1-9：S=1/3)

図版 72　SI7 竪穴建物跡　出土遺物 (2)



1-3：SI7，4-8：SI33　　(1-8：S=1/3)

図版 73　SI7 竪穴建物跡　出土遺物 (3)、SI33 竪穴建物跡　出土遺物 (1)



(1-9：S=1/3)

図版 74　SI33 竪穴建物跡　出土遺物 (2)

1-6：SI34，7-9：SI36，10-12：その他　　(1-9：S=1/3，10：S=1/2，11・12：S=2/3)

図版 75　SI34・36 竪穴建物跡　出土遺物、その他の出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	いりのさわいせき
書名	入の沢遺跡
副書名	一般国道4号築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅳ
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第245集
編著者名	村上裕次・高橋　透（編）、高橋栄一、西村　力、森下章司、大賀克彦、奥山誠義、南　武志、澤田純明、及川　規、芳賀文絵、小池雄利亜
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号　電話022-211-3684
発行年月日	2016年12月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	世界測地系 北緯	 東経	調査期間	調査面積	調査原因
入の沢遺跡（いりのさわいせき）	宮城県栗原市築館字城生野入の沢・峯岸（みやぎけんくりはらしつきだてあざじょうのいりさわみねぎし）	042137	41071	38度45分33秒	141度2分0秒	2014.04.21～12.18	6,800㎡	一般国道4号築館バイパス建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
入の沢遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代		縄文土器、弥生土器、石器	
	集　落	古墳時代前期	大溝跡、材木塀跡、盛土遺構、竪穴建物跡、整地層	土師器、銅鏡、鉄製品、玉類、垂飾品、土製品、石製品、石器、繊維、赤色顔料、動植物遺存体	古墳時代前期の最北に位置する拠点的な大規模集落
	集　落	奈良・平安時代	竪穴建物跡	土師器、須恵器、赤焼土器、鉄製品、石製品	

要約

入の沢遺跡は、宮城県北部の内陸部に位置し、北上川の支流である一迫川流域の標高約49mの丘陵上に立地する、古墳時代前期を中心とする大規模な遺跡である。

（1）丘陵尾根とその周囲の平坦面・緩斜面、丘陵斜面から古墳時代前期後半の大溝跡、材木塀跡、盛土遺構、竪穴建物跡、整地層が検出された。大溝跡と材木塀跡、盛土遺構は並行する区画施設で、全周すると考えられる。竪穴建物跡は可能性があるものを含めると40棟以上検出され、この内12棟の調査を実施した。5棟確認された焼失竪穴建物跡は保存状態が良好なものが多く、屋根構造や床面施設の機能、遺物の配置等多くの知見が得られた。

（2）出土遺物は、土師器、銅鏡、鉄製品、玉類、垂飾品、土製品、石製品、石器、繊維、赤色顔料、動物遺存体、植物遺存体である。銅鏡は4面出土し、内訳は珠文鏡2面、内行花文鏡破鏡1面、櫛歯文鏡1面である。鉄製品は剣、鏃、両頭金具、斧、方形板刃先、鑿、工具等、玉類は勾玉、管玉、棗玉、丸玉、臼玉、ガラス小玉が出土した。出土遺物の時期は、古墳時代前期後半と考えられる。

（3）前期大型古墳の分布域の北に位置しながらも古墳文化を特徴づける様々な要素が認められる集落遺跡であり、遺構・遺物の内容から、当該期における古墳文化の中で最北に位置する拠点的な大規模集落と考えられる。

宮城県文化財調査報告書第 245 集

入の沢遺跡

－一般国道 4 号築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅳ－

平成 28 年 12 月 19 日印刷
平成 28 年 12 月 26 日発行

発行　宮城県教育委員会
宮城県仙台市青葉区本町三丁目８番１号
印刷　株式会社仙台紙工印刷
宮城県仙台市宮城野区苦竹３－１－14